

提督が幻想郷に着任しました

水無月シルシ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷に「海」が現れた。

孤児院で育った潜水士の青年は帰郷した際、幼い頃よく通っていた神社を訪れると、唯一の友人である東風谷早苗と再会する。

守矢神社の幻想郷への遷宮に巻き込まれて幻想入りした青年は、幻想郷に海と共に出現した異形の怪物の前に、早苗の奇跡によって『艦娘を指揮する程度の能力』に覚醒した。

行方不明となった博麗霊夢、押し寄せる深海棲艦、そして住民の深海化異変。容赦なく降りかかる争いに対し、艦娘と幻想郷の住民は過去と未来を幾重にも交錯させていく。

いつか、平和な幻想郷が戻ってくることを願って。

艦これ×東方（幻想入り）の小説です。オリ主ですが、艦娘と幻想郷の関わり合いや戦闘など、クロスならではの話を書いていきたいと思えます。時系列は風神録の手前からです。

拙い文章ですが、どうぞよろしく願います。

※ 2022年8月26日、更新再開しました。今後ともよろしくどうぞ。

目次

序章 東方風神録

001 賢者の憂鬱 | 1

002 少年の思い出、青年の景色 | 6

003 初めまして、司令官！ | 17

004 守矢会談 | 27

005 艦娘の出撃 | 41

006 然るべき結び | 54

007 Main Title | 74

008 求めた理想郷 | 87

第一章 紅き狼

009 それぞれの幕開け | 98

010 山の神 | 118

011 製塩業者を護衛せよ！ | 129

012 博麗神社を偵察せよ！ | 152

013 発令、『紅号作戦』 | 167

014 暗闇より出でし暗闇 | 181

015 凍てつく記憶 | 196

016 守護者 | 208

017 第六戦隊の帰還 | 227

018 あの日の景色 | 242

019 The Embodiment of Scarlet Devil | 258

Devil | 258

第二章 灰かぶりの審判

020 秘めたる鼓動 | 277

0 4 3	知らない心	577
0 4 2	東方地霊殿	567
0 4 1	作戦終了	556
0 4 0	唯一の手がかり	546
0 3 9	海原へ	536
0 3 8	発令、『霊一号作戦』	518
0 3 7	みよんな鎮守府生活	503
0 3 6	スーパーズ	494
0 3 5	その名は	483
0 3 4	紅魔泊地案	472
0 3 3	ある日の青年	464
0 3 2	かみさま	450
0 3 1	決意の日	439
	第三章 宵闇の宴	
V i e w		414
0 3 0	Phantasmagoria of Flower	
0 2 9	Shoot the Bullet	399
0 2 8	針は動き出す	388
0 2 7	大漁旗を掲げよ!	367
0 2 6	変わる者、変わらない者、変わり者	349
0 2 5	鎮守府近海を攻略せよ!	337
0 2 4	鎮守府は生えるもの	326
0 2 3	いつかの温度	315
0 2 2	難攻不落の心	299
0 2 1	追い出されて	286

0 5 3	永遠の闇	671
0 5 2	二兎を追う者	663
0 5 1	狭間に揺れる	653
0 5 0	ソフトに反省	644
0 4 9	夢想の時	634
0 4 8	見ユ	626
0 4 7	霊二号準備会議	618
0 4 6	旋回中	609
0 4 5	心をあかす者	594
0 4 4	妖精さん	586

序章 東方風神録

001 賢者の憂鬱

青々と茂る植物と抜けるような青空、そこにまたがる大小の雲。木造の家屋が地上に立ち並び、均された土道を人々は笑顔で行き交う。吹き抜ける風、木々の香りが鼻腔をくすぐる。柔らかな日差しと爽やかな空気。早朝、数多の眼を覗かせるスキマから八雲紫が見下ろすのは、自らが最も愛する景色であった。

「ふふ……ステキ」

誰に聴かせることもなく、紫は呟く。

ある者にとっては路傍の石のように気にしないモノであるが、紫にとってはどれも格別で、ずつと特別で、永遠に飽きることはないモノ。トレードマークの一つとも言える日傘をずらし、太陽に対して手をかざしながら微笑む。あの太陽が幻想郷の全てを視ているように、紫も幻想郷のありとあらゆる景色をその手中に収めていた。

その景色は“異変”によって、何度も容易く蝕まれる。だが――

『紅霧異変』では、とある巫女が全ての者の運命を変えた。

『春雪異変』では、誰にも死が訪れることはなかった。

『永夜異変』では、解決に薬は必要なかった。

そして、閻魔の関わった『六十年周期の大結界異変』。巫女は異変に對して審判を下す。

博麗の巫女。幻想郷への愛情と共に、紫は心から抱擁するかの如き愛情を、彼女へ抱いている。億劫そうな眼も喝の入った叫びも、幻想郷を彩る一つの景色。紅白の衣装と彼女の微笑みも、守るべき宝の一つ。

だが今――巫女はその姿を消した。

「どうして……どこへ行ってしまったのかしら」

誰に視られているわけでもないのだが、口元を隠すように扇子を開

く。その瞳は少しばかり悲しそうに。

(博麗大結界はまだ残ってる。死んだわけではなさそうだけれど、心配する方の身にもなってる。欲しいものだけ)

一人、想いに耽る。扇子を持つ手は僅かばかり震え、唇を噛み締めるように固く結んで。

彼女の不在は、他ならぬ紫本人が最初に突き止めた。しかし、それは少なくとも彼女が霧雨魔理沙と最後に出会ってから5日後のこと。

3日前に発生した『異変』。それに対応すべく博麗神社を訪れたが、そこに彼女の姿は見当たらず、現在霧雨魔理沙を中心として捜索が行われている。

が、現在においても見つからず、依然としてその消息は不明。移動した形跡や足取りさえもつかめず、
“消えた”と表現するのが正しい、としか言いようがない。

そして今も、その『異変』は継続中であつた。

「……ああ、こんなにも青いのに」

眼前に広がる——幻想郷に突如として現れた“海”。

これまで幻想郷には存在しなかった、足りなかった青。空に負けず劣らず、むしろ重なり合つて美しいコントラストを主張する。

潮風の香りは嫌いになれない。幻想郷に新たなエッセンスを与えたように、青々とした緑との対比による絵画的な艶美さを描き出していた。

だが、代わりに霊夢は消える。

霊夢の捜索期間はひとまず1ヶ月としているが、その間に見つからなければ次世代の博麗の巫女の育成・選定を行う必要がある。

紫としても、あまり長い間博麗大結界の管理者の座を空席にしておくわけにはいかない。

それでも。

あの少女の安否を確かめたい、彼女の笑顔をもう一度見たいと思うことは、過ぎた願いなのだろうか。

(私は幻想郷の管理者……ここを守る義務がある)

目の前に広がる海を前にして、紫は海岸線ギリギリの位置でスキマに座って監視という名の展望と洒落込んでいた。突如として海が現れたものの、ただそれだけ。

不思議なことに、この海の上の空は飛ぶことはできない。どういった原理かはわからないが、誰が飛ばうとしても海へ落ちてしまうのだ。

『境界を操る程度の能力』。幻想郷の結界に穴を穿ち、夢と現実の境目を打ち消す、あらゆる事象事由を覆す、紫の能力をもつてしても。

村などに被害が出たわけでもなければ、怪我をしたとか行方不明になったというような報告もない。妖怪の山から流れる河の水が流れ出る先に、三途の川の流れる先に、その他人里や小さな川が流れる先に、突如として現れただけ。

(早く戻ってきなさいよ。これじゃあ、宴会だつてできないでしょう。海と月を着にした晩酌っていう、最近では稀に見る贅沢を私に我慢させているのに)

瞳を閉じて、久しく姿を見ない博麗の巫女の苦笑した顔を思い出す。物憂げでありながら快活さを感じさせる彼女のあの顔がたまらなく愛しい。鬱屈とした溜め込みを吐き出すことでしか、心の安定を図れなくなっていると気づいているのに、それがどうしようもなく心地いい。

(帰ってきたら……たまにはお賽銭でもあげましょうか)

どんな顔をするだろうか、どんな反応をするだろうか。顔を見ることができない今では、虚しく想像するしかないのだが。

「あらっ…」

ふと、酷く陰湿な空気が潮風に乗って流れてきたのを感じた。それに気づいた紫は扇子を閉じ、スキマを閉めて宙に浮いた。遠くからは、八雲藍が慌てた顔で飛んできているのが見える。

(やはりこれは……異変。それも相当厄介な)

姿形はまだ見えない。しかしそれでも、陰湿な空気は増大した。やがてそれは怨念のような、憎悪のような、悲愴のような負の感情。そ

の結晶とも言おうべき——黒い感情の塊の数々。

紫は直感で理解する。これはマズい、と。

自らの愛する幻想郷に関わらせてはいけない。あれは争いの種に過ぎない。そしてもつとわかりやすく簡素で簡潔で、単純なものだ。

今の幻想郷には、この感情は必要ない。

守らなければならないだろう。博麗の巫女に代わって。

「藍」

「はっ」

九尾狐がすぐそばに控え、恭しく頭を垂れる。

しかしそんな時、海を正面とした背後、『妖怪の山』から、ただならぬ気配が漂い始めた。それは博麗神社と似通っているようで、何処か違う感覚。

紫の頬に、汗が一滴流れる。藍も珍しく尻尾の毛を逆立たせているが、彼女は鋭い双眸を山に向けたまま口を開いた。

「私は山の様子を見てきましたよう。紫様、無理はなさらぬよう」

「わかっているわ。それにあなた、私を誰だと思っているの?」

「それは勿論、長命でありスキマを操る妖怪の賢者、我らが八雲紫様ですよ」

「老婆と言ったかしら?」

「八意殿に耳を診てもらってください」

それだけ言うと、藍はわずかに笑みを浮かべて妖怪の山へと飛んで向かっていった。

「さて、異変が二つとは、なかなかやってくれるじゃないの」

スカートがふわりと浮き、髪が風に揺れる。景色を見つめていた時ほど瞳は慈愛に満ちておらず、そこに覗かせているのは底冷えするような冷たい感情。

宙に浮く彼女の周りに、手のひらほどの光の玉がいくつも浮かび上がる。それは十や二十どころではなく、幾百もの群れとなって彼女を守るように立ち塞がっていた。

そして、彼女の手元には充血した目玉の模様をしたスキマが一つ。
睨みつけるように、その感情の塊と対峙した。思いの丈をぶつける
かのように、彼女は苛立ちにも似た殺気をあらわにする。

「私の幻想郷に、土足で上がれると思わないことね」

002 少年の思い出、青年の景色

一体、どれだけの時を過ごしたのだろうか。自分は一体何という名前だっただろうか。

そんなことを思いながら、一人の青年は生まれ育った懐かしき土地を訪れた。

緑溢れる山々の中、清らかな河のせせらぎと吹き抜ける柔らかな風が耳に染み渡る。青年にとって、この自然はかけがえのない大切なものであった。

この自然だけ。

とある場所でその青年は、人生を共にしながらも、憎々しく思っていた養父に殴られる。

「金は送れ。お前の顔は忘れた、もう来るな」

「きつと、二度と会うことはないでしょう」

幽霊・妖怪、森羅万象、人知を超えたあらゆる存在を「視る」ことのできる青年は不気味と評され、長きにわたって肉体・精神共に追いやられてきた。

決別は、ようやく成されたのである。

9月のある日。

頬をさすり、スーツケースを転がしながら、青年は持ち前の穏やかさを身に滲ませながら、鬱蒼とした森の中を歩く。セミの鳴き声もあり聞こえなくなったのだが、代わりに風の音が際立って美しい。

(懐かしいなあ、この景色)

時刻は夕方。予約したホテルに寄る前に、懐かしい場所に、子供の頃に唯一好きだった場所——とある神社に、久しぶりに訪れてみようとしたのがきつかけである。

風に揺れる針葉樹と、その隙間から溢れる木漏れ日。湿った枯れ葉

を踏み、時折道を塞ぐ木の枝を避け、壊れかけた石畳の道に行く。

一步一步を記憶と照らし合わせ、当時のささやかな幸せを噛み締めるように。

(でも何だろう、昔と違う……ような?)

子供の頃はこの道を走って神社までよく行ったものである。昔も今もあまり景色は変わらないはずなのだが、どこか違和感を感じさせた。

(……参拝客が一人もいないんだ)

昔はそれでも、一度参拝道を往復するだけで必ず年老いた老人の一人は見かけたものだ。が、今では誰ともすれ違わないし、参拝に向かう者も見かけない。

森の中でさえ、子供の頃はあれだけ不思議な感覚に包まれていたというのに、今では景色が変わらないだけのただの森のようである。

(成長したからかな? いや、ただ感性が鈍くなっただけなのかも。なんだか寂しいや)

感受性の違い。子供の鋭敏な感覚とは違い、大人になると鈍くなってしまう。そしてそれは、自身がそれだけ成長した証でもあり、老衰した証ともなる。ただ、ここに来るといつも満ち溢れていた、“力”のようなものが感じられなくなったのは確かなのだ。

無論、ただの勘違いかもしれないが。

「うわったた」

上ばかり見上げて歩いてきたからか、石畳の隙間に躓いて転んでしまった。スーツケースから手を離し、両手について姿勢を立て直す。

(ん、これは?)

地面についた両手。その右手の部分には、ちょうど手のひらに収まるように何かが落ちていた。

(写真……。なんだろう、軍艦かな?)

手に握っていたのは、古めかしいモノクロの写真。カラー写真に移行している現代では、もうあまり見られなくなった代物である。

写真には、大きな船体と艦橋。滑走路と思しき真っ直ぐとした船の形。青年も詳しくはなかったが、第二次世界大戦時の写真であり、航

空母艦と呼ばれる軍艦であることだけ見当がついた。見当はついたが、それ以外はさっぱりわからない。

(誰かの落し物かな? まあいいや、神社に置いとけば気づくだろうし)

そうして、青年はその写真をポケットへしまい、足を進めたのであった。

(さて、到着。ホントに懐かしいな)

鳥居前にて礼、そこをくぐると、子供時代と何ら変わりのない神社があった。

広い境内、整えられた石畳に、大きな社。モミの木からなる4本の柱が立てられ、厳粛な空気に包まれている。予想通りに、人の気配は全くない。

手水舎で手を清め、財布から小銭を取り出した。残念なことに五百円玉が二枚のみとは、一体どういう使い方をしてしまったのだろう。

青年は躊躇うことなくそれを取り、賽銭箱へと放り込み二礼二拍手一礼。何かを願うべきかとも考えたが、今日この日に解決されたばかりなのだ。願うことなど特にない。

失礼とは思いつつも、賽銭箱へ上がる石段のところで青年は腰を落着けた。寝転がるように体を投げ出し、空を見上げる。

(貯金200万全額の支払いで縁切り。安いもんだ)

夕日が射す思い出の神社。境内は橙色に染まり、飛びゆく鴉が泣き喚く。耳に流れる風の音が、お祝いをしてくれているかのように心まで響いた。

石段は硬いが、いつまでもここで横になっけいられそうあった。目を瞑れば何も見えない。その代わり、沢山の自然が耳から頭の中に入り込んでくる。このまま寝入ってしまったら、翌朝まで熟睡すること請け合いだらう。

(でも、もうここにも来ることもない……か)

自身は既にこの街から、忌まわしい土地から解放されたのだ。ただ

それだけのこと。子供時代を過ごした場所を失ったところで、何の問題があるう。

誰かにとつては心の拠り所かもしれないが、誰かにとつては疎ましいだけの記憶でもある。ふるさとなど、千差万別の捉え方があっていいはずだ。

ただ、気がかりがひとつだけ。人との関わりを持つとうとしなかった青年にとつて、気になることがひとつだけ。

(あの子、どうしてるのかな)

子供の頃、この神社でよく見かけた少女がいた。髪が長く、目が眩むような美しい緑色の髪をした少女。天真爛漫で、気味悪がられていた自分にさえ話しかけてきた不思議な子供。

友人を持たなかった青年にとつての友人を挙げろと言われれば、一人だけ。神社を訪れた時にたまに見かけたあの少女だけだろう。

最後に見たのは、青年が最後に神社を訪れた中学校の卒業式の日。その日を境に青年が神社に参拝することはなくなったため、それから出会うことはなかった。

最後に交わした言葉。今となつては、青年を縛る鎖にさえなつていく。

『また、ここに来てくださいね！ 約束です！』

もう、今となつては会わせる顔もない。

年齢は自分より下だっただろうか。髪に蛇と蛙の髪飾りをした少女。真面目で明るく、そして素直。

何より、幽霊含む色々に見える体質のせいで、何か不思議なものが見えるなどという痛すぎる超常現象パフォーマンスを、神社で行ってしまった自分にさえ話しかけるような子だ。

どこかネジが一本外れていたのだろうか。最後は懐いていたぐらいである。

しかし思い返してみれば、少女にも不思議なところはあった。青年が神社に参拝した際、社の前でボソボソと神社の本殿に向かって何か喋っていたことがあった。それだけならまだいい。

神社に立てられているモミの木の子に向かつてだとか、手水舎で泳

いでいたアマガエルに向かってだとか。果ては、少女自身が蛙のような動きで参拝道を跳ねながら降りていったりだとか。

とにかく、不思議な少女であった。

ぶつちやけ、自分より痛かったんじやなからうか。

(今となつてはいい思い出……かな?)

と、苦笑するぐらいには青年も成長していた。

否、それはただの諦観に過ぎないのだろうか。

その時だった。神社の本殿の方から、わずかに耳に届くほどの小さな声が聞こえてきたのは。

「……？」

「……？」

どうやら、女性が二人、何か話しているようだ。神社の関係者だろうか。この神社の社務所はいつも閉まっていたために、誰も管理していないのだとばかり思っていたが、どうやら違うらしい。

流石に寝転がっているのはマズいと思い、青年は体を起こす。一方で、声は社の入口にまで近づいてきていた。

立ち上がった瞬間、社の扉が開く。年代を感じさせる木の乾いた音とともに、その人物は姿を現す。

社へ入り込む風と共に流れるようにたなびく美しい緑色の長髪、その髪に飾られた蛇と蛙の髪飾り。鼻筋の通った柔らかな顔には、少し無理をしたような笑顔が貼り付く。

白い肌に細い肢体。白と青を基調にした巫女服は脇が開いており、その胸元には豊かな双丘が自己主張していた。

幼い頃と何も変わらない。いや、変わっているが、青年の中では何も変わらない。

——会えるなら会いたいと思っていた、思い出の中の少女。

少女の美しい瞳と視線が交わされた。話そうとしても、何も言葉が出ない。少女は少女で口を開こうとしたようだが、青年の顔を見てその口をつぐみ、首を捻っては不思議そうな顔をしている。

なんと声をかければいいのかだろう。久しぶり、と話しかけたとしても、この様子では覚えていないようだ。初めまして、もどかおかし

い。

青年がうーん、と顔には出さずに頭を悩ませていると、少女は口を開く。

「あの……あなたは神様を信じますか？」

「……は？」

——どうやら、自分が信じた少女はやはりとんでもない少女だったらしい。

「……あー、えっと、か、神様……ですか？」

「はい、神様です！」

思い出す素振りすらしようとしないうところか、宗教に勧誘してくる少女。

自分が知っている限り、少女は素直を形にしたような性格であった。しかしどうして、それがこうも宗教にハマっているなどと信じられよう。別に宗教は構わないが、それを他人にまで振りまくような子だったのだろうか。

(いやまあ、確かに会う場所なんて神社だけだったけどさ……)

幼い日のたった一つの綺麗な思い出がどこか汚れたようで、気分は散々である。それを表に出すようなことはしないが。

「神様、ね。まあ、いるんじゃないですか？」

「そんなことでは神様は姿を現してくれませんよ！」

流石にいい加減にしてくれよ、と青年は引く。

そんな思いとは裏腹に、少女は可愛らしい笑顔で詰め寄った。

「さあ、もつと神を信じるんです！」

「あー、えっと、その、いるってことでいいから」

「ちゃんと信じてください！」

「か、神様って、いるんだね？」

「声を張り上げて！」

「神様、ああ神様！」

悪ノリしているとは分かっているのだが、少女と再び出会えたこと

に、青年自身嬉しいやら呆れやら混じって感情が安定しない。吐きそうなのに、泣いてしまいそう。

少女は青年の手を引き、本殿に向かって隣に並ぶ。

「さあ、一緒に叫んで下さい！ 神様あ！」

「あーもう！ えっと、か、神様あ」

「神様あ！」

「か、神様あ」

「神奈子様あ！」

「神奈子さ——誰だよそれ！」

「神奈子様あ！」

「か、神奈子様あ」

「神奈子様あ！」

「神奈子様あ！」

「うるっさいよ早苗！」

社の中から現れる、注連縄を身につけた女性。胸元には怪しげな反射光を放つ鏡を着け、その表情はご立腹である。

しかし、その美しさだけは如何とも表現しがたい。形容するに無礼であり、筆舌するに喉渇くこと間違いなし。抜群のプロポーションとキメの細かな肌、身にまとう雰囲気はまさしく——

「女神……」

他人を評価することなど、ましてややそれを口に出してしまうことなど、今までどれほどあつただろう。少なくとも、こんな美人を目の前にして落ち着けと言われても落ち着きようはない。

「そう、神様ですよ神様！ 神奈子様は神様なんです！ えへへ、どうですか？ びつくりしましたよね！」

「早苗、私はお賽銭入れてくれた人を早く外に出してあげてつて言つたよね」

気が付けば神社中が、いつの間にか謎の光に包まれ始めていた。その光に気づき、青年は周囲を見渡す。

「あの……何が起きてるんです？　　というかあなた方は……？」

「遷宮だよ。神社ごと」

「遷宮……？」

「神社を他の場所に移すのさ。ここじゃ信仰が得られないから」

「遷宮という言葉は知っている。社を改修する際に、御神体を一時的に別の社に移すことだ。それはいい。」

「だが、神社ごと、というのは一体。」

「私は八坂神奈子。ここの神さ」

「私は東風谷早苗です。そうですね……私はここの巫女なんです！」
立て続けに、少女を染めた宗教の御本尊が目の前にいることを理解する。

（ああ、巫女だったんだ。ならまあ、仕方ない……ような悔しいような……やっぱどうでもいいか。しかし、神様かあ……）

神と言えど、どこをどう見ても人間に見えた。確かに、飛び抜けた美しさであるとか、何故注連縄を着けているのかなど、謎は多いが。

青年も続けて自己紹介を行おうとすれば、周囲の輝きが一層眩くなる。

「……色々と話したいことはあるけど、急いでここから出た方がいいよ」

「はい？」

「もうすぐ遷宮が始まるから」

「巻き込んでしまいますから、早く出ましょう！」

「最後の参拝客だ。見送ってやるさ」

二人はそう言うのと、青年の肩を掴んで押し歩く。

「あの、えと、ちよつとー！」

抵抗もむなしく、青年は鳥居の前までやってきた。するとそこで、鳥居の向こうから一人の帽子をかぶった少女が神社へ入ってくる。歳は自分より流石に低いだろうか。

それを見て、早苗と呼ばれる少女と神奈子と呼ばれる女性が目を見開いて驚いた。

「あれえ、二人共一体どうしたの？　その人間は？」

「す、諏訪子、あんた本殿にいたんじゃ!?」

「ミシヤグジ様と一緒に散歩してたけど?」

「どうやら、この帽子の少女も関係者であるらしい。」

「ねえねえ、それで、その人間は一体どうしたの?」

「ん、ああ。この世界での、我々の最後の参拝客さ」

「え、最後の? どういうこと?」

「この前話しただろう。我々は幻想郷へ神社ごと遷宮すると」

「え、聞いてない! もうこれ途中? 置いてかれるところだった

じゃん!」

「たしかその時、諏訪子様はテレビを見て爆笑してましたので……」

「あー……うー」

「まあ、間に合ってよかったな」

「全くだよ、もう! 神を置いてきぼりなんて、人間のやることじゃないってば!」

「私は神なんだけど」

「私も風祝ですよ」

三人が鳥居の前で揉め合い、一向に話が進まない。しかも、帽子の少女もどうやら神であるらしく、青年は眉間を押さえた。

「あ、あの、僕はここから出たほうがいいんですよね?」

「そうですね!」

もうその言葉が聞ければ十分だ、と青年はため息をついて眉尻を下げる。

三人の顔を眺めてから、青年は鳥居の外に一步出た。たったそれだけで良かったのか、神の二人はホッと息をつく。

「いまいちわからないけど、こんな寂れた神社に最後までありがとうね!」

「ああ、本当にありがたい。我々も、この先やっていける勇気をもらうたよ」

「私たちのこと、できれば内緒にしておいてください!」

光は鳥居から内側だけで発生している。そしてその光は益々強くなり、やがて三人の姿も消えつつある。帽子をかぶった少女などは背

が低いために、既に見えなくなっていました。

「あの、よくわからないけど……神様はいるってことはわかりました。よくわからないけど……いやあのホントよくわからないけど、頑張ってください」

「うん、ありがとう。そろそろお別れだよ。じゃあね」

「もう会うことはないだろうがな。……せめて、健やかであってください」
そうして、神の二人の姿が完全に見えなくなる。おそらく、神社の社の方へ向かったのだろう。しかし早苗だけは、未だに鳥居の前でその姿を残していた。

「あの、そこは危ないんじゃないんですか……?」

「えーっとですね、ちよつと待ってください。今整理してますので」「整理?」

緑色の髪が、輝きを帯びて一層眩く風に流れる。目の前には美しく成長を遂げた早苗がいるというのに、瞼の裏には確かに、子供の頃の光景がありありと浮かんできていた。

「なんでしょう。こう、おふくろの味、というか、懐かしのあの味、と
いうか」

「は?」

「うーん、よく思い出せません! ちよつともう一度顔を見せてくださいー!」

「え、ちよ、うわ!」

意味不明の言葉を並べる早苗。棒立ちしていた青年は突然腕を引かれ、光に包まれる神社の、鳥居の中へ足を踏み入れた。

目の前には、早苗の綺麗な顔があり、その表情は自分の顔を見た途端納得したとも言おうように笑顔に変わる。

「やっぱりカミツレさんじゃないですか! また来てくれたんですね!」

その笑顔は、最後に出会ったあの日と変わらないものであった。

瞬間、視界は完全に光に包まれる。

「思い出してくれたんだ、——さなちゃん」

言葉を紡いだ青年は、刹那の間に意識を奪われた。

茅野守連、カヤノカミツレ21歳。職業は海洋調査における潜水士。

幼き日の景色は、確かに取り戻されたのである。

003 初めまして、司令官！

どれだけ時が過ぎたかはわからない。しかし、呼ばれることのない自分の名前が呼ばれていた。

名前など、ただの記号でしかない。ただ個人を区別するために付けられたもので、そこに意味など求めてはならない。求められなかったものを、どうして今更求めるのだ。

しかしそれでも、青年の名を呼ぶ声があった。自身を呼ぶ声をほとんど耳に残したことがない、だが一人の少女の声だけは鮮明に覚えている。

呼ばれたから応えるわけではない。少女の声だったから、というわけでもない。

懐かしい記憶の中に眠る声に、ただ誠実に応えようと――。

「――い。カミツレさん、起きてくださいー！」

「……え、は、はい？」

いつの間に気を失っていたのかはわからない。が、滅多に呼ばれることのない自分の名前が呼ばれた珍しさから、青年は目を開く。

どうやら鳥居の前で倒れていたらしい。早苗が肩をゆすられていたが、目を覚ますと同時にそれを制する。

「えっと、もしかして寝てた？」

「気絶です」

「あ、はい」

確かに、神社の入口で眠るようなはた迷惑極まりない癖を持っている覚えはない。と思いつつ、青年は体を起こして立ち上がる。

「ここは……さつき神社？」

「そうなんですけど、そうじゃないんです！ こっちに来てくださいー！」

鼻息荒く、早苗が青年の腕を引く。腕を突然掴まれたことにも驚いたが、それどころではない現象が直後に起きる。

「あれ……地面」

腕を支えられながら、青年は早苗と共に本殿の上空に浮いていた。

足が地面につかないという不安、体に襲いかかる体験したことのない浮遊感、それらは青年が冷や汗を垂らすに十分な恐怖であった。

しかし、そんな恐怖も吹き飛ぶ景色が目の前に広がる。

「これ、海……？　こんなに綺麗な海があるんだ……」

「やつぱり、これが海なんですね！　私、初めて見ました」

山の中にある神社。当然見える景色も緑ばかり、であるはず。

だがそこに広がっていたのは目を見張るほどに澄んだ青。少し離れた位置にある、広大な海であった。

(綺麗だ、本当に。こんなの今まで見たことない……)

「あれ？　あそこで誰か空を飛んでいませんか？」

「え？」

「ほら、あれです。何か、空の中で座っているような人です」

なぜ山の中にいたのに海が見えるような位置にいるのか、という疑問も解けないまま早苗が話した。

人間はそんなにポンポン空を飛べたものだろうか、と青年は割と本気で首をひねる。だがやはりそんなこともなく、理解が追いつかないままに早苗の示す方向を見た。

「……確かに何か浮いてる、かな？」

「うーん、何かがその周りにも浮いていますね。というより、あの人が何も無いところから色々引っ張り出しているような……」

海岸線ギリギリの位置の上空に、確かにその人は浮いていた。そしてその周囲には、キラキラと何かが光り輝いている。青年も視力には自信があつたが、そこまで細かくは見えない。精々、その人の周りでは何か光っていることぐらいである。

「どうやら何かと戦っているようですね。なるほど、あれが幻想郷の弾幕ですか」

「あ、う、うん？　そうみたいだね」

「でも、相手は一体……。海の上にいるみたいですね。あれは生物でしようか？　随分と真つ黒で、グロテスクな形をしているようですが……」

「えつと……うん、そうだね。いやお見事、全くもってその通りだよ」

「ちよ、流石に適當すぎですよ！」

容赦なく突っ込まれ、ばつが悪そうに青年は押し黙る。そんな青年を見て、やれやれといった風に早苗は苦笑した。

「その何に対してもどうでも良さそうなところ、変わっていませんね」

「……さなちゃんこそ、昔と何も変わってないじゃん」

「あは、久しぶりにそう呼ばれました。あ、私がそう呼ぶようお願いしたんでしたっけ？」

青年も苦笑し、頬をポリポリと搔く。青年自身、中学までは早苗のことをそう呼んでいたが、大人になった今では少々気恥ずかしい。嫌がられるのではないかという思いは、どうやら杞憂に終わったらしい。

しかし、二人がそうして海を眺めて昔の話を持ち出したところで。

「動かないで下さい！ あなたたちは何者ですか！」

空を飛んで、獸耳と尻尾のついた白い髪の少女が現れた。その尻尾の毛が逆立っていることもそうだが、その少女の強面な形相を見る限りでも、あまり友好的な出会いではないようであった。

（え、剣？ 本物？ 尻尾も生えてるけど……）

この少女も空を飛ぶのか、と青年は複雑な気持ちになるも、剣と紅葉の様子が描かれた盾を持っているのを見ると、そうも言っていられない。

「ここを妖怪の山と知っての行動ですか？ 警告します、今すぐ立ち退いてください！」

険しい顔つきの少女。何が起きたのか、何が起きているのかわからない青年にとっては、最早状況に流されるしか選択肢はなかった。そもそも動いたところで空の上である。

「随分と物騒な挨拶ですね。それが幻想郷のやり方ですか？」

「無礼なのはそちらです。勝手に我々の山に入った挙句建物まで持ち込むなんて……！」

「それは失礼しました。では、あの敷地は我々守矢神社がいただきま

す。で、いいですよね?」

「ふざけているんですか?」

「大真面目ですよ」

軋む音と共に、白い髪の少女はその剣を握り直す。

「引く気はない、と?」

「私たちも生き延びるためにここへ来てますから」

それに応えるかのように、早苗は自身の周りに光り輝く球体を浮かべた。あら綺麗、なんて呑気な感想を浮かべていたのも束の間。

「では、実力行使と行きましょう——!」

瞬間、青年の視界がぶれる。白い髪の少女が勢いよく迫ってきたかと思えば、早苗が空中を高速で飛翔し始めた。

——青年の腕を掴んだまま。

「痛い痛い痛い! 腕ちぎれるって!」

「カミツレさんも男の子でしょう! 我慢してください!」

「無茶言わない! 降ろして!」

急制動、急加速、三次元空間を余すことなく変幻自在に移動する早苗。移動する傍ら、青年にGがかからないように細かく調整しているようだが、青年としては地に足がつかない状態で高速で空中を振り回されているのだ。たまったものではない。

目を覚ましたら山の中にいると思っていたのに海が近くにあつて、人間が空を飛んで、ほかの人も空を飛んで。挙句の果てにはジェットコースターもびっくりの空中機動。

あえなく、青年は頭と一緒に目を回す。

「ごめ、吐きそ……」

「ちよ、カミツレさん! わかりました、降ろしますから吐かないで!」

慌てる早苗の声が聞こえたかと思えば、頭を叩かれた。

(え、なんで叩かれたの!? ていうか叩いた瞬間さなちゃんの手が光ったけど!? なんて僕ドキドキしてるんだろ……もしかしてこれって……!)

ただの動揺である。

何をするんだと問い正そうとしたその瞬間、再び青年は浮遊感を味わった。

——自由落下という名の絶望が、全身にまとわりついて。

「うわあああああああああああ！」

高度にしておよそ15m。何ができるわけでもなく、青年はそのまま落下していく。

(あ、ダメかも……)

高速移動中に突如放り出された青年は、体中に伝わる空気の圧力にさらされ、そして死んだという確信を伴って落ちていく。

——深い滝壺の中へ。

衝撃音と共に高い水しぶきが上がり、青年は滝壺に吸い込まれる。仕事柄というべきか職業病というべきか。青年は目まぐるしく転換する状況の中でも、水面が近づいた時には既に着水する姿勢を取っていた。

滝壺に潜った青年は水中でその眼を開き、滝の底にぶつからないように動き、流れ込む水に身体を持っていかれないよう泳ぎ、体勢を立て直す。

(し、死ぬかと思った)

水中で辺りを確認したが、どうやらそこそこ大きな滝壺らしい。落ちた先に水がなければ、そしてそこに深さがなければ——。

もしくは、早苗はわざとここに落としたのだろうか、とも考えるが。

(おや……?)

ふと視線を向けたところで、青年は滝壺の中に怪しげな影を見つける。

青緑色の物体、ギラギラと光る眼。不思議な姿勢で青年を見つめているそれについて、青年は見覚えがあった。

(やばいやばいやばい、逃げないと！)

かつて故郷の河で遊んでいた際に青年だけが見たことのある影。足を引つ張られて水中に引きずり込まれかけたこともある。その泳ぎは速く、河から出るまで追いかけられ、凶暴な声をあげていた河の主。

(なんでこんなところに「河童」がいるんだよ!)

青年は急いで方向を変え、水の流れる方向へと全速力で泳ぎ始めた。

(冗談じゃない、最悪だ! 何なんだよ次から次へと!)

脳の情報処理など追いつくはずもない。人生で大一番の山場であるとした判断できない頭の悪さが嘆かわしい。

ならば、体だけは動かすしかないだろう。と、無意識に思った青年は、川の流れも相まっておそらく人生で最高速のクロールを体現していた。

(追ってきてるのか? いつ追いつかれる?)

息継ぎなど忘れてひたすらに脚を、腕を動かす。肺が酸素を求めている。脳がもう動かないと叫んでいる。

それでも、恐怖の対象としかなりえない河童に捕まるよりはマシだと、必死に水の先を求めてもがく。

しかし、その速度にも終わりは来る。

体はまだ動くというのに、河の流れが弱くなる。水の後押しは徐々になくなり、最後には青年が自身の力のみで泳いでいた。

「つはあ、はー、あれ、海に、河口に出てる……?」

そろそろ限界だと感じ、青年は顔を上げて呼吸を整える。立ち泳ぎに移行して気づくが、水は海水に、周囲は一面の青景色に変わっていた。

そして、海にたどり着いてから、先ほど早苗と話題にしていた人物がすぐ近くの空中に浮いている。

「人間? まだ海には立ち入らないように警告がなかった?」

年の頃は青年より上だろう。フリフリとした帽子とスカートを着

用し、彫像のように整った美しい顔立ち。

その視線は鋭かったが、青年を見るとわずかにその雰囲気は柔らかくなる。

「コ、コスプレか何かですか？」

「違うわよ……ん？ あなた、あの神社の関係者なのかしら」

「え……は、はあ。神社にいましたけど」

「何しに来たの？ 幻想郷の支配？ それとも私の力が目的？」

「いや、実は僕もよくわからないんです」

「おかしなことを言うのね」

一人で勝手に納得したように不敵に微笑むその女性。近づいてみてわかったことだが、早苗と同じように体の周辺に光の玉が浮いていた。

そしてひととき目立つのは、女性の周囲に複数存在する空間の裂け目。更に、そこから覗く幾百の目玉。

「事情は後で聞くとして、人間さん？ 何もできないなら、危ないから早く陸に上がった方がいいわ」

「えっ？」

女性がそう言うと、突如女性の目の前に現れたのは謎の黒い塊。

——否、鯨のようなイルカのような、黒い生物。

口を大きく開き、眼光は怪しく光り、海を割って移動する。人間の数倍の大きさがあり、口の中には大きな筒のような物も見える。

驚きの声を上げる間もなく、女性の周囲に浮かべていた光球がその怪物へと向かった。

「あら、おかたいのね」

刹那——耳をつんざくような轟音と、体中をビリビリと伝う衝撃波。

光の玉はその3分の1ほどが怪物の甲殻に弾かれてあらぬ方向へと飛んで行くが、残りはその甲殻の表面にぶつかった瞬間、爆発した。

そして、怪物は生気を失ったように海に崩れ落ちる。

光球によるダメージを負った部分から謎の液体を噴出させた怪物。偶然にも、あんぐりと口を開けていた青年の口の中にその液体の一部が入ってしまった。

「ちよ、何が——おえつ、なんだこれ……つて、海水？」

何度も味わったことのある味。仕事の仕事であるだけに、間違えようもない。

「なんなんだ、一体何が——っ」

悩む暇など与えてはくれない。その怪物と同じ形の別の個体が、次は青年のすぐ目の前に現れる。

女性を振り返ったが、先ほどの個体を興味深く眺めており気づいていない。

口を開けている怪物。その勢いは止まらない。その大きな体ごと海面から跳ね上がり、青年を海中に引きずり込むように飛びかかる。

今度こそ、青年も命を諦めた。泳げば済むとか、陸に上がれば問題ないとか、そういう話ではない。

恐怖で足が動かないのだ。理解不能な出来事に、頭どころか体すら反応しないのだ。

(ああ。最後までもう……ついてないな)

もう少しマシな人生だったら、何か変わっていただろうか。

心より望んだ普遍的な生活は、得られていただろうか。

孤独に生きた青年の声に、応える者など在りはしなかった。

なかった——はずなのに。

「司令官、危ない！」

突如、青年のポケットが輝き出す。それとほぼ同時に、叫ぶような声と鳴り響く爆音。耳をふさぐ暇もなく、メラメラと大気を揺らす火

炎が目の前に広がった。

怪物は空中で停止したかと思えば、そのまま海中に落下。青年に向かってその大きな体が襲って来ることはなかった。

そして、突然目の前に現れた、背を向けているこの少女。

歳はまだ若く、小学生か中学生だろう。セーラー服を着ているために中学生かも知れない。顔立ちも幼く、体も華奢で小さい。

しかしその小さな体で、煙突のようなものが立ったエンジンと思しき機械を背負い、腕には小さな大砲のようなものを、脚には何かが装填されているらしい機械を装備している。

「たす……かつ、た？」

風になびくセーラー服とショートカットの髪、その全身を浮かび上がらせている謎の靴。

チラチラと白い下着のような物が見え隠れしていたが、この状況でそのようなことを気にするほど青年の神経は凶太くない。

火薬の匂いが混じる潮風が、青年の頬を撫でていく。

少女はやがて振り返ると青年の顔を見て、怪我をしているかどうかだけ確認してから、安心したかのように息を吐いた。

「お怪我がなくて何よりです！」

「あ、ああ……ああ？」

「あ、自己紹介が遅れました！」

少女はその場で姿勢をただし、直立する。

慣れ親しんだような仕草、あたかも呼吸をするかのように右腕を曲げ、手のひらを伸ばし、顔の横に据える。

命の危機を脱した青年。落ち着く暇などなく、瞳を見開いたまま少女を見上げていた。

光球を浮かばせていた女性は宙に浮きながら、遠目に青年と少女を見て扇子を開き、目を細める。

敬礼をした少女は唇を震わせていた。しかし、ギョツと唇を結んだ後、緊張した面持ちで青年を見て、意を決したように口を開く。

「初めまして、吹雪です！ よろしくお願いいたします！」

004 守矢会談

思い出の中に留まる懐かしき神社、その板張りの廊下を青年は歩く。先導して歩く早苗についていくように。

ニコニコとした笑顔とは打って変わって、早苗の表情には落ち込みが見られる。かといって自身も、余裕のある表情をしているわけではないが。

「あの、さなちゃん」

「なんですかカミツレさん？」

「僕って、本当にここ歩いてもいいのかな」

「神奈子様が許したんですから大丈夫ですよ」

それまで一般人であった青年。しかし、たった30分にして、人生最大の山場を迎えていた。

どこで何を間違えたのだろうか、いやそもそも何で神社にいるのか、うわ神社の中っていい香りなどなど、気になることが多すぎるのである。

「これから……何するんだっけ？」

「神奈子様と諏訪子様、それと、幻想郷の八雲さんという方とお話です。八雲さんが、私たち守矢神社が幻想郷に来た理由について聞きたいそうですから」

「あ、そうだった」

そうだった、ではない。八雲さんって誰だ、幻想郷って何、など不思議は様々。

そして最も留意すべきは、なぜその場に自分も加えられることになっているのかという疑問である。

「あのさ、僕ってその話し合いに必要なの？ いらないよね？ それどころか、僕って神社の関係者じゃないよ？」

「先方がお呼びですから仕方ないですね。神社の関係者を全て集める、特にあの青年は絶対に呼べ、とのことなんです」

「八雲さんって、あのコスプレの人？」

「カミツレさんから見れば私も十分コスプレだと思いますが」

「それもそうだ」

ふと、青年は自分の後ろについてくる影をチラリと見た。ビクビクして震えながらキョロキョロと辺りを見回し、時折青年を見ては顔を固める少女。

海で自身を怪物から助けた張本人であるが、助けた時とは違って勇敢さは欠片も見えず、常に緊張した面持ちである。

「あの、さ」

「は、はい！　なんでしよう司令官！」

「いや、見たところすごい緊張してガチガチみたいだけど」

「お気遣いありがとうございます！　ご心配には及びませんから！」

大きな声とともにキレのいい敬礼。しかし、まるで変わった様子はない。

薄い唇も小さな肩も細い膝も、寒さにこらえている時のように震えている。生まれたての小鹿を見ているようだと言青年は息を漏らした。

「えっと、吹雪ちゃん、だったっかな？」

「は、はい、吹雪です！」

「そ、そんなに身構えなくてもいいんじゃない？」

安心させようと吹雪という少女に話しかけたところで、早苗が獣耳の少女と争っていたことを思い出す。

（もしかしたら、また戦いになるのかもって心配してくれてるのかな？）

早苗に向き直ると、早苗は自身の考えを見透かしたように答えた。

「大丈夫です。ひとまず八雲さんの式神の八雲さんという方の仲介で、お互いに一度矛を収めましたから」

吹雪は一瞬だけほっとした表情を見せるも、やはりどこかぎこちない。

どうしたものかと考えるが、それどころでもない。当の青年すら、自身が置かれた状況を一分も把握していないのだから。

「それでも……」

「ん？」

「それでも何かあったときは、私が司令官をお守りします！」

「…………うん、うん」

勿論、吹雪のことも含めて、である。

なぜ突然現れたのか、なぜ自身を司令官と呼ぶのか、考えるだけでも、謎は深まるばかりであった。真面目なのだろうということとは、ひしひしと伝わって来るのだが。

「素っ気ないですね」

「ほっといてよ」

「本当に心配してる訳じゃなくて、他人に興味なんてないから、当たり障りのないことしか話せないんですよね？」

「6年も経てば、考えも変わってくるよ」

「その割に、吹雪ちゃんに対する話し方、昔の私に向けてのものにそっくりですよ」

早苗の言葉に、青年は少しだけ唇を尖らせる。その様子を見て早苗がわずかに微笑んだのを見て、吹雪も理解しているのかいないのか口角を上げて首をかしげた。

話しながらも、三人はひとつの部屋の前に到着する。

「さあ、この部屋に八雲さんがいます。こちらは私と神の二柱、それからカミツレさん、吹雪ちゃんのお二人です」

「改めて、色々と説明してもらえるんだよね？」

「それはもちろん、お任せ下さい」

そう言いつつ障子に手をかけたところで、早苗はもう一度振り向き、青年に対して口を開く。

「先に、カミツレさんに言っておかなければならないことがあります
た」

「……………僕も、その言葉を一応聞いておきたかったかな」

「私たちの都合に巻き込んでしまって、本当にごめんなさい」

畳が微かに香る部屋の中、7人は座る。

上座に神奈子と諏訪子、その横に早苗。対面するように座るのは八雲紫と、少し間隔を空けて青年と吹雪。

重苦しい、場が揺らいでいるかのような雰囲気の中で、最初に口を開いたのは八雲紫であった。

「外の世界で信仰が得られなくなりそうだったから、この幻想郷に来た。これについて何か間違いはあるかしら？」

これを受けて、神奈子が怖じけることなく、空気を締めつけるかのような低い声音で返す。

「我らにおいて、その言に偽りはない」

それに続いて諏訪子もまた、冷たい視線を浮かべたまま静かに答えた。

「私は聞いてなかったけどね」

「ちゃんと話したじゃないか！ お前がテレビ見てたんだろ！」

空気は一瞬にして和やかなものとなる。

「守矢神社さんの話をまとめると、幻想郷に来たのはあくまで信仰を得て生きるためであり、幻想郷を支配しようとする意図はない、と？」

「それで構わない。全ての者から信仰を得られるならそれはそれで構わないが、私もそうは思っていないからな」

「布教を認めるなら特に争うつもりはない、と。でも——」

「布教すら拒むなら、私たちにも手段がある。……まあ、いたずらな敵意はないと思ってくれ」

紫と神奈子が視線を交差させて火花を散らしている。

青年からすればさっぱりわからない。専門用語のようなものが交わされ、意味のわからない言葉にうーむとお互いに考え込む。

一体、一般人にどう理解しろというのだろう。

「幻想郷は全てを受け入れる場所よ。海の化物みたいに、いきなり攻撃してくるような荒くれ者は勘弁してほしいけれど」

「……感謝する」

だから、青年が理解したのはここまで。

ここは『守矢神社』という神社であり、八坂神奈子と洩矢諏訪子が祀られており、東風谷早苗が巫女を務める。

外の世界において人が神を信じなくなってきたために存在することが危ぶまれるため、この幻想郷という世界に遷宮して、この地で信仰を得ることにしたのだという。

「ただし、今神社があるここは妖怪の山。ここに神社を置いていいかどうかは、山の者たちと交渉することね」

「心得ているさ」

どうやら話がまとまったらしく、二人の間で柔らかくも不敵な笑みが交わされる。その心の内は、青年の知るところではないが。

「さて、では次は彼についていいかしら」

「……ひゃい？ あ、えと、僕ですか？」

自身に話を向けられるとは思っていなかった青年。

油断した時に紫に話しかけられたために、加えて紫と神奈子の見目麗しさに見とれていた部分もあり、青年はなんとも間抜けな返事をしてしまう。

「……ゴホン、失礼しました」

「とって食うわけじゃないんだから、普通に話してちょうだい」

気恥ずかしさを覚える。神奈子と早苗はわずかばかり口元を歪ませ、諏訪子に至っては既に座るでもなく寝転がって腹を抱えていた。

ただし、吹雪だけは未だに正座したまま、緊張した面持ちで警戒しているが。

「あなたと、そちらの彼女に聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら？」

「……僕に答えられることであれば。吹雪ちゃんは？」

「はい、大丈夫です！」

「そう、わかったわ」

紫は一瞬だけ青年に対して目つきを鋭くするが、すぐに優しい瞳へと変わる。

「なら、まずはあなたのお名前から聞きましょうか」

「僕は……茅野守連カヤノカミツレです」

「そちらの子は？」

「ふ、吹雪です！」

「茅野吹雪さん？」

「いえ、吹雪です！」

その質問に対して吹雪は恥ずかしそうに手を横に振った。青年としても、なんとも申し訳ない気持ちになり心の中でため息をつく。

その一瞬だけ、再び紫が青年をじっと見つめたが、青年がそれに気づくことはなかった。

「では、あなたたちはどうしてここにいるのかしら？」

「僕は、この守矢神社が幻想郷……でしたっけ？　ここに遷宮？　する時に一緒に巻き込まれました」

と、言ったところで、神奈子と早苗が非常に申し訳なさそうな顔になる。

「それについては、うちの早苗が本当にすまなかった」

「カミツレさん、本当にごめんなさい」

「……いえ」

実のところ、これについては青年も答えを出していない。

というよりは、出せないのが現状である。状況を把握しきれておらず、数々の非現実に対する脳の処理が追いついていない。

何より、幻想郷に迷い込んだということを、まず理解していないのだから。

「ふうん、それで、カミツレさん。あなたは外の世界に戻りたいのかしら？」

「…………」

「あら、答えは？」

「戻ることは……できるんですか？」

「私なら送ってあげられるわ」

「…………」

「何か、考えることがあるみたいね」

スツと、一步引いた紫。だが、この態度を青年は知っている。紫という人物、どうやら自分の内面を見極めたいのだろう。

誰とも目を合わせずに、青年は一人黙り込む。

それを見た紫は、ふーんと小さく頷いてから吹雪へと視線を移した。

「じゃあ、次はあなたよ、吹雪さん」

「は、はい！」

「あなたはどこから来たの？ 私の覚えている限りでは、いきなりカミツレさんの目の前に現れたようだけど」

覗くような紫の視線を受けて、吹雪はやはり緊張した表情を更に固くさせる。

そこから出てくる言葉もやはり緊張気味なのかと青年は考えていたが、予想外の話を聞くことになる。

「私は……特I型駆逐艦のネームシップ、吹雪です」

との言葉に、神奈子以外の全員が訝しんだ。

「私には……砲撃音、火薬と硝煙と油の匂いが染み付いています。波間をかき分けて進んで、戦いに身を投じて。それから……」

「……それから？」

「水の中に沈む身体と、静かな……海」

一体その言葉が何を示しているのかなど、青年にはわかりようもない。

駆逐艦が何か、ぐらいはわかる。軍艦だ。旧軍においては正確には軍艦ではなかったらしいが、今の世の中の海軍は多くを駆逐艦が占めていた。

どんな回答を想像していたのかはわからないが、紫の驚いた表情を見る限りではこれは予想外であったらしい。

「寒くて、震えて、でも戦って、そんな中で私は大きな音とともに痛みを覚えて、そして動けなくなりました」

「……それだけ？」

「気づいたらこの身体で、司令官……カミツレさんの指示に従うよう、頭が覚えていたんです」

「それは……誰かに命令されて？」

「違います。でも私にとつて！ あの時あの場で突然目が覚めたのは、間違いなく——」

司令官を助けたかったからなんです！ と。

紫は考え込むように顎に手を添える。神奈子は先程からあまり反応がないが、吹雪という存在にある程度の目星をつけているのだろうか。

青年としては、ますます頭を悩ませる種が増えてしまったが。

「あ、あのさ、吹雪ちゃん」

「はい司令官、なんででしょうか！」

そうして青年に振り向く少女、吹雪。その目には一点の曇りもなく、ただただ真面目に青年の言葉を一字一句逃すまいとでもするような意思が伺えた。

「どうして、僕のことを司令官って呼ぶの？」

「それは、私の所有者だからです」

「は？」

危ない発言に、部屋中からの視線が刺さる。

しかし、青年にはもちろんそんな趣味はない。

「えつとね、僕は君に会うのは今日が初めてだし、君に何かした覚えももちろんないよ？」

「はい、私も司令官に会うのは今日が初めてです！」

「あ、あの、誰かに何か教えられた？もしかして孤児院からついてきたの？」

「いえ、違いますよ？」

「……司令官って呼んでるけど、その理由は？」

「私を従わせる立場にあるからです！ さあ、ご命令を！」

再び、青年に対して冷たい視線が突き刺さる。心なしか、早苗からの視線が特に強い。

「さて、放っておいても面白そうだけど、ここは一つ私の話を聞いてもらえるかい？」

やれやれとでも言うように、最初に口を開いたのは神奈子であつ

た。

吹雪をじっくり観察するように全身を見てから、神奈子は話す。

「この子、存在としては幽霊になるね」

「……は？」

「あら、やっぱりそうなの？」

口を空けて呆然とする青年。に対して、紫は納得したとでも言うかのように眉を下げる。

初めて幽霊を見た！ などと青年は言うつもりはない。超常現象を認識してしまうという好ましくない体質上、これまで幽霊など山のように見ている。

しかし、吹雪のような例は初めてであった。実体はつきりとあつて、物にもしつかり触れて、あげく会話が可能な幽霊。

これまで体験してきたものとは、明らかに一線を画している。

「自分の知識にはなりません……幽霊にしては、かなり存在がハッキリとしているようですが」

「まあ、ほとんどの幽霊が弱々しいのは間違いない」

「じゃあ、なんで……？」

「この吹雪って子は、この子個人の意思の幽体ってわけじゃなくて、沢山の人の意思が宿って一つの存在を形成しているから、強力な実体としてはつきり見えるのさ」

今一度、吹雪を見る。可愛らしく微笑むので青年も頬が緩んだが、いかんいかんと首を振って神奈子の方へと向き直った。

「付喪神という可能性もあるのでは？」

「付喪神は肉体には憑依しない。あくまで彼女自身は多くの思念の集合体、それが形を成したものでってことだ」

「……ほほう」

(全然わかんない)

神奈子による説明を聞いた青年。自分自身理解できているのかどうか怪しいがとりあえず相槌を打っておく。

「私って幽霊だったんですね！ 初めて知りました！」

「その反応もどうなのさ……」

自身のことであるというのに、吹雪は目を輝かせて話を聞いていた。

「もう一つ付け加えるよ。吹雪が持っている装備、今は本殿の方で保管してるけど、その装備の方には可愛らしい小さな付喪神が憑依していた」

「……あながち予想も間違っていないんですか」

話をまとめれば、神である神奈子の観察眼が間違っていないものであるとすれば、吹雪自身は思念の集合体で構成される魂。

そして、吹雪の扱うあの装備は付喪神ということになる。

「そしてこれが最後の情報。比較的新しい闘争の二オイがする。ああ、人間の基準ではじゃなくて、数千年数万年数十万年と生きる神の基準でね」

「え？ 神奈子さん今何歳なん——」

「ああん？」

「え、えつと……第二次世界大戦でしようか？」

「吹雪の中にある思念はおよそ数百。当時でその数の人員を動員して動かす、加えて海の上で動くものといえば？」

「なるほど、それで軍艦……。艦魂とでも言うんでしょうか？」

「そんなところじゃないか？ こんなナリだ。『艦娘』とでも呼ぶ事にしよう」

青年にとつて、体に電流が走ったかのような衝撃。

こんな少女がフネの魂、それどころか第二次世界大戦当時の軍艦の魂であるなど、少なくともわかには信じ難い事実である。

吹雪の表情はパツと見は笑顔である。が、心境は複雑であるのか、嬉しそうな顔もすれば悲しそうな顔もする。それを見ている限りでは、ただの一人の女の子のようには感じられない。

「というより、なんで女の子なんでしょう？ 軍艦って女性禁止って聞いたことありますよ。特に昔は」

「それは知らないけど、船の代名詞は昔から『彼女』が使われてたから、その関係じゃないか？ 私も山奥にいたから、艦魂なんて見るの初めてだし」

それならばまだ吹雪が少女の形を成していることにも頷ける、と青年は納得した。

しかし、やはりまだどこか信じられない部分はある。

「カミツレ君だっけ、一ついい?」

「はい、えつと、諏訪子様?」

「諏訪子でいいよ。様なんて堅苦しいのは早苗だけで十分だから」

「私堅苦しいですか!」

「えつと、じゃあ諏訪子さん?」

「よろしい」

それまで寝転がりながら黙って話を聞いていた諏訪子が、突然青年に対して話かける。

見た目少女であるこの神様をどう呼んでいいかは青年も迷った。さすがにちゃん付けは叱られそうである。

「君のさ、ポケットに入ってるソレ。何? ずっと気になってたんだけど」

「ポケット? ……ああ、これですか」

取り出したのは、参拝道で拾った一枚の写真。先ほど水に浸かったために青年は一度着替えたのだが、不思議と写真は濡れていなかった。

古ぼけた写真であることには変わりないのだが、自分はまたもや不思議なものに遭遇してしまったのだろうか。

「守矢神社に行く途中で拾ったんですよ。参拝客の落とし物かと思って、神社に置いておこうかと……もしかして」

「まあ、君の想像通りだと思ってもいいんだけど、少し待って」

すると諏訪子は、青年ではなく悩んでいる様子の早苗に対して帽子を向ける。

「ねーきなえー。カミツレ君にさ、能力使ったでしょ?」

「……イイエ、別ニソンナコト」

「嘘ついてるのはすぐわかるからね。早苗嘘つくと額に蛙の模様が浮き出るようにしてるから」

「え、嘘、いつの間に！」

すると、早苗は咄嗟に手で額を覆う。それを見て、諏訪子はニツと笑いをこぼした。

「嘘だよ。だけど、マヌケは見つかったみたいだね」

「は、謀りましたね！」

イタズラが成功した時の子供のように、諏訪子は早苗を指差して笑う。そんな諏訪子に、早苗は頬を膨らませて上目遣いに訴えていた、
「諏訪子様ひどいです！」

「言いつけを守らなかったのは早苗だよ？　いつ使ったの？」

「えっと、幻想郷に来て空を飛んで、白狼天狗と戦闘してカミツレさんを逃がそうと思ったときに、カミツレさんを叩いて発動させました……。そりゃあ確かに能力は使いましたが、カミツレさんだから仕方なく……」

「奇跡を起こす力だ。何が起きても不思議じゃないんだよ？　……

まー、話には聞いていた彼だから、早苗の気持ちはわかるよううん」
諏訪子の最後の一言に、早苗が冷や汗ダラダラに慌てる。

神奈子はニヤニヤとした表情で早苗を見ていたが、青年と吹雪は首をかしげるばかりである。

「さて、問題が解けたよ。実はね、その写真は守矢神社、というより神社のあった土地と少なからぬ由縁のある軍艦なんだよ」

「守矢神社と……？　少なくとも外の世界？　の守矢神社は山奥にあったはずでしたが」

「名前には力が宿る。場所は関係ないんだよ。しかも、その写真からわずかながらに何か不思議な力を感じる」

青年の持つ写真をまじまじと見て、諏訪子は続ける。

「簡単に説明するとね。うちの土地と縁のあるその艦の写真を君が持っていて、そこにうちの早苗が『奇跡を起こす程度の能力』を使用した。まあ、出てきた艦娘はうちとは関係ないみたいだけど」

「……は、はあ」

続けるよ、と言って諏訪子は口を開く。

「で、カミツレ君に何らかの奇跡が起きて、吹雪ちゃんが現れる事態に

なった、と」

「……その筋書きにどのぐらい信憑性があります?」

「そりやもう、神様のお墨付きだよ」

「それは……頼もしいですね」

「でしょ?」

なんだその曖昧なシナリオは、と苦笑せざるをえない。神話でさえ、もっと起承転結はつきりしているだろうに。

そんな中、吹雪が青年に対して興奮した様子で話す。

「司令官、駆逐艦って何をするかご存知ですか?」

「え、い、いや……?」

「小さい艦ですが、速さを活かして護衛や攪乱をするんですよ!」

鼻息荒く、目を輝かせて語る吹雪。しかし、そうは言われても軍事に疎い青年にとって、駆逐艦と言われてもピンと来るものではない。

が、吹雪はなおも青年に迫る。

「ですから私、司令官をお守りしますね!」

「……どうして僕にこだわるの?」

「司令官だからですよ!」

「もう少し詳しくお願いできるかな? どうして僕が……司令官なの?」

「それは……わかりません!」

ニツコリと応える吹雪。そんな笑顔でキツパリと返されても困るのだが、と青年は頬を引きつらせるも、必死に頭を回転させた。

会話が噛み合っているようでやはりどこも噛み合っていない。まるで刷子込みでもされているかのようなのである。

ただ――

「だから絶対、司令官と一緒に戦います!」

この言葉だけは。自身を守りたいという少女の気持ちだけは、動機はわからないものの理解はできる。

とりあえず今はそれだけわかればいいのか、と青年は渋々頷いた。

「司令官、私は司令官をまも――」

と、吹雪が青年の手を取る。

突然手が触れ合ったことに慌てる青年。しかし、その手が重なった瞬間――

吹雪は、目の前から消えていた。

005 艦娘の出撃

(えっ……?)

動揺さえも自覚せず、青年は瞬きを繰り返した。
吹雪が消えた代わりに、手元には一枚の——カードのようなもの。
そして——

(なんだ……これ)

頭の中に流れ込んでくる膨大な情報。戦いの映像が螺旋を描いて、フラッシュバックするかのごとく脳裏に焼き付いた。

特型駆逐艦、第四艦隊事件、太平洋戦争、第十一駆逐隊、鼠輸送、サボ島沖海戦、アイアンボトムサウンド……。

響く轟音、宵闇の海、冷たい水、遠くなる光……。

これが吹雪の戦争なのか、と理解する。この記憶は吹雪の記憶、そして戦争の記憶だろう、と。

世界最先端の駆逐艦として生まれ、開発当初は駆逐艦としては異常な性能を誇る。

開戦時には既に旧式であったものの、同型艦の活躍も目覚しく……。

「カミツレさん、何が起きたんですか!？」

「……あ、え……さなちゃん?」

「しっかりしてください! 今何をしたんですか!」

「あ、れ、吹雪ちゃん……吹雪、は?」

頭の中に溢れる情報に埋もれながらも、青年は早苗の声にふと我にかえる。

「今、何が起きたの?」

「カミツレさんに触った吹雪ちゃんが、突然そのカードに変わったんです」

未だに続く情報の流入。それに意識を傾けながら、早苗の声を聞く。

もう一度、手元のカードを見た。左上に『駆逐』、左下には『吹雪』と書かれ、中央に吹雪が写っているカード。

早苗も事態に慌てているのか、神奈子にその焦った表情を向ける。

「神奈子様、これは……」

「ああ。さつき諏訪子も言っていたが、どうやらカミツレには早苗の奇跡が起きたとみて間違いないだろうね」

「奇跡……?」

『能力』に目覚めたんだろうさ」

能力。一般的には個人個人の技能や習熟度を指すことが多いが、おそらく神奈子の言う能力とは、漫画のような特殊な能力。

無論、青年も自身が幽霊をよく見る体質であることは十分に理解している。

それを能力と呼ぶのであればそれは構わないが、これ以上面倒事を増やすことは青年にとって望むことではない。

「能力……ですか」

「断定はできない。おそらく、吹雪に関わるものだろうけど」

そんなことが聞きたいのではない、と青年は心の中で一人ぼやく。

厄介事などもう沢山であった。いかに吹雪という少女が真っ直ぐであろうと、戦争に関わる記憶から生み出された魂である。

ようやく孤児院から解放されて、第二の人生を見据えていたというのに、再び面倒なことを抱えることなど青年には御免であった。

だから、先程の紫の言葉が突き刺さる。

『あなたは外の世界に戻りたいのかしら?』

わからない。

正直であればいいのなら、戻る必要はある。仕事も休みを取っているだけであり、孤児院から帰れば再び仕事に赴かねばならない。

やっと見つけた、孤児院以外の安息の地。例え同僚や他の従業員から不気味に思われようと、仕事となれば割り切る者も多い。かつての孤児院に比べれば、明らかに過ごしやすい環境であったのだ。

これといった趣味もなく、浪費グセもなかったために高給は望んでいない。かといって、愛着があるかと言われれば、こと人間関係においてはそんなものはない。その愛着だけで言うのであれば、生まれ育った街の方が上かも知れない。

加えて、外の世界にはまだ、やり残したこともある。

(あんな院長でも……約束したから)

孤児院への最後の仕送り。これを済まさねば、青年は孤児院に永遠に囚われることになる。

不器用なことは青年自身理解している。幻想郷というこの世界に留まるならば支払う必要がないことも知っている。

それでも、青年の中の理性とでもいべき形容しがたい何かをそれを拒むのだ。

幻想郷に留まるとしても、右も左もわからない。この世界でどのように生きていくべきか、またどのように人と接していくべきかなどまるで想像もつかない。

加えて、謎の能力ときている。このまま留まるのであれば、その能力とやらに付き合っていかねばならないことは間違いないだろう。

外の世界に戻る必要がある。だが、残っても良い。

外の世界に戻る必要はない。しかし、とどまる必要もない。

不器用で優柔不断で、そんな自分が情けなくて、腹立たしくて——嫌いだ。

考え込んでいた青年に対し、紫は思い出したかのように胸元から何かを取り出す。

「そういえば、私もそれと似たものを持っているわ。あの海の化物を10体ほど倒したのだけれど、その時に海に浮かんでいたわね」

そう言われ、青年が渡されたのは4枚のカード。それぞれ駆逐と書かれており、叢雲、漣、電、五月雨と表記されている。今の吹雪と同じような状態なのだろう。

そして、触れたときは吹雪と同様、各少女の記憶とも言うべき情報が青年の頭の中に流れ込んでくるのだ。

いずれも、最後は冷たい水と暗い空間に沈んでいくものであったの

だが。

「そのカード、幻想郷で扱っている『スペルカード』に少し似ているのよ」

耳慣れない言葉である。青年は眉をひそめた。

「カミツレさん。貴方の目の前で、私が光の球を沢山操っていたのは見ていたわよね？」

「え、ええ。それはもちろんです」

「それで、その光の球、それに限らずあらゆるものを並べ、閉じ込めたものがこのカードになるの」

そういつて、紫が更に胸元から取り出したのは真っ白なカード。

しかし青年にはどこか不思議な感覚を覚える。幽霊が見えるという体質がそれを感じさせるのか、確かに吹雪たちのカードに似た雰囲気は感じられる。

「まずカードに閉じ込めるといふ発想がよくわからないんですが」

「あら、幻想郷で常識に囚われてはいけないわ」

「……ではその通りだとして、このカードにはやはりこの子たちが封じられているという認識でいいんですね？」

「ええ、その通りよ」

（うーん、虐待かな？）

いかに思念の集合体とはいえ、5人も少女の形をとっている。封じられているという話が本当ならば、あまり青年もいい気分にはなれない。

青年にとってこの少女たちをどう見るか。厄介事の塊とか、ただの少女なのか。その答えも、簡単には出せないだろう。

「スペルカードというのは、カードそのものには力はないわ。でも、概念的な武器というか、象徴ではあるわね」

「象徴？」

「人それぞれ違うけれど、共通点がある。カードによる力は、その人自身の力が具現化したものであるということ」

「僕はこの子達と何のつながりもないんですが。というよりこの子達が僕の力って、おかしくはないですか？」

「そこはほら、さつき話していたじゃない。吹雪さんに触れてスペルカードのような状態になったとすれば、それが貴方の能力ということではないの?」

紫は青年の瞳を見つめ、一度目を伏せる。そこから口を開き、語りだす。

「幻想郷というのは、この守矢神社のように外の世界で忘れ去られたものが流れ着いてくる世界。その子達もおそらく、外の世界で忘れ去られたのではないかしら」

「……確かに、僕のいた世界に、旧軍について本当によく理解している人はおそらく相当少ないでしょう。それこそ、一般人の中では忘れ去られたといっても過言ではないかもしれませんが。僕なんて授業で習った以外は全く知りませんし」

「そう、忘れ去られた魂が流れ着く。それとね、幻想郷には、今まで海なんてなかったのよ。海が突然現れたのも、守矢神社が来るほんの少し前」

「……あれだけ綺麗な海、というのは外の世界では珍しいです。美しい海も忘れ去られ、幻想郷に流れ着いたというんですか?」

だとすれば、あまりにも寂しいではないか。結果や形、風評はどうあれ、彼女たちが守ろうとしたものの一つが、外の世界から失われてしまっていたなど。

「そうかもしれないわね。私も幻想郷に海があればいいとは思っていたけれど、こんな形で来るなんて予想外だったわ」

「こんな形、というのはあの怪物のこと……まさかあれも……!」

「海と一緒に流れ着いたのでしょね。そしておそらく、そのカードの子達も」

だんだんと何かがつながっていく気がした。

美しい海、現れる怪物、自分を慕う少女。カードに触れた瞬間に流れ込んでくる艦の記憶、そして、拾い物の航空母艦の写真。

「さつき吹雪ちゃんに触れた時、僕の中に何か記憶のようなものが流れ込んできたんです。他のカードの子も……」

守矢神社の存在していた土地に縁のある名前の、不思議な力が宿つ

ている航空母艦の写真。それを持っていた青年に対して早苗が奇跡の能力を発動した結果、青年に何らかの能力が目覚めた。

少女の形をした軍艦の魂が現れ、それは青年を司令官と呼ぶ。つまり、ここから考えられることは――

「軍艦の……記憶？ を読み取る能力があるとしても言いたいんですか？」

「指揮命令系統があるのでしよう？ なら、ひとまずは……そうね。『艦娘を指揮する程度の能力』とでも言いましようか」

誰がそんなものを欲しいと願ったのだ。なんて、僅かにでも思った自身に洩い表情を浮かべる。あの時吹雪が現れなければ、今頃自身は生きていなかっただろう。

いつそ、あの時死んでいた方が、全ての煩わしさから解放されていたかもしれない。死にたがりではないが、無理に生きたいと思うほど己に期待してもいない。

たとえ。

たとえ早苗に再会した今でも、だ。

突如として、紫が天井を向く。いや、天井ではなくただ上を見上げただけ、とでも言うべきだろうか。その眼差しには冷徹さも含まれている。

「藍から悪い知らせよ、どうやらまた来たようね。丁度いいからカミツレさん、その子達が本当に軍艦の魂であるか、確認してみないかしら？」

「また怪物……。あの子達を戦わせる、と？」

「軍艦は戦ってこそその存在でしょう？ 戦わなくて済むならそれはいいのだけれど、そうもいかないのが今の幻想郷なのよ。特に海の方面はね」

「軍艦かもしれないですけど、カードを見る限りは女の子です」

「私もオンナノコなだけど？」

「……ああ、はいそーですね」

色っぽく、唇に指を当ててウインクする紫。仕草こそ大変素敵であるが、怪物を圧倒していたことを忘れてはならない。

「でも空を飛ぶなんて反則じゃ……」

「飛べるのは海岸線までよ。しかも敵は、口の中から金属の塊みたいなのを飛ばしてくるわ」

「危ないですね。尚更」

「とりあえず吹雪さんと呼んでもらえる？」

吹雪のカードを手に持つ。が、呼ぶとは一体どうすればいいのだろうか。紫を含め期待のこもった瞳を注がれるのはまだいいのだが、せめて使い方ぐらい教えてくれてもいいだろうに。

なんてことを考えながら、吹雪の姿を思い浮かべると――

「お疲れ様です、司令官」

突然輝きだしたカードに驚き、青年は手を離してしまう。

しかし次の瞬間には、目の前に吹雪が立っていたのである。

「し、司令……官？」

返事をしない青年を心配したのか、吹雪が顔を覗き込むように見つめる。

青年はカードがどういったものかようやく理解し、吹雪の声に気づいた。

「あ、ああ、えつと吹雪……ちゃん。さっきの怪物は覚えてる？」

「はい！ あのとぐらいなら何度でも戦えます！」

したり顔の紫を尻目に、違う質問を青年は行う。

「あの装備があれば、海の上を立ったまま進めるんだよね？」

「はい、私は軍艦ですから！」

「腕に付けてたあれは……大砲？」

「もちろんですよ！」

「怪物から金属の塊？ が飛んでくるみたいだけど……」

「私たちには装甲があるから大丈夫です！」

聞き捨てならないことを聞いた気がする、と青年は冷や汗を垂らす。

「えつと、どういうことかな？」

「背中に背負っていた機装です。あれは靴のスクリューを動かすのは別に、様々な衝撃を緩和する機能が付いているんです。これが装甲

ですよ！ ……私のは薄いですけど」

詳しい話を聞く限りでは、背中に背負っている軍艦としての装備、艦装を装備することで、主砲・魚雷・機関・装甲といった各機能を稼働させることが可能となるらしい。

その装甲というのはいわゆる『バリア』に近く、吹雪の場合は完全に弾き返すことはなかなか難しいが、それでも大抵の衝撃を緩和することはできるとのことである。

声も上げられない青年。

神奈子や諏訪子、紫は吹雪の説明を理解したようだが、青年はこの中ではあくまで一般人。わからないことの方が圧倒的に多い。

「ねえ、カミツレさん？ 驚いているのはわかるけれど、とりあえず化物が現れた場所へ向かってみないかしら？」

「……そうですね」

実際に見た方が早いだろうと思い、青年は頷く。自身の目で見るのならば、まだ信じられるだろう。

女性は想像していたよりずっと強いんだなあと、呑気ながら改めて青年は気づくことになったのであった。

抜けるような青空に、心地の良い波の音が響くサラサラとした砂浜。

空も海も、それぞれ同じ青でありながら異なる青。水平線で変化する景色は、青年が最も好むものであった。

触れる潮風がなんとも心地よく、この砂浜に倒れ伏すことさえ厭わないだろう。

——遠目に彼の怪物さえ見えなければ。

「いるみたいですね」

「一体だけではないわよ。他にも数体見えるわ」

「……僕にはそこまで見えませんよ」

青年の目には黒いものが点々と海の上に浮かんでいるのが見えるだけである。

しっかりと視認できている早苗といい紫といい、原住民もびっくりの視力を持っているらしい。否、紫は幻想郷では原住民のオンナノコであった。

「じゃあ、今回は吹雪ちゃんたちに任せるということでいいんですね？」

「ええ。私も全て確信しているわけではないけど。あと、彼女たちの働き次第で貴方の処遇も大きく変わるわ」

「……どうなつても知りませんよ」

海に来るまでの間に、話はつけられていた。

紫の観察眼によると、吹雪たち艦魂が怪物に対する非常に有効な戦力になるのではないかという結論が出ているらしい。早計ではないかとも思うが、吹雪が怪物を倒した姿は、他ならぬ青年が一番間近で見ているのだ。可能性としては十分に考えられる。

「一つ、聞きたいことがあります」

「あら、何かしら？」

「幻想郷は全てを受け入れる場所と言いましたよね？ 神社の皆さんを受け入れたように、彼らは受け入れることはしないのですか？」

「いい質問ね。そう、私も最初は対話を試みようとしたわよ？」

「……で、攻撃されたと？」

「話を通じないというより、話ができないといいましたよ。彼らは言語を使用できないみたいなのよ」

「それで問答無用で鉄の塊を飛ばして、海の中に引きずり込んでくるんですか。まあ、確かにそれは危ないですね」

「でしょう？ 私みたいな〃か弱い乙女〃が怪我したら大変なのよ」

「……ああ、はいそーですね」

「〃か弱い乙女〃を守るために頑張って頂戴。〃か弱い乙女〃のために」

妖艶に微笑む紫に、青年は苦笑しながら目を逸らす。

神社の中で話をしていた時から、青年はこの紫という人物を苦手としていた。

果てしない美貌、彫像の如き整った顔立ち。それは確かに認めてい

るが、どこか心を見透かされているような、全ての行動が監視されているような気がして油断できないのだ。

「今のところは幻想郷にとつての敵ね。海岸線も長くて監視しきれないからどこも危険だし、目的が不明で暴力的な方に土を踏ませるわけには行かないわ」

「幻想郷がどんなどころかは知りませんが、ひとまずそのように理解しておきます」

「幻想郷の住民任せでもいいでしょうけど、彼らを上陸させたら嫌な予感がするのよ。これは私の独断だから、責任は全て私に被せなさいね」

「まるで幻想郷の管理人のようですね」

「それは勿論よ。伊達に長くは生きていないわ」

「……じゃあ、長生きな『か弱い乙女』の八雲さんが言うとおりにすればいいんです……よね?」

「カミツレさんも中々酷いわねえ」

頬をぷくうつと膨らませる紫を尻目に、青年は海に浮かぶ怪物に目を向ける。

青年の外の世界での仕事は、自然好きが高じた『海洋調査員』。その中でも実際に海中での作業を行うための潜水士の資格を有している。

もちろん、視界に入っている怪物は今までに見たことなどない。凶鑑や資料などでもさっぱりである。

しかし、あえて彼らの姿形を今の知識で表現するならば。

(深海魚みたいだ。グロテスクで不格好で、だけど深海魚より気味が悪い)

青年が海洋調査員として働いていたのは3年間。

その間に得られる知識には当然限りがあるが、深海魚については潜っても一緒に泳げないのが悔しいという理由から一定の知識があった。

ただ、深海魚は水面に浮かんでも活発に動くことはできないし、水圧の差でその体に支障をきたす。そのため深海魚ではないだろう。

そして、紫や吹雪が倒した個体から流れ出していた体液——海水。

物体としての確かな質量を有していたにも関わらず、海に沈んだあとは海水に溶けていく場面を青年は見えていた。

深海魚のような怪物には実体があるようでない。これではまるで

(……断言はできないし、考えても仕方ないか)

早苗も神奈子も諏訪子も、とりあえず紫の意見を聞くことにしたようである。

が、神があまり神社から出るものではないと考えているのか、海についてきたのは早苗一人であった。

早苗と紫が背後で見ている中、青年は砂浜のギリギリまで近寄り、5枚のカードを手に持ち、呼吸を整えて目を瞑る。

彼女たちの記憶が、魂が、青年の心に流れ込む。

知らないはずなのに知っている。経験などありはしないのに、青年はその景色を知っている。

「なんだ……これ」

導符『初期艦』

——駆逐艦『吹雪』『叢雲』『漣』『電』『五月雨』

重ねた5枚のカードが輝き、青年は一瞬だけ視界を奪われる。

やっと見えるようになったかと思いき、瞬きを繰り返しながら青年は周囲を確認する。そしてそこに——海の上に彼女たちは立っていた。

「みんな、準備はいい?」

「あんたが司令官ね。ま、精々頑張りなさい!」

「綾波型駆逐艦『漣』です、ご主人様。こう書いてさざなみと読みます」

「電です。どうか、よろしくお願いいたします」

「五月雨っています! よろしくお願いします」

腕に主砲、足に特殊な靴と魚雷発射管、背中には煙突のようなものが生えたエンジンと思しき機械。そして、やる気満々の自信に溢れる表情。

「吹雪ちゃん、本当にいいんだね?」

「はい、私たちならあれを倒せます！」

「……怪我はしないように」

「任せてくださいー！」

あの怪物が何者なのか、誰にも何もわからない。

現時点で幻想郷に害あつて利を成さないものということであり、敵対の意思があるため反撃しないわけにもいかない。

そして、都合よく現れた青年と、青年を守るように現れた軍艦の魂。これは果たして偶然だろうか、と紫は考えているらしい。

青年は別に戦いたいわけでも、幻想郷を守りたいわけでもない。かと言って、右も左もわからない状況で自分の意思を示すには、青年の心は弱すぎた。

外の世界に帰りたいか、それとも留まるかなど、まだ判断することはできない。

だから、今自分が最も望んでいることは何なのだろうか、ひとまずどうしたいのか、と自分自身に問いかけるのだ。

自分自身が今どこに在るのか、見失わないために。

(……それにしても、幻想郷の海ってホントに綺麗だ。外の世界の海とは比べ物にならないや)

「怪物のいない……青い景色見てみたいなあ」

「えっ……っ？」

「あ、や、ご、ごめん……独り言」

「……いえ。司令官のお気持ち、確かに受け取りました！」

「えっ？」

青年自身が心を整理するために発した一言。そこから吹雪がどう受け取ったのかはわからないが、吹雪は今までで一番の笑顔を見せていた。

「司令官の最初のご命令、絶対に果たします！」

「あ、いや、命令とかじゃなくて——」

言葉を言い終えないうちにも、吹雪は既に他の少女たちに声をかけ、全員海の上で一列に並んだ。

それぞれが青年に対して敬礼をして、吹雪を先頭に沖合へと隊列を

維持したまま滑るように海の上を航りゆく。

「みんな、私についてきて——」

遠くで、吹雪の張り切った声が聞こえた気がした。その艦隊の出撃は、見る者全てを引きつけていたに違いない。

それほど。

惚れ惚れするほど——美しい航行であった。

「あの水平線に、勝利を刻みましょう！」

006 然るべき結び

青い空の下、吹雪は駆けるように群青の海を割って進んでいく。

自らを旗艦とした、駆逐艦5隻による編成。吹雪の背後には、縦列で同様に移動する4人の少女の姿があった。

「吹雪、敵艦捕捉よ。2体の駆逐艦を確認したわ」

「ありがとう、叢雲ちゃん」

「ねえ、どう戦うの？ 敵の火力も速力もわからないのに」

「数の上ではこちらが有利です。このまま陣形を維持しつつ、集中砲火で倒します！」

「わかったわ」

気の強そうな表情を浮かべる叢雲は唇を引き締め、その長い髪を潮風に揺らしながら頷く。

遠くに見える黒い怪物を睨みつけながら、吹雪は自身の上官であるカミツレとの会話を思い出していた。

『ですから私、司令官をお守りしますね！』

『えっと、どうして僕にこだわるの？』

砲火を交え、荒々しい波を越え、時には物資を運び、時には大型艦を護衛する。自身がどういった経歴を辿ったか、そんなものは理解している。

理解しているからこそ、吹雪は青年との距離を測りかねていた。

誤算だったのは、青年が自身の記憶を知ることが出来ること。

吹雪にとって、軍艦としての記憶は自身の生涯そのもの。しかし艦魂として時代を過ごす中で、自身らにどのような評価が下されたのかは知っている。

悔しかった。守りきれなかったことが。

嘆いた。国のためと戦いながらも、ただの犯罪者としての烙印を押されたことを。

無論、戦争の最中に望ましくない行動があったことは知っている。だが、守りたいという意思すら否定されたような気がして、吹雪は目を瞑って眠りについたのだ。

カミツレという青年に誤解を持たれたくはない。目覚めの形は自身が想像していたものとは大きくかけ離れていたが、この役目が変わることはない。

青年はおそらく、戦争について何も知らない。だから尚更、先入観からではなく正面から向き合って欲しいのだ。

人格を与えられ、まるで生まれ変わったような気分の今なら、自分がどういった艦であったかを伝えられると思うから。

吹雪が青年に従う理由。それは確かに、青年が持つ能力による部分もあるが、それは吹雪にとつて昔も今も変わらない。

しかし、従う理由として。否、守りたいと思う理由としてはもう一つ。

青年が吹雪の記憶を知ることが出来るように、吹雪もまた青年の記憶を知ることができる”のである。これは自身だけではなく、他の艦娘も同様。

その中身たるや、幽霊が見えるという理由による周囲からの白い視線、それをきつかけに始まる家庭内——孤児院内暴力、学校における他の生徒との遠い距離と、顔をしかめるものが多い。

戦時中ならばもつと悲惨な子供は沢山いた。しかし、時代を経て裕福になった世の中での出来事だ。少なくともいい顔はできない。何より、これもまた自身らが招いた未来の一つとして考えると、決して無視など出来るはずもなかった。

その中で一つだけ、優しい色をした記憶があった。それは、吹雪も会話したあの緑色の髪の少女、東風谷早苗との思い出。

子供時代に青年が唯一笑顔を見せた少女であり、神社で、山で、河で一緒に過ごす記憶は他の記憶とは明らかに一線を画していた。

中学を卒業後はアルバイトを始めた為に会わなくなり、その後は再び笑わなくなつたようだが、少なくとも青年の記憶の中では最も輝いているもの。

そして今、青年はその少女との再会を果たした。

(司令官は……もつと自分の気持ちに素直になつていいよね)

そう、吹雪は守りたいのだ。

青年に対するあらゆる悪意から、敵対心から、攻撃から。上下関係など関係なく、吹雪という少女としての願い。

今の自分は軍属であって軍属ではない。この行動は、青年を守りたいが故に。折角この身体を手に入れたのだから、自分の手の届く距離にあるものを守って何が悪いのか。

交戦距離まで近づいた吹雪たちは主砲を構え、その目つきを一層鋭くして怪物を見た。旗艦としての吹雪の指示にも、より気合が入る。

「みんな、対水上戦闘用意、最大船速！ 目標2隻、方位30度！ 主砲、撃ち方——」

青年の記憶を知ることができても、感情を知ることができない。そして、吹雪自身も少女のような人格しか持ち合わせておらず、小難しいことを考え続けるのも苦手だ。

だから、軍艦の魂である自分に出来ることは戦うこと。青年を害するモノと戦い、守ること。

守りたいものを守るために今度こそは、と吹雪は息をつく。

「始め！」

遠目に見える少女たちの背を見ながら、青年は不安とも焦燥ともとれない自身の心に揺さぶられていた。

送り出したはいいものの、距離が遠いために何も見えない。今こそ目覚めよ我が能力、などと恥ずかしいことを思ったとしても、見える景色は変わるはずもなかった。なんて融通の効かない能力だろう。

スイスイと水上を駆っていくのをただ見ているだけの自身に腹が立ちそうになるも、どの道何もできないことを知っているために、やりきれない気持ちで青年を襲う。

砂浜で立っていると、後ろにいた紫と早苗が青年の隣に近づき、同様に少女たちのいる方角を見ていた。

「……二人は何か見えるんですか？」

紫は顎に手を当てて目を細めており、何かを呟いているが聞き取ることはできない。代わりに、早苗が青年に対して口を開く。

「見えますよ。吹雪ちゃんたち、かなり優勢ですね」

「誰かが怪我をしているとかは？」

「えっと、話していた通り、飛んできた鉄の塊——どうやら砲弾ですね。砲弾が体に当たるより前に、障壁のようなものがそれを弾いています」

「……ならよかった」

懸念していた一つの事項。少女たちが怪我をするのではないかという不安はひとまず解消された。

いくら幽霊だろうが軍艦だろうが、見た目少女の彼女たちが傷つくところなどは青年も見たくはない。

「ねえ、カミツレさん」

「ん、何？」

唐突に、早苗が青年に対して向き直る。改まってどうしたのかと青年も不思議に思うが、青年も海を気にしながら早苗に向き直る。

「今話すべきことではないかもしれませんが、さっき、吹雪ちゃんと話していた時に、『孤児院』と言っていましたよね。私、初めて聞きましたよ？」

「……………。ああ、うん……言ってなかった？」

「昔ですら聞いてません！ ……それで？」

「……言う必要はあるかな？」

「私は知りたいです」

何を聞かれるかと思えば、と青年は身構えていたのだが、自身の失言についてであることに頬をかく。

青年は早苗に孤児院育ちであることを話していない。もちろんそこでの暮らしも。あくまで近所の子供の一人のように接していた。

何かを聞かれてもはぐらかし、誤魔化し、名前以外のことを教えなかった。早苗が信用できないとか、嫌いだからとか、そういう問題ではなくて。

もつと単純で、教えるのが恥ずかしく、恥であり、己の情けない部

分を晒したくはなかったから。それは紛れもなく、友達に恥ずかしいところを見せたくないという気持ちがあったからこそそのものなのだ。

早苗は目を逸らし、寂しげな表情で吹雪たちのいる方向を見た。

「カミツレさん……幻想郷に残らないつもりですか？」

「……どうしてそう思う？」

「カミツレさんつてもものぐさですからね。面倒事からは逃げようと思いますし。……神社に来なかったのは、私のことが鬱陶しかったからなんですか？」

「……それは絶対に違うよ」

「なら……良かったです」

心底安堵した、といった風に早苗は口元を緩めた。何か憑き物が落ちたかのような穏やかな表情であるが、それもすぐに元の顔へと変わる。

「そっか。幻想郷に残っても、カミツレさんには暮らす手段がないですわね」

「うん、そこはどうしようもないから、僕は戻るよ」

自身の中で、一応の区切りはつけておいた。それは、全ての出来事から目を逸らし、外の世界へ送ってもらおうこと。

残るとしても衣食住を満たすことは現状見通しがつかない。そして、残るとなれば面倒事のオンパレード。

ならば外の世界に戻り、夢を見たということにして元の生活に戻ったほうがストレスにはならない。ただでさえ面倒事の多い人生だというのに、それを避けようとして何が悪いというのか。

嫌なものからは逃げればいい。それが何であれ、自身の精神を一時は落ち着かせるのだから。

早苗はもう一度自身に視線を合わせようとする。しかし青年は、早苗と交代するように吹雪たちの方を向いた。自身の目では、何も見えないというのに。

「建前じゃないんですか？」

「怒るよ？」

「じゃあ例えば、神奈子様と諏訪子様を私が説得して、守矢神社に住ん

でいいということになればどうですか？ 住む場所と食べるものについては保証します」

「ただでお世話になるわけにはいかない。一人暮らしの方が気楽でいいし」

「家族のように過ごすのも楽しいですよ？」

「家族じゃないし、同意はできない」

「……もしかしてカミツレさん、孤児院暮らしが嫌だったんですか？」

「……どうしてそうなるの？」

「さしづめ、色々見える体質のせいであんな考えた方がいいんじゃないでしょうか？」

的確な推測に、青年は声を出すことを忘れてしまった。口をパクパクと鯉のように開いて閉じて、無表情を装おうとしても頬が引きつる。

自身の心に早苗がズカズカと乗り込んでくるのはいいのだ。今も昔も、それが早苗であり、それが心地よかったのだから。だが、静かな憤りを覚えるのはなぜだろうか。

それはおそらく——自分には「何も」なかったから。

「失礼なこと聞いてるってわかってる？」

「反論しないんですね」

「何が分かるのさ」

「私もいろいろ言われてきた身ですから」

「……………」

更に、驚愕。あれだけ笑顔を振りまいていた早苗が、まさか自分と同じような目に遭っていたと、どうして信じられよう。しかし、青年が否定しようとする事実を裏付けるような事実はすぐ傍にある。

東風谷早苗は守矢神社の巫女である。巫女は一般に神に仕える人のことを指し、大昔では神と対話することができるなどと言われている。

神と呼ばれる神奈子と諏訪子の為人を知り、そして早苗が巫女となれば、想像することは不可能ではない。

早苗もまた、色々と神妙不可思議な事象を認識することができるの

だと。

「ただ、私には神奈子様と諏訪子様がいました。学校では色々と言われましたけど、お二人が傍にいてくれたから私は今こうしていられます」

「……そっか」

「カミツレさんに、そういう人はいませんでしたか？」

「……いなかったよ。強いて挙げるならさなちゃん だった」

「え!? えっと、それは、その、お気持ち嬉しいですが」

支えてくれる人はいたろうか、と青年は自問自答する。孤児院で、学校で、自身を理解してくれる人はいたであろうか、と思いつつ、社交辞令のように話しかけてくる人はいた。しかし、自身を非難する

ために近づいたのではないかと追い払ったのは他ならぬ自分自身。高校に入学してからはそれまでより比較的人と話す機会は増えた。

しかし、アルバイトに追われ、人との付き合いを諦めていたために距離を置き始めたのは他ならぬ自分自身。

だがもしも、若き日の青年がまた違う選択をしていたならば。諦めることなく人との付き合いを求めていたならば。

また違う人生が、送れていたであろうか。

人との付き合いを求めていた、温かさを望んでいたことなど、神社で早苗と遊んでいたことを考えれば自明の理であるというのに。

「情けない人生送ってたんだなあ……」

「い、いきなりどうしたんですか？」

「いや、気にしないで。もしやり直せたなら、って考えてただけだから」

どれだけ考えても仕方のないことである。

人生の道筋は一つしかなく、仮にやり直したとしても、その時点の自分は同様の思考で同様の選択をするのだ。

孤児院の子供たちに罪はない。青年と同様に未熟であっただけなのだから。

院長にも罪はない。得体のしれない子供を正常に見ていられた
かっただけなのだから。

同世代にもはない。日々の中での安寧を求めるが故に、異常性を排
除しようとしただけなのだから。

なら、一体何が悪かったというのだろう。

彼らの醜い感情を呼び起こしたのは誰なのか。彼らの外側にいな
がら、彼らの中心にいたのは誰なのだろうか。放射状に伸びる影は、
きつと一つにはなりえなかったはずなのに。

自分自身に憤りを覚えるが、あとに残るのは虚しさだけ。

だから、人生をやり直したとしても、何が変わることはない。同じ
思いを抱き、同じ境遇を選択し、同じ時間を過ごす。

自分の人生に意味を求めるなど、そもそも間違いなのだから。

「あの、カミツレさん。やり直しはできませんし、私がカミツレさんの
痛みを共有することはできません。同じように、カミツレさんにも私
の苦しみはわからないと思います」

突如語りだす早苗に対し、青年はようやく早苗と瞳を交わし、訝し
げな表情を浮かべる。

「私が幻想郷に来たのは、神奈子様や諏訪子様が信仰を得て生きられ
るようにするため。もちろんそれもありますが、それだけではありま
せん」

「……それは？」

「私は私で、幻想郷に新しい人生を求めてやってきました」

「それ、建前じゃないの？」

「逃げるつもりはありません。私は私らしくあるために、ここで生き
ていきます」

強いな、と青年は目を伏せる。

少し不思議な少女だと思っていたが、それは最早思い出の中に消え
た。この目の前にいる少女は、少なくとも自分より余程しつかりして
いる。

「ですからね、カミツレさん」

早苗が青年の手を包み込むように両手でとる。突然のことに青年

も振り払おうとするが、早苗の真剣な眼差しにたじろぐ。

「あなたは——どうしますか?」

「……考えておくよ」

優しさを、そして慈愛を含んだその瞳から目を逸らし、青年は早苗の手を乱暴に振り解く。

早苗は少しだけ頬を膨らませていたが、青年の答えにとりあえず納得したようで目尻を下げていた。

「さて、そろそろいいかしら」

「わわわ、いたんですか八雲さん!」

「紫でいいわよ、守矢の巫女さん」

「てつきりいなものだとばかり思っていました」

「興味深い話が聞けたから、その失礼な物言いは許してあげる」

チラリと青年を見て紫は口角を上げ、早苗へと視線を戻す。

その一瞬の動作に、青年は恐怖に背筋を凍らせる。あれは何かを企んでいる人の目だ、と。

「あとで話はするけど、あれを見てちょうだい。どうやら増援みたいよ」

「え?」

青年は吹雪たちのいる方角へ目を向ける。すると、確かに先程より黒い点の数が増えているように見えた。

「たまらず、青年は紫に尋ねる。」

「ど、どうなっているんですか?」

「違う個体が現れたようね」

「ふ、吹雪ちゃん、吹雪たちは無事なんですか?」

「いくつかかすり傷のようなものがあるけれど、みんな無事みたいよ。ただ、敵の数が合わせて4体。多いわね」

紫の言葉に、青年は冷や汗を垂らす。今自分に何ができるのだろうか、と考えを張り巡らすばかり。

時刻は既に、夕暮れを迎えていた。

陣形が維持されているのを確認しながら、吹雪は指示を飛ばす。

「みんな、一旦距離をおくよ！」

「仕方ないわね」

叢雲が恨めしそうに怪物たちを睨みつけながら、吹雪のあとに続く。

吹雪たちは、当初発見された2体の怪物を倒すのには成功した。しかし、その後間を開けることなく新たに4体の怪物が現れたのである。

新たに現れた個体の中でも、一体だけ別の個体がいた。人のような上半身が這い出しているその背中に、タワーのように砲が積み重なる不気味な姿。

潮風を体全身に受け、水しぶきを上げながら針路を変更し、吹雪を先頭とした艦隊は怪物たちから距離を置く。

駆逐艦が誇るのは速度。凌波性に優れた特型が4人と、その二代後に設計された白露型が1人。どのような波であろうと、速度が落ちることはない。

「吹雪ちゃん、軽巡洋艦が1、駆逐艦が3なのです！」

「うん、わかった！」

小動物のように慌てる電の報告に吹雪は頷き、頭の中で作戦を考える始める。

あのような敵の姿でも、駆逐艦か軽巡洋艦かの区別くらいはついた。更に、駆逐艦の中でも個体によって型も違うようであるが、分類するほど余裕はない。

先ほどの駆逐艦級2体の時は戦力差から余裕をもって倒すことができた。しかし、今この状況では戦力差はほぼ拮抗状態。

相手は軽巡洋艦が1体と駆逐艦が3体。対してこちらは駆逐艦が5、まともに戦えば少なからず被害が出るだろう。

砲撃が互いに届かない距離まで離れたところで、吹雪は振り返っ

て様子を伺う。

(どうしよう。軽巡となると、装甲が厚いから砲撃が通らないかも) 全く通用しないわけではない。しかし、水雷戦のみを想定している駆逐艦に対して、砲撃戦もある程度はこなせる巡洋艦となれば分は悪い。

「吹雪ちゃん、どうするー？ これって結構やばいのね」

先程はヘラヘラと戦闘をしていた漣だが、その表情は転じて真面目なものになっていた。桃色の髪が揺れ、不安そうに喉を震わせる。

軽巡に対する場合、少なくとも、装甲が十分に貫けない以上は一方的に攻撃を受ける可能性が高い。敵の駆逐艦からの攻撃も、当たり所が悪ければ大きなダメージとなることも十分に考えられた。

「魚雷なら、軽巡洋艦だって倒せると思えます」

「問題はどうかやって近づくか、だね……」

そう、こんな状況でもハキハキとしている五月雨が士気を維持できているのは、ひとえに大ダメージを与えられるのは魚雷の存在がある故。問題は、魚雷の射程が主砲より短いことであるが――。

ふとそこで、吹雪は周りの景色に気が付く。空は茜色に染まり、沈みかけの太陽が海を橙に彩る。

夕方、である。

「吹雪ちゃん。日が沈むまであと30分なのです」

「うん！ 皆、相手が上陸しないように攻撃を引きつけて。攻撃は許可します。駆逐艦は優先的に狙って、砲撃戦で倒してください！」

主砲を持ち上げ、気合の入った言葉で陣形の向きを変更する。

「敵軽巡は『夜戦』で倒します！」

旗艦吹雪を先頭に、縦一列の単縦陣を敷く。

砲戦可能距離まで到達すると、吹雪が指示を再び飛ばした。

「方位330度、主砲撃ちー方始め！ 敵の攻撃に注意して！」

一斉に、5人の主砲が爆音とともに火を噴く。すぐさま次弾が装填され、再び主砲が発射された。潮の香りに混じり、火薬の匂いが髪を撫でる。

砲弾は敵に命中するものもあれば、弾かれるものや、その近くに落

ちるものもある。この砲撃により、怪物のうち一体が3発の砲弾を受けて海中に消えていった。

敵からも攻撃が行われる。駆逐艦からの攻撃が降り注ぐも、中たらないか、中たつたとしても展開される障壁によりダメージは緩和される。

だから、気をつけるべきは駆逐艦たちではなく――。

「軽巡の砲炎を確認したわ、約5秒後に着弾！」

「回避運動！」

叢雲からの報告に、吹雪は更に指示を飛ばす。

軍艦だった頃とは違い、今は人の形をとっている。加えて駆逐艦の機動性をもってすれば、回避することも十分可能だ。その分、自分たちも攻撃を命中させることが難しいのだが。

軽巡の砲撃が吹雪のすぐ傍に着弾する。自身が撃つ砲より口径の大きなものであり、命中した際のダメージは駆逐艦の比ではない。

装甲も、おそらく貫通されてしまうだろう。

「もう一体！ 照準を合わせて！」

再び、一斉射撃が行われる。砲弾は放物線を描き、一体の駆逐艦へと向かい、落ちていった。一つ、二つ、三つ、四つと着弾し、駆逐艦の怪物は海へ沈みゆく。

敵の半分を減らしたところで吹雪は一つ安心するが、その瞬間――。

「きゃあっ！」

軽巡洋艦からの砲撃が叢雲の障壁を貫徹し、その腰元を掠める。

掠めたとは言え、質量を持った高速の物体である。その衝撃は大きかったのか、叢雲は表情を歪めた。

安心している場合ではないと、吹雪は敵の様子を伺いながら叢雲に声をかける。

「叢雲ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫、至近弾よ！」

「他のみんなは？」

「わ、私が駆逐艦から一度だけ被弾したのです。でも、まだ戦えるので

す！」

「わかった！ 行くよ、みんな！」

被害が全く出ないとは思っていなかった。

しかし、こうして仲間が傷ついているのを見れば、戦闘を早く終わらせたいと考えるのも当然のこと。

陽が沈み、辺り一面が暗くなった。それと共に気温は下がり、肌寒くなる。しかし同時に、形成を覆すチャンスが、吹雪たちに訪れることとなった。

陣形を立て直し、吹雪は更に指示を飛ばす。

「これより夜戦を仕掛けます！ 敵からの攻撃には十分注意して！」

単縦陣を維持し、闇に紛れて敵へ向かって真っ直ぐ接近する。敵は先程叢雲への至近弾により生じた波飛沫で自分たちの姿を見失ったらしく、まだ気づいていないらしい。

「おもーかーじ30度、合図で攻撃します」

砲撃戦を行っていた距離の半分ほどの距離になった時、陣形を敵に対して横に向ける。

既に魚雷の射程内であるが、確実に命中させるために吹雪は静かに機を見計らった。

静寂により、緊迫感が増す。見計らっている中で、軽巡洋艦の怪物が振り向いた。そしてそれは、吹雪の視線と交差する。

憎悪と怨恨のこもった視線。それは、吹雪に恐怖を与えるどころか戦意を高揚させた。己の中の青年への感情が、ためらいなく爆発する。

「今です！ 酸素魚雷、一斉発射よ！」

艦隊から2体の怪物に対して、逃げ道を塞ぐように放射状に魚雷が発射された。そして吹雪は先頭となって、砲撃戦を行うために肉迫する。

軽巡洋艦の装甲は駆逐艦のそれより厚い。しかし、距離を詰めれば、装甲を抜けないわけではない。

そして、夜戦による奇襲。このチャンスを逃すほど——帝国海軍の水雷戦は温くない。

「目標軽巡、主砲撃ちー方始め!」

近い距離での砲撃はそれだけ命中性も高くなる。加えて、5人からの一斉砲撃により、軽巡洋艦は瞬く間に沈黙寸前となった。

吹雪は、無我夢中になって軽巡洋艦に対して砲撃を続ける中——。

「あうっ!」

軽巡洋艦の砲撃が、障壁を貫通して吹雪の頬を掠める。呆気に取られているところを、残っていた敵の駆逐艦に撃たれてしまった。

距離を近づけたということは、同様に敵の砲撃も攻撃性・命中性が高くなるということ。吹雪は駆逐艦級の砲撃を横腹に受け、痛みを歯を食い縛る。

やがて、魚雷が怪物2体に届き、水柱を上げて爆発した。鋭い光が辺りを包んだと思えば轟音が走り、2体の怪物は海の中へと音を立てて沈んでいく。

「あいったたた……」

「吹雪ちゃん、大丈夫!」

「吹雪ちゃん、怪我はないのです!」

「う、うん、大丈夫。結構痛かったけど」

漣と電に心配されるものの、吹雪は笑顔を繕った。

駆逐艦の装甲は特別に厚いわけではない。しかし、遠距離からの砲撃で運良く貫徹しなかったというだけで、吹雪自身に油断があったことは否めない。

だがひとまず、周囲の怪物は全て倒したと思っていだろう。叢雲と五月雨が警戒にあたっているが、特に心配はなさそうである。

(これで……司令官を守れたよね?)

脇腹を押さえて立ち上がり、吹雪は痛みをこらえながら思う。

幻想郷というこの地で、吹雪自身も不安は抱えていた。だが、海があるならば、少なくとも自分には何か価値があるのだろう、なんてぼんやり考える。

上官である青年がどのように考えているかなど知らない。ただ、幻想郷にいようと外の世界に戻ろうとも、吹雪の立場は変わらない。どのような選択を青年がしようとも、吹雪は受け入れる。そして、どのような選択をしようと、自分は青年を守るだけなのだから、と。

「ねー、吹雪ちゃん」

「どうしたの漣ちゃん、って、それ……」

これから帰投の号令をかけようかと思っていたところ、吹雪は漣に声をかけられる。よくよく見ると、その手には一枚のカードがあった。

「うん、多分私たちと同じ……」

「……わかった。私から司令官に渡しておくね」

そう言って、吹雪は漣からカードを受け取った。

敵だと思っていた怪物を倒し、カードが現れた。そしてそれは、青年が持つ能力によって実体化する自分たちと同じもの。

あの怪物は一体何なのか。その不安は、今この状況を見届けた5人全員が抱いているだろう。

カードを大切にポケットの中にしたまま吹雪は、拭いきれない疑問を表情に出すことはせずに、あくまで冷静に、旗艦として最後の指示を出した。

「どうやら終わったみたいよ」

「……皆は無事ですか？」

「2人、いえ、3人。いずれも軽いけがのようね」

気温は下がり、夜の海を写真のように月明かりが照らす。

夜になり、ますます見通しが悪くなった海においては、青年は最早遠目に姿を確認することすら困難となっていた。

紫や早苗は未だにその姿を確認できるので、その言葉から状

況を把握するしかない。青年には無事を祈るしかできなかつた。

「とても興味深いものを見ることができたわ。我儘に付き合ってもらって悪いわね」

「謝罪は彼女たちに。僕は何もしていません」

そう、青年は何もしていない。謎の能力によつて青年が実体化させた少女たちが、曖昧な命令を受け入れて戦っただけ。

そして、その結果彼女たちは怪我を負った。しかし責任を問うとすれば、提案を行った紫ではなく、見通しの甘い青年自身。

「なんで……僕にこんな能力があるんでしょう？」

「そちらの巫女の能力の結果ではなくて？」

紫の言葉に、青年は早苗を見る。別に恨めしいとか、憎いとか、そういうことではない。

ただ、なぜ自分で、そしてこの能力なのか。なぜこの能力を芽生えさせてしまったのが早苗なのか。

早苗を責めるつもりはないのに。責めることなどありえないのに、どうにもできないもどかしさが胸の中にわだかまる。

「カミツレさん、私は後悔はしていません」

「……仮に、僕が絶対に許さないと断つたとしても？」

「あなたを助けるためでした。押しつけと思つてもらつても構いません。滝壺に落としたのは私ですが、何の能力も持たないカミツレさんを一人で幻想郷に放り出すのは、不安の方が大きかつたんです」

早苗の言葉に頷ける部分もあるのだ。能力があつたからこそ、海に出てから怪物に殺されずに済んだ。それはまず間違いのないこと。いや、滝壺で死んでいた可能性もあるにはあるが。

「それは……確かにそうかもしれないね。ここは変な人ばかりだし」

「何か言つたかしら？」

「いいえ何も、〃か弱い乙女〃さん」

「ならいいのよ」

鋭い視線を送る紫をかわしつつ、青年は言葉を続ける。

「でも、そもそもさなちゃん僕を引っ張りこまなければそうなるこ

ともなかつたよね?」

「それは……本当に申し訳ないです」

「……まあ、僕が神社に行かなければ、写真を拾わなければっていうのもあるけどさ」

嫌味たらしく文句を垂れてしまったことを恥じ、青年は言葉を繕う。考えれば、こうなるまでの原因にも、それこそ奇跡のような偶然はいくつか重なっていたのだから。

例えば仕事先からわざわざ帰郷しなければ、例えば気まぐれに神社に行かなければ、例えば写真を拾わなければ、すぐに帰っていれば。

——早苗のことを思い出さなければ。

こうなることもまた、あり得なかつただろう。

「さなちゃんを責めても仕方ないから、別に気にしてないよ。事実、能力があつて吹雪ちゃん……吹雪が出てきたから助かつたわけだし」

「本当に私を憎いというなら、心の底から許せないというならどんな罰でも甘んじて受け入れます。しかしそうではないなら、その能力を——」

「彼女に感謝することね、カミツレさん?」

早苗の言葉を遮つて、紫が口を挟む。突然のことに青年は戸惑うが、首を傾げて紫に言葉を返す。

「感謝なんてずっとしてますよ? 子供の頃から」

「それとは別に、能力を与えられたことを感謝した方がいいわよ?」

あなたを外の世界に返すわけにはいかなくなったから」

「何を……?」

その言葉には、流石に青年も困惑する。早苗はどこか予想していたかのような表情を浮かべながら、紫を見ていた。

「カミツレさん、あなたに仕事をお願いしたいの」

「それが……僕の人生を左右することであつてもですか?」

「ええ、私も幻想郷の安全が関わっているから譲歩できないわ。あなたにお願ひしたいのは、ただ一つ」

幻想郷に残った場合のことを、青年も十分に考えていた。そして、突如現れた海と、海上で有効な戦力を持つ自身の価値とのことも。

紫の話を信じるのであれば、幻想郷では海についての情報がほとんどない。それは、海からやってくる怪物についても同じこと。

そして、紫曰く、海の上で空を飛ぶことはできない。となれば――

「この幻想郷を守ってくださいませんか？」

「……僕だけでは判断しかねます」

「外の世界に戻っても能力が消えるわけではないわよ？」

「わかっています」

「大役を任せるわけだし、可能な限りは協力をしてあげるわ。幻想郷に残るとしても、外の世界で別れを済ませる時間ぐらいあげるし？」

「その……それでも」

「一晩――。彼女たち」と、ゆっくり考えて頂戴」

青年の悩み所となっていた部分をスパSPAと切り捨てていく紫。そして、「彼女たち」と言って指した先には、ところどころ怪我を負った少女たちの姿が。

思わず駆け出し、靴やズボンが水に濡れることも厭わずに海の中へ。

しぶきを上げながら水上をスケートのように滑る彼女たちは、少女でありながら勇ましく、惚れ惚れするほど格好よく、そして可憐であった。

「吹雪、みんな……」

「司令官、作戦が完了しました！ 全員無事ですよ！」

怪我を負ったであろう脇腹を押さえながらも、笑顔で敬礼をする吹雪。その姿は見ていて痛々しいのに、吹雪本人はどこか誇らしげである。

「私たち、司令官をちゃんと守れました！」

自分を慕わないで欲しい。気にかけて欲しないで欲しい。優しい言葉をかけないで欲しい。甘えなど自分には許されないのだから、放ってお

いて欲しい。

少し前までは疎ましいときさえ思っていたのに。厄介事の元とすら考えていたというのに。

今は彼女たちの無事が、どうしてここまで嬉しく思えるのだろうか。

「ああ、みんな……おかえり」

それはきつと能力のせいであり、自身のせいではない。慕ってくる吹雪のせいであり、まとめて能力のせいだ。

目尻に小さく浮かぶ液体だとか、こみ上げてくる言いようのない感情だとか、そんなものも全て能力のせいなのである。

能力のせいに——違いないのだ。

艦娘たちが砂浜に揚陸し、落ち着いた頃。

吹雪は出発前とはどこか違う雰囲気を纏っていた。ずっと他人行儀であったのだが、どこか優しい雰囲気へと。

吹雪は敬礼を解き、青年へと近づいてポケットから何かを取り出す。

「司令官、新しい仲間が来たみたいですよ」

「新しい、仲間？」

差し出されたそれを受け取ると、青年は吹雪たちとは違う雰囲気をカードから感じ取る。

（軽巡洋艦、天龍？）

第十八戦隊、ウエーク島、珊瑚海海戦、第一次ソロモン海戦、第八艦隊、探照灯、第三次ソロモン海戦、潜水艦……。

流れてくる記憶。竣工当時は世界水準を軽く上回る性能を有していたものの、開戦時にはやはり旧式となっていた。

しかし、旧式ながらに激戦をくぐり抜け、一線で活躍したという軍艦。

その記憶を知った上でカードに写る眼帯の姿を見れば、青年は情けなくも恐怖を抱いてしまった。

恐る恐る、天龍という艦魂を実体化させるべくその姿を思い浮かべ

る。

もしもいきなり襲いかかられたらどうしようか、などという不安を拭いきれないままであるが、青年は挨拶ぐらいしなればと天龍を実体化させた。

——5人の駆逐艦とは違う、少しだけ成長した体。より女性らしさが目立つスタイルとなっているが、最も特徴的なのはやはり眼帯だろう。

現れた時は目をつむっていた彼女だが、静かに目を見開くと、刀と思しき武器を肩に担ぎ不敵な笑みを浮かべた。

「オレの名は天龍。フッフ……怖いかな？」

キリツとした表情。しかし格好つけているのがまるわかりなその態度。気分としては、アウトローに憧れる中学生を見ているようで、恐るどころかどこか微笑ましくなってしまった。

「キヤー！ 天龍ちゃんすごい可愛いですね！」

「バツ、な、何言ってるんだよ！ ホ、ホラ、怖いだろう？」

「いや、ほら、その、まんじゅう怖いと同じレベルだね」

早苗の言葉に、天龍は頬を染めながら慌て、まるで子供のように自身をアピールする。その姿がまた、より精神的な幼さを強調するので思わず吹き出してしまった。

ふと、吹雪と目が合った。やはり、先程までとはどこか違う目で自分を見ており、柔らかく微笑むその姿はひとつの絵画のよう。

ただ、自身も吹雪たちに……幻想郷に対する意識が変わっていることに目を向けなければならぬ。

外の世界か、幻想郷かを選ぶために。

ひんやりとした夜、虫が粹な鳴き声で空気を振動させる。

守矢神社の本殿の一室において青年が布団を敷いていると、廊下から足音が聞こえた。振り返ってみれば、そこにいたのは諏訪子。

「そのままでもいいよ」

「すみません、部屋を貸してもらって」

「気にしないでいいって。部屋は余ってるし、もし幻想郷に残るなら、ここはそのまま君に貸してあげる」

「……それは」

「もちろん、条件はある」

何だろうか、と青年は首をひねる。無論、青年とてタダで部屋を融通してもらえとは思っていなかったし、そうするつもりなどない。

諏訪子はい草の香る部屋の中にとすつと座り、胡座をかきながら青年が布団を敷くのを眺め始める。

「早苗はさあ、小学校まではよおく笑う子だったんだよね。幽霊とかが見えるってことで周りから変な目で見られても、神社では笑った」

「……………」

「ただ、中学校に入ってから高校を卒業するついこの前まで、あんまり笑わなかったんだよね。笑ってもどこか無理したような笑い方だったし」

早苗との記憶を辿れば、確かによく笑っていた記憶しかない。

青年自身もまた、高校に入学してから6年間の間、まともに笑ったことがあるかと言えば、同様に記憶にないのだが。

「原因は君だよ?」

「僕は……お金を稼がないといけませんでした」

いい思い出のない孤児院といえど、衣食住の提供については青年も感謝していたのだ。しかし、早く孤児院を出ていきたいと思っていたのも事実。

だから青年は、一刻も早く孤児院との縁を切るためにアルバイトを

始めた。そしてその給料を、ほぼ全額を孤児院へ納めたのである。

そして、高校卒業後の仕事、内緒で取得した潜水士の資格を活かしての海洋調査員。三年間勤め上げたものの、孤児院に対する仕送りにより、手元に残るのは雀の涙。

6年間でおよそ800万円にもなる金額を、青年は孤児院へ渡した。

そして、院長と最後に出会った時において、青年は貯金の全額およそ200万円を送ることで、孤児院と完全に絶縁することを約束していた。

しかし、送るより前に幻想郷へと転移。そのため、院長との約束は未だに果たされていない。

「それは早苗よりも大切なこと?」

「……いえ、わかりません。でも、僕にとつてのけじめです」

「ふうん?」

「さなちゃんのこと。忘れるつもりはありませんでしたが、正直忘れかけてはいました。でも、会いたくなかったわけではありません」
「もし忘れてたなら、私は君のことを叱らないといけないけどね」

諏訪子は一瞬だけ冷徹な視線を青年に送るのだが、次の瞬間には優しい眼差しへと変わっていた。その慈しみ溢れる表情は、幼女らしい姿からは想像もつかないものであった。

「早苗はね、君のことをそれはよく話してくれてたんだよ。神社で面白い人を見つけたとか、その面白い人と一緒に遊んだ、とかね」

「お、面白い人ですか」

「で、その人が急に遊びに来てくれなくなっちゃって言うてから、みるみる元気がなくなっちゃったね」

「……僕もそりゃ寂しかったですよ」

年下であつたとはいえ、自分の理解者を失ったのは精神的な痛みを覚えたのは確かである。そしてそれは、おそらく似た境遇と言っていた早苗も同様だったのかもしれない。

「君が今日うちに来てからね、早苗がほんとに久しぶりにいい笑顔をを見せてくれたんだよ。『あれが以前話していたカミツレさんです

「！』って」

「そんなことで……あんなに笑って？」

「そう、それだけのことでね。だから神奈子とも話し合ったけど、幻想郷に残るなら、私たちから君に出す条件は1つだけ。〳早苗とこれからも仲良くして欲しい〳」

「つまり今まで通り、と。でもそれは、あまりにも条件としては優しすぎるんじゃない？」

「それだけ当たり前のこと——友達と過ごす時間っていうのを、早苗は無くしてたからね。君にとって、たったこれだけの条件がそんなに悪い話に見えるのかな？」

「それは……」

住まいと食事を提供してもらう代金としては、あまりにも安すぎる対価。

本当に早苗を大切にしているから、善意で言ってくれていることは理解に容易い。しかしそれでも、己の中に疑う心が芽生えることがどうしようもなく腹立たしい。

久しぶりに再会したのだ。話してみたいことはもちろんある。だが、それでいいのかと考えれば、どうしても不思議な部分は残る。

「あ、でもね」

「……はい？」

「〳また〳早苗を一人にすることがあるなら——私は問答無用で君を殺すぞ」

合点せざるを得ない。青年にとっては命のかかった条件であることを、今更ながらに理解することになった。

「まあ、あんまり気負わずにさ、ゆつくりしてくれればいいから。早苗とも今まで通り接してくれれば、私たちは何も言わないよ」

「……わかりました。お言葉に甘えさせてもらいます」

「洩矢諏訪子はクールに去るぜ」と不敵な笑みを浮かべて帽子のつばを下げ、諏訪子は部屋から離れて足音もなくどこかへ行ってしまう

た。

布団を敷き終わり、座り込んで天井を見上げる。眩い輝きを発する電灯に目を細めながら、青年はそのまま床に倒れこんだ。

(外の世界に戻るか、幻想郷に残るか、か)

頭元を探り、重ねられたカードに青年は手を伸ばした。その中から一枚を無作為に選び、その場に実体化させる。

「何だ……戦闘か？」

現れたのは天龍であった。ほんの少し前に合流した軽巡洋艦の艦魂。戦闘を好む性格のようであり、現れた途端にこの言葉である。

「違うよ。天龍……さん、事情は聞いてるよね？ 君はどうするべきだと思う？」

「提督よお。上官なんだから、俺たちのことは普通呼び捨てだぜ？」

ま、オレは戦えるならどっちでもいいんだよ。ただ、な……」

ニツコリと笑い、やる気十分な表情で言葉を告げた天龍。しかし、その言葉尻は徐々に声が小さくなる。

少し間を置いて、天龍は青年を見つめる。天龍は突然悲しそうな顔になってから涙を一滴こぼすと、涙声のまま言葉を紡いだ。

「オレは……アンタが、提督が、幸せ、に、なればそれで……う、うう」

「ちよ、どどど、どうしたの天龍!？」

「な、何でもない！ チビたちと約束したからな、俺は何も言わないぞ！」

その時点で、何かを隠していると白状しているようなものなのだが。

「え、えっと、幻想郷に残るのも外の世界に戻るのも僕に任せるってこと？」

「お、おう！ チビたちも同じ意見なんだぜ！」

「そうなの!? ずっとカードのままだったはずじゃ……」

「あ、え、いやその」

(ん、んん——?)

目を合わせない天龍の様子と、『チビたちと約束した』という言葉。訝しんだ青年は全員をその場に実体化させることにした。吹雪の様子を見れば、少しバツが悪そうな顔。他の艦娘たちも同様である。「んーと、吹雪。何か隠してるのかな？」

「い、いえ、司令官に隠すことなんて何もありません」

「じゃあ、その『司令官』っていうのとして聞くけど、本当にないの？」

「……す、すみません。実は……」

吹雪の慌てた顔を見ながら、青年はゆっくりとため息をつくのであつた。

「じゃあつまり、君たちも僕の記憶を見ることが出来るんだ？」

「うう、すみません。あと、カードの状態でも私たちは意思疎通できるんです」

「あー、なんだか恥ずかしいや。……つて、吹雪たちもそうだよね」

そう、この少女たちは青年の記憶を見て少なからずショックを受けており、更に人生の分岐路となる質問をされたためにあのような回答をしたらしい。

青年としてはその気遣いは嬉しいと思う一方で、自身の過去、それも恥ずかしいと思うような記憶をまるごと見られたのだ。

記憶を見るという点では青年も少女たちに対して可能なのだが、いざされてみればこのような気持ちになるのかと複雑になる。

ただし、答えた内容について嘘偽りはなく、あくまで青年自身の意思を尊重するというのは間違いないらしい。

「吹雪もみんなも、質問の回答としては天龍と同じなんだ？」

「は、はい、司令官が望むのであれば、私たちはそれについていくだけです」

「……君たちはどう思ってるの？ 自分たちのことが、外の世界の人には忘れられてるんだよ？ 僕の選択によっては、その……君たちに辛い思いをさせるかもしれない。いや、どっちを選んだとしても――」

」

「司令官」

ふわりと、包み込むような声が耳に届く。視線を向ければ、吹雪の柔らかな表情が心に平穏をもたらしてくれた。

「私たちの全てが過去に消えたとしても、司令官だけは覚えていてくれます。たとえ、それが早苗さんの能力によるものであっても、私たちは司令官と一緒にいたいんです」

「でもそれじゃ君たちが……。絶対、それは後悔——」

「私たちは艦娘として司令官に従う前に、司令官がご自分の人生を好きないように生きて欲しいって……。そう思ってますから」

その言葉に、全員が一斉に頷く。意思は固いのか、その視線に嘘などまるで感じられない。

だから、あとは青年次第。青年がどうしたいかを、決めるだけなのだ。

「——みんな、怪我もしてるんだから今日はもう休んで。結論は必ず出すから」

そうして、少女たちが強く頷いたのを見届けたあと、カードへと戻していく。

カードを揃えて置いた青年は、布団へと倒れ込んだ。

(自分がどうしたいかなんて、今まで考えたことなかったなあ)

あるとすれば、アルバイトを始めた時と就職先を選んだ時ぐらいだろうか。

海洋調査員の仕事は、孤児院からなるべく離れた土地で自然に関わりたいと思ったから。

自分の意志など必要のない人生を過ごしてきた。それは孤児院生活であれ学校生活であれ、ほとんど意味のない生活を過ごしてきたのと同義。

しかし、意思を放棄した人間は路傍の石にも劣る。いつまでも石ころではいられないのは、青年もよく理解していた。

(何の不安があるっていうんだ、一体)

だから、今日ここで選択をすることで、生まれ変わらなければならない。石ころのような人生から、人間の人生へと。

自分の、選択で。

早朝、澄み切った空気が胸を清浄する中、青年は境内でストレッチを行っていた。

境内の中に置いたままのスーツケースには様々なものが入っている。その中でジャージを見つけた青年は、軽く運動でもしようかと思いつき、外へ出た。

守矢神社のある場所は山頂。神社の敷地からなるべく出るなど言われていたため、青年は神社の敷地を回るようにジョギングを始める。

その途中で、外に出てきた起きがけらしい神奈子と目が合った。

「おはようございます、神奈子様」

「ん、カミツレか。ああそれと、諏訪子と同じく、私も様はつげなくていい」

「じゃあ、神奈子さんで」

「うん、おはよう」

そのまま横を通り抜けようとしたのだが、神奈子が手招きするため、青年はジョギングを中止し、神奈子の元へと近づいた。

「いやね、もうすぐあのスキマ妖怪が来るだろう？ どういう結果を出したのか気になってな」

「それは……その時のお楽しみということだ」

「ふふっ、そうかい。ああ、諏訪子から私たちの条件は聞いたかい？」

「ええ、もちろんです。でも、その条件は関係なく、僕が決めましたから」

「ほほう？ それは楽しみだ」

背中を叩かれ、青年は再びジョギングの続きへと移る。ニコニコとした神奈子の様子は、どこか恐怖と安心を感じさせる不思議なもので

あつた。

日が昇り、およそ午前9時頃。

境内において、神奈子と諏訪子が賽銭箱の前の石段に腰掛けて話し、早苗は鼻歌を歌いながら箒で落ち葉を集めている。

そんな中、境内の真ん中で待ちぼうけをくらっている青年は、首をかしげながら疑問の表情を浮かべていた。落ち葉の静かな香りが鼻をくすぐるが、それどころではない。

(あの人、朝の8時に来るって言ってたよな?)

既に1時間が経過しており、青年は時間を間違えただろうかと心配していた。そんな様子を見かねたのか、神奈子と諏訪子が手招きする。

「カミツレ、あんたもこっち来なつて。あんなババアほつとけばいい」
「カミツレ君こっちで座つとこうよー。掃除してる早苗の腋がよく見えるからさー」

「え、私つて、嘘?!」

とは言うものの、待ち合わせに座って待つのもどうかと青年も悩んでいた。いや、そもそも遅れている時点で座っても仕方ないのかもしれないが。

「カ、カミツレさん、座っていてください」

「いや、でも失礼になると思うし」

「いえ、そこで立っていると掃除の邪魔ですし……あと腋は見ないでくださいね」

「あ、えつと、ごめんなさい?」

照れた顔の早苗からやんわりと注意され、青年は大人しく石段に向かおうとした。

その時である。

「ごめんなさい、遅れたかしら?」

およそ1時間の遅れで、紫が到着した。寝ぼけ眼を擦りつつ、あくびをしながら境内の真ん中に突如現れる。

「いつ起きたんです?」

「つい10分前よ。私にしては早起きだと思うの。化粧もしないで出てきてしまったわ」

「いえ、もういいです」

「そんな、怒らないで、ね? ほら、可愛いポーズよ」

頬に人差し指をあて、ニツコリと微笑む紫。すっぴんのくせに化粧した時と全く顔が変わらず、しかもなまじ可愛らしいだけに、青年も頭を痛めながら怒る気をなくしてしまう。

大事な話をするというのに、これではまるで自分が馬鹿ではないかと青年も呆れてしまった。

「さて、それで、意思は決まったかしら?」

「はい。昨晚、布団に入ってから考え始めて、眠りにつくまでに考えた結論です」

「え、えつと、それってどうなの?」

「あ、それと僕、早寝早起きなんです。寝付きもいいですよ」

「……遅れてごめんなさい。って、それ期待していいのかしら?」

今度は紫が呆れと苦笑を織り交ぜた顔で、頬を引きつらせながら青年に答えた。

結論を考える上での条件を出すまでは長かった。しかし、早苗の気持ち、紫の頼み、神奈子と諏訪子の条件、そして艦娘の願いを考えれば——答えなど、自ずと決まっている。

ふとまわりを見れば、守矢神社の三人が緊張した面持ちで青年を見つめていた。

「なら、その結論を聞かせてもらいましょう」

「はい、僕は——」

6年ぶりに守矢神社に参拝してからのことを思い返す。早苗と再会し、神奈子や諏訪子と出会い、巻き込まれてこの幻想郷へ来てしまった。

白い狼の少女に追われ、滝壺から下流へ。紫に遭遇し、怪物に遭遇

し、吹雪が現れる。そして、新たに迎えた5人の軍艦の魂。情けない心根で暮らしていた頃に比べれば、夢のような時間であった。

人の視線に怯え、人の言動に震え、人の行動に竦む日々にならなければ、なんと非日常的でオカルティックな一日だったことか。

抑圧され、逃げ惑う日常に比べれば、なんと刺激的で生命をかけた一日だったことか。

しかし、夢は夢。現実を見なければ、人は前へ進むことはできない。現実を認識しない人間は、理想の反対方向へ全力疾走することしかできないのだ。

だから青年は、今まで理想を掴むことはできなかった。

「幻想郷で……暮らします」

ならば、現実を受け入れよう。夢から覚めて、目の前の現実が現実であると、理想などどこにもないと認識しよう。

幽霊のように臆気で姿のあやふやな理想を求めてはならない。現実に起きていることを現実として受け止めなければならぬ。

でも、幻想のような理想を抱いてもいい。叶えられない目標に手を伸ばしてもいい。

だが、矮小な現実には絶望はしない。自身の可能性も否定しない。定められたルールを敷くことなどもつてのほか。

一本道の人生であると諦めたくはない。やり直しができないと思いつく意味はない。路傍の石で満足することなど、自分自身で許せない。

他ならない自分の人生は、自分で決める。

「幻想郷で暮らします」

求められた助けに応じてみせよう。自身にその力があるならば最

善を尽くさねばなるまい。

良き縁を手離すな。悪しき縁は捨てろ。

一新の後に、新たな場へ向かうならば身を粉にして。

そう今——この瞬間までに。

至誠に悖るなかりしか。

言行に恥ずるなかりしか。

気力に缺るなかりしか。

努力に憾みなかりしか。

不精に亘るなかりしか。

「だって、ここは『僕』を受け入れてくれるみたいですから」

現実と付き合う時が来た。幻想郷は幻想ではないと。理想は遠い
ようで近きにあるらしい。

やり直しは——既にこの手の中だ。

「これからよろしくお願いします、皆さん」

面倒事も厄介事も全てを受け入れた心をもって、青年は勢いよくお
辞儀する。

静寂が境内を包む。誰も何も発しない。緊張感が伝う場には、虫の
鳴き声が響くだけ。

「いい返事をもらえて良かったわ」

そして、八雲紫がふんわりとした笑みで口を開く。

「了承してもらえなかったら、どんな手を使おうか考えていたところ
よ」

「……その候補には一体どんなものが」

「そうねえ、恐怖で支配するか、弱みを握るか、色仕掛けかしら」

「じ、実際に使われることがなくて安心です」

「私が帰さないと言ったから、留まることにしたのかしら？」

「いえ、違います」

「あら、嬉しいわね」

扇子を開き、紫は満面の笑みを浮かべていた。

その様子の一つ息をつくとき、次に話しかけてきたのは神奈子。

「じゃあ、私と諏訪子の脅しが原因かい？」

「……いえ、それも違いますよ。ていうより酷いですよあの条件。僕ときなちゃんが友人関係ってことを知ってるなら、あんなの帰るってことは問答無用で殺されるってことじゃないですか」

「そこまではしないが、ま、脅しだよ脅し」

バレてしまったか、と神奈子が高らかに笑い、諏訪子もニコニコと微笑んでいた。

それを尻目に見ている早苗が、箒を持ったまま青年に話しかける。

「あの……じゃあ、カミツレさん」

「うん、嵌められたのは腑に落ちないけど、これからお世話になります」

目を輝かせた早苗。そして朗らかに笑みを浮かべると、元気の良い快活な返事でもって答えてくれた。

「はい、私がお世話しますからー！」

ポケットにしまっている吹雪たちのカードをチラリと見る。カードに映る写真は変わらないはずなのに、どこか微笑んでいるようにも見えた。

外の世界での生活に別れを告げ、青年は幻想郷で生きていくことを決めた。

全てを受け入れるのが幻想郷ならば、自身はきつとやり直せる、人間らしい幸せを追い求めることができるはずであると。

与えられた条件など関係ない。自分が幻想郷がいいと思うから選

ぶのだ。

後悔が全くないかと聞かれれば、素直に頷くことはできないだろう。外の世界でのやり直しを図ることもできたのではないかという懸念は拭えない。

それでも、青年は幻想郷で生きていくことを決めた。そしてこれは逃げではなく、より現実を、より理想を、より幻想を求めたが故の小さな前進。

路傍の石は自我を持っていることを自覚し、ようやく動くことを覚えただのである。

紫が妖艶に微笑み、青年に向けて口を動かす。

その言葉を、青年はおそらく忘れはしないだろう。

「歓迎するわ。ようこそ、幻想郷の提督さん」

008 求めた理想郷

銀行を出た青年は、アスファルトの地面を踏みしめた。澄み渡る空の青さは幻想郷と変わるものではないが、車通りの騒がしさだけは、ここが今まで生きていた世界だということを教えてくれる。

歩き出して、数歩。肩元に紫のスキマが現れ、声のみが届いたため、青年は銀行の壁に背中を預けて携帯電話を耳にした。

「あら、それ電話？ 私とお話したいのかしら？」

「携帯もなしに喋ってたら、独り言を呟く変な人に見られますからね」「それで、もう終わったの？」

「ええ。振込はおしまい、残高は全て募金、口座も解約しました。財布にちよつと残ってるぐらいですね。紫さんは？」

「あなたの荷物、言われたものは全部守矢神社に運び込んでおいたわ。辞表とかいうのも、ちゃんと会社に置いてきたわよ」

「これで、もう僕は文なし職なしの男になってしまいました」

ははは、と乾いた笑いがこぼれる。幻想郷での未知の体験はまるで夢のようであったというのに、外の世界、今まで過ごしていた世界で何もかもを失ったことで、ようやく実感を得た。

ああ、自分は本当にこの世界からいなくなる——忘れ去られてしまふんだな、と。

フツと、視線を街中に移す。生まれ育ったこの山の中の街。就職する時、自分から街を出ようと思ったときは、何の気持ちも芽生えなかったというのに。

(どこかで……帰りたいのかかな)

名残惜しさが胸を刺す。己の空虚な心に甘えが残っていたのかもしれないとぼんやり考えるのだが、なぜ帰りたいのかなどわかるはずもない。あれだけ遠ざけようとしたふるさとであるというのに、もう二度とこの景色を見ることができないのだと思うと、ふと心に影がかかった。

だが、これでいい。

過去は消えないが、今になってようやく心の整理ができた気がする

から。

「ねえ」

守矢神社だけが消えた山を遠目に眺めていると、紫から声がかかり、

「今ならまだ、ここに残れるわよ」

スキマから、白地に桜模様という若者向けに作られたワンピースをまとった紫がヌツと現れた。肘まで伸びる白手袋が、紫の上品さを際立たせる。

妖艶でありながら明らかに服装とミスマッチであるその蠱惑的な体軀に、青年は表情を変えないまま携帯を取り落とす。

「うわキツ」

「は?」

「あ、いえ。紫さんにはもっと大人の魅力を感じさせる服のほうが似合いそうだなーと思ひまして。似合わないというわけではないですよ、うん、ええ、はい」

「あらそう。私としてはこれ以上なく似合ってると思ったけれど」

かつて、これほど殺気を感じた場面があっただろうか。薄目に微笑む紫であるが、その雰囲気は穏やかなものは感じられない。

冷や汗を滝のように流しながらも、青年は言葉を続けた。

「それで、さっきの話ですが……」

「幻想郷に連れて行くまでなら、まだここに残るチャンスぐらいあるわよ。これが最後の機会ね」

「全部の手続きが済んだあとでそれを言いますか……で、残ってもいいんです?」

「ダメに決まってるじゃない」

無茶苦茶だなど思いつつ、頬を引きつらせる青年。言動の整合性がその服装ぐらい取れていませんよと言えるだけの勇氣は、流石に持ち合わせていない。

色気たっぷりに微笑み、紫は唇に人差し指を当てる。

「生憎と残らせる気はないわ。カミツレさんはどうあっても幻想郷に連れて行く。もし残りたいなら、私をどうにかしてみなさい」

「どうにかって……例えば?」

「力づくでねじ伏せるとか、説得するとか? ん、愛の告白でもいいわよ?」

「は?」

「ここで一緒に暮らそう! なんて面と向かって言われたら、3秒ぐらいいは考えてあげてもいいわ」

「いえ、僕は遠慮しておきます」

「つれないわねえ」

ぶーたれる紫。そのまま背を向けて街中を歩き始めたので、青年はそのあとを同様についていく。

取り立てて目立つようなものは何もない。都会ではないが、とんでもない田舎でもないというこの風景。離れていたのは数年であるというのに、その数年でさえも変わるべく変わっていた部分は散見された。当たり前のことであるというのに、変わったのは自分だけではないらしいと今更気づく。

眺めながら歩いていけば、同様に街中を見渡していた紫が口を開いた。

「ここがカミツレさんたちの街なのねえ」

「ええ。いい思い出はそれほど多くありません、が……二度とこの景色を見ないととなるとやはり」

「ふうん? 良くない思い出って、例えば?」

紫が興味深そうに、首を傾げて自身の顔を覗き込んできた。動作の一つ一つがたまたまなく美しいというのに、なぜ服装はこうなのだろう。

良くない思い出など、指の数では足りないぐらい青年の記憶にある。その一つ一つがげんなりさせるほどには十分であるというのに、

『幽霊だと? いるわけがないものをまだ信じているのか!? 気持ち悪いから外でそんな話を絶対にしないでくれ! 孤児院の体裁が悪

くなるだろう！』

『どうしてお前を育てようと思っってしまったんだ……。ああ、不気味で仕方ない！』

『おい、今月の給料はまだか。育ての恩を忘れてるんじゃないだろうな？』

どうして今は、思い返しても涙の一つも出ないのだろう。

「そうですね……。例えば、子供の頃。家を追い出されたことがしばしばありました」

「ふむふむ」

「野垂れ死ぬわけにもいかないのです、サバイバル技術を身につけざるを得なくなったこととかでしようか」

「ふむふむ……ふむふむ？」

「食べられるものと食べられないものは学校の図書館で調べて、野生動物の捌き方とかも自分で考えましたねえ。あ、意外と虫っておいしいですよ？ 火起こしの方法はまず基本として、植物を使った寝床のつくり方とか雨のしのぎ方とか。流石に冬場の雪はキツかったです」

「た、たくましいのね……。アナタ、人里でも十分やっていけそうよ……」

なぜか、今度は紫が顔を引きつらせてしまった。虫の話がダメだったのだろうか？

「ち、ちなみに、そういった食材の中で一番美味しかったのは何かしら？」

「一番おいしいもの？ 蛇は淡白で味気ないし、蛙は鶏肉っぽくてなかなかイケますが……。個人的にはクモがチョコみたいで一番美味しかったですね」

「へっくしょい！」

「んだ、風邪かヤマメ？」

「いやー、誰か噂してるみたいでさー」

ちゃんと答えたというのに、紫の頬の引きつりが激しくなっていた。

虫がダメだなんて案外乙女なところあるんだな、なんて心にもない考えが浮かぶ前に、紫は一瞬のうちに街の景色に表情を変え、目を光らせて小走りをした。

足を止めて振り返ると、はしゃぐように紫がブンブンと手を振る。

(あれは……カフェか。何だかオシヤレなところだなあ……)

着飾ったり気取ったりすることに興味のない自分でも、店の外観やガラス越しに見える内装から、静かでありながらきらびやかな店であることがわかる。そして、

「んふーっ」

紫がこの店に入りたいのだろう、ということも。

「いらっしやいませ、2名様でよろしいですか？ こちらの席へどうぞ」

エプロンをつけた男性の店員に案内され、青年は紫と共に席につく。このような店に入るのは初めてであり、青年も緊張していたのだが、紫はまるで動じていない。

上品そうだし流石だな、と思う間におしぼりと水を出されたのだが、

「ありがとうございます」

「い、いえー」

紫の微笑みで、男性店員は顔を真っ赤にしてそそくさとカウンター裏に引っ込んでいった。

服装とのミスマッチもあるというのに、それでいいのだろうか。

「あー、極楽だわあ」

(おしぼりで顔拭くとか居酒屋のおっさんですか……しかも化粧落ちないってすっぴんかな?)

「あ、大将オーダーいいかしら?」

(ラーメン屋じゃないですよ? テーブルの目の前に呼び出しボタンあるのに)

「店員さん? 私こぶ茶一つね」

(カフェなのにこぶ茶!? ていうかメニューにそんなもの——あるし!?)

流星は幻想郷の民。

常識に囚われない行動は、悪い意味で感嘆ものである。自分のことではないというのに、早速恥ずかしい思いをしてしまった。

「え、えっと、彼氏さんは何になさいますか?」

「は?」

「やあね、彼氏じゃなくて旦那よ、店員さん♪」

「あ、し、失礼しました! 旦那様は何になさいますか?」

「……アイスコーヒー。とびきり冷たいやつをブラックで」

最後の最後まで、外の世界は散々な思い出に終わるらしい。

紫の表情は、イタズラが成功した子供のようであった。

顔を真っ赤にしながら店を出て、早足で歩みを進める。「ゆっくり歩いてよダーリン☆」なんて言葉が耳に届いたのだから仕方ない。

「やっぱり、外の世界の茶屋はいいわね。雰囲気もステキだし」

(全く……。まあ、最後の思い出としては悪くない……。かな? いや台無しな気も……。どの道こんなもんか)

時刻は夕方。今日の朝に幻想郷で暮らす決心をしたが、その気持ちに揺ぎはない。

自分を受け入れてくれる場所を、好きになろうとする努力をしたいと思っただから。

「紫さん」

「ええ」

歩みを止めて、振り返らぬまま紫の名を呼ぶ。帰ってきた返事は、ふざけた意味を含む声音などではなかった。

「幻想郷はいいところですか？」

彼女がため息をついたのが聞こえた。しかしそれは、呆れを混じえたものではないらしい。

「まあ、可愛い女の子は全世界共通よ。ほら、私とか」

「いえ、僕は遠慮しておきます」

「つれないわねえ」

ガツカリした紫の声を耳にした時、ふと、目の前にスキマが開く。そこから見える景色は、上空から見える幻想郷の全貌であった。

緑が織り成す絶景の数々。夕日がそれをオレンジ色に染めることで、人里と思しき村々が徐々にその活気を落ち着かせていく様子が目に見えてわかる。そして、オレンジ色に染まるのは空と大地だけではなく、少し前に幻想郷に現れたという海も同様であった。

「どうかしら？」

「綺麗です、とても」

「これが、私の守りたい景色よ。空気も綺麗だし、都会の喧騒もないし、人と人とのつながりが確かに残ってる場所。全ての者の理想郷……」

紫が隣に立ち、慈愛に満たされた表情でその景色を共に眺めた。

「あれが人里、あつちが魔法の森で、あそこが霧の湖。春には色んなところで桜が咲くし、もうすぐ紅葉が紅く染まるわ。季節によっていろんな顔を見せるのはこっちの世界と同じだけど、違うところは——」

「忘れ去られたモノの存在、妖怪と人間の共存、ですか」

「フフ……。あなたが守りたい景色は……これかしら？」

スキマが動き、守矢神社を俯瞰するように景色が移動する。そこに向つた先には——

「さなちゃんに、艦娘の皆……」

「私の守りたいもの、一緒に守ってくれる？」

「守るだなんておこがましいことは言えません。僕には力なんてなくて、本当に何もできなくて……何か行動をすれば神社や艦娘のみんなです」

「そうね。でも……」

スキマが閉じられて、紫が正面に立った。口元はシニカルに歪んでいながらも、瞳には力強さを感じさせて。

「いずれあなたも、戦う時は来るでしょう」

幻想郷の賢者は、迷いなどひと欠片も見せず、そう断言したのである。

お昼時。守矢神社の一室で、諏訪子は対面に座る神奈子と共に、腕を組みながら思考に耽っていた。

考えることは勿論沢山ある。これからの幻想郷での力を示す方法、信仰を得る方法、立場は、力関係は、神としての威厳は——どうすればいいのか。

「諏訪子、お前も何か悩んでいるようだな」

「うん、外の世界で楽しみにしてた漫画、結局途中までしか読めなかったから続きが気になって」

「お前はこんな時まで……全く」

苦笑する神奈子。だが、神奈子は気づいているのだろう。漫画のことを考えていたというわけではなく、考え込んでいたことを誤魔化すために漫画という話を持ち出したということ。

神奈子とも長い付き合いである。今更ムチャやワガママの千や二千ぐらいどうってことはないが、事が事であるだけに諏訪子も慎重にならざるを得ない。

「どうすんのさ。話には聞いてた幻想郷に来たのはいいけど、あんな怪物や艦娘のことなんて、私知らなかったよ?」

「私だって初めて知った。艦娘は早苗がカミツレに能力を与えたのだ

から、その点は我々としても何も言えんがな」

「カミツレ君かあ。巻き込んだのは普通にマズかったけど、今はこれで良かったのかな？」

「早苗のあんな笑顔なんて久方ぶりに見たからな。一度再会したというのに、また引き離すのでは早苗も可愛そうだ。まあ、しばらくは——」

「大人しくして、早苗のやりたいようにさせよっか。二人共積もる話があるだろうし」

百歩譲って、幻想郷に来ることを知らなかった——実際は自分が聞いていなかったただけなのだが、遷宮すること自体は認めるとしよう。だが、不確定要素であるあの青年は、神社に何をもたらしてくれるのだろうか。

実利の話ではない。影響の話だ。

早苗の唯一の友人であることは知っている。早苗が小さい頃からは耳にタコができるほど聞いてきたし、その性格や為人もよく知っている。

曰く、他人に興味がない。

曰く、自分自身にも興味がない。

(そのクセ、うちの早苗と心を許して許される関係になったなんてね。いや、6年たつてるけど、”今も” そうなのかな?)

ふと神奈子の様子を見れば、不安そうな面持ちの美貌と目が合った。

そう、何もあの青年を気にしているのは、早苗だけではない。

「神奈子、やっぱり嫌？」

「まあ……な。やはり、外の世界に残らせた方が良かったかもしれないぞ。いくら我々で目を届かせるといっても、カミツレ自身に戦う力なんてない。危ない妖怪もうろついていることだし、そういった意味では幻想郷の方が遥かに危険は多いんだ」

僅かに俯き、神奈子は寂しそうに笑う。

青年の育った環境は早苗からも聞いている。孤児院で育ち、幽霊が見えるということで気味悪がられ、家庭でも学校でも疎まれてきた。

しかし、本人には見えるのだから状況的には夕チが悪い。見える者にとつてはそれこそが現実であり、景色なのだから。

そんな街を嫌がって、他の街に行きたくなるというのも仕方のないことだろう。

「神奈子」

「……なんだ」

迷いが見られる神奈子の視線には、ほんの僅かな苛立ちが含まれていた。

「神奈子もさ、やりたいようにしてみたら？ 折角幻想郷に来たんだ

から、やりようなんていくらでもあるじゃん」

「いや、いくら幻想郷とはいえだな……」

「カミツレ君も大事にしないとね。だって、ここで暮らすんだよ？」

「しかし…… “巻き込まれた” カミツレを我々が面倒みようなど

……。あまりに無作法ではないか」

「尚更、だよ。カミツレ君のことを思うならね」

「いいのか……？」

「やだなあ、私だってここの神だよ？」

「……感謝する」

眼をパツチリ開きながらも、目元を潤ませる神奈子。その瞳を袖で拭ってやりながらも、諏訪子は「ただし」と付け加えた。

「早苗との条件が守られなかった時は——わかってるよね？」

「……………。わかってる、さ。我々は早苗が最優先だ」

「……………。ま、あとは好きにしたら？」

「個人的には、スキマ妖怪の手で外の世界に置き去られた方がどんなにいいか……。私は……どうしたらいいんだ」

「んー……とりあえず」

畳を踏みしめ、諏訪子はその場に立ち上がる。障子を開ければ、抜けるような青空が頭上に広がっていた。

振り返り、神奈子を見て一言。

「生活基盤整えよつか。私たちだって、カミツレ君にだけ構ってる余裕はないんだし」

力が落ちたからこそ、この幻想郷へ来た。

最初の目的を忘れない。ひどく現実的な提案を、諏訪子はしたのである。それはまごう事なく、守矢神社が幻想郷で生き延びていくために。

第一章 紅き狼

009 それぞれの幕開け

早朝、青年はストレッチを実施した後、ジョギングを行っていた。適度に体が温まったところで境内に戻り、石畳の上で上体起こし、腕立て伏せ、スクワット。

乱れた呼吸を整えつつ、冷たい石畳に座り込んだ。澄み渡った空気が、小鳥の鳴き声、風に揺れる木々の葉音が心地よい。

汗を腕で拭っていると、タオルが差し出される。差出人を見れば、そこには朗らかな笑顔を浮かべた緑色の髪の巫女。

「カミツレさん、どうぞ」

「あ、うん。ありがとう」

青年は早苗からタオルを受け取り、顔や首を丁寧に拭く。ほんのりという香りがしており、安らぎを覚えつつ気持ちいを落ち着かせた。

チラリと早苗を見れば、ニコニコとした笑顔を浮かべたままである。

「随分、機嫌が良さそうだね？」

「あ、わかりますか？ 幻想郷に来る時からいいことばかりでしたから」

「そっか……良かったね？」

「はいー」

汗を拭くフリをして、赤くなった顔を青年はタオルで隠す。ひよつとしたら勘違いかもしれないのだが、早苗の嬉しそうな眼差しを見れば、そうも思っていられない。

早苗は基本的に本心を隠すことはない。それは誰に対しても同じで、長所ではあるものの短所ともなる。

青年にとつてそれは、面倒なやり取りをする必要がないために歓迎すべきことではあるが、不意をついてくるのは勘弁してもらえないかなど切に願うのであった。

「洗濯しますので、そのタオルと今着ているものはカゴの中に入れて

おいてください。あと、ついでにお風呂で汗も流すといいですよ」

「あ、うん。ありがとう」

「お世話するって言いましたから。掃除した後で、一緒にご飯食べましょうね！」

早苗はそう言つて、箒を手に鼻歌を歌いながら掃除を再開した。それを見て、青年は一つ息をついてから神社とは別の建家の中へと入っていく。

幻想郷で暮らし始めてから2日が経過した。日々穏やかであり、これまでの苦勞が嘘であったかのように信じがたい、青年にとつて幸せな日々。

願わくば、何事もなくこんな日常が続かんことを。

廊下を歩いていると、料理の材料が入っているとされるザルを持った五月雨を見かけた。五月雨は青年に気づくと、ザルを左腕に抱えてその場で敬礼する。青年もぎこちないながら、五月雨へと答礼した。

「司令官さん。おはようございます！」

「おはよう、五月雨。朝食の用意かな？」

「はい！ もうすぐできますから、待つててくださいね！」

「うん、ありがとう。火傷や怪我には気をつけて」

「お任せ下さい！」

ペコリと頭を下げる五月雨。それと同時にザルも下げてしまったために、中に入っていた野菜が転がってしまった。微笑ましく思いながら、謝る五月雨と一緒にそれを拾う。

ペコペコと会釈しながら厨房へと去っていく五月雨。あの調子ではまた転ぶかもしれないな、などと思いつつも、青年は浴場へと向かった。

守矢神社は生活機能が充実している。青年はてつきり神社は神社の機能だけしかないものだと思いついていたのだが、本殿とは別に厨房であったり浴場であったりと、人が暮らすには十分な機能があった。

のだ。

ライフラインは外の世界と異なるため、初日は電気も水も止まっていた。しかし、諏訪子の手によって水が、神奈子の手によって電気が供給されるようになったために、一部は外の世界と変わらない水準で生活できる。

浴場の湯に至っては、神奈子が二日目にして温泉の湯を引いていた。どこで源泉を見つけたのかと尋ねれば、少し技術交流があっただけだ、と肝心なところは教えてもらえない。

が、青年からすれば、艦魂の子達の部屋を用意してもらえただけでも十分であった。

神様の力ってスゲー。

浴場の前に到着する。扉が閉まっているのを確認してから、青年は脱衣所をノックする。中からは、一人の少女の声が聞こえた。

「は、はい！ 現在吹雪、叢雲、電が入渠中です！」

「使ってたんだ、ごめん」

「司令官?! いえ、三人とももうすぐ入渠は終わります！」

慌てるような吹雪の声と、中でドタドタと走るような音。それを耳にしてから、急がせてしまったかなと青年は指で頬をかく。

神奈子が引っ張ってきた湯の効能として一つ。幽霊という存在である彼女たちを“癒す”効果が確認された。

吹雪から聞いた話では、彼女たちの怪我は放っておいて治るようなものではない。その説明を受けた際に、神奈子がもしやと入浴させたのである。

かといって、そのお湯に浸かれば直ぐに治るといようなものでもない。怪我の度合いによって治る速さは変わり、ゆっくり治っていくというのは人間となら変わりない。

その姿も人間の少女と変わりなく、人格があるところも感情を持つところも、むしろ人とどこが違うのかと目を疑いたくなるほどである。

彼女たちと自分の違いは一体何なのだろうか、と尋ねられれば、真っ先に答えられるのは幽霊と人間という点。それと、戦えるか戦え

ないかという点である。

しかし、それ以外。人間らしきとでもいうような部分については、すぐに答えられるようなものではない。まるで少女のように笑う少女たちを、どうして人格がないなどと否定できようか。

物思いに耽つていれば、慌て気味に脱衣所の扉が開かれる。

「司令官、お待たせして申し訳ありません！」

「いや、僕もタイミングが悪かったから反省してた。えっと、この前の怪我はもう治ったのかな？」

「はい。みんなかすった程度の損傷でしたので、問題ありません！」

ほんのりと熱を帯びた頬に、湯気をホカホカと全身から立ち昇らせている三人。まだしっとりしている髪と赤く染まった唇は、少女の姿ながらどこか妖艶さを感じさせる。

(見た目子供なのに、こんなに色気が……つて、いかんいかん)

ほんの僅かにでも抱いてしまった驚きの気持ちを振り払うように、青年は口を開いた。

「三人はこれからどうするの?」

「私たちも、厨房で朝ごはんを作るお手伝いをするのです」

「そっか。僕も後で向かうから、それまでお願いね」

「私たちがミスをするとしても言いたいなの?」

「ううん違う。どんな朝食が出るか楽しみだから、見に行くのと合わせてね」

「なら、食卓に並ぶまで待つていなさい。驚かせてあげるわ」

どこか優しさを感じさせる叢雲の言葉に、青年は少しだけ苦笑する。口元を押さええて、吹雪と電も微笑んでいた。

三人が厨房へ向かう背中を見送ってから、青年は脱衣所へと入る。

着替えは既に持ってきている。青年は靴下を脱ぎ、脱衣カゴの中へ丁寧に入れる。服を脱ぎながら、青年は吹雪たちと改めて相談した時の話を思い出していた。

『私たち艦娘がこれからもこの幻想郷で暮らしていくためには、まず“燃料”が必要となります』

燃料。軍艦にとって動くために必須であり、それなくして実体化することは困難、戦闘も不可能となる。

ただし、これは解決している。艦娘全員に食事を食べさせると、燃料として認識されたのだという。なんとということはない、ただの栄養摂取が彼女たちの原動力なのだろう。

幽霊がものを食べられることにも、食事で体力が回復することにも驚きではあったが、これからは艦娘と一緒に食事を取ることになったのである。

『それから、今の私たちのように、戦闘で傷ついた場合は“入渠”しなければなりません。ご命令とあらばそのままでも進撃しますが、一定以上の損傷を負えば十分に戦闘を行うことは難しくなります』

これについても問題はない。今のところ幻想郷に來た日以降に戦闘はないのだが、怪我をした場合は守矢神社の浴場で修理と同等の効果が得られるようになっていいる。

本来ならば“鋼材”が必要になるそうだが、湯に入るだけで問題ないという。彼女たちが装備する“艦装”が壊れた時は修理する際にそれも必要にはなるが、諏訪子が精製可能というのだから問題はない。

だが、残る最後の一つは解決できなかった。

『戦闘をする際には“弾薬”が必要です』

弾薬は予め必要となる。装備に憑く付喪神に弾薬を預けておき、付喪神と意思を交わしつつ武装を使用するのだという。

この弾薬だけは、青年もどうしようもできない。他の問題は勝手に解決されたために、せめて何か一つぐらいは、建前のようなものであろうと彼女らの上司として何かできないかと模索しているのだ。

結果は、全て空回りであったが。

(頼りない提督さんだよ、全く)

下着も全て脱ぎ、汗を流すために青年は丸裸となった。浴室に入ろうかと思つた時に大きな鏡が目に入り、鏡に映る自身の体を少しばかり見つめる。

(3年もまともに食べたから……流石に肉は人並みについたかな?)

ため息を一つ吐き、浴室の扉を開ける。

乾いたドアの音。視界を遮る湯煙の中を突き進み、青年は整頓されて置かれている洗面器を取り、湯を頭からかぶつた。

気持ちよさが全身を伝う。僅かばかりの間その快感を感じた後、青年は体を洗い始めた。

(もう外の世界には戻れないなあ)

身体をこする音が浴場に響く。

今更戻つたところで、路頭に迷うだけであることはありありと想像できる。後戻りができなくなった今時分、幻想郷で生きていくしかない。そしてもう、その思いに迷いもなかった。

今の自分に出来ることは、目の前の出来事を正面から受け止め、真摯に向き合うことなのだから

頭と全身を洗い終わり、青年は再び頭からお湯を被る。三度ほどかぶつた後、青年は――

浴場から出ようと、扉へ足を向けた。

「ま、待て待て！　ちゃんと湯船につかっけていけ！」

背後から聞こえた声は――神奈子のものではあつた。

一人だけで入浴していたと思つていたために、青年はその驚きの声に対して飛び上がるように驚いてしまった。

まるで機械のように、ぎこちない動きで首を後ろへ向けようとするも、

「わあああああ待てこっちを見るな！　そのまま動くんじゃない！」

神奈子の慌てた声に、青年は質の悪いロボットのよう首を正面に勢いよく向けて直立する。

が、青年とて疑問を抱かないわけではない。

「か、神奈子さん!? なんで神奈子さんがここに!? さつき吹雪に聞いたら駆逐の子達が3人だけという話でしたが!」

「朝風呂をしてたら彼女たちが入ってきて、仲が良さそうだから邪魔しないように気配を消してたんだよ!」

「そ、それで、出て行った後は僕が入ってきたと?」

「あ、ああ、そうだ!」

それは気まずいかもしれない。誰だって、自分が入浴中に異性が入ってくれば戸惑いもするだろう。

ところで、神奈子が自分の方を向いているとするなら、神奈子は自分の尻を凝視していることになるのだろうか、などと間抜けなことを考えるより先に、青年は疑問を口に出す。

「じゃ、じゃあ、どうして声をかけたんですか? 隠れられるならそのまま隠れておけばよかったんじゃない?」

「い、いや、それはカミツレがお湯に入ろうとしないから……」
「えつと……なんというか。風呂に入ろうとすると途端に体が震えてしまつて。ただの水は怖くないんですけど」

「怖い……? ……その身体のこと、早苗は知っているのか?」

「……言うつもりはありません」

「……わかつた、そういうことなら」

「助かります」

神奈子の指摘する青年の体。現在の状況は、扉に向かう青年と、それを湯船の中で背後から見ると見る神奈子。

その位置取りで神奈子から見えるのは、青年の背中。〃大小様々な傷〃、その多くが切り傷や内出血の痕であり、所々変色すらしていた。

「理由……聞くのはダメかい?」

「……聞いても、気分のいいものではないと思いますし」

「私がお前にしてやれることはないのか? なあ?」

「幻想郷に来れた事、それと守矢神社においてももらえることは、素直に嬉しいんです。身体も、〃今はもう〃痛みませんのでお気遣いなく」

孤児院から解放された、幻想郷へ来た今となつては、それら全ては

過去の出来事となった。

隠すつもりもない。だが、知られて余計な気苦労をかけるのは望まない。恥ずかしきもあるが、何より面倒。

今更早苗に知られれば、どうなるかぐらい青年でもわかる。あの優しい友人なら、今から孤児院を滅ぼしに行きましようなんて言いかけない。

だから、神奈子の深く立ち入らない対応に、青年は安堵の息を漏らした。

「そうか……なら、いつか話してくれ。で、どうしてお湯に浸からない？」

「神奈子さんがいるからです。混浴なんて嫌でしょう？」

「うっ、そ、そうだな。私も恥ずかしい——ではない！ さつきと言ってる事が違うだろう！」

「昔、同じ孤児院の子に気味悪がられて、一緒にお湯に浸かりたくないと言われたことがあります。で、院長から直々に『教育』されたんですよ。それだけです」

「教育……とは？」

「湯船に顔を沈めて溺れさせる。ね？ 子供がお風呂を怖がるようになるの、簡単でしょう？」

「……あいな」

神奈子の重いため息をついた音が青年の耳に入る。

「私は叱らないし、諏訪子も早苗も叱らない。叱るとすれば、カミツレがちやんと湯に浸からないことについてだ。身体の疲労も取れるんだぞ」

「……浸からないと怒られるんですか？」

「そうだ、怒ると怖いぞ？ 特に諏訪子が一番怖い。昨日天龍という艦娘が湯呑を割って叱られて涙目になっていたぐらいにはな」

「それは怖そうです」

「ああ。だから叱られたくなければ、ちやんと湯に入れ。いいな？」

「叱られるのは怖いですからね。……まあ、善処することにします」

満足そうに相槌を打つ神奈子の声が聞こえる。

「ところで」

「うん、どうした？」

青年は顔が暑くなってくるのを感じていた。ずっと湯気の中に晒され、全身が暑い。更には頭がボーッとできてきている。長時間浴場にいるという経験もそれほどない。

加えて、神奈子に長時間見られていることに気恥ずかしさは増すばかり。青年も一人の男児。裸を見られて羞恥心を感じないわけではない。特にお尻は恥ずかしい。

「そろそろ、限界なんで……ここから出ても——」

様々な感情が混ざりながら、言葉の途中で力が抜ける。世界がうねり、全身がタイルに打ち付けられるも、痛みにも悶える暇もなく青年は目を回した。

畳の香りが脳を刺激する。

目を覚ませば、青年は自身が寝所として利用している部屋で布団に寝かされていた。上半身をゆっくりと起こし、何が起きたかを振り返る。

(思い……出した！)

特に大したことではなかった。

ふと横を見れば、神奈子と諏訪子が布団のそばで座っている。

「カ、カミツレ。その、大丈夫か？」

「えつと……大丈夫です」

「すまなかった。まさかのぼせるなんて思ってた」

「自分でも驚きです。後ろ姿とは言え、ずっと見られてたのは恥ずかしかったですし」

途端に、神奈子が顔を赤くして俯いてしまった。神様がこれほど恥ずかしがるのだ。自分の身体はもしかや、男性的にセクシーダイナマイツだったのだろうか。いやそうに違いない。

ふと、自身が服を着ていることに気づく。

「あ、手当したのは私だよ」

と、諏訪子がニヤニヤと笑いながら口を開く。気のせいか、被っている帽子もケタケタと笑っているように見えた。

「神奈子ったら可愛かったよ。裸のまま私のところに来て、カミツレ君が風呂場で倒れたなんて報告しに来るんだもん」

「えつと……」

「あ、もちろん君の裸も見たから。まあ、それは色々とね」

「う、く……」

「まあ、タオルでぐるぐる巻きにしてここまで運んだから、私と神奈子以外は誰も君の裸は見えないよ」

「……助かります。ありがとうございます？」

傷を見られたのを2人、否、2柱までに抑えられたのは僥倖だろう。青年としても、その点についてだけは感謝する他ない。

「うん、色々と見たよ。色々とね」

「諏訪子、そこまでに——っ」

「神奈子は可愛いなあ」

その笑みを青年だけでなく、神奈子にも送る諏訪子。神奈子は諏訪子の言葉でナニかを思い出したのか、更に顔を伏せてしまった。

もちろん、青年も同様である。

「カミツレさん、何もない廊下で滑って転んで頭をぶつけて意識を失ったと聞きましたよ！ だらしないですね、大丈夫ですか！」

ドタドタと廊下を鳴らして駆けつけたのは早苗であった。早苗は部屋の障子を開け、2柱の隣に座る。

非常に不名誉な意識の失い方——事実の方も不名誉であるが——となつていることに苦笑いするも、心配して来たのであろう早苗に何とか笑みを返す。

「うん、まあ大丈夫。心配してくれてありがとう」

「怪我がないなら良かったです。でも、カミツレさんでも転ぶんですね！」

「別に運動神経が特別優れてるわけでもないから」

「そんなわけないじゃないですか！ でも、新しい発見ができたので私としてはちよつと嬉しいかもです」

「酷い言いようだね……」

「私の知るカミツレさんって、今まで欠点らしい欠点ありませんでしたし」

そうだったかなと思いついてみるも、かと言って特別優れた点があるわけでもなかったように青年は思い返す。

幼い日の思い出は美化されるんだな、としみじみ思うのであった。青年の中に残る早苗との思い出も同様に、である。

「おつす、おはよう提督。失礼するぜ」

「ご主人様、朝食をお持ちしましたよ」

早苗の後ろから、天龍と漣が料理を載せたお盆を持って現れた。二人は青年の布団の傍に座り、お盆を畳の上に置く。

味噌汁の芳醇な香りが鼻をくすぐり、揚げ物の香ばしさが食欲を掻き立てる。切られた漬物の乗った白米は、これでもかと言わんばかりに茶碗に盛られていた。

「今日の朝食は竜田揚げセットだ。このオレが作ったんだから、しっかり食えよ？」

「朝から揚げ物って……あの、かなり量が多くない、かな？」

「ご主人様、おかわりもあるよ！」

ふと、神奈子と天龍がアイコンタクトを取り、唇を歪ませるのを見た。青年はそこでようやく神奈子が何か言ったのだらうと気づき、喉を唸らせる。

「まあ、うん。有難く頂くよ」

「おう、もらつとけ」

天龍が少しばかり照れるように頬をかき、漣がテキパキと箸を準備しお茶を入れた。

とは言ったものの、まるで漫画のように盛られたこの白米を食べるのだろうか、と青年は不安を抱かざるを得ない。

「あ、天龍。私たちのご飯もここに持ってきてね。皆でここで食べよ」

「ああ？　なんでオレがお前の分まで——」

「天龍、湯呑」

「わ、わかったよ、湯呑の件はホントに許してくれよ……」

少しばかり情けない返事をした天龍は、重たい足取りで漣を連れて部屋から出て行く。それを手伝うと言って、早苗も二人について行った。

部屋の中には、再び神の2柱と青年が残るのみ

「まあ、なんだ」と、神奈子が落ち着いた表情で口を開く。

「私たちはまだ幻想郷に来て日が浅い。対外的な立場もまだ安定していないんだ。そんな私たちに必要なのは、何より内輪で協力することだな」

「は、はあ」

「神奈子ーはつきり言いなよ。家族に遠慮するなって」

「バ、お前は、人がいい話をしようとしているのに！」

「そもそも私は幻想郷に来るのは賛成もしてなかったよね？」

「それを今言うのか！ あのまま外の世界に残っても無駄だと言っただろう！」

「私はそれでも良かったよ！ このバ神奈子！」

「お前のためでもあるんだよ、カ諏訪子！」

ぐぬぬ、と2柱が共に鋭い目つきで睨み合う。内輪で協力と言った傍からこの始末。しかしこれも家族の一つの形と思えば、そう悪いものではないのかもしれない、と青年は目を伏せる。

家族なんてどうでもいいと、少なくとも自身の中では、横暴で粗悪で忌まわしいときえ思っていた。自分勝手に他人行儀で、自身のことば物扱い。

だがもしも許されるなら——。家族をそういうものだと認識していたというのに考えを改めてもいいというのなら。

今この瞬間、この時間の守矢神社という場所での人生は、過去どんな想いを抱いていたとしても、新しく受け入れるべき——宝なのだ。

「じゃあ、さなちゃん和神奈子さんと諏訪子さん、それに艦娘の皆……と僕。揃って『守矢一家』ですね」

神奈子と諏訪子の拍子抜けした顔に、青年は照れ隠しのように目を

逸らす。

やがて、艦娘全員と早苗が料理を持ってやってきた。青年を含んだ円を作るように座り、それぞれが笑顔で食事を始める。

青年も、それを見て微笑みを浮かべたまま食事を始めていた。

「わ、私脂っこいものはちよつと」

「ね、ねえ、味噌汁の玉ねぎ食べてくれないかしら」

「ナスは嫌いなのです！」

「こら、お前たち、好き嫌いするんじゃない！ ほら、ちゃんと三角食べしないと体に悪いぞ！」

思い思いに食事をする駆逐艦の少女たち。それはそれで子供らしくていいのだが、それをまとめようとする天龍はまるで幼稚園の先生のようにだと青年は苦笑する。

「神奈子の揚げ物もーらい」

「あ、こら諏訪子！」

「私に相談しなかった罰だからね。これでゼーんぶ許してあげる」

神の2柱は、行儀が悪いことにおかずの取り合いを始めていた。箸と箸の喧嘩などではなく、力と力の殴り合いで。

「はい、カミツレさん。いっぱい食べてくださいね」

「い、いや、おかわりは流石に……」

青年がなんとか山盛りの白米が盛られた茶碗を空にした途端、早苗が二杯目をこれまた山のように盛る。悪気がないのが余計に辛い。

賑やかな団欒。楽しい食事。ありえないとすら考えていた幸せが、目の前にあった。どこかで求めていたものに、青年の手は届いていた。

だから。

自分はこれで良かったのだろうと、今はそう思える。

守矢神社の境内。朝食をとり終えた青年は、本殿前の石段に座って空を眺めていた。たかだか一日二日で気候が変わるわけでもなく、相も変わらず9月の心地よい風と揺れる木々の葉音が安らぎの音楽を

奏でる。

ボーツと空を見つめる青年。穏やかなのはいいことであるが、その一方で焦りのようなものも感じていた。

(これじゃただの寄生だな……)

海に現れる怪物が現れたという情報は、初日以降耳にしない。ここ数日間は大人しいもので、だからこそ艦娘たちがゆつくり休憩することができたとも言えるが。

しかし、直接的に怪物を屠る艦娘と違い、青年自身に出来ることはほとんどない。だからこそ、己の存在意義について悩みを持った。

艦娘は海でやることなくとも、神社で掃除や料理などするべきことを見つけて実行している。掃除ぐらいならばと青年も箒や雑巾を持ったのだが、全て早苗や艦娘が仕事を取っていつてしまうのだ。

一度は食事を作ろうとはした。だが――

『あれ、材料が足りないや。紫さんに頼む――いや、自分で〃とつてこよう。』

敷地からなるべく出るなという神奈子の忠告をこつそり破り、〃食べられるもの〃を探ってきたのだ。

その結果。

山菜はともかく、爬虫類や虫の類は火を通して全員のヒンシユクを買った。魚とキノコはどうにか食べてもらえたが、それ以来厨房に立つことを禁止されてしまったのである。

艦娘はどうか食べようとはしていたが、あまり好んで食べたいものではなかったようで、士気に関わっても困るので結局取り下げた。

今の自身は、やるべきことが見つからず、ただ女子を働かせて食って寝て運動するだけの男であった。

(やっぱダメだ。仕事を探しに行こう！)

決断し、立ち上がる。自身を司令官と、提督と慕ってくれる艦娘た

ちのためにも、自身を養ってかれている守矢神社の3人のためにも。自分に出来ることを見つけなければ、幻想郷に来た意味は、ここで暮らしていくと、やり直すと決めた意味はないのだから。

「お邪魔するわよ」

「ホワア！」

立ち上がった青年の目の前に、突如としてスキマを開いて現れる紫。あまりに驚いたために、奇声をあげながら尻餅をついてしまった。

紫の隣には、九つの大きな狐の金色の尻尾を携えた、ワンピースのような服を来た女性が立っていた。白磁の如き透き通った白い肌の顔とナイトキャップ。ピンク色の唇と儂げな表情。それでいて切れ長の瞳を持つその女性は、まさしく傾国の美女と称するに相応しいかも知れない。

突然現れた美女2人に放心していたが、ひとまず立ち上がって尻の砂汚れを払う。少しの間紫とその美女の顔を行ったり来たりと見比べていたが、どうしても狐の美女の方に見とれてしまった。

しかし、青年も社会人として3年間働いてきた身である。小さく咳をついて喉を整えると、深いお辞儀とともに口を開いた。

「お、お初にお目にかかります、茅野守連と申します。紫さんのお知り合いででしょうか？」

「これはご丁寧に。この前はご挨拶叶いませんでしたが、紫様の式神、九尾狐の八雲藍と申します。主人がいつもご迷惑をおかけしております。どうぞ藍とお呼び下さい」

青年の態度にわずかばかり目を見開いたかと思えば、八雲藍という女性は青年と同様に頭を下げながら丁寧な言葉を発した。

顔を上げたその表情。優しく慈愛に満ち溢れており、隣に立つ胡散臭い、いや本当に胡散臭い表情の紫とは大違いである。

「式神、といますと？」

「簡単に言えば、あなたとその配下の子達との関係のようなものです

よ」

簡単に説明をし過ぎているようにも感じられるが、要は主従関係にあるということの間違いないのだろう。式神とは——と詳しく説明されたところで、青年自身も理解できないことなどわかっているのだから。

紫より一歩引いた位置に控えていることから、主従関係にあることは伺える。

「随分……紫さんと物腰が違いますね？」

「私の恥は主人の恥ですから。まあ、どちらかという主人の恥が私の恥になっている場合の方が多いのですが」

「ははあ……苦勞されている、と。心中お察しします」

「お氣遣いが誠に胸に沁みます。カミツレ殿にも大変なご迷惑をおかけしたようですし」

「いえ、お氣になさらず。悪い気分ではありませんでしたから」「そう言っていただけだと、私としても安心です」

青年と藍、二人揃ってハハハと笑い合うのを、紫は面白くなさそうな瞳で見ている。口を尖らせている様子は子供のようである。

「二人共、仲良くなれそうで何よりよ」

「ええ、それはもう」

「紫様、私カミツレ殿のことがいたく気に入りました」

「あなたの主人は誰だったかしら」

「紫様ですが」

「……もういいわ」

藍は表情からわかるほどご機嫌である。対する紫は、まるで拗ねているかのように眉を寄せていた。

藍との話もなかなか面白いのだが、青年も本題を聞かなければならない。

「それで、紫さん。今日は何か用事でしょうか？」

「ええ。早速あなたと艦魂の子達の協力が必要になるから」

「怪物でも現れたんですか？」

「現れるかもしれないから、その護衛をお願いしたいのよ。私たちが

目的にしているのは「塩」よ」

「塩、ですか？」

以下、紫の話の要点をまとめるとこうなる。

幻想郷において、塩は岩塩からのみ採取される。塩不足になりそうな時は紫が外の世界から持ち込むのだが、勿論安定して供給されることが望ましい。

そして、現在は海がある。沿岸の監視で中々手出しもできなかったが、青年が現れたことにより、塩の確保に乗り出せる算段がついたらしい。

「紫様は本日他にも用事がありますので、私八雲藍が付き添います。それから、紫様が塩の精製方法の知識をさずけた里の人間も来ます」

「で、僕は艦娘たちに海上の警備をさせる、ということですね」

「はい。陸の上ならば私が守りますので、海はお願いします」

とは言ったものの、青年も命令を出せばそれっきりである。基本的に青年は指示を出したらその後はただの人なので、青年も藍に守られるしかない。

最も、怪物が襲ってこなければ何も問題はないのだが。

「事が上手く進みそうなら、守矢神社に塩を無償で提供するつもりよ？」

「……なるほど。なら受けましょう」

「いいのかしら？ 今日彼女は彼女たちに確認を取らなくても」

「僕に任せると言ってくれました」

「いい返事ね」と紫が微笑む。青年も、これでようやく神社の役に立てると思い、胸をなでおろした。

塩は生活に密接に関わってくる。もし塩の製造に成功したならば、塩が足らんです、などと厨房を困らせることは少なくともなくなるだろう。

「そういえば、紫さん。他の用事というのは……」

「ええ、そろそろ来るはずよ」

「来る、とは？」

紫の言葉に青年が怪訝そうな表情を浮かべると、その途端境内に突

風が巻き起こった。落ち葉と砂が舞い、青年はたまらず目を瞑る。

何かが破碎されるような甲高い音が響いた後、ようやく風が収まったかと思えば、境内の中心には二人の人物が立っていた。

「あやや、本当に神社の結界を破壊するとは思いませんでした」

山伏風の赤い帽子を被った、黒い短髪の少女が哑然とした表情で話す。

「私の技術力を舐めてもらっちゃ困るよ」

その少女が脇に抱えていた、青緑色のツインテールの背の低い少女。緑色のキャップを被り、背中には彼女の体躯ほどもある大きなリュックを背負っていた。

「えっと、どちらさまですか？」

「どうも、幻想郷の伝統ブン屋『文々』の記者の射命丸文です」

「私が呼んだのよ」

垢抜けた笑みを見せる射命丸文という少女。紫は扇子を開き、そのまま続ける。

「妖怪の山の天狗が、この神社と交渉がしたいけど結界があつて話すらできないって困っていたの。交渉自体は介入しないけれど」

「あやや、お恥ずかしい限りです。我々天狗ではこの結界の対処が難しかったものですから。結果的にはにとりさんの道具でなんとかまりましたが」

「私が出す必要もなかったわねえ」

文という少女はどうやら天狗であるらしい。比喻ではなく、種族としての天狗。

青年も幻想郷についてある程度紫から話は聞いている。人間、妖怪、幽霊、あらゆる種族が住まい、暮らす場所。

驚きはするものの、知識があるのとないのでは大きく違う。ただ――

「ふふん、河童に頼るなんて天狗もまだまだだね」

「ははは、その通りです。とは言っても、私は今回交渉役として来ただけですので、その言葉は戦闘部隊の方にかけるのが望ましいですねえ」

「嫌だよ、あいつら容赦ないし」

その言葉だけは、青年も逃しようがない。

「かつ……ぱ?」

「ん? おや、確か数日前に私からものすごい速さの泳ぎで逃げていった人間じゃないか」

「え、あの時の?」

「そうだよ。いや、突然のことだったとは言え、私も驚いたよ。まさか私とドスコイドスコイの速さの泳ぎを見せつけてくれるなんてね」
「相撲とつてどうするんですか……」

違う、と青年は首を振った。青年の知る河童はこんなに可愛くはなかった。少なくとも幼い日に襲ってきたあの河童は恐ろしい、それこそ妖怪のような形相をしていたのだ。これが幻想郷なのか、と呆れてしまう。

「まさか、滝壺に飛び込んでくるなんて思いもしなかったよ」

「あ、いえ、僕も上空から落とされましたし」

「それってどういう状況なの。……空、飛べないよね?」

「え、はい」

「……下が滝壺で良かったねえ」

と、河童の少女は自分のことでもないのにしみじみと微笑んだ。その顔を見て、ひとまず青年は心に飼っていた警戒心を解く。

「僕は……守矢神社に居候している茅野守連といいます」

「私は河城にとり、技術屋さ。確か、外の世界から来たんだよね? 私

は外の世界の技術には目がなくてね。何か持ってないかい?」

「技術、ですか?」

技術といっても、すぐには思いつかない。青年も荷物を整理した上で幻想郷に来ているため、幻想郷で使えないものは処分してきたのだ。

しかし、習慣からかポケットに入っていたそれはすぐに思いつく。
「これ、携帯電話と言うんです。もう使わないので、これで良ければ……」

「ホントかい？ 嬉しいよ！」

大した特徴のない携帯電話。それを手に取ると、にとりは目を輝かせた。

「カミツレだっけ？ 君はいい奴だなあ。もし良かったら、色々と外の世界の科学の話聞かせておくれよ」

「こんなことでいい奴って……。えっと、僕も専門ではないのですが、それでも良ければ」

「十分さ。ありがとう、盟友！」

携帯電話を胸に抱きしめ、満面の笑みを浮かべるにとり。携帯電話一つでここまで人——否、妖怪は笑顔になれるのかと青年は眉尻を下げる。

周りを見れば、紫も藍も、文さえも困ったような顔でにとりを見ていた。もちろん青年も、初対面から勢いに押されていることは間違いない。

しかしそこで、青年は技術屋という言葉に心惹かれる。

「あの、一つお願いを聞いてもらえないでしょうか？」

010 山の神

運命というものを知っているだろうか。たとえ今この一瞬にいかなる選択肢があろうとも、結果は全てひとつに行き着く。在るべくして有る因果の流れは初めから一つで、限りある未来は元より二つとなく、可能性を感じていた過去は全て選択の末路。

遠くの景色には手が届くはずもない。何故なら、自分の世界は自身の選んだもので囲まれているから。

なれど、選ばずとも、選ばされた者もいる。
選ぼうもなく、与えられた——否、奪われた者もいる。

世は突き詰めずとも弱肉強食。誰もが周りに誰もにとつての強きを選び、強きを並べ、強きを拾う。弱きは切り捨てられ、忘れられるのが常である。

強きが運命を手繰り、運命が強きを生かす。

そう、だから。

諏訪子との戦いも、巫女の遺児である早苗を育てたのも、青年との出会いも、いずれも運命であったが。

幻想郷を目指したのは必然であったのだと——神奈子は己にとつての弱きを受け入れたのである。

その日、神奈子は一日の過ごし方を決めめぐねていた。幻想郷に来て数日、ようやく神社のライフラインを整備したところであり、まだ守矢神社が広く知られるための準備は整っていない。

今日は何をするべきだろう、と日々考えるのだが、気がかりが多すぎてどれがベストかまるでわからない。例えば八雲紫の思惑への警戒、例えば妖怪の山との決着、例えば深海棲艦たち——そして茅野守連。

(うーん、いかん。こんな時はひとまず、風呂にでも入ってさっぱりすることしよう。朝風呂もいいものだからな)

早朝。自身の部屋で、隣に眠る諏訪子を起こさないように部屋を出

て、つい先日湯を引いた浴場へと足を向けた。

この温泉、一番の特徴は幽霊たる艦娘の傷を治す力があることだが、そのほかにも勿論、疲労、肩こり、腰痛、むくれ、切り傷擦り傷その他諸々と、神だろうが何だろうが癒してくれること請け合いであるのだ。が、どうやら恋の病には効かないらしい。

誰も入っていないことを確認し、すっぽんぽんと服を脱いで入浴する。

(あく、心がぽかぽかするなあ)

手のひらでお湯を掬い、肩にぴしゃつとかけた。温もりを感じた後に、絹のような白い肌が水気を弾く。サラサラの身体は、妙齢の人間の女性と比べても遜色ないだろう。

(まだまだ私もイケるな！……なんちやつて)

少し太ってしまったかなと、しばらく二の腕をふにふに揉んでいたのだが、脱衣所の衣擦れ音を聞くにどうやら来客らしい。

「うわあ、やっぱりここのお風呂すっごーい！　って、いたたたたっ」

「ふ、吹雪ちゃん、大丈夫なのですか？」

「うん、平気だよ！」

「はしゃがないの吹雪。小破とはいえ、あんたが一番重傷なんだから」
入浴ではなく入渠しに来たのは吹雪、電、叢雲の三名であった。それぞれが身体を流し、恍惚とした息を漏らしながら肩までゆつくりと浸かる。

三人とも神奈子には気づいていない。何故かと言うと、

(ふむ……A、A、A、A、といったところか。見事に壁だな。しかし、諏訪子もそうだがなぜロリっ子はこうも肌がモチモチしてそうなのか。いや諏訪子はもちもちで間違いないが)

浴槽の隅で、気配を完全に消して姿を見えなくしていたためである。これも神の力なり。

(気配の遮断は完璧か。ふっ、当たり前だ。諏訪子にさえ3回に1回しか気づかれないほどの偽装だからな。一緒に入るのもいいが、一人で入って油断している時の諏訪子も可愛いもんだ)

尚、基本的には神奈子と諏訪子は、おはようからおやすみまで終始

べったり共にいる。

しばらくの間、きやいきやいと楽しそうに話す3人。話している内容は過去の戦いで探照灯がどうだとか鼠がどうだとか救助がどうだとかまるでわからなかったが、ある時気になることが話題に挙がる。

「ねえアンタたち」

「叢雲ちゃん、どうしたのです?」

「あの司令官のこと、どう思う?」

そう、彼女たちが指す司令官とはすなわち、青年のこと。

艦娘と腹を据えて話し合ったことこそないが、彼女たちは彼女たちなりに青年のことを気遣っているというのは誰でも気づくだろう。最も、その気遣いが行き過ぎて、却って青年が手持ち無沙汰で過ごす事になっているのだが。

(まあ、私や諏訪子もまだ暇だから、そんなカミツレを眺めるのも余興の一つなんだけど)

これぞ、暇を持て余した神々の遊び。

「どうって……全然軍人っぽくはないよ?」

「いや、吹雪。そんな当たり前のことじゃなくって」

「司令官さんはきちんと心配りのできる方なのです。昨日、電にこっそりと牛乳を分けてくれたのです」

「電アンタ……言っとくけど私たち、多分身長なんて伸びないわよ」
「なのです!」

外の世界から持ってきていた牛乳の減りが早いのはそれが原因だったのか、と神奈子は溜息をつく。言えはいくらでも調達してこようというものなのに。

なんて思っていたら、吹雪が屈託のない笑みを浮かべて首を傾ける。

「でも、私は司令官のこと好きだよ?」

「なんだと!」

「え、今の誰? 電?」

「電はおばさんみたいな声は出せないのです!」

思わず声を出してしまった。しかし、電という艦娘、大人しそうな

見た目とは裏腹になかなか酷い言いようである。

が、吹雪の発言が気になった神奈子は、その発言を聞かなかつたことにして耳を傾けた。

「で、吹雪。どういうこと?」

「どうって……指揮ができるかどうかは別として、私たちのことをちゃんと見てくれようとしてるんだもん。私もそれに応えなきゃ、って」

「そういうことね。まあ、それは確かに……」

「電も、司令官さんのことは信じたと思って思ってるのです。確かに、司令官としての能力は軍人さんではないのでダメかもしれませんが。早苗さんの話では……その、あんまり他人に興味を持つ人ではなかったそうなのです……でも」

「でも?」

「何かを決意した人が強いってこと、電たちはよく知っているのです」

「ええ……そうね、本当に」

ああ、早苗は本当にあの青年のことをよく見ている。そして、この子達もまた、きちんと青年と向き合おうとしていた。

青年も艦娘も、互いに出会って数日であるというのに、よくぞそれほど信じ合えるものだ。お互いの記憶を知っているからこそ、かとも思ったが、きつとそうではなく、そしてそれだけでもなく、今のお互いを見ているから。

お互いがお互いにとって、その存在が強きになっているのだろう。

だから——彼と彼女たちの運命はここから始まるのだ。

「それで、叢雲ちゃんは?」

「私? そりゃアイツのこと……そ、その、嫌いじゃないわ」

「それって好きってことなのです!」

「なんだと!?!」

「え、今の誰? 叢雲ちゃん?」

「私はおばさんみたいな声は出せないわよ」

「そもそも皆、艦齡で言えばとっくにおばあさんなのです!」

「それもそうだね、あはははは!」

(わたしや君たちよりババアなんだけど……)

そのうち、吹雪の傷が治ったのか、三人は浴場から出て行ってしまった。脱衣所でも何やら話していたようだが聞こえず、神奈子はそこでようやく姿を現してポツリと呟く。

「やれやれ、思ってたより心配はいらないみたいだな」

もし艦娘が青年を裏切るようなことがあるなら——とも考えていた。その場合、あの子達のように小さな魂であればまだ対応できるが、例えば青年が持っていたあの写真のクラスの艦娘の魂ともなれば、ましてやそれが艦隊を組むともなれば、さしもの神奈子でさえ、全盛期の力量であっても戦ってどうなるかはわからない。

不安の目は小さなうちに潰す。それがどんなことであろうと、だ。無論、杞憂に終わって何よりであり、神奈子自身もあの子達に手を出すことがないまま終わってホツとしている。

(心配事が一つ減ったな……これも必然、いや運命か。お互いにとつて)

このようにして、艦娘は知らず知らずのうちに、守矢神社に受け入れられたのであった。

浴場から出ようとしたら青年が入ってきて、すったもんだでひと騒動あったもののそれはさておき。

青年から素敵な文言を聞くことができた朝食の後、神奈子はこの日を山の者と交渉することを決めた。艦娘たちが海で戦う場合は八雲紫や藍が案内してくれるため、青年は特に気にしていないようだが、神奈子にとってはこの山でさえも敵の勢力のど真ん中であるのだ。おまけに早苗による勝手な敵対宣言付き。無論ちゃんと呼びである。

神社には神奈子の結界が張られている。境内であれば自由に歩き回ることは可能だが、そこから外に出れば山の者たちがすぐに駆けつけてくる。これでは自由に散歩もできない。むしろ、神奈子の言い付けを破って食材を採ってきた青年、言い方は悪いがなぜ無事だったのだろうかと思議なくらいである。

山との交渉。何かしら威厳を見せつけなければ、力が落ち切った今の状態では、相手によつては厳しいかもしれないな、などと思つていると、誰かが結界内に侵入してくるのを感知した。

(ん……なんだスキマ妖怪か。いきなり現れるのは本当に心臓に悪いな、全く)

ホツと、溜息をついた次の瞬間、

耳をつんざくような甲高い——結界の割れる音が神社内に響いた。

「結界を……ぶち破りやがった」

フツと、神奈子の顔から柔らかいものが消える。

「そうかそうか、フフ……つまりお前たちはそういう奴らなんだな」

紫の仕業ではないだろう。結界を素通りできる力を持っているのだから、壊す必要はない。深海棲艦もこの神社まで近づくことはできないだろう。つまり、

「山は我らとやり合う気らしいなあ、諏訪子」

「舐められたもんだ。いかに力が落ちたとは言え、私たちは神様なのにねえ」

柱の影からひよつこり現れた諏訪子。帽子を深くかぶっており、その表情を伺い知ることはできないが、声に温もりなどない。まるで諏訪の冬のようなのである。

ゆつくりと二人で歩みを進め、境内へと向かう途中で。

「ここが守矢神社かあ！ 外の世界から来たって話だし、何か面白そうな機械……は……」

河童が走りながら突然現れたのだが、自分たちの顔を見るなり白目を剥いて気絶し、その勢いのまま壁に激突してしまった。気に止めることもなく、二人は歩みを進める。

「にとりさん、人のお宅なんですからあまり勝手に歩き回っては……」

先ほどの河童に比べて、のんびりと現れたのは鴉天狗。気絶こそしなかったものの、二人の表情を交互に見て、滝のように冷や汗を流しながら頬を引きつらせる。

「結界を壊したのはお前たちか？」

「あ、あやや……やや……」

鴉天狗、微笑んでこそいたが、その膝には大地震が到来していた。

「で、山の要求は？」

「は、はい……そ、その、できればすぐに立ち去って欲しい、というのが基本的な方針で——」

ドンツ、と神奈子は畳に拳を叩きつける。「ヒツ」という声が聞こえたのは、河童の方からである。

「え、えつとあのー、一応方針は方針というだけです、はい。交渉ですから、私としても守矢神社さんの要望は聞いておきたいなーと思います」

ハハハと乾いた笑いを浮かべる鴉天狗。相も変わらず冷や汗が流れ出ているが、そんなことはお構いなしに神奈子も諏訪子も腕を組んでふんぞり返る。

場所は守矢神社の客室。上座に諏訪子と共に隣り合って座る、神奈子に至っては胡座をかいて座っているのに対面して、射命丸文という鴉天狗と河童にとりという河童が緊張した様子で正座していた。

威圧感たつぷりに、それこそ空気を震わせるような雰囲気を感じながらも、神奈子は文の言葉に応える。

「まず、我々は外の世界で信仰を失い、この幻想郷に流れ着いたことを話しておく」

「神奈子、そんな弱みを見せるようなこと聞かせていいの？」

「構わん。が、一つ名誉のために言っておくが、我々も外の世界ではトップクラスに名前を知られている神であったことは覚えておけ。そんな我々が力を失うほど、外の世界では神々への信仰が薄れている

ということを知っていてもらいたい」

堂々たる答えを投げかけた神奈子に対し、にとりは興味深そうに相槌を打つ。文もまた顎に手を当てて頷いていたのだが、目をパツチリ開くと質問を続けた。

「なるほど。確かに今のあなた方であれば、不肖ながら私でも五分には持ち込めそうですね」

「ほう……喧嘩か？」

「あやや、ただの確認ですよ。信仰をさえあれば一気に力を取り戻しそうですねえ。敵意がないのであれば、私たちから手を出すつもりはありません」

「だが、我々はこうして山頂に湖ごと居座っているわけだ。そちらからすれば侵入者であることには変わりないと思うが」

「それについてなんですが――」

と、そこへ。文の声を遮って、にとりが興奮した様子で身を乗り出す。

「君たちのことを監視してた天狗から聞いたんだけどさ、何でもすごい技術持つてるらしいじゃん？ 電気水道に温泉まで引いたって聞いたよー！」

「ん、見られていたのか。そうだ。あれは我々の神の力で無理やり再現したものはあるが、元はといえば外の世界の技術だ。まあ、我々が見せた技術など、ライフライン程度ではほんの一部に過ぎないがな」

「やっぱりそうなのかい？ すごいよ！ 是非とも教えて欲しいもんだ！」

「ん？ いや……教えるといっても、だな……」

「代わりに、君たちのこと手厚く歓迎するからさー！」

今にも飛びついてきそうなにとりを押さえる文が、やってしまったと言わんばかりに溜息をついた。しかし、その発言に動揺したのは文ばかりではない。

神奈子も諏訪子も、目を見開いて驚愕する。

「どういう……ことか」

「あやや……まあ、にとりさんが話してしまったので今更ですが、私が天魔様より秘密裏に命令されたのはそういうことです」

「居座るつもりなら見返りをよこせ……いや、共存するつもりなら利益をもたらしてもらおうといったところか」

「ついでに、その恩恵に預かれるなら多少は信仰しますよ、ってところですね」

「待て、秘密裏にということはお前たちは公式の交渉役ではないのか？」

「だって結界があるから、何もできなかったんですよ。そこで、天魔様から命令を受けた私が、にとりさんを誘ってこうして伺ったわけです」

「ふう……む」

「そういえば結界を割られたのであった。交渉が終わってからそれはみっちり叱るとして。」

タイムリミットは——天魔の刺客である文以外の天狗が、命令を受け体勢を整えて割れた結界の奥、この神社へと攻め込んでくるまで。

「意外と狡いな」

「いえいえ。ついでに、あののんびりした男性と不思議な少女たちのことも教えてもらえるとなー、なんて思ってますが」

「それはできないな」

「あや?」

「私にもわからんからだ」

ここへ来て、初めて訝しげな表情を隠さない文を尻目に、神奈子は諏訪子をチラリと一瞥。諏訪子がゆっくり頷くのを確認すると、神奈子は不敵に口元を歪めた。

「いいだろう。たった今この瞬間から、我々がこの山の神だ。食料資

源その他諸々を捧げてもらう代わりに、絶えることのない安寧と、心揺さぶられる繁栄をこの地に約束しよう。先住の神がいるなら、よろしく伝えておいてくれ」

その後。

風より疾く神社を去っていった文により、山の妖怪たちは神社に対して武装解除。にとりを中心とする河童たちに順を追って技術を教え、山のために役立てることを約束した。

(これで……良かったのだろうか)

自分が幻想郷へ来ることになった理由は何だ。本当にそれが神社を守ることになるのか。雨あられと降り注ぐ自問を続けるのだが、部屋で悩む神奈子の肩を誰かが叩く。

「悩んでるねえ、ハニー」

「……悩みもするさ、ダーリン」

諏訪子はその胸に、自身の頭を正面から抱きしめた。ふにふにと柔らかいようで柔らかくない感触に包まれるが、それ以上に安心したのは——その温もり。

ずっと傍にいてくれたのは、この変わらない温かさだった。

「もしかしたら……私は取り返しのつかないことをしたかもしれない」

「そうだね。早苗にも、カミツレ君にもひよっとしたら迷惑がかかるかも知れない。いや、カミツレ君はともかく、その次やそのまた次の世代はもしかしたら、ね」

ギョツと、頭を抱かれたまま諏訪子の矮躯にしがみついた。諏訪子もまた、優しく頭を撫でてくれながら、抱きしめ返してくれる。

「私は……間違えたのだろうか。目先の欲に囚われ、目先の安全を追って……自分に力があればと、これほど後悔したのは久しぶりだ」
「好きにしたらって言ったでしょ？ どんな結果でも、私が受け止めてあげるからさ」

「その時は……一緒だな」

「その時も、また一緒。ね？」

ああ、諏訪子はなんと心に響く声をかけてくれるのだろうか。まるで神様みたいだなあと思ったが、そもそも神様であり自分も神だった。

この選択が、自身らの首を絞める可能性は十分すぎるほどある。かつて辿った道をなぞるように、もしかしたら自身らは消えてしまうのかもしれない。

だが、先のごことはわからない。過去のことさえ曖昧で。神であろうとも時間に縛られてしまうのだから、後悔も致し方ないことなのかもしれない。

それでも、これが間違っていないのだと信じ続けよう。

良い結果でも悪い結果でも、いつの日か受け入れられる日が来ると待ち続けよう。

これこそが——己で手繰り寄せた運命なのだから。

迷いが渦巻く己の心を落ち着かせるように、神奈子は諏訪子の形の良い尻を迷うことなく揉んだ。

運命は頬の紅葉に帰結した。

011 製塩業者を護衛せよ!

砂浜に到着し、青年は潮風を全身に感じた。爽やかな風と少しだけツンと香る潮の香り。しかしそれが海の魅力であり、青年の好きな海である。

生まれて初めて海を見た日のことは忘れない。湖より広く、どこまでも続いていく群青に、文字通り魅せられたのだ。

「いつ見ても、海とは素晴らしいものですね」

「藍さんもそう思いますか?」

「はい。外の世界では幾度か見たことはありますが、やはりこうして幻想郷の海となるとまた違った、格別な気持ちになります。もちろん、いい意味で」

「それは良かったです」

自分のことでもないのに、どこか穏やかな気持ちになる。何ということはない、自分が好きなものを同じように好きという者がいたら、誰だって嬉しいだろう。最も、その気持ちを共有する相手さえ、青年には数える程もないのだが。

するとそこへ、不精ヒゲを生やしたみすぼらしい格好の男たちが、青年に声をかけてきた。

「ほんじゃ、カミツレさんとか言ったかいの。わしらは塩作るけえ、よろしくお願いしもす」

「あ、はい。任せてください」

「しつがし、海なんて初めて見だわな。でっけえ水たまりと思つとつたが、おっだまげたわ」

「海の中には色々な生物が生きているんですよ。陸の上と何も変わりません」

「そうけえ。ほつたら旨いもんもいっぺえあるつてことか。こりや頑張らんな」

藍が話していた、塩の製造技術を学んだという人間の里からやってきた人間たちである。格好こそ質素なものであるが、その腕には仕事人としてのたくましい筋肉が覗く。

比較的運動はしていた自身の体と比べても、身長は低いのにも関わらずとても大きく、たくましく感じられた。

ふと、天龍が眠たそうにあくびをして水平線の向こうを見つめる。艦娘の中には上下関係を重視する者もいれば、重視しない者もいる。天龍はその中でも、上官がいようと自分を隠さないタイプであった。自分自身に威厳も何もないと自覚している青年からすれば、その方がどちらかといえば話しやすいのだが。

「なあ提督。昨日は敵も来てねえけど、本当に来るのか？」

「わからない。ただ、海の上から攻撃された場合、幻想郷の中で余裕を持って対処できるのは君たちだけなんだ」

「けどよ、戦艦でもない限りは、幻想郷にいる奴の方がぶっちゃけ強いぜ？」

「海の上で空が飛べなくなるらしいからね。君たちと違って、海を移動するなら泳がないといけないし、船を浮かべようにも造る技術がないらしいし」

「まあ、オレたちの方があいつらとの戦い方もわかってるしな」

初日に青年が見た、紫や早苗の戦闘。あれがもしこの幻想郷において普通のことであるならば、艦娘たちより戦闘力が高いことは素人の青年から見ても間違いない。

しかし、幻想郷の常識も海では通用しない。海上で人が空を飛ぶことはできないし、音速以上の速度で迫ってくる攻撃を回避し続けることなど困難だろう。

装甲という名の障壁によって、ある程度ダメージを受けることを前提とする艦娘に対して、避けることを前提とする幻想郷の戦い方は、怪物と相対する場合に不利な面があるのは事実。

適材適所とはこのことだろう。単純に幻想郷の戦い方と艦娘の戦い方ならば、幻想郷側に軍配は上がれども、怪物との戦いにおいては艦娘の方が有利なのだ。

紫はおそらく初日でこれを予見、看破したのだろう。今回の塩の件も含めて、紫が何をどこまで考えているのかなど、青年には予測のつきようもないが。

「藍さん。紫さんは僕と艦娘の子達に何を求めてるんでしょう?」

「それを——私がお答えすると思えますか?」

「うっぐ……できれば教えていただきたいです」

青年の質問に、一瞬で目つきを鋭くする藍。その声音も先程までとは打って変わって、底冷えするような雰囲気をもとっていた。垂れていた尻尾は立ち、警戒心を隠すようなことをしない。

しかし、青年にとっては自身と艦娘たちに関わること。何も知らなのまま利用されるというのはまっぴら御免なのである。特に、艦娘たちは実際に海で戦っているのだから。

紫の目的は塩だけなのだろうか。それ以外——何か目的があって、自分や艦娘を幻想郷に留めたのは間違いないだろう。善意だけで引き止めてくれるほど、あの紫が優しい人物であるようには思えない。「紫さん、僕に色々と話はしてくれませんが、核心は避けるので、重要なことがわからないんですよ。誤魔化されるだけでは、正直言ってこちらのリスクが大きすぎます」

「紫様には紫様の考えがあつてのこと。そして私は紫様の式神であり、その意思に基づいて動いている。勝手に話すわけにはいかないのです」

(勝手に話せない……つまり、〃何か〃は知ってるってことか。藍さんなりに教えてくれたんだろうけど、まだ足りない)

例えば、紫は自分の考えというものを教えてはくれない。幻想郷での青年の生活を手助けしてくれた人物であるとはいえ、疑問に思う部分は間違いなくあつた。

他人を信用しきれない自分が愚かしい。だが、そういう生き方しかして来なかったのだ。これぐらいは勘弁してもらえないだろうか。

「何を隠しているんですか? それとも、教えられないようなことを僕たちにさせようとしているのでしょうか?」

「……そうですね。もしかしたら、最悪の場合は命にも関わってくることになりかねないかもしれません」

「それは……僕らがしなければいけないことですか?」

「ほう、勇ましいですね。私のような者を相手に引きませんか」

藍の目つきは険しいままである。我関せず、といった態度とはまた違う、配慮こそすれど教えるつもりはないと表情が語っている。

どうしたものか、と青年は考える。こうした正面切つての説得は青年も得意ではない。そもそも大した頭もないというのに説得などしようがないのだ。

だから青年は道をずらす。さも狐が化かすかのように。

「藍さん、あとで油揚げ差し上げますね」

「何でもお答えしましょう」

一転して、藍の表情は爛々と輝いた。尻尾がフリフリと揺れ、目をパツチリと開いて口角を上げる。

「と言いたいところではありませんが、いかに私でも、油揚げの誘惑に負けるわけにはいきません。どうか諦めてください」

「ダメですかあ……」

「まあ、油揚げを頂けるといふなら、一つだけ申し上げておきましょう。紫様はあなた方を害するつもりは一切なく、敵ではありません。何かあれば、必ずあなた方の助けになるでしょう。私から言えるのはここまでです」

引き下がる部分はこちらしかないだろう、と青年はその言葉を信じて深呼吸をする。これ以上追求してもおそらく何も情報は出ないし、藍にも藍の立場があるのだから。

話がついたと判断したのか、藍も眉尻を下げて安心したような表情をする。九本の狐の尾も垂れ、ホツとしているようである。

息抜きに、隣に立つ天龍を見た。諏訪子になんだかんだ頭が上がらないらしい天龍だが、腕を組み堂々と立つその姿が、今はやけに頼もしい威圧感を感じさせてくれる。

「頼りにしてるよ、天龍」

「お？ お、おう！ この天龍様に任せとけつて！」

「……笑うと可愛いんだ。喋らなければ格好いいんだけどなあ」

駆逐艦たちより目立つその胸を張り、自信満々の笑みでドンと叩く

天龍。しかしその様子を見れば、青年も期待せざるを得ない。

えいやほいやと塩の製造を行う屈強な男たち。しばらくその様子を眺めていたのだが、やがて天龍が顔を上げて目を凝らせた。

「敵艦隊発見！ 軽巡洋艦1、駆逐艦2！」

「私の方でも見えます。化物が3体ですね」

このまま怪物が現れなければいいと思っていたのだが、どうやらそうもいかないらしい。青年はポケットの中からカードを取り出しつつ、頭を切り替えた。

今回するべきことは怪物の上陸阻止。上陸できるのかそもそも知らないが、なるべく陸に近づけないことが求められる。陸には艦娘より強いと思われる藍もいるが、できるだけ沖で戦闘をすることが望ましい。

カードを重ねて、艦娘の少女たちをその場に実体化させる。軽巡洋艦の天龍を旗艦とするその艦隊を呼び出せば、頭の中で声が響いた。

フフ符『天龍幼稚園』

——軽巡『天龍』

駆逐『吹雪』『叢雲』『漣』『電』『五月雨』

「なんだよその艦隊名！」

「僕だって知らないよ！」

「もつとカッコイイ名前に変えろよ！ 恐怖の艦隊とかさ！」

「天龍さん、早く行くよー」

「あ、ちよ、オ、オレは認めないぞ！」

小馬鹿にした顔の漣に急かされて、天龍は文句を言いながら沖合へと向かっていった。

（やっぱり引率の先生に見えるよなあ）

身長の低い駆逐艦の少女たちを引き連れて、先頭に立って一列で進むその姿。まさしく立派な幼稚園の先生である。

遠のいていく天龍たちの姿を見て、藍がわずかに眉尻を下げる。

「羨ましいですね。海の上を自由自在に」

「僕も戦えればいいんですが……口惜しいです」

「おや、無理に力を得る必要はないのですよ？ 直接的に戦えないならば、他の方法で彼女たちを助けてあげれば良いではありませんか」

「他の方法、ですか。それは一体……」

「カミツレ殿ご自身で見つけることです。やり方などいくらでもありましょう」

そう言つて、藍は塩を製造している男達に声をかけた。

「皆様。何か手伝えることがあれば、こちらのカミツレ殿に。何でも手伝つてくださいますよ」

「ん？ 今何でもつて言うたか？」

「えつ？ ……えつ？」

何だか尻がむず痒く感じたのは気のせいだろう。

藍は主同様のシニカルな笑みを浮かべて、青年の手を取った。

「彼女たちが気負う必要がなくなるように、早く終わらせましょう。今の仕事はこのぐらいでしょう」

「……じゃあ、その代わりにちゃんと怪我しないか見ていてくださいよ？」

青年は恥ずかしさからその手を振りほどきながらも、眉を歪めて苦笑した。どの道艦娘の出撃後は手出しできず、見えもしない戦闘の景色を見ているだけなのだ。

ならば、確かに藍の言うとおりである。艦娘たちが少しでも気持ちを楽しめるように、塩の製造を早く終わらせた方がいい。

青年は頬を叩くと、作業中の男たちの元へと歩き出した。

旗艦の天龍を戦闘とした縦一列の単縦陣。その3番目に位置する叢雲は、岸にいる青年の姿を繰り返し振り返りながら考え事をしていった。

(アイツ、少しはまともになったかしら)

青年の元に「着任」した当初は、自身らに指示すること自体を忌避

していたような彼。それどころか、自身らそのものを忌避していた。初めこそ、力を持ちながら戦わず、それどころか逃げるなど嘆かわしいと叢雲も思っていた。しかし自身の過去の過去を振り返って、そして青年の過去の記憶を覗いて、考えを改める。

日々の安寧すら得られなかった彼にしてみれば、それを求めることは至極当然のこと。そして、自分たちという力を面倒に感じることは責められない。

それでも、青年は選んでくれた。自分の力で意思で幻想郷に残ることを選択し、自分たちと共にあることを望んだ。

過去を知った艦娘たちは皆甘やかしている。吹雪などはいいい例で、最初に青年の元へ着任したという理由からか、非常に親身になって接しているのが傍から見てもよくわかるのだ。

叢雲も、どうしても突き放すことはできない。厳しく当たろうとしても、青年の記憶がそれを邪魔してしまう。

(それでも、誰かが叱る役をしないと)

このままではダメな人間になってしまいうだろう。本人もどうにかこの状況を抜け出そうと手を尽くしているようだが、周りがそうさせてはくれないのだ。それは艦娘然り、守矢神社の面々然りである。

厳しくしたいわけではない。だが厳しくしなければならぬ。自分たちを従えるからには、立派な人物になって欲しいと願うこと。それは果たしておかしくないことなのだろうか。

胸を張って誇れる上官になってもらいたい。それは見栄とか意地とかではなく、本人のために願う叢雲なりの表現。

いつかそれは、きっと青年のためにもなる。

「敵艦隊見ゆ、対水上戦闘用意！ 目標は敵駆逐艦、方位40度！ 主砲、撃ち一方——始め！」

天龍から威勢のいい指示が飛ぶ。

艦隊名こそ頼りないものの、軽巡洋艦1人と駆逐艦5人による、速度を活かした近距離での砲雷撃戦を目的とした水雷戦隊である。決して馬鹿にできる戦力ではない。

(それにしても幼稚園って……いいセンスだわ。ふふふつ)

合図とともに、自身が持つ主砲を発砲する。排莖され、装備に宿る付喪神が次弾を装填する。火薬の匂いが鼻を抜け、体に染み渡った。艦隊から全員の主砲が発砲された後、敵からも砲撃が行われる。両艦隊の間で放物線を描いて砲弾が飛び交い、やがて着弾する。

今自身にできることは戦うこと。そして、その結果として青年を守ること。軍艦の魂である自分には、それぐらいしかできないのだから。

周りが甘やかすなら、せめて自分だけは厳しく。そしてそれが青年のためにもなると信じ。

「沈みなさいー!」

叢雲は今日も、怪物たちと戦う。

「どうやら、終わったようですね」

「ふっ、はっ——え、何か言いました?」

「あ、ええ、思ったより作業姿が馴染んでいるようで」

一心不乱に作業に没頭する青年は、藍から声をかけられてようやく我に返る。体力にもまだ余裕があり、地味に楽しくなってきたとはとても言えない。のだが、心なしに藍の自分を見る目が少し引き気味である。

「えっと、終わったん……ですか?」

「はい、彼女たちの完勝ですね。怪我一つ負っていません」

「良かったです……」

「どうやら、塩の方も何とか最終工程に入ったようですね」

「ええ、後は僕がいなくても大丈夫でしょう」

男連中に背中をバシバシと叩かれる青年。口々に「よう頑張ってくれた」「うちの娘の婿に来ねえか」などと言われ、青年も照れながら頬をかく。

「幻想郷はいいところですね。僕でもこんな扱いをされるなんて」

「幽霊が見える、なんてものは些細なことなんですよ。私や紫様なんて妖怪ですし。幻想郷の人間にとっては今更問題にすることではあ

りません。私個人の意見としても、あなたは幻想郷に残るべきだったのだろうと思いますから」

「あ、藍さんは尻尾があるからともかくとして、紫さんもやっぱり妖怪なんですか？」

「紫様は妖怪の賢者とも呼ばれていますからね。スキマを操るお方で非常に長命でありまして、確か今年で御歳——いえ、何でもありません」

藍は一瞬だけ顔を青ざめさせたかと思うと、次の瞬間には冷や汗を垂らしながら澄ました顔に戻っていた。その瞬きの間に何が起きたのかなど、青年の知るところではない。

「と、ともかく、カミツレ殿は幻想郷において、艦娘の皆様を従えていること以外は、至って普通の人間なのですよ」

「普通、ですか」

「ええ、普通です。紫様から聞いていますが、人里でも十分暮らせるかと」

少しばかり目を伏せていた青年だが、ゆつくりと瞼を開く。わずかに微笑むと、「それはよかったです」とこぼすように呟いた。

が、次の瞬間、藍は顔を起こして海の彼方に目をやる。目つきは動物のように鋭くなっており、尻尾はわずかに逆立っていた。

「カミツレ殿、新しい敵が現れたようです」

「また……？ 数はどれぐらいでしょうか」

藍が目を凝らし、水平線を見つめる。

「数は5。そのうち2体が、他の3体より少し大きいですね」

「5、ですか……。艦娘の皆はどうしてますか？」

「距離を取っているようです。お互いに攻撃できないようですね」

5体のうち2体は、おそらく天龍のような軽巡洋艦クラスの怪物だろう。ともなれば、いかに数で上回っていても、被害が出る可能性は否めない。

魚雷の射程まで近づくにしても、軽巡洋艦級の砲撃を被弾する可能性が高まるため、迂闊に近寄ることは避けたほうがいだろう、などと吹雪たちからの聞きかじりの知識で考える。

結局自分には何もできないのか、と青年は空を仰いで嘆いた。彼女らのために頭を回したとしても、手段を考えつくことすらできないのだから。

せめて陸上だったなら、幻想郷の住人たちの力を借りることもできただろう。しかし海上では、空を飛べない場において戦力として活躍することを求めるのは、些か心苦しく無理がある。

——しかし、ふとそこで青年は思い出す。

紫はどのように戦っていただろうか。加えて、幻想郷の住人の戦い方の何を青年は知っているのだろうか。

湧き出る疑問を解消すべく、藍に話しかける。

「藍さん。幻想郷での戦い方というのを教えてください」

「戦い方……ですか？ 今はスペルカードによる『弾幕ごっこ』で揉め事を解決する手法がとられています。私ももちろん、紫様ほどではないですが腕に覚えがありますよ」

突然どうしたのか、と戸惑うような表情で藍は答える。

しかしその答えこそ、青年が求めていたものであった。

「藍さん。あの場所まで、その弾幕を飛ばしてもらうことはできますか？」

「……ほう。かつて大陸を恐怖に陥れたこの九尾狐を、ただの砲台同然に扱うとは、実に愉快ですよカミツレ殿」

藍はニヤリと八重歯を剥き出しにした不敵な笑みを浮かべ、海岸線の上空へと舞い上がっていった。

突然現れた増援の敵艦隊に対し、天龍は逸る気持ちを抑えながら距離を取るように指示を出した。旗艦の天龍を先頭とした単縦陣。天龍は艦隊を率いながら、その増援艦隊の様子を伺う。

(軽巡洋艦が1、駆逐艦が3、……それに重雷装巡洋艦が1、か)

思考を巡らしながら、重雷装巡洋艦——雷巡を視野に捉える。より

人に近くなった身体をしており、右腕の艤装が左腕に比べ大きい。顔ぐらい拜んでやろうかとも思ったが、残念ながら仮面により眼しか見えなかった。

軽巡洋艦級と駆逐艦級だけならば、砲撃戦で駆逐艦級を倒しながら接近し、天龍が攻撃を引きつけている間に魚雷で倒すことはできただろう。それが最も被害が少なく、そして駆逐艦の魚雷数を活かせるのだから。

が、魚雷攻撃に特化した軽巡洋艦、すなわち雷巡がいるともなれば話は別である。砲撃戦こそ恐るるに足らないものの、接近すれば魚雷により迎撃され、かといって砲撃戦では天龍だけで倒しきるのは難しい。

後ろについてくる駆逐艦たちを見る。思い思いの表情を浮かべているようだが、やはり不安そうな顔の者が多い。

責めることはできない。天龍自身にも有効的な打開策が見つからないのだから。

雷巡がいる限り、接近することは難しい。大きな損傷が見込まれる魚雷をわざわざ受けに行くのは自殺行為に等しく、旗艦としてそのような選択をするわけにはいかない。

夜になるのを待つのもあまり上策ではないだろう。早朝から作業を始めて数時間が経っただけでまだ昼時であり、夜まで長引かせるとなれば砲撃戦の距離でひたすら牽制をするしかない。

しかし、他に思いつく手段はない。根気よく戦線を維持するしかないと判断した天龍は後ろにつく駆逐艦たちにそれを伝えようとする。

その時、である。

「あのー天龍さん、上空から砲撃が来るの」

「はあ、上空？ 敵の砲撃が届くわけなのに、何寝ぼけたことを――」

漣の声に、天龍は白昼夢でも見ているんじゃないかと疑い、漣の示す方向を見た。しかし、白昼夢かと疑ったのは自身の方。

支援射撃

人間の子供ぐらいはありそうな大きさの紫色の球体が、上空を通り過ぎていく。それは一つだけではなく、合わせて九つ。

そして、その球体は敵の上空にて突如弾け飛び、その下方へと緑色と黄色の砲弾のような物を無数に撒き散らす。もちろん、一つだけではなく、合わせて九つ。

敵艦隊の海域だけ、まるでスコールでも降っているかのように緑と黄の砲弾に覆われる。そのスコールの中で怪物が動いているようにも見えるが、避けることはできていないようだ。

砲弾はその多くが怪物の外殻に弾かれているものの、幾つか貫通しているものも見受けられる。

その圧倒的攻撃力ももちろんだが、天龍はむしろその攻撃が織り成す砲弾の乱舞から、絵画の如き芸術のような美しさを感じていた。

(三式弾の対艦射撃——？ いや違う、これは……！)

紫色の球体が飛んできた方角を見れば、青年のいるはずの砂浜。そしてその上空には、藍と思しき女性が宙に浮いていた。

「各艦最大船速！ 砲撃を行いつつ接近し、魚雷をばら撒いてこい！」

手に持っていた刀を振るい、前傾姿勢のまま水上を滑走する天龍。背中に背負う機関に外付けされた主砲が幾度となく火を噴いた。

足の速い駆逐艦の5人の少女が、自身より右前方へ向かって移動する。

それを見送った天龍は、駆逐艦たちの砲炎の煙に包まれながら歯を剥き出しにして戦意を昂らせた。

「硝煙の匂いが最高だなあオイ！」

藍のものと思われる攻撃は、駆逐艦の一体を撃破、2体を大破、雷巡と軽巡を中破させた。そして、天龍と駆逐艦の5人の砲撃により、更なる追撃が行われる。この機は逃せない。

大破している駆逐艦級はもちろん、中破している重雷装艦級と軽巡洋艦級の魚雷発射管とみられる装備は破壊されている。

こうなつてしまえば、最早押し込むのが望ましい。

吹雪たちが魚雷を発射し、戦線を離脱しながら砲撃を行う。

敵まで辿りついた魚雷は、駆逐艦2体と雷巡を爆音と共に撃破。水柱が上がり、飛沫が降り注ぐ中を天龍は濡れることさえ厭わず猛進する。

残る軽巡洋艦級が天龍に対し砲撃を行う。天龍は腰を低くし、刀を両手で構えたまま体重移動により砲弾をかわす。

再び砲撃が行われる。天龍は機関部外付けの主砲をもぎ取り、投げつけることで砲弾の命中を防いだ。

——その体は、天龍の刀によつて真つ二つに分断されたのである。距離を取り、天龍は額に垂れる汗が飛沫かわからない物を拭い取る。

「天龍さん、格好いいのです!」

「おう、お前らのおかげだ、助かったぜ!」

駆逐艦の5人と合流し、天龍は電の賛辞に満面の笑みを浮かべた。近接戦闘は確かに強力ではあるが、それは駆逐艦の少女たちの働き合つてのもの。

倒したのは自身であるが、彼女たちがいなければ近づくことすらできなかつただろう。

駆逐艦は砲も弱い。しかし、その速度と魚雷による一撃離脱は決して侮つてはならない。特に、夜戦は駆逐艦がいてこそであるのだから。

駆逐艦がいるからこそ、他の艦は安心して戦闘ができるといっても過言ではない。

「あの藍さんという方にもお礼を言わないといけませんね」

「ああそうだな。あいつがいなかったら、誰かしら怪我してただろうし」

「あの天龍さん、天龍さんの主砲壊れてますよ?」

「いや、これは、その、仕方なくだな……っ」

吹雪に指摘され、照れながら言い訳を始める天龍。だがそれも虚し

く、漣と電がからかうような笑みを浮かべて、

「硝煙の匂いが最高だなー」

「フッフ怖いかー、なのです」

「お、お前らあ！」

戦闘終了したばかりであるのにこの始末。やはりこの艦隊名は間違っている。

こんな舐められた先生がいてたまるかと、天龍は喚くのであった。

「……お見事です」

「これぐらいならば朝飯前です。ただ、ここまで遠距離で弾幕を使用したのは初めてです。少しばかり計算に狂いがありました」

戦闘が終了したらしく、青年は心の底から安堵した。上空から降りてきた藍を労ったのだが、どこか不満そうな顔をしていた。

「そうなんですか？」

「命中性に難有りです。それから、やはり小さな弾幕では装甲を貫通できないようですね。そう考えると、艦娘の方々の命中精度はすさまじい……」

「なるほど。それにしても、遠目からでも綺麗なスペルカードでした」
「それは……ありがたく受け取っておきましょう」

その言葉でようやく、藍は小さな笑みをこぼす。更なる増援も見られないため、これにて今日の警備は終了と考えても問題はなさそうである。

(やつぱり、単純な戦闘力なら幻想郷の弾幕の方が強いのか……な?)
幻想郷の弾幕ごっこの攻撃はばら撒いて命中させるもの、艦娘の攻撃は弾道計算に基づいて貫徹するもの、とひとまず考える。

怪物に対する場合、空を飛べない幻想郷の面々は不利だが、陸上からの攻撃ならば問題ない。しかし単純攻撃力に劣り、単発当たりの命中性は高いとも言えないだろう。陸から離れば尚更である。

逆に艦娘の場合は数こそ撃てないものの、弾道計算に慣れているのか命中性と徹甲弾の単発当たりの攻撃力はなかなか高い。しかし流

石に空を飛ぶことはできない。

量的攻撃と空中機動力に長ける幻想郷の住人と、質的攻撃と水上機動力に長ける艦娘。

どうにかこれを活用することはできないだろうかと考えているうちに、艦娘たちが海岸にまで帰ってきていた。

「やっと作戦完了で、艦隊帰投かあ」

「ああ、みんなおかえり。それからありがとう」

無事に戻ってきたことを、青年は何より誇りに思う。特に今回は天龍の主砲以外に被害らしい被害もなく、無事であったことが青年を安心させた。

「おうよ。そうだ提督、これやる。新参者の登場だつてよ」

「また……カードか」

天龍から手渡されたのは二枚のカード。いずれも軽巡洋艦であるらしく、青年は流れ込んでくる艦娘の記憶を読み取った後に、まずは一人その場へ実体化させた。

「初めまして、龍田だよ。天龍ちゃんがご迷惑かけてないかなあ〜」

耳が蕩けそうな声。現れたのは、天龍と同じく駆逐艦より発達した体を持つ少女。長い槍を持っており、頭の上には天使のような輪が浮かんでいる。

「えっ、た、龍田!?!」

「あら〜、天龍ちゃん久しぶりねえ」

しかし、青年が口を開くより先に驚いていたのは天龍であった。

「知り合い? と、いや待って。ああ二番艦……そっか、姉妹なんだ?」

「ええ、そうよ。ふうん……あなたが提督ね〜、よろしくお願いします」

「うん、頼りない提督で悪いけどよろしく。あ、関係ないかもしれないけど、龍田といえれば朝食に天龍が竜田揚げを作ってくれたんだ、よね……」

その言葉を口にした瞬間、龍田が笑顔で天龍の方を向く。

笑顔を浮かべているものの、青年は龍田の笑顔にどこか冷徹さが含

まれている気がしてならないのだ。

「天龍ちゃん、どうして私が発祥の竜田揚げなんて作ったのかしら〜?」

「い、いや、オレたち随分の間会ってなかっただろ? そ、それで……」
「私のことを思い出しながら作ってくれたのね〜。天龍ちゃん、嬉しいわあ」

槍を砂浜に刺し、天龍に抱きつく龍田。天龍は引き剥がそうとしていたが、頬ずりをする龍田が離れようとしないうちに諦めたらしい。助けを求めている視線を天龍から送られるも、青年も龍田の機嫌を損ねることだけは回避しなくてはならない気がしたために、首をそっぽ向ける。

天龍からの抗議の声を聞こえないふりをして、青年は改めてもう一枚のカードを持ち直した。

(さて、じゃあもう一人は、っと)

カードからの記憶を読み取る。自分の記憶も流れ込んでいるのだと思うと少し気恥ずかしいが、もうどうにでもなれと半ば自棄になりつつ実体化を行った。

紺のセーラーにオレンジのネクタイ。緑色のリボンで髪を結っているその少女は、快活な声で挨拶をした。

「はい、お待たせ? 兵装実験軽巡、夕張、到着いたしました!」

夕張というその軽巡洋艦は真っ直ぐとした瞳で青年を見つめていた。真面目そうな顔つきは非常に好感が持て、粗暴な言葉を使う天龍とはまた違った印象を受ける。

今更だが、容姿と艦の種類には一定の法則でもあるのだろうか、と青年は不思議に感じた。

「えっと、夕張さん? 僕が提督です」

「夕張でいいわ。あなたが……提督。成程、よろしく願いますね!」

元気に答える夕張。挨拶と共々笑顔が眩しく、見ていて清々しい。「うん、よろしく。この艦隊のことについては、新しく着任した龍田と一緒に、同じ軽巡洋艦の天龍に聞いてほしい」

「え、天龍がいるんですか!」

と、天龍の名前を出した途端、夕張は目を輝かせて青年の襟元を掴む勢いで迫る。驚いた青年は、たまらず天龍のいる方へ指をさした。

「あ、お前夕張じゃないか! 元気だったか!」

「懐かしいわね天龍、ソロモン以来かしら!」

龍田に腕を取られていた天龍がようやく気づいたのか、夕張に助けを求めるかのように龍田の腕から抜け出して夕張のもとに駆け寄る。

ところが、意図しない人物がもう一人、夕張の元へと近づいた。

「夕張さん!」

「え、五月雨ちゃん! あなたも!?」

五月雨が涙目になりながら夕張の元へと駆けていく。夕張のところまであと少しというところで転びそうになるも、夕張が慌てずに五月雨を受け止めた。

「夕張さん、ごめんなさい、私、私は——」

「気にしないで五月雨ちゃん、最後まで私を助けようとしてくれたじゃない。感謝こそすれ、恨んでなんかないわ」

嗚咽とともに泣きじやくる五月雨を、夕張は胸元で抱きしめてその頭を優しくなでる。

青年が覗いた、夕張の最後の記憶。それは、沈みゆく体をどうすることもできないというのに、必死に引つ張りあげようとする五月雨の姿。離れるように忠告すれど、尚引つ張り涙を浮かべる五月雨の記憶。

そして五月雨の記憶。潜水艦らしき姿を発見していたというのに甘さ故に見逃し、夕張が魚雷を受ける。自身の責任であったというのに助けようにも助けられなかった、悔やんでも悔やみきれないであろう記憶。

かつての歴史など知らない。しかし、今こうして自身の手元には歴史がある。

もしこれからも艦娘が増えるのならば、それは歴史も増えていくという事。青年の知らない戦いの記憶が、艦娘の数だけ存在するということ。

戦いを繰り広げた彼女らの、あるいは道半ばで倒れてしまった彼女らの、はたまた生き抜いた彼女らの、歴史を受け止めきめることはできるのだろうか。

——時代を知ろうともしなかった自分に、受け止める資格などあるのだろうか。

「カミツレ殿。積もる話も有りましたようが、塩の製造に成功の目処が立ちました。紫様に報告もしなければなりませんから、ひとまず神社へ戻りましょう」

「はい、わかりました」

ないならば、その資格を得るために少なからず努力は必要になる。それは、彼女たちの提督としての義務だろう。

守矢神社の青年の自室。幻想郷でも使えると思った物や服などの持ち込んだ物が整理されており、布団も丁寧に畳まれていた。

天龍は早速入渠している。龍田と夕張は寝所を確保するために、神奈子と共に余った部屋を探していた。

守矢神社の方針としてはカードのまま過ごすのは流石に窮屈だろうという意見でまとまっているため、艦娘が増えてもこうして部屋が割り当てられる。際限なく増えるというならば、流石に何か手を考えなければならぬが。

「というわけで、塩自体は週に一度作ることになるからその時はつきっきりで警備をお願いしたいの」

「わかりました。僕の方から皆に話しておきます」

「普通の警備も忘れないでね？ 現れたら報告するからとりあえず倒して頂戴」

部屋の中に八雲紫と藍。守矢神社に戻ってから1時間が経過したが、その間ずっと紫と今後のことについて相談していたのである。ちなみに、藍は守矢神社から出された油揚げに恍惚とした表情を浮かべていた。

「そういえば、天狗の文という方はどうしたんですか？ 守矢神社と

の交渉というのは一体？」

「妖怪の山と守矢神社でお互い協力するということで和解したらしいわよ。怯えていたけど、心底安心した顔で帰っていったわ」

「何事もなかった……よううで何よりです？」

「……そう、あとは——」

「博麗神社だけね」

耳慣れない言葉に、青年は眉を寄せる。藍がわずかに目を細めていたが、青年はそれに気づくこともなく口に出す。

「博麗神社……？」

「ああ、気にしなくていいわ、ただの寂れた神社よ。これは私の問題だから」

「そうなんですか？」

「ええ。少なくともこの件に関してカミツレさんが出る幕は全くないわ」

語気を強める紫。念を押すかのように睨みつけられたが、青年としては睨まれることなど慣れていて。

だからこそ、そうまでして紫が隠そうとしている事実に興味があった。

「僕はその件には必要ないんですね？」

「ええ、全く」

「わかりました。そういうことでしたら」

紫はこわばった表情のまま、わずかに俯いて瞳を伏せる。

揺れる長い睫毛が再び開いたとき、紫はいつもの人を小馬鹿にしたような不敵な笑みを浮かべていた。

「さあ、では私たちは帰りましょうか、藍」

「え、でも油揚げがまだ残っていますよ？」

「あなた、油揚げと主人どちらが大切なのよ……」

「む、むむむむ……」

「あの、あまり悩まれると私も困るのよ？」

あまりにも口惜しそうな顔をしていたために、油揚げを載せていた皿ごと藍をスキマの向こうに見送った。絶世の美女だというのに、油揚げに執着して主を困らせる。

カフェでこぶ茶を頼んだ紫にせよ、どこか残念というべき部分を含んでいるのは主従共通なのだろうか。

(しかし、どうしたもんかな、これ)

紫と藍が帰ったあと、青年は部屋の片隅に視線をやる。そこに座していたのは、天龍が背負っていた機関部である。

天龍がもぎ取った主砲が被弾したこともあつてか見事に壊れており、青年の目からも完全に修理は不可能のように見えた。

これから天龍はどうやって戦うのだろうか、と考えていたそんな時である。

「やつほう、盟友。さつき頼まれてた件だけ——って、何それ！新しいカラクリかい？ ちよつと見せておくれよ！」

青年の部屋に、河童ごと河城にとりが現れたのだ。

「ああいや、これは艦娘の装備……えつと、艦装っていうもので——」
「面白そう、面白そうだよ！ あ、その前に、頼まれてたこれ、渡しとくね」

新しいおもちゃを手に入れた子供のように喜ぶにとりだが、一度冷静になったようで青年に物を手渡した。

それは、駆逐艦が使用する弾薬。主砲に装填される弾薬と、魚雷発射管に装填される魚雷——が2つずつ。

「艦装の付喪神に協力してもらって、完璧な複製に成功したよ。沢山必要かい？」

「……それは凄いな。まだ作れるなら、作れるだけ作って欲しい」

「いいよ。どうせ廃材を加工して作ってるから、材料に困ることはないし」

「少し大きなサイズのものもあるけど、できるかな？」

「任せておくれよ。現物があるなら、何だつて作ってやるさ」

なんと頼もしい言葉だろうか、と青年は歓喜する。予め天龍から預かっておいた主砲弾をにとりに渡し、さらに言葉を続ける。

「全く同じものがあればいいんだよね？」

「ああ、何だって作るよ」

「なら、後でこの機関と同じものを見せるよ。丁度同型艦の子がいるんだ。だから、これを修理してくれないかな？ 多分、同じ艦種の子は艤装が共通する部分もあるだろうし」

今度はにとりが目をキラキラと光らせ、花のように微笑んだ。

「いいの!? 触れるだけでも嬉しいよ！ ありがとう、盟友！」

感極まったのか、にとりは両腕を開きにかけて青年に飛びついてきた。

「ちよっ——と」

リュックを背負ったまま青年に飛びついたにとり。その重量を含めた体当たりにも近い抱きつきを受け止めきれはらずもなく、青年は畳に背中を投げ出すように転がってしまった。

「ねえ盟友！ よかったらさ、色々見してもらえるお礼に私が君の艦娘たちの装備をメンテナンスしてあげてもいいんだけど、どうだろう！」

「え、ちよ、顔が近いって！」

話を聞いていない青年。それどころではないのだ。人と触れ合うことすら未だ慣れていないというのに、顔が、唇が触れそうな距離で会話など出来ようもない。

しかしにとりは気にした風もなく、むしろ顔を近づけるかのように青年に畳み掛ける。

「ねえねえどうなのさ盟友！ 私としては珍しいものに触れるだけで嬉しいから、メンテナンスの他にもいっぱいサービスしてあげるよ！」

「そ、その前にそこをどいて！」

「私に頼んだことを考えても、他に頼む奴がないんでしょ？ 私がしてあげるからさ、ね！」

「わ、わかった、わかったから！」

「え、いいの？ 私がしてもいいの!?!」

「して欲しいです！ お願いしますにとりさん！ だから——」

「やったー！　じゃ、じゃあ早速！」

「ひ、昼間から何の話をしているんですかあッ！」

突如、障子を開けて乱入してきた早苗。そして、部屋の中で自身に乗る興奮した様子の肩で息をしているにとりを見て、さらに声を荒げる。

「こ、こ、こ、こ、こ、こ、こは神社ですよ！　ななな何を淫らなことを！」

「お、落ち着いてさなちゃん。多分勘違いしてるから——」

「どう勘違いしろと言うんですか！　カミツレさん……カミツレさんの……」

「スケコマシ！」と、顔を真っ赤にしながら廊下を大きな足音を鳴らして駆けていく早苗。

入れ替わりに、諏訪子が姿を見せた。部屋の中を一望し、青年に視線を落ち着ける。何が起きたのかを察したのか、諏訪子はニヤリと笑う。

しかし同時に、その笑い顔には恐怖すら感じられた。

「で？　やるのかい？」

「やりません！　勘違いです！」

「別に構わないけどさあ。カミツレ君、私との約束忘れてないよね？」

「……は、はいもちろん」

「じゃあ、今度からやめようね？　どういいうつもりでもちゃんと話をつけること」

「えっと、すみませんでした？」

なんで自分が怒られているんだろうか、と首をひねる。しかし、約束は約束である。早苗を悲しませれば自分は死ぬ。おそらく冗談抜きで。

露知らず、青年の上で豪快に笑うにとり。それを見て、青年はますます頭が痛くなり、畳の上に体を投げ出した。

油断していると、諏訪子が更に青年の腹の上に飛び乗ってきた。体

重自体は別段気にならないものの、腹部への衝撃はなかなか応える。

「ほらほら、可愛い美少女が上に乗っかってるよ。何も思わないのかな？」

「さつきと言ってる事が違うじゃないですか」

「これはただのスキンシップだって」

楽しみに笑う諏訪子にとり。上に乗られている青年としては重苦しくてかなわないのだが、抗議する気にもなれず、深い溜息をつく。

その内、様子を見に来た早苗が青年の部屋に戻ってきたとき、諏訪子までもが青年の上に乗っかってるのを見て真似しようかと部屋に入ってきた。

流石に3人分の体重を乗せていては体が持たないと起き上がった青年は、3人を部屋の外へ追い出した。早苗は更に機嫌が悪くなっていたが、あとは諏訪子に丸投げするとしよう。

改めて寝転がり、天井を見て物思いにふける。

燃料はクリア、弾薬もクリア、入渠に閉しても問題は見つからない。装備の修復も目処は立った。ひとまず艦娘が幻想郷で戦い続けることは可能である。

幻想郷の住人の弾幕という援護が得られるならば、それは艦娘達にとって少くない負担減となる。これは今後の課題となるだろう。

今、青年自身が抱えている悩みとしてはもう一つ。戦っている艦娘たちがどのように戦っているのかわからないことである。

せめて会話だけでもできれば違いうだろうな、と思ったところで、青年は一つの可能性に行き着いた。部屋を出て、追い出した彼女の姿を探す。

上官として。司令官として。提督として。戦えないなら戦えないなりに、サポートしなければならぬ。彼女たちが怪我をしないためにも。

まだきつと何か出来ることがあるはずであると思い、思考を停止させることなく青年は動き出した。

012 博麗神社を偵察せよ!

透き通るような青と澄み渡った風。それらを全身いっぱいを感じながら、青年は空を飛んでいた。

早苗に抱えられながら。当然だが、青年が空など飛べるはずもない。

「さ、さなちゃん。あとどれぐらいかかりそう?」

「さあ、あと15分ぐらいでしょうか。もう少しかかります」

「う、うん。腕は疲れてない?」

「はい、大丈夫ですよ! 全然疲れていません!」

いわゆるお姫様だっこ。早苗は脇の下と膝裏に腕を通して青年を引き寄せるかのように抱えており、当の青年は為す術もなく腕組みして虚空を見つめていた。

ふと顔を上げれば空が見えるものの、まず視界に入ってくるのは至近距離の早苗の顔である。かといって視線を下げれば、そこにはご立派なお山が二つ並ぶ——いや、青年を抱き抱えることでその山は少し形を変えていた。

恥ずかしいどころの話ではない。女性に抱えられ、情けなくもそれに甘んじる自分。胸が押し付けられているのはわざとではないにしろ、後でこれ訴えられたりしないよな、などと小心者の心が震える。

その上、抱えられているために胸と言わず早苗の体の柔らかさが直に伝わり、これが青年を悩ませるのだ。本人は自覚しているのかしていないのか知らないが、ただ前を見て空を飛んでいる状態である。おそらく無自覚だろう。

「も、もう少し体を離してくれないかな?」

「できないですね。それこそ腕が疲れてしまいます。私に触るのは……嫌かも知れないですけど、我慢してくださいね」

「あ、いや、こっちこそごめん……」

非常に申し訳なさそうな顔で謝る早苗。その顔を見ては、青年も最早何も言うことはできず、ただ目をつむって思考に没頭するしかなかった。

『神奈子さん、幻想郷には博麗神社というところがあるらしいです。紫さんはどうやらその神社で何か案件を抱えているようで……』

『ほう、幻想郷に守矢神社以外の神社があるのかい。しかもあのスキマ妖怪の悩みの種、と』

『昨日聞いたときには、紫さんは何やら触れて欲しくないようでした。幻想郷が今抱えている問題、残るは博麗神社だけ、とのことですが』
『ならカミツレ、早苗と一緒にその博麗神社に行つてきな。場所は河童に聞いとくよ。ああ、何人か艦娘も連れて行くといい』

『……どうすればいいんでしょう？』

『スキマ妖怪に恩を売るチャンスだ。交渉は任せる。もし解決した上で、守矢神社が信仰を得るために邪魔になりうるようなら——神社を奪つてきな』

『乱暴ですね』

『そうならないことを祈つてるよ』

といった経緯により、青年は早苗にそのことを話した。早苗は先日のとりの一件により、青年から露骨に目を逸らしていたが、神奈子からの頼みであると話すとすぐに引き受けることを了承する。

『私の力が必要なんですか？ 仕方ありませんね、任せてくださいカミツレさんー』

『うん、頼りにしてる』

『カミツレさんとふたりつきりでお出かけですね、うふふ』

『あ、カードの状態で天龍と龍田も連れて行くから』

『あ、はい……わかりました』

『やることはわかつてるよね？』

『要は、博麗神社を明け渡すように要求すればいいんですよね？』

『いや、ちよつと違うけど』

『ふふん。見事解決して、私のことを見直させてあげますよ。でも難しい話はお任せします』

そして、にとりから博麗神社の場所を聞き出し、ある程度距離があるために空を飛んで向かうことになったのである。

「どうやって空を飛ぶんだよ、と疑問を神奈子にぶつけたが、返ってきたのはひどく単純な答えであつた。」

『早苗に抱えてもらえばいいじゃないか』

腕を掴まれて空を飛んだことなら、青年は初日に経験している。その際にそのまま戦闘に突入して振り回されたことを考慮しての発言だろう。

だが、青年としても抵抗がある。年の若い、それも自身より年下の女性に抱き抱えられて身を任せるというのは例え早苗であつても頭を痛めた。

しかし、徒歩となれば一日、下手をすれば二日かかってしまう距離である。歩かせて疲弊させることとの天秤にかければ、答えは一択であつた。

『さなちゃん……や、優しくしてね?』

『任せてください! 最初はゆっくりで、徐々に速くしますね。最高に気持ちいいですよ!』

ということ、現在高速飛行中である。速度が上がっているのは、早苗も口では平気と言っているものの、おそらく腕が疲れてきたためだろう。

早苗は何も言っていないが、もしかしたらやはり恥ずかしさもあり、耐えられなくなっているのかもしれない。

「見えましたよ、カミツレさん!」

申し訳なさと気恥ずかしさが織り交ざりながら、青年は進行方向を見つめる。そこに見えたのは、小高い山の上に立つ小さな神社と思しき建物。

ようやくこつ恥ずかしい旅が終わるのか、と青年は思うのであった。

厳粛な雰囲気に含まれる鳥居前。それは周りに立つ木々がそうさせるのか、それとも神社そのものが荘厳であるからか。

小高い山の上、大木に囲まれるようにしてその神社は建っていた。鳥居前にて一礼し、青年は早苗と一緒に足を進める。

「随分と物々しい場所だね？」

「はい。にとりさんの話ではもう少し柔らかい雰囲気だと聞いていましたが、そうでもないようです」

境内を歩き、本殿へと続く石畳の道を進む。落ち葉があちこちに落ちており、掃除がされていないようである。人の手が加わっている様子はまるでない。

拜殿前にて、賽銭を投入し二礼二拍手一礼。

「カミツレさんともつと仲良くなれますように」

そういうのは心の内でお願するものなんじゃないか、などと願いつつ、赤面しながら名も知れぬ神様へ祈りを捧げる。自分の願う事は世界平和でお茶を濁しておこう。

参拝を終えると、早苗と共に青年は神社の周りをうろうろと散策し始める。パツと見た限りでは神社の造りは古く、かなりの年数が経っていると思われた。

神社としての規模は大きくないものの、やはりどこか殺気にも怒気にも似たような厳粛な雰囲気に含まれており、気を抜くことができない。仮に何かが襲って来たとしても、自分は何もできないのだから、心配するだけ無駄かもしれないが。

我ながら何とも情けない、とため息をつく。

艦娘たちが語る「司令官」や「提督」というのがどのようなものは青年も知らない。だが、流石に肉体一つで軍艦に挑むような人間でないことぐらいはわかる。

自分は艦娘たちにとってどのような提督になるべきなのか、何をし

てあげられるのか。その答えを見つけ出すのは、長くなりそうである。

神社の周囲を散策したものの、結局何も見つからなかった。紫がこぼしていた『博麗神社の問題』というのが何であったのかは見当がつかない。

神社の屋根に見えるいくつかの落ち葉。紫が話していたように、本当に何も無い寂れた神社という結論で間違いないのだろうか。

「カミツレさん、私から気になったことを一つ」

「ん、どうしたの？」

本殿の正面まで戻ってきたとき、早苗が思い立ったように顔を上げた。

「この神社、神様の力が全然感じられません。うちの神社でしたら神奈子様や諏訪子様の力が感じられるんですが、この神社は何もないんです」

「……確かに、あの2人に似た雰囲気は感じられない、かな。そういえば、ここは管理する人がいないんだね」

「神社によつては時代の変化で管理する者がいなくなってしまう神社もあります。もしかしたら、ここもそうなのかもしれません」

「神奈子さんが言ってたように、信仰がなくなつたから神様としての存在を維持できなくなつたこと……?」

「かもしれない。ただ、神奈子様も諏訪子様も、外の世界ではそれは有名な神様だったんです。人々に知られていないのに読み取れないような大きな力を持っている、とも考えられます」

定義が曖昧であるが、かと言って大して知りもしない神社について細かく説明させる方が酷である。その認識を持つておく、ということではいい。

と、思ったその時である。

「霊夢、帰ってきたのか!?!」

拜殿の障子を開け、一人の小さな小さな少女が頬を赤らめて満面の

笑みで廊下に現れた。しかし、青年たちの顔を見るとその顔からは徐々に明るさが失われていき、とぼとぼ神社の中へ戻っていく。

誰もいないと思っていた神社の中で突然の出現。青年も早苗と同じく驚いたものの、みすみす見逃してしまいうけにもいかない。明らかに神社に関係がありそうな人物を放っておいては、解決するものも解決しないだろう。

「ちよ、ちよつと待つてくださいー！」

「……参拝客なんて珍しいな、本当に」

くるりと振り向いたその少女。長い金髪を持ち、後頭部は赤いリボンで結われているものの少し乱れ気味である。幼い顔に似合わぬ大きな瓢箪を手に持ち、機嫌が悪いのか目つきは凍りつきそうなほど鋭い。

そして、最も特徴的であるのが頭部に生える大きな二本の角。何かを抉り取るかのように曲がりくねっており、非常に攻撃的な形状をしていた。

「鬼…………」

早苗がポツリと呟く。それと同時に、早苗は冷や汗を尋常ではないほど流し、その瞳も戦慄していた。

「こんなちっぽけな神社に何の用があつて来たんだい？」

「わ、私たちは、博麗神社が何か問題を抱えていると聞いたので、その事実を確認しに……」

「ああ、霊夢がいなくなったことか。姿を消してしばらくになる。私が入因で、何か、何か知らないうちに霊夢を怒らせたんじゃないかって不安で、不安で……」

泣き出しそうな表情で、鬼の少女が俯く。

早苗はそれを見て何か予想外だったのか、顔をハツと上げてオロオロ慌て、その場でウロウロと足を踏む。

そんな二人を見て、早苗はともかく鬼の少女の方は何か事情がありそうだと思い、青年は呼吸を整えた。

「話を聞かせてもらえますか？ 霊夢さん、という方がいなくなつたことも含めて、お願いします」

「けど、あんまり人に聞かせる話じゃないってあのスキマ妖怪も——」
「……紫さんも関わっているんですね？　お願いします、僕らはそれを確かめに来たんです」

廊下に立つ鬼の少女の傍に近寄り、少しだけ目線を上げて離す青年。酒瓶を持っていることから予想していたが、やはり酒臭さが少女から漂う。

早苗が青年の背後で目を見張り、更に慌てる。しかし、そんなことを気にしている場合でもなく、青年は鬼の少女から目を逸らさない。

しばらく鬼の少女が青年を見つめていたが、やがて口を開いた。

「立ち話もなんだから、上がつとくれ」

本殿の部屋の中、酒瓶がいくつか転がっており、鬼の少女からも漂うアルコールの鼻につく匂いが部屋中に充満していた。

部屋の間取りは守矢神社とそう大して変わらないが、やはり散らかっているためか幾分狭く見える。

ふと、早苗を見る。どこか気分が悪そうな顔で、目をぐるぐると回していた。

「さなちゃん、大丈夫？　匂いに当てられた？」

「うう、それもありますが、相手はあの鬼ですよ鬼。カミツレさん、どうしてそんなに平気なんですか？」

「いや、鬼って言われてもピンと来ないし、外の世界じゃ会ったことないし……話もできそうだけど、そんなにマズイの？」

「マズイも何も、全種族中最強とも言われる鬼ですよ？　もうダメですオシマイです、勝てるわけがありません……」

人間を食べる、との言葉に青年もようやく危機感を覚える。幻想郷には妖怪も人間も共存しているが、決して全員が全員仲良くしているわけではない。

紫にも注意されていた。妖怪をあまり信用しないほうがいい、と。

「散らかってて悪いけど、適当に座ってくれ。ああ、この神社には座布団なんてないよ」

「あ、はい」

空の酒瓶を蹴り飛ばして部屋の隅に追いやる鬼の少女。その荒っぽさは確かに物々しいが、傍から見れば少女が怒って酒瓶を蹴っているだけ。

早苗が言うほど危険な種族なのだろうか、とも青年は思う。

青年と早苗は部屋の中央に置かれたちやぶ台の前に座る。その反対側に鬼の少女が座り、酒のツマミと思われる物を差し出してきた。

「酒もいるかい？」

「いえ、飲みに来たわけではないので。お気持ちだけ頂いておきます」
「そうかい」

ボサボサの頭を掻き、少女は部屋の周囲をキョロキョロと見渡す。酒しかないことに気づいたのか、ため息をついて額に手を当てていた。

その様子を見て、青年はかすれるような小さな声で早苗に話しかけた。

「何だか、もてなそうとしてくれてるみたいだけど……」

「え、ええ。聞いていた噂とは随分違います……」

そうして鬼の少女がようやく立ち直ったかと思うと、酒に酔っているからおよそ焦点を合わせる気がない視線で青年に大して口を開いた。

「で、何の話だったっけか」

「博麗神社のこと、それから霊夢さんという方のこと、です」

「あー、そうだった」

「申し遅れました。僕は茅野守連といいます」

「わ、私は東風谷早苗です」

「二人共人間か。私は鬼の伊吹萃香だ。たまにここに遊びに来てる」

鬼の少女、伊吹萃香はそのまま続ける。

「ここは博麗神社って言うんだ。って、流石にそりや知ってるか」

「はい。ただ、どういった神社であるとか、霊夢さんという方がどういった方であるかは知りません」

「ここは外の世界と幻想郷の境界にある神社さ。時々外の世界の住人

が紛れ込んでくるから、それを送り返す場所ってところだ」

「……なるほど。それは興味深いです」

「私も詳しいことは知らないがな。で、霊夢……博麗霊夢っていううちんまい女が、この神社の巫女をやってるってわけさ。早苗、とか言ったな。あんたから似た感じがしたから、てつきり霊夢が帰ってきたのかと思っただ」

ちんまい萃香の言葉を受けて、早苗は目を見開く。

博麗霊夢という人物が巫女であるというなら、同じく巫女である早苗から何か似通った部分を感じることもあるのかもしれない。

萃香は酔いが醒めてきたのか、赤みを帯びていた顔が徐々に白く戻っていく。が、酒が足りないと感じたのか、酒瓶を片手にその場でラッパ飲みをした。

ぶはー、と、酒臭さを帯びた息が部屋を包む。

「霊夢がいなくなったのは大体一週間前だ。さつきも言ったが、私が知らないうちに何か霊夢の気に障るようなことをしたんじゃないかって不安なんだよお」

「……失礼ですが、お酒の飲みすぎ、という可能性は？」

「ない」

「そうですか。霊夢さんというのはどんな方なんです？」

「良くも悪くも自分に正直な奴、だな。ケチで金にうるさくて、自分勝手に生意気で、鬼のように強い癖に、弱い者いじめはしない。困ってる人は放つとかない、マメで神社の掃除は毎日欠かさなくて、友人が多いのには——」

「——寂しい奴」と萃香は落ち込みを含んだ眼差しで語る。

青年は頭の中で博麗霊夢という人物についての情報を整理する。聞く限りでは自己中心的と言えなくもないが、決して利己的ではなさそうである。

積極的とまではいかずとも、他人との接触を拒んでいるわけではな。むしろ受け入れ、そしてどこかで孤独を感じている、と受け取るべきなのか。

「あの、その霊夢さんという方はどのようになくなったんですか？」

早苗の質問を受けて、萃香はわずかに俯いた。

「わからないんだ。私もスキマ妖怪から話を聞いたただけだから」

「紫さんですか。参考までに、どういった内容でしたか？」

「アイツが博麗神社に来たとき、既に霊夢はいなくなってた。魔理沙っていう魔法使いが最後に遊びに来たのがその5日前。今から10日、いや11日前までには、確かに霊夢はいたんだ」

「となると、6日前から11日前の間に霊夢さんの身に何かあった、ということですか。その前後に何か変わったことはありませんでしたか？」

「変わったこと……そうだな、幻想郷に海が現れたらしい」

「……ふむ」

「確か、丁度紫が博麗神社に来た日だったかな。だから6日前だ」

萃香は指をぐるぐる回しながら記憶を探るような表情で語る。語られた言葉に、青年は顎に手をあて思考にふける。

博麗の巫女というのがどのような人物か、というのはとりあえず今は考えなくていい。気になるのは、博麗霊夢という人物がなぜ失踪したかということ。

「霊夢さんがいなくなると、何か問題が起きるんでしょうか？」

「……なんだお前、霊夢がどうでもいい奴だつて言いたいのか？」

突如発せられた怒気と、心の奥底、心臓をわし掴みにされるような畏怖。ただの鋭利な視線ではない。これが鬼か、と青年は実感する。

「……聞き方が悪かったです、ごめんなさい。僕が言いたいのは、霊夢さんがいなくなることでのどのような問題が発生しうるのか、紫さんが気にするようなこと、隠そうとしたことは何なのか、ということですよ」

萃香は睨みつけるその視線をやめようとはしなかったが、「まあいい」とだけ言って言葉を続ける。

「博麗神社は外の世界と幻想郷を隔てる『博麗大結界』を持つ。博麗の巫女、霊夢はその管理者つてことだ。代々の博麗の巫女が管理を引き継いでいくんだが、今霊夢の奴がいらない。これがどういうことかわかるか？」

「……次の博麗の巫女を決めないと、結界の管理者が空席となってしまう、ということでしょうか」

「そう。博麗大結界が破壊されるまではいかずとも、その効力が弱まるだけで隔たりが維持できなくなる」

「幻想郷と外の世界とで、人の行き来ができるようになってしまうということですか？」

「人間だけじゃなく妖怪もだ。あのスキマ妖怪は秩序の崩壊が怖いのだ」

萃香の話から考えるのであれば、少なくとも博麗の巫女がいないというのは無視できないことである。

幻想郷と外の世界とが繋がれば、人と妖怪が無為に行き来するようになる。

紫から聞いた話では、幻想郷には外の世界で忘れ去られたモノや妖怪が安寧を求めて辿り着いた場所、とのこと。

妖怪を頭ごなしに悪と決めつけているわけではない。しかし、何も知らない人間にとつては恐怖となり、また安全な妖怪だけではないことも事実。同様に、力の弱い妖怪もいる。そういった妖怪は世界から忘れ去られれば存在が失われる。つまり、消滅してしまうのだ。

だが、同時にこうも考えてしまう。博麗大結界が消滅することで現世と幻想郷が融合することに、どのような利害が発生するのだろうか、と。

しかし、青年はまだまだ幻想郷を知らない。そして、知らないにも関わらず一定の恩がある紫の意思に背くことは、青年にはできなかった。

「なら、その霊夢さんを見つけないといけませんね」

「捜索チームがいるよ。強さは粒ぞろいの奴らだが、それでも見つけられないとなると……。博麗大結界は残ってるから、生きてることはわかるんだ」

「……手がかりは？」

「ない。霊夢がいなくなったところを見た奴はいないし、既に幻想郷のほとんども調べ尽くした。調べてないのは……紫が差し止めてる

海だけだな」

「海だけ——」

萃香は寂しげな表情で酒瓶をあおり、深い息を吐く。その息が酒臭いだとかそんなことを考える暇もなく、青年は頭を働かせた。

紫、博麗の巫女、突如現れた海、守矢神社、茅野守連と艦娘。

思い当たる節はある。だからその可能性に行き着いたとき、青年は苦悶の表情を浮かべ、眉間にしわを寄せて力の限りちやぶ台を叩いた。

音に驚いたのか、早苗が肩を竦ませる。萃香は青年を小さく睨みつけるに留まっていたが、酒瓶を再びあおると瓶をゆっくりと畳に置いた。

「カミツレとか言ったな。そういや、アンタはあの紫とどういう関係だい？」

「……伊吹さん、妖怪の山に神社が現れたのはご存知ですか？」

「萃香でいい。妖怪の山か、懐かしい場所だなあ」

「その神社、実は外の世界からやってきたんです」

「外の世界から……ほう？ それは最近のことかい？」

「つい3日前ですね」

萃香は不敵な笑みを浮かべ、ちやぶ台の上に置いていた拳を握り締める。どれだけの力が入っているのか、部屋中にギリギリとした音が響いた。

青年は呼吸を整え、心を落ち着かせて萃香を見据える。

「落ち着いてください。今まで尋ねたことは嘘ではありません。霊夢さんがいなくなったことは、僕らも初めて知ったんです」

「海ができたこととアンタらが来たこと、何か関わりは？」

「全くない、とも言い切れませんが、少なくとも僕らは身に覚えがありません」

「いいだろう。逃げずにガンを返してくるその度胸に免じて信じてやる」

「……睨んでるつもりはありませんが、ありがとうございます」

「で、何をイライラしてるんだ？」

ようやく萃香の殺気を帯びた視線が緩み、小さく笑みを浮かべた顔になる。それを見て、青年もようやく心を静め、自身の考えを改めて詰める。

紫の思惑は一体何か、自分を呼び止めた言は真実か。幻想郷は正義か、知らぬ間に操られていたのか、一体海が持つ秘密は何か。

考えていると、早苗が袖の端を引いて青年の気を引く。何事かと思えば、耳元に頭を寄せてヒソヒソと話し始める。

「カミツレさん、カミツレさん」

「ん、どうしたのさなちゃん？」

「私たちがここに来た理由、忘れてないですよ？」

「もちろん、それも含めて今考えてるとこ」

「細かいことは私にはわかりませんので、お任せします。ただ、二つだけいいですか？」

「うん？」

「この神社は守矢神社の商売敵になることはなさそうです。それから、鬼を敵に回してはいけません。私をドキドキさせるのはまた別の機会にお願いします」

「……わかった、ありがとう」

冷や汗を垂らした早苗が離れると、萃香はコロコロと笑っていた。

「私の前で隠し事とは、なかなか命知らずだね」

「すみません、僕らも必死でして」

「本当に度胸がある奴だ。どこでそんな胆力手に入れたんだい？」

「……まあ、外の世界も外の世界で、なかなか鍛えられる場所だということですよ。図太さだけは折り紙つきですから」

「面白そうだ。一度行ってみたいね」

「遠慮ってご存知ですか？」

「アンタほどじゃない」

萃香はもう一度酒瓶をあおり、その中身を飲み干した。一升瓶であろうそれは、この会話が始まる前にはまだ半分ほど残っていたはずである。

とんだ飲兵衛だと思いながら、青年は口を開く。

「萃香さん、実は僕、紫さんが苦手です」

「まあ、私も気に入らない部分はある」

「怒らないで聞いてくださいいね？ 今日僕らは、我々守矢神社が信仰を得る邪魔になりうるなら、この博麗神社をどうにかするよう言われました」

「続ける」

「ただ、考えた限りでは問題なさそうです。それより、あなたを敵に回したくありません」

「ま、こんな貧乏神社、誰も来やしないからな」

多少皮肉のこもっていた発言であったものの、萃香はそれを気にする様子もない。それによって、萃香は博麗神社の味方ではなく博麗霊夢の味方であることを青年は確信する。

だから、あとは青年にできる死に物狂いの交渉をするだけ。カードを切るのは今しかない。

「萃香さん、僕らとしても霊夢さんのことは心配です。だから、取引をしましょう」

「聞こうじやないかい」

「海の上の空を飛べないから調べられないんですよね？ なら、僕たちが海の方を調べますから、どうか守矢神社の味方をしてもらえませんか？」

「海の方は紫が調べるとか言っていたが、どういうことなんだ？ それに、調べるにしてもどうやって調べるって言うんだ。まさか泳ぐとでも？」

「……申し遅れました」

ポケットから艦娘のカード——天龍と龍田を取り出してその場に実体化させる。

堂々たる態度の天龍、微笑に冷たさを感じさせる龍田の二人に囲まれながら、青年は躊躇いを含む言葉で告げた。

「自分は茅野守連——艦娘を預かる提督です」

してやられたな、といった表情の萃香。微笑むと同時に――
その雰囲気は、凶悪なものへと変わった。

013 発令、『紅号作戦』

自分は、この場でこの選択を取るべきではなかったのだろうか、と後悔しても遅い。

凍りつく博麗神社の客間。萃香から漂う怒りのようなモノは、青年にだって感じ取れる。その雰囲気にも早苗も、天龍と龍田も警戒するのだが――。

一瞬見せた鬼の表情はどこへ行つたのか。瞬きをすれば、萃香はどこか楽しんでいるかのような表情に変わり、白い八重歯を覗かせた。

「ほーう、提督ってなんだい？」

「……大まかに言えば、軍艦を指揮する者のことです」

「なら、やつぱりあんたらは海に関係あるんじゃないか？ 海が現れて、すぐにそれと関連する能力を持つ人間が現れるなんて都合が良いぞ」

「……本当に偶然が重なったとしか」

「海、あんたらが現れたこと、霊夢がいなくなったこと、関係性は？」

「身の潔白を証明するためにも霊夢さんは僕らが探します。これは紫さんにもできないことです。だから、守矢神社の味方になってくれませんか？」

「ふうん……？」

品定めでもするように、そして早苗に対しても同様にジロジロと見る萃香。しばしの間考え込むように腕を組んでいたが、やがて萃香は顔を上げて神社の外へ顔を向ける。

「魔理沙、いるんだろう？」

「……ああ」

突然、障子をゆっくりと開けて現れたのは一人の少女。黒と白の服に先の尖った黒の帽子。ウェーブがかった金髪が部屋に入る風とともに揺れ、少女であるにも関わらずどこか悲しみを含むその表情には不思議な魅力があった。

部屋を見渡し、萃香を視界に収める少女。一度目を伏せたかと思うと、心臓を貫かれるかのような鋭い視線が青年と早苗に向けられた。「その四人の神社が妖怪の山にあるんだとき。ちよつと山に向かつて力比べしてきてくれないかい?」

「なつ——!? ど、どういうことですか!」

「あんたらの実力がわからないのに、そんな交渉に乗れるわけがないよ。もし弱いなら、力づくで言うこと聞かせる方がてっとり早い」

「……こちらには紫さんもいます」

「他力本願だねえ。あんまり情けないと、私が手を出しちゃうよ?」

「守矢神社の味方にはなつてもらえないんですか?」

「私は霊夢の味方だ」

想定していない展開に、青年は齒噛みする。戦鬨を起こすことなど、ましてや鬼を相手取ることなど全く考えていなかった。

妖怪の山に災いを持ち込むために、この場に來たわけではない。この少女二人に高圧的に接するつもりもないし、力で物事を解決する気もない。

紫の抱え込む謎を解明しに來ただけであるというのに、どうしてこのようなことになってしまったのだろう。日頃の行いが悪かったのだろうか。

「その子達は皆やる気満々みたいだけど?」

天龍と龍田は既に劍と槍をそれぞれ構え、薄目で萃香と魔理沙に相對していた。早苗は未だ座ったままであるが、その握った拳には力が入り、細かく震えていることがわかる。

「なあ提督。コイツさつきから弱いなら力づくで言うこと聞かせるとか言つてたけどよお、こつちが力で言うこと聞かせればいいんじゃないか?」

「やめてくれ。分が悪いのはわかつてるはずだ」

「勝てはしないけど、負けることもないわよ?」

「龍田も落ち着いて」

自分のせいだ。

他人と腰を据えて話したこともないというのに、人の生命に関わる

ことに首を突っ込んで。甘えているだけでは嫌だからと功を急いで格好つけて。拳句の果てに、恩を仇で返そうとしているこの始末。

自分はもしかして、大変な仕事を預かってしまったのではないかと、今更になって気がついた。

どうするか、この場をどう収めるかを考えていると、ポツンと立っていた魔理沙が障子を閉めて部屋の中にちよこんと座る。

ゆつくりと、顔を上げる魔理沙。そして早苗に一度視線を送ったかと思えば、やがてそれは青年にも向けられた。

「なあ……アンタ」

「茅野守連です。お嬢さんは？」

「霧雨魔理沙だ。魔理沙でいいぜ」

「じゃあ魔理沙ちゃん、何が聞きたい？」

唐突なちゃん付けに魔理沙は不快感を覚えたのか、露骨に嫌そうな顔をした。が、ひとつ息をつくくと、帽子のつばを下げ、顔を隠すようにして言葉が投げかけられる。

「霊夢の奴が海と何かしら関係あるっていうのは……多分間違いないと思うんだぜ。悔しいけど、私じゃ海の上を飛べないから手も足も出ない」

「それは……何か根拠が？」

「調べた結果だよ。霊夢を捜してるけど、一向に見つからない。幻想郷のほとんどを飛び回ったんだ。海だけまだ調べてない」

「……それで？」

「アンタなら。アンタたちなら……海を調べられるのか？」

顔を上げ、目尻に涙を浮かべて訴えかけるように声を絞り出す魔理沙。その様子に、その場にいた萃香以外は全員がドキリと胸を鳴らす。

早苗がハンカチを取り出し、魔理沙の涙を拭き取ろうとする。しかし魔理沙は触られることを嫌がったのか、ハンカチだけ受け取って涙を拭く。でも流石に鼻を噛んでいるのまで見ると逆に早苗が可愛そうである。

霊夢を探した、と語る魔理沙は、おそらく萃香が先ほど話していた

捜索チームの一人。強さも折り紙つきと言えるのかもしれない。

萃香の同意が得られずとも、魔理沙の同意が得られればあるいは、と考えるのだが、仮に海を捜索するとしても、霊夢という少女が見つかる保証はない。

「調べるだけ調べてみるつもりです。ただ、どのぐらい海が広いのか、どのような怪物がいるのかは見当が付きません。それと、本当に霊夢さんが海と関係しているのかも——」

「あれだけ調べたのに霊夢がいらないんだぜ！ 霊夢はきつと海にいる！ 海で独りになったから、私たちが助けに来るのを待ってるんだぜ！」

「……落ち着いてください」

錯乱しているのか、涙目で悲鳴を上げる魔理沙。

萃香の話が本当なら、霊夢がいなくなったのは6日前から11日前までの間。およそ一週間ほど行方不明ともなれば、心配する気持ちは青年としてもわからないでもない。

しかし、今自分に何がしてあげられるというのだろう。

「霊夢、どこに行っちゃったんだぜ……霊夢、霊夢う……」

「心当たりのある場所は全て調べたんですね？」

「当たり前なんだぜ！ 伊達に霊夢の親友はやってない！」

「霊夢さんが嫌がるようなことをした覚えは？」

「しない！ 絶対だ！ 嫌がってるならあいつはすぐ口に出すし、それでも聞かないなら手を出してくるんだぜ!? 第一——私は霊夢のことが大好きなんだよ！」

それまで溜まっていた鬱憤を吐き出すかのように、魔理沙は叫ぶ。

よくよく見れば、魔理沙はあちこち汚れていた。スカート部分はいくつかほつれた場所が有り、靴も泥だらけ。手には生傷、顔は涙の跡。髪には葉っぱが引つかかかっており、その髪すらもボサボサである。

気持ちを落ち着けてこそ気づけることもある。おそらく魔理沙は、それこそ草の根をかき分けるように探したのだろう。

親友と呼ぶまでの人物。ならば、調べた場所は山のようにあるはずだ。それでも見つからないとなれば、抱える不安は想像するに難しい

ほどだろう。

ボロボロの状態の魔理沙を汚らしいなどとは微塵も思わない。それは魔理沙が霊夢のことを心配したが故の結果であり、思いの強さであるのだ。

それほどまでに思われる、慕われ好かれる霊夢とは一体どのような人物なのだろうか、と青年は大きな興味を抱く。

同時に、青年は気づかれない程度に早苗に視線を送る。

中学校を卒業後、青年は早苗の前から姿を消した。お互いに友人として認識していたにも関わらず、一週間どころではなく6年間も。

早苗はどのような気持ちだったのだろうか。恨んでいたのだろうか、それとも待っていてくれたのだろうか、はたまた忘れていたのだろうか。

最初に出会った時に気付かれることがなかったのは、久しぶりだったからということもあるだろう。だから、早苗がどう思っていたかはわからない。

そうして初めて、神奈子や諏訪子はどのように青年のことを知らされていたのだろうか、そしてそれにどう思っていたのだろうかと疑問を抱く。

自分は守矢神社にとって何なのか。否、守矢神社にとって何“だ”た”のか。早苗の口からはつきりと聞かされたことはない。

自分は早苗にとってどういう人物であるのか聞かねばならないだろう。決して自惚れなどではなく、むしろ恐怖すら感じながら。

だが、それは今するべきことではない。

魔理沙をかつての早苗と同じような立場にさせてはいけない。魔理沙には、待ち人を待つのではなく、自分から追わせよう。

自身と早苗のことなど、それが解決してからでも決して遅くはない。事態が収束して落ち着いたとき、青年自身の口から話せばいい。

「魔理沙ちゃん」

「……魔理沙でいい」

「魔理沙ちゃん、とりあえず霊夢さんは僕らも探す。できることはするし、海の方は任せて欲しい」

「……1ヶ月以内に探し出せるのか？ 紫はそれ以上の場合次の博麗の巫女の育成に着手しないとイケないって言ってたんだぜ」

「……1ヶ月、か」

再び紫という言葉が場に出る。

博麗の巫女が世襲制でないと仮定するならば、おそらく才覚のある者が就くものなのだろう。そして、*「紫が」*育成をするということ。

紫と博麗神社には、少なくとも浅くない縁があるとみて間違いない。

紫が何を考えているのか、青年にはある程度予想はついてきた。しかし、紫を信じるかどうかはまた別の問題である。

「今、海の方の状況は決して優勢とは言えない。怪物がどこに現れるかは不明で、戦力も十分とは言えないんだ。だから幻想郷の実力者の協力が必要になる」

「で、それを私にやらせようっていうのか？」

「少し違うかな」

萃香の方を一瞬だけ見る。しかしその一瞬で視線を向けたことに感づかれたようで、萃香もまた青年の方を見る。

青年はその視線に応えるように、胸を張って口を開いた。

「幻想郷の皆さんには、少しの間沿岸の警備をお願いしたいんです。上空ならば怪物の攻撃が届くことはありません。そこから一方的に弾幕で攻撃してもらえれば、攻撃がはじかれることもありますが、決して被害は出ません」

「じゃあ、あんたらは何をする？ 察する限り、事実上海の上で自在に戦えるのはそいつらだけみたいだが」

「沿岸の警備を任せられるなら*「遠征」*を行い、*「霊夢さん」*搜索と兼ねて近海の調査に乗り出します」

「……なんだと？」

青年が艦隊を運営する上で考えていたこと。それは、襲いかかってくる怪物を受動的に攻撃するのではなく、艦娘が能動的に海上を徘徊・警備することで沿岸部までの海域を安全地帯とすることであった。

近海が安全となるなら製塩の護衛をわざわざ付ける必要もなくなり、他の作業も行えるようになる。

加えて、更に艦隊を出せば海のその向こうを調べることができると。その向こうまでの海域を安全地帯としたならばさらにその向こうへ。要約すれば、目的は「制海権の確保」。

現状では艦娘の人数が足りない。広い幻想郷の海をカバーするには人数も速度も足りないし、維持もできない。

しかし、現状を補うだけなら、空中機動力に優れる者が沿岸の警備に当たればどうだろうか。艦娘は安心して海の向こうへ進めるし、霊夢の搜索も可能となる。

「今の」紫さんを信用するのは少し不安になりました。だから万が一に備え、守矢神社は守矢神社で独自に友好を築くことにします」

「海の情報を実事独占する立場か。スキマ妖怪を出し抜くには現状ではもってこいだな」

「出し抜くまでは考えていません。ただ僕らは自分たちの幻想郷での立場を安定させたいだけです。もちろん、霊夢さんの搜索は真面目にさせてもらいます」

その場に正座し、姿勢を正す青年。萃香と魔理沙をそれぞれ一瞥、ひとつ瞬きをした後に、両手をつけてその頭を畳へと擦り付けるように下げた。

「だから、どうかあの場所を壊さないでください。僕は守矢神社に来ることができて、本当に幸せなんです」

目の前に映るのはくたびれた無数の畳の目。シン、と静まる空気が耳に痛みを感じさせ、息が詰まる様な空間を形成する。

そんな状況でも、青年の心は落ち着いていた。自分の頭一つで大切な場所を守るなら、いくらでも下げてやるとでも言うように。

「土下座までして頼み込むことなのか？」

「土下座で済むなら、この安い頭ぐらいいくらでも下げる」

「……頭を上げるんだぜ」

魔理沙からの声に、青年は視線を下げたままゆっくりと頭を上げた。天龍、早苗は目を見開いて驚いており、龍田も薄目のまま青年を

見つめている。

情けないと思われているだろうか。だが、それでも構わない。家族という地位を与えられた場所を守るためならば、と青年は口を開く。

「答えを……聞きたい」

「……萃香が言っただのは、単純に性格が伴わない奴と約束をしたくないってことなんだ。霊夢がいなくてイライラしてたのもある」

「望むに見合うだけの実力が伴っているかわかりませんが、努力はします」

「紫の奴が認めるだけの神社なんだろう？ それに、男が頭一つ下げてるんだ。なら——」

「私は」とまで魔理沙が口にしたところで、障子が勢いよく開く。

現れたのはこれまた少女。セミロングの銀髪に青と白を基調としたエプロンドレス。生真面目そうな雰囲気をもとっている人物のその表情は、決して穏やかとは言えないものであった。

「魔理沙！ ここにいたの!？」

「咲夜、どうしたんだぜ？ そんなに慌てて——」

「大変なのよ！ 紅魔館が、お嬢様が！」

酷く狼狽した様子の咲夜と呼ばれる少女。魔理沙がそれを落ち着かせようとすることも、それどころではないのか魔理沙の両方を掴みですがるように揺さぶる。

「しっかり話してくれ！ 一体何があったんだぜ!? レミリアがどうしたー!」

「お嬢様が——紅魔館の皆が、海の怪物みたいな姿に——っ!」

瞬間、青年の表情は凍りつく。

「チビども！ 非常呼集だ!」

「先ほどの電文で準備万端です！ いつでも出撃できます!」

早苗に抱えられ、鎮守府へとんぼ返りした青年。最高速での飛行に

多少酔いを感じながら天龍と龍田を実体化させると、怒鳴り声のような号令が神社内に響き渡った。

当然である。「深海棲艦」が幻想郷の内陸部にまで侵入しているともなれば、それを撃退することが自身らの信用につながるのだから。

(まあ……放っておけないだけなんだけど)

深海魚のような姿、どこか軍艦と似た特性を持つ怪物。それらをまとめて「深海棲艦」と呼ぶことに決めた。

その中でも駆逐艦、軽巡洋艦と様々なタイプがあるために、ある程度似通った個体ごとに名前を当てはめる。そうすることで、敵戦力の把握がより一層簡単になるのだ。これは青年であっても、実際に戦う艦娘であっても同じこと。

まさか、海洋調査員としての知恵がここで生きるとは想像もしなかったが。

「待ってたよ、盟友」

「にとりさん、来てたんだ？」

「随分な物言いだね。折角便利なモノを持ってきてやったっていうのに」

「仕事が早くて助かるよ」

拜殿から現れたのはにとりと夕張。二人共何かをいじくりまわしていたのか、あちこちに油による汚れが付いていた。

にとりは技術屋、夕張は兵装実験軽巡洋艦。夕張は機械いじりが好きな一面があつたらしく、今では意気投合して艦娘の艤装のメンテナンスをしている。

「じゃあ、確かに渡したよ」

「……何これ？」

「無線電信機さ！ 受け取った電文は自動音声で読み上げてくれるよ！ 入力は携帯電話のキーを使ってね！」

「あ、あれ……？ 普通の無線機頼んでたはずなのに……」

そうして、逆パカ状態の片割れの携帯と、黒いカチューシャのような物を渡してくるにとり。青年はそれを受け取ると、困惑しながらも

装着して付け心地を確認した。

艦娘が戦っている状況がある程度把握したい。その思いでにとりに通話できる無線機を作ってもらおうように頼んだのだが――。

「ごめん、集積回路の部分がどうしても復元できなかったんだ。でも、艦娘は皆電文が打てるみたいだから、お兄さん許して！」

「そっか……ごめんね、無理を言って」

「ちなみに自動音声はゆっくりボイスさ」

「え、遅いの？」

「違うけどそういうことにしといて」

試しにと、電へ電文を打ってみる。

『好キナ食ベ物ハ何カナ』

『ナスハ嫌イナノデス』

まったくとしたやる気のなさそうな声がカチューシャ型のヘッドホンから流れてきた。読み上げ音声はともかく、こんなものでもあるだけありがたいと思い、青年はにとりへと感謝の旨を伝えるのであった。

守矢神社本殿の一室にて、早苗、神奈子、諏訪子と共に青年は座っていた。神奈子と諏訪子はどこかピリピリしており、傍から見ても何かに警戒しているような雰囲気を感じられる。

「あの、お二方ともどうされたんですか？」

「いやね、何か変な気が空気中に漂ってるのさ。結界は張り直したから心配ないけど、あまりいい気分にはなれないね」

「空気が汚れてるみたいなんだよね。理由がわからないけど」

若干緊張した面持ちの2柱。早苗も若干ながら何かに違和感を覚えていたような様子だが、青年には何も感じられない。

いつまでも話を進めないわけにも行かないだろうと思い、青年は博麗神社で得た情報について簡単に説明する。

「結界の管理者の行方不明か……なるほど、それは私たちも困る。信仰が得られないから幻想郷に来たというのに元通り、では生きていけ

ないからな」

「その霊夢って子がいる可能性があるのが海ってことなんだね」

「紫さんが示した期限は1ヶ月、それ以降は次期巫女の育成に入らないといけないというこっちはらしいです」

「ふうん……。ならカミツレ、アンタはあのスキマ妖怪をどう見る？」

唐突に質問をする神奈子。このタイミングでその質問となれば、おそらく神奈子も青年と同様の疑問を抱いているのだろう。

「正直、僕を引き止めたのは利用している部分があると思っています。いくら戦力になりそうとは言え、見ず知らずの人間を手厚く歓迎することはなかなか考えられません」

「『霊夢とやらを搜索するため』だけに幻想郷に残された可能性、というのもちゃんと考えてるみたいだね」

「気づいたときにちやぶ台を叩いてしまうぐらいには」

「それはちよつと見てみたかったな」と、神奈子は口角を上げる。

『紫様はあなた方を害するつもりは一切なく、敵ではありません。むしろ、何かあれば必ずあなた方の助けになるでしょう』

藍の言葉を信用するのであれば、紫は味方であるように伺える。しかし、敵ではないと言っているだけで、味方であるとは一言も言っていない。

ただ利用している可能性は否めないし、霊夢を搜索する手段としての価値のためだけに残された、優遇されたと考えても反論は考えつかないのだ。

霊夢を搜索する、という紫の意思の下で働くなら助けになる。だがもしも歯向かうなら、紫の意思に背くならば、それは見放されるのと同義なのかもしれない。

思い違いならそれでいいが、確たる証拠もないために青年は揺れる。

「で、この空気について何かわかるかい？」

「妖怪の山の麓にある紅魔館という洋館とその周辺で、生物が深海棲

艦に変化するという異常事態が発生しているそうです。僕にはわかりませんが、おそらくそれかと」

博麗神社に現れた人物は十六夜咲夜。今異常が起きている紅魔館でメイド長を務める人物であり、異常を発見した最初の人間。

博麗霊夢の搜索チームの1人であり、今日も搜索をしていたのだという。昼時に昼食を仕込みに戻った時は何もおかしな点はなかったが、搜索から帰って紅魔館に戻るとほとんどの人物が深海棲艦と化していたらしい。

紅魔館の近くに、霧の湖と呼ばれる湖がある。深海棲艦となった者たちはそこに集まっており、自我が強い者は陸上ですら活動しているという。

「ただの不思議な現象なら見逃すべきだが、深海棲艦が現れた以上、艦娘を擁する我々としては無視できないだろうな」

「僕もそう思います。ただ、気になることが一つ」

「人間、妖怪、妖精の深海棲艦化、か」

「原因がわからない以上、僕らに飛び火してくる可能性も考えられないではないです。それに、深海棲艦になった人たちを、攻撃した後に考えられる可能性……」

あるいはこれが深海棲艦による侵攻なのか。もしくは原因は別のところにあるのか。情報が少なすぎるために、迂闊に手出しもできない。

そう、思っていたのに。

「んじゃ、早苗と一緒にさっさと叩いてきな。諏訪子はお留守番だけど、私も後で向かうから」

「……………は？」

「責任は私が持つ。今はこの事態を一刻も早く収束させることの方が大事だ。ボヤボヤしていると、同盟を結んだ山にまで被害が出るんだ」

「ほ、本気で言ってるんですか？」

「冗談では言えんさ」

仕方ない、とでも思っているのか諏訪子がため息をつく。既に2柱の間で意思を共有しているのかは知らないが、その様子から見ると

二言は出てこないだろう。

万が一自らも深海棲艦のようになってしまったら。倒すというのは殺すということ。自身も殺されてしまうのだろうか。

あるいは、自身が早苗を殺すことになってしまうのだろうか。神奈子を、諏訪子を。艦娘を殺すことに――。

「……後悔、しませんね?」

「多少の無茶は覚悟の上。今までが上手くいきすぎた。神を侮らないことだ」

「……では、諏訪湖から流れる川のルートで向かいます」

青年は苦々しく思いながらも強く頷き、早苗と共に立ち上がる。不安は拭いきれていないものの、考えすぎても何もできない。

神奈子のような度胸の強さは自分に足りないところだな、とも思うが、強気になりすぎて誰かを失うことは最も避けねばならないだろう。

だが、自分が未熟であることなど、自分自身が一番よく知っている。

「あまり一人で悩まないでくださいね?」

「……ありがとう、さなちゃん」

まるで心の中を見透かしているかのような早苗の言葉に青年は一瞬固まるも、その気遣いに心が安らぐのを感じて言葉を漏らす。

もしかしたら、この戦いの後には、結果として業が生まれてしまうのかもしれない。恨まれ、憎まれ、疎まれて、突き放される。

(責任は……僕にある)

望むところだ。生まれてこのかた、負の感情ばかり押し付けられてきたのだ。今更悪口の千や二千程度で怯むほど臆病ではない。この叩きのめされた精神に、まだ叩くところがあるなら叩いてみせろ。いざとなったら自分の首ぐらい差し出してやるさ、と。

拝殿を出て、整列する艦娘たちの前にて、青年は頭の中を整理しながら作戦を伝達する。

「場所は紅魔館! 目的は周辺水域に居座る深海棲艦の撃滅! 皆の健闘を祈る!」

「提督よお、大事な戦いなんだ。作戦名ぐらいつけてくれよ」

「え、あ……じゃ、じゃあ、『紅魔館の人たち救出作戦』でどうか——」
「聞いたかオメーら！ 『紅号作戦』が発令された！ 艦隊抜錨！ オ
レの旗に続け！」
『はい！』

こうして締まりのないまま、戦いは幕を開けたのである。

014 暗闇より出でし暗闇

闘符『水雷戦隊』

—— 軽巡『夕張』

駆逐『吹雪』『叢雲』『漣』『電』『五月雨』

軽符『第十六戦隊』

—— 軽巡『天龍』『龍田』

守矢神社の近くにある湖より、霧の湖と呼ばれる場所へ流れる川。その川の上空で、青年は早苗に抱えられて空を飛んでいた。

時は夕刻。清流のせせらぎと、茜色に染まりつつある夕空が気分によつては絵画の如き印象を与える景色だが、残念ながら取り巻く問題が青年にそれを許しはしなかった。

遠くから響く爆発のような音。心に不安という矢を突き刺すには、十分すぎるものである。

『我が艦隊、河川ノ流レト共ニ急行中。提督ノ判断ヲ乞フ』

「ん？ あ、夕張からだ。ええつと、『ソノママ霧ノ湖ニ進撃シテ下サイ。敵艦ヲ発見シタラ戦ツテネ』、と。こんなんでいいのかな？」

カチューシャ型の電信機から読み上げられる夕張の意見。そのままたりとしたボイスだけは如何ともしがたいのだが、やはりこうして直接連絡を取ることが出来るのは青年としても諸手を挙げて喜びたいところである。

下を見れば、艦娘達から手を振られていた。ちゃんと見守っていることを伝えるためにも、ぎこちない微笑みを浮かべつつも小さく手を振る。

「ちよ、ちよつと待つてえ、置いてかないでよお！」

夕張だけ遅れているのは気のせいなのだろうか。一応二個艦隊の旗艦を任せているはずなのだが。

(本当に大丈夫かな……)

夕張型軽巡洋艦一番艦、夕張。コンパクトなボディに重武装が特徴であるが、その分重量、排水量と機関に問題を抱えており、速度は一

一般的な軽巡洋艦より僅かに劣る。

「み、みんなごめんね」

そのため、艦隊運動の際に旗艦を務めると、僚艦が彼女の速度に合わせなければならなくなる。

艦娘ごとの特徴を把握していなかった自分の責任だな、とも思い、青年は心の中で小さく夕張に謝った。

この異変。神奈子の案としては、神奈子が周辺捜索を行い、原因がそれに準ずるものを調査し、青年たちは守矢神社の湖から霧の湖へつながらる川を利用して紅魔館に向かうというものである。

よって、青年と早苗、艦娘に与えられた目的は、移動中に守矢神社の湖へ向かおうとする深海棲艦がいればそれを撃退しつつ、先行しているであろう魔理沙や咲夜と合流することである。

「さなちゃん、紅魔館っていうところについて何か知ってる？」

「はい。射命丸さんとの話し合いの時に、幻想郷のことについて色々聞かせてもらいました」

「結界を壊したことは許せませんがね」とぷりぷり怒りながら、早苗は思い出すように続ける。

「妖怪の山の麓にある洋館で、吸血鬼の少女が主人を務めているそうですよ。吸血鬼は姉妹で、使用人としてメイド、門番、それから大きな図書館も内蔵しているとのことですよ」

「……吸血鬼、ねえ」

「フッフ、この体勢。私もカミツレさんの首筋を狙えるんですよ？」

「そういうのはちゃんと相手を選びなさい」

と、青年が苦笑してそのからかいを制したのだが、返す早苗の反応は唇を尖らせる、といったものであった。理由は不明だが拗ねさせてしまったらしい。

吸血鬼、と聞いてすぐに思いつくのはやはり吸血鬼ドラキュラ。ヴラド・ツェペシユをモデルとした吸血鬼の小説である。

外の世界において様々な超常現象に遭遇した青年でも、流石に吸血鬼と出会ったことはない。ただ、その噂はよく知っている。曰く、心臓に杭を打たれると死ぬ。銀の弾丸を受けると死ぬ。日光を浴びる

と死ぬ。十字架が嫌い。流水が嫌い。ニンニクが嫌い。香草が嫌い等々……後半は子供かよ、と思う部分もあるのだがそれはさておき。他には、男の吸血鬼は処女の血を好むとか。仮に異性の血を好むということであれば、その吸血鬼の少女が好むのは――。

と、そこまで考えたところで思考を捨てる。考えたところで埒が明かないし、それ以前に深海棲艦化しているのだ。まずはそこからどうするかを考えることが必要だろう。

「メイドっていうのはあの咲夜さんって人？」

「はい、おそらくは」

「昼食を作りに戻った時は何もなかったみたいだから、その間に何かあったって考えるのが妥当なのかな」

日頃の哨戒は紫や藍が行っている。そのため、何かあれば知らせに来るのは間違いない。

考えられるのは、深海棲艦が新たな方法で攻め込みに来たということ。目的も何も不明な彼らだが、明確に攻撃の意思を示しているために応戦せざるを得ない。

深海棲艦と化した人々も、襲って来るのだろうか。その場合、戦えばどうなってしまうのだろうか。

考えうる最悪は生命の損失、すなわち――死。

だが、そこに現れた恐怖は、苦悩をあざ笑うかのごとし。

『艦隊旗艦夕張。我、敵艦ヲ発見セリ』

「なん……ですかあれは……」

誰もが、その姿を目で追った。釘付けにされ、離すことなどできなかった。

遙か遠く、夕日に重なるようにして、仁王立ちするかの如く顕在する深海棲艦。

一瞬、少女が見えたかのように空目した。しかし、そこに存在したのは単独、たった1体の駆逐艦級――“駆逐イ級”であった。しかし、どうにも様子がおかしい。

(遠くに居るからわかりにくいけど……目が赤い?)

その瞳。憤怒に呑まれたかのような赤みを帯び、ゆらゆらと川の流
れに揺れるごとに、体の周りに纏う陽炎の如き深紅が揺れる。

その威圧感たるや、青年がかつて幻想郷に来た日に目前にした深海
棲艦とはまるで違う。研ぎ澄まされた、もつと洗練されたかのような
怨恨。

「カミツレさん、マズいですよ」

「あんなの相手にしたくないんだけどなあ……」

目蓋を震わせる早苗。返事こそしたものの、青年も内心穏やかでは
ない。

おそらくあれは、深海棲艦と化した幻想郷の住民だろう。だが、果
たして本当に戦ってもいいものだろうか。

などと未だに悩む青年を取り残して、深海棲艦はその主砲をためら
いなく発射した。

『回避運動。急イデ距離ヲ取ツテ』

悩む暇は与えてくれないらしい。やらなければやられるという、明
確な事実。

艦隊が深海棲艦から十分な距離を置いて、自身らも十分な高度を維
持した。ある程度安全な位置まで移動した時に、夕張から電文が入
る。

『提督ノ判断ヲ乞ウ』

『皆ハドウ思ッテルノ』

『正体不明ニツキ懸念アリ。命令アラバ戦闘ニ移行ス』

不安があるなどと言われてしまったのは、青年も命令が出しにくく
なってしまう。実際どうなのだろうか、と思って川を航行中の艦隊を
見れば、確かに警戒している様子が見られた。

艦娘の士気が低下しているのはよろしくない。このまま仮に戦闘
を命令すれば、思わぬ被害が出るだろう。

なら、何をしてあげれば、艦娘の皆はやる気を出してくれるのだろ

う。

『提督ヨリ達ス』

艦娘は命を賭している。それは彼女たち自身が掛金になることと同じ。

『今回、全テノ戦闘終了後』

自分の命令で、彼女たちはそうして戦っているのだ。

『最モ活躍シタ子ヲMVPトシテ選ビ』

ならば、自身もそれに全力で応えよう。代え難い貢献には、代え難い感謝を以て報いねばなるまい。

『僕ガソノ子ノ願イヲ一ツ、出来ル限リノ範囲デ叶エマス』

電文を打った後、下方の川から大きな音が聞こえる。騒ぎ立てるような声が耳に届いたため、どうしたのだろうと思つて下を見れば、艦隊は既に単縦陣を敷いて敵艦に向かい始めていた。

(まだ命令してないんだけど……)

やんややんやと騒ぎながら敵艦へ向かっていく艦娘たち。先程までとは違い、旺盛な士気に満ち溢れているようだ。満ち溢れさせた原因がそれでいいのだろうかとも思うが。

『司令官トノデートヲ希望シマス』

「あれ、これ誰だろ？ 吹雪？」

『好キナダケ機械弄リシタイデス』

「夕張？ お堅い文章以外も打てるんだ……」

『チクマ大明神』

「誰だ今の」

油断だけはしないようにと追加で電文を打つと、「はい」と大きな声が川から響いてきた。

(や、やる気が出たならいいけど)

青年も半ば頬を引きつらせながら手を振り返した。無事を祈るばかりである。

攻撃された以上、倒す他ない。それが艦娘のためであり、早苗のためともなる。同時に、完全に正しい、全てを手に入れようとする選択肢などないのだと、青年はようやく理解したのだ。

ふと、早苗に満面の笑みで見つめられていることに気づく。誰が見ても、それは何かを企んでいると思いき顔に見えることは間違いない。

「カミツレさん。活躍した子には何でもするって言いましたよね？」

「え……いや、その……」

「艦娘の子達が」、とは言っていないませんよねー？」

「え、あの、さなちや——」

その瞬間、世界がブレる。

青年が幻想郷に来た日にも味わった、立体的な高速機動。それは、先日博麗神社に連れて行かれた時の比ではない。

赤い駆逐イ級が早苗に気づき、その口から砲撃を行うも、早苗は回避。その上空に達した時、早苗は豊かに実った懐から一枚の札を取り出した。瞬間、その札は輝き出す。

秘術『グレイソーマタージ』

早苗が使用したスペルカード。弾幕で形作られた赤と青の星が重なり、周囲へ拡散したと思えば更に星が形作られ、放射状に放たれる。

最初の弾幕が向かっていくのを確認した時に、早苗は既に二度目の星を形成していた。そして、三度目の星が広がり、赤いイ級へと着弾する。

大きな音の連なりと水柱。上空にいる青年と早苗のところはまだその飛沫が舞い上がるが、そんなものを気にしている余裕はない。

弾幕は針の穴を通すような精密攻撃ではない。幻想郷におけるスぺルカードルールとは、あくまでもお遊びとしてのルール。避けられる隙間を適度に作り、かつ広範囲にばら撒くものである。

早苗の弾幕も、水面に吸い込まれていくものがほとんどであった。しかし、面制圧という形で押さえ込まれたイ級は、少なくとも大破程度にまで追い込まれているだろう。

水柱が収まり、その中から赤い駆逐イ級が姿を現した。だが、先程まで抱いていた期待は水泡と化す。

「小破止まり……」

多少甲殻が剥がれた程度。早苗もまた、驚きを隠しきれていないようだ。

いかに機動力に優れる駆逐艦とはいえ、すべての弾幕を避けたわけではないだろう。考えられるのは、装甲によるダメージ緩和。

しかし、昨日藍の弾幕が駆逐艦級の装甲を貫き、それこそ大破にまで追い込んでいたことは、青年だけではなく戦っていた艦娘も知っている。

当たり所が悪い、では説明がつかない。早苗のスペルカードは少なくとも三度に渡って広範囲高密度の弾幕を放っているのだ。

と、そうやって悩んでいれば、赤い駆逐イ級が動き始めた。

動きこそ、早苗の空中機動力をもってすれば速いとは言えない。口からの砲撃が行われるも、高速飛翔中の早苗に当てるなどまず難しい。

対空砲でもあれば話は別だっただろうな、と青年は胸を撫で下ろす。

艦娘の記憶から得た知識の限りではあるが、対空砲や対空機銃でハリネズミのような敵艦だったならば、いかに空を飛んでいようと脅威となる。

だが、いくら装甲が多少厚いとは言えイ級はイ級。十分な対空性能を備えていないことは幾度にも渡る戦いの中で知っている。

——が、青年はとある可能性に行き着いた。

「さなちゃん、一旦離れて」

「え、そ、そんなあ……。急に言われても今は降ろせませんよ？」

「違う、あのイ級から距離を――」

夜符『ナイトバード』

直後、駆逐イ級から三日月状の青色と緑色の弾幕が交互に放たれた。狙いは早苗であり、そして抱えられた自分。

早苗は青年が言葉を紡ぐより先に体で理解したのか、目視の後に急いで距離を取り始めた。その速度の変化に、青年は内蔵を圧迫されるような感覚を覚える。冗談抜きで、イ級よりも早苗に殺されるのが先かもしれないな、などと考える暇がある分、まだまだ自分には余裕があるのだろう。

気づいたのは本当に偶然である。赤い駆逐イ級を目撃したとき、一瞬だけ少女が見えたこと。そして、幻想郷の住人が深海棲艦と化していること。

つまり深海棲艦は、深海棲艦化させた者の能力まで使う可能性があるのだろう。

「さなちゃん、牽制しながら回避！ 絶対に攻撃を受けないで！」

「わかってますー！」

『宛、夕張。敵イ級、装甲強化型ノ可能性アリ、軽巡ノ主砲デ貫徹ヲ試ミテ欲シイ。コチラハ弾幕ヲ上空ニ引キ付ケル』

『了解』

早苗が星型の弾幕を放つ。その攻撃は赤いイ級に避けられてしまったものの、その注意を艦娘から逸らすことには成功したらしい。

再び、駆逐イ級から弾幕が放たれる。それは野球のボールほどの大きさのものであったり、直進するレーザー状のものであったり様々。それらを目の当たりにする、スレスレで早苗が回避するのだ

が、その規則性や輝きに、青年はどこか芸術に似たような物を感じていた。

交戦距離に侵入した艦隊は、やる気に満ち溢れている天龍が最初に砲撃を始めた。続いて龍田、夕張が砲撃を行う。少し間を置いて、駆逐艦が砲撃を行った。

軽巡3人による砲撃は1発、駆逐艦の砲撃は2発が着弾した。爆音とともによろめくその姿を見れば、ダメージを与えていることぐらいわかる。しかし、駆逐艦の砲は弾かれてしまったために、やはり軽巡が要となるらしい。

『夕張ヨリ提督へ。好き勝手ヤツテ構イマセンカ』

『怪我シナイヨウニ』

軽巡の砲撃が装甲を貫徹するならば、この場は彼女たちの砲撃に任せよう。自分たちに来ることは、艦娘にイ級の弾幕が向かわないように引き付けることだ。

だが、既に遅かった。軽巡洋艦の砲撃を一度受けた駆逐イ級は、破損した自身の魚雷発射管を投棄し、川の流れに逆らうように上り始める。

「さなちゃんー！」

「わかっていきますー！」

早苗が再び、星型の弾幕を放つ。今度は命中したものの、イ級は止まらない。

急に接近してきた赤いイ級に驚いてはいるものの、艦娘たちは慌てず、それぞれの仕事をこなしている。

軽巡洋艦3人による連続砲撃、駆逐艦3人による近距離砲撃。そして、残る2人が魚雷を発射する位置に達した時――。

闇符 『デイマーケイション』

赤いイ級は、砲撃によってボロボロになりながらも弾幕を放った。

赤と緑の楕円形の弾幕が交差しながら波状に展開する。そしてそれは、魚雷を発射するために接近していた吹雪と叢雲を襲った。

バリアのように装甲が起動し、弾幕をあらぬ方向へと弾く。しかし一発だけではない。

何度も何度も、弾幕が襲うたびに、吹雪と叢雲は回避行動を取りながら装甲で弾幕を阻み、進んでいく。

だが終わらない。その波状攻撃と共に、こぶし大ほどの青い弾幕がまるで魚の卵のように集まり、早苗を正確に狙って襲って来るのである。

その攻撃に当たるまいとして、早苗は今までより速度を上げて縦横無尽に回避した。そして、その早苗に抱き抱えられている青年の様子は言わずもがな。

（あ、あれ？ 僕ってこの戦闘についてくる意味あったのかな……？）
雨あられと襲い来る弾幕の中、吹雪と叢雲が弾幕を回避しながら前進しているのが揺れる視界の中で見える。しかし、早苗の速度がさらに上がり、もう何も見えない。

——やがて、遠くで聞こえる爆音と瀑布のような音。鳴り止みゆく砲撃音。落ちていく早苗の飛行速度。

頭を振って視界を安定させる。そして目の前に飛び込んできたのは、深海棲艦の姿が消え、艦娘たちが怪我もなく残心に浸る光景であった。

『味方ノ損害ハ軽微。 継戦ハ可能』

『了解、才疲レ様。 各艦へ、今ノ戦闘区域ヲ探索シテ欲シイ。 手ガカリニナル何カガ見ツカレバ嬉シイ』

『探索ヲ実行ス』

結果として倒すことができたのは艦娘の安全には貢献しただろう。皆が無事であることは素直に嬉しいし、青年としても考えるべきことはそこが第一である。

しかし、その結果として深海棲艦化したであろう何者かを、見捨ててしまったことには変わりない。

その責任は艦娘のものではない。指示を出したのは自分であり、誹

りを受けるとすれば自分であり、罵られるとすれば自分。罪は己のものだ。

もし禍根が残る形で事が収まるようであれば、その非難は自身を受け止めるしかないだろう。

「カミツレさん。あなたは何も間違ったことはしていませんよ?」

「……うん、ありがとう」

心を見透かすかのように、早苗に声をかけられた。まるで準備していたかのようなタイミングだが、その気遣いが本物であることなどは考えるまでもない。

『電ヨリ提督へ。我、人ノヨウナ者ヲ発見ス』

人のようなもの、という言葉に青年は最悪の状況を考える。すなわち、攻撃を受けたことによる怪我、その結果としての“死”。

『詳細ヲ聞カセテ』

『怪我ラシイ怪我ハナイノデス! 生きテイルノデス!』

その言葉に、青年は心から安堵する。思わず体の力が抜け、全身がずしりと重くなったように感じた。

『深海棲艦ジャナイノ?』

『夕張デス。面影ハ全クアリマセン。小サナ女ノ子デス』

早苗にそれを伝えると、早苗も安心したようで徐々に高度が下がっていく。あまりにもフラフラと浮くために指摘すれば、すぐさま元の高度へと戻った。

艦隊に囲まれている、その子供の姿を捉える。確かに、黒い洋服とロングスカートを着た、金色のボブカットの少女がそこにはいた。意識を失い、水に濡れてぐったりしている様は見ていると痛々しい。

「カミツレさん、あれは妖怪みたいですね」

「妖怪? ああ、紫さんや藍さんみたいなの……」

「種族は違いますが、総じてなかなか死にませんよ。大丈夫です」

全てを理解したわけではないが、早苗の言いたいことはある程度理解できる。だが、いくら死の概念がないとはいえ、それが遠慮なく攻撃していい理由になるとも思えない。

だが――

(深海棲艦化した場合、倒せば元に戻るってことか?)

早合点かとも思う。しかし、深海棲艦を倒した結果、深海棲艦化したと思われる者たちが、元の姿と思わしき姿を取り戻している。

無論、例外もあるだろう。もしかしたら、今回がその例外かもしれない。

ならば、ひとまずその少女の様子だけでも確認しに行こう。もしかしたら、謎の深海棲艦化について、手がかりを得られる可能性もある。

「さなちゃん、腕も疲れたよね? 一回降りよう」

「……えー。カミツレさんはケチです」

「確かに僕はケチだけど……え?」

そう言って、早苗は少し不満そうな顔をしながら高度を落として。

岸辺に寝かされた少女の元へ、青年と早苗は降り立った。

「吹雪、叢雲。接近していたけど怪我はない?」

「はい、装甲は貫通しなかったので大丈夫です!」

「怪我なんてしないわよ、あのぐらい」

「そっか……本当に良かった」

一つ息をついて、青年は胸をなでおろした。

振り返り、青年は黒いワンピースを着た少女の傍にしゃがむ。その顔を覗き込めば、衰弱しているのか、弱々しく気を失っている様が目に見えび込む。

「しばらく目を覚ましそうにありません」

「そっか、ちよつと残念だ」

「それから不思議なことに、さつきまでの戦闘の傷が、綺麗さっぱり残っていないんです」

「……ふうん?」

少女の頬をペチペチと叩く。それでも反応がないため肩を揺すってみるも、やはり目を覚ます様子はない。

どうしたものか、と青年は悩む。それでも急ぎで霧の湖へと向かっているため、少女を同行している暇はない。かといって、気絶した少女を自然の真ん中で放置するのも良心が咎める。

腕を組んで唸り声を上げていると、漣がゆつくりと岸辺に近づいて

きた。その手には、何かが握られている。

「ねえご主人様、新入りみたいよ」

「……これって」

漣に渡されたその艦娘のカード。それは、表も裏も、否、表か裏かわからないほど真っ黒に染まっていた。何を示しているのだろうか。もしかしたらこのカードの艦娘には何か異常があるのだろうか、とも疑う。

（考えられるとしたら、艦娘自身に異常があるか……もしくはあの少女の能力か何かが関係してるのかな？）

何せ、記憶を読み取ることができないのは初めてなのだ。読み取るうにも、黒いもやがかかったようにその先へ手を伸ばすことができない。宵闇に紛れて身を隠すその記憶を知りたい、知っておきたい、受け入れたいというのに。

現状の戦力は乏しい。軽巡洋艦3人と駆逐艦5人。物量で押せるうちはまだいいが、一人一人の装甲はそれほど強力ではない。

早苗のサポートにも限界がある。今の状況からすれば、戦力が1人でも増えるというのなら疑心を抱いている場合ではない。

「ども、恐縮です、青葉ですう！一言お願いします！」

身構えていたにも関わらず、現れたのは快活な艦娘であった。少女と呼ぶには大人びているが、大人と呼ぶには幼さが残る顔立ち。銀色のようなセミロングの髪の毛を後ろで束ね、その瞳は爛々と輝いていた。

艦装の規模を考えれば、軽巡よりも少し大型——いわゆる重巡洋艦であることが考えられる。

軽巡よりも砲戦に重きを置いた重巡洋艦の着任。思っていたより、彼女は艦隊にとって大きな戦力となってくれそうである。

と、思っていた。

「あ、青葉、さん……」

「青葉……」

「え？ あ、吹雪さんと叢雲さん……」

だが、そんな青年の考えは吹き飛ばされる。吹雪、叢雲、そして新たな青葉という艦娘との間で、青年の目の前で重く押し掛かれるような暗い雰囲気の流れていた。

「あの……。その……。青葉は——」

「……いえ。失礼します」

「あつ……」

青葉は身振り手振りも交えて何か話をしようとしていたが、吹雪が言葉を飲み込むように首を振り、その場から離れていく。

「私は……あんたのことは別に気にしてない。ただ、私も助けられなかったけど、古鷹にはちゃんと謝った方がいいわ。ここにはいないけど」

「……………はい」

そう言って、叢雲も去っていく。

何が起きているのかわからない青年は、目の前で起きる艦娘同士の初の諍いに呆然とするばかりであった。

「えつと……青葉？」

「は、はい！ あつ、司令官ですか？」

「うん、僕が提督の茅野守連。青葉は……重巡洋艦だよね？」

「はい！ 旧型の重巡ですが、十分に戦ってみせますよお？」

軽巡洋艦より排水量が多く、より強力な主砲を搭載した艦が重巡洋艦である。速度こそ軽巡洋艦に劣るものの、全体的に非常にバランスの取れた艦種であり、戦艦や空母と呼ばれる艦種の次に主力とされた。

(……頼もしいけど、吹雪や叢雲とは過去に何があつたんだろ)

記憶を知らなければ何もできないのか、などと無力さを思い知るのに加え、現実が急を要していることに急かされる青年。

「急にごめん。この艦隊についてはまたゆっくり説明するよ。今は一人でも戦力がほしいから、戦ってくれる？」

「はい、青葉でよければ戦いましょうー！」

だからこの時は、青葉を知るところを後回しにするしかなかったのだ

ある。

暗闇を見つめることを——ためらってしまつて。

015 凍てつく記憶

少女は岸边に放置することとなった。早苗曰く、「ある程度力のあつる妖怪なので放っておいても大丈夫です」とのこと。妖怪のとはいえ少女を一人放置していくことに後ろ髪引かれたものの、それはそれで早苗のお気に召さなかつたらしい。

艦隊の隊列を組み直して川を下り、早苗は上空へと向かう。もちろん、青年は早苗に抱えられていた。

『我夕張、敵艦見ユ』

「カミツレさん、敵ですー!」

やがて来たる次の敵。目で追わずとも、その威圧感だけは肌で感じられる。

川の彼方には、2体の深海棲艦が厳然として存在していた。

赤い駆逐口級が1体と、赤い駆逐ハ級が1体。やはり少女のような姿が見えた気もしたが、先ほどの戦いで攻撃をされている以上、最早迷いなど持ちようがない。

「さなちゃん、僕のことには気にせず遠慮なく」

「弾幕を引き付けなければいいんですね? わかりました」

『艦隊へ。弾幕ハ気ニセス攻撃セヨ』

『夕張、了解シマシタ』

瞬間、視界がブレた。そして、耳に聞こえる風を切る音の中に、早苗の吐息の音が添えられる。

「先ほどのようにはいきませんよ!」

視界が安定したかと思えば、今度はほぼ真逆さまに落ちる。否、若干角度はついているものの、滑空しているかのように空を駆る。

耳元で聞こえた早苗の叫び声。それをうるさいと思う暇はなく、目の前に突然2体の赤い駆逐艦が現れていたことに青年はしばし硬直。視線と視線が交わされる。時が止まったようにすら感じた。

「あ……ど、どうもお——おッ!」

そして時は動き出す。すぐさま上空へと舞い上がり、早苗は上空へと退避。

下方で響き渡る爆音。そこには、赤い駆逐八級がすでにポロポロの状態で大破している様が見て取れた。

『夕張ヨリ提督へ。早苗ノ急降下爆撃ノ効果絶大。第二次攻撃ヲ求ム』

「急降下爆撃……？　だつてさなちゃん」

「わたしがですか？」

「ちなみにさつき、何したの？」

「急いで接近して、そのまま弾幕を近距離で放つて逃げたんですよ？」
その説明を聞く限りでは、確かに急降下爆撃のようだ、と納得する。距離による弾幕の威力の減衰や拡散を考慮して突発的に行動したというのであれば、そのセンスはすさまじいとすら言えるだろう。

同時に、藍の弾幕がいかに規格外であったかとも思い知ることになったが。

「もう一度行きますよ。舌を噛まないようにしてください！」

『夕張へ。第二次攻撃ノ用意アリ』

『了解。全艦、近接戦闘用意』

と、夕張の返事を聞く頃には、既に早苗は弾丸のように飛び出していた。

二度も同じ手は受けないとでも言いたいのだろうか、無傷の駆逐口級が早苗に対して向き直る。

——その瞬間、身体が文字通り凍り付くような恐怖を脳で感じた。

雪符『ダイヤモンドブリザード』

突如、赤い口級の周りから視界を覆い尽くすほどの弾幕が展開される。いや、弾幕というよりは氷の結晶のようなもの。

その弾幕に周期性はほとんどなく、無造作にばら撒くように展開される。それはさながら、雪国における冷徹で容赦のない猛吹雪のよう

に。

「さなちゃん！」

「う、く——なんのおっ！」

早苗は弾幕を右肩に受けてしまった。巫女服が破れ、赤くなった肌が露出する。

だが、突貫する勢いが弱まることはない。先程同様、上空より急角度にて接近した早苗は、赤い口級に最接近した瞬間に弾幕を張り、振り子のごとく上空へ舞い上がる。

大破した駆逐八級と、今しがた中破した駆逐口級。そこへ向けて、軽巡3人による砲撃が行われる。

鼻につく硝煙の匂いと、耳に残る砲撃音。

『我天龍、敵艦ヲ撃破セリ』

下を見れば、すでに砲撃により駆逐八級は倒されていた。その場には緑の髪の少女が浮かんでいるのを確認した後、残る口級へと砲が向けられる。

駆逐艦たちは更に接近する。その中でも、吹雪は艦隊運動を外れて突出していた。

「吹雪ちゃん戻って！ 一人じゃ危ない！」

だが夕張の話を聞いていないのか、吹雪は更に前へ進む。

吹雪は主砲を放ちつつ、赤い口級へ向けて速度を上げた。口級の口から放たれる砲撃を巧みに回避しながら、吹雪は魚雷を発射する体勢に入る。

が、赤い口級が氷の如き弾幕を放つと、吹雪は2発を被弾してしまう。魚雷発射管を破損したらしく、負傷によりその速度も落ちてしまった。

（まずい、吹雪が――）

接近したというのに、魚雷を発射することができない。主砲は稼働するものの、赤い駆逐口級に対して有効的なダメージを与えること叶わず。

孤立した吹雪。駆逐口級の方が向けられ、そして――

（――ツい!? な、何の音?）

鼓膜が破れるのではないかとさえ思った、重巡洋艦の砲撃音。

青葉の放ったその攻撃により、赤い駆逐口級は一撃で沈黙した。

吹雪は、目前で倒れた深海棲艦が青い妖精に変化していくのを見な

がら、一人呆然として立ち尽くしていた。

漣、五月雨が吹雪の元へ水上を滑り、腰が抜けかけている彼女の肩を左右から支えた。水上に浮かぶ緑色の妖精と青色の妖精を、叢雲と電が担いで岸辺へと送る。

青葉による砲撃。重巡洋艦の砲撃というものを初めて見たが、他の艦種の主砲とは全く異なる。その威力、その砲音、その迫力。駆逐艦の砲撃とは違い、発射時の衝撃波などは内蔵を掴んで揺さぶられているようである。

中破状態であったとはいえ、未解明な敵の装甲を貫徹し、一撃のもとに粉碎したその力。これが重巡洋艦か、と改めてその力に戦慄する。

戦力として頼もしいことこの上なく、どのような敵が現れても倒してくれるのではないかと期待を抱かせるほどにその攻撃は衝撃的であった。

しかし、悩みが消えることはない。今回と言わず先程の戦闘でもそうだが、幻想郷の住人が深海棲艦化している状態、これが非常に厄介である。

その理由や原因は今のところ不明であるが、それはいい。青年が気にしているのはもっと別のところ、すなわち戦闘面。一発一発を精密に放つ艦娘や深海棲艦と、多量の弾幕を展開する幻想郷。これらが合わさった者と今戦っているのだ。

深海棲艦と化した幻想郷の住人は、深海棲艦の主砲だけではなく弾幕すら展開する。これは接近したときの緊急的な防御手段ともなるため、事実上魚雷を封じられたも同然である。

加えて、上空への攻撃にも適応している。弾幕によつて三次元的な攻撃をすることにより、早苗の攻撃も阻害されてしまうのだ。

更に、強い個体が放つ赤い気配。あれが原因かは分からないが、装甲が一回り強化されている。現状、駆逐艦では手を出すことは困難であるかもしれない。

「あ、あの、カミツレ……さん」

「え、あ……」

「ごめんなさい、一度降りますね」

思考に没頭するあまり、早苗が弾幕を被弾していたことを忘れていた。しかも、早苗は肩に傷を負いながらも青年を抱えているのだ。

「あ、ご、ごめん、今——っとうわわわわあッ！」

思わずその事実慌ててしまい、降下中であるにも関わらず早苗に負担をかけまいとして腕から抜け出そうともがく。

だが、宙に浮いているという事実を忘れていた。青年は早苗の腕を離れて、水面からおよそ5メートルの高さから落下する。

「でっ——」

「痛っ！」

運悪く、龍田の頭上に落下した後に着水してしまった。青年は浮かび上がるろうと立ち泳ぎに移行し、龍田に謝るべく顔を上げる。

「あ、えっと——あつ！ あの、その……ごめんなさい」

「死にたい人はどこかしらあ？」

顔を上げて見えたのは、翻るスカートとその中身。美しいラインを描く白い太ももと、それを飾る白の下着。その脚線美が織り成す女体の美しさはまさしく芸術品ではないか、と思いつつ青年は龍田に沈められた。

「ちよ、ぶ、わざとじゃ、あぶつ、助け——溺れるっ！ 溺れるっ！」

「おイタが過ぎるわよお、提督？」

水面で浮き沈みを繰り返し、水を飲みかけたり呼吸に苦しんだり、このままでは龍田に沈められてしまうと思つた青年。

断末魔の一瞬、青年の精神内に潜む生命力が、とてつもない冒険を産んだ。

逆に、青年はなんとさらに——水中へもぐった。

川に潜水し、その場を離れてから水面へ顔を出す青年。岸边へと上がり、髪についた水を払いつつ龍田をチラチラ見る。

龍田は何も言わず、ただ槍を鳴らしてニコニコと青年を見ていた。その笑顔にビクビクしながら、青年は降りてくる早苗を迎える。

ペコペコと謝る早苗だが、青年も抱えさせていたため何も言えない。

「さなちゃん、怪我は？」

「思ったほど痛みはないので戦闘は続けられそうです……が、残念ながら、カミツレさんを抱えて飛行するのは厳しいですね」

先ほどの急降下時の被弾。早苗がそのまま墜ちてしまうのではないかと心配もしていたが、どうやら比較的軽傷で済んだらしい。もつとも、早苗が痛みで顔を歪める表情は、青年も見たくはなかった。

「そっか……いや、無理はさせたくない。僕は走って向かうから」
「走ってって——妖怪もいるんですよ？」

「……改めて思ったけど、僕は来ない方が良かったのかもね」

自身がお荷物となっっている自覚を持ちながらも、役目は果たさねばならない。早苗への心配もそこそこに、青年は艦隊へと目を向ける。

「吹雪、ちよつとこっちへ」

「……はい」

漣と五月雨の肩を借りながら、吹雪が岸近くに来る。魚雷発射管は完全に破損しており、以降の戦闘で使用することはおそらく難しいだろう。

また、その腹部も大きく被弾していた。服が破れ、そこから見える肌は赤くなっている。

「……大丈夫とは言えないね」

「いえ、大丈夫です！ まだ戦えますー！」

とは言うものの、吹雪は腹部を押さえ、苦悶の表情を浮かべていた。これをみすみす見逃してしまうことはできない。

「まだ戦うつもりなの？ その状態で……」

「このくらい、怪我のうちには入りません！」

「……………」

「司令官、このくらいで情けをかけていては、守りたいものなんて守れませんよ？」

「その守りたいものの中に、君も入っているから心配しているんだ」
吹雪のその言葉に、青年は納得することはできない。

今青年が戦わせているのは自分のためではない。守矢神社のため、ひいては艦娘たちの立場を確立させるためだ。

だから、無理をさせるつもりは毛頭ない。怪我をすれば撤退させるし、その場合に立場が悪くなるとすれば、それは従わせている青年の責任であって艦娘の責任ではないのだから。

だが、真面目な吹雪が艦隊運動から外れるようなミスを起こすとは珍しい。そう感じた青年は、これまでの中で思い当たる理由と思しきものを小さく呟く。

「もしかして青葉……が原因？」

「……わかってて仰るのはずるいです」

「いや、理由がわからないけど青葉の記憶は見れなかった。だから何があつたかはあんまり——いや」

そう言いつつ、青年は吹雪の記憶をもう一度思い返した。

吹雪と青葉の関係はサボ島沖海戦から読み取れる。そしてその中で、青葉のミスにより味方艦隊が大損害を受けてしまったという記憶に行き着く。

吹雪はその損害を受けた艦であり、その戦闘において艦歴を終えた。

吹雪と青葉が互いに気まずそうな雰囲気になつていた理由がようやくわかつたようで、青年は一つ息をつく。

もしかしたら、吹雪はそれが原因で先程艦隊運動から外れてしまったのかもしれない。焦っていたのか、もしくは精神に昂ぶりがあつたのか。

ミスを犯した人物と一緒に仕事などできない、といった感情だろうか。だが、一刻を争い命の危険まである現状、それを認めるわけにはいかない。

「記憶を知ることではできても、君たちの感情まで知ることではできない。未熟な僕を叱りつけるのはいくらでも受け入れるけど、今は協力して欲しい」

「……はい、申し訳ありませんでした」

「謝ることじゃない。戦いが終わったらさ、二人で好きなだけ喧嘩す

るといいよ。それを咎めたりはしない」

「別に……そういうことでは」

吹雪が眉尻を下げ、落ち込んだ表情で顔を俯かせる。

こればかりは艦娘間の問題だろう。青年が解決できることではなく、あくまで艦娘同士で処理する問題。だから青年は、提督として現状を整理するために、言葉を伝えるしかない。

「吹雪。強がりじゃなくて、本当にまだ戦える？」

「……魚雷発射管は破損してしまったので使えませんが、主砲なら」

「怪我は？」

「まだ大丈夫です。それに装甲がありますから、ある程度は耐えられます」

「……」

「私は、司令官を守るために戦いたいんです」

そう語る吹雪の目から、戦意は欠片も失われていなかった。

「なら、お願いできるかな？」

「はい、頑張ります！」

そう言つて、吹雪は艦隊を組むために水上を滑っていく。

不安を持ちながらその背中を見つめる。だが、吹雪自身が決め、自身も認めたこと。それを覆すことは、吹雪を貶すようにも思えるため、拳を握り締めるに留める。

(逃げるな。艦娘が、みんなが傷つくことの責任から……逃げるんじゃない)

深呼吸をし、精神を落ち着かせる。

ふと気づけば、青葉がいつの間にか隣に立っており、同様に吹雪の背中を眺めていることに気付く。

「どうしたの、青葉」

「……さっきの戦闘、慌てて砲撃してしまいました。吹雪さんが敵に向かっていく姿を見て、昔を思い出してしまつて」

そう語る青葉の表情は、どこか緊張しているのか表情が固い。そして青年も、急いでいたとは言え、どうして青葉と吹雪の関係を戦闘前にもっと理解しておかなかったのだろうか、と後悔の念が渦を巻く。

「……でも、今回は守れたからそれでいいと思うよ?」

「え? あ、あの、なんで知って……」

「吹雪には言ったよ。戦いが全部終わってから、青葉と喧嘩でも何でもするといいつて。青葉はどうかな?」

「青葉は……」と言つて、遠く離れる吹雪の背中を見つめてから俯く。

すぐに答えを出す必要などないだろう。どう足掻いても青年には本人たちの気持ちなど分かりようもない。だから、背中を押すしかないのだ。

彼女たちが望む方向へ、彼女たちが取る針路へ向けて。

「怖かったかな?」

「はい。また吹雪さんが沈んでしまうのではないかと思つて……気が気ではありませんでした」

「中破した吹雪をどうするかは迷つたよ。でも本人の希望もあるからそのまま戦わせる。2人の間でどんな想いが交わされてるのか僕にはわからない。でもね、」

沈む、という青葉の表現に青年は胸を刺すような違和感に苛まれるも、青葉の肩を叩き、優しい声音に言葉を乗せる。

「吹雪が危ないと思つたら、青葉が助けてあげてほしい」

「青葉に……できるでしょうか」

「青葉がそれを望むなら、ね」

この時見せた青葉の表情は、年相応の微笑みを浮かべる少女のそれであった。

そうしていると、叢雲と電が岸边に少女たちを寝かせた後、青年の元へとやってきた。2人の手には、それぞれカードが握られている。

「ほら、艦隊に新しいメンバーが加わるわよ」

「2人とも、介抱ありがとう。怪我はない?」

「あの2人に怪我らしい怪我はないのです。無傷なのですよ」

「そうじゃなくて、君たちに」

「な、なによ！ 心配なんてする暇があったら新しい子とおしやべりでもしておきなさい！」

そう言つて、叢雲は青年の手にカードを握らせ、去っていく。電はカードを差し出すように渡すと、ペコリと一礼して同様に去つていった。

(2人増えるのか)

渡されたカードを見る。そして実体化を行えば、目の前には少女とも大人ともつかない容姿の2人の少女が現れた。

「古鷹型重巡の2番艦、加古つてんだ、よつろしくうー！」

「古鷹と言います。重巡洋艦のいい所、沢山知ってもらえると嬉しいです」

加古という少女。ボーイッシュな顔立ちにぎつくりとまとめられた髪。前髪を髪留めで止めており、両肩にはゴツゴツとした艤装。露出の多めなセーラー服のスカートから覗く脚は非常に健康的に感じられる。

そして古鷹。サラツとした茶髪にどこか儂そうな表情。右肩に装備された艤装はなんとも重量感があり、その割には細い体軀。左目は何か異常でも抱えているのか、右目と色合いが少し異なる。

重巡洋艦。先ほどの青葉の攻撃を見ればわかるように、軽巡洋艦より強力な主砲を備えた艦種。それが2人も増えるとなれば、心強いことこの上ない。

だが、率直に言つてしまえば、今の時点でこの古鷹という少女が加入することを、青年は危惧していた。なぜなら——青葉と違って二人の過去の記憶は知ることができたから。

「あ、あの、古鷹……」

「青葉……」

特に古鷹の記憶。それによつて、何があつたかを青年はようやく知る。

兵装実験軽巡、夕張の拡大・改良型として誕生した古鷹型重巡洋艦の1番艦。第六戦隊、珊瑚海海戦、第八艦隊、第一次ソロモン海戦、そしてサボ島沖海戦……。

古鷹が沈んだのはサボ島沖海戦。沈むに至るまでの経緯としては、夜間航行中、旗艦を務めていた青葉が敵艦隊を味方の輸送艦隊と誤認。

照明弾によって艦隊は先制攻撃を受け、青葉は初弾で艦橋に被弾し、指揮系統が壊滅。集中砲火から青葉を庇うために古鷹は身を呈し……。

しばらくの間お互いに見つめ合っていた青葉と古鷹。お互いに口を開いて何かを言おうとするものの、気後れしているのか一歩引いてしまう。

古鷹の表情。見ている限りでは何かを憎々しく思っているということはなさそうである。その儂げな表情の中に迷いを浮かべているものの、何か一言を言い出せないでいる。

対する青葉。顔を青ざめさせ、肩をプルプルと震わせている。そのどこか怯えた表情は見るに堪えないが、そこに介入すべきかどうかは青年にも判断することができない。

やがて、古鷹が視線をわずかに落とし、顔を伏せる。そしてそのまま青葉に顔を合わせることなく、青年に対して敬礼してからその場を離れていった。

実体化した時の快活さはどこへやら。青葉はすっかり落ち込んでいた。

しかしそこへ、加古がニッコリとした笑みを浮かべて話しかける。

「青葉あー、久しぶりじゃん!」

「えっと、加古もお元氣そうで何よりです」

「どうしたよー。お前が元氣じゃないとみんな落ち込むぞー?」

「え、へへ、そうですね……」

笑顔を浮かべながらバシバシと青葉の背中を叩く加古。それを受けて、青葉も少しだけ気力を取り戻したのか、俯かせていた顔を上げる。

青年はそれを見て、どうにか青葉も艦隊の中でやっていけそうだと判断する。加古が自身に向けて小さくウインクした様子を見れば、ひとまず青葉のことを任せてもいいのかもしれない。

青年のもとにいる艦娘の中で、サボ島沖海戦に参加したのは青葉、古鷹、吹雪の3名。加えて、叢雲が翌日に古鷹の救援に参加しているため4名。

艦隊がギクシヤクすることはもちろん望ましくない。だがそれよりも、悩みを抱えたまま戦い、怪我をすることこそ青年は望まない。前途多難な艦隊だな、と思いつつも、誰を嫌いになるということは全くない。それが彼女たちであり、彼女たちの歴史なのだ。

むしろ自分自身も、周囲からすればなかなか対応が面倒だっただろうという自覚もあるため、そのぐらいのこを受け入れる度量ぐらいはある。

過去にどんなことがあるかと、前に進むべきであると青年は誰よりも知っていると自負している。だからこそ艦娘たちの、戦いの記憶を持つ彼女たちの行く先を見守らなければならない。

自身が助けを得て乗り越えたように、今度は自身が彼女たちの助けとなる。それは、戦いという役目を生まれながらに持ち合わせる彼女たちに、戦うからこそ誰よりも熱望するであろう平和な時を過ごさせたいがため。

艦娘から与えられた幸せを、今度は艦娘に。それはおそらく、この時代この世界で、艦娘の記憶を知る青年に与えられた「運命」なのだろう。

016 守護者

夕暮れ時、青年は霧の湖に到着した。辺りはうっすらと霧が立ち込めている中、呼吸を整えつつ、茂みに潜んで周囲を見渡す。

古鷹と加古には、移動中に夕張から経緯を説明させている。霧の湖で敵艦隊と思しき部隊を発見したとの連絡を受けたため、艦娘たちは湖の入口にて待機中である。

『夕張、状況報告ヲ求ム』

『敵戦力ハ24。内、駆逐艦18、重雷装艦1、軽巡洋艦2、重巡洋艦1。湖ニテ警戒航行中。以降、重巡ハ“リ級”ト呼称ス』

『赤イ個体ノ姿ハ?』

『確認出来ズ。現在霧ニヨリ、敵艦隊ハ此方ヲ未発見ト思ワレル』

気づかれていないならば、やはり先制攻撃だろうか。ただ、数の上での戦力差は厳しい。こちらは駆逐艦5、軽巡3、重巡3であり、駆逐艦の数では負けている。敵艦隊の接近を許してしまえば、重巡洋艦といえども被害は免れない。

重巡洋艦の砲撃ならばどの敵艦の装甲も貫徹可能だろう。だが、数の差を押し返すとなればそう簡単にはいかない。

と、考えていた。

魔符『ミルキーウェイ』

「おらおらあああああああああッ!」

魔理沙が上空に現れ、弾幕を放つまでは。

箒に乗って空を飛ぶ魔理沙。敵艦隊の中央と思われる場所の上空にて停止したかと思えば、その地点から下方へ向けて大小2種類の星形の弾幕を放射状に展開する。

遠くから聞こえる爆音、水柱の音。敵艦隊が主砲を発砲している音が聞こえるも、魔理沙は狙いをつけさせまいとしているのか、箒で自由自在に空を飛びまわっているのが見える。

一方、青年。突如現れたのが魔理沙であり、何とか合流できたかと

一瞬安心する。だが、突然攻撃を行うとは露にも思っておらず、魔理沙の弾幕の流れ弾を走り回って避けていた。

「ちよちよちよちよちよあぶツ、洒落にならないって!」

『正体不明機ニヨル攻撃飛来。反撃ノ許可ヲ乞フ』

「そつちも!?! ええつと、『反撃ハ許可シナイ。駆逐艦ヲ前へ、巡洋艦部隊ハ遠距離砲撃ニテ対処セヨ』 さなちゃんに魔理沙ちゃんを止めてもらえれば何とか……」

『了解』との電文の後、艦娘たちが全速航行するのを目にする。しかし青年は安心する間もなく、魔理沙の弾幕をどうにか避けようと必死になって走る。

「魔理沙ちゃん! 聞こえる!?!」

「うおおおおおおおおオッ!」

「あ、やっぱり届かないか」

と、呆れた時、目の前に魔理沙の弾幕が迫る。足が止まり、右にも左にも動かない。体中に緊張が走り、ただ目前に迫る弾幕に対して腕を交差させ、どうにか頭を守ろうとした瞬間――。

弾幕が頭の真横を掠めて通過したのを感じると同時に、誰かに両肩を掴まれている感覚を覚えた。

「危なかったわね、大丈夫かしら?」

「あ、えつと、博麗神社に来た……」

両肩を掴み、青年が弾幕に当たらないようにしていたのは咲夜であった。いつの間にか背後に立っていたのも疑問であるが、ほぼ確実に当たると思っていた弾幕を、どうやって避けさせたのだろうか。

「自己紹介がまだだったわ。十六夜咲夜、紅魔館のメイド長をしているの。巻き込む……というより、手伝ってもらってごめんなさいね」
「茅野守連です。いえ、僕らにも全く関係がないとは言えませんので」
そう話す咲夜の表情は思わしくない。自身の職場が謎の変貌を遂げたとなれば、その気持ちも察するに易いものであるが。

「ここに来るまでも何体か倒してきたわ。倒したら妖精とか妖怪に変化したのだけれど、あなたは何か知っているのかしら?」

「……原理は僕にもわかりません。ただ、今知っていることはお話し

ておこうと思います。お互いの安全のためにも」

疑問を投げかけられ、青年も答えないわけにはいかない。ひとまず深海棲艦のことについてざっと説明し、自身が艦娘と呼ばれる幽霊、艦魂を操る能力を持つことを話す。

説明を受けた咲夜は顎に手をあて、何かを悩むような素振りを見せてから青年に向き直った。

「想像していた以上に厄介ごとのようね。艦娘と深海棲艦、無関係と見ることはできないからここに来た、ということ？」

「はい。もちろん、紅魔館という所の皆さんのことも心配です」

話しながら、青年は無線を動かし、夕張との連絡を取る。

『夕張、状況報告』

『現在駆逐艦ガ強行、巡洋艦部隊ガ砲撃中。駆逐艦10体、軽巡洋艦1体ヲ撃沈』

『被害ハ？』

『現在被弾ナシ。敵全体ニ弹幕ノ被害甚大、混乱ヲ確認！ 早苗ハ正体不明機ト接触』

夕張からの報告に、青年は安心しつつ戦場を覗く。駆逐艦、特に叢雲の動きのキレは見ていて感嘆するほどであり、深海棲艦の主砲をものともせずにかわし、魚雷を撒きつつ進んでいる。

重巡洋艦組の姿を見れば、砲撃を非常に正確に行っており、その表情に曇りなし。青葉、古鷹共に集中した顔であり、戦いにその関係のこじれを持ち込んでいるようには見えない。

「色々と聞きたいことがあるけれど、とりあえず一つ。あなたは戦わないのかしら？」

「えっと、的や囷ぐらいなら……」

「……わかったわ。呆れたけれど、私はあなたの護衛をすることにしましょうか。あの子達を指揮するのがあなたなら、あなたに倒れられなくても困るのだし」

咲夜はため息を一つ吐き、青年の手を取る。急に手を取られた青年は何事かと思いい手を振り払おうとするも、次の瞬間には別の場所に立っていた。驚く間もなく、瞬きをするとさらに別の場所、湖近くの

小高い丘に出る。

「あの、これは一体……」

「ここなら安全に、しかも湖がよく見えるでしょう？ 私が妖怪たちが襲ってこないか周囲を見ておくから、あなたは艦娘さんたちを見ておきなさい」

「……ありがとうございます」

背を見せる咲夜は、ナイフを手に周囲を見渡すように立った。自身も心の中で整理がつかないはずだろうが、その気遣いに青年は感謝する。

そして、青年もまた自身の中で思考を整理させながら、艦娘の状況を知ろうとするのであった。

霧が薄くかかる湖にて、艦隊のほぼ中央。艦隊全員を見渡し、異常がないか、被弾していないかを確認しながら、夕張は砲を放つ。

夕張は青年の下に来てまだ二日目。しかしながら、青年のその思慮深さについて、夕張は一定の評価を下していた。

優しく責任感のある人物、なれど若く、感情によって心動かされる部分もある。それを含めて、〃なかなかどうして悪くはない〃。

「夕張、重巡から砲撃がくるぜ！」

「狙いは私たち巡洋艦組ね、回避運動！」

たった数日で何を理解したんだ、と天龍には笑われるかもしれない。だが、言葉に出さない部分があれども、その思いやりは十分に夕張も感じている。

「重巡の皆さんは敵重巡をまずお願いします！ もうすぐ駆逐艦の子たちが魚雷を放ちますので、被雷したところを一挙に砲撃してください！」

例えば、自身がこの艦隊に来た時、好みや嗜好、今後の希望を聞いてきたこと。それは自分だけではなく、他の艦娘も同様である。

記憶を知ることができると。そして、その戦争という記憶にかかわらず、個としての自身を認識し、その希望を聞く。

夕張も無論、青年の記憶を覗き見ることができた。その過去と、今の性格とを照らし合わせれば、青年を上官に持つ夕張としてはその答えは一つだけ。

『機械いじりをさせてもらえるなら、あとは提督のお好きなように』と。

戦況は急展開を迎えていた。魔理沙の弾幕により開戦したこの戦いは、敵に大きな損害と混乱を与えた状態から始まった。弱音など吐いてはいられない。

駆逐艦たちが敵艦に激突するかののような勢いで接近する。中でも叢雲は、過去に自身が助けようとした古鷹と戦場を共にしているためか、非常に戦意に満ち溢れていた。

重巡り級、および軽巡水級に対して魚雷を放ち、離脱しながら中破状態にある雷巡水級に対して制圧射撃。

轟音、そして水柱。水級は天龍及び龍田の砲撃とも合わせて撃沈し、軽巡水級は大破、重巡り級は中破状態へと損害を与える。残る駆逐艦は8体となり、流れは完全に味方にある。

「今です、全艦突撃してください！」

最初こそ魔理沙の弾幕には四苦八苦したものの、早苗の説得によりどうにか被害なく切り抜けることができた。魔理沙の弾幕が駆逐艦をおよそ半分にまで減らしたのは、大戦果といっても過言ではない。

駆逐艦が魚雷を放射状に放ち、周囲にいる敵駆逐艦へ向けて手当たり次第に主砲を撃ち込む。その素早い動きで敵を攪乱し、時には砲弾をスレスレで回避しながら主砲を撃ち返す。

天龍と龍田は装甲によって駆逐艦級の砲撃を阻みつつ、力押しで近接戦にもつれ込ませた。

そして、古鷹。大破状態となりながらも攻撃を必死に回避する軽巡水級であったが、正確な狙いにより一撃のもとに水級は撃沈される。

青葉は重巡り級に攻撃を行いつつ、互いに異なる方向へ進む反抗戦に持ち込む。重巡り級は青葉との砲戦に気を取られていたためか、加古の接近には気づかない。

やがて、加古が至近距離にまで接近する。水級が砲を向けるも加古

はそれを蹴り飛ばし、その胸元へめがけて主砲を発射。リ級は砲弾の衝撃でその体を吹き飛ばされ、水面に落ちると同時に大きな水柱を上げる。

それを合図に——戦いは終結した。

開戦時には圧倒的不利であったにもかかわらず、大きな被弾のないまま戦局は幕となる。湖にはポツポツと少女のような少年のような小さな子供たちが浮き上がっており、電を始めてとして救助活動が始まっていた。

戦闘が無事に終了したことは何よりである。夕張自身感じていたが、赤い気配を纏う敵がいなければやはりこの艦隊は強い。練度も高い水準を維持しており、艦隊運動など見事なものである。

夕張も救助活動に入る。それと同時に青年に対して戦闘終了の報告を行おうと思い、電文を打とうとした。

その時、である。

『提督へ。戦闘終了。ナレド戦闘ノ可否ヲ問フ』

『一段落シタト思ツタノニ。勝算ハ？』

『艦娘ダケデモ7割。但シ被害ハ甚大』

『撤退モ可能ダカラネ？ 交戦ヲ許可スル』

霧のかかる湖。その中で、まるで霧を割って進むようにその敵は現れた。

格闘家のごとき独特の構え。赤い気配を纏う——重巡り級が。

霧が晴れた遠く先、赤い重巡り級の背後にそびえるは紅い館。夕日に照らされているもその赤さが夕焼け色に染まることはなく、荘厳にして厳然。

その紅い館を背負うかのように現れた重巡り級は、構えを解かぬまま動き始めた。重巡洋艦であるにもかかわらず駆逐艦のように素早く、最も近くにいた叢雲へと肉薄する。

瞬間、轟音。音のした方向を見れば、古鷹である。その砲撃は赤いリ級の側頭部を捉え、リ級はその場にて体勢を崩す。

叢雲は怯まない。リ級に対して魚雷を発射し、主砲を放ちつつ後退。しかし、主砲はリ級の装甲によって弾かれ、ダメージには至っていない。

だが、魚雷は到達する。水中を泳ぎ、足元からどのような艦であろうと水底へ引きずり込むことのできる、駆逐艦が持つ強力な兵器の一つ――。

いかに赤い気配を纏う個体だろうと、その魚雷から逃れることは既に不可能だろう。既に足元まで迫っており、どう避けようとも直撃は避けられない。

懸念を抱いていた夕張も、想像以上に早くケリがついたと安心していた。古鷹と叢雲による目覚しい判断力に続いて、ジリジリと体力を削ればいいと。

だが、この幻想郷において、そのような楽観的な思考は通用しなかった。

赤いリ級はその場で水を強く踏みつける。魚雷の炸裂どころではなく、まるで小さな火山が噴火したかのように水柱が上がり、その中で魚雷の爆発音が同時に響いた。

降り注ぐ飛沫に髪が濡れながらも、夕張は水柱が晴れた先に見える赤い影に戦慄していた。全くの無傷であり、既に姿勢は格闘術の構えに戻っている重巡り級。

こみ上げる恐怖を押し込みながら、夕張はその口元に笑みを浮かべる。ここまで戦意が高揚しながら戦いに臨むのはいつ以来だろうか、と。

「全艦複縦陣、一度後退します。距離を取って様子を見ましょう」

青年には申し訳ないと思っている。どのように戦っても、被害は免れないと既に直感しているのだから。怪我をしたと聞けば、きつと泣きそうな顔をしてしまうだろう。

だが、夕張もまた青年のために戦おうと決めたのだ。そしてそれは、少なくとも先ほど合流して間もない重巡以外の艦娘ほぼ全員が思っていること。

青年へと連絡を取った後、夕張は赤い重巡り級を見据えて呟いた。

「さあ。色々試してみても、いいかしら？」

様子を見ていた青年は、あんぐりと口を開けたまま閉じようとしなかった。否、閉じることなどできなかつた。

(何だあの動き。魚雷を……衝撃波で誘爆させた?)

夕張からはやれるところまでやる、との電文が入っていた。仮に大きな怪我、それこそ吹雪よりも酷い状態になれば、青年が駆けつけてカードに戻して撤退するだけで艦娘の命は保護できる。

だが、できる限り無理などさせたくはない。それこそ、今すぐ全員をカードに戻して撤退したいぐらいである。しかし、それを艦娘も望んでいないのは青年も知っている。

「美鈴……」

「え……咲夜さん、どうかされましたか？」

ふと、青年は背後で咲夜が悩ましげな表情で遠目に見える重巡り級を眺めていることに気づいた。周辺を警戒するといっていた本人だが、思う所でもあったのだろうか。

「教えてもらえないかしら。美鈴は……あの深海棲艦とやらは絶対に元の姿に戻るの？」

「申し訳ないんですが、確証はありません。今のところ本物の深海棲艦以外は元に戻る例を見ましたが、無傷で戻るという保証も……」

「あの深海棲艦、私の仕事仲間なのよ」

「……ですが、野放しにしておくことは」

「わかっているわ」と呟き、咲夜はそっぽを向いた。その拳は強く握りしめられており、悔しさを表に出すまいとこらえていることは誰の目から見てもわかる。

その態度を青年も批判することはできない。自分に当たられても困るのは確かだが、気持ちが全く分からないわけではないのだから。

例えば早苗が、神奈子が、諏訪子が深海棲艦になったら。艦娘が深海棲艦になったら。戦いたくはないし、傷つきたくないのは当たり前

である。

「艦娘さんたちと連絡が取れるみたいだから先に話しておくわ。美鈴の能力は“気を使う程度の能力”。気配りではなくて、気迫とか気合の方」

「なら、先ほどの魚雷を吹き飛ばしたのも」

「おそらくは能力と格闘術の併用によるものよ。近接戦はやめた方がいいわね。艦娘さんたちがどのぐらい強いのかはわからないけれど、美鈴は対人接近戦、弾幕勝負にこだわらない場合恐ろしいほど強いわよ」

それを聞き、青年は「ふ、む」と視線を戦場へ戻す。現在青年の艦隊は駆逐艦と軽巡洋艦が半数以上を占めており、接近戦重視の艦隊である。

加えて、あまり考えたくないことであつたのだが、深海棲艦は艦種が強力になるにつれて人型に近くなっている。赤い重巡り級は人型に近く、そして格闘術を使う人物が深海棲艦化している。

深海棲艦化した敵は、深海棲艦化前の素体となつた人物の弾幕を使うことはわかつている。能力全てを使うことが可能になるとすれば、おそらく彼女は――。

『敵り級ハ接近戦偏重、注意セヨ』

『了解。無線封鎖シマス』

だが、懸念事項はまだ残つていた。先ほどから上空で待機していたはずの、早苗と魔理沙の姿が見当たらない。

その姿を探す。そして、見つけた先は霧の湖の端、紅魔館という建物のすぐ傍の水辺。

艦娘たちが対峙している重巡り級とはまた別に、深海棲艦がもう2体存在していた。2人はそちらを倒すべく戦闘を繰り返しており、その戦闘音は離れた位置にいる自分のところにまで聞こえている。

「パチュリー様と小悪魔も、ね。もう紅魔館は……」

「諦めないでください」

「随分と勝手なことを言うものね。戻る保証もない上に、魔法使いが敵に回っているのよ。真っ向から弾幕勝負を挑むなんて、それこそ霊

夢じゃないと荷が重いわ」

そう言つて、さらに落ち込む表情を見せる咲夜。魔法使い、なら魔理沙と同じかと考える。確かに、深海棲艦に向かつて放った弾幕は強力であつたという以外に評価しようがない。

「でも、やっぱり大丈夫ですよ」

「……なら、その根拠を聞かせてもらおうかしら？」

咲夜が目つきを鋭くし、青年に向き直る。

魔法使いならば侮ることはできない。仮に魔理沙を敵に回していたらと考えれば、背筋も凍る。だが、青年がその根拠のまるでないような発言は、一つの信頼が支えていた。

「だって、あの子たちは理不尽な戦いにも真つ直ぐ向き合つたんですから」

水上にて槍を構えた龍田は、赤い重巡り級を薄目で捉えていた。

前衛に駆逐艦、その背後に軽巡洋艦。その後衛に重巡洋艦が控えているが、この陣形は崩れることを前提として組まれていた。無論、単純に崩れるわけではないが。

り級に動きはない。両陣営とも一度射程外に出た状態であり、にらみ合いが続いている。その間、龍田は青年のことを思い返していた。

第一印象は頼りがいのない男、であつた。今でも正直頼りがいがあるかと尋ねられれば首を捻らざるを得ないが、その心遣いだけは理解している。

常に艦娘、もしくは守矢神社のことを考え、自分のことは後回し。その体も、誇りさえも投げ出し、常に守ろうと、自身らのために奮闘する提督。

どこか抜けているというのに青年自身が持つ目的に関しては計算高く、そのためには過去さえも笑い話にしようとするような提督。

博麗神社で萃香と魔理沙を相手に土下座していたことは記憶に新しい。あれはその場にいた早苗と天龍も驚いており、青年の名誉のた

めにも他の者には他言しないことを話し合って決めていた。

龍田が青年に従う理由など、それで充分。姉妹艦たる天龍を悪く扱うようであれば制裁を考えていたものの、むしろ天龍自身が楽しそうに過ごしているのを見ればそんな気も起きない。

流石にスカートの中を見られたときは慌てはしたが。

認めなければならぬだろう。提督は提督たるに相応しい人物である。知識と経験など、艦娘が知っていることを教えればよい。あとは本人が勝手に学んでいくのだから。

「提督より入電、目標の重巡り級は接近戦に強いからやめておけとのこと。……提督に話せば怒られますから、無線は切りました」

「うふふ。あらあ、提督は私たちに喧嘩を売っているのかしらあ？」

「多分、深海棲艦化する前の人が接近戦に強いとかじゃない？」

「早苗さんはあの小さな魔女さんを連れてどこかへ行ってしまったようだしい、私たちでどうかしないといけないわねえ」

「ふふつ、龍田。あなたこんな状況でも笑うのね。泣きそうな天龍とは大違いだわ」

「あんだとっ!？」

「天龍ちゃんは私の陰に隠れていてもいいのよ〜?」

「へへっ龍田、冗談はよしてくれよ。え、じよ、冗談だよな?」

夕張、天龍とともに、龍田は微笑みながら槍を鳴らす。余裕そうな口上を述べてはいるものの、視線を重巡り級から離すことはない。

砲撃戦を行おうにも、味方の重巡洋艦は3人。リ級が見せた重巡にあるまじき動きをもってすれば、単発単発の砲弾を命中させることは難しいだろう。現に、視認の難しい魚雷でさえ封じることがわかつているのだから。

「夕張さん、もう決まったわね〜?」

「はい、この艦隊なら方法は一つしかありません」

「おう、行くか?」

軽巡の3人が顔を合わせ、頷く。近くでそれを見ていた重巡3人は少しだけ苦笑しているも、何も口には出さない。

駆逐艦、軽巡洋艦の多い艦隊。水雷戦隊の目的は、後方で砲撃を行

う艦の前面に出て前線を形成し、懐まで潜り込むこと。
すなわち、艦隊が取った選択肢とは――

「駆逐艦は左右に展開して包囲戦、全巡洋艦――前へ！」

接近戦を得意とするという目標の赤い重巡り級に対し、自身らの華とも呼べる接近戦を挑むこと、である。

駆逐艦が速力を上げ、重巡り級の砲撃をかわしながら左右に展開した。その左右に展開した中央を、軽巡洋艦が全速で突っ切っていく。

龍田は砲撃を行いつつ、槍を両手で握る。恐怖など微塵もない。自身より強力な艦種だろうと関係はない。

鬼のように接近戦に特化した自分たちを相手に接近戦を挑んでく
ることを、それこそ楽しいとすら感じていたのだから。

重巡3人から同時に砲撃が放たれた。しかし、一発は回避、一発は目を疑うような反射神経をもって砲弾を叩き落とされ、最後は装甲に阻まれる。

「あはっ」

だが、龍田は急加速。その勢いを殺すことなく、装甲で砲撃を阻んだ結果、煙を上げているり級の腹部へ向けて槍を突き出す。

り級はその槍を腕で弾き、それと同時に龍田の懐へと飛び込んだ。り級の掌底が龍田の鳩尾を捉えるかと思ったその瞬間――。

龍田の右膝が、り級の顎に目かけて放たれた。鈍い音と共に、り級は頭部と思しき部位を押さえながら一度飛びのいて距離を取る。

が、その隙を見逃すほど艦隊は甘くない。夕張の至近距離の射撃と、天龍による刀の追いつき打ちがり級を襲う。

更に距離を取るり級。駆逐艦の砲撃は全て弾かれてはいるものの、意識を逸らす等のほど良い牽制となっている。赤いり級は確かに強敵だが、その分反応が良すぎるのか、装甲で受けるにしても全てその方向を向いてしまう。

艦隊は追撃を行う。重巡洋艦による接近しながらの砲撃と、夕張の近接射撃。そして、その砲火の中へと龍田は天龍を伴って突撃する。

しかし、リ級も被弾してばかりではなかった。魚雷を叩き潰したように水面を踏みつけ、水柱で姿をくらましたかと思うと、その中から輝きを放つ。

華符『芳華絢爛』

まるで花開くように、全方位に弾幕が放たれる。弾幕の一つ一つこそ小さなものの、その密度は避ける隙間が見えないほど。

「駆逐艦は回避しなさい?」

龍田の指示により駆逐艦はリ級から離れ、弾幕の隙間をかいくぐって回避を始める。万が一命中しても、距離による威力減衰により装甲が阻むため怪我はない。

そして、リ級の目の前に展開していた巡洋艦組。リ級の弾幕に対し、あらかじめ立てていた対策とは、

「ちよ、ちよつと、本当に大丈夫なんですか?」

「ね、ねえ加古、私たち沈まないよね?」

「当たり前だろ! 沈むならあたしが引つ張り上げてやるっての!」
重巡組が前に出て、その装甲にモノを言わせて盾となることであった。

「おー、すげえな。本当に弾いてら」

「流れ弾には注意してねえ、天龍ちゃん?」

駆逐艦より軽巡洋艦の方が装甲は厚く、重巡洋艦はさらにその上をいく。それは深海棲艦に限らず、艦娘の艦装においても同様であった。

弾幕は確かに密度こそ高いものの、小さいものであれば一発一発は大した威力ではない。油断していると装甲を貫通することもあるが、現状において重巡洋艦の装甲を貫通することはないと見込んだのだ。

青年に具申していれば、確実に却下されただろう。艦娘思いのあの提督である。おそらく、艦隊をそのように運用することはダメだ、との一点張り。

しかし、これも戦闘における役割の一つなのだ。大きな艦が目標と

なれば、相対的に他の艦には攻撃が向かわず、安全となる。装甲で阻めるような攻撃ならば尚更のこと。

その辺りをまだ割り切れていない、と龍田は感じる。艦娘に必要な上に情をかけては、いずれ来るであろう別れが辛くなるだけであるというのに。

だが、それも青年らしいのかもしれない。少なくとも、龍田が気に入ったのは青年のそういう部分であるのだから。

「天龍ちゃん、行くわよ?」

「おうよっ!」

弾幕が止み、再び軽巡が前に出る。駆逐も既に牽制の主砲を放てる位置についており、包囲は盤石。

重巡の一斉射撃と共に、龍田は槍を構えて突撃する。隣には天龍。重巡の砲撃は一発が直撃弾となり、その装甲を削っていく。

迫る。なおも迫る。目的は無論、重巡り級の懐。

だが、龍田が今にもその槍を振り下ろそうとした時、信じがたい出来事が。

「——クソツ、背水ノ陣ダー!」

一瞬、赤い重巡り級が人の姿を取っているように見えた。それどころか、言葉を話すなど聞いていない。

しかし、脳内は既に興奮してやまない状態。龍田は天龍と共に、接近するのをやめることなく軽口を返す。

「あんた一人で『陣』なのか?」

「四面楚歌がお似合いよ」

その間に、赤いり級から接近される。その鋭い踏み込みは艦娘の瞳をもつてしても捉えきることはできず、天龍がその腹部へと肘鉄を受けた。

「かはっ!」と苦悶の表情を浮かべる天龍。そこへさらに追撃を加えようとする重巡り級。しかし、むぎむぎと見過ごすわけにはいかな

い。龍田は天龍を攻撃されたという怒りも込めて、リ級へと槍を突き出す。

が、リ級は槍を脚で弾き、龍田へと向き直ることなく、さらに天龍の胸元へ踏み込みと同時に掌底を放つ。天龍は吹き飛ばされ、離れた位置にて全身を水に打ち付けた。

そこへ、重巡リ級は容赦なく攻撃を継続する。

彩符『極彩颯風』

リ級の周りを取り巻くような弾幕。しかしそこから不規則に分散し、全方位を覆っていく。まるで台風のごとく周囲を食い散らかすかのように広がるものの、その弾幕にさえ美しさが感じられた。

だが見惚れている暇などない。体勢を立て直すどころか未だに立ち上がりかけの天龍を庇うべく、龍田は槍をリ級に投擲して天龍の元へ急ぐ。

驚愕に染まる天龍の顔。しかしそんなものを気にすることなく、龍田は天龍を抱きしめた。

背後の装甲にかかる負荷。重巡洋艦より装甲が薄くとも、曲がりなにも軽巡洋艦。その装甲は駆逐艦よりは厚い。

が、全てを装甲で受けきれぬわけもなく、装甲を貫徹して弾幕が背中に、機関に命中し、龍田は痛みを耐えながらうめき声を漏らした。

——やがて、轟音が鳴り響く。せめて天龍だけは守り抜こうと、龍田は必死に天龍を抱きしめる。

そんな時、他ならぬ天龍に背中をポンポンと叩かれ、顔を上げた。目の前には、心配した様子を見せながらも笑顔を浮かべる天龍の顔。

「もう……終わってたぜ」

「そ、う……。良かったわあ、天龍ちゃんが無事で」

「当たり前だろ。お前は、世界水準軽く超えてる俺の妹なんだから」

天龍は龍田を抱えて立ち上がる。被弾によるダメージにより少しふらつくものの、天龍が支えることにより龍田は自分の足で立ちあがった。

重巡り級のいた場所には、腰まで届く赤い髪の女性が浮かぶ。緑と白で彩られた民族風の衣装を纏い、精悍な顔つきを苦しそうに歪め、その手には龍田が先ほど投擲した槍が握られていた。

「青葉の砲撃が決まったんだ。見事に顔面を捉えて、そのまま動かなくなつたのさ。まあ、多対一じゃないと絶対に勝てなかつたよ」

何にせよ、被害がこれ以上拡大する可能性はなくなつたためひとまず安心である。と思いつながら、龍田は自身の状態を確認した。

背後、機関が損傷したため、速度は落ちるだろう。魚雷発射管も被弾しており、既に魚雷は打てない。何より、自身が何か所も怪我を負っていた。

「中破してるが、まだ戦うのか？」

「提督は嫌がるでしょうねえ。でも、私はまだ戦えるから戦うわ」
「つたく、そういうところは俺とそっくりだな」

そう話しながら、龍田は天龍と共に倒れている女性の元へ行く。気絶しているようなその様子に申し訳なきを感じながらも、手にしっかりと握られていた自身の槍を回収しようとした。

その時である。

「紅魔館には一歩たりとも入れさせません！」

跳ね起きるように女性が目を覚まして立ち上がり、龍田に向けて拳を放った。龍田は油断していたものの、頬を掠らせるようにその拳をかわす。そうして女性は、再び崩れ落ちるように水面へと体を沈めた。

「私がッ——わた、しが……」

執念か、と龍田は肝を冷やす。頬は掠めた拳によって出血しており、天龍が慌ててハンカチで拭き取っていた。

その執念が深海棲艦化に影響によるものなのか、はたまたこの女性自身の意思によるものなのか。天龍に礼を言いながらも龍田はため息をつく。

「守りたいものがあるのは、貴女だけと思わないことね」

湖のひとりへ向かい、青年は艦娘たちと合流する。咲夜も一緒について来ており、艦娘たちを一目見て驚きはするものの、状況が状況なだけにそれを口には出さなかった。

「みんな、お疲れ様。終わったばかりで悪いけど、もう一度戦って欲しい」

「少し離れた位置で音がしていましたが、そちらですか？」

「ああ、今さなちゃんと魔理沙ちゃんが戦ってる」

「道理で、早苗さんからの支援がなかったんですね」

艦隊全体を見回すと、龍田が中破状態になっていた。見るに痛々しく、その負傷は勝利との代償と考えたとしても決して安いとは考えられなかった。

「龍田、その怪我は……」

「あら、どこかおかしいところがあるかしらあ？」

「……当たり前だろ。折角用意した無線は夕張に切られるし、重巡の皆が盾になるし、接近戦はダメだって言ったのに接近戦を挑むし。しかもそれで怪我までしてるんだ、心配しないわけがない」

「うふふ、優しいのねえ。でもねえ提督、覚えておくといいわ。あなただのその気遣いは時に人を傷つけるのよ。身体だけじゃあなくて、ね？」

「それでも——」

「お叱りはあ、全部終わってからにしましょう？」

そう言つて、龍田は傷ついた姿ながらも笑顔を浮かべ、ポケットから一枚のカードを取り出し、それを自身に渡してきた。渋々ながらも、青年はそれを受け取る。

「新人ちゃんが来たみたいよ」

咲夜が女性の介抱に回るのを傍目に見てから、艦隊全体を見回す。吹雪に続いて龍田も負傷してしまった今、戦力が増えることを望まないわけがない。

「はーいっ！ 衣笠さんの登場よ！ 青葉ともども、よろしくね！」

現れたのは青葉型重巡洋艦の2番艦、衣笠であった。銀色の髪をツインテールにまとめ、両手にはゴツゴツとした大きな主砲を持つ彼女。ハーフパンツの青葉とは異なり、女性らしくスカートを着用していた。

これで重巡洋艦が4人。戦力的にも、かなり安定してきたと言えるだろう。

「衣笠、よろしく頼むよ」

「うん、任せておいて！」

姉妹艦ということで青葉とどこか似通った部分があるのだろうか。その快活さに関しては、出会ったばかりの青葉のようである。

「あ、青葉!?! また会えるなんて！」

「衣笠、久しぶりですね！」

「それに古鷹も加古も！ うわあ、みんな懐かしい！」

青葉を見つけた途端、目を輝かせて抱きつく衣笠。その状態で古鷹と加古に声を掛け、笑顔を振りまく。衣笠にも、青葉のことを任せてもいいのだろう。艦娘に、姉妹艦にだけわかることもあるかもしれないのだから。

「よし、夕張。早速さなちゃんと魔理沙ちゃんの支援に行こう」

「はい！ あ、それと……先ほどの女性、重巡り級と化していた際に言葉を話していたのですが……」

「……わかった、頭に留めとく」

強く頷く夕張。深海棲艦が言葉を介するということ、それ自体は青年にとっても大きな疑問にはなるが、考える時間は今ではないだろう。紅魔館で起きているこの異常事態を先にどうにかしなければ、安息は得られない。

女性の様子を見ていた咲夜が、息をついておもむろに立ち上がる。

「怪我はないよね。これでひとまず安心したわ」

「あの、紅魔館というところの全員が深海棲艦化しているんですよね？」

「ええ、それがどうしたの？」

「僕らは今、咲夜さんの同僚の方を倒すことになりました。今後もおそらく、僕らが本当に危険にならない限りはこれが続くと思えますが……」

「……そんな事。本来なら……確かに私が戦うべきでしょうね。でも、私には……できなかったのよ。紅魔館の皆を攻撃するなんて」

「僕らを恨みますか？」

「全く不快に思わないというわけではない、かしら。でもね、必要なことだって、私にはできないことを代わりにしてくれているというのはわかってはいるわ。それでいて貴方たちを敵のように思うなんて……できないわよ」

齒噛みし、気持ちを落ち着かせるようにゆっくりと息を吐く咲夜。

咲夜という人物について、青年はあまり知らない。だが、今咲夜が抱えているであろう行き場のない沸々とした感情は、誰よりも理解できる。

「咲夜さん、はメイド長ですよ？ とすると、当然仕える主人、吸血鬼の女の子でしたか？ その人を相手にすることにためらわないんですか？」

「……勿論、ためらうわよ。でもね、」

少しの間、目を伏せる咲夜。その睫毛が震えているにも関わらず、冷静な表情を見せる彼女が面を上げた時、その顔には覚悟が宿っていた。

「主をお諫めするのも、私の役目ですもの」

017 第六戦隊の帰還

上空へと高度を上げながら、魔理沙は肩で息をする。

霧の湖にたどり着くまでも、怪物は容赦なく倒してきた。妖怪や妖精が怪物化しているのであれば、倒しても死ぬことはないだろうと半ば曖昧な根拠ながらも確信していたのである。決して、霊夢が見つからないことへの苛立ちがそうさせたのではない。

だが今回ばかりは、違和感が己の中で渦巻いた。紅魔館を前にして、現れた2体の怪物。姿形が変われども、その雰囲気だけは間違えようがない。

「なあ、そんなに本を持って行くのが嫌だったのかよ、パチュリー」
「……………」

「だんまりか、クソツ！」

赤い雰囲気をまとう、青白い肌の人型のような物体。頭と思われる部分に仰々しい被り物を被っているようにも見えるそれは、間違いなくパチュリーが変態してしまった姿であると。

パチュリーからの攻撃が飛んでくるため、回避しようとする。ただし、それは決して弾幕などではなく——

「ちつ、なんだよこの虫みたいなの！」
パチュリーが放つ、コウモリほどの大きさの化物が10数体。その小さな化物は自身の周囲を飛び回り、小さな直線的な弾幕を展開してくるのである。動きも俊敏であり、一つ一つがまるで虫のようにまとわりつく。

「持ツテカ……………ナイデ」

「やっぱり本のこと恨んでるのか、それならそうと言ってくれよ！」

海に現れた化物のようになってしまったパチュリー。今までの怪物同様話せないのかと思っていたが、その予想は外れたらしい。

「こんな時に限って外に出てきやがって。地下に引きこもってれば、そんな姿にならずに済んだかも知れないのよ！」

「……………大事二」

「喋れるんなら攻撃をやめるんだぜ！ 聞こえてるんだろ！」

「……………」

「ふざけやがって……ッ」

空を駆け回り、追尾してくる小さな怪物を弾幕により撃ち落としていく。速度と数こそ脅威であるものの、それほど耐久力があるわけではない。

全てを撃墜し終えた頃、もう一度魔理沙はパチュリーを見下ろす位置に滞空し、息を切れさせながら周囲を見る。

「これ以上はやらせません！」

湖に浮かぶ小悪魔——が元の怪物に急接近する早苗。放たれる砲弾に対し体を回転させながら回避し、目前に至ると弾幕を直撃させる。

全身に弾幕を被弾した小悪魔。まだ動けるのか、煙を吹き上げながらも早苗の姿を懸命に探す。だが、すでに早苗は上昇しており、その主砲が届く位置にはいない。

小悪魔が変貌しているのは、艦娘が軽巡洋艦と呼んでいた存在。なれど、その姿はパチュリー同様に赤い衣のような何かがにじみ出る。

「小悪魔もう限界だ！ パチュリー、目を覚ますんだぜ！」

が、パチュリーに容赦はない。その変わり果てた姿で魔理沙を睨みつけ、鋭い眼光を赤く光らせた。

火符 『アグニシャイン』

パチュリーによるスペルカード。握りこぶしほどの大きさの炎がパチュリーの周りを死角なく取り巻き、円を描くように広がっていく。

宙を自在に飛び回る魔理沙を逃すまいと追い続ける炎。魔理沙はただ逃げるだけではなく、その隙間を縫うようにして距離を空けすぎないように維持していた。

炎に囲まれた状況下。やられているばかりではたまらない。と、魔理沙は舌打ちをしてから懐から白いカードを取り出す。

ところが、次の瞬間——

「おいおい、冗談だろ！」

炎が輝きを増したかと思えば——先程全て倒したはずのコウモリのような化物に変わったのである。

パチュリーのスペルカードによって放たれた炎、全てが。

およそ100ほどの飛び回る小さな化物に取り囲まれ、魔理沙は冷や汗を垂らしながら周囲を警戒した。カードは再び懐に収め、箒を強く握る。

「多すぎて手に負えないぜ！　おい、早苗だっけか、一旦逃げるぞー！」

同様に上空で化物に取り囲まれていた早苗に一言声を掛け、歯がゆい思いを抱きつつ、魔理沙は弾幕を放ちながらその場から一目散に離脱した。

上空を飛び回るコウモリほどの小さな怪物の群れ、そこから飛んで距離を取る魔理沙と早苗の様子を遠目に、古鷹はじつと空を見上げる。

（艦上戦闘機が50、艦上爆撃機が30、艦上攻撃機が20、くらいかな。もしかして正規空母でもいるの？）

上空を制圧している、深海棲艦のものとされる航空隊。どうやって現れたのかは目撃していないが、空を埋め尽くすようなその数に絶望するなど言われる方が無理な注文である。

古鷹は艦隊を見渡す。駆逐の5人を始め、軽巡の3人すら不安を浮かべていた。彼らは十分な対空兵装を搭載していないために、あの航空機部隊に襲われてはひとたまりもないだろう。

比較して、他の重巡の3人を見る。数の多さには圧倒されているようだが、駆逐、軽巡よりは対空兵装も充実しているためか、そこまで悩ましげな表情はしていない。

（あの数を相手にするのは……私たちでも難しい）

幸いにも、航空機を落とすための制空機種、“戦闘機”が大半を占

めているため、半分は航行自体にそれほど影響を与えてくる相手ではない。

だが、爆弾を投下する機種“爆撃機”と、魚雷を投下する機種“攻撃機”は、合わせておよそ50。一斉に襲われれば、いかに重巡洋艦といえど対空戦闘において被害を免れることはできない。

いかにしてこの状況を突破するか。それを、まだ知識の浅い、優しいあのカミツレという提督に求めるのは流石に酷だろう。

「うわあ、すごい数だねっ。完全に制空権取られてるよ」

「うくん、どうしましょうか。夕張さんの指示次第ですが」

「あのぐらい、さっさと突撃して母艦を叩けばいいじゃん！」

「50機の攻撃を、青葉たちだけで防げますかねえ？」

「私たちならできるって！ ね、加古？」

「おうよ、あたしたちならそれぐらいどうにかできるさ」

衣笠、青葉、加古の3人が、どうやってこの状況を打開するかについて話し合っている。

半世紀以上もの刻を越えて再び集まった、古鷹型及び改古鷹型の4人で構成された“第六戦隊”。時を経ても、その仲の良さは全く変わらない。

「あ、あの……ふ、ふる、古鷹は、ど、どどどう思いますか？」

「……………」

「ご、ごめん……なさい」

自身と青葉の関係を除いては。

（ごめんね、青葉。ごめん、ごめんね……）

顔を俯かせ、古鷹は青葉から目を逸らす。それを拒否と受け取ったのか、青葉は顔を青ざめさせ、酷く怯えた声で謝る。その声音に古鷹は顔を上げそうになるも、押しこらえるようにして拳を握り締める。

喉元まで言葉が出かけているのに。あと一步踏み出すだけでこの関係が変わるというのに、その一步は果てしなく遠かった。

青葉が感じている責任。それは、古鷹自身よく知っている。サボ島沖海戦において、青葉の誤認により味方艦隊は大きな損害を被った。

しかし、古鷹は青葉の責任で、などとは微塵も思っていない。結果

的に損害を負うことになり、自身は沈んだ。だがそれは守るために、
“青葉を守るために自身がとった行動の結果”に過ぎない。

(私は恨んでなんかないよ……青葉あ)

身を呈して青葉を庇った時点で、既に命を賭す覚悟は出来ていた。
時代も時代である。いつ沈んでもおかしくない戦時下、遅いか早いか
の違いだったのだ。

その時代で、姉妹とも呼べる青葉を長女として庇う。傷を負いなが
らも青葉が戦場を離脱するのを見た時、己の中に湧き上がってきたの
は安堵のみだった。

青葉と話せない理由。それはもちろん、気まずいというのもある。
だがその気まずさは青葉の責任だと思っただけ、などではなく、
むしろ自身が沈んでしまったことにより青葉が責任を感じてしまっ
ているため。

古鷹の考えるサボ島沖海戦の行方。それは、同士討ちの可能性を最
後まで捨てきれなかった青葉だけを非難するのではなく、その重さを
分かち合うこと。誰もが困惑し、敵も味方も混乱したあの戦いにおけ
る責任を、同じ戦場にいた重巡として一緒に受け止めること。

青葉とは昔のように仲良くしたい。だがそれは、古鷹からもう気に
していないと話しかけてしまえば、気を遣わせてしまったと思わせる
ことになり、青葉がこの先もずっと後悔し続ける事になってしまうだ
ろう。

古鷹が聞きたいのはただ一言であった。建前でも構わないから、
「また会えて嬉しい」と。

「青葉、一度だけ水雷戦隊が前に出るわ。目標はまず、赤い軽巡水級。
可能な限り、そちらで対空戦闘をお願いできない?」

「わ、わかりました、夕張さん」

夕張が青葉に指示を出し、すぐさま軽巡と駆逐からなる水雷戦隊を
引き連れて全面へと押し出で行った。振り向き、青葉は指示を出す。
「じゃ、じゃあ皆さん、単縦陣です。青葉たちは支援砲撃を行いつつ、
対空戦をしますよ」

全員が頷き、主砲を構えて夕張率いる水雷戦隊へと続いた。既に、

前方では戦闘が始まっていた。

「後ろからの航空機は気にしないでください、前方の艦隊を援護します！」

深海棲艦の航空機が、幾重もの数機編成を織り成し、前方の艦隊へと波状攻撃を仕掛けていた。爆弾を投下する体勢に入り、その多くが撃墜されてしまっても、投下に成功する個体もいた。ただし、その爆弾が命中するとは限らない。

が、状況から言えば軽巡3人と駆逐5人の水雷戦隊はやはり劣勢であった。対空兵装が充実していない中で、雨あられのように爆弾が次々と投下される。時には足元に魚雷が忍び寄っており、慌てて回避することもある。

重巡の4人はしきりに対空砲火を行っていた。しかし、弾幕の厚い重巡の艦隊より、手薄な水雷戦隊の方へと攻撃が集中してしまうのは、やはり当然の結果だったのだろう。

そして、とうとう被害が出てしまう。

「きやあつ！ や、やだ、ありえない……」

対空射撃に夢中になり、足元の魚雷に気づかなかった叢雲が魚雷をまともに受けてしまい、中破の損害を負ったのである。

（叢雲ちゃんが……。あ、青葉に意見具申を——）

「よくも……。やっぱり私たちが前に出ます！ 夕張さんたちは被害艦を援護しながら離脱してください！」

「叢雲ちゃん大丈夫!? ごめんね青葉、あとは頼んだわ！」

青葉の表情が引き締まり、夕張へと指示を出す。その言葉は、何も言っていないというのに、まるで自身が望んだことをそのまま代弁したかのよう。

夕張たちが後退する中、重巡4人は止まることなく前へと進む。

「複縦陣を！ 対空戦闘に備えつつ、軽巡に接近します！」

青葉から大きな声で指示が飛ぶ。先程までの様子は欠片も見せず、ただ目の前の戦闘に目を向けていた。

青葉と古鷹が先頭、その後方にそれぞれ衣笠と加古が追従し、上空から来襲する深海棲艦の航空機の攻撃を防ぐ。

高角砲が、機銃が、硝煙の匂いを沸き立たせ、あの頃の戦闘を思い出させてくれる。

「敵艦が見えました！ 衣笠と加古はそのまま対空戦闘をしてください！ 我々は水上戦闘用意、一度で仕留めます！」

指示通りに、古鷹は対空戦闘を中止して主砲を構える。視界の先に見えたのは、一瞬だけ女性のようにも見えた赤いホ級。

「全速前進！ 方位30度、目標ホ級、主砲撃ち一方、始め！」

重巡洋艦の砲撃、連装砲からなる計6発の砲弾が軽巡へ向けて、音速を超えて空間をかじる。

ホ級は弾幕を展開してその砲弾を迎撃しようとしたものの、質量的問題からか弾幕を突き破られ、計3発の砲弾が軽巡ホ級に直撃した。

膝から崩れ落ちるホ級。しかし水面に倒れこむときには、既にワインレットの長髪の羽を生やした綺麗な女性へと姿を変えていた。

「対空戦闘始め！」

そうして、再び対空戦闘へと移行する艦隊。艦装に備え付けられた対空砲を、対空機銃をバラ撒き、急降下してくる爆撃機を、魚雷投下体勢に入る攻撃機を打ち落とす。

いつしか、来襲する航空機はいなくなっていた。上空には、戦闘機がブンブンとそれこそ虫のように飛び回っているだけ。

「爆撃機と攻撃機は全て落とすようです！ 母艦の掃討に入ります！」

「おうよっ！」

「艦隊、単縦陣へ！」

軽巡ホ級を倒した先に見えた、航空母艦の深海棲艦。大型の空母に比べ少し小さめであることから、どうやら軽空母であったらしい。

「目標を軽母又級と呼称！ 全艦、撃ち一方用意！」

そうして、赤い軽母又級へ向けて全速力で接近する艦隊。しかし古鷹は、青葉の指示を受け入れつつもどこか心に引っかかる部分があった。

（軽空母……しかないけど、あの一体が100機も航空機を出したの？）

軽空母。一般的な航空母艦に比べ小型であり、その分搭載できる機数も少ない。通常は50機前後、多くて60機程度が限界であるというのに、到着した頃には既に100機が展開していたのだ。

単純に航空機の搭載数が多いと見るには多すぎる数。謎の赤い気配を纏っているからという理由で終わらせるには納得のいかない疑問。

が、古鷹の抱える不安ともとれるような懸念は一瞬で解決を迎え、それは瞬く間に目前に広がった。

金&土符『エメラルドメガリス』

視界一面が緑色に覆われる。握りこぶしほどの緑色の弾幕と、人の赤子ほどもある緑色の大きな弾幕。宝石のような弾幕たちがまるでダンスのごとく無数に踊り狂い、あるいは美しささえ伴って攻撃を織り成す。

更に、握りこぶしほどの弾幕。必死に避けてはいたものの、回避したものは背後で弾幕から航空機へと変貌を遂げ、思いもよらぬ攻撃となつて古鷹たちを襲う。

「落ち着いてください皆さん、複縦陣を！ 対空射撃に集中してください！ 大きな方に当たらない限りは装甲はおそらく貫通しないはずです！」

自身の予想が悪い形で的中してしまったことに、古鷹は眉をひそめながら、前から来る切れ目ない弾幕と後ろから来る大量の航空機に対処する。

「お、おい青葉！ 言いたくないけどこれちよつとヤバいんじゃない？」

「加古も重巡なら自分の装甲を信じてください！」

「ねえ青葉、弾幕つて航空機に変わるものなの!？」

「そんなの青葉も知りません！」

必死に、それぞれがそれぞれ攻撃を受けないように立ち回る。それでも、陣形は円を描いたまま崩れることはない。

だがそれでも、弾幕と航空機による絶え間ない猛攻。いかに重巡洋

艦で編成された艦隊であろうとも、航空機が際限なく増え続ければその対応にも限界が来る。

「はわわ！ 痛いわね、この！」

大きな弾幕を回避したところで、衣笠が爆撃機の攻撃を受けてしまい、小破する。負けじとその爆撃機を撃墜したものの、受けた傷が消えるわけではない。

それを見た青葉は、何かを決心するように口を開く。

「衣笠が被弾しました。もう対空戦闘を維持するのは難しいです。そこで、せめてこれ以上航空機が増えないように、母艦を最優先に叩きます！」

「突撃イ？ いいけど、対空戦闘はどうすんのさ！」

「接近する敵機以外は放つといてください！」

「まあ、仕方ないよね！」

「へへ、燃えてきたぜ！」

「古鷹も——！ いいですか！」

「!? うん、わかった！」

最高速度を維持したまま、陣形を輪形陣から単縦陣へと変化させる。そして、距離をとりつつある赤いヌ級を睨みつけるようにして。

青葉が指示を叫ぶ。

「戦隊全艦、突撃します！ 砲撃は各個に行ってください！」

「衣笠さんにお任せ！」

「よっしゃあ！ あたしの出番だね！」

「うん……うんっ、これでやっとな……！」

重符『第六戦隊』

——重巡『青葉』『衣笠』『古鷹』『加古』

その指示に、衣笠も加古も血気盛んになる。昔馴染みの仲間、懐かしき雰囲気を出した古鷹自身も、少しだけ高揚感を覚えながら叫んだ。

「主砲狙って、そう——撃てー！」

声を上げた時、青葉が僅かに安心した表情になったのを古鷹は見逃す。

砲撃は装甲に阻まれることもあったが、命中弾はほとんど直撃となっている。重巡洋艦の重たい一撃に、又級は被弾する事に体をよろめかせた。

そんな時、青葉の頭上に爆撃機が急降下してきたのを、古鷹は見逃さなかった。だが距離が近いために、対空射撃は行えない。

「青葉あー！」

「させませんよー！」

その躊躇いを抱いた一瞬の間に、その爆撃機をピンポイントで撃墜したのは早苗である。瞬間、あたり一面に弾幕が散ったかと思えば、軽母又級の弾幕と航空機は一瞬だけ早苗によって相殺されていた。

ふと上空を見上げれば、魔理沙も上空に蔓延る航空機を片っ端から叩き落としている。

この苦しい場面を、一瞬にして転換した早苗。それに魔理沙。

その隙を、艦隊が見逃すはずがない。

「全艦斉射！ ありったけ！」

やがて、徐々に距離を詰める艦隊。重巡4人による砲撃が続く。

重低音と腹の底に響く衝撃が続く。軽母又級は未だ形が残っているのが不思議なまでに砲弾を撃ち込まれる。そして――

「ア、アア——ア……アリ、ガ……と」

青葉の放った一撃。轟音とともに赤い又級は水面へと倒れこみ、瞬きをする間にも紫色の髪の少女の姿に変わっていた。

艦隊全員がため息をつき、主砲を下ろす。航空機はいつの間にか消えて去っており、上空には魔理沙と早苗が辺りを見回している。

が、古鷹は状況を確認するより前に、青葉の元へと駆け寄った。

「青葉、さっきの爆撃の怪我はない!？」

「ひゃあ!?! だ、大丈夫です、早苗さんのおかげで被弾はしてないの
で」

「よ、よかったあ……」

体をペタペタと触り、怪我がないかを確認する古鷹。その様子に青葉は顔を赤くしたり青くしたりと大忙しであることに、古鷹は離れてため息をついてから気づく。

かつて、そして時代を超えて戦場を共に。乗り越えて手にしたものは、絆とも友情とも取れない、形容しがたい温かな慈愛であった。

早苗が赤い髪の女性を、魔理沙が紫の髪の少女をそれぞれ水辺から引き上げ、青年のいる陸へと連れて行く。

それを一目眺めてから、古鷹は視線を青葉から逸らしながらも口を開いた。

溢れ出す感情は止まらない。話をしないなどという曖昧な決心は消し飛んでいった。今はただ、この世界でもう一度出会えた喜びを伝えたい、と。

「あのね、青葉あ」

「は、はい……」

「私は……青葉が大好きだからね?」

「……えっ。あ、あの……ふ、古鷹……?」

「昔から”……ずっと”、大好きだからね」

「……あの、あ、青葉も、ふ、古鷹に会えて、また……会えて……え」

そして、青葉は両目を大きく見開いてから、その目尻に大粒の涙を貯める。口を開けて閉じて、震える唇に両手を添え、双眸から雫をこぼした。

「う、うああああッ——青葉は、青葉は——ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、古鷹……古鷹あ——!」

「最後まで……一人で……よく頑張ったね」

泣き崩れる青葉に寄り添い、その細い身体を力いっぱい抱きしめる。胸にこみ上げるものがあるのは青葉だけではなく、古鷹も青葉に身体を預けて顔を埋めた。

抱きしめ、抱きしめられる力がお互いの身体を締め付ける。苦しく

もあるそれは、古鷹が長年、それこそ最後に沈み、青葉の背中を見送った時から望んでいたものであった。

「蚊帳の外で寂しそうですね？」

「自分たちで解決したようですから、僕は満足ですよ」

「でも凄いわね、あの4人。パチュリー様を倒すなんて……。それに、あなたの言っていた早苗という子、やるじゃない」

隣で咲夜が少しばかり呆然としているのを傍目に見つつ、青年は青葉と古鷹が湖の上で抱き合っているのを見て胸を撫で下ろす。加古と衣笠は少し距離をとり、やれやれといった顔で二人を見ていた。

青葉と古鷹。この二人の関係というのが、青年の艦隊において最も懸念すべき事項であった。だがそれも、予想より早く結末を迎える。(良かった。本当に……良かったよ)

あとは紅魔館に関わるこの異変の原因を突き止め、早期に解決するだけである。霧の湖は完全に制圧完了し、残るは紅魔館だけとなった。

そして、咲夜の話では館の中に最後の人物がいるらしい。となれば、空を飛ぶことのできる魔理沙や早苗が主となって解決に当たるしかない。

だが、魔理沙や早苗が見せつけた強さを持つてすれば、おそらく解決はそう遠くないだろう。

「カミツレさん。先程戦った二人ですが、やはり怪我は一つもないですね。少し水を飲んでしまったぐらいのようです」

「わかった。怪我してるのにごめんね、さなちゃん」

「いえ、これぐらいでは怪我のうちにも入りません」

隣に現れた早苗が、ニッコリと微笑む。その笑顔にどうやら嘘偽りはないようで、肩の怪我は今あまり気にしていないらしい。

「それから、これを。落ちていました」

深海棲艦を倒し、艦娘のカードが、または深海棲艦の素体となった

人物が現れる。深海棲艦が言葉を話す時、紅魔館の面々と親しい咲夜の話によると、本人の意思に係しているようなことを話すという。純粋な深海棲艦が話した、という話は今のところ聞かない。しかし、もし素体となった人物の意思に基づいて話すとなれば、深海棲艦という存在は強い意思の結晶とも言えるのだろうか。

そして、深海棲艦を倒して艦娘が現れる、ということは一――

「航空母艦、鳳翔です。不束者ですが、よろしくお願い致します」
「クマー。よろしくだクマー」

現れたのは、おしとやかな雰囲気醸し出す軽空母と無邪気な印象を受ける軽巡洋艦であった。

軽空母、鳳翔。着物に身を包み、肩には甲板と思しき艦装。弓を持ち、まとめ上げた髪と柔らかく微笑むその姿は、大和撫子という言葉を連想するに易い。

軽巡洋艦、球磨。茶色の長髪と細い肢体。一風変わったセーラー服を身にまとっており、その場でくるくると回り出しそうなほどに身のこなしは軽い。

空母という艦種を、青年は初めて迎え入れた。咲夜の話していたパチュリーという少女が深海棲艦と化した時に軽空母になっていたが、あのような戦いをするのかと思えば非常に興味深い。

2人の歴史を知るように、2人は自身の歴史を知のだろうか。それをどう思うかは、今更気にするのではない。

2人に話しかけようと思ったその時、青葉と古鷹が陸へと上がってきた。青葉は真っ赤になった目元をゴシゴシと擦り、古鷹が苦笑しつつハンカチを渡す。

「司令官……」

「青葉、怪我がなくて良かったよ。それに……無事に終わったみたいだね」

「は……」

強く頷き、再び涙をこぼす青葉。古鷹は青葉の背中をさすって落ち

着かせながら、青年に対しても苦笑していた。

「司令官の……おかげです」

「どうして？ 僕は何もしてないよ？」

「司令官には、吹雪さんとの問題の時にお言葉をかけてもらいました。その後古鷹が来て……ずっと動転してましたが、青葉は青葉なりに司令官の言葉を噛み砕いてみたんです」

「……それは？」

「過去に囚われるだけじゃなくて、望む未来を捕まえることが大切だって」

「……僕は関係ない。青葉が気づいたことだよ」

青葉の回答に、青年は一つ息をついた。自身とは違う形で過去に縛られていた青葉。だが、そこから前へ進むことを、自分で見つけたのだ、と。

青年が発したあの言葉にそのような意図はなかった。今日の前にあるのは、あくまで青葉が気づき、見つけ、そして繋げたもの。

「青葉は過去に取り返しのつかないことをしました。でも、古鷹が許してくれて、青葉も古鷹が大好きで、昔みたいに戻りたくて、それで——っ」

「……うん。大事なものは、手放したらダメだよ？」

「はい！」

泣きながら太陽のように笑い、敬礼をする青葉。古鷹は青葉の手を握り、同様に青年にお辞儀をしていた。

これで良かったのだろうか、と悩まないわけではない。だが、現に青葉と古鷹は関係を取り戻し、とても幸せそうに笑っている。

——過去の記憶を乗り越えて。

（僕ももつと——。いや、僕は……）

幻想郷に何が待ち受けているのだろうか。自分は幻想郷に受け入れられているのだろうか。

自分は本当に過去を乗り越えられたのだろうか。世界を超えたただけで、人一人の意思は本当に変わるのだろうか。変わるのだろうか。

艦娘を指揮する立場といえど、艦娘に学ぶことは少なくないだろう。それは、同じく過去に一物抱えている者同士として。

——まるで傷を舐めあうように。

「——面白い『運命』ヲ感ヅルワ」

日は完全に沈み、夜が訪れていた。霧の湖の霧は晴れたものの、突如として赤い霧が辺りに漂い始める。その出処は、目標としている紅魔館からであった。

その背後、上空には、真つ赤な月が暗闇の世を照らす。

「——コンナ二月ガ紅イカラ」

——再び、小さな少女の声。鋭く、それでいて優しさを伴うが、その声音からは例えようのない畏怖しか感じられなかった。

声の聞こえた方向に、青年は全身に鳥肌を立たせる。

白い肌、白い髪。どこことなく不気味さを帯びながらも子供の可愛らしさを持つ『それ』は、酷く冷静に、酷く嘲笑的に。

まるで自身こそ崇高であると主張するかのように、不敵に微笑んでいた。

「楽シイ夜ニナリソウネ」

018 あの日の景色

紅い月が照らす紅い館。古めかしいレンガ造りの洋館の門の前に、その人物は立っていた。見下すとも睨みつけるとも取れないようなその視線に、青年は物怖じしながらも一歩前に出て話しかける。

「あの……言葉はわかりますか？」

「アラ、当たり前じゃない。何カ言イ残スコトハアル？」

「えっと、できれば貴女のお名前を伺いたいと思ひまして」

「私？ 私ハ、レミ——アラ、何ダツタカシラ？」

小さな少女のような深海棲艦の姿をしている紅魔館の主と思しき人物。口上こそ人間のそれとさほど変わらないというのに、どこか不気味さを感じずにはいられない。

「才前ノ『運命』、面白イワ。才前ダケジャナクテ、ソノ周りモ」

「運命、ですか？」

「暗クテ読ミニクイ未来。ダケド、小サナ光ガ少シズツ増エテ、ヤガテ大キナ光トナル。ソノ光ハヤガテ——」

「やがて……？」

「ウ——ウウウウウウウウウウアアアアアアツ——」

告げられる言葉を待っていると、唐突に少女が叫びだす。頭を押さえ、何かを振り払うように左右に振るい、血涙を流し始めた。

その様子を眺めていれば、後ろから肩を掴まれて引っ張られる。

引っ張った人物を見れば、早苗であった。

「危ないですよ！ 何をやっているんですか！」

「いやでも、話ができるなら戦わなくても済むかも知れないし」

「いつ攻撃してくるかわかりません！ 指揮官が最前線に立ってどうするんです！」

「……それでも、もうちよつとだけ」

呆れたような顔の早苗に謝りつつも、青年は少女へと向き直る。

咲夜からの話によれば、あの少女はレミア・スカーレット。『運命を操る程度の能力』を持つ紅魔館の主で、その強さも折り紙つき。自分など、瞬きをする間にも殺されてしまうかもしれない。

だが、深海棲艦の謎に迫ることができるチャンスを、みすみす逃してしまおうけにもいかない。

「レミリアさん、聞こえていますか？ レミリアさん？ 教えてください。ささい、あなたはどのようにしてその姿になったんですか？」

「知らナイ。人間風情が軽々シク口ヲ利カナイ方ガイイワ。今ノ私ハ最高ニ気分ガイイノダカラ」

「艦娘とどういう関係が、過去と何か関係があるんですか？ 教えてくださいないと、僕はあなたに、今日ここで出会った意味がなくなってしまう」

「フン、人間ノ癖ニ偉ソウネ。歴史バツカリ見テイル才前ニハ、運命ハ変エラレナイヨ」

レミリアは眉一つ動かさず、その場から動く様子はない。

青年も内心は慌てていた。深海棲艦のことは確かに気になる。しかし、運命を操るというレミリアの口から飛び出したのは、自身の未来を読み取ったかのような言葉。

「ネエ、人間。今ノ私ハ強イワヨオ？」

「そんなの……知ってます」

「気持チイイワ。コンナニ興奮シテイルノハ久シブリ。アナタ達ハ……私ヲ楽シマセテクレル？」

「あなたが戦わないというなら、戦うつもりはありませんよ」

「戦ウタメニ来タノデショウ？ 相手シテクレルワヨネ？ 私ハ戦イタクテタマラナイノニ」

気のせいかもしれないが、先程より空気の淀みが徐々に増してきている。赤い霧は更に濃度を濃くし、紅魔館の赤色とも伴って視界が暗闇の黒と紅色に埋め尽くされる。

(ダメ……か)

言葉は通じる。しかし、まともな会話を行うことはできない。彼女の視界には紅魔館でメイド長を務める咲夜も入っているはずであるが、戦うことを否としない。

むしろ、どこか戦うことを望んでいるようで――。

「無駄よ、あの状態のお嬢様はずっと戦うことしか考えていないの」

「咲夜さんが相手でも？」

「ええ。だから私は魔理沙に助けを求めに行ったのよ。私では……お嬢様のお相手は荷が重すぎるから」

「そう……ですか」

紅魔館、レミリアについてよく知るであろう咲夜でさえも、戦闘を前提としているということ。つまり、どのように会話を広げようと、戦いは避けられないのだろう。

「あの、提督。よろしいですか」

「あ、えっと、鳳翔……さん」

「鳳翔で結構です。申し訳ありませんが私、夜となると戦いに参加できないんです。航空機を夜間に飛ばすことはできなくて……、昼なら魚雷を直接投下するなどできたのですが」

と、悲壮な顔で告げる鳳翔。それを聞いた青年も、突然の告白に目を見開く。強力な艦としての期待を抱いていただけに、そのショックも大きい。

「ただ、助言はさせて頂きます。あの少女は元は別の種族だったのなら、その素体は非常に強力です」

「うん、どうやら吸血鬼らしいから」

「いえ、あれは『艦』として見ることはできないんです。例えるなら

……そう、基地。航空機を収容する基地です」

「……それって、まずいんじゃない」

「ただ、私と同様に航空機を夜間に運用することはできないはずですが、ならば、まだ勝機はあるのだろうか。青年も、接近戦について強力な水雷戦隊が、航空機によつて一挙に窮地に追い込まれた場面を見ていたのだ。その危険性はよく理解している。

航空機を運用できないとしても、個体としてはおそらく非常に強靱だろう。だが、基地というのは一体どういうことなのだろうか。

深海棲艦の正体にある程度の予想をつけるのなら、レミリアは――

「話が長イワ」

神罰『幼きデーモンロード』

と、考えをまとめるより先に、レミリアによる弾幕が放たれる。瞬間、青年は早苗に抱き抱えられて戦場から距離を取り——。やがて、戦端は開かれた。

闘符『水雷戦隊』

——軽巡『夕張』『球磨』

駆逐『吹雪』『叢雲』『漣』『電』『五月雨』

軽符『第十八戦隊』

——軽巡『天龍』『龍田』

重符『第六戦隊』

——重巡『青葉』『衣笠』『古鷹』『加古』

「全艦、誘爆に備えて魚雷発射管を投棄！ 水雷戦隊は岸ギリギリで射撃します！ 十八戦隊、六戦隊は砲戦を！」

放たれた弾幕は、空間に光線状のものが敷かれ、更に大小入り混じった弾幕が無数に放たれるというものであった。避けようにも光線に触れないようにしなければならなかったために、その回避には全艦が手間取らされる。

夕張が指示を出すのを聞きながら、漣は主砲を改めて握り締める。青年と出会ったときに感じた記憶。それは、平和な世においては信じがたいような悲痛な経験。自身らが守った果てにあるものがこれか、と悔しさを涙に変えて。

いかなる過去を持つとも、自分の意志で決めることは自分で決めさせなければならぬし、その選択には責任を持つという自覚を持たせなければならぬ。

漣は彼を甘やかしたくはないが、ふと見せる寂しげな微笑みを見ると、無性に頭を撫でたくなってしまふ。その気持ちを抑えることの方が、実際戦うより大変かもしれない。

今でこそ自身の持つ力と自分の役割にある程度責任を持っているようだが、もし選択を迫られた状況下で一步間違えたら……。どうなるかなど漣には想像もつかない。

だが、青年の元に来てよかった。当初こそ自身らに偏見を持っていたようだが、今では一番に心配をしてくれている。それこそ自身の身の危険よりも先に。

（戦闘態勢の深海棲艦と真っ先に会話するなんて……。無茶するにやー、つたくもー）

漣はある程度の速力を維持しながら、岸の近くの紅魔館の門に構える深海棲艦のようなもの——基地のような深海棲艦を捉え、その様子を伺う。

陶器のように白い肌、白い髪。幼女のような体型でありながら、感じられる圧迫感と不気味さは今までの比ではない。この場から今すぐ逃げ出したいほどに怖くもあるが、そうするわけにはいかない。

青年を守るためにも。

「全艦、主砲撃ちー方始め！」

夕張の指示とともに、漣をはじめとする駆逐艦は足を止めることなく主砲を撃ち始める。夕張と球磨も砲撃を始めており、火薬と硝煙の匂いが艦隊を包んだ。

しかし——

「アラ、ソノ程度？」

あまりにも敵は頑強すぎた。砲弾が自ら意思を持つように、ありえない軌道で逸れていく。命中弾すらことごとく弾き飛ばし、直撃を受けても平気な顔をしている。ダメージを与えているようにはまるで感じられない。

「くっ、撃ち続けてください！ 少しずつでも損傷を与えます！」

敵が陸上において魚雷が使えない今、水雷戦隊の火力は微々たるものにしかならない。それでも、水雷戦隊の本懐は前線を維持すること。ここを崩してしまつては、青年の身が危うくなってしまう。

が、やはり小型艦の砲撃だけでは無理があるのだろう。水雷戦隊の7人から砲撃を受けているにも関わらず、敵は動揺すらしていない。

その時、

「私もお手伝いします!」

奇跡『白昼の客星』

早苗が上空より弾幕を放った。細い針のようなその弾幕は円を描くように次々と放たれ、空間ごと蹂躪するように敵へと迫っていく。

砂の山に木の枝を突き立てるように、敵に向かって弾幕が次々と刺さって行く。面を制圧するように放たれたそれは、敵の背後にそびえる紅魔館という建物にまで命中していた。

「クツクツ——ヤルワネ」

額に手を当て、よろめきながら煙を上げて呟く少女。その様子を見れば、少なくとも自身たちが放つ砲撃よりはるかに効果を上げているように見えなくてもいい。

弾幕と砲弾の違いが原因なのか、それとも弾幕の特性ゆえに、なのか。

「隙ができたぞ! 撃て龍田!」

「第六戦隊、砲撃戦を開始してください!」

少し弱った様子を見せる敵に対し、天龍と龍田の第十八戦隊、青葉率いる第六戦隊が砲撃をこれでもかと言わんばかりに撃ち込んだ。
が——

「舐メナイデモライタイワ」

獄符『千本の針の山』

冷め切った声と共に、その弾幕は放たれる。敵を中央とし、そこから円を描くように無数の弾幕が放たれ、艦隊を襲う。

弾幕はてつきり攻撃してきた早苗に向けられるものだと思っていた。しかし容赦などなく、甘えなど許さず、逃げることにすら叶わず。

弾幕は艦隊を覆い尽くす。

「はわわ、恥ずかしいよお……」

「な、なんでえ……」

駆逐艦2名、電と五月雨がそれぞれ装甲を貫通されて数箇所被弾し、痛々しそうにその被弾箇所を手で押さえる。

更に、

「っつ。やっぱ、ちよつといろいろ積みすぎたのかなあ……」

旗艦夕張も被弾し、その装甲をもともせず弾幕は貫通する。

(ヤバイヤバイよッ！ 一回の弾幕でこんなにやられるなんて！)

駆逐の装甲は弾くことすら叶わず、軽巡の装甲でさえも容易に貫通する弾幕。攻撃範囲は広く、更にこの威力まで高いとなれば、艦隊にとって厄介どころの話ではない。

陸上の敵と戦っていることが原因か。否、動かない相手からの攻撃など、むしろ同航戦よりも攻撃が予測しやすい。

単純に、あの敵が強すぎるのだろう。今まではある程度防いでいたにも関わらず、今回だけでこの被害。素体となったという人物は一体どれほど強大な力を秘めていたというのか。

だが、考えながら弾幕を回避していた漣にも、とうとう限界は来る。まず一発、膝に命中し足を止められる。続いて2発目、右腕に命中し主砲を弾き飛ばされる。主砲の行方に気を取られていると腹部に、大腿部に、肩に、顎に命中し、思わずその場で膝をついてしまった。

朦朧とする意識、その中で漣は、自身の体を見ながら意識を離すまといと堪える。

(あ……本当にヤバイ。今大破しちゃったのに、被弾したら……)

そこへ、目前に迫る弾幕。1つどころではなく、5つの弾幕が自身を沈めようと肉迫する。

終わる——折角この身で再び蘇ったというのに、まだ何も成していないというのに、自分の命はここで終わってしまうのだろうか。

嫌だ。まだ姉妹艦と出会えてない。朧と。曙と。潮と。青年の頭だつて撫でていないし、言いたいことも言えていない。

『ありがとう』なんて言葉、自分には似合わないと思われているように。

(うつつくうく、なんもいえねえ……。動けよお……)

その時、誰かが自分を抱きしめるのを感じた。弾幕は命中せず、全て自身を抱きしめた人物に命中してしまった。

龍田、である。

「うふ……うふふふふふふつ」

「龍田、さん……？」

「ちゃんと用心しない子は……あとでお仕置きよ」

自身が中破状態にも関わらず、抱きしめて自らが被弾した龍田。被害状況は自身と同様に大破してしまっており、今攻撃を受ければ二人共沈んでしまう。

弾幕が更に迫る。考える暇など与えようとせずそれは目前に到達し――

「おらあー！」

未だ被弾していない天龍が、自身の持つ刀でその弾幕を斬り捨てた。

座り込む自身と龍田の前に仁王立ちし、刀を背負いその眼光を敵へと向ける。

「龍田とチビ共に手え出してんじゃねえぞ！」

そして弾幕の嵐の中を、自身らを守ろうとして一人堪える。装甲を頼らず、自らの刀で弾幕を斬り落としながら立つ姿は、まるでおとぎ話の中の英雄のように。

おぼつかない足取りで立ち上がり、生まれたての子鹿のように震えながら龍田を立ち上がらせた。

「龍田さん、私たちだけでも一旦下がろう？」

「仕方、ないわねえ……」

弾幕に気をつけつつ、漣は龍田に肩を貸しながら後ずさりする。

「クマー。夕張は一度態勢を立て直すクマー」

「え、球磨!？」

『夕張被弾、球磨が指揮ヲ執ル』と。艦隊、夕張が被弾したから球磨が指揮をとるクマー」

「うう……仕方ないわね、ありがと！」

球磨が飛び跳ねながら駆逐艦との連絡を密にし、夕張が半ば涙目になりながら壊れた艤装の応急処置を行うのを傍目に後退する。

「電ちゃん、大丈夫!？」

「平気なのです。まだやれるのです！」

「五月雨、下がってもいいのよ？」

「下がりません！ 夕張さんもいるんですから、まだ戦います！」

「龍田と漣ちゃんが下がるのを援護するわ！ 前に出なさい！」

「水雷戦隊の意地を見せるクマー！」

天龍は単独で敵に命中弾を当てようと奮闘している。それを援護するように、球磨率いる水雷戦隊が追従する。

——ああ、なんと頼もしい仲間たちだろう。あの仲間たちと共に戦えたこと、そして今も共に戦えること。それを誇りに思える自分が誇らしい。

それ故に、大破してしまった自分が情けなくなり、澁々ながらもおとなしく距離をとった。

これはただの撤退ではない。味方をより安全にするためにも、自身らが足を引っ張ることのないよう、撤退するのだ。

龍田は気を失ってしまった。その体の重みがますますのしかかるが、必死になってその体を支える。

水雷戦隊はまだ終わっていない。そしてその本領たる夜戦での實力は、まだ発揮されていない。弾幕による攻撃は驚異だが、それでも彼女たちなら必ず状況を打開してくれるだろうと、ボロボロだからこそ願う。

霞む視界と力が抜けていく身体。背負い込んだ龍田と共に倒れ行く。

意識が飛ぶ寸前。耳に聞こえたのは、泣きそうになりながらもどこか安心したような声。地面に激突すると思われた自身の体は、強く抱

きしめられる。

「……ありがとう。よく無事でいてくれたね……」

空を飛びながら、咲夜は複雑怪奇な自身の心情を抑え込むように弾幕を放つ。その対象となるのは、今も昔もその身その心を捧げる相手。

レミリア・スカーレットの成れの果てであった。

「お嬢様、目を覚ましてください！ お嬢様！」

「イイ度胸ネ咲夜。主ヲ見下ロシ、アマツサエ攻撃スルナンテ」

「私は今でも忠誠を誓っています！ しかし私の愛するお嬢様は、そんな得体の知れない輩に体を許すような方ではありません！」

「私ハ自分ノ意思デ戦ツテイル。吸血鬼ダゾ？ 戦イニ喜ビヲ見出スコトノ何ガオカシイ」

「好戦的な方ではありませんでした、でも……それでも！ 決して他者に振り回されることなく、己の意思を貫けと仰ったのは、他ならぬお嬢様ではありませんか！」

紅魔館の門の前から一步も動かず、飛ぶことのないレミリアと、空中から弾幕を放つ咲夜。弾幕は放たれているものの、レミリアに命中せず、むしろ弾幕が自らの意志で逸れていくようにも見える。

艦娘の攻撃、そして弾幕による攻撃。いずれにおいても、攻撃がレミリアから逸れていく事実を確認している。命中するものもあるが、砲弾も弾幕もありえない軌道でレミリアを回避する。ここから考えられるのは――

（自身が被弾する運命を操っている、ようね。……流石はお嬢様）

ただでさえ頑強。にも関わらず、攻撃をある程度緩和できるのだとしたら、防御面で非常に面倒である。咲夜としては、愛する主人の戦闘センスに感涙しそうになる部分もあったが。

「ネエ咲夜。覚エテイルカシラ？ アナタヲ拾ツテカラノ暮ラシ」

「忘れるわけがありません。私に光を照らしてくださいだったのは他なら

ぬお嬢様。ですから私は、その感謝を表現するために、お嬢様を元の
お嬢様に戻すために……戦っているのです」

「楽シカッタワ、コノ十数年。コノ500年ポツチノ歴史ノ中デモ、毎
日ガ夢ノ様ダツタ。ソレモコレモ、アナタノ才陰ヨ」

「その……お言葉は、正氣に戻られてから聞きたかったです」

「私ハ正氣ヨ？ アナタコソ正氣ニ、自分ニ正直ニナリナサイ。私ト
一緒ニ氣持チヨク——戦イニ溺レテシマイマシヨウ？」

「その運命は……受け入れられません！」

幻符『殺人ドール』

スペルカードを発動させ、大量のナイフが咲夜の周囲に浮かび上が
り、一斉にレミリアに向かって放つ。レミリアの元へ殺到するナイフ
は、弾かれながらもその装甲を突き破り、レミリアの身体へ初めて到
達する。

「レミリア、目を覚ましやがれ！」

「本当に大切なら、なぜ咲夜さんがそのせいで苦しんでいるんですか
！」

空中を飛び回る早苗と魔理沙も弾幕を放ち、ナイフと共にレミリア
の体を食い漁るように群がる。見ていて気分のいいものではないが、
愛くるしい元の姿を見られない方が余程辛い。

煙を上げ、その姿が隠れる。だが、煙が晴れた後に現れたのは、不
機嫌そうな顔で自身を睨みつけるレミリアであった。

「咲夜、一ツ面白い事ヲ教エテアゲルワ」

「……一体なんでしょう？」

「アノ青年、アナタト同ジダケド、アナタヨリ酷イワ」

「何を——」

「アナタニハ『私』ガイタ。デモネ、アノ青年ニハ、『誰モイナカッタ
』ノヨ」

「……まさか」

ナイフを握っていたものの、その手を緩める咲夜。呆然とする表情

に、レミリアは続ける。

「アナタヲ拾ツタノハ運命ダツタワ。服ヲ着セ、食べ物ヲ施シ、住ム場所ト家族ノ愛ヲ与エタ。イツシカアナタハ、私ニ感謝スルヨウニナツタワネ」

「彼にはそれがなかった、と。どうしてそれを知って……。運命、ですか？」

「彼ハ今マデ苦勞ヲ重ネテキタワ。ソシテ、コレカラ先ニ待チ受ケル運命〃モマタ、今マデト同等、ソレ以上ノ苦シミヨ」
「なら、彼は一体何のために……。生きて」

震える手で、ナイフを取り落としそうになる咲夜。それまで咲夜が抱いていた青年の印象は、情けないようでどこか頭は回る普通の人物だと思っていた。

しかし、蓋を開けてみればどうか。同じく拾われた身とはいえ、毎日を充実して過ごした自分と異なり、苦しみを重ねてきたただけの日々。

青年に対して大した感情など持っていない。紅魔館以外の人間に興味を持ち始めたとは言え、未だどうでもいい人間はどうでもいい。それでも、境遇を同じくした青年を。否、救われた自身と救われなかった青年とを比べれば、やるせなさが感情の中に浮き上がってくる。

「ダカラ、ネ、咲夜。彼ヲ、紅魔館ニ迎エ入レマシヨウ」

「お嬢……さま」

「アナタガ彼ノ運命ヲ変エレバイイ。拾ワレタ者同士、彼ニ救イノ手ヲ差シ伸ベル事デ、アナタハ何モ氣ニセズ過ゴセルノデハナクテ？」

「それが……。わたしにできることなので、す……。カ？」

「エエ。ダカラ——私ト一緒ニ沈ミマシヨウ？」

（救われた者と救われなかった者、ただそれだけ。他にも孤児なんていくらでもいるノニ……）

（救われた私だケが安穩としテ暮らすことは、正しいノカシラ？）

（もう、駄目ね。意識ガ離レてしまイそウ）

（彼ヲ引き入れルコトデ、彼ガ少しデモ救ワレルナラ、）

(私は、救ワレタ者トシテ彼を導カナイトイケナイワヨね?)

(ナラ——才嬢様ノ仰ル通りニ)

視界が赤く染まり、胸の内から沸々とした感情が湧き上がる。怒り、憎しみ、妬み、苦しみ、悲しみ。そして僅かな喜びと、同時に襲いかかる深く静かな冷たい感情。

その感情に身を委ねようとした瞬間、咲夜は背中を誰かに蹴られた。

「勝手に2人で納得しないでください!」

手を、否、脚を出したのは早苗であった。怒髪天、青筋が立ちそうなほどの激昂。そして蹴られた瞬間、咲夜は自我を少しずつ取り戻す。

「……痛いワね。何をすルのかしら?」

「私のセリフです! カミツレさんが救われなかったなんて、あなたたちがカミツレさんの何を知っているというんですか!」

人がこのような表情をしているのを初めて見た。いや、以前一度だけ、この顔を咲夜はどこかで見たことがある。

「確かにカミツレさんは孤児院育ちで、口下手で、人付き合いが苦手で、気味悪く思われて嫌われてたロリコンさんです!」

それは紅霧異変の時。博麗霊夢と霧雨魔理沙が異変の解決に乗り出して、自身やレミリアと対峙した時。目の前に浮かぶ緑色の巫女は、その時の霊夢と同じ顔をしている。

「でも、私がいたから耐えられたって言ってくれたんです! それに私だって……カミツレさんがいたから——!」

『ふざけないで! 時間を操れるからって、人の時間にまで干渉しないで欲しいわ!』

『その人の過ごした時間の価値なんて、その人自身が決めることよ!』

『運命がどうしたのよ、吸血鬼にはわからないかもしれないけど、人間は運命なんて簡単に換えられるだけの力があるのよ!』

『運命運命言う前に、まずは人事を尽くしなさい!』

しばらく顔を見ていない紅白の巫女。いつだつて彼女は一生懸命で、一喜一憂に忙しくて、誰よりも人生を謳歌していた。

「カミツレさんは笑ってくれたんです! 守矢神社に、神奈子様や諏訪子様にも、私に……お世話になりますって! だから——」

霊夢の生き方を羨ましいとは思わない。霊夢は霊夢の性格で、霊夢なりに人生を楽しみ、生きてきたのだ。そして咲夜自身も、拾われたとはいえ、紅魔館で過ごした日々の中で、楽しみを見出して生きてきた。

救われなかった、と言った。それ自体は間違いではないのかもしれない。だが——

「カミツレさんは守矢神社が——私が守ります!」

彼は、これから救われるところだったのだろう。今まで生きてきたならば、何らかの楽しみを日々の中に見出していたはず。

青年が自身の生き方を羨ましいと思うかはわからない。だが、自身と同じように生きろと押し付けるのは余計なお世話かもしれない。

彼は彼の選択で緑色の巫女と一緒にいる。そこに何かを見出して。ならば自分に、救われた者としてできることは、彼を見守ること。そして助けを請われた時に、初めて押し付けること。

ナイフを握り直した咲夜。その様子を見て口先を尖らせたままの早苗が、渋々と引き下がってレミリアへ視線を送る。

「お嬢様——私は」

「ヒトツ、イイカシラ。緑ノ巫女」

レミリアもまた、早苗へと視線を送る。その表情には訝しげなものが含まれており、早苗もそれを受けて、視線を逸らすまいと。

「彼二待ち受ケルノハ、重ク苦シイ運命ヨ? ソレヲ受ケ止メル覚悟

ハアルノカシラ?」

「私たちは『守矢一家』です。家族のためなら、どんな苦難だって乗り越えます」

「死ヌカモシレナイワヨ?」

「カミツレさんを助けるためなら、私が奇跡を起こしてみせます!」

「フ、フ。フフふふふふ……。運命を、たかだか奇跡で覆すというの?」

神術『吸血鬼幻想』

「調子に——乗るな!」

怒気を孕んだ叫び声。それと共に現れたのは、放射状に放たれる大きな弾幕とそれに付随する小さな弾幕。

夜だというのに、まるで空中だけ昼間になったかのように弾幕の光に照らされる。それは自身と、早苗も同様に感じているだろう。

「あつ……。お、お嬢、様……」

「あうっ!」

能力を使つたとしても避けられないであろう数の弾幕に囲まれ、被弾してしまう。その痛みにも、飛ぶのを制御できず地面へ向けて落下する。

痛みで体を動かすことができず、咲夜はいずれ来たるであろう衝撃に備えて静かに目を瞑る。

もつとレミリアに仕えたかった。仕えて、話して、笑って、怒られて。時にはからかって、愛でて、抱きしめて。そんな当たり前で平穩で、そして幸せな人生を過ごしたかった。

だが、他ならない主人であるレミリアに死を与えられるなら、それもまた一つの結末なのかもしれない。などと、悲しみと共に御終いを受け入れて。

受け入れて、一雫の涙がこぼれて。

身体に衝撃が——走らなかつた。

(……えっ?)

瞳を開くと、上空で早苗を抱える魔理沙。

顔を上げる。

自身を抱き抱えて悲痛な表情をしているのは、自身が救われなかつたと決めつけていた青年であつた。

019 The Embodiment of Scarlet Devil

「前に出ます！ 腹括ってください！」

「任せて！」

「わかった！」

「おうよ！」

早苗、咲夜が被弾したのを見ながら、青葉は第六戦隊を率いて水際へと距離を詰めていた。

鳳翔の助言によれば、彼女は基地型の深海棲艦。夜であるために、航空機を飛ばしてこないことが唯一の幸いだろうか。

チラリと、後ろについてくる古鷹を見る。その視線に気付いたのか、古鷹は表情を引き締めて一つ頷いた。

過去の記憶。自身が最も省みるべき歴史は、ようやく清算された。ここに至るまでに、どれほど嘆き悔み、悲痛に暮れ、絶望したことだろうか。届くことのない謝罪を、何度虚空へ向けて発しただろう。手を伸ばした先には、もう誰もいなかったというのに。

(司令官……ありがとう)

これでようやく、前へ進める。時を経て、世界を跨いでもう一度出会えたこと。古鷹に、加古に、衣笠に、そして青年に出会えたことは、この身にとって運命だったのだろう。

「水雷戦隊の皆さんは少しだけ距離をとってください！」

話を聞く限りでは、自分以外の艦は青年と記憶を共有しているという。だが、自身にそのような覚えはなく、青年の記憶も知るわけがない。

何かが頭の中で浮かびそうではあるが、金髪の少女の面影と、思考を遮る暗闇がそれを阻む。が、今必要なのは戦うことだ。それ以外を考えてミスをするなど許されない。

「目標、敵陸上基地！ 方位20、弾種三式、一発！ 撃ちー方始め！」
だから今は、戦いに集中する。話したいことは沢山ある。第六戦隊

の面々にも、青年にも。ならば、この戦いは一刻も早く終わらせなければならぬだろう。

拡散して焼夷弾をばらまく三式弾。本来は対空戦に用いる砲弾の一つであるが、過去に基地攻撃にも使用されたことがあり、大きな戦果を上げた弾種。

「レミリアお前、何したかわかってるのか！ 咲夜を攻撃するなんて！」

早苗を抱えたままの魔理沙が深海棲艦へ弾幕を放った。そして同時に、拡散した三式弾が命中する。混乱した状態の深海棲艦はうめき声を上げながら、上空の魔理沙を睨みつけた。

三式弾を選択した理由は明快である。艦娘の徹甲弾による砲撃より、早苗たちの放つ弾幕の方がより効果を上げていたこと。そして、三式弾が弾幕と類似した攻撃手段であること。

弾幕を三式弾の対地射撃と見るならば、この考えにたどり着いたのは偶然ではない。そして実績がある故に、三式弾は基地型の深海棲艦に対して有効な手段であることが今判明した。

「弾種そのまま！ 主砲撃ち続けてください！」

主砲から感じる反動。硝煙の匂いに塗れながら、青葉はひたすらに撃ち込んでいた。まるで花火が弾けるかのように、深海棲艦の真上で炸裂する。

それは一発だけではなく、第六戦隊の4人全員が放ったもの。容赦などなく、敵へと攻撃を浴びせる艦隊の様は、さながら獲物に飛びかかる肉食獣のように。

魔理沙でさえ顔をしかめるような怒涛の攻撃。深海棲艦を面制圧するかのごとく攻撃したために、その背後の門は粉々に粉碎された。た。

「撃ち一方やめ！ 煙に紛れて接近します！」

黒煙に紛れ、第六戦隊を率いて上陸し、紅魔館に接近する。

もう二度と同じ過ちは犯さない。古鷹と和解したのは、同じことを繰り返さないという、己への戒めなのだから。

湖上の水雷戦隊には少しだけ距離を取らせ、黒煙の中には深海棲艦

と第六戦隊のみ。現れた影に対応すればいいのだから、間違えようもない。

と、安心していたのも束の間であった。煙の中に影が見えたような気がして、自身の手の合図で射撃体勢をとらせた。

瞬間――

「本気で殺スワヨ」

紅符『スカーレットマイスタ』

鳥肌が全身を襲った時には、もう遅かった。

体がボロボロになり、損害状態にある深海棲艦がその眼を開き、弾幕を放つ。大中小と大きさの異なる弾幕は、全方位に向けて大量に放出された。

黒煙を切り裂いて、紅色の弾幕が視界いっぱい広がる。それを回避するには、第六戦隊は深海棲艦に近づきすぎていた。

「こっの、変態ヤローが!」

「ああつ! 直撃! ……?」

小さな弾幕は装甲で弾くことができた。しかし、避けようとしていた大きな弾幕を回避することはできず、加古と衣笠が被弾し、中破。

さらに――

「あ、危ない!」

「……えっ?」

二人が被弾したことに気を取られ、視界を一瞬離してしまう。だがその際に大きな弾幕が目前に迫っていたらしく、それに気づいた古鷹が身を呈して自身を庇った。

装甲は容易に貫通し、古鷹は被弾する。痛みを堪えるように顔をしかめながらも、中破していながら自身の前に依然として立ち塞ぐ。

「まだ……沈まないよ!」

呆然と――古鷹を見つめた。こみ上げる吐き気、襲い来る動悸、過呼吸に陥りそうなほどに胸が苦しく、膝が笑うことをやめない。

「アラ、アナタノ運命。繰り返スミタイネ！ アハ——アハハハハハッ！」

深海棲艦が高笑いし、弾幕が止まった。その一瞬で古鷹の胸ぐらに掴みかかってしまい、歯噛みしながら怒鳴り散らす。

「何をしているんですか大馬鹿！ 沈んじやったらどうするんですか！」

「私は沈まないよ。沈むほどの攻撃じゃないでしょ？」

「なら助けないでください！ もう二度と目の前で沈まないでください！」

「嫌！ もう傷ついて欲しくない！」

目を伏せ胸に手をあてる古鷹の表情は、怒っているながらも寂しそうである。その表情にさせたのは自分であり、わざと傷つけるような言い方をしてしまったのも自分。

胸ぐらを掴んでいた手に気づき、慌ててそれを離す。

「……第六戦隊のみんなと一緒に帰りたいんです！」

「だったら、一緒にじゃないとダメだよ……」

「心配されるほど腑抜けていません！」

「傷ついていい理由にはならないよ！」

目尻に涙を浮かべた古鷹が、搾り出すように声を上げた。それを受け、ハッと気づいてしまう。

古鷹に面と向かって怒られたのはいつ以来だろうか。心配性で優しい古鷹が怒るときは、いつだって理由があった。

第六戦隊を、古鷹を守りたい。しかし古鷹は、自身が傷つくのはダメだという。古鷹にとって、自分はまだまだ頼りないのだろう。

（……そういう、ことですか。……もう大丈夫、大丈夫なんですよ、古鷹）

加古を失い古鷹を失い衣笠を失い、一人になっても戦った。倒れ行く仲間の死を悼む暇もなく、時には擬装すら施し、どれだけ傷を負おうとも戦いに身を投じていれば、やがて戦争は終わった。

古鷹に守られた心の弱さはもうどこにもない。寂しさの結晶は、いつしか強さへと昇華した。

守られるだけの自分ではない。かつての自分のような甘えは失われた。

古鷹が心配するなら、その心配の種を取り除いてやればいい。

今度は自分が古鷹を守るのだと、守られるだけの弱さはなくなったのだと示すために。

「古鷹——心配してくれてありがとうございます。なら、ますます頑張らないといけませんねえ、ふふんっ」

「え……何を……？」

「事後の指揮権は衣笠に移譲します。中破した各艦は流れ弾に注意しながら、撤退してください。これより単独行動をとります」

ニッコリと笑みを浮かべ、加古と衣笠に視線を送る。二人は頷いて、古鷹の両腕を左右からそれぞれ抱え、引きずるように後退を始めた。

「絶対勝ってよ！」

「負けたら加古スペシャルを食らわせるからな！」

笑みを浮かべる衣笠と、親指を立てる加古。古鷹は引きずられながら自身の名を叫び、必死に手を伸ばしていた。

自身のポニーテールを解き、それを結っていた髪留めを、その伸ばされた手にそっと預ける。髪は重力に従って、肩をなぞるように下ろされた。

三人へ敬礼を送る自分は今、どんな顔をしているのだろう。だが、悪いものではないはずだ。

この人型は、どうやらすっかり笑えるらしい。表情も感情も思いのままなのだから。

「お先に失礼！」

三人に背を向け、背中に叫び声を浴びながら、深海棲艦へ向けて走り出した。主砲を携え、表情を引き締める。

その双眸——さながら狼の如く。

「来ルカ、面白い！」

「さあ、手荒い取材に付き合ってくださいね！」

三式弾を装填した主砲を一発だけ放ち、視界を奪って急接近する。同時に、近くで待機していた水雷戦隊も次々に上陸して突入を始めた。

「面白い、本当二面白イ運命ダワ」

「何が運命、何が天罰ですか、下らない。いつだって私たちが目にするのは現実しかありません」

「運命二ハ抗エナイノヨ？ ツイサツキ彼女ガアナタヲ庇ツタヨウニネ」

「それで古鷹が沈みましたか？ 運命さんは随分お仕事が雑ですね！」

三式弾をひたすらに撃ち続ける。その一発一発に顔を歪ませる深海棲艦。水雷戦隊と合流して、砲撃を艦隊として敢行した。

動かず、そのまま被弾し続ける深海棲艦。だが、実際に攻撃が通っているのは、自身の三式弾による砲撃のみであった。

「ソノ程度？ ナラ、運命ヲ変エルコトナンテ不可能ヨ！」

深海棲艦の眼光が輝き、弾幕が放たれる。その紅い弾幕は、まるで狙いすましたかのように吹雪と叢雲へ向かった。

だが、吹雪と叢雲の前に立ち、その弾幕を自身の装甲でもって受ける。いくつか装甲を貫徹したものの、耐えられない痛みではない。

「あ、あの……」

「アンタ——」

「許してください……とは言いません！ でも、もつと二人と仲良くなりたいたんです！」

球磨に視線を送ると、彼女は頷いた。球磨は水雷戦隊を率いて徐々に後退を始める。同様に単独行動していた天龍も、渋々ながらそれについて行った。

「さあ、沈む運命は変わりました。あとは根比べといきましょう」

「無駄ヨ。運命ハ巡リ、結果ハ不変トナル。逃ガレラレルモノカ！」

「では、この戦いにおける貴女の運命はもう決まっています」

「……世迷言ヲ」

駆け出した。既に水平射撃が当たる位置にまで距離を詰めており、反動を堪えながらも三式弾を撃ち続ける。

「喰ライナサイ！」

粒状の弾幕がすぐ目の前で展開される。しかし、まるで弾幕が自ら避けていくように、自身には当たらない。

「奇ッ怪ナ！」

再び放たれたのは、大小混合の弾幕。装甲を貫通し、大きな弾幕が直撃するも、まるでダメージなどなかったように再び駆け出した。

再び弾幕が直撃する。しかし突き進む。大きな弾幕が直撃する。まだ走り続ける。

不死身とも呼べるような進撃ぶりに、深海棲艦は戸惑いの表情を隠しきれていない。

「ドウシテ、何故進メルノ！」

昔から運だけは良かったんですよ。中々沈まなかったり、ギリギリで攻撃を避けたり。一人ぼっちになったのは伊達ではありません」

「来ルナ！ ワカラナイ！ 才前ノ運命——ドウシテ!？」

「生き延びたいわけではありませんでした。かと言って沈みたいわけでもありませんでした。それでも——それでも戦った！」

三式弾を放つ。その一撃は深海棲艦にとって大きな損傷となったらしく、既に壊滅状態。だが、尚も接近する。

「来ナイデッテ、言ッテルノ！」

「運命は一つに帰結しないと教えてあげます！」

「沈ンデ！」

「沈む場所はただ一つ、古鷹の傍だけです！」

砲撃は止まない。接近も止まらない。今この身を動かす原動力となっているのは、古鷹を傷つけられたからとか、青年に従うためなどではない。

過去の自分に別れを告げ、幻想の如き望んだ未来を生きるため——

「あなたの姿、よく見えますねえ！」

「ナ、何ナの！ 才前ハ一体、何だトイウのよ！」

「我——青葉ア！」

深海棲艦の額に主砲を突きつけ、その引き金を引く。

耳をつんざく轟音と共に、深海棲艦はようやく地に倒れ伏したのであった。

その様子を見て、荒れ狂う鼓動と暴れる呼吸を整える。

弾幕を避けたのも、貫通した弾幕から大したダメージを受けなかったのもただの運。だが、ここまでたどり着けるといふ確かな自信があった。そしてそれは、この戦いにおける運命だったのかもしれない。

「勝ツタ、ト思ツタカシラ？」

「——ツ!？」

『紅色の幻想郷』

至近距離にて、大小の弾幕が目の前で放たれる。咄嗟に距離を取るも、時既に遅し。

どれだけ戦いを生き延びようと、どれだけ運が良くとも。

“大破着底”という確定した歴史からは逃れられないらしい。

大きな弾幕を被弾し、中破してしまう。しかしいくら避けようとも、縦横無尽に敷かれた大小の弾幕が、自身を逃すまいとひしめいていた。

更に——

「不死身ハ才前ダケデハナイ！」

みるみる内に、目の前で深海棲艦の傷が治っていく。ボロボロだっ

た肌は元の陶器のような透き通った白色に戻り、損傷も復活している。

こんな話は聞いていない、と思うと同時に、儂くも死を覚悟した。
(昔から詰めが甘かったんですね。古鷹、加古、衣笠、皆……司令官、ごめんなさい)

「レミリア、そろそろお終いにしよう」

恋符『マスタースパーク』

自身に気を取られていた深海棲艦は、上空から迫る脅威に気づくことはなかった。

目前に、天から光の柱が堕ちてくる。轟音と共に、大地を抉り取るように、その空間にあらゆる存在を許さないような極大の光線。

光線が止むと、その場に倒れていたのは一人の少女と一枚のカード。

しかし近づく気力すら湧かず、自身はその場に座り込んだ。脱力し、ただ地面を見つめる。

生きているという実感と、運命に抗ったという実感。

それを胸に抱きつつ、両手で顔を覆い、静かに嗚咽を漏らし……。

魔理沙から放たれた極大の光線が終わり、その場に少女が倒れているのを見て、青年は心を落ち着ける。赤い霧は、徐々に霧散し始めていた。

紅魔館から少し離れた位置で、青年は何もできずに戦いの行方を見守っていた。怪我をした早苗と咲夜も傍に控えており、鳳翔が応急手当を行っている。大破した漣と龍田は、既にカード化して青年のポ

ケツトの中である。

いつしか、青葉の記憶にかかる暗闇は消えていた。青葉の記憶、青葉の意思。それを確かに受け取った青年は、静かに目をつむる。

批判もあった。孤独に耐え難い夜もあった。それでも戦い抜いた彼女は、涙を流しながら古鷹山を背に戦いを終える。

抗い、決意し、この戦いに勝利した彼女。青年は言葉もなく、ただ目を伏して呼吸を整える。

だが、いつまでも感傷に浸っている場合ではない。戦った艦娘を、戦い抜いた彼女を迎えるのは、提督たる自身の役目なのだから。

— と思ひ、青葉の方へ足を向けたとき —

「——オマタセ」

禁弾 『過去を刻む時計』

紅魔館の全周に人が立ち入ることを許さぬように、弾幕が展開された。いくつもの十字型の光線が回転し、球状の弾幕が全方位に向けて放たれる。

その中央、弾幕を放った人物。紅魔館の屋根に腰掛ける、陶器のような白い肌とふんわりとした白い髪。レミリアと同型の深海棲艦でありながら、不気味な雰囲気はレミリアの比ではない。

「オ姉様ヲ倒シテイイ気ニナツテルノ？ 死ヌワヨ？」

放たれた弾幕は紅魔館の周囲にいた艦隊を蹂躪した。青葉の元へ近づいていた水雷戦隊、および天龍をことごとく屠り、容赦なくその身を傷つけていく。

青葉はその弾幕の中でも被弾していなかった。だが、天龍が中破、吹雪、叢雲、電が大破、球磨に至っては駆逐艦を庇って最も弾幕が集中したため大破し、艦隊は最早戦闘が出来る状態にない。

油断していた。吸血鬼は姉妹だと聞いていたにも関わらず、強大な敵を倒したということだけで完全に気が抜けていた。

たった一度のスペルカードで。ただ一度の攻撃で艦隊が封殺され

た。この尋常ならざる事態に、青年は思わず駆け出す。

「提督、何処へ行くおつもりですか！」

「決まってる！　大破した子達を連れ戻すんだ！」

「無茶です！　提督は戦えないのですよ！」

「何もしないよりはいいよ！」

鳳翔の忠告を無視し、青年は更に駆ける。同様に上陸して救援に向かっている古鷹、加古、衣笠を追い抜き、青年は紅魔館の門の前に到着した。

呼吸を整えつつも、五月雨以外の大破してぐったりと倒れ伏している駆逐艦と球磨を、すぐさまカードへ変化させる。

いつ弾幕が放たれてもおかしくない状況にて、前線に出てきたことを天龍と夕張に怒鳴り散らされ、緊張と不安に体を震わせながらも青年は青葉の前にしやがみ込んだ。

「青葉、立てる!？」

「し、司令官!?　どうしてこんなところに?」

「そんなことはどうでもいい!　どっちだ!」

「ま、まだ戦えます!　青葉はしぶといんですから!」

見る限り完全に脱力していた青葉だったが、青年の顔を見て驚嘆に染まる。だが、状況をすぐに理解したのか、主砲を持って立ち上がった。

戦いに巻き込まないようにと、青年はレミリアを背負う。銀色のセミロングと、身体に似合わない大きな翼、レースが施された薄いピンク色のドレスを着た少女。あれほど驚異だったというのに、その体は驚く程軽い。

そしてその場に落ちていたカードを拾う。悩んでいる暇などなく、その場に実体化させた。

「私が鳥海です、よろしくです」

現れたのは重巡洋艦、鳥海。丈の短いセーラー服に成長した体躯。縁なしメガネと肩まで伸びるロングの、真面目そうな重巡。

「ごめん、戦ってくれ!」

「え、は、はい!」

戸惑いを隠さない鳥海と、焦りを浮かべる青年。青年は既に、この状況をいかにして切り抜けるかということしか頭になかった。

大破した艦は保護した。だが、現状の最大の戦力である第六戦隊で、レミリアを相手にあれだけ苦労したのだ。もう一人を相手にするには第六戦隊は傷つきすぎたし、残る戦力も少ない。

駆逐4人、軽巡2人が大破。残ったのは駆逐1人、軽巡2人、重巡4人のいずれも中破している艦と万全の鳥海。鳳翔は夜は戦えない。

だが、戦わなければならないのだ。異変に関わった者として。守矢神社を守るためにも、艦娘を守るためにも。

「戦えない者は自己申告してほしい！ 無理に戦えとは言わない！」

「それで戦わないと言うほど、青葉たちは腑抜けた訓練を受けてはいません！」

「そうだな、俺たちを甘く見てもらっちゃ困るぜ？」

「中破したってまだ砲は撃てるし、機関も絶好調だよ！」

「……わかった！」

戦力も限られている。士気も十分。ならば、選択は一つしかない。

「艦隊を再編成する！ 旗艦鳥海！」

「はいー！」

「命令は一つ、生きて帰ってくること！ 絶対にだ！」

抜錨『三川艦隊』

——重巡『鳥海』『青葉』『衣笠』『古鷹』『加古』

軽巡『天龍』『夕張』

駆逐『五月雨』

艦隊が編成され、鳥海率いる艦隊は上陸し、紅魔館の門の中へと進んでいく。

「単縦陣を敷きます！ 重巡は弾種三式、天龍、夕張、五月雨は攻撃が来たら重巡の装甲に隠れてください！」

重巡がそれぞれ主砲を構え、紅魔館の屋根の上の少女と相対した。

咲夜曰く、少女の名前はフランドール・スカーレット、愛称はフラ

ン。吸血鬼姉妹の妹であり、その能力は――

「アナタ達ハ壊レナイノ？」

瞬間、艦隊前方の地面が爆発した。大量の土石が舞い上がるも、艦隊は怯むことなく駆けていく。

“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”。

万が一人などに使用された場合は考えたくもないが、今まで人に対して使用されたことはないという。

だが、深海棲艦と化している今の状況で、その言葉を信ずるべきかは悩ましい。

「目標、敵陸上基地！ 重巡、各個に撃ち―方始め！」

鳥海の指示で、艦隊から三式弾が一斉に放たれる。紅魔館の屋根に座すフランは三式弾の攻撃に顔を歪めつつ、牽制代わりのような弾幕を艦隊に向けて放った。

前面に押し出ている重巡が、その装甲によって弾幕を弾く。後ろにぴったりとつく3人は、姿勢を低くして流れ弾に当たらない位置に着いた。

「フラン、レミリアは倒れたぞ！ 姉の真似なんかするな！」

「魔理沙ア、会イニ来テクレタンダ。私ネ、今トツテモ気持チイイノ……」

「おい、さっさと元の姿に戻って、咲夜に紅茶入れてもらおうぜ！」

そしてそこへ、上空の魔理沙からも弾幕が放たれる。きらめく弾幕は夜空を流星のように駆け、フラン目がけて堕ちていく。が、フランは歯を見せて笑うばかりで、一向に動こうとしない。

レミリアの時も同じであった。あの基地型の深海棲艦は、その場からほとんど動こうとしない。動かないのか、それとも動けないのか。

「砲撃を続けてください！ 弾種そのまま、撃て！」

更に砲撃を続ける艦隊。既に紅魔館の玄関口まで到達し、そしてここは水雷戦隊にとっても有効な攻撃が可能な位置。

「天龍、夕張、五月雨も砲撃開始してください！ 攻撃が来たら重巡を

盾にして構いません！」

艦隊の攻撃は止まない。その空間を抹消するかのような三式弾の嵐。精度を重視した軽巡と駆逐の砲撃。紅魔館の屋根は跡形もなく消し飛び、フランは紅魔館の内部へと落ちていった。

「やったか!？」

加古と衣笠がハイタッチをして喜んでいた。青年も遠目に見ていたが、間違いなく大きなダメージを与えているだろう。

例えるならば、外の世界におけるトラックが、何度も何度も激突しているかのような攻撃だ。それで無傷と言われた方がよほど怪しい。

「ねえ鳥海、どう思う?」

「私の計算では、少なくとも損害状態にまでは持ち込めたはずです」

古鷹と鳥海の間答。鳥海はズレたメガネを押し上げ、紅魔館を真っ直ぐ睨んでいた。上空にいる魔理沙も、紅魔館から上がる煙で何も見えないらしく、漂ったままである。

ところが――

禁忌『レーヴァテイン』

紅魔館の内部から、突如として現れた大きな光線状の弾幕と思しき紅い極大の光。レンガ造りの紅魔館の壁を容赦なく突き通し、そのまま艦隊をめがけて、壁ごと、横に薙ぎ払われる。

(えっ……あつ、みんなが――)

装甲がまるで紙切れのようであった。巨大な火炎の剣のようなそれは、紅魔館の壁をことごとく破壊しつつ、艦隊を襲い、蹂躪した。辛うじて鳥海が中破に留まる。だが、他の艦は一瞬にして、瞬きをする間に大破してしまった。紅魔館の前で、鳥海以外の全員が地に倒れている。

過呼吸に陥りそうになる青年。さらに――

「カミツレさん、霧の湖に新しい深海棲艦が――!」

息を切らせながら、早苗が青年に連絡する。絶望に苛まれ、虚無感に襲われ、青年は堪らず膝をついてしまった。

（僕は何をしたら……。戦力は？ 状態は？ 敵の数は？ 力は？ さなちやんと魔理沙ちゃんと咲夜さんと鳥海で、全員助けて全部倒して、それから——）

だが、青年の心を折る出来事がもう一つ。

「アハハハハハハハッ、アハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

禁忌『フォーオブアカインド』

『アハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！』

崩れかけの紅魔館から現れたフラン。その姿が——4人に。吸血鬼の不死性によるものか、これまでの攻撃もほとんど回復している。

「ねえ、さなちやん」

「は……はい」

「短い間だったけど……守矢神社で過ごさせて楽しかった」

胸の中で何かが失われ行く感覚——。青年は紅魔館に向けて走る。何か聞こえただろうか、いや何も聞こえない。

カード化させられるのは自分ただ1人。大破して命の危機が迫っているのは7人。最適解を導き出すのはなんて簡単なのだろうか。

ただ、突発的に動いたために、レミリアを背負ったまま走ってしまった。が、不死であるなら、最悪生きてはいられるだろうとそのまま走る。

鳥海が三式弾で無勢ながらも応戦している横へ、青年は到着する。大破した艦娘を全員カード化させ、ポケットに入っていたカードを全てまとめ、鳥海と向き合った。

「提督としての命令。必ず、生きて皆を守矢神社に送り届けること。それだけ」

「えっ——でも、提督！」

「装甲があるから君は逃げられる！」

無理矢理カードを鳥海の手持たせ、背中を押して早苗の元へと走らせる。残った自身はフランと——8つの目と相対し、拳を握り締めた。

自分が囷となれば、少なくとも鳥海に攻撃は向かわない。これは皆に、自分を慕ってくれた艦娘に対する恩返し。目も当てられない提督だっただろうが、青年なりの形容しがたい気持ちを行動で示した結果。

故に、この選択に後悔はない。フランを倒す方法、艦娘が可能性の一つであるというなら、生かすことこそ正しい選択で間違いないだろう。

覚悟を決め、大きく息をついて。

震えが止まらない手を握り締める。

ただ、願わくば。もしも許されるのであれば——

(もう少し、みんなと一緒に……いたかったな)

フランの眼光が一斉に輝くのを見て、青年は目を瞑る。

後戻りなどできない。そして、その選択肢さえも青年は持ち合わせていなかった。

「アナタの運命、本当に酷いものね」

背中に背負っていたレミリアが、いつの間にか目を覚ましていたらしい。深海棲艦だった時の姿と性格しか知らない青年としては、急に話しかけられたことに驚いたものの、諦めにも似た境地で声を返す。

「そんなものですよ。僕が幻想郷に来る前後の運命は本当に恵まれていました。ハハハ、僕みたいなのが幸せを願っちゃったから、バチがあたったんでしょうね」

「ふうん、そうかしら？ 貴方の運命は確かに醜くて面白い。……でもね、悪いことが起きるとは言っただけで、良いことが起きないなん

て一言も言っていないわよ」

「これ以上僕を幸せにするんですか？」

「少なくとも、あなたはここで途切れる運命ではないようよ——咲夜！」

瞬間、豪風が紅魔館一帯に巻き起こる。

何が起きたのかと現状を把握するより前に、いつの間にか、自身とレミリアは紅魔館の門の外へ移動していた。

そして上空。そこに君臨するのは見知った顔。

注連縄を装備し、赤い服を纏った軍神が、不機嫌そうな顔で顕現していた。

「ウチの子たちが世話になったね」

支援射撃

——御柱『メテオリックオンバシラ』

突如、空から巨大な木の柱のようなものが降ってきた。それはフランの1人を直撃して、一瞬にして原型を奪って地面へと叩きつけた。降ってきた、など軽い表現ではない。雨あられと降り注いだのだ。

爆音をかき鳴らしながら、フランめがけて柱が放たれる。外れたものは紅魔館へと突き刺さり、その内部を食い散らかすように破壊した。轟音を立てつつ、紅魔館は徐々にその姿を強制的に変貌させられる。

終わらない。柱は降り注ぐことをやめない。

フランを、紅魔館の全てを破壊し尽くすかのようなおびただし数の柱が、まるで砂に木の枝を突き立てるが如く、雨あられと墮ちていく。

——やがて攻撃が終わる。後に残ったのは、最早形を残していない

紅魔館の残骸と。

その入口だった場所付近にて、柱の影でうつ伏せに倒れる一人の少女であった。

「……あつ、霧の湖の敵が——あれ……咲夜さん、いつの間、に？」

「妖怪の山から援軍が現れたみたいよ。白狼天狗が空から、河童が水中から攻撃して、もう戦闘は終わったわ」

「あ、そ、そう……なんだ」

その場に、へたりと座り込む青年。座り込むなどではない、腰が抜けたのだ。

上空では神奈子が魔理沙と何やら口論しており、背中から降りたレミリアは咲夜とため息をついている。鳥海は現状を把握しきれていないのか、カードを胸元に抱きしめて周辺をキョロキョロと警戒していた。

そして、早苗。

「カミツレさんは……本当に馬鹿です」

早苗は俯いたまま座り込んだ青年の正面に立ち、頬を叩く。

ジンジンとした痛みが走るものの、その頬には早苗の優しい手が添えられた。

「馬鹿です……大馬鹿です。存在が奇跡みたいなお馬鹿さんです……」

「うん……ごめん」

「二度と……同じ真似をしないでください」

「……約束する」

「ばか……」

顔をあげて、涙をこぼしそうな表情を見せる早苗。震え、絞り出すようなその声が聞こえたかと思うと、青年の胸元に顔を寄せる。

声もなく、青年はその頭に優しく手を添えた。

上空を天狗たちが飛び回る。その中には見かけたことのある白狼

天狗の少女と、文という天狗の少女の姿もあつた。目を覚ました紅魔館の面々は、崩れ果てた紅魔館に声も出ないようで啞然としている。

今は何をすべきだっただろうか。艦娘をどうにか回復させて、艦装を修理して、にとりに砲弾の複製を頼んで。

紅魔館の人に壊したことを謝つて、神奈子にお礼を言つて、天狗や河童たちにもお礼を言つて。

襲い来る眠気で考えがまとまらない。地面に倒れまいとした結果、青年は懐の早苗を無意識に抱きしめる。

空が明るくなり始める。刻は既に、朝を迎えようとしていた。

長い一日は、ようやく終わりを迎える。

第二章 灰かぶりの審判

020 秘めたる鼓動

異変の夜が明けてから数時間後。朝日もその姿を完全に見せた頃。守矢神社の浴場。霊体を癒す効能のある温泉を引いているこのお湯は、艦娘の入渠にも大変効果的である。今回の異変では多くの艦が損傷したのだから、治り次第、次の艦娘に浴場を渡さなければ、艦隊はいつまでも動けないままなのだ。

だが。

「あーねむい……死ぬ……疲れたあ」

「加古ったら、死にかけのアザラシみたいな顔してて可愛い、ふふっ」

「そ、その表現ってどうなの古鷹？」

損傷の痛みを受け入れるがままに感じた死にかけのアザラシ、もとい加古は、働く気の起きないサラリーマンのような言葉を漏らしながらグツタリしていた。共に入渠しているのは、同じく第六戦隊の古鷹、衣笠、青葉である。

現状、鎮守府の戦力として最も大きな比重を持つのが重巡洋艦、その中でも同型艦かつ連携の抜群な第六戦隊が最優先として、最初の入渠組に選ばれたのだが――

（しばらく哨戒に徹するなら、治りの早い駆逐艦先に休ませた方があったしやいいと思うんだけどな……まいつか、提督の提案だしありがたくもらつとこ）

沸々と込み上がる別の形が頭に浮かぶのだが、それを言葉にすることはせず、代わりに顔をお湯につけてぶくぶくしていた。行儀が悪いからやめなさいと、すぐに古鷹に正されたが。

再びぐったりしようとする縁に身体を預ける。預けたところで、青葉が三人に輪から少し外れたところでぼんやりしているのが見えた。

「青葉あー、そんなところで何してんの？ こっち来なよ」

「……………」

「青葉？ 青葉ったら！」

「ふえあ!? あ、ああ加古、どうしました?」

「いや、ちよつと距離を感じたからさあ。それとも、まだ古鷹と話せそうにない?」

「ちちち違いますよ！ そんなんじやありません！ 少し考え事をしています」

と、慌てて否定する青葉。どうやら本当に呆然としていただけであつたらしく、輪の中に入っては衣笠の胸に頭を預けてくつろぎ始めていた。

「あー、極楽ですよ衣笠あ」

「ふふふ、青葉よりは大きいからね」

「む、失礼な。青葉はまだ成長途中ですから！」

「この体って成長するの?」

ムスつとしていながらも、本心から嫌そうではない青葉。自分で胸を揉みながら唸っているのだが、十中八九その願いは叶わないだろう。

「でも、青葉はホントに頑張ったよね」

「や、やめてくださいよ古鷹。結局、青葉は運が良かっただけなんですから」

「それでも、私の自慢の妹だから！」

そう言って、古鷹は青葉の頭を正面から抱きしめた。慌てる青葉を押しさえ込むように、衣笠もまた青葉を背中から抱きしめる。

揉みやんせ揉みやんせ。ここはどこ天国じゃ。

(あー、いいな。アタシもあんなのされてみたい)

などとボケーっとしながら、しばらくその光景を眺めていたのだが、耳まで真っ赤になった青葉が脱出したので、柔らか☆パラダイスは幕を閉じた。

加古はあくびを一つつくつくと、心に残る疑問をポツリと漏らす。

「にしても、変な提督だよなあ。艦娘のアタシらを生かすために死ぬとするなんてさ」

「きつと、兵器だと思っていないんでしようね。そうでなければ私たちもここまで気遣いをしてくれませんか」

「アタシは昨日着任したばかりだけど、あの提督ってなんなのさ。どういう人なの？」

「そうは言われても、青葉も昨日着任ですし……」

「私も加古と同じ……」

「き、衣笠さんは四人の中で一番最後だったもん……」

「一番最初が吹雪で、四日前とかだっけ？ 提督を否定したいわけじゃないけど、ホントに新人どころか素人なんだねえ」

多くの艦を指揮する立場になるまでに、どれほどの勉強と実績、経験を積まなければならぬか、艦娘であれば誰でも理解していることだろう。生半可な知識、知能では艦を徒らに消耗するだけであり、そこには当然想像もつかない重さの責任がのしかかる。

過去を共有しているというのなら、青年も提督という立場がどのようなものか多少なりともわかっているはずだ。いかに自身らが人の形をしているとはいえ、艦を従えるという根本は変わっていない。

「でも青葉は司令官のこと、守りたいって思いました」

しかし、青葉は迷いを伺わせることなく、そう答える。

一日で何がわかるというのか。否、一日でどれだけ理解したのか、だ。

「青葉は一時期、司令官の過去に暗闇みたいなもやもやがかかっていたので、記憶を読むことはできませんでした。その分、司令官というヒトを色眼鏡なく見ることでできたと思います」

「その結果、守りたいって思ったってこと？」

「はい。あの人の笑い方、見たことありますか？ にこやかなのに、とっても儚そうに笑うんですよ。でも、頼りないとは思えないんです」

「あー……、ま、器は大きそうだよねえ」

もしも。

もしもこの幻想郷で、この艦隊が存続しようとするなら。

（既存の知識の「提督」じゃ、対応しきれないのかもねえ。アタシら

もわからないことばかりだし。そういった意味じゃお互いに成長していく必要があるってコトかな)

例えば深海棲艦との戦い。例えば幻想郷の住人との戦い。

若くて頭も柔らかい彼の方が、柔軟に対応できるようになる可能性はあるのかもしれない。

(あーあ、アタシらで色々教えてやりたいけど、根っこから教えられるだけの経歴と知識を持った艦娘がなかなかいないんだもんなあ。 ”提督”を一から育てようなんて、それこそ連合艦隊旗艦クラスじゃないと荷が重いよ)

加古は再びため息をついたところで、古鷹の胸に頭を預ける。その魅惑的な山に溺れると、加古は人型で良かったと心から思ったのであった。古鷹も嫌がっているわけではないらしく、お姉さん然としてそのまま加古の頭を撫で始めた。

しばし堪能、他の面々もゆったりくつろいでいたのだが、青葉がふと思いつ出したかのようにこう語る。

「あ、そういうえば青葉、新聞を書きたいと思います」

「早苗、アンタも寝ていいんだよ？」

「いえ、気にしないでください。妖怪の山に感謝状を出すくらい、私でもできます」

「でも怪我しているだろう？ それに一晚寝ていないんだ。私や諏訪子は睡眠なんてあってないようなもんだけど、早苗は違う」

「でも、神奈子様……」

「もつと私たちを頼りなさい」

「……………はい」

神奈子の部屋を後にして、早苗は重たいまぶたを擦りながらあくびを一つ漏らした。

紅魔館の異変が終わった夜明けから数時間。日も姿を現してジリ

ジリと気温を上昇させ始めていたのだが、神社の中は比較的涼しい。今は皆眠っているためか、静まり返っているのも手伝って尚更である。重巡洋艦が入渠している浴場のみ、少し物音がする程度。

まるで、この神社に一人取り残されたように錯覚してしまう。

自分の部屋へと足を進めながら、早苗は一つため息を吐く。

（神奈子様はいつも優しいですね……）

それは決して、安心からくるものではなかった。嘆きとも異なり呆れとも違う、言うなれば虚無感に比する寂しき。

が、これを以て神奈子を嫌いと表するのは、早とちりどころかお門違いである。むしろ神奈子や諏訪子への感情など、愛などという陳腐な妄言などでは形容できないのだ。深く深く、体の芯より溢れ出るものは、感謝という言葉では伝えきれない。

何度二柱に尽くそうと考えただろう。何度二柱に身を捧げようと誓っただろう。今この心が存在するのは、ひとえに二柱の寵愛があったから。

だから。

（私にはその優しさが、時折眩しく感じてしまうんです）

見返りを求めない、ひたむきな純情を受けて尚、何も返せない自分が。

受け入れて、受身に徹して、ただ他人の剥き出しを取り込んでしまう自分が。

何もしようとしれない、何もできない、無力な自分が。

嫌いなかもしれない。

ふと、紅美鈴が境内で拳法の稽古をしているのが目に入った。早苗は足を止めて、その様子を眼に焼き付ける。

一心不乱に拳を、脚を振るう美しい肉体。時折跳ねる汗すら、朝日を帯びてキラキラとその勇ましさを照らしていた。

(あんな異変を経験してしまうと、幻想郷に来たって実感がどんどん湧いてきます)

その力強い演舞を見届けていたのだが、途中で美鈴が気づいて手を振ってきた。早苗もそれに笑顔で手を振り返し、会釈してから再び部屋を目指す――。

いつか見た音、いつか聴いた景色。いつか感じた色。

思い出したくもない――あの瞳。

『自分の家に神様がいるとか、コイツ頭がおかしいぜ〜!』

『えー早苗ちゃん、それちよつと……キモいよ』

『おい、あれ東風谷っていうんだけどさ、神が視えるとか言ってチョーシこいてんだぜ。笑つちやうよな』

『あ、あのね東風谷さん。私、東風谷さんと仲良くしてるって周りの子に思われたくないから……もう話しかけないで』

『東風谷? あー、そんなのいたな。確かイタイ奴』

『東風谷さん? 小学校と中学校は一緒だけど、あんまり知らないかな』

『東風谷さんの家の事情はよく理解していますが、この際先生はハッキリ言わせてもらいます。神様が視えるなんてこと、言葉にするのはもうやめにしませんか? 先生も東風谷さんをかばうのに疲れてきたのです』

『私は小学生の時に一度言ったきりで、それから口にしたことは……』
『いいですか? 高校生にもなればもう現実がわかっていると思います。自分は“特別”な存在ではない、“普通”の存在だからこそ努力する必要がある、と。……ああ、でも東風谷さんは――』

『天才だから、努力なんて知らないのでしょうかね』

思い出すだけでも忌々しい。否、忌々しいなどという言葉では足りない。

——憎い。

きつかけは子供の家族自慢に過ぎなかった。だが、神が普通ではないと気づいた時にはもう遅い。

ふざけるな。自分の何を知っているというのだ。自分の何が気に入らないというのだ。

頭を空っぽにして過ごしているお前たちのどこがそんなに偉いというのか。

(あは、そんなことを思っていた頃もありました)

痛みなどなかった。痛みを感じる隙間などなかったから。

煩わしさも消えた。全て下らないものに見えてしまったから。

残念ながら、自身は特別な存在だ。そもそも、誰しも誰かの特別であるし、特別になろうとしないこともまた、普通ではないとして特別扱いされてしまうのだ。むしろ、特別ではない何かを教えるはくれないだろうか。この幻想郷まで追ってこられるのなら。

現実を見ていないのは誰だろう。少なくとも、自分にはよく「視えて」いる。

(……でもやっぱり、私はその「普通」が欲しかったんでしょね) だから。

現実を視てしまい、寵愛を受け入れるだけ受け入れた自分が。

特別を特別と知らず、自らを普通と過信して誤らってしまった自分が。

より高みを目指し、誰かに認められるために努力を片時も怠らなかつた自分が。

嫌いなのだろう。

誰かって、誰だ。

自分って——誰だ。

早苗の部屋は青年の部屋の隣である。今は行き場をなくした紅魔館の者たちが雑魚寝しているはずだが、青年は無事だろうか。主に生命的な意味で。

(吸血鬼姉妹は……朝だから大人しくしているとは思いますが)

部屋を覗いてみようかとも思ったが、あれだけ必死になっていた青年がぐっすり眠っていることを考えれば、彼を起こしてしまうのは本意ではない。

誰かの為に命を賭けられること。青年の立場から選択されたその手法の是非はともかくとして、そう思えることは早苗にとってまばゆいのだ。

お互いを想い、お互いをかばい、お互いを助ける。青年と艦娘たちは、最初こそ互いをよく理解しないまま、それぞれの役割を形だけ演じているようにも思えた。

だが、この異変を終えた結果、どうだろう。歪でボロボロだった頼りない糸が、それは強固に、それは頑強に張り巡らされたのだ。

(羨ましいです。カミツレさんとあんな形で意思を交わせるなんて)

嫉妬にも似た悔しさが胸を刺す。いや、これは嫉妬なのだろう。

自分が得られたかもしれない一つの隣、一つの信頼の置き場所を、奪われたことへの。

が、艦娘を憎く思うことなどない。不甲斐ない己に釘を刺すことはあれど、青年を守るため、青年を想うが故にその場所を勝ち取った彼女たちに、どうして己の未熟さを語りかける必要があるだろう。

青年の優しさは、いつだって自分にとって猛毒だ。

かけて欲しい言葉を、かけて欲しい時にかけてくれない。決して甘やかしてくれないし、見捨ててもくれない。話に返事をくれる時も、どこか外れた天然さを含んだようなお間抜け。

何より早苗を締め付けるのは、自分を「特別」扱いすること。

きちんと目を見て話す。相手の言葉をしっかりと聞く。言葉一つ一つに喜怒哀楽を示してくれる。

これを「特別」扱いと言わずしてなんと申おう。「普通」は、皆それをしないというのに。

ああ、もし願いが叶うのなら。

どうかあの青年と、心から分かり合える日が来ないものだろうか。どうかあの青年が、心の内をさらけ出してくれる日が来ないものだろうか。

(カミツレさんには私だけ見ていて欲しかったです……なんて、ね)
それが叶わないことなど知っている。青年はいつも自分を助けてくれて、どんな時も自分を見てくれて、ありのままの自分を受け入れてくれる。

それだけで十分。彼はずっと、早苗のヒーローなのだから。

だから。

彼をずっと好きでいられる自分のことが。
早苗は大好きなのだ。

だから――

彼以外など知ったことではない。

自身の部屋に入ると、早苗は障子を静かに閉めた。

021 追い出されて

目が覚めたときは朝だった。清々しい空気と腕にかかる重みで目を覚まし、青年はゆっくりと体を起こす。

(……あれ?)

しかし、腕の重みで起き上がることができない。一体どうしたのだろうかと疑問を抱きつつ、瞳を自身の腕へと向ける。

そこにいたのは。

館を破壊され、泣く泣く守矢神社に泊まり込むことになった吸血鬼

——レミア・スカーレットの可愛らしい寝顔であった。

青年の方を向いて、すうすうと静かな寝息を立てるレミア。まるで幼子が親に甘えるように、小さな手は青年の服を掴んで離さず、頭を青年の胸へと擦りつけるような寝相。

呼吸と共に揺れる小さな唇は、その幼い姿からは想像できないほど色めかしいが。

(そうかそうか、寝床どころか家がないんだもんなあつて……ちよつと待てい)

納得する余裕などない。なぜ自身の部屋にレミアがいるのか、それどころか、自分は一体いつ守矢神社に帰ってきたのだろう。

「うわ……えつ、ちよつと……」

部屋を見渡せば、部屋の隅で本を読んでいるパチュリー・ノーレッジ、レミアに抱きついて眠っているフランドール・スカーレットと、紅魔館の面々が揃っていた。部屋の外、境内には紅美鈴の姿もある。(この人たちが守矢神社に来ることになったのは覚えてるけど、それから、それから……何があったんだっけ?)

ところどころ記憶が抜け落ちており、どうにも思い出すことができない。

だが、例えこの状況を誰かに見られたところで、青年には言い訳によつて切り抜けるだけの余裕が——

「お嬢様、朝食の用意が——あら、いい度胸じゃない」

あるわけがなかった。

障子を開けて部屋に入ってきたのは十六夜咲夜。部屋の惨状を見て一瞬硬直するも、「ああ」と一言だけこぼしてからその瞳には殺意が宿った。

体勢を変えることもできず、寝転んでレミリアを腕の中に抱えたままであるが、青年は困り顔で冷や汗を垂らす。

「え、えっと、咲夜、さん。何か勘違いをしているんじゃない」

「言い残すことは？」

ピキピキと音を立てて、咲夜のこめかみに青筋が立つ。何とか言い訳、というよりは無罪の事実の証明をしようと慌てていると、腕の中で眠っていたレミリアが目を覚ました。

「全くもう……うるさいわね。何なのよ？」

「レ、レミリアさん、丁度良かった。あなたからも一言お願いします！」

「あら、あなた……」

目を見開き、口元に手を当てて驚くレミリア。

この様子ならレミリアも勘違いなどしないだろう。部屋が狭いが故に起きた事故であり、お互いに悪気もない。そうと決まればレミリアにも庇ってもらいたいものであるのだが。

「お前は確かカミツレ。ゆうべは……その、激しかったわね」

「……………へ？」

「私だけじゃなく、フランまで組み伏せるとは思わなかったわ。私も……あんなに昂つたのは久しぶりよ」

額に手を当て、少し頬を染めながら。ほう、と腕の中でため息をつく彼女の頭を撫でたくなるような庇護欲に駆られるも、みるみるうちに静かな怒りに染まる咲夜の表情を無視することなどできなかった。

「あ、あの、レミリアさん。何を……」

「とぼけるつもり？ あんなに私のことをいじめたくせに」

ぷい、と顔を背けるレミリア。その興奮した様子の視線は、顔を隠すように俯くことでそらされた。もしかしたら、傍からみれば、イ

チャイチャイしているカップルのように見えるのだろうか。

と、いったところで、咲夜が青年の背中にナイフを突きつける。

「お嬢様と妹様に手を出した挙句、知らぬ存ぜぬで突き通すつもり？」

「い、いや、本当に知らないんですよ！」

「問答——無用！」

「酷い目に遭いました。正直異変の時より死を覚悟しましたよ」

「すまん。部屋が足りないから、カミツレのところに入れることになっただ。ちゃんと許可はとったんだぞ？」

「えっ、僕は覚えていませんが？」

「いや、お前は寝てたから早苗に」

「なんで!?!」

咲夜のナイフが背中越しに青年の肺を捉える直前。神奈子が部屋へと入ってきたため、なんとか青年は生をこの世に留めることができた。

とはいえ、自分の知らぬところで交わされた約束事に対し、青年は頬を膨らませるよりほかない。

場所は神奈子の部屋。共に部屋に座する諏訪子は冷たい麦茶をがぶ飲みしており、「ぷはー☆」と満足そうである。

「あーっと、今後はどうするんです？」

「どうにもこうにも、守矢神社としてはまず妖怪の山に礼を言わねばならない。これは私の方でやっておくから気にすることはないさ」

紅魔館から発生した異変に際し、神奈子は調査を終えてから数合わせのために妖怪の山に助太刀を要請した。妖怪の山との交流は既に射命丸文との交渉によって成されていたために、滞りなく話が進んだ。

守矢神社の結界は侵入者を排除するためのものから感知するためのもので貼り返されている。神奈子と諏訪子が、妖怪の山の者に対しある程度敬意を払っている証拠とでもいえよう。

最も、天狗や河童たちからすれば、早々に恩を売る機会がやってき

たぐらいいに思っている可能性はもちろんあるが。

「神奈子さんが粉々にした紅魔館はどうでしょう……？」

「それは私がやっておくよ。私の能力なら煉瓦ぐらい作れるし」

と、諏訪子がゴロゴロと転がりながら手を挙げて返事をする。

諏訪子の能力とは、〃坤を創造する程度の能力〃。岩石・土・水・植物・マグマなど、大地に関する物体を無から創造・操作することが可能である。

紅魔館は基本煉瓦造り。流石に紅魔館そのものを復活させることは難しいが、紅魔館に限りなく近いものを作るとは容易であるという。

話を聞き、神奈子の能力といい諏訪子の能力といい、凄まじいの一言に尽きる。どうして自身の周りには普通の人間がいないのだろうか。

と考えるも、紫に名付けられた〃艦娘を指揮する程度の能力〃もまた、考えようによっては大きな力となってしまうが。

「それと、皆のことなんです……」

「そう……だな。こればかりは私たちも頭を悩ませている。カミツレの判断で最大戦力である重巡四人を風呂に入らせているが、それだけでも半日はかかりそうだな」

「半日って……。体が大きいとその分治療に時間がかかるんですか？」

「あ、ううん。多分、霊体の力の大きさの違いだと思う。駆逐艦より軽巡洋艦、軽巡洋艦より重巡洋艦の方が魂の力が強いみたいだからさー」

「鳳翔だけ全くの無事。鳥海が中破で、あとは全員大破か。こっぴどくやられてしまったな」

「あ、そういえばまだもう一人いますよ。フランドールさんが倒れていた所に一枚落ちていたようなので」

と、青年は懐からカードを取り出した。

白露型駆逐艦四番艦『夕立』

かつて第三次ソロモン海戦にて大立ち回りを演じ、鉄底海峡に沈ん

だ駆逐艦。敵味方入り乱れる大海戦の中で、まさしく獅子奮迅の活躍を見せた艦である。

(頼もしそうだ……キツイ性格じゃなきゃいいけど)

しばらくは鳳翔とこの子で警備をするしかないのだろうか、と思っていたのだが、神奈子と諏訪子がそれぞれ思い出したように懐から何かを取り出した。

「あ、今更だが、妖怪の山からカード預かっているぞ。最後に押し寄せてきた深海棲艦を倒したら浮いてたんだと」

「そういえば私も電ちゃんから預かっているよ。霧の湖の戦闘で手に入れたから、カミツレ君に渡して欲しいってさ」

二人からカードを預かると、青年は逡巡しながらもその艦娘たちをしかと受け止める。

今手元には、自分の知らない新たな歴史が加わった。それをどのように紡いでいくかは、自分の手にかかっている。

それだけの覚悟を、今の自分は持っているのだろうか。

彼女たちの信頼に値する何かを、彼女たちへ向けられるのだろうか。

「……怪我してる子達、流石にこのままというわけにはいきませんが。でも、入渠は一度に4人が限界ですね」

「そればかりは時間が経つのを待つしかあるまい。艦娘には我慢を強いることになるが……」

辛そうな面持ちの神奈子の言葉に、青年は打つ手がないことを知る。

(早速これだ。もう少し皆のために何かしてあげられないのか……自分が情けない)

何が司令官だ。何が提督だ。

彼女たちの足を引く張って、彼女たちの好意を受け止めきれなくて。

目の前で傷ついていく艦娘を見ていることしか出来なかった自分に、そんなものを名乗る資格なんてない。

「失礼するわ……って、お揃いで顔を歪ませてどうしたのかしら？」

「……あ、咲夜さん。その、艦娘の皆の怪我を、どうにか早く治療する方法はないかと思ひまして」

「ああ、そんなこと？ それなら早く相談してくればよかったのに」
咲夜の思わせぶりな発言に、青年は飛びつくように目を見開く。その勢いに咲夜はのけぞるようにして顔をしかめたが、一つ咳をつくると人差し指を立てて口を開いた。

「永遠亭に行きなさい、万能の医者があるわ」

「お出かけですか、カミツレさん？」

「あ、紅さん」

「美鈴で結構ですよ」

自室に帰ると、レミリアとフランはまだ眠っており、パチュリーは本を読んでいた。美鈴は境内での鍛錬を終えたのか、部屋の中で瞑想をしていたようである。

彼女たちは現在、神社の外に出ることを許されていない。特に、スカーレット姉妹は吸血鬼としての不死性を有している。その不死性から、深海棲艦として再び復活する可能性が拭いきれたわけではないのだ。

「どちらまで？」

「ちよつと永遠亭まで。今日は帰りませんので、部屋は自由に使ってください」

「わかりました。紅魔館無き今、私はここの部屋を死守したいと思ひますー！」

と、冗談めかしてニコリと笑う美鈴。青年もクスリと笑い、損傷した艦娘のカードを揃えて大切に置いた。

「おや、艦娘さんは連れて行かないのですか？」

「諏訪子さんと約束しましたから。無傷の子は既に哨戒のローテーションを組んでいます」

「んん？ カミツレさんは戦えないと聞いていますが……」

「まあ、仮に野宿になるとしても、火を焚いていけば大丈夫でしょう」
頭大丈夫かコイツ、などとは流石に思っていないだろうが、美鈴の
驚き具合はなかなかのものである。

そう。咲夜から永遠亭の話を聞いたあとに、青年は諏訪子から一つ
の叱りを受けたのだ。

『カミツレ君。そういうえば、紅魔館で自分から死のうとしたらしいね
？』

『死のうとしたって……。えつと、はい。でもあの時は仕方なく——』
『早苗も泣かせたし。ここで一緒に暮らしたくないの？』

『そういう……わけでは』

『今日はウチには泊めないから。どうして私が怒っているか、頭を冷
やして考えなさい』

『……ごめんなさい』

これで理由がわからないほど、青年も鈍くはない。
だが。

それでも守りたいものがあつた。

命をかけてでも大切にしようと思つたもの。

運命——否。この宿命を全うしようと己に誓わせたものが。

それまでは、露とも知らなかったというのに。

反対したのは神奈子。妖怪の溢れる幻想郷に放り出すのは危険す
ぎる、艦娘が海岸の防衛に当たる以上、青年の護衛はつけられないか
ら実質一人になる、という主張である。

しかしそれも、

『神奈子の到着が遅かつたからそんな事態になつたんだよ？』

『ぐ……しかしそれは』

『力が落ちてることを理由になんかさせないから。それとも神奈子。
“その程度”なの？』

『……いいだろう。非常に癪だが、確かに私にも至らない部分はあつ

た。お前の意見を認める』

という、青年からすればまるでわけのわからない会話によって。一日だけ守矢神社を離れることになってしまった。

艦娘には、役に立たない自身と違って哨戒という役割があるのだが、怪我をしている艦以外の全員が動かなければ数が足りない。

一部の艦娘、というより異変に参加して大破した艦の何人かがそれでもついていくと言って聞かなかったのだが、当然そんなことを許すはずもなく半ば強制的にカード化させた。

あまり望ましい選択ではなかったと理解はしている。だからこそ、区切りを付けたいという意味で一人になることを受け入れた。

永遠亭に行かなければならないのは、勿論艦娘の上司たる自身の責任。青年が自ら行かねば、誠意もなにもあつたものではない。

(大丈夫だ。行きは道案内に咲夜さんもいるし、夜は永遠亭で一晩だけ泊めてもらおう。ダメそうなら本当に野宿だ)

「まあ、そういうことですのでよろしくお願いします。さなちゃんは今寝てるみたいなので、起きたらそう伝えてください」

「は、はあ……？」

そうして、青年は部屋をあとにする。

幻想郷で、初めて独りで過ごす夜は怖いのだろうか。

だが、もし寂しいと感じるようなことがあるなら、それは自分にとって一つの前進なのかもしれない。

「咲夜さん。本当にこの道であっているんですか？」

「……………」

「あの、咲夜ちゃん？」

「年下をちゃん付けて呼ぶのやめなさい。魔理沙も嫌がっていたでしょう。今集中しているから、少し静かにしてもらえないかしら？」

「え、年下だったんですか？」

「老け顔と言いたいのか?」

通称、〃迷いの竹林〃を歩く青年と咲夜。咲夜は案内役を買って出たため青年についていくこととなったのだが、先ほどからその足取りが曖昧である。まるで迷ってしまったかのように。

鬱蒼と茂る竹林の中、それでいて空気はシンと静まり返っており、まるで何か神聖な空間に足を踏み入れたかのような感覚。肌がピリピリとして、どこことなく青年は居心地の悪さを覚えた。

「ああ、一つ聞きたいことがあったの」

「なんででしょう?」

「あなた、紅魔館に住むつもりは?」

振り返り、咲夜の口から語られたのは青年も呆気にとられるような言葉。一瞬何を言っているのかと理解できなかったが、咲夜はそのまま続けた。

「私も孤児だった身として、あなたの痛みがわからないわけではないわ。私はお嬢様に拾われて幸せになった。あなたにも、その機会を拾って欲しい」

「……えー、咲夜さんは似た境遇の僕を紅魔館に引き入れたい、ということですか?」

このタイミングで「紅魔館はもうありませんよ」なんて空気の読めない発言をするほど、青年も子供ではない。

咲夜のその提案。魂胆を探るべく言葉を選んでいるのだが――。

「ええ、お嬢様に許可は頂いているわ。霧の湖に隣接していて、海へ続く川もあるから、艦娘さんたちも動きやすいでしょう?」

「なるほど。それは確かに一理あります」

「あまり乗り気じゃなさそうね?」

「守矢神社で過ごすのが楽しいですから」

「なら、神社で過ごす以上の幸せを約束するわ」

「そういう話では……ないんです」

読めない。

自分を引き込もうとしていることはわかる。海への影響力を持つ艦娘を手に入れることは、紅魔館にとって大きなメリットをもたらす

だろう。そして、手元に置くならば、指揮官である青年を取り込むのが最良であることも。

しかし、それ以外の思いやりを。狡猾さよりも、むしろ自身へと差し伸べられる優しさを与えてくれる選択肢。それを前面に押し出している理由がまるでわからない。

わからないフリをしなければ、きっと自分は揺れてしまうのだろうか。

そんなことはお見通しなのか、それとも最初から色よい返事をもらえないとわかっていたからなのか。やっぱり、といった風に咲夜は小さく苦笑した。

「でしょうね。話すだけ話しておこうと思っただけよ。でも気が変わったら、いつでも紅魔館に来てくれていいわ」

「お気遣いは嬉しいです。今度遊びに行かせてもらいますよ」

「ふふふ、それもいいわね。来た時は精一杯もてなしてあげる。紅魔館にとって恩人ですもの」

クスクスと笑う咲夜。まるで青年の答えを見越していたかのように、その表情には曇りはない。

が、ふと顔を上げたかと思えば、青年に向き直り、その顔を引き締める。

「そういえば、お礼を言っていなかったわね」

「お礼、ですか？」

「紅魔館を助けて欲しいというお願いを聞いてくれたこと、紅魔館の異変を解決してくれたこと、空中から落ちていく私を助けてくれたこと。全部引つくるめてよ」

「僕は……。僕らは、やるべきことをしたまでです」

「命をかけるほどのこと？ あの時あの場であなたが死んで、一体どれだけの価値があったというのかしら？ 私を受け止めたのだから、かなりの衝撃があったでしょう？」

「手厳しいですね。でも、それでも——」

「それでも？」

「僕……私たちは、大事な人と離れることの痛みを知っていたから、どう

にかしたかったただけなんです」

「……ありがとう」

そう言つて、柔らかな笑みを浮かべる咲夜。あどけなく、本心からの言葉であるかのように笑うその表情に、青年は照れくさくなり目を逸らす。

「今日、夜はどうやって越すつもり？」

「どうつて……永遠亭に泊めてもらおうと思つてます。泊めてもらえなければ野宿でしょうね」

「永遠亭に？ ……いえ、それはやめておきなさい」

「え、どうしてです？」

「詳しくは言えないわ」

咲夜は少しだけ両眼を鋭くさせたかと思うと、ポケットから何かを取り出す。よくよく見れば、それは幻想郷で使われているであろう硬貨であった。

「永遠亭で用事が済んだら、人里までは案内してあげる。だから、そこで宿をとりなさい」

「ダメです、受け取れません。お金の施しなんて、僕は一番嫌いです」

「そう言うと思つたわ。だから、そのお金はあなたに『貸して』あげる。ちゃんと返しに来なさい。『使おうと使わまいと』、ね」

「……では、確かにお借りしました」

青年にお金を貸し付けてまで永遠亭に泊まらせないという咲夜が、何を考えているのかなどわかるはずもない。

だが青年は、そこに何らかのメッセージが隠されているようにも思えて、大人しくその硬貨を受け取つたのである。

満足そうに頷いた咲夜は気を取り直したのか、力強く足を踏み出した。

「さあ、早く永遠亭に行きましょう。私も神社に戻つてお嬢様と妹様の給仕をしないとイケないの」

「あの……咲夜さん！」

「何かしら？」

「そつちは、今歩いてきた方向です」

「……よく気がついたわね。そう、今はあなたを試したのよ」
その後、咲夜の案内の元、2時間かけて永遠亭に到着することとなる。

青年と咲夜は、ようやく永遠亭の前に到着した。竹林の中、開けた場所に鎮座する少し大きめの屋敷は少し古い造りではあるが、くたびれた様子はまるでない。

その屋敷の囲いの前、一人の少女が箒で地を掃いていた。

「うん？　咲夜さんじゃないですか」

「こんにちは、うどんげ。永琳はいるかしら？」

「師匠なら書斎にいますよ。……そちらの方は？」

「守矢神社は知っているわね？」

「はい。数日前に妖怪の山にやってきた神社ですよね？」

「ええ。彼は神社の関係者の一人なのよ」

薄い紫色の長髪に赤い瞳。伸ばされた背筋に、学生のような格好。最も彼女を特徴づけるのは、およそ人間には生えているわけもない、頭部から生えた長い兎の耳であった。実際に生えているのか、つけ耳なのかはともかくとして、少なくとも青年はこの少女のことを、兎を見るたびに思い出してしまっただろう。

咲夜から軽く説明を受けた少女は向き直り、ジロジロと眺めるように青年を見てからおおずとお口を開いた。

「あの、魔理沙が話していたんですが、もしかして茅野守連さんですか？」

「え……？　あ、ええ、そうです」

「ああ、わかりました。師匠には私から話しておきます。どうぞ、遠慮なくお入りください」

「ど、どういうこと？　というより君は？」

「私は鈴仙といいます。さあ、立ち話もなんですから」

そう言っつて、鈴仙は青年の背中を押して永遠亭の中に招こうとする。

突然押されることに青年も驚いたが、どうせ目的の場所は永遠亭である。戸惑いながらも、青年は足を進めることにした。

歩く中で、後ろから、

「……困ったことになりそうね」

と、ため息が聞こえたような気がした。

が、艦娘を救いたいが一心でいた青年は、他に考えることなどなかったのである。

また、ちょうどその頃。

「カ、カカカカミツレさんを一日追い出した!?　なんてことしてるんですか!」

「あ、いやその……早苗?　カミツレ君には頭を冷やしてもらおうと――」

「私がビンタしちゃったんだから、あの話はそれでおしまいなんですよ!　諏訪子様も神奈子様も嫌いです!　今日の晩ご飯はお二人だけたくあんですから!」

守矢神社では、怒号と呼ぶに相応しい叫び声と、神々の嘆きの声が響き渡ったという。

022 難攻不落の心

「私が永遠亭の診療所を開いている、八意永琳よ」

「あ、えっと、か、茅野守連といいます。よろしくお願いします」

畳の部屋に通された青年は、5分ほど正座して待っていた。が、早々に足を痺れさせてしまったためにその場に崩れ、咲夜に面白半分に足をツンツンといじられていた。

そんな所へ、永琳と呼ばれる医者が鈴仙を伴ってやってくる。そのままお互いに自己紹介をしてしまった青年の心境は推して測るべし。

姿勢を正し、お互いに対面して座る。再び正座しようとしたのだが、崩して構わないと永琳は話す。

鈴仙は掃除の続きをする為はその場から離れた。よつてこの場には、対面して座る青年と永琳、壁に寄りかかる咲夜の3人となる。

が、この永琳という女性、青年の目には眩しすぎた。しめ縄のように太く結わえた銀髪に、女性ながらも精悍な顔つき。赤と紺のツートンカラーの服をまとっているが、小さくはない胸元がその存在を主張していた。ぷるんとした唇も、整えられた長い睫毛も、光り輝いてすら見える白い肌も、全てが全てこの世のものではない様な美しさを備えている。

この凛々しくも美しい女性と正面から向き合うというのに、青年はまだまだ貧弱な精神しか持ち合わせていない。

「噂はかねがね。聞きたいことは色々あるけれど、先に茅野さんの用件から聞かせて頂戴」

「わ、わかりました。では、単刀直入に伺います」

意を決して永琳の瞳を見つめ、青年は口を開く。

「肉体を持つ幽霊の傷を癒す薬を探しています……できれば沢山」

「……不思議な薬ね」

永琳はスツと視線を鋭くさせたかと思うと、一度瞼を閉じる。そして、静かに瞳を開いては、その口から言葉を連ねていく。

「とりあえず答えとしては、薬はあるわ」

「ほ、本当ですか!?!」

「ただし、3つ条件がある」

立ち上がりかける青年を、永琳は手で制した。そしてその手を握り、人差し指を立てる。

「一つ。そもそもそんな薬を使う人がいないから、試作として作っただけのものしか在庫がないわ。今回渡せるのは5回分、5つよ」

「5つ……いえ、十分です。是非とも頂きたいです」

その返答に、永琳は僅かに薄目になるも、中指を続けて立てる。

「二つ。材料は珍しいものが多いから、これから作るにしても一日に作ることでできる量は限られるわ。一日に一つがいいところでしょうね」

「……方が一の事態もあるので、作って頂けるなら非常に助かります」

「わかったわ」と、小さく頷く永琳。

この永琳という女性。先程から青年が持ちかけようとしていた話を全て先読みしているかのように話す。まるで、青年に積極的に協力しようとしているかのように、である。

だが、最後の発言で、青年もその理由がわかったような気がした。

「三つ。経過観察の必要があるから、あなたたちには永遠亭に住んでもらうことになるわ。軍艦の魂の具現化——これを危険と思わないわけがないでしょう?」

その真意——いや、隠そうともしていない。つまり永琳は、艦娘たちを自分たちの手中に収めたいのだろう。

軍隊のない幻想郷。幻想郷においては弾幕ごっこで勝負を決めるとは言え、統率のとれた集団は善し悪しを別として危険なものと判断されてもおかしくはない。

だから、自分たちの監視下に置く。紅魔館の異変も、形が違えば単純に紅魔館対艦娘という戦争になっていたのだから。

だが、軍艦、それ以前に軍という概念は幻想郷においてほとんど存在しないはずである。この永琳という医者、どこでそのような知識を手に入れたのだろうか。

考えるも考えるも、青年の頭にはアタリがつくような答えは見つからなかった。

「それは……お断りしたいです」

しかし、受け入れることもできなかった。青年は拳を握り締め、生唾を飲み込みながら答える。

答えた瞬間、青年は冷や汗を垂らす。表情こそ変わりはないのだが、永琳の雰囲気が目に見えて攻撃的なものへと変貌したのだ。

まるで空気が揺れているようで。

(ああ……今更だけど、改めて思い知らされたっていうか……)

自分は、艦娘は——この幻想郷において和を乱すファクターであるらしい。

「薬、『高速修復材』というのだけれど、3つ目の条件を飲み込めないようなら渡すことはできないわ」

「そこは……どうにかできませんか?」

「力を持った新参の神社と、特殊な干渉力を持つ海軍。どこを信用しろというのかしら? 幻想郷の支配でもするつもり?」

更に視線を鋭く尖らせる永琳。

「軍というのは、世界を変えてしまうぐらい大きな力よ。しかもあなたたちは、幻想郷で扱いきれない、不思議に包まれたままの海に対する唯一の手段。既にどれだけ揺るぎない立場に置かれているのか理解して?」

「……僕は」

幻想郷に来て、守矢神社はまだ数日の新参もいいところである。ところが、その新参勢力が擁する個人と付随する力が、発生した異変を半日で解決したとなればどうだろうか。

そして、誰もが手出しできない海にすら対応できるとなればどうだろうか。

頼もしい、面白くない、様々な感情が生まれるだろう。しかし、最も考慮すべきは、危険だ、あるいはその個人を引き入れれば幻想郷において大きな力になる、といった思考に至ることではないだろうか。少なくとも、八意永琳という永遠亭の主は、それに近い懸念を抱えているようだ。

「八雲紫さんにも信用を頂いています。それではダメですか？」

「あの妖怪は信用するには人柄がダメね」

「……ですよね」

「名前を出した貴方が納得してどうするの……」

紫の名前ならどうにかなる、と思っていた。しかし、どうにも紫の評価は人によって意見が分かれるらしい。

どうすればいいのだろうか。『高速修復材』という薬を手に入れた上で、守矢神社で暮らし続ける方法はないのだろうか。

信用が足りないのだ。永琳を納得させるだけの、艦娘と自分に対する信用が。

ないものは——築くしかない。

「八意先生。あなたが僕らの存在を危うく考えていることはよくわかりました。でも、僕にも守矢神社を離れたくない理由があります」

「永遠亭に住まなければ薬は渡さない」

おそらくこれは殺気。先程から全身が凍りつきそうなほどに萎縮しているのは、目前に座る永琳が睨みつけているから。

少しでも気に入らない返事をすれば、殺されるまではなくとも痛い思いぐらいはするだろう。

「聞いてください。僕は艦娘を統括する立場にあります。命令は僕が出します。僕を抑えれば、艦娘は無効化できるも同然です」

「あなたを拘束すれば手っ取り早いってことかしら？」

「それは待つてください。仮に艦娘が何か幻想郷にとつて良からぬことをしてしまった場合は、僕を殺してもらって構いません。僕を殺せば、少なくとも命令系統はなくなります。それで納得してもらえませんか？」

瞬き一つせず、青年を睨みつける永琳。咲夜が何か言おうとしてい

たようだが、永琳はそれすらも制して青年から目を逸らそうとしない。

「確かに、軍では指揮官を潰すのは有効な手段ね。でも、実際に戦闘能力を有するのは艦娘でしょう？ その約束に意味はないわ」

「しかし、僕らに幻想郷を乱すつもりはありません。守矢神社もです。信用できないのは分かっていますが、僕らの意思を無視するのは――」

「だから、原因のあなたに話を持ちかけているのよ、提督さん」

全く表情の変わらない永琳。これほどの恐怖、人生の中でも感じることはそう多くはないだろう。

的確に意見を潰す。それでいて何を考えているかを読み取らせない。

青年にとつて、あまり相手にしたくない性格である。

「霊夢さんを探す手がかりが、海にあるかもしれないんです。そして、それができるのは僕らだけ」

「永遠亭に住みながらも出来ることよ」

「……守矢神社を離れたくありません」

「危険だから永遠亭で管理すると言っているの」

「なら、僕をすぐに殺せるような対処をするだけで簡単です。何かあれば、僕を殺せば艦娘の戦力は無効化できるも同然ですから」

「殺したら無効化できるって、いつ確認したのかしら？」

「……っ、それは……」

永琳から瞳を逸らし、青年はその場に俯く。

（……わからない。信用って難しいな）

今まで人との接触を拒み続けてきた罰、だろう。そして、立場を理せず流されることに甘え続けてきた罰。

誇れるものなど何も無い。そんな自分が信用を得るために、できることはただ一つ――。

立ち上がって咲夜に向き直り、僅かに逡巡した後、青年は話す。

「咲夜さん。ナイフ、貸してください」

少しばかり瞳が鋭くなっている咲夜。が、何かをいう訳でもなく、

太ももからナイフを一本取り出すと、無言で青年に渡した。

その刃を眺めれば、自身の顔が映る。

(……まだこんな顔してたのか)

そして、ナイフの柄を右手で握り直す青年。立ち上がったまま座った永琳に向き合うと、表情こそ崩さないものの永琳はその殺気を強める。

「八意先生。ひとまず、僕がどれだけ本気かはお見せしたいと思えます」

「ふうん……どうするのかしら？」

「こう、するんです——！」

言葉とともに、青年はナイフを逆手に持ち替え勢いよく振り下ろした。ナイフの目指す先は、青年の左の肩口——。

(惜しくは……ない！)

腕一本をもって、信用を形にしようとした青年。そして、そのナイフは服を破り皮膚を抉って骨に到達——。

するより先に、青年は畳の上に投げ出されていた。

気が付けば視界の先には天井。打ち付けたらしい背中には鈍痛が走り、気がついてから痛みが襲ってくる。

何が起きたのだろうか。視線を動かせば、傍には咲夜が静かに立つ。

「私のナイフに何をするのかしら？ あなたの汚い血で汚さないで欲しいわ。永琳に襲いかかりでもすればまだ面白かったのに」

「な、投げ飛ばされた……？ というより、八意先生に襲いかかるわけないじゃないですか。皆の薬を作ってくれてるっていうのに……」

仰向けに投げ出されたまま、青年は大きなため息を一つ。ナイフは既に咲夜が回収したようで、その手には青年が握っていたはずのナイフがあった。

起き上がれば永琳の顔。ふと気づけば、その顔は優しい微笑みに変わっており、慈愛にあふれたその表情は形容するに女神のようである

と青年は胸を鳴らす。

永琳は、起き上がった青年の左手を両手でゆっくりと包み込み、笑顔はそのままに真剣な眼差しで唇を震わせる。

「朝方に魔理沙が来たけれど……彼女の言った通りの人なのね、あなた。まるで人を信用していいいわ。人を信じることでできない人を、どうして信じられると思うの?」

「……え、えっと、魔理沙ちゃんそんなことを?」

「信じてください」、手伝ってください、助けてください。どうしてこんな簡単な言葉を言えないのかしら」

「そ、それは、少しでも状況をよく知ってもらおうと思って……」

「知ってもらうためなら、茅野さんは腕を切り落とすのね。でも、あんなナイフじゃ腕なんか落ちないわよ?」

言葉に詰まる青年。何とか言い訳を考えようとしたものの、呆れたような表情をもって永琳はため息をつく。

そして、咲夜からも口撃される。

「紅魔館の異変が終わったとき、早苗がなんて言ったか私は覚えてるわよ? 『二度と同じ真似をしないでください』って言葉に、貴方領いていたわよね?」

「うぐつ……はい。あ、あの、黙っていてもらえませんか……?」

「あら? なら貸し一つにしておくわね。それで、あなたはまた早苗を悲しませるのかしら?」

「死なないならセーフかな、と思——」

「とんでもない阿呆なのねあなた。今のは私でも怒るわよ?」

酷くイライラした様子の咲夜。そして、何か琴線にふれる部分があったのだろう。永琳もまた、青年に対して女神のような表情から鬼のような微笑みに変わっていた。

その顔は、先程までよりよっぽど恐怖を感じさせるものである。

「自分の体を大事にできない人が他人の心配? 私は茅野さんに座布団を何枚差し上げればいいのかしら?」

「い、いえ、僕は至極真面目に……」

「あなただけ永遠亭で預かって、専用の精神矯正プログラムを組んで

もいいのよ?」

「ひえー!? そ、それはちよつと……え、ということほ?」

永琳はもう一つため息をつき、青年に対して向き直る。

「別に神社にいればいいじゃない。というより、ウチみたいな小さな診療所じゃ、艦娘さんたちを全員收容なんてできる訳ないわ」

頬に手をあて、ニコニコと笑みを浮かべる永琳。先程までの雰囲気はどこへ行ったのか、今はもう完全にただの優しそうな女医である。「魔理沙からどういう人が聞いていたから、少しだけからかっちゃったわ。どういう考え方なのかわかったから面白かったわよ」

「な、なるほど?」

「安心して。高速修復材は渡すし、一日一つだけど作ってあげる」

「た、助かりますが……」

「怖かったかしら? 意外とお茶目でしょう?」

人の肩を切り落とす寸前まで追い詰めてそれをお茶目の一言で済ませる精神力は、見習うべきなのかもしれない。

「お値段の方だけれど、今回は茅野さんの大立ち回りに免じてツケにしておいてあげるわ。まあ、それほど貰う気もないから、気が向いたときにでも払って頂戴」

「え、ええ、ありがとうございます……」

「今日は神社を一日追い出されたそうね? 良かったら泊まっていってもいいのよ?」

「本当ですか!? あれ、追い出されたって僕言いまし——」

笑顔で矢継ぎ早に言葉を連ねる永琳。だが、その話が出たときには、咲夜が青年の襟を掴んで引きずっていた。

「ちよ、苦し!」

「さあ、用事も終わったんだから早く帰りましょう」

そのまま襟を引つ張られ、青年は部屋の外へと出て行く。咲夜に無理矢理連れられるが、青年は一言だけ永琳に向かって口を開く。

「あ、あの、高速修復材のこと、ありがとうございます!」

「ふふ、いい子ね。よく出来ました。薬はうどんげが準備しているから、あの子から受け取りなさい」

そして、青年は部屋を後にした。部屋を出るその際、

「失敗したわねえ。まあ、組み入れるのはまた今度にしましょうか」

と、聞こえたのは、おそらく気のせいだったのだろうと信じて。

「では、こちらが高速修復材です」

「……バケツ？」

「ええ、容器はバケツです。フタもあるのでこぼれる心配はありません」

「あ、そ、そう……」

薬と聞くからにはもっと怪しげな瓶に入っているものかと思っていた青年。如何せん医者にかかった経験も皆無と言っている為、この薬の出され方は予想外であった。

もしかしたら、幻想郷の薬はバケツで出すのが普通なのだろうか。

「ちよつとおうどん、バケツで出すなんてどういうつもり？」

「仕方ないんですよ。一定量ないと効果が出ませんし、保存する容器にもいいサイズがないですし……」

「全く、仕方ないわね……」

「使用方法としては、身体にぶっかければいいみたいです。ただ、バケツ一つにつき一人分しか効果はないそうですのでご注意ください」

ブツブツと文句を言う咲夜と、それをなだめる鈴仙。

そんなところへ、飛び跳ねるようにしてもう一人、こちらも兎耳を生やした小さな少女がやってきた。

「あれ、鈴仙。お客さんかい？ 紅魔館のメイドと……誰かな？」

幼い体軀を包む薄桃色のワンピースに、兎の垂れ耳。黒のショートカットの短髪にキョトンとしたその幼っぼさは、鈴仙に比べてより小動物らしさ、兎らしさが表れているといえるかもしれない。

「こんにちは。妖怪の山に越してきた守矢神社の茅野守連です」

「因幡てゐだよ。そういえば耳にしたねー。へー、ふーん、ほーん？」

「え、ど、どうしました？」

「いやいや、何でもないよ」

と、てゐは青年をジロジロとその姿を全身眺めたかと思うと口元に手を当てて小さく笑い、くるりと回って鈴仙の方を向いた。

「鈴仙、彼らはこの後どこへ行くつもりだい？」

「人里に行くらしいわよ？」

と、いう鈴仙からの返答に、てゐは大きく頷き、青年の方へ振り返って瞳を輝かせた。

「ならお兄さん、竹林の外、うんにや人里まで案内してあげるよ」

「え、本当ですか？ 助かります」

「なあに、30分もあれば抜けられるからね、お安い御用さ」

「30分……？」

と、青年は咲夜の方を振り向くも、咲夜はあさつての方角を向いて地面の石ころを蹴り飛ばしていた。

「と、とりあえずお願いします」

「日も暮れてくるから、早め早めに連れて行ってあげるよ。じゃあ、行こうか」

突如現れたてゐという少女に青年は流されるままであったが、バケツを持って先を歩く彼女についていく。咲夜も一つだけバケツを持って、それに続いた。

道行く道の中で、てゐが時々青年に向き直りカラカラと笑っていた。しかしその理由がよくわからないままに、青年はあとに続くしかなかったのであった。

「じゃあ、ここまでくればいいよね？」

「ええ、助かりました。ここまですんなりと竹林を抜けられるなんて」

「……………」

「咲夜さん、そんなに拗ねなくても……」

竹林を抜け、更には人里にまで案内してもらった青年と咲夜。てゐは飄々としながら元気に駆け回って案内を進めていたが、対する咲夜は不機嫌そうに唇を尖らせていた。

「なら、帰るとするかね。ああそうだ、君に一つプレゼント」

「はい？ 僕、ですか？」

「うん。ほら、ぎゅーっ」と

「フアッ!？」

てゐはニヤリとした表情で目の前に立ち、上目遣いでいたずらっぽい笑みを浮かべたかと思えば、なんと青年に抱きついてきたのである。

突然の行為に慌てに慌てる青年。が、てゐは飄々とした様子ですぐに身体を離し、小首を傾げながら口角を上げる。

「ちよつと見てられなかつたからね。君、これから数時間以内に、ささやかだけどちよつとした幸運が訪れるよ」

「へ？ こ、幸運？ 一体何を——」

「それだけ。じゃあ、また機会があれば会おうじゃないか」

そして、てゐは青年と咲夜の間をすり抜けるようにし、その足を迷いの竹林へと向けた。投げかけられた言葉に対して困惑するしかない青年は、首を捻りながらその背中を見送ったのである。

「慌ただしい兎ね」

「でも助かったじゃないですか。もう夕方ですし、遅くならずにすみました」

「皮肉のつもり？」

「あ、いえ。さ、咲夜さんが帰るときに明るい方がいいと思つて……」
「ふうん……う？」

少しばかり顔をしかめる咲夜。青年としても竹林で迷った咲夜を責めるつもりは毛頭ないのだが、顔をほんのりと赤くしているところを見るに、怒っているのかもしれない。

しかしともかく、これで人里には到着した。今後の予定を決めなければならぬ。

「とりあえず、一度ここでお別れです。野宿するにしても、とりあえず

人里の周辺にはいようと思えます」

「そうね。ここには妖怪退治のできる人間もいるから、何かあれば頼るといいわ。で、お金を渡したのに本当に野宿するの?」

「今すぐにもお金を返したいぐらい、お金の貸し借りは嫌ですからね……。それに、現状僕にはお金を稼ぐ手段がありませんし」

「……まあ、その考えに口を挟むつもりはないわ。なら、とりあえず明日の朝に守矢神社から迎えに来るけれど、合流場所は人里でいいのね?」

「はい、お願いします。高速修復材は必ず届けてください」

「もちろんよ。それじゃあ、ちゃんと生きていなさいよ?」

「お腹がすいたら虫でもとって食べますよ。お気をつけて」

何度か振り返りながら、咲夜は体を浮かせてバケツを持ち、守矢神社の方角へと飛んでいった。

ちなみに、咲夜は飛べるが、青年と一緒に飛ぶのは嫌であると断られている。が、その感覚は当然である。早苗がすんなりとお姫様抱っこをしたことの方が余程驚くべきことなのだから。

(さて、それじゃあ一応宿を探してみようかな)

古めかしく感じられる木造の家屋が立て並ぶ人里。小さな子供が駆け回り、行き交う人々は笑顔を浮かべて暮らす町。

笑顔のようできて少しばかり寂しそうに、青年は歩き出した。

一時間ばかり歩いた頃。宿はいくつか見つけたのだが、足を踏み入れることをためらっていた青年。やはり野宿をするしかないか、と思っていたのだが、ふとある人物に視線を奪われる。

(泣いてる……。子供?)

「おかあさあああああああん!」

小さな女の子であった。道端で叫んでは涙を流し、嗚咽を漏らしながら目元を何度もこすっている少女。

(母親、か……)

物思いに耽りたい気分は自身でも重々に承知していた。母親とい

う単語に、何も感じないほど青年は不感症なわけではないし、そんな環境で暮らしてもいい。

だが今はそんなことより、少女を泣き止ませることの方が先だろう。

少女に近づき、青年は目線を合わせるためにその場に膝をつく。

「お母さんとはぐれちゃった？ お兄さんも一緒に探してあげよっか？」

「ひぐつ、うつく……おかあさん……」

「お母さんも君のこと探してるよ。だから泣きやもう、ね？」

「……うん」

「いい子だね」と微笑み、青年は少女を肩車した。突然抱き上げられたことに少女は驚いたようだが、目元をこすると辺りを見回し始める。

「どう、高いでしょ？ そこから君のお母さんは見えるかな？」

「ううん、いない……」

「そっか。じゃあ、お母さんに聞こえるように、力いっぱい叫ぼうね」「うん！」

青年は足を進め、人里の中を歩き回る。少女は青年の頭の上で、必死に母親を求め叫んでいた。

5分ほど経った頃だろう。人波をかき分けて、一人の女性が現れた。

「お、おい！ ちよ！ ちよじゃないか！ どうしたんだ一体？」

「この子のお母さんですか？」

「誰がお母さんだ！ 私はまだ独身だ！ ちよは私の教え子だよ！」

腰まで届く青のメツシュの入った銀髪の上に、リボンが結ばれた帽子を載せている。胸元の大きく開いた青いドレスのような服を着ており、女性らしい体つきがその服装からも見て取れた。

「それで、お前は一体何をしているんだ？」

「この子が母親を探しているので、手伝っているんですよ」

「そう……か。いや、すまない。幼女を誘拐する不審者もいるものだから」

胸を撫で下ろし、女性は一つ息をつく。一方で、幻想郷でも不審者はいるんだなーと、青年はよくわからない納得をするのであった。

「けーねせんせー、こんばんはー!」

「ああ、ちよ。もう大丈夫だ。お前の母親は先ほど見かけたからな。お前を探していたぞ」

「ホントー!? よかったー……」

青年の頭の上で、少女は花開くように笑みを浮かべた。

10分後、女性も一緒になって探していると、少女が母親に気づく。無事に合流し、母親には何度もお礼を言われる中で、青年は照れながらも少女に別れを告げた。

一つ息をついたところで、女性は青年に対して振り返る。

「君のおかげで助かった。あの子の教師として、礼を言わせてくれ」

「僕は……見ていられなかっただけです」

「そうか。そういうえば、挨拶が遅れたな。私は上白沢慧音。この人里で、寺子屋の先生をしている」

「茅野守連です。妖怪の山に引っ越してきた守矢神社に住んでいます」

「ほほうお前が……? 知っているぞ。少しばかり有名だからな」

と、慧音という女性は目を光らせ、何かを探るように青年をジロジロと見つめる。その視線は少しばかりこそばゆかったが、青年も苦笑しながら言葉を返した。

「まあ、来て早々に色々やってしまっていますからね……」

「妖怪の山との同盟、塩の製造の護衛、紅魔館の粉碎。あの鴉天狗じゃなくても知れたがるような話ばかりだ」

「ははは……お恥ずかしい」

「恥ずべき話ばかりではないさ。それで、今日はどうして人里に?」

「実は、今日だけ追い出されてしまって、人里で宿をとるか周辺で野宿をするか悩んでいたところだったんです。それであの子を見かけて」「ふむ……? そういうことならわかった」

と、慧音は自身の胸をドンと叩いた。そのたわわな果実が一緒に揺れるも、そんなことを気にせず青年は慧音の発言に首をひねる。

「え、どうかしましたか？」

「いや、教え子を助けてくれたお礼だ。私の所に泊まるといい。私以外は誰もいないから気にするな」

「い、いやいや、ちよつと待ってください。たかだかその程度でお世話になるわけにはいかないですよ！」

「待てよ、今夜は満月か……まあいいだろう。よしカミツレ、私の家に来い」

「おかしいですよそんなの！もし僕があなたを襲う暴漢だったらどうするんですか！」

「男だというだけじゃあ私は倒せないさ。それに——」

君「たち」の歴史は非常に面白そうだと。

瞬きを繰り返して、発言の意味を飲み込もうとするのだが。

「歴……史？……何を知っていますか？」

「いや、今は断片的にしかわからないよ。だが、今夜は満月。君たちの歴史、それにあの海の歴史もわかるかもしれない。面白そうだと思うてね」

「……何を」

「まあ、付いてくるといい。私なら妖怪が襲ってきても守ってやれるからな。何を迷うことがあるんだ？」

その意味は、やはりわからない。

確かに、青年にとってはお金を使わなくて済むし、宿も確保できるし、その上妖怪に襲われる可能性も減る。悪いことなどない。

だが、青年の持つ倫理感、そして慧音の語る謎への疑問が、それを押し止めようとする。

「無理にとは言わないさ。ただし、一つ。カミツレ、君は幻想郷に来て日が浅いと思うが、この幻想郷の人里の暮らしを知っているか？」

「……いえ、知りません」

「神社の者だと言ったな？人間の信者を獲得するなら、この人里が最も適しているだろう。こここの人の暮らしを知っておくのも悪くはないと思うぞ」

なるほど、と青年は関心した。慧音が何を企んでいるかはともかく

として、確かに守矢神社はまだ幻想郷にとって新興宗教もいいところ。あらかじめどのような人が居るかを観察しておくことは、守矢神社にとって悪いことではない。

青年は与えられてばかり。ならば、神社のためにできることは、積極的にやっていかなければ申し訳が多々ないだろう。

(てゐさんの言ってた幸運って……このことなのかな?)

「……わかりました。今回はお言葉に甘えさせてもらいます。本当にありがとうございます」

「気持ち悪いぐらい綺麗な手のひら返しだな。まあいいさ」

慧音は苦笑し、歩き始めた。青年もそれを追い、隣を歩く。

咲夜は無事に神社についただろうか、高速修復材は届けられただろうか、艦娘の皆はまだ耐えられるだろうか。様々な思考が、頭に浮かび上がっては消えていく。

諏訪子の真意、永琳の真意、慧音の真意。疑問は疑問のまま心に留まり、解決されることはなく。

幻想郷に来て初めて、守矢神社で過ごさない夜がやってくる。

023 いつかの温度

世の中というものは存外上手く出来ている。誰かにツキが回ればその分誰かが損をするし、仮に損をしたとしても、次に回ってくるのは幸運だ。

自分が苦しい思いをしている分、他の人が幸せになる。そんな思いを抱けるものなら、皆喜んで幸せの順番待ちをするだろう。

しかし、現実はその単純じゃない。ひたすら幸運に浸り続ける者もいれば、不運に苛まれ続ける者もいる。ずっと何も無い毎日を過ごす者だって存在する。

もし仮に。そんな状況をそれぞれの日常として受け入れたなら。自分はこれでいいのだ、自分にはこれが当たり前なのだど刷り込まれてしまったなら。

あるいは、今を変えてみせようという精神すら持ち合わせられなくなったなら。

それはある種、万人いずれにとっても幸せであるのかもしれない。たとえ、それが麻痺と気づくことと。

慧音の家に到着した青年は、和室に通された。木や畳から香る素材の香りが穏やかな気持ちにさせ、青年にひとまずのやすらぎを与えてくれた。

「部屋はここを使ってくれ、好きに使ってくれて構わない」

「はい、ありがとうございます」

「気にするな、生徒の恩人だからな。無下にした方が罰当たりというものさ。私は夕餉の用意をするでしょう」

慧音は小さく笑みをこぼし、障子を閉めて部屋を後にした。残された青年は、守矢神社とは違う他人の家ということもあり落ち着かず、正座してひたすら固まっている。

（ここがああ女のハウスカ……。あ、そういえば――）

咲夜が届けているであろう高速修復材。青年が気にかかったこと

の一つに、艦娘をカードのまま置いてきてしまったことがある。

カードから人型へ実体化させるのは青年にしかできない。重巡四人がそろそろ完治しているはずだが、他の被害を受けた艦はカードのままである。あれでは浴場に入ることとはできない。

(……まずい。急いで神社に戻らないと——！)

「慧音、こんばんは。お邪魔するよ」

と、拳を握り立ち上がった青年と、障子を開けて現れた女性との視線が交差する。

白い長髪に真紅の瞳。赤い大きなリボンと毛先をまとめる小さなリボンを身に付け、指貫袴をサスペンダーで吊っている。寂しさと威圧とがその雰囲気から感じられ、青年はゆっくりと拳を下ろして相対した。

「……えっと、お前誰？」

「あ、茅野守連といます……」

「あ、ああ。私は藤原妹紅だ……」

お互いに気まずい態度が目に見えており、それ故に言葉を発することがためられる。

が、青年も状況が状況である。一刻も早く神社に戻らねば、艦娘が苦しむ時間がそれだけ増えてしまう。

「すいません、僕はこれで失礼します！」

「うわ、なんだお前いきなり！ 慧音来てくれ、慧音！」

少し急ぐようにして、青年は妹紅と名乗った女性の肩を押しつけて通る。が、妹紅は突然のことに驚いたのかその腕を掴み、慧音の名を呼んだ。

更に、肩の関節を締められる青年。為すすべもなく、床に組み伏せられる。

「さてはお前泥棒だな？ 何を盗んだんだ！」

「え、ど、どいて！ 神社に行かないと！」

「神社？ 博麗神社は人を使って泥棒稼業に手を染めるほど困窮して

たのか……。いや、それより盗んだものを出せ！」

「だから、泥棒じゃないって！」

「泥棒は皆そう言うんだ。出さないなら身ぐるみ剥がさせてもらうぞ！」

組み伏せられた青年の背中に、妹紅が馬乗りになる。片手で腕を締め上げたまま、妹紅は青年の身体に手を這わせた。

「軽いな。本当に男かお前？」

「正真正銘男だよ！ どいてったら！」

しかし、妹紅はその手を止めない。

「ここもない、ここにもない、か。となるといよいよ服の中を……」

「え、ちよつと、そこは……あんっ」

「なんだその反応は、生娘でもあるまいに。んん？ 肌が柔らかいなお前。気持ちいいからもうちよつとだけ」

「ん……んんっ！」

「なんだその目は、泥棒のくせに」

「絶対に……冤罪になんて負けない！」

「そう言う奴は大抵すぐに負けるな。……んん？ おいお前、ちよつと服を脱がすぞ」

「服!? 何する気だよこの痴女！」

服の下を見られたくない一心で青年は抵抗するも、自由になる隙を与えられないまま服を脱がされる——直前で、障子が開いた。

「なんだ妹紅。慌てるなんて珍しいな。一体どうし……」

「ああ慧音、泥棒を捕まえたぞ。なかなか肌が柔らかい奴で——」

「何をしている妹紅！ 私の客人だぞ！」

鬼のような形相で妹紅をどかせ、青年を起こす慧音。「大丈夫か、すまなかったな」と声をかけられるも、青年としては服の下を見られなかったことに一安心。

が、どうやらすぐさま帰るといふわけにもいかなかったようで、青年は一人溜息をつくのであった。

「それで、妹紅は結局何がしたかったんだ？」

「カミツレとやらが私を見てすぐに逃げようとしたから、泥棒だと思つて捕まえた」

「捕まえたのはいい。だが、その後の行動は泥棒にすべきことではないな。泥棒の肌を堪能してどうする。私はお前がカミツレを襲ったのだとばかり思っていたぞ。服まで脱がせようとするし」

「いや、肌はともかく私の好みじゃない」

「そういう話じゃないのはわかってるな？」

「……だからさつきから謝つてるって」

「そもそも妹紅はいつもだな——」

「わかった、わかったから食事中はやめよう、な？」

慧音が夕飯を用意し、一番広いのが青年の部屋であつたために青年の部屋で三人で夕食をとる次第となつた。

慧音の用意した夕食が非常に美味であつたために、それを褒めちぎりながら青年は徐々に機嫌を直していく。

「上白沢さん、神社に戻つてもいいですか？」

「慧音でいい。今からは少し難しいな。妖怪共が活動を始めるだろうし、満月だから私は今日この家から出るわけには行かない。妹紅は……」

「慧音と一緒にいるよ」

「と、いうわけだ。事情は知らない。送つてやりたいのは山々だが、生憎と……な」

「……いえ、無理を言いました。忘れてください」

満月が何を示しているのかは青年の知るところではないが、あくまで厚意で泊めてもらっている以上、無理は言えない。妹紅という女性ならば交渉すれば何とかなるかもしれないが、青年はその思考に至らなかつた。

「神社に戻りたいほど私の家が嫌なのか……」

「ああ、いえ、そうではなく……」

「カミツレ、私が悪かった。私も慧音に恥はかかせたくない」

「……わかりました。今日は泊まらせていただきますから」

といったところで、妹紅の泥棒認定セクハラ事件は幕を閉じた。青年とて、第一印象を拭いきれない妹紅はともかくとして、慧音に迷惑をかけたわけではないのだから。

食事を終え、しばし歓談と洒落込む三人。

「外の世界から。そんで今日は神社を追い出されて、ねえ」

「艦娘たちを大事にすることだな。カミツレにとっては幻想郷で小さいくない影響力を持つ力だ」

「……そう、ですよねやっぱり」

「なんだ不安か？ そうだな……今回の失態もある。いざという時はこの藤原妹紅、不死鳥のごとくお前を助けることを約束してやる」

「ありがとうございます……ごぎいます。お二人も、何かあれば守矢神社に来てください。微力ながら、僕に手伝えることがあれば必ず」

「それは本心か？」

「え？ え、ええ」

慧音がお茶を淹れつつ、青年の瞳を見る。それは、酷く訝しんでいながら、どこか悲しそうな眼差し。

いつか見た覚えのある視線。誰だったかは覚えていないが、それは自身の身をとて案じていたことだけは覚えている。

「強がらなくていい。幻想郷に来て間もない。そして、夜となりつつある今、私には貴兄の歴史が見えつつある」

「過去が……見える？」

「神社の暮らしは楽しいか？」

「ええ……とても」

「大事にするといい。それでも尚癒されなければ、本当に私のところに来て構わない。存分に甘えるといいさ」

「……………」

その言葉で、青年は思い出した。

いつの日だったか、早苗と出会うよりほんの少し前の、当時少年だった青年が守矢神社へ遊びに行った時のことだ。神社の木陰で一人泣き、死ぬことすら考えていた頃。

『いつも来てくれているのに、願いを叶えられなくてすまない』

『辛い時はここへ来ていい。うんと泣くがいいさ』

泣き疲れて眠った青年の夢の中に、それはそれは美しい女神が現れたのだ。その時の女神は今の慧音と全く同じ表情をしていた。それから少し経って、早苗と出会ったのである。

神社での記憶は早苗との出来事の方がインパクトが大きいため、出会ってからの出来事しかほとんど覚えていない。それでも、確かにそのような不思議な経験があったのはうっすらとだが覚えている。

「どうした、泣きそうか？」

「ああいえ……そういうわけではありません」

「そうか、強がらなくていいからな。うちの生徒にも君とよく似てひねくれた子がいるよ。ふふふ、君ほどひどくはないが」

「お褒めに預かり光栄です」

「全く、呆れた奴だ。慧音、お茶のおかわりがほしい」

「はいはい」

「では、僕も頂きます」

「ふふふ、構わないよ」

記憶違いではなかったと信じよう。そして、今はこの安らぎの空間を享受しよう。守矢神社以外でも、自身は受け入れられる場所があるらしいのだから。

少し経った頃。風呂を借りてから布団を敷き、就寝の準備は整った。そんな時、妹紅が部屋にやってきて、壁に寄りかかりながら話す。「カミツレ、ちよつといいか」

「なんです、妹紅さん」

「ここの隣の部屋が慧音の部屋なんだが……何があつても、何が聞こえても絶対に覗いたらいけない。それだけ頭に入れておいてくれ」

「えつと？ 何かあるんですか？」

「まあ……お前は気にしないでくれ」

「あー……はい。わかりました」

そして、妹紅は一つ頷いてから部屋から去っていく。青年は閉じた障子をしばらく見つめてから、布団の中へもぞもぞと導かれる。

（あの二人、やけに仲がいいと思つたらさういう……）

これ以上聞いてくれるなど言わんばかりに、妹紅は語ることを渋っていた。加えて、何が聞こえても気にするなという忠告。

青年も人の恋愛事情にまで口を出すつもりはない。そういう人がいることは知っているし、別にそれを悪いとは言わない。

だが、何も客人が来ている時にしなくてもいいのではないか、とは考えてしまう。

冗談はさておき。

（人に話したくないことなら……聞く必要はないよね）

誰に向けて思った言葉かはわからないが、青年は瞼を閉じる。

一晩を安全に過ごさせてくれる、出会って数時間に満たない人物。感じる恩義は小さくないものであるし、何より慧音も妹紅も優しい。

だが、わきまえる部分はわきまえねばならない。踏み入ってはならない場所というのは、誰でも持っているのだから。

（明日は早めに出よう）

今日も今日とて、夜は更けていく。

かと思われた。

「つ、――！」

「――」

（……なんだろう、苦しそう――？）

寝入って数時間も経った頃。隣の部屋、慧音のいる部屋からうめき

声のような、唸るような声と怒鳴るような声が聞こえた。少なくともそれだけで、就寝前に考えていたような甘い関係ではないことぐらいわかる。

「——ろ、やめろ、なんだこれは」

「しつかり——ろ！ おい！」

どうやら声の主は慧音であるらしい。そして、怒鳴るといふより心配するような声は妹紅。

一体何が起きているのか。自分の知らないところで何が起きているのだろうか。

布団を抜け出して様子確かめに行きたい衝動に駆られる。だが、妹紅との約束があるのだ。何があっても覗いてはいけない、と。

聞こえる声はほとんど筒抜けといつてもいい。昔ながらの日本の家、と表現できる慧音の家では、壁に音漏れの処理など施されていない。

「カミツレ……死に……」

「しつかりしろ慧音！ いつもの満月よりおかしいぞ！」

「艦娘……そうか、これが……」

「慧音！ おい、慧音！」

今までの慧音の発言。何も聞かされてはいないが、青年の読みとしては、恐らく慧音には過去の記憶、歴史が見えるのかもしれない。そしてそれは、艦娘に対してのみの限定的な能力であるカミツレより優れたもの。

だが、強調された満月という言葉。これらを複合すれば、慧音は満月の日にのみ、何らかの能力が働いて歴史を見ることができているのではないか、と青年は考えるのだ。

しかし、辛そうな声を出す慧音に何もできないというのは少々歯がゆくもあった。だが、どうしても青年には動く勇氣は湧いてこない。

出会って一日とはいえ、まるで鶴の恩返しのように、覗いてしまえば関係が壊れてしまうような気がして。

「……くそ」

自身でも珍しい感情の吐露。無力な自身に苛立ち、眉を寄せるも何が変わるわけではない。

だから今自分にできることは、全てを聞かなかったことにするとう、現実逃避にも似た慧音を見捨てるという選択しかなかった。

翌朝。早朝に目が覚めた、というよりは眠れずに一夜を過ごした青年だが、朝食をとる頃にはひとまず体調を落ち着けていた。

「昨日はよく眠れたか？」

「ええ、気が付いたら朝でした。安心して眠れましたから」

「ふふ、そうか。すまなかつたな」

とはいえ、目の下の隈は隠しきれていなかったのだが。情けないことに、慧音にもなけなしの気遣いは気づかれていたらしい。

そして、町へ。昨日別れた場所へ移動し、守矢神社からの迎えを待つことにする。

「いや、なかなか楽しかったよ。良かったらまた遊びに来てくれ」

「ごちらこそ、お世話になりました。見ず知らずの男にここまでして頂けるなんて、思ってもいませんでしたから」

「生徒の礼さ。良かったら、今度来るときは外の世界の話を、寺子屋の子供たちに聞かせてやってほしい。皆喜ぶだろう」

「……僕に話せることはあまりないですけどね」

わずかに逡巡した後、肯定的に青年は答えた。それを聞き、慧音も顔を綻ばせる。

「お節介ついでに、カミツレ。君が今疑問に思っていることを一つだけ、何でもいいから自由に質問していいぞ。完璧な回答を用意しよう」

「言葉の意図がわかりませんが、仮に僕が不躰な質問をしたらどうするつもりです？」

「まあ……答えてやらんこともないが、賢そうな君ならその後どうな

るかわかるだろう?」

慧音の瞳が僅かに刃物のごとき鋭さを持ったような気がして、青年は苦笑する。元よりそのような質問をするつもりはもちろんないが。

というより、慧音は恐らく、青年が慧音の能力について感づいていると認識した上で話しているのだろう。隠すつもりはないらしい。

「でしたら、『幻想郷に現れた海の歴史』について、お願いします」

「あー……いや、すまない。あの海は例外なんだ。どうやら幻想郷の理から外れているようで、私にはあの海のこととはわからない」

「……なるほど、わかりました。ありがとうございます」

「それでいいのか? 不十分な解答しかできなかったんだ。もう一つぐらい構わないぞ?」

「十分です。後は自分でどうにかしてみます」

怪訝そうな慧音ではあったが、青年としてもそれ以外は特に聞きたいことはない。自身らでさえ、海について現状で集まっている情報が少ないのだ。

たとえ歴史がわからずとも、幻想郷の理から離れているという事実。それだけで、一つ真実に近づけたというものだろう。

慧音の隣に立つ妹紅は腰に手を当て、朝日を見てぼんやりとしている。何を思っているかは自身の知るところではないが、ポケットから出したものを、妹紅に無理矢理握らせる。

「ん? おいカミツレ、何のつもりだ。私はそんな安い女じゃないぞ」
「何の話ですか……。これ、宿代です。後で慧音さんに渡しておいてください」

「慧音はいらんと言ったんだろう? やめておけ」

「そうはいきません。お世話になったのは事実ですから」

「……仕方ない奴だ。わかった、渡しておく」

ギロリとにらみつけるようなその視線にたじたじであったが、妹紅が受け取ったのを見て、青年も安堵の息をつく。

やがて、咲夜がやってきた。三人が集まっているところを見て少しばかり目を見開いて驚いていたようだが、一つ息をついて眉尻を下げる。

「あら、どうやら世話になったみたいね」

「何、気にすることはない。それより咲夜、君が迎えに来たということ
は」

「ええ、今守矢神社にお世話になっているのよ」

「ふむ、合点がいったよ」

「私も色々聞きたいけれど、また今度にするわ、慧音。妹紅も」

「ああ、気を付けて帰るといい」

慧音と咲夜が互いに視線を交わしたまま言葉を交わす。それだけで良かったのか、慧音と妹紅はそれから青年に対して微笑みかけ、去って行った。

「さて、帰るわよ」

「お金、必ず返します。返した時は……また借りますから」

「ええ、そうして頂戴」

咲夜が柔らかな表情になり、守矢神社へと向かって歩き出す。

青年もまた、去りゆく慧音と妹紅の背中を一度振り返ってから、咲夜の後を追った。

024 鎮守府は生えるもの

守矢神社へと戻った青年と咲夜。咲夜はレミリアの世話があると
いってそのままどこかへ行き、青年は一人になってしまった。

一日離れただけであるのに、どうして懐かしく感じてしまうの
だろうか。太陽が照りつける境内も、木の葉が重なる音も、全て遠い昔
から知っているようで。

子供の時に神社へ来た、という意味ではなく。
もつと、昔。

足を止めて境内を眺めていると、突然背中に強い衝撃を受ける。

「カミツレさん！ おかえりなさい！」

「うわっ!? さなちゃんかあ、びっくりした」

「一日ぶりのカミツレさんです……。ふふふ、無事で安心しました」

背中に感じられるほよほよとした柔らかさを考えないようにしな
がら、青年は抱き着いてきた早苗の腕をほどいて向き直る。目の前
には、覗きこむような上目づかいで自身を見つめる早苗が太陽のよう
に微笑む。

「心配……。かけたのかな？」

「当たり前です。私たちの力の及ばない場所にいたわけですから。そ
の、神奈子様と諏訪子様のせいと……ごめんなさい」

「頭は冷えたよ。それに、ここが一番安心する」

「……やけに素直ですね。嬉しいですけど、なんだか気持ち悪いです」
「え、ひどくない」

「冗談ですよ」とクスクス笑う早苗に対し、苦笑しながら青年は頬を
かく。

一日離れて気づいた。自身の持つ力の責任と、それを何のためらい
もなく受け入れた守矢神社の潔さ、思慮の深さに。

それにとことん甘えてしまっている、自身の弱さにも。

「司令官」

ああ、彼女たちにも迷惑をかけてしまった。艦娘の皆は、かけがえ
なく慕ってくれているというのに。

新たに着任した駆逐艦の子達も、自身を出迎えてくれる。

特Ⅱ型駆逐艦

七番艦『朧』

八番艦『曙』

十番艦『潮』

特Ⅲ型駆逐艦

一番艦『暁』

二番艦『響』

三番艦『雷』

白露型駆逐艦

一番艦『白露』

二番艦『時雨』

三番艦『村雨』

海風型駆逐艦

四番艦『涼風』

そして、紅魔館の異変まで青年を支えてくれた艦たちも。

重巡洋艦5名、軽巡洋艦4名、軽空母1名、駆逐艦16名。

これが、今の青年に与えられた力。

「おかえりなさい」

この責任から、逃げることは許されない。

たとえ神が許そうと、己自身が許さない。

「ただいま」

初めて。

心の底から、彼女たちと向き合えたような気がする。

どうやら、カード化はカードの状態で浴場に入渠させた時に、強制的に解除されたらしい。高速修復材も併用して入渠を終えたらしく、警備に出ている艦以外の艦娘全員、その表情には晴がましいものがかべていた。

「そういえばカミツレさん。紅魔館に向かう途中でこんなこと言っ

いましたよね」

「何を？」

「一番活躍した子のいうことを何でも聞いてあげるって」

「ん？ 何でもって言ったっけ？」

発言の仔細はともかくとして、確かに青年はそのような発言をしたし、青年自身にも覚えがある。が、ぽやぽやしている青年とは打って変わり、戦闘に参加した艦娘の一部からの視線が豹変した。

その視線にたじろぐ青年。くれぐれも、すっかり忘れていたなどは口が裂けても言えない。

全ての戦闘において最も活躍した人物、あるいは最も印象的だった人物といえば……

「えっと、神奈子さんかな？」

「ズルいです！ 神奈子様は神様じゃないですか！」

「あ、そ、そう？」

早苗もだが、艦娘もそれを聞いた瞬間しよんぼりとした顔になる。いくら強かったとはいえ、格が違う相手と比較されるのは少し寂しいのかもしれない。

改めて考える。戦闘において活躍した人物。早苗の弾幕による攻撃は確かに強力であったものの、最も印象的だったのは――

「なら――青葉」

「え……あ、青葉ですか!？」

「うん。レミリアさんに挑んでいくときの青葉、一人で突入するなんて肝が冷えたけど、青葉がいたからこそ異変に区切りを打てたと思うんだ。それに、あの時の青葉、格好良かったよ」

「あ、その、あの……ありがとうございます！」

まさか自分が呼ばれるとは思っていなかったのだろう。少し俯きがちだった顔は明るくなり、出会った時のように快活な笑みを浮かべている。

青葉と軋轢のあった古鷹、吹雪、叢雲もまた、嬉しそうに微笑んでいる。この艦隊において、最早彼女を縛るものはないと信じた。

(あ……でも、記憶の限りではまだ被害者がいるっぽい)

前途多難だな、と苦笑するも、それを悟られないように青年は青葉に問う。

「それで、願い事は何かあるのかな？」

「あ、でしたら青葉——」

と、青葉はその瞬間に瞳を星のように輝かせ。

青年に近寄り、手を取りながら顔を寄せて喜色を浮かべた。

「幻想郷や艦隊のことを記す、『新聞』を作りたいです！」

場所は変わって神社内、青年の部屋。紅魔館の面々が部屋を間借りしている状態のだが、今はそこに神奈子と諏訪子も訪れていた。

一日経てばこうも順応するのか、と思わせるほどに、紅魔館の者たちは青年の部屋でくつろいでいる。ある者は布団に寝っ転がってお菓子をつまみ、ある者は塩を味見して顔をしかめ、ある者は妹を溺愛するが故にひたすら抱きしめていた。

というか、全部レミリアであった。

「と、いうわけだ」

「……なるほど」

「理解できたのか？」

「わからないことばかりだなあ……ぐらいには」

そんな状態でも、大事な話は場所を選ばない。話を一通り終えて、全員が全員頭を悩ませて唸り声を上げている。

紅魔館で発生した異変に関して、深海棲艦と化した各々が体験したことのを話してくれた。だが、話を聞けば聞くほど、想像からかけ離れた事実の首を捻らざるを得ない。

「全ての記憶はあるし、自分の意思で戦っていた、ですか……。本当にすかレミリアさん？」

「ええ。少なくとも、私にはあなたたちが敵に見えたわ」

「咲夜さんのことも？」

「私を裏切ったんじゃないか、ってね」

少しばかり寂しげに、レミリアは答える。

曰く、こうである。この異変の際に深海棲艦と化した人たちは、全員記憶を有している。そして、同じく深海棲艦となった人物以外に対しては、強い敵意を抱くようになるのだという。

これは深海棲艦化、"深海化"による影響の一つであるといっても間違いないだろう。

特に、艦娘を見た時に込み上げる激情は我を忘れてしまいそうになるほどであるという。実際に、深海化した後に自分の意思で話せなかった者はその最たる例であるらしい。

しかし、深海棲艦そのものについて、海については何も知らない。自分の能力以上に湧き上がる力を振るうために、ただただ敵意を振りまく。

まさしく、深海棲艦の意思に"乗っ取られた"と言えよう。

レミリアやフランドールのように、特殊な深海化の事例も存在する。紅魔館は幻想郷内でも北側に位置するため、ひとまずこの姉妹の深海棲艦を『北方棲姫』と呼称するとして、今後同様の事例が発生しないことを祈るばかりである。

「パチュリーさん。弾幕の航空機化についてはどうでしょう?」

「何もわからない。そもそもコウクウキとかいうのも臆気にしか覚えてないわね。紅魔館の地下の図書館は無事のようなだから、また調べてみるつもりよ」

「そうですか……。わかりました」

パチュリーが口惜しそうに顔をしかめるも、青年は首を横に振る。一つでも情報がほしいのだから、役に立たないなどということはない。

最終的な回答はまだ遠いのだろうが、今はわかることを少しずつ整理していくしかない。

と思っていたとき。

ふと神奈子が思い出したように諏訪子に話しかける。

「そういえば諏訪子、あの話はどうする?」

「あ、そっか。——カミツレ君、ちよつと引つ越しをお願いできるかな？」

守矢神社の近く、諏訪湖と呼ばれていた湖の畔へ一行は到着する。紅魔館ズもついてきており、レミアアやフランドールは日傘をさして日の下に立っていた。

これから諏訪子が、この畔に艦娘たち用の建造物群、*「鎮守府」*を建設する。承認したはいいものの、青年はどういったものを作るのかあまり聞かされていない。

紅魔館に使用する予定の赤レンガを作る練習とは言っていたが――

「じゃあ、始めるよ」

諏訪子が身に光を纏い、宙に浮いて静かに両手を広げる。

――瞬間、大地が雄叫びを上げた。振動する大気。歪む空。張り詰めるような雰囲気の中、宙から現れた大量のレンガは自ら意思を持つたように組み上げられていき、徐々にその形を表に出し始める。

5分も経った頃だろう。青年たちの目の前には、自身らの方を向いて宙に浮く諏訪子と、その背後には大きなレンガ造りの建造物がそびえ立っていた。

しかも一つではない。大きさも形も違う建造物が4棟、そしてそれを囲う大きな塀が建っていたのだ。

「ふむ、衰えたな諏訪子」

「妖怪の山からの信仰しかないからね。神奈子だって、紅魔館の時の話を聞く限りじゃ全盛期の足元にも及ばないみたいじゃん」

「ぬかせ。私は本気を出していないだけだ。明日から本気出す」

「そういう神はずつと本気を出さないままだつて私知ってるよ」

「私はやればできる神なんだよ」

一様に驚く一同をほったらかしにして、神奈子と諏訪子はじゃれ合うように互いを罵る。最早、言葉など出しようもない。

口を開けて呆けていれば、諏訪子が小馬鹿にするように青年を見つ

める。

「何、カミツレ君。もしかして惚れ直した？」

「え、えつと、まあ、惚れ惚れするというかなんというか」

「とりあえず、施設としては生活させるための『艦娘寮』、艀装の整備をする『工廠』、大人数の治療もできる浴場と食堂を内包した『入渠場』、資料の保存や指揮を行う『司令部』の4つね。何か足りないものあるかな？」

「……あの、十分すぎます」

つくづく神とは恐ろしい。5分で巨大建造物を4つ作っておきながら、とぼけるでもなくまだ足りないかと問うのだから。

更に、神奈子と諏訪子が生活設備を整える。あつという間に、大きな洋館の完成である。

諏訪子から持ち掛けられた相談はこうである。

艦娘の数が増えすぎて、カードの状態でなければ全員を神社に収容できない。増える原理はともかく、今後も増えてもいいように『鎮守府』を作ろう、と。

鎮守府とは簡単に言うと、軍にとっての本拠地とも呼べる場所である。様々な機能が集約し、全ての指揮運営は鎮守府で行われる。

青年は自身の持ちうる戦力に対して、過剰とも呼べるほどの建造物を拝領した。これすなわち、自身への期待と受け取ってもいいのだろうか。

はたまた、自身への投資と考えるべきなのだろうか。

胸を押し潰すような感情は、何もプレッシャーからくるものばかりではない。

完成した鎮守府を前に、神奈子が青年を見つめて口を開く。

「工廠だが、昨日のうちに河城にとりと契約を結んでおいたから頼るといい。食料はこちらからも提供するが、自分たちで調達する方法も考えてくれ。それから——」

「これだけ大きいと、塀の入口の所に門番が必要だな」と。

何気なく呟いたような神奈子の発言の後に、その場にいた全員の視線が美鈴へと向かう。

「え？ み、皆さん、どうしましたか？」

「……確かに、美鈴さんがいてくれれば心強いですね」

「カ、カミツレさん!」

昨日、鍛錬中の姿をチラリと覗いた程度だが、美鈴の實力は青年の素人目にもかなりのものであるというのは十分にわかる。そしてそれは、深海化した美鈴と戦った艦娘たちもよく理解しているのか、特に天龍と龍田は強く頷いていた。

不敵な笑みを浮かべた神奈子がすうつと眼を細くする。

「——中国、と言ったな？」

「いえ紅美鈴です」

「悪いが、鎮守府の門番を頼まれてはくれないか？ 艦娘を擁するとはいえ、不測の事態が起きないとは限らない。そしてそんな事態には、お前たちのように幻想郷に詳しい者が必要なのだ」

「ええと、私には紅魔館を守るという使命があります……」

「レミリアとか言ったよね？ 悪いけど、その本みりんとかいう子をこちらに貸し出してもらえない？ そうじゃないと紅魔館直してあげないよ？」

悪い顔で、神奈子と諏訪子が紅魔館の面々に相對する。敵意こそ示していないものの、その薄ら笑いは身内である自身らから見てもドン引きものである。現に早苗もげんなりとした顔で咲夜に対して小さく手を合わせていた。

紅魔館の主はレミリア。その命令は絶対的なものであり、一度決定したことはまず覆らない。つまり、その判断一つで未来が変わるというものだが——

「そんな脅しをしなくとも、むしろこちらから美鈴をお願いしたいわ」

意外にも、神々の戯れとも呼べるような交渉はあっさりを受け入れられた。が、その瞬間美鈴は口をあんぐりと開けて目尻に涙を浮かべる。

「美鈴。深海化した状態だつとはいえ、あなたは門番としての役割を

果たせず、カミツレたちの侵入を許してしまった。そうよね?」

「うう……はい、申し訳ありません」

もう何も言うことはないと言っても言うように、レミリアは一つ息をつく。

美鈴に門番をしてもらうこと自体は非常にありがたいのだ。戦力としても期待できるし、先ほど神奈子が言ったように幻想郷特有の何かしらの事態に巻き込まれた場合、近くに幻想郷に詳しいものがいた方が断然良い。

だが、こうも考えてしまう。美鈴を手元に置くということが、それこそ神社と紅魔館組との間に生じる信頼に対して、ひびを入れてしまうのではないかと。

レミリアの様子はどうかだろうか。動じることなく、むしろ澄ました顔で神奈子と諏訪子、そして自身を睨むように見つめている。

彼らにとっての家族とはそれっぽっちのものなのか。あるいは、それがレミリアの選択した「運命」なのか。

しかし、フランドールが舞うように美鈴の前に躍り出た時、その考えは殴り捨てることになる。

「美鈴よかったね。お姉様はあんな言い方だけど、堂々と守矢神社と艦娘たちの情報を手に入れるチャンスだよ」

「……え? そ、その……え? え、ええっ!」

今更気づいたのか、とでも言いたげに、レミリア、咲夜、パチュリーがため息をつく。

美鈴を連れてくるというのは青年の提案ではない。だが、功罪合わせて盲点であったことは不動の事実。

どうでもいいから切り捨てた、などとはいえない。信用しているからこそ大切な役目を任せ、送り出したのだろう。

神奈子と諏訪子は少しばかり眉をひそめる。特に神奈子は、驚きを浮かべた青年の様子を一瞬だけ伺ったかと思えば御柱を出現させようとするのだが、寸前で諏訪子に止められる。

「気持ちにはわからなくもないけど、神奈子にしちゃそれは早計だね」

「……すまない、忘れてくれ」

一瞬だけ場が殺気立ったものの、諏訪子により場は再び静まった。諏訪子も一瞬だけ青年の様子をチラリと伺ったが、特に何を言うでもなくレミリアに対して向き直る。

「まあ、情報が欲しいなら好きなだけ持っていきなよ。私たちは何も敵対したいってわけじゃないんだから」

「物騒なモノが見えたけれど、まあいいわ。協力関係を築くことを了承しましょう」

身長のあまり変わらない2人が、互いに歩み寄ってその小さな手を握り合う。美鈴は苦笑しながら人差し指で頬をかくも、仕方ないといった表情であった。

レミリアもフランも、他の紅魔館の面々も、特に不満はないらしい。青年としては、勝手に進む事態に右往左往するものの、とりあえず収まったようで一安心である。

「というより、それならやっぱり紅魔館に住まわせても良かったのでは？ 霧の湖からも海に流れる川はあることだし」

「それはダメだね」

「ああ、ダメだね」

「絶対にありえませぬね。カミツレさんは守矢一家なんですから」「そ、そう?」

咲夜から聞き覚えのある提案をされるも、早苗たちの笑顔による一蹴ですぐに取り下げられる。

なんともむず痒い感覚に苛まれるが、青年自身もはにかむことでの場における解答としたのであった。

しかし、気になるのは神奈子である。守矢神社に住み始めてからというものの、2柱、特に神奈子は自身のことをよく気にかけている。決して自惚れや勘違いなどではなく、普段の態度からそう感じ取れるのだ。

例えばあつさりと神社に住ませたこと、例えば風呂場で心配されたこと、例えば必要以上に紅魔館を破壊したこと、例えば追い出される時に唯一反対したこと。

そして、慧音の家で思い出した、早苗と出会う前の神社での記憶。

もし自身の予想が正しければ、神奈子の目的はひよつとすると――

「あの、神奈子さ――」

「ッ！ 提督！」

突如、背後にいた鳳翔が切迫した声を上げ、全員の視線が集中した。

「大変です！ 警備に出ている五月雨ちゃんと夕立ちちゃんから連絡で、沖合に深海棲艦が現れたとのことですよ！」

「深海棲艦？ 情報を」

「数は5、水雷部隊と……『戦艦』が確認された、と」

重巡洋艦の更に上をいく火力を有する、重装甲重武装で大口径の主砲を備える大型の艦種、戦艦。当時においては、現在でいう核と同等の存在を有するが如き強靱さを持つ。

紅魔館の異変が終わったとは言え、海は依然としてそこにある。自身や艦娘は、油断の一つもしてられないのだろう。

しかしそれも、守矢神社を守るためと思えば――。

「戦闘準備！ 五月雨と夕立は戦闘を行わずに偵察のみ、陸に引きつけても構わないと打電！ それから――お願いです！ どなたか力を貸してください！」

戦える。

胸の内に秘めたる想いは、絶望などではないのだから。

周囲に頭を下げて戦力を望み、青年は意気込む。

神奈子から送られる、少し寂しそうな眼差しには気付かないまま――

025 鎮守府近海を攻略せよ！

結論から言えば、戦艦を含む深海棲艦の撃退は成功した。

神社から出撃したのは軽空母の鳳翔をはじめとして、特Ⅲ型駆逐艦の暁、響、雷、電、軽巡洋艦の球磨、白露型駆逐艦の白露、時雨、村雨、の9隻。さらにそこへ、敵艦隊を発見した夕立と五月雨が合流し、

空母『空母機動部隊』

——軽空母『鳳翔』

駆逐『暁』『響』『雷』『電』

闘符『水雷戦隊』

——軽巡『球磨』

駆逐『白露』『時雨』『村雨』『夕立』『五月雨』

このように二個艦隊を編成したのである。

機動部隊を後方に配置し、水雷戦隊をその護衛として前方へ。航空戦力は両軍合わせて鳳翔しかないことは確認済みであり、既に空は鳳翔のものだ。

結果。制空権を確保した自軍は、鳳翔の艦載機による航空攻撃で幕を開けたのである。

艦上の構造物へ打撃を与える爆弾を投下する。『艦上爆撃機』。

喫水線下へ打撃を与える魚雷を投下する。『艦上攻撃機』。

戦艦1、雷巡1、軽巡1、駆逐2を含む敵艦隊であったが、対空砲火さえくぐり抜けた鳳翔航空隊の前に避けることすら叶わず、開幕から既に戦艦を小破、軽巡を撃沈という戦果を挙げたのだ。

この時の鳳翔、

「命中率が80%、といったところですか。いけません、訓練が足りないようです」

との発言に、帰還後に彼女の艦載機の妖精さん達は顔を青白くさせていた。

航空攻撃後、敵艦隊が接近したことで、空母を守るために水雷戦隊は前進した。敵戦艦の射程距離内だが艦隊は前進し、戦艦の至近弾により白露と村雨が小破してしまう。

負けじと鳳翔も第二次攻撃隊を発艦させ、雷巡と駆逐艦1を撃破した。

そんな時、一つの電文が鳳翔の元へと届く。その連絡を受けた彼女は、水雷戦隊を後退させ、戦艦の射程外へと退避させた——瞬間、

禁忌『クランベリートラップ』

陸へと引きつけながら戦っていたのが功を奏して、海辺で待機していたフランドールの射程に入り、全方位から追尾する弾幕が敵艦隊を襲った。残る駆逐艦を撃沈させ、戦艦すらも中破に追いやったのである。

だが、彼女の放った弾幕量に対すれば、戦艦の被害は軽微といっても差し支えなかったのだろう。ほとんどの弾幕が、その分厚い装甲によって阻まれていたのだから。

これはまずいとして、青年はあらかじめ待機させておいた重巡の鳥海、古鷹、加古、青葉、衣笠の艦隊と、軽巡の夕張、天龍、龍田の艦隊を、敵戦艦の左右から挟撃させる。が、やはり戦艦の装甲は侮り難く、ほとんど被害を与えることができなかったようである。

そこへ、予想外の展開が訪れる。後退する水雷戦隊を率いていた球磨が単身で反転し、全速で戦艦へと肉薄。巡洋艦隊の砲撃に気を取られている敵戦艦の横っ腹に対し、魚雷を一斉射したのだ。

立ち上った水煙が消える頃、大破しながらも戦艦がその後姿を現し、球磨へ反撃。直撃が文字通り球磨の体を「吹き飛ばし」、球磨は一撃で中破へと追い込まれてしまう。

そして——その瞬間。

弾幕が思うように通用しなかったことへ青筋を立てたフランドールが能力を使用し、敵戦艦は大きな手で握り潰されたかのように四散したのであった。

(勝てる戦いだったのは間違いない。でも、あんまりヒヤツとする戦いは見たくないし……あ、そっか。そこをどうにかするのが僕の仕事だ)

艦隊は諏訪子により生み出された鎮守府へと帰還し、弾薬の補給、入渠等を行っていた。出撃していなかった艦娘は鎮守府を使いやすくするために、掃除や片付け、整理整頓に励んでいる。

今回新たに加わった艦娘は以下の二名。初春型駆逐艦の『初霜』と、球磨型軽巡洋艦の『北上』である。この二人への当艦隊についての説明は吹雪へ一任し、青年は現在鎮守府内を見回っていた。

「全く、どうして私がこんなこと」

「レミリアちゃん、ちゃんとお掃除するのです!」

「そんなんじゃない、私みたいな一人前のレディになれないわよ!」

「そ、そうなの? なら仕方ないわね。手伝ってあげるわ」

見なかつたことにおこう、ということだ。

青年は足を進める。

「何? 何か用?」

「はは、随分とご挨拶……」

まず、艦娘寮。一部屋あたりに何人も暮らせるようになっていたが、艦娘たちは同型艦ごとに部屋を割ることにしたらしい。それでも部屋は余っているのだが。

部屋を一つ訪れるとそこは特Ⅱ型、綾波型駆逐艦の部屋であり、曙と潮、朧が掃除を行っていた。漣はサボってどこかへ逃走したそう
だ。

窓の外からは美しい諏訪湖が見える絶好のロケーション。和室から見られる山々の景色は、中々に風情があるのでないだろうか。

「漣から聞いたけど、本当に態度が悪いんだね、曙は」

「それが何? まさか、自分は尊敬されて当然とでも思ってるの?」

このクソ提督！」

「これでも結構悪口には敏感でね。悪意のこもった悪口には特に。だけど……」

曙から放たれる『クソ提督』という呼び名。上手く運用できていないであろう自分にはピッタリかもしれないな、などと自嘲しつつも、青年は曙に笑ってみせた。

「本当に嫌われてるって訳じゃないみたいで、ちょっと安心したよ」「な——何よ！ そんなこと言って、私たちが沈んだところでどうでもいいか思うんでしよう！」

「いやあ……それは泣いちゃうかもね、ホント」

「ふ……ふん！ 大人の男がめそめそ泣くところなんて、気持ち悪いから見たくないわ！」

「はは、ありがとう。えっと、曙に臆、潮かな？ 君たちは漣の同型艦だったね？ 改めて、艦隊を指揮する茅野守連です。これからよろしくね」

そうして各部屋を回り、一人ひとりの顔と名前を覚えつつ艦娘寮を後にしたのであった。

次に訪れたのは工廠。

主に艦娘の艤装の整備や保管を行う場所であるのだが——

「うっひょー！ この艤装、こんな仕組みになってたんだ！ あ、よだれよだれ」

「携帯電話から電信機を複製するなんて！ もっと幻想郷の技術について勉強しないといけないわね！」

「もっと大きな砲弾も作らないといけないのかい？ 盟友は私を試してるのかな？ できるに決まってるじゃん！」

「何これ、光学迷彩？ とんでもないモノあるじゃない！」

一転して、夕張とにとりの遊び場になっていた。

「おや、盟友じゃん。今日から本格的にお世話になるよ」

「う、うん、それはいいんだけど……」

「いやー、嬉しいね。確かに私も自分のラボが欲しいと思ってたけど、まさかこんな大きな場所が手に入るなんて思わなかったよ」

「そ、それは何より」

「それもこれも全部盟友が頼ってくれたおかげだよ！ 本当にありがとうー！」

と言って、にとりは青年に抱きつく。慌てた青年と、にとりを引き剥がしに掛かる夕張。頬ずりし続けるにとりが離れたのは、それから十分後のことであった。

「それで盟友、何か用があったのかな？」

「ああ、うん。今でも十分お世話になってる訳だけど、整備をこのままにとりさんに甘えてしまってもいいものかと思って」

「別に気にしなくていいじゃん。私は機械いじりがしたい、盟友たちは艀装の整備をして欲しい。お互いにいいこと尽くしなんだし。素直に甘えなよ」

「……ありがとう。なら、お願いしようかな。こちらとしても最大限、にとりさんに協力するから」

「お安い御用さ。差し入れにきゅうりさえ出してくれれば言うことなしだね」

鎮守府内できゅうり栽培でも始めようか、などと青年は苦笑しつつ考える。

工場を後にする際、「次はカミツレに実験台になってもらってブツブツ……」と聞こえたのは、聞かなかったことにするとして。

そして、食堂と浴場を擁する入渠ドックに向かった青年。

食堂では、鳳翔が厨房に入って様々な仕込みを行っている。それに協力するのは、叢雲、涼風、天龍、龍田の4名。何せ、艦娘全員の食事を賄わなければならないのだ。人数も多くなれば、厨房に立つ人数も必然的に多くなる。

「叢雲ちゃん、お野菜切ってくれる？」

「わかったわ鳳翔。ああ涼風、お米炊くの終わったわよ」

「お、さっすが早いねえ！　じゃあ龍田の姉貴、これの味付けは任せるよー！」

「あらよくできたわね。天龍ちゃん。ほら、これはどうかしら？」

「この魚の塩焼きッ！　肉厚の身からほとぼしる脂と塩だけの味付けなのに、すだちを加えることで深みが引き出されて……いやいやいやいや！　俺にも料理させろよ！　なんで味見役になってんだよ！」

皆、楽しそうに何よりである。特に、鳳翔はそうやって楽しそうに料理をする3人を微笑ましそうに見て、とてつもない包容力を有するような雰囲気醸し出していった。

しかし、それでいて生き生きとしており、その調理場に立つ優しそうな笑顔は――

（お母さん……？　いや、お艦って感じかな。母親がどんなものかは知らないけど）

ともあれ、調理は順調に進んでいるようで何よりである。生活については艦娘に全て任せると言っているため、あえて口出しをする必要もない。

料理の邪魔だけはしないよう、青年はその場をそつと後にした。

場所を変え、浴場施設に足を運んだ青年。勿論、青年の目的は入渠中の艦娘の覗きなどではなく、施設がきちんと利用できるかの確認である。

そう、これは確認なのだ。断じて覗きなどではない。

「あつ提督だ！　もしかして覗きに来たの!?!」

「あの白露サン、お願いだから大声でそんなこと言わないで。僕の信用が轟沈しちゃうから。ね？　ね？」

「そ・れ・で？　じゃあ、一緒に入る？」

「村雨サンも頼みます……」

ちなみに、青年は原則として日中しか鎮守府には来ない。ちょうどいい機会なので青年も鎮守府に移住しようかと考えたし、むしろその方が艦隊運営上も都合がいいだろうと思って諏訪子に提案したのだ

が、帰ってきた回答は、

『早苗が泣いてもいいならね』

殺すぞ、と言われては青年も首を横に振るしかなかった。

まさかそんなことで早苗は泣いたりしないだろう、とあの場で口にしようものなら、即刻指の一本でも折られていたに違いないと感じさせる覇気であった。

と、いった経緯があるために、青年が鎮守府内の浴場を使うことは、少なくとも日常的な可能性としては全くない。何かしらの緊急時はどうか知らないが。

ノックをしてから脱衣所の中に入る。被弾した3名のうち、白露と村雨は先ほど入渠を終えた。

ここに球磨が浴場内にいると知った上で、青年は浴場のガラス戸に背を向けたまま、それをノックする。

「クマあ？」

「僕だよ」

「提督ー？ 下着でも盗みに来たクマー？」

「僕ってそんな風に見られてたんだ……」

「案外むつつりそうだクマー。 下着じゃないなら、一緒に入るクマー？」

「白露や村雨といい、勘弁してください……」

わざとらしく咳をつき、それが原因で若干むせそうになるのを球磨に心配されながらも、青年は口を開いた。

「球磨、戦艦と戦ってくれてありがとう。球磨があそこで前に出てなかったら、挟撃に向かった部隊が返り討ちにあつてたかもしれない」

「……ああ、提督は球磨のケアでもしにきたクマ？」

「う、うん」

「それは嬉しいクマー」と言って、跳ねる湯の音が聞こえる。ガラス戸越しに、湯船に浸かっているであろう球磨は恥ずかしがるでもなく言葉が続けた。

「戦艦と戦うのは怖いクマ。少なくとも、球磨は刺し違えてようやく

倒せるぐらいだと思っていたクマー」

「……どうして前に出たの？ 僕に何かミスがあったなら言ってもらえれば——」

「提督は関係ないクマ。提督には感謝してるクマ。昔は輸送任務ばかりしてた球磨に、戦艦と戦うなんていう晴れ舞台をもらえたクマ。軍艦としては、怖い一方で嬉しさもあるんだクマー」

「大丈夫、なのかな？ 本当に大丈夫？」

「……提督は心配性クマー。そこまで球磨のケアをしたいなら——」

突如、大きなお湯の音が聞こえた。そして、勢いよくガラス戸が開いたことに驚いた青年は思わず振り向いてしまい、胸元までバスタオルで覆っている球磨の姿を目前にしてしまうのであった。

今まで、艦娘をどこか兵器とだけ思っていた部分が全くなかったとは青年も言わない。

だがそんな思いも、こんな少女ながらも扇情的な姿を見せられれば吹き飛ぶというものである。

「さ、撫でるクマ」

「いや……ちよ、え、あの——どこを？」

「頭を撫でさせてやるクマ。紅魔館で青葉がMVPなら、さっきの戦いはほうしょ……いや、球磨がMVPクマ。MVP権を行使するクマ」

「ちよちよちよ、ま、まずは服を——」

「怖かったクマー。球磨は戦艦と戦って心に深い傷を負ったクマ。これを癒せるのは提督のナデナデだけクマー」

「ちよ、待つクマ！ 撫でるにしても入渠が終わってからのクマ——」

「撫でられながら浸かるお湯は最高だと思おうクマー。さあさあ——」

「て、提督にも心の準備があるクマー！」

「提督……優しく撫でて欲しいクマ」

このあとめちやくちやナデナデした。

そして、最後に司令部。その執務室において、青年はいつの間にか用意されていた執務机に備え付けられていた、これまで座ったこともないようなフカフカの椅子に恐る恐る腰掛ける。

時刻は夕方。執務室の窓から見える景色は一段と美しい。山の端に沈みゆく夕日と、それを鏡のように映し出す諏訪湖。夏の暑さはまだ止む所を知らないが、こうして窓から入る風を受けながらぼんやりするというのは、どうしようもなく矯正的に青年の心を穏やかにしてくれるのだ。

(艦娘皆に悔しさがあつて、思いがあつて——勇気があるんだよな)

例えば上官であることも構わず罵つてくる曙。例えば兵器に並々ならぬ興味を持つ夕張、例えば戦艦相手に果敢に立ち向かっていった球磨。

その理由も自分にはわかる。過去を知ることが出来るというのは、彼女たちを受け入れること、彼女たちを護れるということ。

同じ時を過ごす覚悟を、確かに噛み締めることなのだから。

(萃香さんとの約束……守らないと)

この艦隊の当面の目標を挙げるならば、それは『博麗霊夢』の発見である。

海にいると思われる可能性がある霊夢、それを探す手段としての艦隊。

青年が何故、博麗神社、伊吹萃香の前というあの場で、苛立ちをちやぶ台へ叩きつけたのか。それは、八雲紫にとっては青年そのものはどうでも良く、あくまで付随する能力を求めて留まって欲しいとして頼んで来た可能性が高いためだ。

仕方がないことだとはわかっている。自分には何も無いし、それは自分自身が一番よくわかっている。だが。

人の温もり、繋がりに可能性を感じて紫を信じた己は、一体何だったというのか。紫が知らないとはいえ、青年に改めて突きつけられた

現実というのは、余りにも寂しいものだったのだ。

八雲藍曰く、敵ではない。

当たり前のことだろう。自分たちは霊夢を探す上での希望なのだから。仮に自分にへそを曲げられて、霊夢を探す手段が消えてしまうのは何より避けたいことなのだろう。だから、能力以外に別に魅力のない自分にだって平気で媚を売ってくるし、思わせぶりな発言もする。

(でも……これしかないんだ)

艦娘が幻想郷で生きていくには。

守矢神社が幻想郷で生きていくには。

『博麗霊夢』を発見するという、幻想郷における掛け替えのない貢献をすること。

紫がこれ以上の何かを考えているなら、もうそれは自分にはわからない。

だが、あくまでそのような立場を貫く様子を見せるのであれば。

青年には、それに乗つかるといふ手段しか残されていないのだから。

(……でも、どうする？ 霊夢さんを探すとしてもまずは近海からだ

けど、その為に必要なのは——萃香さんにも話した、制海権の確保)

ひとまず、鎮守府近海。幻想郷の陸地と接する箇所を全て抑えるにしても、海域内のあらゆる敵を撃滅する突破力、打撃力が必要となるし、倒したあとも海域を維持する艦隊を組まなければならない。

艦娘を毎日働き詰めにしてしまうわけにもいかない。休養を見込んでローテーションを組むとして、青年の素人考えでも海域の広さに対する必要な維持戦力はギリギリであるし、何より再び戦艦クラスの敵が出た場合に、被害を減らしながら有効打を与える方法が思いつかないのだ。

そもそもが、知識もない自分の頭で艦隊運営について考えるなどという時点で無理があるのだが。

(いや——待て)

ところが、青年は一つ見逃していた。

先ほどの戦いにおいて、倒した敵戦艦からもカードを入手していたということ。

「私が戦艦長門だ、よろしく頼むぞ。敵戦艦との殴り合いなら任せておけ」

腰まで届こうかという漆黒のストレートに真紅の瞳。ヘソを晒したミニスカート姿であるにも関わらず、引き締まった肢体と薄ら割れた腹筋とが、色気と共にどこか格好良ささえ感じさせてくれた。

大日本帝国海軍、連合艦隊旗艦を務めた象徴とも言うべき存在。

今後艦隊の中核を担うことになる、長門型戦艦一番艦『長門』は、どこか儚げな眼差しと共に微笑んでいた。

『攻撃隊発艦不可。サレド制空権確保』

『敵機動部隊ノ水雷戦隊ト交戦中』

『夕張指揮下駆逐隊ノ隴、全敵駆逐艦ノ撃破ヲ確認』

『我鳥海、敵重巡ノ動キを封ズ』

無線越しに聞こえるのは、艦娘たちの戦いの状況と報告であった。

現在、近海を支配する最後の深海棲艦の艦隊を発見し、追撃中である。戦艦長門を迎えた艦隊は、近海において守勢から攻勢へと転じ、あらゆる敵艦隊を次々と撃破。海域のほぼ全てを手中にしたかと思われたところで、今までで最も大きな敵艦隊、空母2隻を伴う機動部隊が現れたのである。

もつとも――

『艦隊旗艦長門、敵空母へ砲塔指向中』

圧倒的火力を有する戦艦が、制空権を奪われた空母を射程に収める距離にまで接近したのだ。

この戦いの趨勢は決したと言ってもいい。

そうした経緯を経て、新たに艦隊に加わったのがこの艦娘。

「航空母艦、赤城です。空母機動部隊を編成するならば、私にお任せくださいませ」

正規空母『赤城』。巡洋戦艦として建造されながら、途中で設計を変えられた改装空母。

当時世界最強と謳われた、第一航空戦隊の旗艦である。

長門が到着して5日、青年が幻想郷に来て10日目にして正規空母を迎え、一端の艦隊らしくなったその日。

艦隊は、鎮守府近海の制海権を深海棲艦より奪還、完全掌握することになったのであった。

026 変わる者、変わらない者、変わり者

鎮守府近海の制海権を確保したその日、艦娘に何かしらのご褒美を用意したほうがいいだろうかと思いついた青年。

ふと、咲夜の来訪により、その内容が決定する。

「異変が終わった後は宴会と相場が決まっているのよ。みんなで紅魔館にいらっしやい」

赤い館を照らす夜の月。その館の中は、人によっては趣味が悪いと言われかねないほどに赤色が散りばめられていた。赤い絨毯に赤い壁紙、赤い調度品。真っ赤なシャンデリアなどを見たときは、流石の青年も頬を引きつらせる。

赤は情熱の色によく例えられる。だが、諏訪子によって新設されたこの紅魔館、余りにもパッションに満ち溢れすぎではないだろうか。血の気が多いどころの話ではない。どうやら諏訪子は、建築する際にレミリアの要望を取り入れたとのことであったが。

「ようこそ私の館へ。歓迎しましょう、盛大にね」

突き抜けるような広さを持つエントランスホールから、正面へと続く絨毯。その先の左右に別れる階段の踊り場で、レミリアが不敵に微笑んでいた。

「いい趣味をされていますね」

「……………？　ぐめんなさい、聞こえなかったわ」

「あ、いえ。この度はお招きに預かり光栄です」

「構わないわ、新築祝いよ。ちゃんと全員連れてきたかしら？」

「海も鎮守府も留守にするわけにはいかないので、最低限の人数は残しています。彼女たちには後で、僕からまた別に」

鎮守府に残っているのは、長門、鳳翔、鳥海、暁、響、雷、電の七名。長門は会を断り、鳳翔は航空戦力として、鳥海は重巡一人ぐらい

はいた方がいいと断った。クジで残留の決まった駆逐隊はそれぞれ非常に残念そうな顔をしていたが、こればかりは仕方なく、青年としてもちゃんと彼女たちを気遣うつもりである。

「すぐに始めるわよ。さあ、いらっしやい」

そうして、レミリアの案内で青年と艦娘たちは、会場となる紅魔館の広間へ通されたのである。

「あー、えー、きよ、今日はお足元の悪い中、お、お集まり頂き……」
「びっくりするぐらい晴れてたわよ」

突然宴会が始まる前に、レミリアが青年に一言挨拶しろと自分の役割を押し付けてきた。見知らぬ人たちもいる中、青年は緊張しながらも渋々と話を始めたのである。

「あ、改めまして、艦娘たちの指揮官、今は名ばかりではありますが、提督を務める茅野守連です」

と、語ったとき、わずかながらに会場がざわついたが、青年はそれに気づくこともなく、ただただ緊張しながらしどろもどろに喋っていただけであった。何で今自分は喋ってるんだろう、などと思いがら。

青年が挨拶を終えた途端、レミリアが間髪入れずに参加者に向けて叫ぶ。

「カミツレは紅魔館のモノだから、何かしようものなら私が黙ってないわよ」

かくして、宴会は大々的に始まったのである。

先程の発言を早苗と二柱にこつ酷く叱られ、「うー」と口にして涙目になるレミリアに苦笑しつつ、青年は会場を見渡す。知らない顔も多々あり、どう動いたものかと青年は呆けていた。艦娘たちもどうすればいいかわからないらしく、鎮守府組は足を動かさず。

そんな時、である。

「おー、お前、カナムスって言うんだろ？」

「チ、チルノちゃん、さんを付けないとデコ助野郎って言われちゃうよ！」

駆逐艦たちの前に、二人組の妖精が現れた。どこかで見覚えがある、と思ったが、紅魔館の異変の時に深海棲艦になっていた妖精たちであるようだ。

緑色の髪の妖精は青年に気づいたらしく、小さく可愛らしいお辞儀をする。一方で、青い髪の妖精は気づかないのか、そのまま駆逐艦たちに話しかけていた。

「アタイはチルノっていうんだ。オマエは？」

「ふ、吹雪です！」

「そっかー、吹雪っていうのか。よし、ジコショーカイしたから、アタイたちこれでトモダチだな！」

「え？」

「え、ア、アタイとトモダチになつてくれないのか……？」

「と、友達です！ 私たち友達ですから！」

そうして、駆逐艦たちは半ばチルノの勢いに流されてゾロゾロと妖精二人についていき、会場に消えていった。

他にも、

「むきゅ？」

「あ、あの、何の本読んでいるんですか？」

「エイボンの書」

会場の隅で本を読んでいたパチュリーに朧が話しかけたり、

「ねえ、あなた」

「ほい？」

「折角のパーティーなのよ？ ふてくされてないで、もつと楽しみましょーよ」

「ほい！ 素敵なパーティーにするっほい！」

戦闘であまり活躍できなかった、と唇を尖らせていた夕立にフラン

が話しかけたりと、思ったより艦娘と幻想郷の面々は打ち解けるのが早いらしい。

艦娘の幻想郷との交流も少なからず目的としていたのだが、心配はなさそうである。

(……あ、ここでもぼつちになつてしまう)

だが、社交性に優れるとは言えない青年。このままでは幻想郷に来た意味がまるでないではないか、とも思っていた。

しかし――

「やあ、久しぶりだな」

「あ、慧音さん。こんばんは」

「カミツレこんばんは。相変わらず辛気臭い顔してるねえ」

「てゐさんも。毎日高速修復材を届けてもらって、本当に感謝しています」

一宿の恩がある慧音に、永遠亭との橋渡し役となつてくれている。この二人が話しかけてくれたことにより、青年は会場の喧騒に音を足すことができたのであった。

ただ毎日を一人で過ごしていたわけではない。今は周りに、多くの人が集まるようになってしまった。

これからもこの人の輪は広がっていくのだろう、と青年は確かな実感を噛み締めたのである。

もう一つ、青年の気になったことがある。それは早苗が、魔理沙、咲夜、鈴仙らと非常に楽しそうに話をしていること。

早苗の境遇も、青年と大して変わらない。学校に通う頃はその能力から気味悪がられていたと、本人の口から聞いている。

ところが、今はどうだろうか。少女たちと同じ空間にいて同じものを食べ、同じ顔で笑い、同じ時を過ごす。

青年にとつて、友人であり妹のような存在であった早苗が、幻想郷に来て得た友人。彼女は彼女なりに、自分に話してくれたように前に進んでいる。

変わらないものはない。自分も早苗も、そして艦娘も。

されど、今ひとたび得られたこの幸福だけは、変わらずそのまま

あつて欲しいと願うことぐらい、許されてもいいだろう。

宴会は時とともに進み、会場の雰囲気もヒートアップする。室温は高くないのだが、体は熱い。

その原因というのも――

「ほらほら、そんなもんじゃないだろう?」

「……うぶ、萃香さん。僕、酒はあんまり……」

「なんだなんだ、私の酒が呑めないのか?」

酒豪の萃香に、酒を付き合わされていたからだ。

会場に出されていた料理の中に酒があり、それをガブ呑みする萃香を見かけ、付き合い程度に一杯だけ、と青年も酒を飲んだ。少しの間は他愛もない話に興じていたのだが、あまりに萃香が呑むために少しばかり恐怖を感じ、コップを空けてその場を去ろうとした。

だが、それがいけなかった。一気に飲み干したために萃香に目をつけられ、それ以来一時間ほど萃香の酒に付き合わされていた。

「ほら、次はコイツだ。じゃんじゃん飲めよ」

「うぐ……こ、この鬼! 悪魔! ちびっ子!」

「酔っぱらいの妄言なんざ屁でもないね。飲めないなら他の奴に相手してもらうしかないな」

と言って、青年が酔い潰れそうになっていると、萃香はつまらなさそうに辺りを見回した。すると、そこへ丁度目に付いたらしいのは――

「なあそのの、ちよつと付き合ってくれないか?」

「え、あたし? いいよ。じゃあ衣笠、ちよつと行ってくる」

ああ、犠牲者が増えてしまう。それより加古は酒を飲んでも大丈夫な年なのか……、などと回らない頭で考えるが、時既に遅し。

加古は萃香から酒の入ったコップを受け取ると――それを一気に飲み干した。

「ぶっはあ! コレいけるねえ!」

「お、なかなかいい飲みっぷりじゃないか。飲めるやつは嫌いじゃない

いぞ」

と、全く怖じない加古と酒を勧める萃香が酒盛りするのを傍目に、青年は衣笠の肩を借りてその場から離脱していた。

「き、衣笠あ……ぐ、ぐめ……おえ」

「加古はかなり強いから心配しなくてもいいよ！ それより提督大丈夫?! お酒強く……はなさそうだね」

「恥ずかしながら……」

「いいのいいの！ 無理して飲むことないよ！ そこ、一回座ろ？」

世界がユラユラと回る。だがそれでも、肩を支えてくれている衣笠の顔はよく見える。

気配りの出来る子だなあ、などと思いつつ、導かれるままに青年は椅子に腰を下ろした。

「お水いる？ 袋持ってきた方がいい？」

「いや……大……丈夫」

自分の鼓動が非常に大きく感じられる。胃がグルグルと唸り声を上げている。

そんな状況でも、青年は会場を見渡し、艦娘たちを目で追う。ちゃんと仲良く出来ているかをこの目で確認するために。

「この詩の本、面白いですね。初めて読みました」

「……良かったら、持って帰っていいわよ。でもちゃんと返してね？」

「はい、ありがとうございます！」

まず、最も仲が良さそうにしていたのはパチュリーと朧。二人揃って椅子に座って本を読み、時折立ち上がった料理を取りに行つては、また戻って本を読む。会話こそあまりないものの、この二人の間には非常に和やかな雰囲気の流れていた。

「きゅっとするっばーいー」

「これがギソウ？ って、随分と重たいわね」

フランと夕立は、お互いの戦いについて熱く語っていた。今は夕立がフランの能力を真似してリングゴを素手で握り潰したり、フランは夕

立の艤装を装備したりと、遠巻きに見ると恐ろしい。リングは夕立が美味しく頂いていた。

「な、なにが一番だよお！ 白露なんか九番ぐらいがお似合いだもんね！」

「違う、白露が一番なの！ 一番！」

駆逐艦組はちよつとした喧嘩こそ生まれていたものの、仲はそれほど悪くないらしい。お互いにムツとした表情になることもあるものの、ちよつとしたことですぐ仲直りもする。

更に――

「ねえねえレミリアさん、どうなんですかあ？ 詳しく聞かせてくださいよー！」

「ちよ、文みたいねコイツ！ 私に勝ったからって調子に乗ってるつもり？」

「そんなつもりはないですけど……青葉、運命を操るというレミリアさんには是非とも取材をと思ひまして！ 今ならなんと、司令官のあんな秘密やこんな秘密を――」

「へーえ？ 詳しく聞かせなさい。こら、引つ付かないで！」

青葉は早速、にとりにもらったというカメラを利用しつつ取材をしていた。紅魔館という一大勢力、それを率いるレミリアに取材というのはなかなかいい着眼点だとは思うのだが、いかんせんその取材方法には苦笑させられる。

傍で見守っている古鷹も、申し訳なさそうな顔でレミリアに会釈していた。ついでに自身にも。いやそこは止めて欲しい。

「はつしもふもふ……いいですねえ。非常に可愛いです」

「もみじもみもみ……へっ、白狼天狗もなかなかの愛らしさじゃねえかオイ」

文が初霜を、天龍が犬走権を膝の上に乗せ、存分に愛でているのも目に入る。撫でて二人は非常に頬が緩んでいるものの、撫でられている方は少しばかり不満そうにしながらも頬を染めて恥ずかしかっていた。

そして、最も青年が目を疑ったもの。

「モグモグ、ング。ハムハムハム——」

「モグモグモグモグ、ムシヤ——」

「やりますね」

「うふふ、あなたこそ」

着任したばかりの赤城と、知らない美しい女性が、テーブルの上の料理をひたすら食べ続けていたのである。可愛らしい量ではない、成人男性が束になってかかるような量を、二人して平らげているのだ。「ううつ、幽々子様あく、そのぐらいにしてくださいよお……」

その二人の食事スピードに負けじと、これまた知らない可愛らしい少女と咲夜が、料理をテーブルに運んできている。

（聞いたことがある……。女の子の別腹は異次元に繋がってるって。そっかあ、別腹なら仕方ない。いやガッツリ肉とか食べてるけどあれは別腹だもんな、うん）

いい感じに酔いが回っているとようやく自覚した青年は目を回し、襲い来る眠気に抗うこと叶わず、安堵とともにようやく意識を手放したのである。

衣笠は身体を硬直させていた。その理由というのも、酔いから眠ってしまった青年が、自身の肩に頭を乗せるようにして寄りかかっていたためだ。

小さな寝息が耳元をくすぐる。若干酒臭さが鼻につくものの、その寝顔はまるで少年のように幼く見え、起きている時の気を張りがちだった表情とは大違いである。

「て、ていとくー？ 寝ちゃダメだってば」

と、照れを隠しながらも青年の頬をツンツンと人差し指でつつく。その感触たるや、まるで出来たての餅のごとし。

（ウ、ウソ……。青葉より頬が柔らかいなんて……）

しばらくの間、起きないのいいことに頬をつつき続けていると、目を輝かせた早苗がやってきた。衣笠の隣、青年と挟むように隣に腰掛け、気分良さそうに笑っている。

「あはははははつ、衣笠さんじゃないですか！」

「え、さ、早苗？　なんだか……楽しそうだね？」

「お酒って気分が良くなりますねえ。気分がぼわぼわってなつて、すっごく楽しいんです！」

見れば、彼女の手には酒が入っているともしきコップ。顔を赤くしており、おそろくなかなかに酔いが回っているのだろう。

彼女の住んでいた外の世界では、酒を飲める年齢も決まっていたよ
うな気がしたのだが、早苗はそんなことを考える時間も与えてくれな
いらしい。

「むむむ、き、衣笠さん、そ、それってもしかして……」

「て、提督が寝てるんだけど……？」

「羨ましいですよ！　肩を代わつてくださいよお」

と、早苗に涙ながらに懇願されるのだが、今の酔っ払った早苗に青
年を預けてもいいものか悩ましたため、首を横に振る。

すると、早苗は文句タラタラでありながら、どこか嬉しそうな顔で
青年の頬をつつき始めた。

「むう、仕方ありません。カミツレさあん？　起きていますか？」

「……………」

「あはは、ぐっすりです！　諏訪子様からカミツレさんの部屋には行
くなど言われていましたから、実は今のカミツレさんの寝顔をじつと
りと見るのは初めてなんですよね！」

「……………んっ」

「うふふつ——寝ている時は子供の頃に戻ったみたいですよ」

「そ……………」

「返事!?　衣笠さん、返事しましたよ！」

「あ、うん」

酒の力とは恐ろしい。これほどテンションが高くなると、流石の衣
笠もついていけない。とはいえ、早苗は元からこのようなテンション
だった気もする。

ひよつとすると笑い上戸なのだろうか。

「カミツレさんカミツレさん！　どんな女の子がタイプですなんか

!？」

「ちよ、早苗?！」

「……優しい」

「優しい子! どうなんでしょう? 私はカミツレさんのタイプなんでしょう?！」

「さなちゃん……は」

少なくとも、眠っている青年に大きな声で話しかけることを優しいとは言わない。

「……立派、だよ?」

「……ふえあつ!？」

「頭……よくて。僕なんか……仲良く、してくれて。へんなどこある……けど、さなちゃん、かわいい、し……」

「え、か、可愛い……ですか?」

早苗は戸惑うようにしながらも嬉しそうに、眠っている青年の寝言との会話に夢中になっているが、衣笠としては改めて青年の過去の記憶を振り返る。

そして、如何に早苗が、青年にとって深いところに居座っているのかを、青年にとって心の拠り所になっていたのかを思い知らされることになる。

(でも、私たちもいつかは……ね?)

青年にとつての、支えになれるのだろうか。心から信頼し合い、早苗のような存在になれるのだろうか。

「カ、カミツレさん、好きな女の子とかいるんですか!? できれば教えて欲しいな、なんて!」

「うーん……、蛙の水炊き……美味すぎる……」

「ステキです!」

と言つて、早苗も酔いが回ったのか、衣笠にもたれ掛かるように眠ってしまった。

「いやあ、衣笠。ほんとにごめんね?」

「いいよ！ 私も楽しませてもらったし！」

「へ？ 寝てる間に何かあった？」

「う、ううん何も！ ほんとに何も！」

早苗を背負い、酔いの覚めた青年は夜の道を歩いていった。忙しいにも関わらず、鎮守府で待機している艦娘たちのために咲夜が料理を用意してくれたので、帰ったら皆喜ぶだろう。

夜も更け、虫の鳴き声と少し冷たい空気とが青年を包む。雲に隠れた月の明かりで浮かびあがる砂利道に、ゆっくりと石が鳴いていた。

「うう、ん、カミツレ……さん」

「さなちゃん？ 起きてる？ 歩ける？」

「おん、ぶ……」

「フフ……はいはい」

起きているのか寝ているのかわからない早苗を背負いながら、青年は自然と笑顔を浮かべる。普段はあれだけしっかりしている様子を見せているのに、寝ている今は子供のような寝顔である。

(さなちゃんの寝顔、この歳になってからは初めて見るや)

おぶる際、あまりジロジロ見るものではないと思ったのだが、綺麗な顔立ちは今も昔も変わらないらしい。

「ねえ、提督」

「うん、どうしたの？」

「早苗とはさ、どうやって仲良くなったの？」

「そう、だね。僕の記憶からはわからないかな？」

「わかる……けど、提督の口から聞きたいもん」

非常に興味深そうに、上目遣いで見上げる衣笠。どう答えたものかと思うも、青年は早苗を背負い直して思い出しながら語った。

早苗と出会ったのは青年が小学四年生の夏、早苗が小学一年生だった頃である。早苗と出会うより前から神社への参拝は続けていたのだが、神社を訪れて同年代の子がいることなど滅多になかったために、特別青年の記憶に残ったのだ。

「最初はね、話しかけたりもしなかった。目立つし気になる子だったんだけど、僕自身もほら、変なものが見える体質があったから、どう

せこの子も僕を嫌うんだろうなって思うと、どうしても話しかけられなくてね」

「うん……それで?」

「結果的に、話しかけてきたのはさなちゃんが先だった。僕が神社の隅っこに座って宙に浮いてる人魂みたいなのを見てたら、『何か視えるんですか』だとき。気持ち悪がるでもなく、本当にキラキラした瞳でね。今でこそ理由もわかるけど」

あれは拍子抜けしたな、と苦笑しながらも青年は続ける。

「で、僕も恐る恐るだけどそこから少しずつ話すようになって、仲良くなりましたとき」

「ちよ、それ適当すぎじゃない!」

「ま、まだ話す?」

「そのぐらいは記憶見ればわかるもん! じゃあ、一番印象に残ってるお話教えてよ!」

青年も気恥ずかしさがあるために、あまり過去を語るような真似はしたくないのだが、艦娘には記憶を知られているので今更である。とはいえ、話に食らいについて興奮気味の衣笠はまだまだ許してくれそうにない。

「……出会って、二年ぐらい経った頃かな? 二人で遊んでると、さなちゃんが転んでケガをしたんだ。捻うちやって、歩くのが痛かったみたい」

「ふんふん」

「それで、さなちゃんをおんぶして神社まで送ったんだよ。丁度今みたいに」

あまりにも早苗が泣くものだから、仕方なく背負って帰ることになったのだ。背負った途端、早苗がすぐに泣き止んで笑顔に変わったのは今でも覚えている。

「神社とは別の場所で遊んでたもんだから、僕がさなちゃんを背負ったまま参拝道を登ることになってね」

「うわあ、それはキツそうだね」

「ううん、むしろ楽しかったんだ。確かにまだ身体も小さかったから

体力的にツライ部分はあったけど、後ろから応援があったから」

「早苗から？」

「うん。さなちゃんのお援助で神社にたどり着いた時、二人して大笑いしたんだ。不思議と笑いが止まらなくてね。それまで抑圧されてたものがお互い溢れたというか」

感情までは記憶から知ることはできない。そのため、衣笠は理解しきれないのか小難しそうな顔で首を捻っていたが、青年は今でも鮮明に思い出せる。

『いけーカミツレさん！ どんなみちもへっちゃらです！』

『わ、わ！ さなちゃん、あばれないで！』

『カミツレさん！ じんじやについたら、わたしが “よしよし” してあげますね！』

『さつきからバタバタしてるさなちゃんの足はもう “よし” じゃないの……？』

『もうちよつとですよカミツレさん！』

『うん！ がんばるよ！』

『とうちやくです、えへへ！ カミツレさんありがとう、だいすき！』

（大好き……。また神社に行くっていう約束も守らなかつたし、言いつけも守らないし……。僕って最低だな）

思い出は美しいから、現実を霞んで見えてしまう。それでも、早苗と過ごした日々と、早苗と過ごす日々は、そのどちらも青年にとって宝物だ。

今は嫌われてはなくてもかもしれない。だが、この先嫌われないという保証はない。幸せがいつまでも続かないというのは、青年もよく知っている。

だから、早苗は守ってみせる。

それが、唯一の友人への親愛の証になると信じて。

（さなちゃんは……。今はどうして僕に構ってくれてるんだろう）

その口から拒絶の言葉が生まれるのが嫌いで。自分を否定され、思
い出の中で心の支えとなっていた早苗に距離を置かれるのが怖くて。
怖くて、怖いから。怖いなら——聞かなくていい。

自分のことなど、いつも後回しにしてきたのだから。

「——でもさ、それってなんか、いいよね」

「うん？」

「お互いがお互い唯一の友達だったんでしょ？　ずっと仲が良くて、
再会して、新しい世界でまた友達になった。衣笠さん、そういうの口
マンチックでいいと思う」

「……それでも。それでも、六年間。六年間離れている間に、薄れてし
まうものはあると思う」

「酔ってる姿見せて、おんぶさせてるぐらい仲がいいのには？」

「……いやそれは——」

「思い出は薄れるかもしれないよ？　でも、また新しく作っちゃえば
いいと思うんだ」

そう言つて、衣笠は笑う。

何も、自分たちに限った話ではない。衣笠をはじめとする艦娘たち
にも言えることなのだろう。

新しく何かを作ること。それは、早苗が幻想郷に來た理由そのもの
なのだから。

「ううん……カミツレさあん……」

早苗を背負い直し、青年は暗い夜の道を見上げる。月を隠していた
雲は何処かへ消え、ギラギラと輝く月が、青年を背後から照らすよう
に浮かんでいた。

鎮守府へと帰った青年。衣笠は青年の護衛としてついてきたため
に、酔い潰れるであろう加古の介抱も兼ねて紅魔館へと戻っていつ
た。

本来ならば守矢神社で就寝するのだが、早苗もこの状態で二柱の神
も紅魔館で酒盛りしている。早苗を連れて先に帰れと諏訪子に言わ

れたものの、流石に早苗と二人きりになるのはダメだろうと思い、鎮守府へと連れてきたのである。

「これでよし、っと」

執務室へと移動した青年は、万が一鎮守府で寝ることになってもいいようにと、備え付けられていた簡易ベッドに早苗を寝かせた。

「んふふ、カミツレさあん……」

眠ったまま、小動物のような仕草で寝返りを打つ早苗。その可愛らしい寝顔は見ていて飽きないものであるが、青年も待機組にお土産を渡さなければならぬ。

布団をそっとかけ、青年は静かに執務室を後にした。その際――

「あなたは……変わってくれますか？」

呟く早苗の声は、青年に届かぬまま。

訪れたのは食堂。紅魔館に行けないことを残念がっていた暁たちのことを、青年なりに心配していたのだが――

「ほら、どうだ！　これがビッグセブンの実力だ！」

「長門、今『ウニ』と言わなかったね？」

「なっ、響それは！　し、しまった！」

「やったわ！　雷様が一番乗りよ！」

「ウニ、なのです！」

「そんな、暁はレディなのに、まだこんなに手札があるなんて……」

「むむむ、皆さん強いですね。私の計算が通用しないなんて」

どうやら、艦娘たちで盛り上がる方法を見つけていたらしく、杞憂であつたらしい。

厨房では、鳳翔が待機組のために料理を作っていた。青年はまず厨房へ向かい、紅魔館で受け取ったお土産を鳳翔へ渡す。

「あら、提督。お帰りなさい」

「ただいま、鳳翔さん。これ、紅魔館で出された料理だから皆で食べ

て」

「少し味見を……。ツ——幻想郷には、こんなに美味しい料理があるのですね」

と、オードブルを少しつまんだ鳳翔が、拳を握り何かに燃えていた。

その真面目な表情に気圧されつつも、青年は鳳翔の料理と共に、艦娘たちの元へとオードブルを運ぶ。

「皆、楽しそうだね」

「へっ!? て、提督!? 全員起立、敬礼!」

「いやいやいいよ。続けて、どうぞ。それより長門って、厳しそうないメージしかなかったけど、そんな風に楽しんだりもするんだね」

「えっ、あっ、なっ、なっ、ななな何を——」

長門はその言葉でどうにか取り繕おうと必死なのか、頬を赤くして手を振る。

長門の普段の姿といえば、規律に厳しく、厳正な態度で、青年に対しても戦闘に対しても、非常に真面目な態度しか青年は見たことがない。

普段見せる仕草の一つとってもキビキビしているあの長門が、まさか駆逐艦たちにデレデレとした顔を見せて一緒に遊ぶ姿を想像できただろうか。いやできない。

「ちよつと長門、続きをするわよ! 次こそはレディの力を見せつけてやるんだから!」

「えっ、あっ、いや、しかしだな……」

「長門。早くしないと、君がいつもぬいぐるみを抱いて寝ていることを皆に教えるよ」

「響!? なぜそれを!」

戦艦は厳粛なのだろう、という青年のイメージが、音を立てて崩れていく。初めて姿を見た時の威厳は、どこかへ消えてしまっていた。

可愛いというよりカッコイイという言葉が似合う長門。それがまさか、子供のように見える駆逐艦たちにすらからかわれる状況を見て、青年は盛大に吹き出してしまう。

その後更に慌てる長門の姿は、なかなか忘れられないだろう。

翌朝。起きてストレッチ、鎮守府の周りのランニングとを済ませた青年は、門の入口に入る時、早くから門番として仕事をしている美鈴と出会う。

「おはようございます、美鈴さん」

「おはようございます、カミツレさん。毎朝頑張っていますね」

「まあ、日課のようなものです。美鈴さんこそ、時々武術の鍛錬を行っているのを見かけますが？」

「あはは、お恥ずかしいです。以前もお見せしたように、私もまだまだ未熟でして……」

「とんでもない。素人目に見ても綺麗でした。良ければ、時間のあるときにお手伝い程度でもいいので、艦娘の子達と演習をしてみたいのですが」

「私ですか？ それは全く構いませんよ。天龍さん龍田さんとも、もう一度お手合せしたいですからね」

そうして、しばらく世間話をした後、青年は執務室へと向かう。

「起きてさなちゃん、もう朝だよ。鳳翔さんが二人分朝ごはん追加で作ってくれるらしいから食堂に行くよ」

「うーん、あと五分……お酒はもう懲りごりです……」

「ほらほら、今日は海に行くんだから」

「海……海？ 海ですか!?!」

執務室の簡易ベッドで眠っていた早苗は「海」という一言で飛び起き、食堂へ向けて青年の腕を引っ張りながら向かうことになった。

食堂で艦娘たちと一緒に朝食をとる。昨夜宴会に参加していた者たちは寝不足なのか、少し隈が見られるも辛そうではない。加古の姿が見えないために衣笠に尋ねたが、どうやら二日酔いでダウンしてい

るとのこと。

朝食をとり終えたところで、青年は艦娘たちに対して声をかける。

「皆、ちよつと聞いてくれるかな？」

「全艦、傾注！」

「長門！」

「はっ！ な、何か？」

「ぬいぐるみ、リラックス」

と、待機組は昨夜のことを思い出したのか、少しだけ笑いを含む。長門は長門で恥ずかしそうにしていたのだが、丁度視線が集まったところで話を続けた。

「近海の制圧、本当にありがとう。でも、まだ幻想郷に面してる海岸線で、完全に制圧できてない海域もある。決して、慢心しないように」「慢心……ええ、してなるものですか。一航戦赤城、今度こそこの誇りをお見せしますから」

「うん、期待してるよ。ともあれ、近海の制圧ができたことだけでも本当に喜ばしい。ただし——」

青年は長門と赤城の前に置かれた、特大サイズの皿をチラツと見る。

「まだ比較的余裕はあるけど、艦隊の拡大に伴って、資源が足りなくなる危機があるのも事実。そこで、今日は皆で海に向かい——」

目に見えて明るかった早苗の顔が、僅かながら疑問を抱いたものとなる。その爛々とした瞳は、まるで子供のように純粹であったのだが

「皆でお魚獲りに行くこう」

次の瞬間には、ガツクリと肩を落としていた。

長門と赤城は、恥ずかしそうにお腹を鳴らしていた。

027 大漁旗を掲げよ!

砂浜沿いにて佇む青年。同じ青でありながら違う青で境界を引いている水平線を見渡すと、そこには楽しそうにはしゃぐ艦娘たちの姿があった。

「電、レディならしっぴかり釣竿を起こしなさい!」

「はわわわ、スゴイビクビクしてるのです!」

「おいチビたち大丈夫か! 待ってる、今手伝ってやる!」

「——ッ! そこだクマ!」

「あらく、素手で捕まえるなんてすごいわねえ」

「青葉たちは大物を狙っていきましよう」

「いっぱい食べるところあるもんね!」

「くっ、なかなか手ごわいなコイツ! 誰か、手を貸してくれ!」

「長門さん、クジラを釣り上げようとするなんて……ロマンがありますね!」

「鳥海、わかってくれるか! 今だけはこの長門、捕鯨船になろう!」

和気藹々とキャピキャピした雰囲気——中にはたくましい艦娘もいるが、艦娘たちは概ね楽しそうに魚釣りに励んでいるようだ。

沖合に出ている漁業艦隊旗艦の叢雲によると、漁は好調らしい。鎮守府の食料を賄うには十分すぎる量が既に確保できた上に、魚が減る様子も一向にないという。獲りすぎれば生態系にダメージを与えることになるのだが、叢雲の報告を信じるならばいらぬ配慮であるようだ。

長門と赤城が鎮守府にやってきたことで、食料の消費量が増えることが懸念されたが、何ということはない。深海棲艦から制海権を取り戻したことで、海洋資源に手を出せるようになった。当面は食料に關して心配はないだろう。

尚、砂浜では拗ねた早苗が砂の城を築いていた。話しかけてもそれほど向かれるために理由を尋ねるのだが、「もっと乙女心を勉強してください」と言われてしまう始末。

仕方ないので、その傍にいる吹雪に、早苗が何故怒っているのか聞

こうとしたが、

「あつさりー、しっじみー、はーまぐーりきーん♪」

潮干狩りに没頭しているの、話しかけるのはやめておいた。

(それにしても、潜るのは少しぶりだな)

青年は今、幻想郷に持ってきた荷物の中から引つ張り出してきた、潜水装備を身に付けている。目的など、一つに決まっている。

幻想郷に来て食事が量が増えた結果、ある程度肉も付いた。加えてダイビングスーツを着用しているために、体の下の傷も見えない。かつては仕事の同僚に痛々しい視線を向けられたこともあったのだが、もう問題ないだろう。

ゴーグルを着用して水辺に近寄ると同時に、青年はにとりとの会話を思い出す。

『えっ、漁船は造れないの?』

『正しくは、航海に耐えるだけの強度と剛性を持つ船、だね。川に浮かせる小舟程度ならできないこともないけど、波に耐えるような船の技術はもう“廃れた”んだ』

『廃れた……艦娘の艦装じゃ参考にならないかな?』

『靴の形はそれっぽいけど、残念ながら艦娘の艦装は“人型に与えられた設計”だから、実物の船への転用はできない。要望に応えられる実用に耐えうる船を造るとなると、流星の私も三年はかかるね』

『三年……』

『まあまあ、釣竿ならいくらでも作ってあげるよ。なんなら綱だって作っちゃおう。それから盟友、潜れるんだよね? だったらこれとこれもプレゼントするよ』

身体を海に浸しながら、青年はにとりから受け取った水中呼吸器と、やけに大きく重たいモリを装備し、海中へと挑むのであった。

不機嫌そうな顔で、曙は釣竿を振るっていた。これで釣れないならばまた愚痴の一つも増えるのだが、生憎と釣り糸を垂らした瞬間に魚が食いつくため暇などない。

「ブツブツ——全く、どうして私がこんなこと」

「曙、口より手を動かさなさい」

「あんたは悔しくないわけ？ 仮にも誇りある軍艦が漁船の真似事をしているのよ？」

「はにや？ 私たちは軍艦じゃなくて補助艦艇だよ？」

「漁船の皆さんにも色々お世話になりましたし……」

「うー、もう！ そうだけどそうじゃないのよ！」

ちなみに誇りある軍艦の代表中の代表。かつて日本の誇りとまで呼ばれた長門はその時、未だにクジラと格闘を繰り返しているのだが、曙はそんな様子を視界に入れない。

曙はかつて、軍上層部より大きな非難を受けた。それは主として、空母を守りきれなかったことに対するもの。だが、自身の役割以上の無茶を押し付けられた結果としての非難は、あまりにも自身にとっては無情なものであった。

それには姉妹艦の潮の影が見え隠れするのだが、潮のことを恨んでいたりするわけではない。むしろ、恨めしく思ったのは命令を出した軍上層部に対してである。

どうせ青年も同様に自身を扱うのだろう、と。記憶の共有があるならば、自分に対する接し方など分かりきっているようなものなのだから。

と、思っていたのだが、あまりにも青年が軍とのイメージからかけ離れていたために、曙も調子が狂うのである。青年に対するものではない憤りを理不尽にぶつけても、当の青年はそんなものどこ吹く風の対応なのだ。

これではまるで自分が阿呆ではないか。もしかすると、青年はこのように悩む自身を笑っているのではないかとも思い込んだが、やはりただの思い込みであるらしい。

ともあれ、漁は続く。その中で、やはりどうしても腑に落ちない疑問というのは、口に出してしまうのが曙の性分である。

「ねえ。アンタたち、あの提督についてどう思ってるのよ」

「どう……っつて？」

「好きか嫌いとか、気に入らないとか、なんでもいいわ」

「あの、潮は……私は、こうやって戦うわけでもなく魚を獲ることなんて、戦争をしていた頃は考えもしなかった……です」

「そうね……少なくとも、今をこうして平和に過ごさせているのは、どんな形であれ司令官の采配があつたから、だと思おうわ」

潮と隴が、それぞれ答える。少なくとも、悪印象を持っているわけではない、との意思表示なのだろう。

青年自身が艦隊に影響を与える指揮を下したことは数える程しかない。艦娘が青年に心身ともに振り回されている部分は多かれ少なかれあるが、それによる事態の好転は、果たして采配に含めてもいいものなのだろうか。

青年は逆に、艦娘に振り回されていると思つているとは思うが。

「……まあ、確かにそうかもしれないわね。でも、この艦隊の運用に関しては、私は認めないわよ。こんな指揮初めてだわ!」

「そりゃ、司令官は元々一般人で、私たちの記憶の中の運用を頼りに指揮してるわけだし。でも、近々長門さんが司令官に指揮とか色々教えるらしいわよ?」

「隴、それ本当? ……まあ、長門なら安心でしょうけど」

その長門はというと、クジラを取り逃がして落ち込んでいた。鳥海が気を遣つて慰めの言葉をかけているのが、むしろ長門の哀愁を引き立てる。

「漣、あんたはどうなのよ。一番最初に提督の艦娘になったんでしょ?」

「曙ちゃんの言いたいこともわかるよー。確かに、ご主人様の能力で上下関係は『暫定的』に決まつてるけど、正直従う理由がないといえられないからねー。刃向かおうと思えば別に刃向かえるわけだし?」

イタズラっぽく、漣は笑みを浮かべる。

「命令も強制じゃないし、この体と幻想郷ならどうとでも生きていけるし、望めばご主人様も止めないだらね」

「……なら、なんでよ」

「自分の事でも一杯一杯なのに、漣たちのこともちゃんと考えてくれ

てるから。漣は幻想郷の鎮守府、軍じゃなくて家族みたいだにやーつて思ってるし」

家族、と漣はいう。

思えば、かつて艦だった頃の自分はとうだっただろう。上層部からの非難こそあれ、艦内はそれこそ家族のようなまとまりがあった。

青年を罵れば何かが変わるのか？ 青年に従わないことで自己が確立されるのか？ 否。それは子供の我儘にも近い、ただの八つ当たりだ。

漣が家族のようであると言った意味。青年が何を求めて今の艦隊があるのかわかっていようものなのに、自分だけが意地を張り続けることに意味はあるのか――。

考えた込もうとしたところで、曙は遠目に見える海面に、チラリと怪しげな物体を見る。そしてそれが何かを瞬時に理解したことで、顔を青ざめさせた。

「ね、ねえ、潮。近海の制海権、本当に奪還したのよ、ね？」

「そ、それは間違いないです。長門さんが空母を沈めたから……」

「水上艦だけ……？」

「……え？」

「深海棲艦には……水上艦しかないの？」

瞬間――朧が、漣が、潮が、顔を青ざめさせる。

誰よりも早く動いたのは、朧であった。

「――ッ！ 全艦に引き上げるように打電！ 駆逐艦は対潜哨戒！ 司令官は!？」

「い、今潜水して魚とか獲ってた気がするかも。やばいよ、下手に爆雷使えないじゃん！」

かつて、姉妹艦である漣も含めて、曙の目の前で様々な艦を沈めた艦――潜水艦。

大戦中に何度も痛い目を見た自身たちにとって、深海棲艦に潜水艦がないという思い込みと、それを青年に伝えていないことは、酷く

迂闊すぎたのである。

(魚、本当に沢山いるんだな。水の透明度も高いし、塩分濃度も知る限りじゃ普通。これじゃ、本当にただの綺麗な海としか言いようがないや)

視界一面に広がる透き通った水色と、その中を気持ちよさそうに泳ぐ魚たち。青年はその中を一緒になって泳ぎ、いつしか魚を仕留めることすら忘れていた。

(気持ちいい……。ずっと泳いでいたいけど、そろそろ戻らないとな) 全身に自然を感じるのは青年としても非常に心安らぐのだが、残念ながら時間は限られている。これから青年もやるべきことがあるのだから。

と、海面に浮かぼうとしたところで、何やら見慣れぬ物体を海中の遠くに見かける。

(ん、クラゲ？ タコ？ いや、白いかからイカ？ 人より大きいみたいだけ)

触手のようなよくわからないものがウネウネしているのはわかるのだが、いかんせん見慣れない生物である。もしかしたら幻想郷にのみ存在する新種なのかとも思い、青年はその生物にゆつくりと近づいていく。

(……気味が悪いなあ。深海生物っぽい形だけど……深海生物？ 幻想郷に特有の深海生物って……)

あと2mもすれば触れられる距離に近づいたとき、その生物はおもむろに口と思われる部位を開く。それは、生物がエサを捕食する体勢と酷似していて――

(うわあああああッ！)

心の中で叫び、無我夢中にとり製のモリをその生物に突き刺した。

瞬間——青年は目の前に広がる謎の爆発と同時に、気を失ったのである。

「あれ、ここにもない。こっちにもない」

「あら、にとり。どうしたの？」

「あ、夕張。いやあ、ここに置いておいた指向性爆薬の試作品がなくなってるみたいで」

「指向性の？ それなら、私があの変な形の魚雷に組み込んでおいたわよ」

「変な形の魚雷？ あっ……」

「な、何、どうしたのよ」

「あれはいろんな機能を集約させたモリなんだ……光学迷彩とか」

「海中で使うモリにどうして光学迷彩……。モリなのね、道理で推進装置が見当たらないと思ったわ」

「ち、ちなみに爆薬の向きは……」

「ちゃんと相手側に向けてあるわよ。そこに置いておいてはまずだけど」

「盟友がモリを欲しがってたから渡したんだ」

「……………」

「……………」

意識が戻ると同時に青年を襲ったのは耳鳴りであった。爆発による衝撃は不思議とそれほどなかったが、身がすくむほどの爆音が耳に届いたのはよく覚えている。

「どうやら砂浜に寝かされているようだが、なにやら周りが騒がしい。」

「起きなさいよ……起きてよお、ねえ……」

「対潜哨戒終了——。『全艦帰投セヨ』つと」

「なんでまた私の目の前で潜水艦なんか……。起きてつたら……。提督

……クソてーとく……」

「む、叢雲さん！ カミツレさんは無事なんですか！」

「怪我はないわ。気を失ってるだけよ」

周りの声も聞き取りづらくはあったが、徐々に聴力も戻りつつある。目を開けた青年はその場で上体を起こし、ゆっくりと周囲を見渡した。

「カミツレさん、大丈夫ですか!？」

「……あー、うん。多分平気っぽい」

立ち上がって身体を動かすも、特に異常はない。身体をブラブラと動かしている様子を見てか、早苗はホッと胸をなで下ろしていた。

「叢雲、何があったの?」

「アンタが一番よくわかってるんじゃないの?」

「……確か、海中で変な生物を見かけて、襲われそうだったからモリで突いたら何故かモリが爆発して……後でにとりさん問い詰めない」と
「その生物、間違いなく潜水艦の深海棲艦よ。アンタが倒したの以外にもいたみたいだわ」

「潜水艦、そういうのもあるのか……!」

「曙が気づかなかつたら艦隊が危なかったわ。近海はこれで本当に安全よ」

見れば、曙はいつものツンツンとした表情ではなく、どこか何かに怯えているような顔であった。服をギュツと握り締め、目尻に大粒の涙を浮かべている。

青年は曙と目線を合わせるようにしやがみ、できるだけ優しく微笑みかけた。それは、提督と艦娘という上下関係など関係なく、小さな子を慰める大人のように。

「曙?」

「——っ、な、何よっ」

「ありがとう。曙が皆を守ったんだ。本当にありがとう」

目線を合わせないようにしていた曙が、驚いた顔で青年を見る。

「潜水艦が現れたのは初めてだ。でも、曙が潜水艦を見つけてくれたから、今みんなは無事でいられるんだろう? 曙のおかげだ。曙が

艦隊にいてくれて、本当に良かったよ」

その言葉は曙にとって、酷く心を揺るがす。ただ当たり前のことを言われただけなのに。ただ自分がするべきことをしただけだということに。

どうしてこんなにも、涙が止まらないのか。

「う、うあ、うっ……」

「あ、曙?! ど、どこか怪我してる?!」

自分の方が重症のくせに人の心配をするなど、やはりこの提督はどこかおかしいのだろう。だがそのおかしささえも、今の曙にとって薬にはならない。

(ああ——そっか)

本当に望んだもの。心の隅で願ったこと。

それは——認められることだったのかもしれない。

よくやったな、と、褒めてもらうことだったのかもしれない。

が、涙が止まらない。青年に返事をしたいの言葉も出てこない。

今更素直になるのが恥ずかしくて。素直になっただけだからかわれるのも嫌で。

「私に十分感謝しなさい」

目元の涙を拭いながら、すぐに喉元に出てきた憎まれ口を叩く。

素直になれるかも知れないこの幻想郷で、少なくとももうしばらく

は、自分のわがままに青年を付き合わせることにしよう。

僅かばかり微笑んで、

「このクソ提督!」

少しばかりの親しみを込めながら。

青年は早苗と艦娘とを伴って人里に来ていた。にとりの用意した大型の保冷箱は優秀なようで、太陽がジリジリと照らす中で運んでも、中の魚は傷んでいない。

獲れた魚の半分は鎮守府と守矢神社へ運んだ。そして、もう半分はというと、

「みなさーん！ 守矢神社、守矢神社からお魚を届けに来ましたよー！」

人里にて、魚の配布を行うことになったのである。

『カミツレ、一つ相談があるんだが』

『はい、なんでしよう神奈子さん？』

『私と諏訪子が神であることはお前も知っているとと思うが、我々は信仰によって生かされている。幻想郷へ来たのは、外の世界で信仰を得られなくなったからだ』

『あ、以前話してましたね』

『今現在信仰を得ているのは、妖怪の山の一部の妖怪からのみ。紅魔館や鎮守府で私たちの力は見たと思うが、正直な所このままでは信仰が足りずに消えてしまう』

『消え……えっ？』

『そこで、だ。一つカミツレにも協力してもらいたい。艦娘たちに私たちが崇めろとは言わん。私たちが信仰を得るための手段を、お前なりに考えて欲しい』

ある日の神奈子との一幕。そう言われては、守矢神社にお世話になりっぱなしの青年としては断ることはできない。そもそも断るつもりもなかったが。

ただ、

『うーん、もう飲めない』

『ちよつと神奈子、重たい。私も頭痛いんだけど』

『いいだろ諏訪子ー。抱き枕の早苗が今出かけてるんだから、代わりにお前を抱く』

『はあー。……ま、たまにはいいかもね』

『何、本当か？ クンカクンカスーハーペロペロ……幼女はいい』

匂いがするな』

『キモ。やめてよ、加齢臭が感染るじゃん』

『お前も大して年は変わらんだろうに。あと加齢臭なんてしない、酒臭さだ』

『くつき。もう、さつきと寝るよ。二日酔い直さないと』

『ああ、そうだな。こんなとこ誰にも見せられ……』

『……………』

『……………』

『カ、カミツレ君、いつからいたの?』

神社に魚を届けた際に見た、あの柱のだらしない姿は、人々教えるわけにはいかないだろう。信者が減るどころか幻滅しかねない。

「海の幸だが!?! ありがてえありがてえ……」

「ええ。今後共、守矢神社をよろしくお願いします」

「海の魚つてのは美味いんでや? 捌き方なんで知らねど?」

「捌き方は今から——ほら、彼女が教えてくれますよ」

と、人里の中の人ばかりにて、用意されたステージに登るのは鳳翔。「鳳翔と申します。僭越ながら、今から魚の捌き方をお見せ致しますね」

ニツコリとした笑みを浮かべる鳳翔に、人だかりの中で頬を染める男が数名。そしてわかりやすい説明とともに、鳳翔は丁寧に魚を捌いていった。

「カミツレさん、どうですか?」

「まあ、かなり満足のいく結果になったんじゃないかな? 感触はいと思う」

その言葉に早苗は「良かったです」と息をつく。青年としても、これで守矢神社に少しでも恩が返せるならこれからも続けるつもりである。

加えて、

「守矢神社の人だっぺ? 魚もらって嬉しんだげども、オラ今は金なんがねっぺ?」

「ああいえ、今回はお代は結構です。元々僕らのことを知ってもらったためのものですし」

「んだげども……んだ、じゃあこれもらってぐれ」

魚の代わりに、野菜やら米やらをこれまた沢山もらったのである。魚から得られる利益としては十分ではないだろうか。

本来ならば人里の者に漁を任せる予定だったのだが、船の技術がないならば仕方ない。今後の艦娘の任務には、漁と魚の輸送は欠かせなくなりそうだ。

「おや、カミツレ。これは何の祭りかな？」

「あ、慧音さん。いえ、艦娘の皆と漁をしまして、人里の方に守矢神社や鎮守府のことを知ってもらおうのついでに、魚を配っているところですよ」

「ほう、魚か。確かに、海の魚は食べたことがないなあ」

「慧音さんにもお世話になりましたから、遠慮せずにもらってください」

他にも、

「おや、カミツレ。高速修復材を届けに来ただけ、何の騒ぎだい？」

「あ、てゐさん。ちょうど良かったです。永遠亭の方々の分の魚をお渡ししますね」

「あ、どうもこんにちは。この前の宴会では、幽々子様共々お見苦しいところをお見せしました」

「これはこれは。こちらこそ、うちの赤城がご迷惑をおかけしたようですよ……」

「ゆかりんは渡さん！　しかし魚は渡してもらおう！」

「は、はあ。どうぞどうぞ」

一通り配り終えたが、人里において、守矢神社と艦娘の名前は十分に知れ渡ったはずである。次回からは人里に魚の販売所を設ける予定のため、販売前の知名度向上としても十分だろう。

紅魔館には艦娘が届けた。残るは人里の郊外であるが、これは直接出向くしかない。

「さなちゃんは……」

「守矢神社、守矢神社でございます！　ありがとうございます！」

「忙しそうだから……えっと、白露と時雨、ついてきてくれるかな？」

近くを通りがかった二人を呼び止める。丁度手が空いていたらしく、青年は人を伴って人里の郊外へと向かった。

「それで提督。早苗とはどうなのさ？」

「あはは、いやーそれはちよつと、ね」

「とかなんとか言っちゃって、本当は好きなんでしょ？　でも、提督が一番好きなのは白露だよね！」

「こやつめ、ははは」

他愛もない話をしつつ、郊外にある民家にも魚を配り歩いていく。比較的好印象を持たれているようであり、青年としては満足のいく結果となった。

ところが、しばらく歩いていると、

「提督、森が見えてきたけど……」

「森、か。危ないから入らないようにしましょう。とりあえず、一旦引き返して……」

特に情報を持たない状態で森に入るのは危険であると判断し、青年は一度人里に引き返そうとしたところで、森の入口近くに民家のような家屋を発見する。

あの家で最後かな、と思いつつ近寄れば、建物には『香霖堂』の文字が。見当違いでないならば、どうやらここは何かのお店であるらしい。

「おや、初めて見る顔だね」

店内は少し煩雑に物が置かれていた。売り物とみられるが、その種類もモノもてんでバラバラである。

そして、人を迎えてくれたのは銀髪の男性。金色の瞳にメガネをか

け、大柄な身体に黒と青の和服を身に纏っている。

「あ、ど、どうも初めまして。茅野守連といます」

「ん？ これはご丁寧に、『香霖堂』の店主、森近霖之助だ」

「あれ、カミツレじゃんか」

「魔理沙、お知り合いかい？」

と、そこで聞き覚えのある声。霖之助から視線を移すと、店内に腰掛けていたのはボサボサの金髪を煌めかせる魔理沙であった。

「どうしたんだぜ。こんな埃っぽくてジメジメしたところに」

「え、あ、うん。実は……………」

「ははーん、なるほどな。こーりん、魚貰つとこうぜ」

「僕までもらっていいのかい？」

「はい、知ってもらうことが目的ですから」

魚を渡したところで椅子を勧められたので、少しばかり世間話をする五人。霖之助がお茶を持ってきてからは、本格的に話が盛り上がり始めた。

「ここはなんのお店なんです？」

「香霖堂と言って、しがない古道具屋だよ。幻想郷に流れ着いたものを主に取り扱っている」

「…………見れば確かに、ブラウン管テレビやら電子レンジやら、色々ありますね」

「あれは僕のお気に入りだね、残念ながら売り物じゃないんだ。まあ使えないんだけど」

「物好きですねえ」

「ああ。ところで、その口ぶりからするに、君は外の世界からやってきたのかな？」

「あ、はい。実は——」

キラリと、そのメガネが光ったような気がした。何を望んでいるのかは知らないが、隠すようなことでもないため青年は幻想入りした経緯を説明する。

「……………と、いうわけです。幻想郷で暮らしていくことを決めたのは、守矢神社と艦娘の皆、それから紫さんの後押しがあったからなん

ですよ」

「ほう、八雲紫の手引きで幻想郷にね。それで提督と」

「ええ、でもあの人は正直苦手です。何を考えてるのか全くわかりません」

「気が合うね、僕も同じ考えさ。よし、友人になろう」

「勿論歓迎ですが……そんな理由でいいんですか？」

聞けばこの霖之助という男性。言われなければ気付かなかったが、実は人間ではなく、妖怪とのハーフであるらしい。以前魔理沙の実家の道具店で修行をしていたらしく、そのためか魔理沙が幼い頃からの付き合いであるという。

湯呑に口をつけたところで、次は魔理沙が話しかけてきた。

「そっぴやお前、早苗とはどうなんだぜ？」

「どう、とは？」

「ん？ お前たち恋人同士じゃないのか？」

「ブツ——！」

「うわ、きたねっ！」

(どこで何を勘違いしたんだろう……)

覚えている限りでは、魔理沙が早苗と仲良くなりだしたのは、紅魔館での宴会でのお喋りからぐらいなものだが、そこで早苗は何を話したのだろうか。

「いや、間違っても僕ら恋人じゃないから……」

「えー、嘘だぜ！ 早苗、いつもお前の事しか話さないんだぜ？」

「そ、そう？ それは魔理沙ちゃんがその話しか覚えてないだけじゃないか？」

「なんだとテメエ！ で……ちよつと男心つてものを聞かせてくれよ、な？」

と、魔理沙は最後だけ青年にだけ聞き取れるかのような声で話す。

よく見れば魔理沙が霖之助の方をチラチラと見ているのは目に見えて分かり、頬すら染めてもいるのだが、残念ながら早苗が魔理沙たちに話した内容というのが気になって、青年がそれに気づくことはない。

「あ、聞き取れなかった。今なんて？」
「もういいぜ！」

気づいたときには、理由が分からず魔理沙が怒っているだけであった。

と、そこで更に、霖之助が足を組みながら口を開く。

「そういえば、最近気になる人ができてね」

「え、な、なんだってこーりん!？」

「この人なんだが……」

魔理沙が頬を染めて慌てているのを尻目に、霖之助は懐から何かを取り出した。が、今度は逆に、青年が目を見開くことになる。

白を基調とした巫女服のような服装。身にまとう大きな装備はその威圧感を物語るが、長門よりは凛々しさが抜け、どこか幼ささえ感じさせる女性——が描かれたカード。

「この子たちなんだけど」

「ちよつ、ま、ええっ!？」

「提督、あれ！」

「こーりん！ 二次元に恋したのかよ！ ……ってあれ？」

慌てていた魔理沙も冷静になったのか、人は揃って霖之助の持つ「4枚」のカードに目を向ける。

「特にこの比叡さんという子、なかなか活発そうな子で、好みといえば好みだ」

「そ、そうか、活発な子が好みか……へへへ」

再び話から逸れだした魔理沙は置いておき、青年は霖之助に向き合う。

「霖之助さん、その子達、僕の仲間です！」

「あ、やっぱりそうなのかい？ 軍艦であることと、過去に何があったかはわかったけど、それ以上どうしようもなくてね」

「……過去がわかった？」

「ん？ ああ、僕の能力は言わば、『道具の名前と用途が判る程度の能力』。道具自身が持つ記憶を読み取ることができるんだが……そちらの彼女達と同様にこの子達も『艦娘』であるというなら、道具呼ばわ

りは少々頂けないか」

「ええ、そうしてもらえると助かります。霖之助さん、お願いします。その子達を渡して頂けませんか？」

「唐突だね。うーん……」

霖之助が取り出したカードは、いずれも「戦艦」。長門が一人来ただけで、鎮守府近海を制圧できるほどの優位性を得られたのだ。

みすみすその力を、そして旧き仲間たちに会わせる機会を、見逃すわけにはいかない。

霖之助は少々考えた後、その語り口は淡々と、答える。

「これは売り物じゃない。僕も気に入っているからね」

「——っ、そこを、なんとか!」

「わざわざ無縁塚まで行って拾ってきたんだ。それ相応の苦労もあつて大切なわけで」

「……ダメ、なんですか? 僕に出来ることなら何でも——」

「——売り物じゃない大切なものだから、〃友人〃である君に差し上げることにしよう」

その時の霖之助の顔は忘れられない。年上の余裕たつぷりのような微笑みに、少しだけ意地の悪そうな表情。差し出されたカードは、輝いて見えた。

思わず青年は霖之助の手をとり、半ば感動で泣きそうになりながら霖之助を見上げた。

「霖之助さん、ありがとうございます! ありがとうございます!」

「おいおい、大げさだよ。落ち着きなさい」

「うわあ……こーりんもカミツレもそんな趣味があつたなんてな。……道理でこーりんが私になびかないわけだけだ」

「ん? 何か言つたかい魔理沙?」

「んにゃ、立派なおホモだちつて言つただけだ」

心静まったところで、改めて青年は霖之助からカードを受け取る。霖之助が早く比叡という少女を見たいと言つていたために、青年はその場で戦艦の少女人を同時に具現化させた。

「テートク！ 会える日を楽しみにしてました！」

それは、至高の柔らかさであった。最初はぶによんとした布が顔に当たったかと思えば、次の瞬間には顔全体が押しつぶされる。怪我をする？ と思いい顔を庇おうと一瞬思ったのだが、押しつぶしてきたその物体は、今度は顔を包むようにその形を変えたのである。

さらに襲い来るのは温かさ、人のぬくもり。目の前は真つ暗になったが、その温かささえあればいい。これが自分にやすらぎを与えてくれるのだから、と。

それが、この艦娘。金剛型戦艦一番艦、金剛に対する第一印象であった。

すなわち、やわらかくてあったかい。

その身を顕現させた瞬間に自身に飛びついてきた金剛は、随分とスキンシップの激しい艦娘であるらしい。

「これがテートクネー。会えて嬉しいデース！ アレー、元気がないデスカ？」

「もー!? もーもー!」

「テートクも嬉しい? Oh! 相思相愛ネー!」

両手両足を駆使して抱きつかれては、青年もひっぺがしうがな。突然のハグにも驚いているが、それよりも青年が慌てているのは、

(何これ窒息する! 苦しい! 助けて!?)

柔らかなモノが顔に押し付けられ、呼吸が出来なくなっていることであった。

(ああ——長門は本当に真面目だったんだなあ。同じ戦艦でもこんなに違うなんて)

「お姉さま、抱きつくなら私にしてください! さあどうぞ!」

と、その時、比叡が金剛を青年から引き剥がし、両手を広げてお迎える体制をとる。とるのが、

「むー、折角テートクに会えたというのに、比叡は分かかってません」

「そ、そんな……、私、お姉様に嫌われましたか!?!」

拗ねる金剛と涙目になる比叡。傍らでは霖之助が「比叡さんは男に興味はないのか……」と、落ち込む様子が見られる。

「お、お姉様たち落ち着いてください、ね?」

「そうですよ。提督の前なんですから、もう少し礼節をわきまえましょう」

榛名と霧島が、その場を宥める。この二人はまだ常識的な考えを持っているのだろうか、と思っただが、これだけイロモノの姉二人を抱えているのだ。きつと何かしら驚くべき特徴があるに違いない。

(なんてことはさておき。金剛型戦艦の金剛、比叡、榛名、霧島ね。皆立派に戦った艦なんだな)

ともかくこれで、戦艦が4人増えたわけである。戦力的な増強の度合いは、水雷戦隊がメインである現状からすれば計り知れないものとなるだろう。

おまけに、金剛型姉妹は戦艦としては比較的速力が高速な部類に入る。何かしら、便利に運用していくこともできそうである。

と、呑気にそんなことを考えていたその時。

『艦隊旗艦長門ヨリ提督へ。緊急事態発生』

「ん、長門? 『提督ヨリ長門へ。詳細ヲ求ム』」

『妖怪ノ山北西方面、及び近海北西方面ニ敵大規模艦隊ヲ発見。速ヤカナル指揮ヲ乞フ』

青年の思考に緊張が走った。それにいち早く気づいた霖之助が、自身へと声をかけてくれる。

「どうしたのかな?」

「妖怪の山、それと鎮守府近海の北西に深海棲艦が現れたそうです。対処に向かわなければなりません」

艦娘をカードに戻し、人里へ向かう策をひとまず青年は思いつく。人里の艦娘もカードに戻した後で、早苗に鎮守府まで空輸してもらえば時間は短縮できるはずであるが――。

「妖怪の山の北西……三途の川? 閻魔が黙ってないはずだが……」

「霖之助さん、どうしました？」

「……近道を教えようと思うが、どうだろうか？」

提案する霖之助の目は真面目そのもの。なにやら心当たりがあるのだろう。改めて青年は考え直し、無線に手を当てる。

『提督ヨリ鳳翔へ。現在地送レ』

『我ノ現在地人里。長門ヨリ報告アリ。現在撤収作業中』

『人里ノ艦隊ヲ率イテ、河川ヲ伝イ近海へ全速転進。早苗ヲ守矢神社へ帰投させ、二柱へノ伝令トセヨ』

『了解』

『提督ヨリ長門へ。鎮守府残留ノ艦隊ヲ送レ』

『赤城、夕張、第十八戦隊（天龍、龍田）、第七駆逐隊（隴、曙、漣、潮）ガ残留。現在ノ警戒航行ハ吹雪、及ビ叢雲』

『第十八戦隊ハ鎮守府ニ残留、残ル艦隊ハ近海北西方面ノ邀撃セヨ。人里カラノ援軍到着マデ持ち堪エルコト』

『心得テイル』

一通りの指示を終え、青年は無線から手を離す。これが正しい指揮なのかはわからない。だが、長門の反対がなかった以上、ひとまず納得するしかない。

カードに戻そうか悩んでいた人の艦娘を前にし、青年は口を開く。

「この六人で艦隊を組んでほしい。戦艦四人と護衛が二人でね」

「ちよつと待つネ。敵の航空戦力がきた場合はどうするデス？」

「魔理沙ちゃん、一緒に来てくれるかな？」

「いい加減ちゃん付けやめろよな。いいぜ、私だけでも何とかしてやる」

「……ナルホド、わかりまシタ。安心できそうデス」

ニカツと笑う魔理沙と青年とを見て、金剛は息をつく。記憶を見たのだろう、どうやら魔理沙の戦いぶりを楽しみにしているらしい。

「霖之助さん、近道を教えてください」

「北西……三途の川……無縁塚……。再思の道……あの死神がまたサボったのか？」

「霖之助さん？」

「……すまない、少し調べたいことがある。魔理沙、案内は頼めるかい？」

「おう、任せとけ！」

顎に手を当てて何かを考えこんでいる霖之助。

気にはなるものの、魔理沙の案内で、青年たちは突如現れた深海棲艦の元へ向かうこととなったのであった。

028 針は動き出す

空符『空母機動部隊』

——空母『赤城』

軽巡『夕張』

駆逐『吹雪』『叢雲』

狂喜『長門先生の遠足引率』

——戦艦『長門』

駆逐『隴』『曙』『漣』『潮』

『発、空母赤城。宛、戦艦長門。第一次航空攻撃完了、敵艦隊ハ空母ナシ、残存戦力ニ重巡一、軽巡二、駆逐三ヲ認ム』

『艦隊旗艦長門ヨリ赤城へ。見事ナリ、帰投後ニ秘蔵ノ菓子ヲクレテヤル。引キ続キ我ノ艦隊後方ニテ索敵ヲ密トシ、第二次攻撃ヲ敢行スベシ』

『約束！・長門サン、約束デスヨ！』

赤城からの報告を受け、長門は無線から手を離す。背後に追従する駆逐艦たちの表情を伺うが、流星は海軍の誇る水雷戦隊。肝が据わっているのか、怖気づいている様子はない。

「隴、怖くはないのか？ 敵の方が数は多いぞ。増援が来ないとも限らないし」

「数くらいどうってことありません。そもそも私たち、敵より味方が少ないのが常だったじゃないですか」

「ハハハ、それもそうだな」

「それに、長門さんがいてくれるんです。敵には空母も戦艦もいません。有利なのはこちらの方ですよ」

「嬉しいことを言ってくれ。その期待に応えねばなるまいな」

駆逐艦に頼りにされていることに胸の熱さを感じながら、長門は水平線の彼方へと視線を戻す。

（赤城は先制攻撃で駆逐三隻を撃沈……。流星、初代一航戦というベキか）

現在、長門が位置するのは鎮守府近海の北西方面。確保した制海権

を踏み越えない範囲に位置し、警戒を行っているとある。赤城の艦隊はその後方、鎮守府の存在する諏訪湖から流れる川が海に流出する地点にて、ひっきりなしに航空機の離発艦を行っている。

鎮守府残存戦力に対し、倍以上の数の敵が鎮守府の北西には確認された。しかし半数が艦隊から分離し、現在向かってきているのが赤城の確認した戦力。

残る半数も気になるものの、長門はひとまず目前に迫る脅威に対峙する。

ふと思えば、青年と出会って早くも一週間を迎えようとしている。だがこの一週間は、自分にとって忘れられない一週間となるだろう。

(着任した時は、なんと情けない御仁かと思つたがなあ……)

青年を初めて目にしたときは忘れようがない。覚悟という言葉で締まりのない瞳、他者の視線を気にするだけの物腰、拳句の果てには周囲に押し負けて追い詰められた過去。なんと情けない人物だろうか、と。

果たしてこんな者に、誇りとまで呼ばれた我が身を預けることはできるのか、自身を指揮する信用に足りるのか、破壊をもたらす力を扱う覚悟があるのか。

だが、接してみてもわかる。その記憶故に人との距離を測りかねていること、その経験故に優しさを知っていること、その過去故に気骨を太くしたこと。

そしてそれは、ちよつとしたことで壊れてしまいそうなほどに脆い精神力が支えていることを——悟らざるを得なかった。

「赤城が数を減らしてくれた。これより我が艦隊は、残存戦力の掃討を行う」

「残存の掃討って言っても、私たちより多いじゃないですかヤダー」

「そう言うな。頼りがいのある駆逐隊が護衛についてくれる。そう思うだけで私としては百人力だ。重巡は任せてもらおうか」

「フ……フン、どうせ駆逐艦を狙うんでしょ？」

「……ちよろちよろしていると気になってしまふんだよ」

それに気づいたのは最近のことである。

『長門って、優先的に駆逐艦を狙うんだねえ』

しかも、青年に指摘されてのこと。

戦艦としては最も警戒すべきは水面下の魚雷であるが、無意識にそれを恐れて接近する駆逐艦を狙ってしまったているのだろう。はたまた別に理由があるのかもしれないが。

水平線上に敵艦隊を視認する。それを駆逐艦に伝え、長門は艤装を稼働させた。

整備に異常なし。天候は晴天なり。心身ともにこれ以上なく健常である。

(心配症な提督よ、不安は捨てろ。この長門、二度は沈まんさ)

自信に満ち溢れる笑みを浮かべ、長門は声を張り上げた。

「よし！ 艦隊、この長門に続け！」

鎮守府の門番の任を一時的に解かれ、美鈴は守矢神社へ向かっていった。守矢神社へ向かうと言っても直線的に向かったわけではなく、一度紅魔館を経由して。

門番の任を解かれたとは言っても、クビになったわけではない。仮にクビになったとしても、また紅魔館に戻ればいいだけの話である。

(そう、戻れば……。……。ちゃんと戻れますよね？ あれ、門番なしでも紅魔館は運営できてるってことは、私って必要かな？)

鎮守府の門番を離れたのは理由あつてのことである。繰り返すが、理由あつてのこと。決して仲間外れにされたなどと思つてはいない。

その理由は、少し前にさかのぼる。

『おう美鈴！ 俺と龍田は鎮守府に残留だつてよ！』

『仕方ないわ天龍ちゃん、私たちは旧式なんだから』

『何言つてんだ、世界水準軽く超えてんだぜ！ それに、残留つて鎮守

府防衛を任されたってことだろ？ たった二隻に任せるって、つまり俺たち頼りにされてるってことじゃねえか！』

『はいはい天龍ちゃん賢いわねーその通りよー』

『つーわけで美鈴、長門の指示を伝えるぜ！ ここは俺たちに任せて先に行け！』

『美鈴ちゃん、私たちが鎮守府にいるから、今のうちに紅魔館にこのことを伝えてきてくれるう？ 増援もー、いると嬉しいわあ』

『増援つつても、海の方じゃないぜ！ 守矢神社の防衛だ！ 妖怪の山方面はどうも……深海化した連中もいるみたいだし』

『怪我しないようにね、美鈴ちゃん？』

(お二人共キャラクターが濃ゆいですね……。まあ、でも)

隣を共に行く咲夜を見れば、ひとまず自分の役目は果たせたと云ってもいいだろう。

「わざわざ連絡助かったわ、美鈴」

「いえいえ。咲夜さんこそ、忙しいのに来てもらって……」

「正直な所あなたに丸投げするつもり満々だったけれど、そういうわけにもいかないのよ」

「苦笑せざるを得ない言葉ですが……そう言いますと？」

「紅魔館で起きた深海化の異変の時、守矢神社は妖怪の山に援軍を求めたのよ。そして天狗と河童がそれぞれ参戦。守矢神社はその借りを返すために、守矢神社に対して借りがある私たちが援軍として呼んだ、と考えるべきでしょうね」

「ちよつと待ってください、まだ神社には何も連絡がいつてないはずですよ」

「これを指示した人物の手腕、と見るべきかしら。私たちとしても手を抜くわけにはいかないから、なかなかどうして頭が回るじゃない。カミツレ？」

「いいえ。戦艦長門です」

青年からの話を聞く限りでは、長門という艦娘は外の世界で広く知られてゐた名前であるらしい。海軍の中でも有数の立場、誉れ高

き栄光をその身体に背負っていたそうだ。

軍を代表する者が乗艦し、長門のみならず艦隊全体の指揮を執る。その影響もあつて『長門』という艦娘が形を成しているというなら、少なくとも長門は、寝て起きて身体を動かしてご飯を食べるのが楽しみの自分より、余程賢いのだろう。

(我々では、そういうのはお嬢様が考えることですからねえ)

ひとまず、守矢神社としては妖怪の山と紅魔館との間に抱える貸し借りはこれで帳消しとなる。だが貸し借りが消えても、レミリアのことである。守矢神社との関係は続けるのだろう。自分という門番を差し出して。

(慣れたからいいんですよ？ ご飯も美味しいですし、皆さん優しいです)

門番の仕事中に眠っていれば怒られるのは、どこに行っても同じである。

それはそうと、守矢神社と鎮守府は同一の勢力と考えていいのだろうか。それともそれぞれ独立していると考えた方がいいのだろうか。

咲夜の話では、紅魔館に届けられた魚は“守矢神社”からのものであるとのことである。それを考えると同一の勢力と考えてよさそうであるが――。

(両方を知る私としては、複雑な気持ちですねえ)

その気持ちはおそらく、独立していると考えているからこそ。

だが、そこで結ばれる、見えない確かな繋がりというものは、当人同士たちでしかわかりえないことなのだろう。それを知るつもりは美鈴にはないが……。

(いや、あるいはそれを知ることができれば――?)

守矢神社と鎮守府とを繋ぐ何かしらの理由こそが。

レミリアの渴きを満たすモノであるのかもしれない。

守矢神社に到着し、二柱が境内でのんびりと日なたぼっこしているのを見つける。

「おお、遅かったな。来ると思っていた」

「実はですね神奈子さん、妖怪の山の北西に——あれ？」

「気づかないとでも思ったの？ 怪しい気配は感じてるし、天狗たちから救援要請も来てるから、君たちを代わりに戦わせようと待ってたの」

あるいは、長門という艦娘はここまで予想していたのだろうか。仮に青年に話を通さず、柱にも知らせず指示を出したとなれば身勝手なものであるが、事態がこうなることを予測していたのだとすれば——
「手のひらの上、つてわけね」

「どうせカミツレ君の指示じゃないんだろけどね。カミツレ君がそこまで考えられるんだったら、神奈子おばさんが感激して泣いちゃうよ」

「私が泣くんかい。あとお姉さんと呼べ諏訪子おばさん」

「何、また諏訪大戦する？ ん？」

「あ？ 上等だ、相撲とるか？」

呆れにも似た溜息を吐いた咲夜が、美鈴を見つめる。

「じゃ、行きましようか美鈴」

「頑張つてねー。私たちはここでお日様に当たって二日酔いを治すから」

「うう……はい」

あまりにも青年との扱いの差が酷いなあ、などと思いつつ美鈴はトポトポと歩き出す。

そんな時であった。

「か、神奈子様諏訪子様、ただいま帰りました！ 超特急で飛んできましたよ！」

「ありや、早苗？ カミツレ君と一緒にいたんじゃないの？」

「へ？ わ、私は鳳翔さん伝いに、カミツレさんに神社に戻るよう言われたんですが」

戸惑う両者。美鈴も傍から聞いていて、何かがおかしいとは気づいていた。何がおかしいのかまでは、残念ながら自身の頭ではわからない。

「えっと、カミツレさんからお二人にお願いです。妖怪の山北西に現れた深海棲艦に対応して欲しいとのことですよ」

「カミツレが……そう言ったんだね？」

「はい、間違いないですよ！」

「読みが外れたね神奈子……。カミツレ君は私たちを頼らないと思つてたよ」

「全くだ。ここに戦力を割く必要がないのはある意味正しいがな」

「やれやれ、とそれぞれ表情を歪める神々。だが、それにしては嬉しそうに見えるのは地震の気のせいなのだろうか。」

「さて、天狗たちにお礼を返しにいきますか」

「天狗たちが紅魔館の残党狩りにかけた時間は？」

「大体20分かな」

「我々は10分で終わらせるぞ」

「転々と話がつれたが、頼もしい人物たちが味方に加わることを知り、美鈴は一つ息をつく。だが、安心したのも束の間、美鈴はやはり同様の疑問を抱くことになる。」

「時を操る咲夜に奇跡を操る早苗、言わずもがな存在そのものが天変地異クラスの神奈子と諏訪子が、妖怪の山の深海棲艦征伐に向かうのだ。」

（あれ、これ私って必要かな？）

かくして、戦場である北西へと、一行は移動を始める。

「比叡さん、その、あのね！」

「比叡、その……」

「私は本当に気にしていませんから！ さあ、行きましょう！」

魔法の森を流れる小さな川を移動する艦隊の中で、白露と時雨がおずおずと話しかけるのだが、比叡が笑いながら流しているのを見て、青年は一つ息をつく。

偶然にも、人里の外に連れてきた白露と時雨は、戦艦比叡の最期に関わる艦であった。青葉のように何らかのしがらみが残っているな

らどうしたものかと考えていたが、どうやらその心配は杞憂に終わっていたらしい。

そんな姿をのんびりと見ている青年はというと、

「おいカミツレ、体調は大丈夫か？ 私もホントは魔法の森なんざ飛びたくないが、早く抜けるためだ。我慢して欲しいんだぜ」

「ああうん、さっきの薬が効いたみたいだから、森の影響はもうなさそう」

魔理沙の箒に、一緒になって跨っていた。ただ、好きで箒に乗っているわけではない。魔法の森に入った途端に気分が悪くなつたために、仕方なくである。魔法の森は人間には悪影響を及ぼすとのことだが、艦娘に影響がないだけでも青年としてはありがたい。

ただ、箒に跨るといふのは存外に辛いものがある。主に股間的な意味で。

とはいえ、事態が事態である。青年も状況を把握するのに必死であった。

（鎮守府近海は交戦中。援軍の艦隊が到着するまでは耐えられる。気になるのは妖怪の山か。さなちゃんに伝言を頼んだけど、神奈子さんたちは動いてくれるかな？）

妖怪の山方面が最も戦力を割きにくいのである。陸地を移動するとなると艦娘では時間もかかるため、神社の神の人に対応してもらうのが最も望ましい。

自分の言葉で動いてくれるのだろうか。あるいは、自分という存在を、確かなものとして見てもらえているのだろうか。

連絡手段がない、という点が一番不安なのだが。

（あ、そういえば長門に妖怪の山方面の対応のこと伝えてなかった。さなちゃんは無線持ってないし、今からでも伝えとこうか）

と、長門に向けて連絡を取ろうと思ったその時である。

「——ッ！ 危ねえ！」

「おわっ！」

魔理沙が急旋回したため、青年は振り落とされないように箒をしつかりと掴む。瞬間、髪を撫でて空を割き、すれ違ったのは——巨大な砲弾。

心の底から精神が冷えた時に、遅れて聞こえてきたのはとてつもない轟音。空気すら震え、腹の底がひっくり返りそうなほどの。

そして、遠くに見える、かの者の正体を青年は目にする。

「駆逐艦と……、戦……艦？」

深海化したレミアアやフランドールを目にした時のような恐怖。

あれが普通の深海棲艦ではない、というのは青年にだってわかる。肌の白い、美しい人型の女性というところまではいい。

その背後に控える、女性の数倍の体格を持ち屈強な四足で立つ怪物が問題である。威圧的で不気味で、筋骨隆々とした骨格。それ単独で深海棲艦なのかとも思ったが、違う。あれは彼女の艦装なのだ。

（名前を付けるなら——戦艦棲姫）

戦艦の中でも、とびきりの脅威となる存在だろう。

「魔理沙ちゃん、高度を下げて森の中に紛れて」

「なんだあいつ、とんでもねえ化物ってことは私にもわかるぜ？」

「わからない。ただ、艦娘じゃない生身の人間がああ攻撃を受けたら、間違いなく死ぬと思う。艦娘……装甲の厚い戦艦でも危ういかも」

魔理沙は舌打ちしつつも、素直に言うことを聞いてくれた。森の中へ入った時に、霧島から通信が入る。

『敵ノ詳細ヲ求ム。水偵ハ発艦準備中』

『戦艦一、赤ノ駆逐一。魔法ノ森ヲ流レル川伝イニ移動ヲ確認』

『了解。旗艦金剛ハ迎撃ヲ望ムトノコト』

その電文を受け取って、青年は金剛の艦隊に目を向ける。そこには、必死に手を振って笑顔を向けてくれる金剛の姿があった。

戦艦と思しき謎の敵は脅威には違いない。しかし、戦艦が列するのはこちらとて同じ。否、こちらには戦艦が四人もいるのだ。心配することはないだろう。

『金剛ヨリ愛スル提督へ。敵艦隊見ユ、全艦砲塔指向中』

『愛ハ兎モ角、交戦ヲ許可スル』

『照準ヨシ』

最も攻撃力を活かせる単縦陣で進む金剛たち。その中で、金剛型四人の主砲が、一斉に火を吹いた。

魔法の森の木々が揺れる。爆音が耳をつんざいてくれる。木の隙間を縫うようにして放たれた砲弾は一度空に抜け、放物線を描いて敵艦隊の付近へと着弾した。

『全艦初弾夾叉。比叡、榛名、霧島へ。帰投後才仕置キノ用意アリ』

「初弾で照準バツチり合わせたってことじゃん。十分すごいと思うんだけど……」

外したことに對して、金剛が悔しそうな顔をしていた。青年からも見えたが、砲弾は全て敵戦艦の周りを取り囲むように綺麗に着弾。水しぶきが盛大に跳ね上がり、敵の姿が見えなくなるほどであった。が、水しぶきを破って現れた駆逐艦が、その赤い瞳を光らせる。

毒符『憂鬱の毒』

赤い駆逐八級の放った弾幕が、森中に放射状にばら撒かれた。直線的な小さな弾幕が進路上の草を押しつぶし、頭ほどの大きさの弾幕が木々を薙ぎ倒していく。

そのほとんどが森に阻まれて減衰し、到達したとしても金剛たち戦艦の装甲を貫くには至らない。

しかし、

『正体不明ノ攻撃。艦隊ニ被害ナシ』

「カミツレ、あんまり吸い込むな！　ようやくわかったぜ、これはメデイスンの毒だ！」

どす黒い紫色の煙が漂い、森を包んでいく。艦娘たちは平気であるようだが、青年や魔理沙はそうもいかない。

仕方なく、魔理沙の判断によりその場を離れることになるのだが――

「——アマイワヨ」

どこからか、声が聞こえた気がした。底冷えする、心臓を握られているような悪寒を伴う声。

そして、その発生源はというと——

「塵ト化シナサイ」

今しがた“極太の光線”を艦隊に向けて放った、戦艦のものであった。

「ふむ、迎撃には成功したな」

「な、長門さん、カッコイイです……」

「何、そうか？ そうだろう！ 私は長門だからな！」

重巡を基幹とする艦隊の迎撃には成功した。残る半分の敵艦隊の行方が気にはなるものの、長門はひとまずそこで息を休める。

『長門ヨリ赤城へ。航空偵察ヲ要請スル』

『既ニ発艦済デアル』

『流石ダ。我々モ良ク食ベル分、働カクテハナラン』

『我ノ本懐、幻想郷ノ美食追求ニアリ。敗北ハ許サレナイ』

(全く……ほどほどにしておけよ？ フッフ)

無線越しの冗談はさておき。

一つ気になることがあった。紅魔館と守矢神社へ向かわせた美鈴のことである。無事にたどり着けたのなら、妖怪の山の迎撃に問題はないはずであるが。

(独断ではあるが……現状では紅魔館の力を借りるのが最善だ。守矢の神々もまだ本調子ではないようだし)

その叱りはいくらでも受けるつもりである。勝手な命令を出してしまったことは当然のこと、青年に確かな知識を授けようと思ったにも関わらず、間に合わなかった自分の責任である。

その罰はしかと、鎮守府の防衛という任を務めることで果たすつもりだ。

(ふふふ。未熟であるならば、共に苦心するのもよからう。あの提督が、どのように成長を遂げてくれるか今から楽しみだ)

晴れ渡る空を見上げ、照らす太陽に長門は手をかざす。

今も昔も変わらない、この青き空。どこの国でも世界でも変わらない、美しい空。

望んだものは今度こそ手に入れよう。弱々しくも力強く歩む、青年のためにも。

「——ん？」

異変に気づいたのは、空を見上げて5分後のこと。その青空の中に、まとまりとして動く多数の黒い点を発見したことである。

襲い来るのは、深海棲艦のものと思われる航空機たち——。

「輪形陣に移行！ 赤城はなにをしている!?!」

「赤城さんと連絡取れません!」

「対空戦闘用意！ 我三式弾装填中!」

長門を中心とし、その前後左右を第七駆逐隊が囲み、対空戦闘を行う。主砲で三式弾を発射するのだが、残念ながら撃破に至らない。

「敵機はどれだけいる!?!」

「概算で60、攻撃機はおよそ30機よ!」

「赤城！ 応答せよ赤城!」

無線で呼びかけた瞬間、対空火器の雨をくぐり抜けて接近してきたのは——爆撃機。

「長門さん、敵機直上!」

「ちいつ、間に合わん!」

急降下爆撃を仕掛ける敵機を撃墜、した時には遅かった。既に爆弾は投下されており、それは吸い込まれるように長門へと直撃した。

刹那、破片をまとう閃光。爆風が身を包み、粉塵が己にまとわりつく。

「長門型の装甲は伊達ではない、その程度か!」

だが、その損傷は小破に収まった。対空火器の一部を破壊された程度であり、長門自身はまだまだ健在である。

その時、ようやく赤城からの無線が届く。

『我赤城。敵航空隊ト接敵、奮闘スルモ戦闘機網ヲ抜ケラレ、航空攻撃ニヨリ中破ス』

「ぬ、赤城!?! 『貴様偵察ハドウシタ!』」

『敵八空母二隻ヲ伴イ、戦艦一、重巡一、駆逐二ヲ主力トスル艦隊。単

独航行中ノ戦艦ヲ発見、即座ニ攻撃セント氣ヲ取ラレタ瞬間ニ強襲ヲ受ク』

「戦艦を囚にした……ちつ、敵も制海権を取り返そうと躍起になっているわけだ」

『我ノ戦闘機発艦済。然レド攻撃隊ノ発艦ハ不可』

空母はそのデリケートな機装から、少しの損傷でも航空機の発着艦に支障が出てしまう。ましてや、中破してしまえば戦闘の続行は難しい。甲板に大穴が空いているような状況で、発艦など不可能なのだから。

尚も攻撃を続ける敵の航空機。対空戦闘による撃墜にも限界があり、赤城の戦闘機も奮戦しているが如何せん数が単純に倍は存在するのである。

徐々に劣勢になり始める長門の艦隊。このまま敗北しては、折角取り返した制海権も、全て水の泡になってしまう。

（くっ、ここまでだといふのか？ 諦めんど、私は諦めん。例えこの身が沈もうとも、鎮守府だけは守って——）

再び、猛火をくぐり抜ける敵攻撃機。

自身へ近づいてくる雷撃機は、徐々にその高度を落としていき——

『我ノ航空隊、敵航空隊ヲ捕捉。掃討開始ス』

鳳翔の戦闘機隊に、ほんの一瞬で沈められてしまった。

火を吹いて、粉々になって海へ崩れゆく敵雷撃機。一機ではない、小隊を編成していたと思しき三機が、瞬きをする間にも、である。

『我鳳翔、現在地ハ鎮守府近海東南東。航空支援ヲ実施ス。赤城ハ指導ノ必要アリ』

「鳳翔……、感謝する！」

先程までの弱腰から一転。長門は精神を奮い立たせ、駆逐隊へ指示を飛ばした。

「単縦陣をとれ！ 敵主力艦隊へ切り込みをかける！」

最も攻撃力を活かすことのできる単縦陣へと移行。赤城が見たと

いう囀の戦艦のいる方向へと全速力で駆ける。

(戦艦は足が遅い。だがこの長門、危機とあらば機関を焼き焦がそうと駆けるのみよ!)

駆逐艦も同様の速力で追従し、少し海を駆けたところで発見するは、単独で航行する敵の戦艦。既に敵は砲撃体勢に入っており、おそらくこのまま相対すればその砲は間違いなく発射されるだろう。

だが、

「ビッグセブンの力、侮るなよ!」

戦艦同士で砲撃し合うには少々近すぎる距離。その距離で放たれた敵戦艦の砲撃を文字通り「弾き返し」、お返しとばかりに、長門の主砲八門が劫火を上げる。

速度を落とさず、更に接近する。長門の放った主砲は狙いもそこそこ、発全てが命中し、敵戦艦は瞬く間に沈んでしまった。

「やっぱり戦艦は頼りになります。あれだけ苦戦した戦艦をあつさりと……」

「次、いくぞー!」

戦艦を撃破した地点にも航空機が来襲するが、鳳翔の戦闘機がそれをあつさりと撃墜する。加えて、先ほどまでの地点と現在の地点とで、それぞれ敵機がやってきた方角を計算したならば――

「――ツ、いたぞー! 空母二、重巡一、駆逐二! 赤城の吊い合戦だ!」

「あれ、赤城さん沈んじゃったの?」

「長門なりのジョークでしょ、面白くないけど」

航空機が迂回していないなら、自ずと空母の位置も知れようというもの。残る半数の敵艦隊を発見する。

「駆逐隊は前へ! 頼りにしている!」

「了解! 皆行くよー!」

まだまだ長門は速度を落とさない。そして、背後の駆逐隊は臆を先頭に更に速度を上げる。

先行する駆逐隊を援護するように、重巡を狙う長門。先ほどに比べ距離があるものの、八門の主砲は敵を逃さない。一度の一斉射にて、重巡をあつさり撃破した。

近づく駆逐隊と、それに対応して距離を詰める駆逐八級。上空からの航空攻撃は鳳翔に対応を任せ、駆逐隊は恐れずに突っ込んでいく。砲撃、砲撃、砲撃。目標を集中して狙うことで確実に仕留め、駆逐隊は残る一隻に主砲を向ける。

だが、駆逐八級は第七駆逐隊を無視し、長門に向けて魚雷発射の体勢を取っていた。

主砲は装填中。対空戦闘は継続中。迫り来る駆逐八級に長門は――

「我々の勝ちさ。悪く思うなよ」

あらん限りの力を振り絞り、拳をその凶体へ向けて叩きつけた。

ひしゃげて、海へ没する敵駆逐艦。

駆逐隊が空母に向けて魚雷を、鳳翔雷撃隊がもう一隻に向けて航空魚雷を放ったのを見て、長門はようやくその速度を落としたのであった。

(フツ、いい仕事をしてしまったな)

駆逐艦が苦笑しているのには全く気付かなかった。

「あれは……確か射命丸さん？ 射命丸さんの気配に一番近いですね」

「もう一人は姫海棠はたてという天狗です。最も、我々天狗からすれば、あの姿は嘆かわしいにもほどがありませんが」

守矢神社より少々移動した地点にて、美鈴は山の麓付近で行われている戦闘を遠巻きに眺めていた。神奈子、諏訪子、早苗、咲夜、それから情報を伝えに来た犬走椋が集まり頭を突き合わせる。

呆れ顔で、神奈子が問う。

「で、なんであいつらはああなった？」

「はたてさんが『念写をする程度の能力』により、三途の川付近に深海棲艦を発見したんです。それを聞いた文さんがはたてさんを連れて三途の川に向かったんですが、あとはご覧の有様でして」

「ミイラ取りがミイラになったのね。うちの紅魔館みたいに原因不明ならまだ良かったのに」

「お恥ずかしい限りです」

しかし、厄介なのはその能力である。見た目からしても普通の深海棲艦とはどこか異なり、単純な戦闘能力も十分に強いのであるが、「文さんの能力は……正直我々では手に負えません。しかも、敵のコウクウキというのが厄介で、文さんの能力で邪魔を受けたところで攻撃されてしまいます」

『風を操る程度の能力』か。幻想郷最速との名も伊達ではないようだな。明らかに他の個体に比べて速度が違いすぎる」

現在戦闘しているのは、妖怪の山の天狗たちと深海化した文・はたて率いる深海棲艦。彼女たちは麓の川を移動しているのだが、文と思しき個体は風を操り、自身の速度を向上させたり天狗の飛行を阻害したりと厄介極まりない。

（んー、二人共“クチクカン”のようですね。にしては、他のクチクカンに比べて姿かたちが異なるようですが。性能も高そうですね。カミツレさんに聞いた通りの命名基準なら、“クチクセイキ”でしょうか）

ともかく、目に見えて天狗側が不利であることは、まず間違いない。（でもこれまでの事例を考えても、深海化すると空を飛べなくなるというのが救いですねえ。あれで飛ばれたら、私の弾幕じゃそれこそ手出しできませんよ）

例えば、文。いや、文に限らずはたてもなのだが。

天狗は空を飛ぶことが得意である。文に至ってはその能力により幻想郷最速の名を欲しいままにしているのだが、深海化により翼をもがれたことは、不幸中の幸いだったといえよう。

深海化は確かに脅威的である。だが、その特徴と功罪を把握し、的確な対峙策を取れるのであれば、それほど怖い相手ではなさそうだ。相手にもよるだろうが。

「さて。じゃあ神奈子、取り巻きをお願いね」

「美味しいところだけ持って行く気か？」

「紅魔館で散々暴れたんでしょ？ 今度は見せ場譲ってよ」

「仕方あるまい」

諏訪子と神奈子の駄弁りが終わり、作戦が決まる。

早苗と咲夜が深海化した文・はたてを足止めする。美鈴・椀はその他の深海棲艦と戦闘し、それぞれ諏訪子と神奈子がタイミングを図ってスペルカードを使用するという流れである。

（作戦も何も……割と皆さんパワーで押せ押せですね）

航空機については、それぞれ勝手に自分で潰せということである。なんとも自分勝手であるが、このアクの強いメンツばかりでは連携など期待できないため、ある意味では正しいのかもしれない。

などと苦笑しているうちに、戦闘は始まった。襲い来る敵航空機を、空中にいる早苗と咲夜が弾幕で撃墜し、その足で一直線に体の駆逐艦の元へと向かう。

連写『ラピッドショット』

弾幕が放射状に放たれる。ただでさえ深海化によって通常の弾幕が通りにくくなっているというのに、その敵が逆に弾幕を飛ばしてくるとなれば、

（確かにこれは厄介ですねえ。こんな状態の私やレミアお嬢様、妹様とも戦ったって、艦娘さんたちはどれほど苦労したんでしょうか）
妖怪の山の木々を吹き飛ばす弾幕をかくぐり、早苗と咲夜がそれぞれ駆逐艦の元へ達する。流れ弾を回避した美鈴と椀も、残る敵艦隊へとたどり着いた。

「美鈴さん！ まずは厄介なクウボという敵を倒します！」

「任せてくださいー！」

軽空母と重巡がそれぞれ二隻ずつ。護衛についている重巡の砲撃を回避し、美鈴は軽空母の懐へと呼吸をするかのごとく距離を詰めた。

視線を交わせるほどの至近距離で、円を成す弾幕が回転しながら襲いゆく。

しかし、

(……ははあ、これが装甲ですか。スペルカードルールがあつてないようなものですね)

軽空母は命中した弾幕のおよそ半数を弾き返していた。直撃させなくてもこれでは、弾幕などまるで役に立たないではないかと。

「なら、私もルールを破りましょう」

弾幕の効果は、軽空母を小破させ、僅かに怯ませた程度に留まる。しかし美鈴はそこから更に距離を詰め――

「破アツ――！」

軽空母の艦載機が放出される部位を、気を込めて“力いっぱい”殴りつけた。

瞬間、軽空母は爆発。同時に美鈴は咄嗟に後退し、その爆発から逃れる。見れば、その放出口は完全に叩き壊され、骸しか残っていないかった。

チラリと楯を見れば、盾で重巡を押さえつけながら、軽空母が発艦させている航空機を発艦した先から斬り落とすのが目に入る。

「あっはっはっはっ！ お前たちよくやった！」

神祭『エクスパンデッド・オンバシラ』

上空から巨大な光の柱が落下してきたのを見て、美鈴と楯は退避する。刹那――軽空母と重巡合わせて四隻が足を止めている場所へ、“その面を押しつぶす”ように御柱が降り注いだ。

叩き潰された深海棲艦がどうなったかは、考える余地もないだろう。

そして、

「文さん、目を覚ましてください！——って速い！」

「早苗、足を止めるだけでいいわ」

「むむむ、それなら！」

既に咲夜は、ナイフの波状攻撃によりはたてを地面に叩きつけていた。

「私も負けてはいられません！」

星形の弾幕を展開。その中心に駆逐を据えるように弾幕を広げ、まるで牢獄のように逃れられない包囲を形成する。

駆逐艦も迂闊に被弾することを避けるためか、一瞬だけその動きが完全に止まった。

「早苗、やればできるじゃん」

開宴『二拝二拍一拝』

無数に連なる細長い針状の光線と、大小合わせて百は下らない弾幕が、囚われた駆逐艦二隻へ向けて一斉に放たれた。

被弾を避けることはできないのか、駆逐艦たちはその場に立ち尽くしたまま弾幕が命中し、水煙が立ち込める。

「ま、こんなもんだよ」

宙に浮いていた諏訪子が、両手をはたきながら降りてくる。

「ここまですごいとは……正直私も驚いています。こうもあっさり……」

感嘆の呟きを漏らす椋。無理もない。神奈子と諏訪子の力を知っている美鈴でさえも、驚きを隠せないのだ。

最低限のスペルカードのみで、天狗達が手こずっていた敵艦隊を壊滅させてしまった手腕、力量、無駄のなさ。

美鈴もその目にしかと焼き付けた。守矢神社は、間違いなく敵にするべきではない。

諏訪子と神奈子は、共に地上で互のスペルカードについて批判し合っていた。美しくない、芸術性がない、男に媚びている、耳にするのも奇妙な言葉ばかり。

そんな中、未だに蠢く影が——一つ。

「本気で掛カッテキナサイ！」

水煙舞うクレーターより爆発。そこから目に捉えるのも難しい速度で飛び出したのは——深海化した文と思われる駆逐艦。

その針路は、スペルカードを放った諏訪子へ向けられ、猛然と加速しており——

疾風『風神少女』

諏訪子に迫るその中で、駆逐艦はスペルカードを発動させた。

発動させたその瞬間——

「出来ると思って?..」

瞬間移動したように見えた咲夜が駆逐艦の目の前に立ち、その喉元へとナイフを突き立てる。

崩れ落ちる駆逐艦。その手はひたすらに諏訪子へ伸びているものの、諏訪子は一瞥もせず。咲夜と美鈴とを見てただ一言笑顔で呟く。

「紅魔館を呼んだのは正解だったかもね」

かくして妖怪の山方面の戦闘は、守矢の神々が参戦後、およそ5分でその幕を閉じたのである。

守矢の神々だけでも余裕だったにもかかわらず、紅魔館からの援軍が参加したことによって、敵艦隊との大幅な戦力差が生まれていたことは言うまでもない。

敵戦艦の放った極大の光線は、魔法の森の地形を変えながら味方艦隊へと迫っていた。

勿論その目標は——青年の艦隊。

「よけ——！」

『全艦最大戦速！ 高速戦艦ハ伊達ジヤナイネ！』

青年は顔から血の気が引いていくのを感じていたが、無線越しの金剛の打電には闘志は失われていない。

艦隊は最大速度で光線の射線上から逃れた。戦艦は通常、速度が遅いものだが、金剛型姉妹の速度は違う。一時的であれば、駆逐艦と共に高速艦隊運動を行うことすら可能なのだから。

艦隊の逃れた地点。極太の光線は地を抉り、木々を吹き飛ばし、万物あらゆる存在を否定するかのごとく通過していく。通過した後には、何も残らなかった。

その様子を見て魔理沙が露骨に、それはもう露骨に表情を歪める。

「うええ……まさかとは思ったけど、幽香かよ……」

「幽香？」

「風見幽香。『花を操る程度の能力』を持つ妖怪だぜ。ただ、あいつの一番の恐ろしさはスペルカードじゃない。純粋に肉体の能力が高過ぎることだ」

今の光線もスペルカードではなく、ただの弾幕の一つ。加えて、そのような人物が深海化して強力な艦種である戦艦になっていると。

（勝ち目……あるの？）

青年が指示を一つ出せば、艦隊は撤退してくれるだろう。だが——

『テートク。撤退ハ許サナイネ』

「……でも」

『私モ自分ガ低速艦デアレバ撤退シテイマス。多少ノ被害ハ覚悟ノ上。デモ、高速戦艦部隊ナラ、アレノ相手ハ十分デキマス』

「ああ——もう、わかったよ！ 『金剛ニ判断ヲ委ネル』！」

『貴方ニ愛ト感謝ヲ』

そして、未だに健在である戦艦に対し、艦隊は動き出した。

金剛と榛名と白露、比叡と霧島と時雨がそれぞれ分艦隊を編成し、

速力で劣る敵戦艦に対して挟撃の形をとる。

『目標、敵駆逐艦。ゴ自由二』

比叡の艦隊は、戦艦をスルーして駆逐八級に向けて砲を放つ。戦艦二隻と駆逐艦からの攻撃をその身に浴びた赤い八級は、一瞬のうちに撃破されてしまった。

『毒ハ取り除イタ。繰り返ス、毒ハ取り除イタ』

続けて、戦艦に対して砲撃を行う。大口径の砲から放たれた徹甲弾は、金剛の艦隊に視線を奪われている敵戦艦へと雨のように降り注いだ。

「グツ、オノレエ！」

戦艦の主砲すら装甲に阻まれながらも、その砲撃は確実に敵戦艦へと届いている。

敵戦艦が、その化物のような主砲を発射する。しかし、最大戦速で回避し続ける艦隊へ命中弾を出すことは難しいのか、敵戦艦の攻撃が当たることはない。

「弾種徹甲。榛名、多少荒くいきマース！」

「我々もお姉様に負けていただけません！霧島、いきましよう！」

いつの間にか見入っていたらしい。戦艦同士の殴り合い、大口径砲による質量のぶつかり合いという、暑苦しくも華々しい戦いに。魔理沙も夢中になっているのか、いつしかフラフラと箒が近づいていき、金剛たちの声が聞こえる距離にまで到達してしまった。

続けざまに、金剛の艦隊から大口径砲が浴びせられる。更に、比叡の艦隊からも同時に、交差するように主砲が火を吹いた。

敵戦艦に比べ、自艦隊からは既に夾叉が出ていたために命中弾が多く出ている。容赦のない徹甲弾の嵐は戦艦といえど被害を免れられるものではなく、金剛たちは反撃開始からもの数十分で中破へと追い込んでしまった。

否。逆に、あの戦艦はそれだけの攻撃に見舞われながら中破で耐えられるタフネスを持っているということだろう。戦艦の砲撃の威力は、青年もよく知っている。

(でもすごい、これが高速戦艦か……。これなら、あの戦艦だって――

」

「沈ミナサイ」

花符『幻想郷の開花』

油断などできないと、やはり青年は理解した。

戦艦を中心に花が咲くように、弾幕が全方位に幾重にもなつて花開く。それは、挟撃状態にある両艦隊のどちらにも煌きながら向かつていた。

「そんなもの、私の装甲で——ヒエー！」

「比叡何してるネ！ 隙間くぐって避けなサイ！ 私の妹でシヨウ！」

ほとんどの艦娘が弾幕をかわす中、比叡だけが自信満々に装甲で受け止めた。結果、およそ半分は弾き飛ばしたのだが、もう半分は直撃して小破となってしまう。

「比叡！」

「大丈夫です提督！ こんなので、かすり傷程度です！」

敵戦艦は更に極大の光線を繰り出す。が、命中するはずもなくその間にも被弾する。主砲を一斉射して手負いの比叡を狙う。しかしやはり命中せず、被弾は増すばかり。

敵の猛攻はともかく。このままいけば勝てるだろうと、おそらく誰もがそう思ったはず。

だが、中破すらしている敵戦艦は、それを許してはくれなかった。

「——ッ！ ああっ！」

再接近して砲弾を撃ち込んでいた金剛に対し、弾幕と主砲と合わせて集中的に攻撃を始めたのである。あらゆる方向から飛来する砲弾全てに対処するより、一人一人を確実に攻撃していくとの判断だろうか。

その攻撃は金剛の装甲を削り取るように徐々に命中し始め、遂にはその装甲を打ち破り、直撃させるに至ったのである。

小破する金剛。そのまま撃たれ続ければ更なる被弾は免れない。比叡、榛名、霧島が砲撃を続けるも、金剛の被弾に焦ってしまったのか攻撃が外れ、命中しても装甲に阻まれる。

このままでは金剛は無事ではすまない、と思ったその時――

「くっ、私は――もう沈みません！」

苦し紛れにか、金剛が照準も正確に揃えないまま主砲を一斉に放った。

外れる――そう思ったのは青年だけではないだろう。それだけ金剛の体勢が無茶なものであったし、砲があらぬ方向を向いていたし、何より軌跡を描く砲弾があさつての方向へと向かっていたのだから。

「フウン……ソナナ攻撃が当たルト――」

と口にした戦艦は、一瞬だけ視線を止めて言葉を詰まらせた。そして信じられないことに、“外れるはずの砲弾へ向けて飛び込んだ”のである。

「ア……アああ――」

装甲が貫かれ、金剛の砲弾が全弾突き刺さる。

動きが止まり倒れたかと思えば、その身体は静かに、しかし大きな音を立てて爆発――轟沈したのである。

「金剛、どうかな？」

「二人とも無事デス。仲良く隣に寝かせておきまシタ」

「……金剛、一つわからないことがある。その、風見幽香さんという人、どうして最後は自分から飛び込んだのかな？」

「相手の心配をするなんて、テートクは優しいネ。でモ、私にもわかり

ません。ただ、」

「……ただ？」

「風見サンという人。倒れていた時、そこに咲いていた花を——守つていまシタ」

「……………、先を急ごう」

「了解デス」

かくして魔理沙の案内で魔法の森を抜け、再思の道を抜け、辿り着くは三途の川。

霖之助の話によると、この川の下流に向かえば妖怪の山の北西、更には鎮守府近海の北西に出られるだろうという話であったが、

「騒々しいから、様子を見に来てみれば……」

どうやら、勘違いであつたらしい。

「小町も今日は真面目に働いているようですね。しかし、」

元凶はむしろ、この三途の川にあつたのだろう。

「見逃すわけには参リマセン」

三途の川の対岸より聞こえる声は、きつとそう応えてくれた。

「ソウ、アナタたちは少シ——罪ガ重スギル」

030 Phantasmagoria of
Lower View

広々とした三途の川。青年自身もいつかここを渡ることになるのだろうか、と半ば現実から目を逸らしつつも、対岸に座す陸上型の深海棲艦からは目を離さない。

魔理沙に箒から降ろしてもらい、岸边に立つ青年。上空で箒を操る魔理沙は、対岸の存在に苦い顔を隠しきれていない。

「アナタ達ガ、コノ異変ノ原因デスカ？」

「……何を」

「幽霊ガ蔓延ルコノ事態、彼ラト同ジ匂イヲ漂ワセル彼女タチ、知ラナイトハ言ワセマセン」

「ああ……やっぱり」

青年がかつて感じた問いは、間違っていないなかった。

深海棲艦の正体とはすなわち——幽体、なのだろう。深海棲艦を倒してカードへと変化する艦娘が幽霊であるとするならば、深海棲艦もまた幽霊であると考えることにそう不思議はない。

だが、なぜ紫はそれを教えてくれなかったのだろうか。

深海棲艦と近距離で戦った紫なら、艦娘を幽霊であると見抜いていた紫ならば、深海棲艦が幽霊であるということにも気づいていそうなことであるというのに。

自分が何か間違っているのか、あるいは紫が何かを隠しているのか。疑問は埋まれど、更に疑問が沸いてはキリがない。

「でも、同じ匂いというのは頂けません。訂正してもらいましょう。彼女たちは深海棲艦のように敵意の塊ではなく、立派な魂と誇りを持った、僕にとってかけがえのない存在です」

「テートク、そんなに私のことを愛してくれてるなんテ……」

「……語弊はありますが、彼女たちが大切である、ということは変わりません」

わずかばかり首をひねりつつ、青年は言葉を絞る。

(……紫さんのこと思い出したら、幻想郷に来た時のこと思い出しちゃったな)

早苗に巻き込まれ、吹雪と出会い、叢雲と、漣と、電と、五月雨と。優しく。温かく自身を受け入れてくれた彼女たちの存在なくして、今前を向く青年はない。

いつだって自身の傍には艦娘がいて、いつだって艦娘の傍には自分がいて。

その影にはいつだって――

いつだって、深海棲艦の姿が見え隠れしていた。

(――待て、……待て)

思えば、最も重要な点を見逃してきた気もする。

艦娘とは何か。かつての軍艦の魂である。

では、『深海棲艦』とは何か。

「茶番二付キ合ウ心ノ広サハ持チ合ワセテイマセン。モウ一度尋ネマス」

深海棲艦がどこから来たのか、などという疑問は今はどうでもいい。

深海棲艦は幻想郷にとって災いをもたらす存在――敵であるというの、他ならぬ紫が保証している。それは間違いない。

間違いない、のだが。

(艦娘は……そのほとんどが倒した深海棲艦からカードとして現れる……)

艦娘は味方か？

どうして、『艦娘が深海棲艦ではない』などと言い切れるのだろうか。

「ナゼアナタハ、外ノ世界ノ幽霊ナド引き連レテイルノデス？」

目を背けてきたかもしれない事実、目を背けたくなるかもしれない現実、青年は一人言葉を失った。

艦娘と深海棲艦の存在の違いが、敵意の有無だけであると。

青年の声が唐突に聞こえなくなったのを感じ、魔理沙が代わりに問答に参加することに。自身とて話し合うより手を出すほうが早い性格なのだが、深海化した四季映姫はある程度自我を保つことが出来ているらしい。戦わなくていいならそれに越したことはない。

「あー、お前映姫か？　なんでこんなところにいるんだよ。休日か？　そのサボり常習犯の死神はともかく」

「幽霊ガ幻想郷ニ蔓延ツテイルカラ、様子見ツイデニ裁キニ来タノデスヨ」

「幽霊つてのは艦娘たちのことか？　違うぜ映姫、艦娘は深海棲艦と違つて――」

「同じ、ナノデス。川ヲ渡リ、私ノ元デ裁カレル必要ガアリマス」

「取り付く島もねえなあ。六十年周期はこの前のことだろ。艦娘が外の世界の幽霊だつてんなら、お前の管轄じゃないぜ、ひっこんでな」
「幻想郷ニイルノナラ私ノ管轄デス」

「いや頼むから引つ込んでくれ。お前の相手なんか面倒くさくてゴメンだぜマジで」

軽口を叩くように魔理沙は口上を述べるも、実際映姫と事を構えたくないのは紛れもない事実。その強大な力が深海化によって更に増しているなど、想像もしたくない。

（ん……深海化？　いや待てよ、うどんげの話だと確か映姫の奴は……）

だが考えるより先に、映姫は言葉を続ける。

「アア、オゾマシイ歴史。幻想郷ニハ不必要ナモノデス」

「おいおい、艦娘たちはいい奴らばかりだぜ。深海棲艦のこと言ってるのか？」

「ドチラモ同ジデシヨウ？　私ハ悪シキ者ヲ裁キニ来タノデス」

「はあ？　いや全然違うだろ。幽霊裁きすぎて頭でもおかしくなった

のか？」

「ナラバ、問イマシヨウ」

並ぶ艦娘たちを一瞥し、映姫は対岸よりただ一言、冷たい声でこぼす。

「アナタ達ノ存在ソノモノガ、罪デナクテ何ト言ウノデス」

瞬間、頭に血を上らせる魔理沙。気づいたときには、手に持つスペルカードを発動させていた。

魔理沙の放つ弾幕を呆然と見ていたのだが、魔理沙が映姫と事を構えたとようやく理解した時、青年はふと我に返る。

（魔理沙ちゃん、それはまだ早い……っ）

戦闘は強制的に始まってしまった。出来うるものならもう少し情報を引き出したかったのだが、始まってしまったものは仕方がない。

（艦娘の皆のために怒ってくれるのは……嬉しい、けど）

艦娘を信じていいのだろうか。深海棲艦と何が違うのだろうか。

浮かぶ疑問は絶えないまま、青年の心を深く食むのだが、

「提督、指示をお願いします！」

「……榛名？」

「まずはあの敵を倒してから！　そうですね？」

この言葉を深海棲艦が発していると思うと背筋が凍る。しかし、目の前で話しているのは誰だ？　そう、艦娘。榛名だ。

深海棲艦と艦娘が同じであるはずがない。両者の違いなど、青年が一番よく知っている。

（それでも僕は、皆に敵意がないことを……優しく接してくれる皆を頼りたい）

例え裏切られたとしても。

先の見えぬ暗闇が待ち受けているのだとしても。

光を与えてくれた彼女たちには、己の命の輝き全てをもって報いねばならないのだから。

『提督ヨリ全艦へ。現在地三途の川。アリツタケノ支援ヲ要請スル』

『了解、急行ス。高速修復材ノ使用許可ヲ乞フ』

『許可スル』

提督として、己にできることはここまで。

あとは、彼女たちの判断に任せよう。

(四季映姫さんは自我を保った状態で深海化してる……？ いや、あれが本人の意思そのものとは限らない。でも、レミリアさんの例に比べれば明らかに……。完全な自己でも、完全な深海棲艦でもない。白でもなく黒でもない灰色の存在——中間棲姫か)

「——全艦、砲戦用意」

その指令に、艦娘が艤装を稼働させることで応えてくれた。ものの数瞬で戦闘態勢に入った彼女たちを見つめ、瞳を閉じる。

対岸の存在への回答は、このようにして為されたのであった。

「君たちを信じてる」

戦闘が展開され、榛名は旗艦である金剛の指示を待っていた。敵は兵装も勿論だが、その存在としての威圧感が生半可なものではない。この6人と魔理沙をもって挑んだとしても、勝てるかどうかはわからないだろう。

しかし、姉である金剛なら。あの戦争に参加した戦艦の中で最も古参、経験の豊富な金剛なら。この局面を打開するだけの戦術を何かしら考えてくれるはずだ、と。榛名は、期待の眼差しをもって金剛を見つめていたのだ。

だが、

「あの……金剛お姉様？」

「うう……はる、な」

「金剛お姉様、ご指示を！」

「……………私は」

「——っ、比叡お姉様！」

「艦隊は比叡が指揮を執ります！ 提督、金剛お姉様を！」

青年に大きな信頼を預けられ、士気の高い艦隊の中で一人。金剛のみが顔を青ざめさせ、どこか呆けたような顔で、その場から動こうとしなかった。

比叡が機転を利かせて指揮を執り、榛名は霧島や時雨、白露と共にそれに追従する。

(お姉様……どうして)

青年も何か察したのか、慌てているような、苦虫を噛み潰しているかのような表情で、岸边から動かない金剛を連れて三途の川から距離を取った。

その内心を推して知ることはできない。いくつもの疑問や推測が脳裏に浮かんで消えゆくが、青年の内心にも、金剛の考えにも、確実に至ることはできなかったから。

「——ッ、砲炎確認！ 回避運動を！」

だがそれよりも、今は目の前の戦闘である。戦闘を終わらせて、また金剛や比叡、霧島と一緒に過ごすのだ。この姿になって、やりたいことは沢山あるのだから。

(そのためには——あなたたちを倒します！)

「左60度砲戦用意！ 目標敵戦艦、弾種徹甲！ 撃て！」

対岸より接近しつつある赤い戦艦に対し、統制射撃を行う。金剛が一人抜けたとは言え、金剛型の練度は伊達ではない。砲弾は目標へとまっすぐ伸びていき、敵戦艦の艀装へと——

「——甘イネエ」

届かない——否、通り過ぎていた。

何故なら、戦艦が既に、「比叡の目の前にまで接近」していたのだから。

「……えっ?」

「少シハノンビリシトキナ」

迫撃、轟音。

至近距離にて比叡は一斉射を受け、装甲も虚しく全弾を被弾、中破してしまった。

「……つく、う……う」

「時雨ちゃん、比叡お姉さまを連れて距離を！」

「わかった！」

「指揮は私が執ります！」

比叡の目の前に現れた戦艦に狙いを定めるも、戦艦は再び離れた別の地点へ移動していた。それはまるで、瞬間移動でもしているかのような足運びであり――

「霧島も一斉射、撃て！」

再び放った砲撃も瞬間移動のような動きに翻弄され、まるで見当違いの方角へと放たれていた。

（あの戦艦は一体……？）

攻撃を当てようとしても逃げられ、更には接射に近い距離でいつ砲撃を受ける事になるかもわからない。しかも戦艦である、その砲火力は間違っても侮ることはできない。

故に、その一合だけで榛名は確信する。まともに相手をするのは危険すぎる、と。

「最大戦速！ 魔理沙さんと一緒にあの基地を叩きます！ 三式弾装填！」

急激に速度を上げ、対岸へと距離を近づける艦隊。映姫が対空砲火により、空中を飛び回りながら弾幕を放つ魔理沙を攻撃しているのが目に入ったところで、主砲を向ける。

しかし、映姫が自身へ向ける双眸は、憎くてたまらない相手へと向けるそれであり、

「罪二塗レタ歴史、私ノ元テ裁カレルトイイ」

罪符『彷徨える大罪』

自身らへと放たれる弾幕を以て、確信へと変わる。

棒状の弾幕と球状の弾幕が螺旋状に広がった。その弾幕は溢れ続け、艦隊の行く手を阻むように、隙間を埋めるように舞う。

咄嗟に回避するも間に合わない艦もあり、装甲である程度は弾くも、霧島が弾幕を被弾し小破してしまう。

「シブトイデスネ。流石ハ兵器、ト言ツタ所デシヨウカ」

「榛名たちが何を間違えたというのですか！ 守るために、私たちは大切な人たちを守るために戦ったのに！」

「ソナモノハ関係アリマセン」

「どうして……どうしてわかっていくれないのです！」

「ナラバソノ意思、見セテモライマシヨウ」

避けた弾幕が航空機へと変化し反転、空へ舞い上がる。更に、映姫自身からも航空機が発進しており、計200にも及ぶ航空機がいとも容易く空を覆い尽くした。

その空を埋める様は、戦いの記憶を呼び起こすには十分な光景であり、

（あ、ああ——）

守りきれなかった空と、全てを喰らった太陽のような光が、脳裏にいつも容易くフラッシュバックし、

「榛名！」

動かない身体は爆撃機の攻撃を受け、簡単に小破してしまった。

（どうして……私はあの時動けなかったのでしょうか）

かつて呉に大破着底し、空を見上げることしかできなかった。かつてのように海を往き、波しぶきをかき分けることはもうできなかった自分。

街が焼かれるのを、仲間が焼かれるのを、死の炎が浮かび上がるのを、ただ空を眺めて呆然とするばかり。

「悔シイデシヨウ？ 悲シイデシヨウ？ 無力ナ自分ガ憎イデシヨウ」

そんなことはない。呉でも空襲する航空機への反撃を行い、終戦後

も復興の礎となったのだ。そんな我が身を、憎いと思うわけもない。だが――

(もつと多くを守れたはずなのに……！)

有り得たかもしれない未来を想像しながらも、それを成し遂げられなかった過去の幻惑を。

届かなかった小さなこの手を、嘆かずにはいられない。

「罪ノ意識ニ苛マレルノハ怖イデスカ？ 安心シテクダサイ、私ノ裁キハ絶対デス」

薄ら笑うかのように、映姫が嘲るような声を上げる。

それでも――

「榛名は、悪くありません」

「……ホウ？」

「金剛お姉様も比叡お姉様も霧島も、白露ちゃんも時雨ちゃんも、誰も悪くありません」

「ナラバ、ソノ罪ハドウスルノデス。『兵器デアルトイウ原罪』ハ！」

「……兵器が罪。それが運命ならば、受け入れます。でも私は、私たちが――」

仲間と共に戦った過去を。守るべくして刻んだ時を。砲火を束ねた歌を。

掲げた旗を。流した汗を。握った手を。泣いた瞳を。滲んだ血を。

紡いだ絆を。

鳴り止まぬ鼓動を。鳴り止んだ鼓動を。

そして鳴り始めた鼓動を――

「黒歴史とは、絶対に言わせません！」

三式弾は、その音が絶えることなく空に放たれた。

金剛と共に戦場から距離を取って随分と時が経った。青年は岸边で、魔理沙や艦娘たちが戦っているのを見て、そしてその会話を聞いて口を閉ざす。

(兵器が持つ原罪……)

人類初の兵器・武器は、道具として使われた石や骨のナイフであるという。ナイフそのものがそもそも殺傷を目的としてものものであり、そこから転じれば、確かに兵器は原罪を有すると言えるのかもしれない。

(でも……それでも、さ)

幻想郷で人格を宿された彼女たちは、既に罪を背負っていたというのだろうか。青年が幻想郷に来てしまったために生まれたとも言える彼女たちは、ずっとその罪に悩み続けなければならないのだろうか。

闘いの日々を終え、幻想郷に来てまでも苦悩を抱えなければならぬというのか。

青年に幻想郷で暮らして欲しいと願った彼女たちは、青年のわがままで残った幻想郷で責められなければならないのだろうか。

(みんながいなければ……僕は今頃、外の世界で腐ってた)

絶対に違う。認めてはならない。彼女たちに罪は無い。そしてそれを証明しなければ、青年もまた同じく心を痛みに蝕まれるだろう。

『長門ヨリ提督へ。間モナク海域ニ到着スル。戦況ノ詳細ヲ望ム』

『金剛小破、戦意喪失ニツキ戦線離脱。比叡中破、時雨ヲ伴イ一時離脱。榛名、及び霧島ガ小破シツツ、白露ト共ニ戦闘中。敵ハ瞬間移動スル赤ノ戦艦、弾幕ヲ航空機ニ変化サセル陸上型。敵航空機ハ現在200程度』

『卒倒モノダナ。戦力差ガ酷イヲ通り越シテエゲツナイ。撤退ヲ勧めタイノダガ』

(でも、それは皆の誇りを傷つけることになる……気がする。勝手な思い込み？ いや違う、僕は皆のことを信じるって言ったから、僕が撤退させちゃいけない。撤退するなら……艦隊の誰かが、撤退を判断したとき——)

長門率いる艦隊がもう間もなく到着する。

たった三人にも関わらず、榛名はよく奮闘してくれている。対空戦闘においては霧島より秀でているのか、次々と敵航空機を撃墜していた。

そして霧島。敵戦艦が瞬間移動するために厄介極まりないというのは青年でもわかるのだが、予想される瞬間移動先を先読みし、攻撃を命中させることが叶わずとも、敵戦艦が迂闊に艦隊へ近づくことのできないように牽制に徹して戦っていた。白露の魚雷もまた、それに一役買っている。

比叡は損傷の応急修理が終わったのか、未だに辛そうな顔をしているものの戦意を失っていない。時雨もまた、比叡が無事だったことに安心してか頬を引き締める。

これほどまでに戦いに誇りを、そして力強さを感じさせる彼女たちをどうして邪魔できよう。青年には、艦娘を愛する青年には到底判断ができなかつたのである。

あるいは——その誇りや力強ささえも原罪であるというのだろうか。

「金剛」

「……テートク」

肩を抱くように震え、目に見えて金剛は意気消沈しており、戦闘前とは随分と気力が異なっていた。

「ハ、ハハ、情けないデス。私たちの罪を問われテ、何も反論できないなんテ……」

「でも、榛名は——」

「あの子は生き延びましタ。それ故、見える風景の色が違って見えることもあるでショウ。でも、私は違うんです。私は違う……」

「……生きて戦いを終わらせることができなかつたから？」

「違うんです。あの時代を代表する戦艦として、反論できないことは沢山見てきたのです。敵も味方も、それは酷いことばかりでした……」

「……そっか」

金剛の記憶を辿ればわかる。相手国も勿論だが、自国でも多くの戦争犯罪があつたことを。

生体解剖事件、退艦者への機銃掃射、ビハール号事件、陸軍海軍問わず戦時中に起きたこれらを、金剛はほぼ全て把握している。

自分が関わつたものであろうとなかろうと、その全ては軍の行い。だからこそ金剛は、映姫からの言葉に反論を持ってなかつた。いや、持たなかつたのだろう。それが当然であると受け入れて。

青年にとつては、艦娘たちの抱える罪というものは直接的に関わりはないのだが――。

(でもね、覚悟はもう……決まつたよ)

彼女たちを守らなければならぬ。自分に光を見せてくれたのが艦娘であるならば、艦娘に光を見せるのは自分の役目だ。例えばそれが、暗闇に進むとわかっている道だとしても。

選ばなければならぬ。幻想郷における、艦娘の未来のために。

震える金剛の手をとつて、危険であるはずの岸边へと近づいて。

大きく息を吸い込み、青年は対岸の存在に向け。

およそ生涯出すことのないだろうという程の轟声を。

「聞こえるか、深海棲艦！」

「……今、私ノ事ヲ呼びマシタカ？」

「そうだ！ いいかよく聞け！ 閻魔だかなんだか知らないが、艦娘に罪はない！ わからないとは言わせないからな！」

「……サテ、何ヲ言イタイノデスカ？」

こみ上げる静けさを、しかし中で燻ぶる怒りを。

気がつかないうちに金剛の手を握り締めて、艦娘への慈しみを胸に抱いて。

「兵器に意思なんて存在しない！ そんなものは誰にだってわかることだろう！」

「——っ」

視界の端に、悲壮感いっぱいになったり戸惑ったりと顔の忙しい金剛が映る。だが青年は、次々と漏れ出る言葉を抑えきることなどできなかった。

「エエ、ソウデスネ。普通、兵器二意思ハ宿リマセン」

「存在しない人格に罪を着せるなんて職権乱用が許されるのか、閻魔様!？」

「デハ、彼女タチハ何ダト言ウノデス。ソシテ貴方タチガ深海棲艦ト呼ブ者タチハ？」

「兵器に意思が存在しないなら、意思を持つ彼女たちはただ人格を与えられただけだ！ そこには、彼女たちを操っている人間が存在することになる!？」

「……ツマリ?？」

「兵器そのものより、兵器を扱う人間の方が悪に決まってるだろうが！ つまり僕のことだよ!？」

無茶を言っていることは分かっている。無理な道理と理解している。

例え彼女に、彼女たちに嫌われようとも。

彼女たちを助けることにつながるならば、この務めを果たそう。

己一人で皆が助かるなら、喜んで身一つ差し出そう。

「戦争犯罪!? 原罪!? 兵器である彼女たちに決定権なんて与えるわけがない！ 悪いのはいつだって『僕ら』じゃないか!？」

「アナタハ——」

「裁くなら！ 命令を出す僕一人に決まってるだろ!？」

「……………」

「さあ、僕を連れて行くといい！ それとも、僕一人を裁くことができないうほど、閻魔様とやらは『白黒』はつきりさせられないのか!？」

吹けば飛んでしまうほどの、弱く小さく歪で性根の曲がった脆き魂。口を閉じるどころか、二度と口を利けなくすることぐらい、映姫にとっては造作もないことだろう。

そして青年の論理。映姫が艦娘の正体を魂の集合体と見抜いているなら、この主張はほとんど通らないも同然である。

しかし、映姫はそれらをしなかった。瞳を閉じて小さく息を吐いたかと思えば、一言。

穏やかに、透き通った通りの良い声ではっきりと。

「――ならば、深海棲艦の罪も貴方が背負うのですね？」

「ああ……、受け止めてみせるよ」

兵器でありながら平和を渴望した彼女たちのために。

兵器でありながら人を救うために奔走した彼女たちのために。

青年はこの時、初めて己の中の提督を自覚したのである。

手を握られた時から、金剛は嫌な予感がしていた。だからこそ、その青年の一言一句を、聞き逃すまいと耳に刻みつけた。

否、刻みつけようとせずとも、その叫びは確かに刻まれた。

自分たちのどこに、そんなに熱心になつてくれる必要があるのだろうか。少し前まで何も、興味すら持っていなかっただろう自分たちに。

何を、そんなに。

「ああ……、受け止めてみせるよ」

悪い予感は見事的中した。被りたくもない罪を背負い、纏いたくない汚名を着せられ、それでも尚、自分たちを愛そうというのか。

やめてほしい。自分たちはそれこそ兵器だ。突き詰めれば鉄の塊なのだ。悪名高き鉄の塊に、何を求めているのだ、と。

思ったところで、金剛はその考えを捨てた。

思考すればするほど、この青年の覚悟を貶してしまうような気がして。

未だ強く握られている自身の手を見た。そしてその手の先にいる、見違えるように表情の引き締まった青年。震えているのは果たして、青年と自身、どちらの手だったろうか。

もう、震えていないからわからない。

(ああ——最初はただ距離を縮めるための communication だったというノニ……)

——本当に気になってしまっているのか、と。

(想像してたより、ずっとずっと熱い心を持っているんですね)

金剛型の長女として、英国ヴィッカーズ社へ委託建造された巡洋戦艦。高速戦艦へと改修を遂げた金剛は、開戦時には旧式もいところであったが、諸作戦で北へ南へ駆け回る。対地艦砲射撃等の作戦も行い、金剛型戦艦は旧式でありながら、日本海軍で最も活躍した戦艦と言わしめるに至ったのである。

長女としては鼻が高い。我ら金剛型姉妹はかのようにして語り継がれているのかと思うと胸が高鳴る。だがそれだけに、「榛名と映姫の言葉」が胸に刺さるのだ。

しかしこの青年は、それを真っ向から否定した。幻想郷に意思を持って生まれながらも、自身らは兵器であるとして非情さを見せることで。

詭弁であることなど、誰にでも分かることであるというのに。艦娘に嫌われる発言であると、わかっているはずなのに。

(貴方の気持ち、確かに受け取りました。ありがとう)

それを理解している。自分たちが、反論する。ことを考えなかったのだろうか。

「Heyテートク、後は私がやりマース！」

「え……金剛？」

ほくそ笑む、とはまた違う。儂げに微笑みながら金剛は青年の手を引き、青年の前に立つ。弁舌を自在に操る映姫から、守ってあげるように。

「エーキとかいうアナタ、私からも一言言わせてください」

「……何デスカ？」

「『私たちの未来』を、アナタは知っていますか？」

それは、青年の記憶から拾った知識。艦の魂として外の世界に留まる中で得た希望。

「榛名と比叡は、航空機を積めるようになりました。私と霧島は、『盾』の名で呼ばれているそうですネ」

「……外ノ世界ノ未来ナド。幻想郷デハ——」

「守りたいという意思是、確かに未来にまで伝わっていました。あの時代を代表する戦艦の長女として、どうしてもこれを喜ばずにいられましょうか」

「デスガ、アナタ達ハ——」

「今は私が、妹たちが、皆がこのテートクの盾。もう私にとって、過去は忌まわしいものではありません。罵倒され、それでも受け止めて、ようやく決心がつかましタ」

例え罵詈雑言という汚泥に塗れようと、例え底の見えない水に足を絡め取られようと。

この想いを、止められるものなら止めてみせろ。

全身全霊を以て、灰塵に帰してみせよう。

「ソレデモ、アナタ達ノ罪ハ消エナイ。ソノ存在モ、過去ノ行イモ」

「テートクは私たちに針路を示してくれました。なら私たちはこの方を信じて愛して戦って、沈みゆく最期のその時まで共に寄り添うダケ。これが兵器に与えられた運命——そうですね、提督？」

「ああ……その通りだ」

「では簡単に沈んでやりません。テートクは泥船に乗ったと思ってるかもしれませんが、私たちは軍艦なのですカラ」

金剛は名残惜しさを感じながらも青年の手を放し、水上に浮かぶ。そこで青年の方へと振り返り、金剛は言葉を紡いだ。

自身の顔が、少しだけ嫉妬に染められていることを理解しながらも。

「先ほどの戦いのカード、渡し忘れていまシタ。さあどうぞ」

「あ、ああ……その、金剛、僕は——」

「早苗という子が羨ましいデス」

「え……？」

「出来るものなら、アナタの一番深くにいるのは私でありたかつタ」
それだけ言い残すと、金剛は青年に背を向けて艦隊の元へ動き出す。

その心に根ざすのは、紛れもない『戦艦金剛』の鋼鉄の意志であった。

「ねえ、さっきの聞いたかしら？」

「司令官の啖呵、格好良かった」

「流石司令官ね！ 今度ナデナデしてあげないと！」

「皆、今は戦闘に集中するのです！」

駆符『第六駆逐隊』

—— 駆逐『暁』『響』『雷』『電』

「曙どうしたの？ 唇震えてるわよ？」

「わかってて言ってるの？ 意地悪ね全く……」

「はにゃー、曙氏は愛いですがなくグフフ」

「あ、わ、私もそう思います！」

駆符『第七駆逐隊』

—— 駆逐『朧』『曙』『漣』『潮』

「折角留守番変わってもらったんだ。活躍するぜ？」

「あらあらあく、バケツをぶっかけられた赤城さんみたいに油断しちゃダメよ?。」

軽符『第十八戦隊』

——軽巡『天龍』『龍田』

「ねえ加古。大丈夫?。」

「いやあく正直きつつい。昨日萃香ってちびっ子に飲まされたのが響いてる……。」

「それにしても、司令官は敵を作るのがお上手みたいですね!。」

「青葉あ、怒られるよ?。」

重符『第六戦隊』

——重巡『古鷹』『加古』『青葉』『衣笠』

「いいですか赤城さん? あなたは基礎さえ怠らなければ空母3隻が相手でも勝てるでしょう。絶対に基礎を忘れてはいけません」

「気を引き締めます。航空隊、発艦始め!。」

空符『初代・第一航空戦隊』

——空母『赤城』

軽空母『鳳翔』

「待たせたな提督、この長門がいる限り大丈夫だ。む、いい知らせ……新しい戦艦だと?。」

戦符『第一戦隊』

——戦艦『長門』『陸奥』

「ついでに覗いてみれば面倒なことになってるみたいね」

「えへへ、お邪魔します」

「咲夜さん、美鈴さん、どうして……。長門ですか？」

「正解よ。ほら、妖怪の山の戦闘のカード。あなたに預けるわ」
「……ありがとう。艦隊を再編する！」

駆符『第二駆逐隊』

——駆逐『村雨』『夕立』『春雨』『五月雨』

駆符『第十一駆逐隊』

——駆逐『吹雪』『白雪』『初雪』『深雪』

軽符『第九戦隊』

——軽巡『北上』『大井』

闘符『第十六戦隊』

——重巡『足柄』

軽巡『長良』『球磨』

空符『第四航空戦隊』

——軽空母『龍驤』『祥鳳』

これだけの艦隊を目前にすれば流石に壮観である。などところぼすより先に、冷や汗を垂らしながら青年は長門に尋ねていた。

「うちって……こんなな女の子いたっけ？」

「何を言う。志を同じくした者たちはまだ半分にも満たないぞ」

「あっ……はい」

「さて提督よ。これだけの艦隊をいきなり指揮しろとは言わん、黙って見ている。そして学べ。我らがいかなる存在であるか、そしていかなる罪とやらを持っているか、その目でしかと見届けるのだ」

頼もしい笑みを見せて、長門が艤装をポンポンと叩く。

「Hey長門、久しぶりに会ったというのに、人の戦いに横槍ですカ

？」

「強がりはやせ金剛。我ら皆、提督の盾なのだろう？」

「ううー、まさか聞かれてたなんテ……」

「え、皆に聞かれてたの!？」

「あれだけ大声を出していれば聞こえるさ。何、曙を始めとして皆喜んでいいる。かくいう私もさ」

「フン、獲物は譲りませんヨ?」

戦符『第三戦隊』

——戦艦『金剛』『比叡』『榛名』『霧島』

美鈴は青年の傍に。艦隊運動が行いくそうとうことで、白露と時雨も青年の傍に。三途の川は、既に艦娘によつて覆い尽くされていた。

戦端は、長門が切つて落とす。

「さて、そんな戦艦と閻魔とやら。覚悟はいいか？」

「……野蛮ナ。ソレデモ、私ガアナタ達ノ罪ヲ、白黒ハッキリサセテアゲマシヨウ」

「ほう、白黒ハッキリとは実に愉快。深海棲艦に身を許しながら精神は健常なつもりか？ 白黒どころではない。今の中途半端な存在の貴様が誰かを裁こうなど……まして我らの誇り、我らの提督を試そうなど——これでも私は怒っているんだぞ！」

「ソノロヲ——閉ジロツ！」

死神『ヒガンルトウール』

「良い働キデスヨ小町」

審判『ラストジャッジメント』

戦艦の弹幕。銭の様な弹幕が広がる中を、白い弹幕が流れるように泳いでいく。そして映姫の弹幕。棒状の弹幕をばらまきつつ、細かいレーザーと太いレーザーとを組み合わせて艦隊を襲う。種類の弹幕は、艦娘に負けじと三途の川を覆い尽くした。

その弹幕に対し、駆逐艦と巡洋艦、それと金剛型はひたすらに弹幕を避け続けた。長門と陸奥はレーザーこそ流石に回避し、その他の弹幕も多少避ける素振りを見せるものの、そのほとんどを真っ向から弹幕を受け止め、弾き返す。空母たちはそもそも離れた位置にいたため、被害など皆無であった。

「全水雷戦隊、複縦陣。『隙間を埋めろ』。魚雷発射用意」

長門の指示を受け、艦娘たちは三途の川の流れに対して二列の陣形を組んだ。全艦の魚雷発射管が同時に、同じ角度、同じ速度で動く。それはあたかも、一つの芸術のような統制であった。

「発射用意よし！」

「はらわたが煮えくり返る思いだろう、私とて同じだ。交互に発射、全弾叩き込んでやれ」

川を埋め尽くすような魚雷の群れが、列を組んで放射状に放たれた。その目標は勿論、唯一の水上目標である赤い戦艦。

確かに避ける隙間はなかなかないだろう。しかし、あの戦艦には瞬間移動する能力がある。その能力によって魚雷が命中しない場所へ移動されてしまえばそれまでであるが――

「十六夜咲夜、頼んだ」

「メイド使いが荒いわね」

瞬間移動に対し、時間停止。咲夜の能力であれば擬似的な瞬間移動を行うことが可能であり、魚雷の当たらない箇所へナイフを放ち牽制することで、戦艦は逃げ場をなくす。

放射状に放たれた川を飲み込む魚雷のうち、4発が戦艦に命中。それでも中破に収まる敵戦艦に対し、

「陸奥、及び第六戦隊、足柄は砲戦用意。目標敵戦艦、好きに撃て」

重巡と戦艦の度重なる連続砲撃により、魚雷で足を止められていた戦艦は避けることも叶わず。

大きな音と噴煙を立て、水面へと沈んでいった。

「小町ッ！ クッ——ヤラセハシナイ！」

「さて、金剛よ。あとは貴様たちに任せるとしよう」

先ほど回避した映姫の弾幕が航空機へ変化する。その数は、先ほどの残存機と合わせておよそ300にまで達していた。

「赤城さん。あなたで半分、やれますね？」

「え、空母四隻もいるのに、半分私ですか鳳翔さん？」

「もっとお望みかしら？」

「いいいいいいえ、半分でももつたいないです。頑張ります！」

「相変わらずやなあ鳳翔」

「ええ、懐かしいです」

うわずつた赤城の声が遠くから聞こえるが、その直後には戦闘機隊が敵の航空機と接敵していた。正規空母赤城、軽空母鳳翔、龍驤、祥鳳による制空戦闘が、既に上空では始まっていたのである。

「エーキ！ こころでfinishデス！」

「バカメ！ 私ヲ倒セルト思ツテイルノデスカ？ 何度デモ沈ンデイ

キナサイ！」

「アナタこそ、私たち金剛型四姉妹を何だと思っているのデス！」

「金剛お姉様を筆頭に！」

「海軍を支え続けた！」

「大艦巨砲主義の立役者です！」

制空権は確保できず、しかし拮抗状態には持ち込んでいる。だがそれは、敵攻撃機の接近すらままならないということであり、戦艦にとっては千載一遇の機会。

「知っていますか、エーキ。私と榛名はある日、飛行場を砲撃しまシタ」

「エエ。結果的ニハ失敗シタヨウデスネ」

「あれは私たちも不覚でした。なら、私と榛名が作戦で使用した弾薬の数ハ？」

「……キサマ」

「副砲と合わせて私が462発、榛名が504発。そして今は、続けて

飛行場砲撃を行う予定でしたが、成し遂げられなかった比叡と霧島もいます」

「……………」

「あの日をもう一度。今度は成功させてみせまショウ」

映姫は航空機を向かわせようとしているようだが、想像以上に航空戦が激しいために不可能なようである。赤城の航空隊は特に優秀で、雷撃機と爆撃機を優先して撃墜させていた。

航空戦において徐々に追い込まれる映姫。金剛は静かに、そして静かに。

静かに、主砲を旋回させた。

「35. 6cm砲計32門。2000発の無念、受け取って下サイ」

(うわ、川の岸部デコボコ……水が流入してるし。流れ変わったな)

作戦を終えた艦隊は、長門が率いて先に鎮守府へと向かっていた。現在残っているのは、金剛型四姉妹、それから白露、時雨の6人と咲夜、美鈴である。魔理沙は「案内は果たしたぜ」と言って、さっさと帰ってしまった。上空では、文がカメラを片手に飛び回っている。

岸辺に寝かせた映姫と小町。2人とも怪我はなく、小町に至っては幸せそうな顔でスヤスヤと眠りこけていた。

対する映姫はというと、倒した時から意識がはっきりしていた。ただ体は動かないのか、青年に上半身を起こされ、少しばかり不機嫌そうな顔で頬を膨らませている。

見た目は少女のそれであるため大変可愛らしくはあるのだが、身にまとう雰囲気は深海化した状態に比べ、格段に恐ろしいものになっているのは気のせいだろうか。

「あ、あの。四季映姫さん、でしたか?」

「先程と比べて全く覇気がありませんね。そんなことで幻想郷でやつ

「ていけるのですか？」

「うっ、いやあれはなんというかその……」

「私をキズモノにしておきながらその態度。どう責任を取るつもりなのですか？」

「え？ いやあの、も、申し訳ない……？」

「……冗談です。そこで謝らないでください。あなたは少し気を遣いすぎる」

映姫は一つため息をこぼすと、改めて見上げるように青年を見た。

「あなた方の……あなたの意思は分かりました。それでも、私の立場は揺らぎません」

「……そう、でしようね」

「ただ、私としては珍しく。本当に珍しいことですが、あなたの進言を聞くことに致しましょう。致し方ありませんが」

「と……いうと？」

「今の彼女たちの罪は、全てあなたのものとしませう。あなたが死んだとき、改めて裁判を行うことにしましょう」

金剛を始めとする艦娘たちから声が上がリそうになるも、青年はそれを手で制する。

「ご配慮に感謝します」

「あなたの魂が、この川を渡って私の元へ来るその日が楽しみです。最も——」

「そんな日が来なければいいと、個人的には思いますけどね」と。

小さく不敵な笑みを浮かべて、映姫は語りかける。

「閻魔様がそれでいいんですか？」

「待ち遠しくはありますが、彼女たちに恨まれたくはありませんから」

「白黒はつきりつける方にしては、随分と曖昧ですね？」

「何を言っているのですか。執行猶予は立派な判決です」

「ええ……ええっ、違いありません……！」

知らぬうちに、涙がこぼれていたらしい。

艦娘のためにできることが、自分にもあつたのだと。艦娘にとつての幻想郷を、幻想郷にすることができたのだ。

滴る雫は映姫の頬へと落ちていく。しかし、映姫は水滴を拭うこともせず、

「ひとまず、私の中から深海棲艦を追い出してくれてありがとうございます
います」

小さく微笑み、瞳を閉じて、

「今日は少し疲れました。ふふふ、私も小町のことを叱ってはいただけ
ませんね」

微かな寢息を立てて、安らかな寝顔を見せたのであった。

この審判の日、青年と艦娘はより強固な見えないもので結ばれた。

その関係にすら何か色を添えようというのは、いささか無粋という
ものだろう。

第三章 宵闇の宴

031 決意の日

博麗霊夢の行方不明が発覚してから半月、16日が経過した。

三途の川・妖怪の山異変から数日、青年が幻想郷に来て13日を経たその日の鎮守府にて。

「じゃあ、始めようかねえ」

「わざわざ来てもらってすみません、小町さん」

「いいってことさ。いつも昼寝してんだから」

威張って言う事ではないな、と青年は苦笑する。

目の前に座る女性は小野塚小町、三途の川で戦艦になっていた人物である。死神であり、三途の川の船頭であるという。ツインテールの赤髪に赤い瞳、青い着物に腰巻をつけており、その胸元は豊満であった。

(見ないほうがいんだろうけど、視線が吸い込まれる……)

執務室。今回の異変に関わった人物の一部を招き、青年は情報の獲得に乗り出そうとしていた。

深海棲艦に関わることは全て鎮守府に集める。これは青年の方針の一つで、現在幻想郷を席卷するこの深海化という異変を、早期に解決するために行っているのだ。深海棲艦について理解を深めて戦闘の知恵にならないだろうか、という本音は勿論だが、わざわざ深海化を見過ごす理由はない。予防策のようなものが取れるなら、それに越したことはない。

話し合いが始まる前に、来客全員にお茶が振舞われる。そのお茶を遠慮なく口につけた小町は、配膳した涼風に対し満面の笑みでニツと笑った。

「いいお茶だねえ。あたいには勿体無いぐらいだ」

「てやんでい！ お客人に茶ですら満足させられないなんて、あたいたちの名折れだよ！」

「お、中々わかってるじゃないか！ でも、あたいとしてはお茶より寝

床かな」

「あたいはどっちかってえと騒ぎたい方なんだけど……」

ワイワイと二人だけで楽しく盛り上がる涼風と小町だが、ひとまずお茶は全員に配膳された。

青年もまたお茶を一口すすったところで、話し合いは始まる。

「まず、皆さんに今日集まってもらったのは他でもありません。二日前に発生した異変について、少しでも情報を共有できればと思いでして」

「あやや、それで私もですか。茅野さんの望む情報かどうかはともかく、ぼっちり話は集めてきたので期待してください」

パタパタと、メモ帳のような紙束を振る射命丸文。その隣では、紅美鈴が申し訳なさそうな顔で座っていた。

「私は今回、本来のお仕事である情報収集のためにいるんですけども……あ、これ面と向かって言ってもいいんですけ？ 私自身が持つ情報っていうのは少ないですが……」

「いえ、是非ともこの場で聴いてください。紅魔館の方の協力は必要不可欠です。遅れましたが美鈴さん、妖怪の山への対応、鎮守府を代表して紅魔館にお礼を言わせて下さい。ありがとうございます」

「あはははは……大したことはしてないですよ」

小町の両隣に座る文と美鈴。特に文は妖怪の山方面、及び本日欠席した風見幽香とメディスン・メランコリーの分の情報も集めてきてくれたらしい。

小町もまた、映姫が仕事で来られないというので話を預かってきているとのこと。美鈴は紅魔館から参加した戦力の代表ということ、今回の参加である。

（好意的に捉えるなら……無視できない事態になってるってことか）
それは深海化のことについてか。あるいは鎮守府の戦力についてか。

いずれにせよ、この一連の異変が幻想郷に及ぼす影響は、少なからず多方面へと問題を投げかけてしまっているようだ。

さて、話し合いは進んでいく。まずは、今回の異変について。

「……なるほど。やっぱり深海化した時のことは記憶にある、と」

「艦娘がすごく嫌いになる感じでねえ。自分の意識はあるけど、体が自由に動くように動かないんだよ。気持ち悪いつたらありやしないね」

「あやや。私は青葉さんを始めとして、艦娘さんのこと結構好きなんですよ。でもあの時ばかりは、好きてって気持ちがあるまま裏返って嫌いになったような感覚でした」

「四季様も、入り込まれた感覚は同じだって言ってたよ」

深海化の謎は深まるばかり。新たに明らかとなったためぼしい情報はなく、青年はがつくりと肩を落とす。

「あたいの能力は『距離を操る程度の能力』。いやあ、死神が本気で死神になるなんて思いもしなかったね」

「ふむ。この長門がいればまだ装甲差でどうにか出来たかもしれないが、他の艦には少し荷が重かったようだ。結局最後は物量差だったかな。駆逐艦より早く、その上接射による想定以上の攻撃力だ。我々にとっては、最も厄介な部類の能力に入るだろう」

「私は『風を操る程度の能力』です。深海化したときは、見事に咲夜さんに封殺されてしまいましたけどね」

「対峙したのが同じく幻想郷の者たちで助かった。風を操るなど、我々の速度も射撃も役に立たないものになっていたに違いはない」

能力、戦闘については長門が話を聞く。幻想郷で能力を持つ者の強さは、紅魔館の異変の際によく理解している。艦娘と相性が悪い場合が多いのは致命的であり、今後も深海化が起きるとするならば何かしら有効的な対応策を取らねばならないだろう。

「聞いてくれよ！ その時四季様がこういったんだ。「小町、その……いつも小言ばかり言っていますが、わ、私は貴女のこと、決して嫌いではありませんから」ってな？ わかるかい、この何とも言えない気持ちさがさあー！」

「これは……いいことを聞きました！ 早速記事を！ 青葉さんと呼んでくださいー！」

「うーむ。私は駆逐艦が好きだが、映姫もなかなか……フフ」

「話戻しましょうよ」

ともあれ、会合は進められる。どのような情報であれ、今は深海棲艦のことを少しでも知ることが重要となる。そういった意味では幽香とメデイスンにも来てもらいたかったが、来られないのを無理に引っ張ってくるつもりもない。

粗方話し終えたかと思ったところで、小町がそれまでの緩んだ表情を一転。目つきを鋭くし、声音を少し抑えて話し始めた。

「さて、ここから結構重要な話だ。四季様からはあまり広めるべきじゃないって言付かつてる。鴉天狗、今から話すことは絶対に記事にはしないどくれ」

「あやや、とりあえず話は聞くとして……もし記事にしたらどうなります?」

「死神の実働部隊が、アンタをお迎えにあがるよ」

「おお、こわいこわい。そうですねえ……カミツレさんどうです?」

文に対して釘を刺す小町。およそ五寸釘ではないかと思うほどの刺しようだが、文は考える素振りを見せたかと思うと、青年に対して小首をかしげる。

「ん、僕?」

「艦娘、それから深海棲艦のことについては、幻想郷ではあなたに一任されているといつても過言ではありません。あなたから見ても、今までの異変等含めて“一部でも”広報するべきかどうか、判断を伺いたいです」

「僕が……」

「妖怪の山は守矢神社と協力関係にあります。そしてそれは、守矢神社と深い関係にある、あなた方も協力関係にあるということ。我々は協力相手の意思を尊重したいと思っています。提督という立場からいかがでしょう?」

曲がりなりに、文の新聞は幻想郷中に情報を伝達する手段の一つである。内容の真偽はともかくとして、今深海棲艦の情報を広めることにメリットはあるのか。広めても問題ないのだろうか。

(射命丸さんは……微笑んでるけど何か探ってる目だ)

青年が艦隊運営について素人であることは周知の事実であるが、妖怪の山は関わりが深い分、より理解しているといってもいいだろう。その上で、自分の器を問いたいのだ。

本当に、海を任せるに値する人物であるかどうか。

「……………なが——」

「提督よ、一つ助言だ。誤った情報を広めた場合、それを鵜呑みにする者は絶対に存在する。しかし情報を伝えなかった場合、情報を持ちながらなぜ伝えなかったのかと批判する者も存在する。判断は委ねよう、我々は従うだけさ」

長門に助けを求めようと思ったのだが、逆に迷いを生じさせる助言をもらってしまった青年。しかし、よくよく考えればその助言は確かに事実でもある。

（映姫さんが広めるべきじゃないと言うならそれはそうなんだろう。地獄で裁判長をやってるような人だ、話は核心に近いはず……………なら）
「記事にはしないでください」

「ほほう？」

「いらぬ混乱は避けるべきです。深海棲艦の情報は鎮守府で管理します。ただし、幻想郷内には、それぞれ力を持った勢力がいますね？」

「我々妖怪の山に紅魔館。そうですねえ、永遠亭や白玉楼、不可侵の約定はありますが地底の方々もでしょうか。彼らには話を通すと？」

「はい。また改めてこちらから出向きますので、その際に伝えようかと思えます。文さんは妖怪の山の長にだけ伝えてください」

「ふうむ……………まあいいでしょう」

少しばかり残念そうな表情の文であるが、徒らに情報を広めるべきではない。今回の決断は長門も賛成なのか、瞳を閉じて頷いている。
「決まったかい？ さて、じゃあ話そうかね」

湯呑を一気にあおり、お茶を飲み干したところで小町は口を開いた。

「はつきりと言おう。幻想郷はこのままだと——深海勢に飲み込まれる」

「まず、四季様のことについて話しておこうかね。〴〵白黒はつきりつける程度の能力〴〵を持つお方で、幻想郷担当の裁判長。ここまではいいね?」

「はい、先日咲夜さんからも伺ってます。自分の中に絶対的な基準を持って判決を下すと聞いていますが」

「ならよし。この白黒はつきりつける程度の能力なんだが、そもそも四季様が特殊だね。精神的な位相が人とはズレてるんだ」

「んん? なんだかいきなりオカルトですね?」

「幻想郷がオカルトだよ。で、四季様の精神波なんだけど、位相がズレてるからこそ絶対的な審判が下せる。とりあえずここまで理解したかい?」

「え、ええ、なんとなく」

「ズレた精神波には、同じく精神波のズレた者しか干渉できない。そして、深海棲艦は四季様にかつてないほど綺麗に干渉した。つまりね、」

「深海棲艦って、四季様と同じような存在なのかもしれない」と。

「同じ……ような?」

「精神波がズレてるから、言葉も含めて精神的な干渉は受けない。自身の中の信念に従って行動する。そこに四季様と比べて善悪の違いはあれど、ね」

「……なら、艦娘の皆は」

「四季様が言うには、本質的には同じだけど、精神波が人と同じ正常な位相に戻った存在じゃないかって。逆説的に言えば、深海棲艦は人じゃない——のはわかると思うけど、もっと人とは違う本能的な存在さ」

例えば紅魔館の時はどうだっただろう。美鈴らが、レミリアらが、深海棲艦と化した異変。精神を乗っ取られた、あるいは融合したのだとしたら、本人の意思を保ちつつ深海棲艦の意思に呑み込まれてしま

うことは十分考えられるだろう。言葉を介しながら話が通じないなど、まさしくそれを裏付けていると言える。

深海棲艦の曲がらぬ信念とやらが艦娘に関わるものであるならば、艦娘への敵意というのも納得はできる。

「もつと言うとなね、四季様もあたいたいも能力にまで干渉されたのさ。あたいは能力が強化されたように感じて、距離を短くするどころかほとんど瞬間移動にも近いことができたんだ。でも四季様は違って、むしろ干渉されて能力が弱くなったらしい」

「弱く……？」

「絶対的な意思に支えられていたのに、深海化で力も判断力も低下したのさ。物事の判断がつきにくくなってたって、かなり反省してたよ」

なら仮に、もしも本当に精神波の位相のズレが存在するのであるとすれば、能力の強弱も精神波に依存するとなればどうだろうか。

話を黙って聞いていた美鈴が、その時ばかりは声を上げる。続けざまに文も。

「あ、私もどちらかといえば強化されていたように感じます。普段以上に体が動くと言いましうか。確かお嬢様も同様とのことでした。誤差の範囲だったり気のせいかも知れないということ、混乱を避けるために伝えてませんでした」

「そう言われてみれば……。鵜天狗は普通、ある程度風を操ることが出来るので風に対する抵抗力があるのですが、その抵抗力を奪えるくらいには、私も強くなっていたような気がします」

例えば文、美鈴とレミリア。深海化により精神への干渉を受け、より本能の赴くままに活動するとなればどうか。精神波が深海棲艦のものと同様合せて合成波となり、より強力な波長になったなら、同時に能力も拡充されたなら。

そして映姫。精神波の位相が似た存在である、と小町は言う。だが逆に、位相がまるで逆であったならどうだろう。映姫と深海棲艦の精神の合成波が互いを打ち消し合い、同時に能力を打ち消されて意思のみが残留したのなら。

(でも、深海化が解けた後の映姫さんの威圧感が増してたのが気のせいじゃないなら、本当に精神も能力も弱ってたことになるよな) 「深海化で強化されたならともかく、映姫さんは弱体化ですか。面倒な事例ですね」

「そもそも四季様に勝てる存在なんて、数えるぐらいしかいないだろうからね」

「ふむ、わかりました。とりあえず、深海棲艦は精神波がズレていて、映姫さんにも他の存在にも精神的に干渉できるということ、干渉はつまり深海化、ということでもいいんですね?」

「ひとまず、一つの可能性には行き着いたんじゃないかい?」

過ぎた仮定は良くないが、確定しているであろう事実はひとまず受け止めるべきである。どれだけ考えたところで、今は深海化を防ぐ術などないのだから。

「うん、それでだ。これが一番広められたくないことなんだけど」

「……何でしょう?」

「今回の異変ね、実は四季様が事を大きくしちやつたのさ」

夕日が差す中、鎮守府から去っていく小町と文を見送り、青年は先ほどの小町の言葉を思い出した。

『四季様ね、実はお休みだったから幻想郷に遊びに来てたんだ。で、三途の川を渡ろうとしたところで深海棲艦を見つけたらしくて。最初はその存在があまりにも“歪”だったから、説教しようとしてたみたい』

『深海棲艦相手に説教とは……なんというかすごい気概ですね。職業病ですか?』

『そうじゃなきや閻魔なんてやってられないだろうからね。で、説教を始めた時は、まさか自分に干渉できると思わなかったみたい。説教してるうちに気づいたら攻撃されて、気づいたらいつの間にか深海棲艦に吞まれてたらしいのさ』

『それだけ……ではないんですね？』

『察しの通り。深海化した四季様は周辺にいた深海棲艦の全てを指揮して、艦娘がいる鎮守府に向けて侵攻させたんだ。自我をコントロールできなかつたとは言え、このことについては四季様も本当に悪いと思ってるみたい』

『……悪いと思ってるなら、映姫さんに深海棲艦の征伐を協力してもらうことは——』

『それはあんたが背負うと言ったんだろう？　もし四季様が深海棲艦に手を出すことになるなら、必然的に艦娘にも同じものが向けられる。もし四季様との約束を破りたいってんなら、あたいが率先して艦娘に引導を渡してあげるよ』

『……違いありません』

艦娘と共に生きる覚悟、深海棲艦を滅する覚悟。今一度その意思を問われた気がして、青年は瞳を閉じた。

(大丈夫だ。深海棲艦は皆と一緒に——倒す)

そして、最後に小町が語っていた言葉を思い出す。

『深海棲艦の正体。間違いなく怨霊なんだけど、なんか違うんだよねえ……。何が違うかはわかんないけど、幻想郷に現れたなら片っ端から倒さないと、気がついたら周りが皆深海棲艦になってました、なんてことになってるかもしれない』

その言葉を聞いて、青年は少し考えたのだ。

艦娘は実体化以外にカードの状態にも変化できる。ならば、いつも遭遇する深海棲艦が実体化の状態であるとして、深海棲艦にとつてのカード化は存在するのか。存在するとするならばどのような状態であるのか。

例えば、魔法の森で遭遇した幽香とメディスン。映姫はこの二人の深海化に全く関わっていないという。つまり、全くの独立した内陸部において深海化が発生したことになる。考えられる理由があるとする

れば、それはおそらく――川。

艦娘のカード化に類する状態が深海棲艦にもあると仮定して、川と何らかの関係性を持つている可能性。これがおそらく、現在では最も可能性が高いだろう。

(でも、本当に机上の空論なんだよなあ……)

青年としては非常に気の滅入る状況である。いつどこで深海棲艦が現れ、幻想郷の住人が深海化してしまうともわからないのだから。

ポリポリと頭を搔いて悩んでいるところへ、長門が肩を叩いてきた。

「提督よ、そろそろ日も落ちる。今日は守矢神社に帰るのだろうか?」

「あ、うん。昨日は艦娘の皆の対応に追われて帰れなかったからなあ」

「入渠する金剛たちや弾幕に被弾した者たちはまだいいのだ。にとりと夕張が嘆いていたぞ。『もう魚雷なんか作りたくない』とな」

「あはは……まあ川が埋まるぐらい撃つてたからね」

「責任の一端は……まあ感じなくもない」

傍らに立つ長門の微笑みは、夕日に綺麗に照らされていた。その精悍ながらも女性らしい柔和な表情は、少なからず青年の心を鳴らす。

「どうした提督よ、私の顔に何か付いているか?」

「ああ、いや、その、綺麗なもんだなあって」

「……私が?」

「あ……うん、長門が」

「フッフ、口説く相手を間違えているのではないか? が、褒め言葉として受け取っておくでしょう。私は長門だからな」

満更でもなく照れた笑みを浮かべる長門。その表情にまた青年は目を逸らすのだが、伝えようとしていた言葉をようやく漏らす。

「長門、その……僕を、*提督*として教育して欲しい」

「ふむ? 言われずとも元々そのつもりだったか……一体どうした?」

「異変の時の映姫さんの言葉がね、胸にグツサリと突き刺さるんだ。『深海棲艦の罪も背負う』こと。簡単なことじゃないし、艦娘の皆の協力も必要になるし、頼りたい」

「……我らのために、我らを頼る、か」

「だから、もつと皆の上立つのに相応しくなりたい。お飾りつてだけじゃもう耐えられない。少しずつでいい、絶対に僕は“提督”になつてみせる」

もう頼つてばかりではいられない。頼られる人物に、頼られる提督に。

艦娘を信じると、そう決めたのは他ならぬ自分自身であるのだから。

「任せておけ、心配するな。私は——連合艦隊旗艦、長門だからな」

夕日を背に受けて振り返るその姿。一つの芸術の如き美しさを目の当たりにし、その荘厳さに息を震わせて。胸の高鳴りは、一つの興奮と覚悟を帯びる。

彼女——彼女たちの誇りを、正しく受け継ぐ決意と共に。

032 かみさま

鎮守府での諸々の雑務を終え、守矢神社に帰ってきたのは日も暮れて夜の帳が降りた頃。虫たちがオーケストラを奏でる中、青年は神社に到着する。

夜も少し冷え込んでくるようになった。もう夏も終わりだろう。一つの季節が終わるのは寂しいものだが、次には秋が控えているのだ。もし夏を惜しむというなら、次の夏を待てばいい。

また来年も、この夏を感じよう。皆と一緒に。

「茅野です、ただいま帰りまし——」

「カミツレさん！」

境内に足を踏み入れたところで、真正面から何かが青年に向かって飛び込んできた。同時に、上半身にかかるのは人一人分の衝撃。

「うおっ!? さ、さなちゃん!」

「一日ぶりのカミツレさんです……スーハースーハー」

「ちよちよ、今絶対臭うから! 昨日お風呂入ってないし!」

「私は一向に構いません!」

胸元に頭をこすりつける仕草は猫さながら。とはいえ、早苗は良くとも自分の羞恥心が許さない。胸をくすぐるのは、何も早苗の髪の毛の感触ばかりではない。

さらに、形容しがたいふんわりが、自分の腕に収まる場所で穏やかではない自己主張をしているのだ。いかに日頃鎮守府で美少女を眺めているとは言え、感触だけは慣れようもない。

「お風呂にしますか? お風呂にしますか? それともお・ふ・ろ?」

「それも臭いって言ってるよね」

「子供の頃だったら洗いっことかできたんですけどね。流石に今はその……いい、一緒には入れませんごめんなさい!」

「頼んでないよ!」

「どうしてもというのでしたら神奈子様に頼んでください! あ、でも神奈子様は免疫がないので、私的には諏訪子様の方がオススメです! つるぺたボディでも満足してもらえますと思います!」

「あれ、ここつていかがわしいお店だったっけ……?」
ともあれ、こうして青年は守矢神社への帰還を果たしたのであつた。

「早苗ー、ワサビとつて」

「はーいどうぞ!」

「カミツレよ、次めんつゆ貸してもらえるか?」

「あ、注ぎますよ」

神社の縁側にて、一家揃つて素麺をすすっている。夜の闇を月が照らし、風がさわさわと肌をなでる中、さっぱりとした口当たりが心地よい。

「いやあく、やっぱりワサビは最高だね。こんなに美味しいのに、どうして早苗はワサビが嫌いなの?」

「同じ髪色だから同族嫌悪してるんです」

「え、嘘?」

「嘘ですよ。鼻にくるのが苦手なんです……」

「好き嫌いは良くないぞ、ちゃんと食べないとな」

「ワサビが食べられないぐらいじゃ人は死にません!」

「でもワサビって美容にいいらしいよ? さなちゃんには必要ないかもだけど」

「そ、そんなに食べて欲しいなら仕方ありませんね!」

と、強がりながらワサビの刺激に顔をしかめる早苗を見て、青年、諏訪子、神奈子が笑みをこぼす。「笑うなんて酷いです!」と頬を膨らませる姿も、鼻を赤くしたままでは微笑ましいだけだ。

こんなささやかな安心、こんな些細な幸せが。

永遠が続いてくれればいいのに、と青年は願う。

食事を終え、早苗が食器を片付けるために台所へと向かった。3人が縁側に残されるのだが、

「カミツレ、風呂は沸いているか?」

「ええ、僕が先ほど頂きましたので。お湯が残ってますが……」

「構わん、私も入るとしよう」

神奈子が浴場へと向かったので、必然的に諏訪子と二人きりになってしまった。

お腹いっぱいになり、青年は眠気とともに月を見上げる。諏訪子に至つては、身体を縁側に投げ出して寝転がっていた。

「牛になりますよ?」

「これがホントのウシガエル……なんちゃって。それはともかく、こうして二人で喋るのも久しぶりだねえ。ちゃんとお風呂も入るようになったみたいで嬉しいよ」

「ええ、本当に。まさか紅魔館の宴会の翌日に異変が起きるなんて思いませんでしたから。……このところ忙しかったですし」

「鎮守府はうまく機能してるのかな?」

「はい、おかげさまで。今回も艦娘が増えましたが、まだまだ艦娘寮には余裕がありますし。本当に感謝しています」

「いいってことさ。家族だからね」

そう言つて、諏訪子は寝転がりながら月を見る。ギラつく月は姿を隠すことさえせず、この神社を隅々まで見通すように照らしていた。

「こつちに来てようやく半月かあ。カミツレ君も、人里で信仰集め頑張ってくれたみたいだね。妖怪の山で戦った時、思ったより力が戻つててびっくりしたよ」

「いえ、僕こそお世話になってますから当然です」

「まだカタいなあ。早苗とはどうなのさ」

「どう、とは?」

「ちゅーぐらいしたの?」

「ぶっ!」

予想外の言葉に思わず吹き出す青年。むせる中、ニヤニヤと笑う諏訪子を見ながら青年は困惑の表情を浮かべる。

(諏訪子さんの中で……僕らどういう関係になつてるの……?)

「さなちゃんとはそういうのじゃありませんよ。お互い友達つて思つての、わかりきつてるじゃないですか」

「友達イ……?」

「……し、親友です」

「親友ウ……？」

「な、何ですか……？ さなちゃんだって、僕のことを親友ぐらいには思ってくれてるんじゃないかなって……期待しすぎですかね」

「あーいいや。私はしばらく静観させてもらうよ。ただし、」

鋭い目つきになったりパタリと澄ました顔になったりと表情豊かな諏訪子。言葉を止めると、縁側に腰掛ける青年の腰元に腕を回す。

「早苗を悲しませた時の約束は覚えてるね？」

「悲しませるつもりはありません。諏訪子さんが僕を殺すことはないでしょう」

「ま、そうだろうね。君は人のために行動できる子だ。進んで早苗を悲しませることは……まあ多分ないんじゃないかな？」

「信用なりませんか？」

そう尋ねる青年の腰を、諏訪子が腕で締め付けた。

痛くはない。だが、これが警告であることなど理解に容易い。

「自分の魂を閻魔と取引するような子だからね、信用なんてしてられない」

「……死後の話ですから。結果的に丸く収まったので勘弁してください」

「………。んー……、まあ、いいや。とにかく早苗を大事にしてね？」

鎮守府が可愛い女の子ばかりだからって、デレデレしないように

「ぜ、善処しますとも」

最後の方は半ば引き攣りながら笑みを浮かべていた青年であったが、腰に抱きついた諏訪子が青年の脚に頭を乗せて寝息を立て始めたのを見ると、恐怖も薄れる。

諏訪子の言いたいことはわかるのだ。幼い頃お互いに心の支えとなっていた、自身と早苗に仲良くして欲しいという魂胆ぐらい。

だが、幻想郷に来てどうだろう。前に進むと決めた早苗は既にあらゆる交友関係を築き、自らの道を歩み始めている。そこに自身の介入する余地はあるかないかで言えば存在はするが、既に自分という支え

を必要としなくなってきたのだ。

無理に、自分という鎖に縛られるのは良くないのではないか。もつと新たな刺激や視野を受け入れるべきではないかとも、青年は考えるのだ。そしてそれは、青年自身にも。

しかし、早苗が嫌いかと問われても。

そんなことはない、胸を張って言えるだろう。

しばらくして早苗が台所から戻ってきた。戻ってくるや否や、

「あああああッ！ 諏訪子様ずるい！」

これまでに聞いたことのない、子供のような絶叫を放つ。

(んーと……？ 膝枕は親愛の証ってことでいいのかな？)

なにぶん、友達付き合いなど、今までほとんどなかったのである。親しい友達同士がすること、といつてすぐに思いつくことはあまりない。握手？ 握手とかだろうか？

加えて、青年なりに早苗との関係をどう築くべきか悩んでいたからこそ、その言葉が口から勝手に出る。

「さなちゃんもする？」

「……………は、へ？」

「だから、膝枕」

鳩が豆鉄砲をくらったような、とは正にこのことだろう。呆けたような、しかしそれでいて驚いて目を見開き口を開けて固まっている早苗。

その顔が青色に染まる。しかし次の瞬間には赤く染まり、再び青く染まったかと思えば、もう一度赤く染まった。

「わ、私何か悪いことしたんでしようか？ カミツレさんがドッキリを仕掛けてくるなんて」

「え、あの、え？」

「それともこれは頑張ってる私へのご褒美……？ いえ、でもカミツ

レさんが進んでそんなことをするなんて考えにくいですし」

「もしもし、大丈夫？」

「もしや、これは諏訪子様の罠……？ 諏訪子様がカミツレさんに何か吹き込んだんでしようか？ ありえない話ではありませんね。そもそもカミツレさんは——」

「余計なお世話だったみたいだね……やめとこう」

「いえお願いします！」

喜色満面の笑みを浮かべて。

早苗は諏訪子の反対側の膝へゴロンと寝転がり、その頭を膝の上にポフツと乗せた。美しい緑色の長髪が、川を流れる流水のごとく床へと伸びる。

東風谷早苗は可愛い、それは間違いない。百人に聞けば百人がそう答えるだろうし、自分の目から見ても群を抜いて美人である。長い睫毛も、プルツとした桃のような唇も、人を惹きつけて離さない宝石のような瞳も、全てが彼女を引き立たせる魔性の輝きなのだ。

だが、それでも。

「えへへ」とニヤケ顔を浮かべて、「ヌフフ」と笑いながら髪を服に擦りつける様子には、流石の青年も頬を引きつらせる。

「……生まれてきて良かったです」

「そんな大げさな。大丈夫？ 脚硬くない？」

「この硬さがいいんです。おつきくて硬くて……すごく立派」

「まあ、気に入ってもらえたなら良かった」

理解しての発言かどうかかわからないが、青年はひとまず早苗が満足しているようなので一息つく。早苗は鼻歌など歌ってご機嫌な様子である。

「なんだか随分機嫌がいいね？」

「カミツレさん、頭なでてくださいー！」

「え……じゃ、じゃあ撫でるよ？」

勢いのまま、早苗が捲し立てるように言うので、仕方なく青年は早苗の髪に触れる。

サラサラとした髪は撫でる事に手から水のようにこぼれ落ち、それ

でいてふわふわとした触り心地はまるで風に触れているかのよう。柔らかな甘い香りが漂うのもまた、青年に頭を撫でるのをやめさせない。

「私は今、世界で一番幸せです」

「そこまでのことかなあ……？」

「カミツレさんと触れ合ってるんです。お姫様抱っこもいいですけど、カミツレさんが自分から触れてくれるんですよ？ 嬉しいに決まっています」

まるでもつと触れて欲しいとでも言わんばかりの言葉。だが、青年にはその発言の意図がどうしても掴めず、そして頭によぎったかつての疑問が、撫でる手を止めさせる。

月はうつすらとした雲に隠れ、その輪郭をおぼろげに映していた。

「あのね……僕はさ、今までずっと聞けなかったことがあるんだ」

「聞けなかったこと……ですか？」

「さなちゃんが、僕を恨んでるんじゃないかって」

高校に入学後、一度たりとも神社に足を向けることはなく、結果として再会したのは年後の現在。中学を卒業した日、『また、ここに来てくださいね！ 約束です！』と交わした約束は、それまで毎日のように会っていたことを考えれば破られたも同然。

故に、青年は今でもどこか恐怖している。

早苗は自分を、心の底では「憎んで」いるのではないかと。約束を破りながら、今こうしてヘラヘラしている相手を軽蔑しているのではないかと。

しかし、

「カミツレさんは……私のことが嫌いなんでしょうか？」

その瞬間、早苗はひどく怯えたように、肩を竦ませて震え始めた。驚愕する青年。しかし、その動揺を早苗に感じ取らせないように、不安にさせないようにと、「態度を取り繕ってしまう」。

「嫌いじゃ……ないよっ」

「そうですか……良かったです」

「でも」と、早苗は上半身を起こし、相対して瞳を見つめてきた。その瞳が悲しみに包まれているのは、その時初めて知ったのだ。

「私がカミツレさんを恨むことは絶対にありません。私の方こそ不安だったんです。私がおか、いつもみたいにおかしくなりました。おかしなことをしてしまっただけで、カミツレさんも私から離れていってしまったんじゃないかって」

「それは違う。さなちゃんというのは本当に、あの頃の僕にとっては一番楽しかったんだ」

「私も……一番楽しかったんです。こうしてまた会えて、私がどれくらい嬉しいか、誰にも話せません」

「そう……なの？」

「幻想郷に来る時だけではなく、私がカミツレさんに会う度、何を考えしていたかわかりますか？」

「……いや」

「今度は嫌われないように、とにかく嫌われないように。明るく誰にでも好かれるような、誰からも愛されるような女の子を……」

演じて“いたんですよ？”

早苗の瞳は前髪に隠れて見えなくなる。声音は悲痛さを帯び、その肩は震え、小さな体はなお小さく姿を変える。

「でも、僕はそれでもさなちゃんが……眩しかった」

だが、再び彼女が顔を上げた時、それを伺わせる表情はしていなかった。

「私はいけない子です。カミツレさんが思ってるほどいい子じゃありません。でも、ですよ？ カミツレさんのためなら、私は頑張れたんです」

「僕は……」

「私と友達になりたいと言ったのは、カミツレさんからだったじゃないですか」

慈しみにあふれた笑みを浮かべて、早苗は人差し指を立てる。

「いいですかカミツレさん？ 魔理沙に咲夜さんに艦娘の皆さん、美鈴さんや他の人とも、確かに私は仲良くなりました。心から笑い合える友達になれたと思ってます」

「……………」

「でもカミツレさんは『特別』なんです。神奈子様とも諏訪子様とも違って、私にとつての『特別』。一番最初で、一番大切に、一番特別で……愛しい」

「……僕も、さなちゃんのごことは本当に『特別』だと思ってる」

「——っ！ そ、それはとても嬉しいです！」

変わらない、のだろう。いくら時が過ぎようと、いくら環境が変わろうと。

早苗にとつての自分は『特別』で、自分にとつての早苗も『特別』であることは。

「……つまらない事聞いたね、ごめん」

「いえ、いいんです」

「これからも——特別な親友でいよう」

「はあ………………。どうせそんなことだろうと思いました。カミツレさんにはガツカリです」

「え!? 何か悪いこと言った!?!」

「もう寝ますー!」

途端に表情を変えた早苗。プリプリと怒っているのだが、本気で怒っているわけではないらしい。先ほどの曇った表情が消えただけでも、青年としては心底ほつとする。また何か新しく怒る理由を作ってしまったようだが……とりあえず早苗の望む言葉は吐き出せたらしい。

早苗は立ち上がって諏訪子を背負い、そのまま縁側を歩いて行く——直前、

「カミツレさん」

「あ、うん」

「おやすみなさい。『また明日』、いい日を過ごしましょうね」
「うん、おやすみ。『また明日』」

就寝の言葉を告げて、早苗は去っていった。

青年もそろそろ部屋に戻って就寝の準備をしようかと思い、立ち上がろうとした時、

「おーい、風呂上がったぞー」

風呂上がりの神奈子が、縁側へと戻ってきたのである。

髪から漂う湯気と共に優しい香りが伝わり、それは青年の真横へと腰を下ろす。すぐ傍で感じさせる蒸気した香りは、青年のもやもやを一挙に溶かした。

「なんだカミツレだけか。早苗と諏訪子はどうした?」

「諏訪子さんが寝てしまったので、さなちゃんが部屋に連れて行きました。さなちゃん、そのまま風呂に行くと思いますよ」

「ふむ……カミツレはどうする? もう寝るか? 私はしばらく涼もうと思うが」

「僕でいいなら、お話し相手ぐらい」

「それはありがたいな」と、神奈子は口元に手を当ててクスリと微笑む。

「早苗とはどうだ? うまくやっているか?」

「ええ、特別な親友ですから」

「親友……うーん、まあいいや。信仰集めだが、よくやってくれているみたいだな。非常に助かっている」

「いえ、当然のことです。あ、今回の異変でも動いてもらってすみません。おかげで助かりました」

「なあに、気にすることはない。カミツレは私にとっても……ふむ、まあ、特別であるからな」

（うん、それはどういう——?）

と疑問を口にするより前に、神奈子はハツとした表情になり、取り

繕うように慌てた。

「すまん、今のは忘れてくれ」

「えっと……?」

「カミツレが知ることはないさ」

そう言うと、神奈子は肩をくつつけるほどの距離に詰めて座り直し、青年の肩を抱くように掴む。

突然のボディタッチに戸惑う青年。しかし抵抗する暇もなく、その手は頭へと伸び、神奈子の肩へ頭を乗せさせられた。

「えっ? あ、あのっ?」

「聞いたぞ、閻魔相手に喧嘩をふっかけたそうじゃないか。あまり心配をさせないでくれ」

「その……諏訪子さんは許してくれましたが」

「あいつは何でも早苗中心に考えてるから、あんまりそのあたりは気にしていないんだろう。だが、私はお前のその行いを、笑顔で許してやるわけにはいかない」

「……すみません」

「いい子だ。閻魔は怖い存在でな、私だって勝てるかわからない。もっと自分を大事にしてくれ。早苗だけではなく、私や諏訪子も悲しい。約束だぞ?」

「……はい、ごめんなさい」

口調は怒っていないながらも、それでいて頭を撫でる手は子供をあやすように優しい。自身は成人であり、その自覚もあるのだが――

この時ばかりは、まるで自身が子供に戻ってしまったような気持ちに染まってしまった。

「人里には行つたんだろう? 外の世界と比べてどうだった?」

「ははは、何もないとこころですよ。何も……。……僕に向ける偏見だつてない。あ、でも友人はできました。森近霖之助さんといいます」

「そうか、良かったな。幻想郷ではちゃんと過ごせているようで安心した」

頭から手を離し、包み込むような笑みを浮かべる神奈子。

その表情と、この気持ち。慧音の家で思い出した記憶を振り返り、青年は意を決して、神奈子に対して唇を震わせながら問う。

「あの、神奈子さんって……『かみさま』、ですよね？」

「ん？ 今更だな。そうだ、私が神だぞ」

「いえ、そうではなく——」

早苗と出会うより前、死ぬことすら考えていた孤独だった頃。

『いつも来てくれているのに、願いを叶えられなくてすまない』

『だれ……かみさま……？』

『辛い時はここへ来ていい。うんと泣くといいさ』

『……うん』

孤児院で、一人肩を抱いて震えていた頃。

「さなちゃんと会うより前に、神社で寝てしまった時に夢に出てきた

『かみさま』。あれ、神奈子さんですよね？」

『……』

「やつと思い出せたんです、『かみさま』。さなちゃんと同じぐらい、貴女にも会いたかった」

「ふ、む……」

微笑みから一転、少し悩むような表情を浮かべ、神奈子はもう一度青年の頭に手を載せる。ポンポンと気持ちを落ち着けるように叩かれるも、青年は緊張に吞まれていた。

「カミツレ、お前が早苗と会うより前のことは、まだ話せない」

「“まだ”、ですか。それにどうして……」

「いかにも私は、お前の言う『かみさま』で間違いない。これで十分だろう？」

「……わかりました、今は諦めます」

「かしこい子だ、賢明だな」

ようやく神奈子が手を離れたので、青年は元の座る姿勢に戻った。様々な感情が織り混じって心臓が自己主張しているが、話を蒸し返す気はない。例え疑問は残ろうと。

「さて、長門から色々と学ぶそうだな？」

「はい、忙しくなるでしょう。なるべくなら守矢神社に帰るようになりますが、もしかしたら昨日のように帰れない日もあるかもしれません」

「戻れる時は必ず戻ってきてくれ。早苗も諏訪子も、もちろん私も寂しいからな」

「はい、必ず」

「八雲紫が話していた博麗霊夢の搜索期限、そこまで時間に余裕はないだろう。幻想郷で確たる信用を得たいなら、まずは博麗の巫女の発見が第一だな。私も調べたが、博麗の巫女は幻想郷においてなくてはならない存在らしい」

「そのつもりです。各方面に協力を依頼することはあるでしょうが、そのときはまた、お願いできますか神奈子さん？」

「ああ、任せろ。お前は私の家族だ」

再び姿を現した月明かりを眺め、神奈子の顔を見ないまま立ち上がる。

不満などないと言えばそれは嘘だ。話してくれないことに、知つていながら教えてくれないことに、どうしてやきもきせずいられよう。

諏訪子の場合はまだ、早苗を中心に考えていることがわかる分いいのだ。

なら、神奈子は一体何だというのか？

まるでわからない。自分を信用させて、何をしたいのだろう。

「カミツレ」

「はい」

だがそれも、ふんわりとした神奈子の優しい声を聞けば、ひとまず思考の外側に置くことができる。

どの道、疲れきった今の頭では答えなど見つからないだろう。だから、今は神奈子が話してくれるのを待とう。別に敵というわけではないのだから。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

その日は、本当に良く眠れた。

033 ある日の青年

守矢神社での早朝。日課であるランニングを終え、境内にて待つ早苗からタオルを受け取った青年は、汗を拭きながら呼吸を整えた。

夏は終わる。だが、暑さが突然なくなるわけではない。残暑となつて、徐々に徐々に気温が下がり、いつの間にか熱が失われていくのだ。

「ねえ、カミツレさん」

「ん……どうしたの？」

思いつめた様子の早苗。しかし、それを振り払うようにかぶりを振ると、早苗はとびつきりの笑顔を見せてくれた。

「やっぱり私、カミツレさんの前では『いい女の子』でいたいんです」その発言の意図が、わからないのはなぜだろう。

なぜ、自分はわからないフリなどしているのだろう。

何も言葉を返すことができないまま、青年は早苗と共に神社へ戻るのであつた。

青年の朝は早い。朝5時に起床し、運動を実施した後に6時に朝食。支度を整えた後に、早苗に見送られて鎮守府へと向かうのだ。

鎮守府に到着したならば、門番の美鈴と一言二言交わした後、執務室へ。

「おはよう」

「おはよう、提督」

長門に迎えられ、青年は執務室にて報告を受ける。艦娘の健康状態に異常なし、周辺海域の警戒も問題なし。

異変こそあつたが、こうして再び無事に鎮守府が機能していることを確かめた後に、青年は口を開く。

「じゃあ、今日も仕事を始めようか」

時刻は朝の7時。青年の朝は早い――。

「そういえば、異変の時に合流した艦娘の皆のことを知っておかないとね」

「そうだな、まずはそこから始めよう」

異変の際に入手したカードは全部で19枚である。

特I型駆逐艦より、二番艦『白雪』、三番艦『初雪』、四番艦『深雪』。

長良型軽巡洋艦より、一番艦『長良』。

妙高型重巡洋艦より、三番艦『足柄』。

龍驤型航空母艦より、『龍驤』。

祥鳳型航空母艦より、一番艦『祥鳳』。また、

「朝方、妖怪の山より使者がカードを届けに来た。妖怪の山での戦闘の際に、救援が到着するまでの間に倒した深海棲艦から入手したらしい」

睦月型駆逐艦より、一番艦『睦月』、二番艦『如月』、三番艦『弥生』、

四番艦『卯月』、九番艦『菊月』、十一番艦『望月』。そして、

姫海棠はたてから、白露型駆逐艦五番艦の『春雨』。

射命丸文から、陽炎型駆逐艦九番艦の『天津風』。

メデイスン・メランコリーから、球磨型軽巡洋艦四番艦の『大井』。

風見幽香から、長門型戦艦二番艦の『陸奥』。

小野塚小町から、高雄型重巡洋艦二番艦の『愛宕』。

四季映姫・ヤマザナドウから、加賀型航空母艦の『加賀』。

実に多くの仲間が増えたものである。しかしそれでいて未だに艦娘寮に余裕があるのだから、諏訪子の先見の明は大したものだ。

「多いね……僕に指揮が執れるのかな？」

「それをできるようにするのが、この長門の仕事だ。既に各艦娘には一通り仕事を振ってある。提督は心配せず、学んでくれればいい」

「長門が全部指揮したほうが早いような気がしてきた……けどそれはダメなんだよね？」

「うむ。いくら上に立った経験があるとは言え、私もたかが艦娘の一人。知識はあれど、その運用については提督が判断するのが望ましいからな」

「戦う人と指揮する人は違うってこと、かな？」

「それで正しい。だが、私に指揮ができない理由としてはもう一つ。我々が軍艦ではなく艦娘であるからだ」

「ああ……人型だから、既存の知識じゃ今まで通りにはいかないと……」

「良く気づいたな。そういった意味では、ある意味素人である提督の方が柔軟な指揮ができると言えよう。だから、私が教えるのはあくまで基本や鉄則まで」

戦術・戦略的な基本事項、艦隊運用から人員の管理に至るまでを、青年は長門や他の艦より学ぶ。長門曰く、それらを踏まえて、幻想郷における艦娘の戦い方を模索してほしいというのだ。

青年は軍人でもなければ管理職に立ったこともない。やはりこの道は険しいのだと知るも、むしろ負けん気さえ湧き出るかのよう。かつて、ここまでやる気に満ち溢れたことはない。

「そういえば長門、姉妹艦の陸奥とは話したのかな？」

「あれは私の自慢の妹だな。会って、久しぶりに説教をされてしまったよ」

「説教？ どうして？」

「まあ、過去のこと色々とな。それより続けよう」

かくして、午前中はひたすらに長門から指南を受けたのであった。

「ねえ司令官、如月とお……イイコトしない？」

「お昼ご飯を一緒に？ もちろんいいよ」

「あ、ずるい！ 夕立も提督と一緒に食べるっばい！」

「わ、私も一緒に食べたいです！」

「あの、私も一緒にしてもよろしいですか？」

「ははは、嬉しいよ。みんなで一緒に食べようか」

お昼時。食堂へ向かえば、主に駆逐艦たちが角砂糖に群がるように青年に近づいてきた。自身は別に甘いわけでも旨みがあるわけでもないのだが、こうして自身と仲良くしてくれようとしてくれることは素直に嬉しい。

新しく着任した子にも、自身を理解してくれようとしているのか、隙あらば話しかけられるのだ。お互いに理解しようとする姿勢が共有できていること、これほど幸せなことがあるだろうか。

「ばんぱかぱくん！ 提督うー、今日も皆にモテモテね」

「あはは、そんなにからかわないでよ」

「提督、今日は私、足柄特製のカツカレーよ！ 後で味の感想聞かせてほしいわー！」

「お、それは楽しみだね」

料理を受け取り、テーブルにつく青年。ふと視線をやると、近くには加賀と赤城が座っていた。

冗談のように盛られたカレーと共に。それはまさにマウンテン。

「赤城も多いけど……加賀さんはそれ以上に多いなんて」

「私の顔に、何かついていて？」

「あ、ご飯粒」

「——ッ！ これは……油断しただけよ」

「加賀しゃんもぐもぐ、食事といえど慢心はいけませんもぐもぐ。常に日常の中で気を張ってこそもぐもぐ——ふう。一航戦の誇りは保たれるのです」

「赤城さん、その……ご飯粒が頬に沢山……」

今日も鎮守府は平和である。

午後も同じく、長門より教えを受ける。

この教育は、基本だけとはいえおよそ二か月を目安としている。無論、青年の理解度次第では短縮されることもあれば延長されることもある。

長門の教え方のミソは、とにかくみっちり詰め込むことにある。青年は勿論大変なのだが、教える長門も大変だろう。だが、艦娘のためを思えば苦には思っていない。自分の一分一秒が、今後艦隊を左右することになるのだから。

「ふむ……頭の回転は悪くないし、筋もいい。私は教え方にはそれほ

ど自信はないが、なかなかよく呑み込んでいると思う」

「そう……かな？」

「ああ。ひよつとすると、教育期間の短縮もできるかもしれない——」
「テートク——」

と、その時、執務室に突然飛び込んできたのは金剛……型の四姉妹。扉を開いた金剛はそのまま、机に座る青年に勢いよく飛びつく。

——寸前で、長門が金剛を受け止めた。顔面を、腕一本のアイアンクローで。

「フガ、長門！ 後生デス！ テートクと話させてください！ 食堂では駆逐艦に囲まれてからお話できないのデス！」

「今は教育中だ。この艦隊にとつて、提督の教育はいわば急務。深海棲艦だけではなく、いつまた幻想郷で異変が起きるとも限らないんだぞ」

「そんなのワタシが解決します！ テートクもワタシと話したいですよネー！」

「えっ……うーん。話すのは嬉しいけど、今はお仕事優先かな……つて」

瞬間、この世の終わりが来たかのような表情の金剛。みるみるうちに元気がなくなり、そのままおぼあちゃんになってしまいきそうである。

「お姉様、先程も言ったではありませんか。提督もこれから忙しくなるのですから、邪魔をしてはいけません」と

「uh——、仕方ありません。テートクとTea timeを一緒にたかったのニ……」

シヨボンと、落ち込む金剛。その表情を見れば今すぐにでも勉強を中断して金剛たちと話したい衝動に駆られるのだが、自分も今はこれが仕事である。割り切らねばなるまい。

トボトボと、執務室の扉へ重い足取りで向かう金剛。残る三人もそれにについていくのかと思いきや……榛名はその場から動こうとしなかった。

「提督。私は貴方にお礼を言わなければなりません」

「ん……僕、何かしたかな？」

「私たちをもう一度引き合わせてくれた……のは森近さんですが、私たちを受け入れてくれたのは他ならない提督です。私たちを……受け止めてくれてありがとうございます」

ほんわかとした笑みを送る榛名。それに倣って、比叡が照れながら、霧島も真面目そうに頭を下げる。

「金剛お姉様はああ見えて繊細なんです。提督に受け入れてもらえて嬉しいのに、それをどう表現していいのかわからないですよ」

「……そうなの？」

「ですから、ちゃんと優しく接してあげてください」

と、諭すようにニツコリ微笑む榛名。

妹たちから一様にそう思われているとは、金剛も中々愛されている。金剛型の長姉の人望を垣間見た瞬間、だろうか。

そんな時。部屋を出て行った金剛を尻目に、霧島がメガネをクイッと持ち上げた。

「ところで長門さん、提督の教育は順調ですか？」

「ああ、提督も地頭は悪くない。嘆くべきは、詰め込むことしかできない我が身の教え方の悪さだな」

「フフ……比叡お姉様、出番ですね」

「はいっ！」

メガネを光らせて口角を上げる霧島と、元気よく返事をする比叡。

何が始まるのかと思えば、比叡は小動物のようなそそくさとした動きで青年の傍の椅子に座り、長門を押しつけた。

「えっ？ あ、あの？」

「私に任せてください！ 私、実は練習戦艦ですから！」

主に教育に携わる艦種、練習艦。比叡のその教え方は、長門の数倍は上手だったと言える。ちなみに、比叡は登録上は練習戦艦のまま沈んでいる。

その日の予定を大幅に早く終えた青年は、喜色満面の金剛とゆっくりお茶をすることができたのであった。

夜の19時。日も沈んだ頃に、青年はようやく守矢神社へと到着する。神社では、いつものように早苗が出迎えてくれた。

「茅野です、ただいま帰りました」

「おかえりなさいカミツレさん。お風呂にしますか？ ご飯にしますか？」

「諏訪子さんも神奈子さんも待たせてるよね？ ご飯にしよう
いつも通りに縁側で食事をとり。」

「ねー早苗ー、ワサビとって」

「あの……何にでもワサビをつけるのはやめませんか？」

「お、カミツレも早苗を食べるのか。あ、間違えたワサビだ」

「とんでもない間違いですねそれ」

食事を終われば、風呂へ。

「あ、バスタオル忘れた」

「カミツレ君、バスタオルここに置いてくよ？」

「あ、助かります諏訪子さん。おかげで、裸でウロウロしなくて済みました」

「あ、やっぱバスタオル持っていくから」

「待ってください！」

そして、縁側で談笑した後に、自身の布団へと。

「カミツレさん、もう寝ますか？」

「うん、また明日も早くから勉強しないといけないから」

「今のカミツレさん、なんだかすごく生き生きしてます」

「さなちやんがそう言うなら、間違いないんだろうね」

「うふふ、やっぱカミツレさんは格好いいですよ」

「ははは、お世辞はいいから」

「頑張つて下さいね。おやすみなさい。また明日、いい日を過ごしましょう」

「うん、おやすみ。また明日」

大変ではあるが充実したこの日々。外の世界で、虐待を受け続けていた日々には比べればまるで天国のよう。

何のために生まれて、何のために生きて、何のために死ぬのか。誰しも一度考えたことはあるだろう。その問は未だ終わることはないし、おそらく今後も問い続けるだろう。

だが、

(これも答え、なのかもしれない。多分一つじゃないんだ)

生きているという実感は、痛みじゃなくとも感じられるらしい。

034 紅魔泊地案

『紅魔館』は妖怪の山の麓に位置する、吸血鬼の住処である。山頂の諏訪湖から流れ出る河川は海方面だけではなく、麓へ向けても流れているのだが、その河川は紅魔館の近傍にある『霧の湖』にも繋がっている。枝分かれた細い川は他にも玄武の沢などにもつながっているのだが、それはさておき。

鎮守府の座する諏訪湖はほど広く、艦娘の演習などにも利用されている。近海での演習も勿論あるが、取り立てて諏訪湖での演習に特別さを見出すなら——それは紅美鈴の存在だ。

『艦娘さんの演習のお相手を？ 私で良ければ構いませんが……』

幸いにも、鎮守府の門が見える位置に諏訪湖はある。弾幕、スペルカード、格闘術など駆使し、一対多という圧倒的不利な演習にも関わらず、美鈴は来客の有無を確認しながら相手をこなしているのである。

正直に言ってしまうえば強い。紅魔館の異変の時、どうして勝てたのだろうかと思えるくらいには。

さて、そんな紅美鈴は紅魔館から人材の派遣という名目で鎮守府の門番を勤めている。基本、紅魔館と情報をやり取りする際は彼女を通して先触れを出すのだが、急ぎの用件や大事な案件は直接艦娘や青年が出向くことも珍しくない。

では、どのようにして？

勿論諏訪湖から、霧の湖直通の河を伝って。

長門にお姫様だっこされ、河を下って紅魔館の入口へ向かう青年。気恥ずかしさは早苗の時とどちらがマシだろうか。

こうして到着した紅魔館であるが、不在のはずの門番の座には、新たな門番が居座っていた。驚きながらも、青年はその可愛らしい門番に近付いてにこやかに微笑む。

「おい、オマエ何の用だ？」

「お疲れ様。門番をしているのかな？」

「おーそーだ！ 仕事中に寝ないことをジョーケンに、アタイは門番として雇われたんだぞー！」

「おおそうなんだ。仕事中に寝ないなんて、美鈴さんとは大違いだね！」

「えへへ、アタイ偉いかー？ あ、思い出した！ オマエ、確かカミツレだったな！ 今日は何の用だよー？」

「レミアさんに用があるんだ。今日はいらつしやるかな？」

「確かサクヤに追いかけてたぞー。なんでも新しい服を続けて着せ替えさせられるのが嫌とかで」

「ああ……うん。じゃあチルノちゃん、通してもらってもいいかな？」

「オマエはフブキ達の仲間だからな。仕方ないから通してやるよー！」

小さな門番は、力いっぱい笑ってくれた。

紅魔館に入り、エントランスで待つこと数秒。瞬間移動でもしたかのように突然目の前に現れた十六夜咲夜が、訝しげな表情でエプロンドレスを揺らす。

「あら、カミツレ？ 今日に来る予定だったかしら？」

「ああいや。ちよつと急で悪かったけど、レミアさんにお話があった」

「ふうん……？ わかったわ、お嬢様の予定を調整しましょう」

「ありがとう、助かるよ」

こうしたことは多々ある。あらかじめ伝えておくべきだとは青年もわかっているのだが、ほとんどの場合、レミアや咲夜が都合を合わせてくれるのだ。それに甘えてしまうのも良くはないが、訪れるたびに驚きながらも嬉しそうに顔を合わせてくれるのが、少しだけ嬉しく思わないでもない。

また、元門番であった美鈴からも、

『カミツレさんなら顔パスでいいんじゃないですか？ いつでも』

と、許可のようなものも貰っている。これに効力があるかは知らないが。

応接室に通され十数分後、バルコニーでお茶を飲みながら面会すると言われ、咲夜に連れられて、青年は長門を伴ってバルコニーへと移動した。

晴天の中、強い日差しにさらされるバルコニー。吸血鬼であるレミアは本来夜行性。強い日差しを好まず、直射日光に触れることすらためらうそうだが、今回お茶をするにあたっては、小洒落た白いテーブルを覆うような大きな日傘を立てて対策していた。

スキンケアは日焼け防止から、ということらしい。

「宴会以来ね。また異変を解決したそうじゃない」

「艦娘の皆の力あって、そして紅魔館や多方面からの助けあってのことです。お礼を言わせてください」

「ふうん……そうね。今のお前はただ上に立っているだけ。異変も、艦娘の力押しに頼っているだけみたいじゃない。美鈴や咲夜からの報告を聞く限りではね」

「……ええ、本当に」

「いつの日か、本当にお前の指揮で艦娘が動く日が来るのを楽しみにしているわ。やっぱり人間は面白いわ……フッフ」

ティーカップを傾けるレミアから、容赦のない言葉が降り注ぐ。可愛らしい見た目だけではなく、観察眼に優れているのがこの吸血鬼の恐ろしいところである。本当に、見た目だけなら駆逐艦と変わりないのだが。

青年もティーカップを傾ける。空になったそれを置いたところへ、咲夜が言葉もないままにおかわりを注いだ。

「用件を聞いわ。顔を見る限り、ただお茶を飲みに来たわけではないよね」

「ええ。今日はお願いがあって来ました」

言葉を告げるのに勢いをつけるために、もう一度ティーカップを空

にする。そこへすかさず、咲夜がおかわりを注ぐ。

締まらないなあなどと思いながら、青年は半ば諦め気味に口を開いた。

「紅魔館に、艦娘を駐留させる許可を頂きたいのです」

レミリアがティーカップを口につけ、長い時間が過ぎる。ティーカップを下ろしたかと思えばため息をつき、青年を物色するかのごとく睨みつけた。

ゴクリと、息を呑む青年。話が突飛すぎたと思い、慌てて口を開くのだが。

「えっと、突然のことですので説明したいと思います。まず——」

「いいわよ」

「駐留させる理由が……は？」

「別に何人でもいいわよ。あ、代わりに少しは食料を融通してちょうだいね」

「え、ええ、それは勿論ですが……いいんですか？」

「伊達に大きな館を抱えてないわよ。フランも喜ぶでしょうし」

当のレミリアはまるで気にしていない様子。

スコーンをかじりながら、小さな吸血鬼はすまし顔で告げる。

「興味はあるわ。美鈴から報告はあるけれど、艦娘のことをこの目で確かめたいのよね」

「は、はあ……。一応、駐留するのは一個水雷戦隊。5、6人を予定しています。まだ人員の候補は絞っていませんね」

「センカンとかいうのは来ないの？ 強いと聞いているから楽しみにしてるわ」

「いえ。水雷戦隊というのは魚雷や爆雷を使う水雷戦を行う艦隊です。軽巡洋艦と駆逐艦が主になります。戦艦は含まれません」

「……そ、そう。残念だね、ええ……」

紅魔館に派遣するのは一個水雷戦隊。沿岸での対応は鎮守府で行うとして、紅魔館の部隊は内陸部で河川を中心とした偵察を行う予定である。

沿岸を押さええていても、深海化が発生する可能性がある。それを調査するための部隊であるといえよう。偵察しつつ、異常を発見したならばそれに対処、可能ならば原因を突き止めるところまで。

何も起きないならばそれに越したことはないが、鎮守府には現在艦娘が一定数集まっているのだ。より多くの情報を得ようとした上での判断であるが、この一步が吉と出るか凶と出るか。

長門にも相談したところ、快い同意を得られた。

「事情はわかったわ。艦娘を預かる以上、私たちも深海化の調査には協力しましょう。紅魔館の周辺は任せてちょうだい」

「緊急時にはレミリアさんの指示に従うように伝えておきます」

ちなみに紅魔館の場合、守矢神社や鎮守府のように艦娘の傷を癒す入渠施設はない。よって、戦闘が発生して被弾した場合は、一度鎮守府に戻ってこなければならぬ。ただし、妖怪の山と紅魔館は距離もそれほど離れていないため、艦娘の回復についてはそれほど心配していない。

大型の艦種を派遣しない理由もそこにある。紅魔館周辺で戦闘が発生しても、鎮守府から支援艦隊を送り込めばすぐに到着するため、いわば時間稼ぎだけで事足りるのだ。

本当ならば軽空母を一人追加する予定であったが、残念ながら現在考案中の作戦を踏まえるならば、派遣することはできない。

「……まあ本音を言えば、全員紅魔館に住んでくれるのが一番ありがたいわね」

「それは無理な相談です」

「わかっているわ。それで、いつから受け入れをすればいいの?」

「そちらで用意が出来次第、こちらから送り出しましょう」

「なら3日よ。準備はしておくから、3日後以降に艦娘を連れてきな
ゃん」

「(配慮に感謝を)」

このように、レミアアの即断によって、紅魔館への艦娘の配備が決まったのであった。

夕食時、食堂にてほぼ全員が集まっているところへ通達する。

「えーゴホンゴホン。突然のことだけど、君たちの中で異動したい人はいるかな？」

派遣を予定するとはいえ、人員の調整は済んでいない。一個水雷戦隊を派遣するのであれば、軽巡洋艦一人と一個駆逐隊あたりが妥当だろうか。尚、今回は試験的な運用であるため、ローテーション等はまだ考えていない。

「異動先は紅魔館。もし希望する人がいれば、手を挙げてくれるかな？」

「長門だが……一言いいか？ 提督よ、その言い方では誰も手を挙げない。考えても見ろ、皆に少なからず好かれているのはいくら提督でもわかるだろう。わざわざ離れたと思う者がいるものか。夕食がまぶくなってしまう」

「あ、そ、そう……なんだ」

確かに、言葉を伝えた先に見えたのは、該当する艦種の艦娘たちの不安そうな顔であった。もしかしたら、いらぬ誤解を与えてしまったかもしれないと思い、青年は言葉を変える。

「聞いて欲しい。幻想郷では、僕らの艦隊は深海棲艦に対する重要な戦力になる。いずれ色んなところに派遣して、幻想郷全体をカバーしたいと思ってる。その為の第一歩として、まず紅魔館に派遣してうまく運営できるか試したいんだ」

「ひとつ補足をする、優秀かつ信頼のおける者でなければ任せられない。我々の艦隊はまだ日が浅いが、その中でもより付き合いの長い艦が一人はいてくれれば助かる。ある意味では栄転と考えるもらっても構わん」

相変わらず優秀だなあと、青年は長門を見て思う。自分の言葉足らずな部分を完璧に補足してくれるのだから。

などと、考えているうちに一人目の手が挙がる。

「ならあ、軽巡洋艦は私が行こうかしら〜」

「お、おい、いいのか龍田?」

「誰か行かないといけないうのでしよう?」

軽巡洋艦から志願したのは天龍型二番艦の『龍田』。水上偵察機の運用は難しいが、軽巡洋艦としても経歴の『長い』彼女ならば、上手く駆逐隊を導いてくれるだろう。

「ありがとう。駆逐隊はどうか?」

「なら、電たちが行くのです」

「電……いいの?」

「電は吹雪ちゃんたちと一緒に、最初に司令官さんの所にやってきたのです。司令官さんのこと、ちゃんとわかってるつもりですから」

「……ありがとう。頼りにしてるよ」

電が率先して挙手したことで、姉妹艦の暁、響、雷らも納得したような表情を浮かべる。不満など持たなかったようので、駆逐隊は第六駆逐隊に決定した。

長門の話を聞いてからではもっと決まるのに時間がかかるかと思っただが、想像以上に早く決まってしまう。異動の決まった艦娘が他の艦娘から励まされる中。

青年は彼女たちへの敬意を表して、指示を告げる。

「3日後に紅魔館に派遣する。それまでに準備をしておくように」

「はいっ!」

「貴女方は……僕の、僕たちの誇りです。こうして自分から名乗りをあげてくれたこと、本当に嬉しく思います。でも、怪我にだけは気をつけてください。万が一があっても、紅魔館よりは貴女方が生き延びることの方が大事ですから」

食堂が、シンと静まり返る。

駆逐隊の4人が、唇を引き締めて敬礼する姿だけが場の空気を動かした。

そして3日後、鎮守府にて。

水雷『第十一水雷戦隊』

——軽巡『龍田』

駆逐『暁』『響』『雷』『電』

「みんな大丈夫？ 忘れ物はないかしらあ？」

「準備万端なのです！」

「レデイにミスなんてあるわけないわ！」

「紅魔館で生活か……楽しみだよ」

「司令官、辛かったらいつでも私たちを頼ってね！」

「うん、気をつけて。なるべく様子を見に行くから」

これからみんなと離れ離れになるというのに。

誰一人として辛そうな、寂しそうな表情は浮かべていなかった。

電は少しばかり緊張していた。艦隊旗艦こそ軽巡洋艦である龍田が務めているが、艦隊の中では古株である自身が、青年の意思を汲み取って艦隊運営を行わなければならないためだ。

（司令官さんは……いい方向に変わってくれたのです）

当初会ったばかりの頃は、なんと悲しい人物だろうかとも思った。自分の中に閉じこもって、頑なに人を信じなくて。それが今や、立派に前を向いて、現実を受け止めて、自分たちのためにと行動してくれる。時には自身の苦痛さえ顧みずに。

（長門さんがいるから、もう大丈夫だとは思いますが……）

それでも、電は青年を心配する己の心を隠しきることはできない。あの青年には一部の常識が欠如しているとも言おうか。今後、何かとんでもないことをしでかしてしまうのではないかと不安でたまらない。

だから、長門が積極的に青年の元についている。本来ならば、最初から隣にいた吹雪がそのまま青年の傍につきはざだったのだが、長門

に率先して青年を支えるように頼み込んだのだ。それは勿論、歪な青年をある意味矯正するために。

（どの道、私たちじゃ司令官さんに何もできませんでした。ただ無理をさせてしまうだけだったのです）

かつて世界を席卷せんとする軍の頂点にいた長門ならば、青年を支えられる。正しい方向に、導くことができる、と。吹雪も叢雲も、漣も五月雨も、皆で長門の元へお願いしに行ったのである。

それは、複雑な表情とともに了承された。

『私は敗戦した軍の代表だぞ？ 私は……私では、 “また” 失敗してしまう』

『ならこの幻想郷では、司令官さんを正しく導いて欲しいのです』

霧の湖に到着した艦隊は水辺から上陸し、生活用具一式を持ちながら紅魔館の門を訪ねる。夏場だというのに涼しさを撒き散らす妖精の案内で紅魔館に入り、

エントランスで出迎えてくれたのは、余裕たっぷりの表情に不敵な笑みを浮かべる、いかにも雰囲気作っているレミリアの姿であった。

「私がこの紅魔館の当主、レミリア・スカーレット。話はカミツレから聞いている、よろしく頼むぞ」

「あ！ レミリアア！」

「うげっ!? 暁を寄越すなんて……あの男」

「レミリアア！ そんな言葉遣いじゃいけないわよ？ レディならもつとお淑やかな言葉を使わないと！ 一緒に鎮守府の掃除をした仲間だから、私の注意も聞いてよね！」

「そーだそーだ暁の言うとおりだぞー」

「さて着いたわね！ まずはお掃除かしら？ 私に任せて！」

「うふふ、十六夜さん。騒がしいけれど、よろしくお願いするわあ」

「全く……賑やかになりそうね」

今はあの心優しい提督が、少しでもまともな感性を取り戻してくれ
ることを祈るしかない。そのためには、長門の教育に加えて自信をつ
けさせることが最重要。

例えば、艦娘を紅魔館に派遣するという判断が間違っていないかつた
ことを証明する、などの手段で。

(私だって——司令官さんのために頑張りたいのです)

これはただの艦隊派遣ではない。幻想郷の河川を調べるためでも、
紅魔館との関係を良好にしようとするためでもなく。

青年の提案を、行動をもって肯定するための『作戦』なのだから。

「お世話になるのです、よろしくお願いします」

なお、派遣するまでの間のある日の午後。

「司令官！ あっち行こー！」

「司令官、その、おんぶがずり落ちそう」

「司令官、何か私にしてほしいことはなあい？」

「こ、こらこら。いっぺんに喋ったら誰かわからないよ」

「司令官さん、おやつを一緒に食べるのです」

「駆逐艦の子は元気ねえ、天龍ちゃん？」

「うっぐ、ひっぐ、た、龍田あ……」

「あらあらどうしたの？ この世の終わりみたいな顔してるわよお
？」

「だ、だって、折角また会えたのに離れ離れだなんてよお……」

「嬉しいこと言ってくれるわねえ、やっぱり天龍ちゃんは可愛いわあ」

青年が教育を受けているはずの執務室では、移動予定の艦娘と天龍
が遊びに来て無法地帯となっていた。長門は長門で、駆逐艦を追いか
けてあしらわれている。

「僕の……教育……」

「しばらく会えなくなるんだから、これぐらいは許してよねっ！」

「司令官、次は抱っこだよ」

「何、今日のノルマは既に終えている。だから提督も、思う存分駆逐艦を愛でるがいい」

「長門さん、廊下で天津風が寂しそうにしてたわよ？」

「何っ!? 今行くぞ！」

「龍田あ……龍田あ……うわああ——っ」

「あ、あらあら。提督、少し落ち着かせてくるわねえ」

「あ、うん、お大事に……？」

この日青年は、夜が来るまでこの艦娘たちと戯れ、話し、遊んだのであった。

ふと、電と目があった時。

「なのですっ！」

何やら優しい微笑みを送られたことは、青年の心にいつまでも残り続ける気がした。

035 その名は

これは、紅魔館に艦隊を派遣するまでの間の出来事である。

妖怪の山、守矢神社近傍の諏訪湖に腰を据える鎮守府は、通称『守矢鎮守府』と呼ばれている。鎮守府の存在を知らない人がいたとしても、『守矢』と名がつくからには妖怪の山となにかしら関連があるのだろうと思わせることはできるだろう。もっとも、まず守矢神社が人々に知られていなくては意味もないが。

さて。そんな守矢神社、ひいては鎮守府を広報する方法の一つに、人里での海産物の販売がある。これを実行するまでに、制海権の確保をした上で、警戒しつつの漁、高速で持ち帰つての保存、妖怪を退けながらの輸送といった苦労は避けられない。

しかしこれらの任務、意外と馬鹿にできないものである。漁はともかくとして、高速航行はそれ自体が機関に負担をかけるものであるのだが、不調がないということは艦娘も安心して全力で航行できるということ。にとりの整備力の高さを再確認するという意味では、これ以上ない訓練なのだ。いざという時、ためらいなく全速を出せるという強みは大きい。

また、妖怪の山から人里への輸送。人口の最も多い人里で何かあった場合に備えて、地理を把握しておくという意味では非常に重要性が高い。道中に襲撃してくる野良妖怪も、幻想郷における弾幕を利用した戦闘を経験する、という意味では非常に有的な実戦だろう。

ちなみに、永遠亭から供与される『高速修復材』、通称バケツであるが、これは人里で受け取っている。当初は人里で因幡てると待ち合わせ、受け取るようにしていたため理由もなく人里へ向かわなければならなかったのが、こうして人里に艦娘の居場所ができた今、受け取りは輸送部隊が担う運びとなったのである。

最初は、ポワンと思いついただけの人里での海産物販売。これが形になってみると、案外幻想郷での最初の一手としては上々だったのかもしれない、と青年は息をつく。

そんな青年はというと、現在鎮守府の執務室で次々に舞い込む報告

を聞いている最中であつた。

「混成駆逐隊の天津風よ。美鈴との演習、終わったから報告に来たわ」
「お疲れ様。どうかな、幻想郷の人との戦いは？」

「あなたの考えだったの？ その、いいと思うわ。私みたいな着任したばかりの艦娘でも、艦娘としての戦い方や弾幕の戦闘のコツは掴めるし……」

「提督。第七駆逐隊、旗艦の隴です。鎮守府周辺海域の偵察から帰投しました」

「お疲れ様。首尾はどう？」

「周辺に深海棲艦は見当たりません。発見した場合は……いつも通りですね？」

「連絡を入れてもらって、鎮守府から大型艦を派遣……でも、偵察して戦力だけで対処できそうならそのまま戦ってもらおうよ。期待してるけど、無理はしないように」

「はい！」

「司令官、第十一駆逐隊、吹雪帰還しました！ 今日もお魚大漁です！」

「お疲れ様。にとりさんの冷蔵庫にはもう運んだのかな？」

「はい！ 本日分の資源は、白露型の第二駆逐隊の子たちが明日、人里へ運ぶ予定です！」

「ふむ……」

様々な報告を受けるのだが、その中で考えたことが一つ。

(人里……：そういえば、霖之助さんに改めてお礼言わないとな)

思い立った青年は居ても立ってもいられず、その日の教育を早々に終わらせて人里へと繰り出したのであつた。

が、教育を終えて人里についたのは夕刻より少し前。この時間から訪ねるのは流石に失礼かと思ひ、人里に設置されている海産物の販売所を手伝っていた。

本日の販売員は、第六戦隊より青葉と衣笠である。二人共笑顔に定評があり、今日の販売は大成功だったらしい。

「司令官。そろそろ戻らないといけないんじゃない？……？」

「ん、もうそんな時間かあ」

「私たちは川を伝って戻りますけど、司令官は徒歩でここまで来たんですよね？ 早く帰らないと早苗さんに怒られますよお？」

守矢神社と人里の間にはなかなかの距離がある。青年は飛べるわけでもなければ水上を進むこともできないため、いつも走って移動しているのである。ランニングがてらとはいへ、流石に距離が距離であるため移動も一苦勞であるが。

暗くならないうちに帰らなければ、妖怪に襲われてしまう可能性は倍増する。妖怪の山の圏内であれば言わずとも天狗の護衛があるのだが、そこを外れば青年にとって未知の領域。襲われないことを祈って毎度のごとく川沿いを走るのだが、不思議と襲われたことはない。

後で知ったことだが、どうやら艦娘の迎撃が鉄壁過ぎて、野良妖怪たちの間で川は艦娘のテリトリーという認識が広まりつつあったために、近づいてこなかったらしい。

「前々から言おうと思ってましたが……移動する時は護衛をつけてください」

「うーん。自分で指示しておいてなんだけど、皆忙しそうだからさ。個人の都合で振り回すのも悪いし」

「それで司令官の身に何かあった時のほうが問題です！ 今回は私たちで協力して運びますけど、今度からは誰か一人、常に傍に置いて行動してくださいね？ 『秘書艦』を決めるべきだと具申します」

「あ、はい、ごめんなさい」

「では、これから帰る準備をしますから、少しづらついていてください」

青葉にこつてり絞られ青年。襲われなかったという慢心は、やはり甘い認識であつたようだ。この至らなさは、やはりまだまだ引き締め余地が有るといふことだろう。

少しだけ沈んだ表情になつた青年は、トボトボと人里を歩き始めたのであつた。

当然、霖之助に会うのはまたの機会である。

(うん？ あれは……)

夕方ということもあり、人気も少なくなり始めた頃。誰もいない道の真ん中に、少し背の高い一本の花が眩く咲いていた。

風に吹かれたのか、所々砂や泥も付着しているが、それでも茎は折れずに太く伸びていた。

(根性あるなあ……。でもあそこじゃ蹴られるかもしれないから、道端の方に移動させておこうかな)

ただの気まぐれだつたのだろうか。

それとも、花に何かを感じたのだろうか。

どちらでもない。ただ青年は、花を見て思ったことをそのまま実行しただけ。言わば、そのときは何も考えていなかったのである。

(道端の方に先に穴を掘つといて、根っこを傷つけないように周りから丁寧に……。あとは移し替えて穴を埋めて……。よし、おしまい！)

近くの水路から手で水を掬い、土回りを馴染ませれば完成である。心なしか、移し替えた花は誇らしげに風に揺れているような気がした。

「よしよし。じゃあ、これからも強く生きなよ？」

独り言にも近い声を花に対してかけたところで、背後から足音。

と共に、鈴の音のように清らかな声がかけられる。

「あら、移し替えてくれたのね」

独り言を聞かれていたのかと思い、恥ずかしさと共に振り返ると。

背後に立っていたのは、小さなスコップを持つ無表情の風見幽香であつた。

「私が移そうと思つていただけけれど……あなた、優しいのね」
「そう……ですか？」

「道の花なんて、見向きもされずに踏まれていくことが多いもの」
一陣の風が吹き、彼女の髪を撫でていく。夕日に照らされて映り出すその顔は、どこかミステリアスな雰囲気を感じさせつつも神秘的な美しさを放っていた。

「……………？ 顔が赤いわよ？」

「ああ、夕日のせいです。それより、風見さんはどうしてここに？」
「……………？ 私のことを知つているの？」

「どうやら彼女は自分のことを知らないらしい。と思つたが、深海化した状態で遠距離から交戦し、倒した後も川辺に寝かせていたのだ。知つているわけもない。」

「少しだけ、彼女に対する恐怖心を抱きながらも口を開く。」

「僕は……艦娘をまとめる、提督というものをやっています」

「ああ……あなたが『提督』。その節は世話になつたわね」

「幽香は一瞬だけ、歯を見せるように不機嫌そうな表情を浮かべる。」

「あ、あの、風見さん？」

「ああ、ごめんなさいね。あなたや艦娘さんたちに恨みはないのよ。本気で戦つてみたいという気持ちがないではないけれど、本当よ？」

「ただ、私の中に勝手に入り込んできた深海棲艦というのは——」

「気に入らない」と、その瞳がギラつく。

「流石にその表情には背中が凍りついたため、青年は話題を変えた。」

「か、かか、風見さんはどうしてここに？」

「夕食を買いにね。あなたの所の子から、お魚を買わせてもらったわ。あの青葉つて子、鴉天狗と同じ匂いがするわね。人のことを根掘り葉掘り……」

「そ、それはそれは。今後共々鼻屑に」

「私なんて皆怖がって誰も近づかないのに、あの子は勇氣あるわね」
「えつと……後で叱っておきますね？」

青葉何やってるんだ、と思いつつも、青年はなんとか怒らせないようにと幽香の言葉に相槌を打った。

実は魔理沙から、

『幽香あ〜？ あいつは見かけたら近づかないほうがいいぜ。手当たりに次第に襲いかかるとんでもなく危ない奴だからな』

と言われていたのだが。

(……時々怖い。怖いけど——)

青年は悪意には敏感だ。幼い頃から精神的にも肉体的にも悪意に晒され続けてきたし、その証拠は今も身体から消えることはない。表情の機微一つで悪意の有無を理解し、言葉の抑揚一つで悪意の強さを認識する青年からすれば、他人が向けてくる悪意を読み取るなど造作もないこと。

では、風見幽香についてはどうだろう。

怒るときは怒る。嫌なものは嫌と言う。これは誰しも同じことだし、あつて当然の感情だ。

元の表情が固いのかそれほど温かみは感じさせないが、不機嫌さだけはその冷徹そうな見た目と相まってより強調される。かといって笑えば邪悪さを感じさせる笑みになってしまいうし、楽しそうな表情など浮かべようものなら残酷な仕打ちを想像してしまうだろう。

なら、悲しい表情は？

どんなに表情の固い人でも、悲しい顔だけは隠しきれない。表情筋は動かせずとも、眉が八の字になるのを止めることはできないのだ。だから。

「皆怖がって」と話した彼女の本心は、高圧的に接しようとした結果などではなく。

勇氣を出して笑いを持たせようとした、彼女なりの自虐だったのかもしれない。

彼女が、自身が怖がられていることに悲しむ心を持つというのなら、

(思ったより、優しそうな人で良かった)

「どうやら、命を危惧するほどのことでもなさそうである。」

自分への悪意など、微塵も感じさせてくれないのだから。

「そういうえばあなた、どうしてその花を移してくれたの?」

「どうして、ですか? 理由を聞かれても難しいですね。強いて挙げるなら、蹴られちゃうのを考えると嫌だったから、でしょうか」

「そう……………」

少しばかりの間目を伏せて、幽香はもう一度ゆっくりと瞳を開く。

「道端に咲く花って、あなたはと思う?」

「……………いきなりですね。見向きもしないということはないですよ。確かに根を張って生きていますから、力強いと思います」

「一般論として……………群生する花に比べると、美しさは見劣りすると思わない?」

「うーん……………数年前の僕なら頷いていたかもしれませんが。でも、しおれたり枯れたりすることなく、誇らしげに咲いているのっていいと思いません? 見向きされなくても、一輪だけ頑張ってるのは応援したくなるというか……………」

「……………ふうん」

「どんな場所でも花は咲きますし、根を張って生きてるのは同じです。沢山の花も勿論美しいです。けど、ポツンと花開いているのも、風情があるんじゃないかなって……………僕は思いますよ?」

「ええ。本当に」

青年が植え替えた花の元にしゃがみこみ、その花びらを指先でなでるように触れる幽香。その表情は、実に慈愛に満ち溢れていた。

「四季折々、ありとあらゆる場所で、花は私たちに語りかけてきてくれるわ。時には形を変える感謝を、時には秘密にしたい感情を、時には過去の思い出を、時には心からの愛情を」

「花言葉、でしょうか? すみません、花の名前って実はそれほど詳しくなくて」

「花言葉は別に定められているものではないわ。その時その人によって変わるもの、あなたにとつても……例えば桜に対する印象ぐらいはあるでしょう?」

「ええ。綺麗とか、可愛いとかぐらいは」

名残惜しそうに花びらから指を離し、幽香は立ち上がる。

「大切なのはその心よ。惑わされず、己を信じ、自分の信じる花への愛情を大切に、毎日を花に囲まれて——花を愛して生きる。ねえ、これって素敵なことだと思わない?」

「ええ。それはとても……幸せそうです」

「ふふ、わかってくれるのね」

まるで愛玩動物を愛でるかのような幽香の視線は、青年に向けられた。

大人の女性のような落ち着いた雰囲気醸し出す彼女。しかし、この時の語り、この時の微笑みだけは、まるでおとぎ話に憧れる少女のよう。

満足そうに頷いた幽香は、その表情を崩さないまま口を開く。

「あなたと——いいお友達になれそうよ」

図らずして、青年は新たな交友関係を築いたのであった。

「もう陽が暮れてしまうわね。興が乗って随分と話し込んでしまったけれど、あなたこんなところにおいていいのかしら?」

「あ——そういえば青葉たちを待たせてる」

幽香と話し込んでしまい、結構な時間が経ってしまった。青葉と衣笠を待たせてしまっているが、おそろくカンカンだろう。

打ち解けた頃には、幽香から感じられる殺気のようなものは完全になくなっていた。友人と称してくれたことから、敵対的な心情というものはおそろくなくしてくれたのだろう。

というより、それすらも青年の勘違いだったのではないかの思うほ

どに、幽香は青年に美しい笑みを向けてくれるようになったのだ。邪悪さなど一欠片も感じさせず。

「すみません、今日はここまでのようです」

「そういえば、ちゃんと自己紹介をしていなかったわね」

「あ、言われてみれば……」

「私は風見幽香。〃花を操る程度の能力〃を持つ妖怪よ。幽香でいいわ。花を雑に扱ったら、命はないものと思いなさい」

「あはは……肝に銘じておきます。僕は守矢神社にお世話になっている茅野守連です。神社の傍の湖で鎮守府を運営して、艦娘の皆と一緒に深海棲艦と戦っています。僕のことにも自由に呼んでください」

「カミツレ……？」

「ええ、カミツレといいます」

突如として、その瞬間幽香が顔色を変える。

だが青年は。その時、その表情の変化にだけは——気づくことができなかつた。

「カミツレ…………。ええ、〃忘れることはないでしょう〃」

「お、大袈裟じゃないですか？」

「別にそんなことないわよ、カモ君」

「カモ君!?! あつと……すみません、そろそろ戻りますね」

「ええ、また会いましょう」

気をつけてね、と後ろからの声を聞いた青年は、ちよつとだけ心が温かくなるのを感じた。

まさか幽香とこのように仲良くなるなど、少し前の自分なら考えもしなかつただろう。

戻ると、青葉たちが文句を垂れながら青年を待っていた。衣笠に至つては欠伸をしながら呆けてしまっている。

「どこに行っていたんですか司令官！ 妖怪に襲われてないか心配したんですよー」

「ごめんごめん。ちよつとお花がね」

「あつ、そ、その……ト、トイレなら仕方ないです……」

その後、なんとか青葉たちをなだめながら、青年は鎮守府へと帰ったのであった。

またもや艦娘にお姫様だっこされながら帰るのか、と思っていたが、二人の輸送方法は簡単な筏を組み立ててそれに青年を乗せ、二人が引つ張って運ぶという酷く現実的なものであった。

別にお姫様抱っこを期待していたわけではない。別に。

艦娘たちの元へ戻っていく青年の後ろ姿を見送り、幽香は足元に元気に立っている花を見る。

(何だか、不思議な子だったわね)

悪い子ではないのだが。

自分もこの花の位置は気になっていた。動かそうと思った矢先に、あの青年が踏まれない場所へと植え替えてくれていたのだ。

彼自身は自然が好きと話す。だが、自然というより——「世界」が好きのように感じ取れた。話している時の表情の輝きも可愛らしいものであったが、時折見せる沈んだ表情を、幽香は見逃さない。

(艦娘、深海棲艦、提督……。あの子も大変だわ)

深海棲艦のその悪辣性は、この身に体験しただけあつてよく分かる。知らないうちに心の隙間に入り込み、いつの間にか蝕まれているのだ。

それに対抗する能力を与えられた青年と、艦娘。他人事ではあるが、あの好きな青年だけならば応援してやらないこともない。

艦娘については、強さという点で正気の状態で戦ってみたいという気持ちはあるが。

(それにしても、カモ君……カミツレ君ね)

しゃがみこみ、足元の花にもう一度触れる。

花からリンゴのような香りを漂わせる白い花。害虫予防にも利用され、素朴でありながらハーブとしても名高いこの花の名前は——カ

モミール。

和名を『カミツレ』という。

(あの様子じゃ……自分の名前のこと知らないんでしょね)

名前を聞いた直後は、まさか道端の花の話で自画自賛しているのかとも思ったが、どうやらそうではなさそうだ。

だが、その名付け親はどういうつもりでその名を与えたのだろう。

(カモミールは地面を這うように生えて、踏まれれば踏まれる程強く育つ。その生命力とたくましさから、一般的な花言葉は――)

『苦難に耐えて』

一体、彼はどのような苦難を迎える事になるのだろうか。あるいは、これまでどのような苦難が彼を翻弄したのだろうか、と。

(でも、カモミールの花言葉はもう一つ)

『逆境の中で生まれる力』

願わくば、花の名を冠するあの不思議な青年が、花が好きなあの友人が、人生の中で襲い来る苦しみを乗り越えることを祈ろう。幸多からんことを、花好きの一人として応援しよう。

(久しぶりに面白い人間に出会えたわ)

カモミールの花びらに指先で触れる。

澄ました顔で立ち上がり、幽香は静かに帰途についた。

036 スーパーズ

人は、いつの時代もロマンを追い求める生き物である。

何をもってロマンと呼び、何をもってロマンとするか。ロマンに何を見出し、ロマンから何を感じるか。それは人によって異なる。

人生はロマンの連続であるし、ロマンは人生を豊かにする。日々の虚しさの中に感じるささやかな幸せもロマンであるし、道端を歩いて転がっている石ころを蹴るのもロマンだし、空を眺めてあの雲つて潰れかけのオタマジャクシみたいで風情があるなどと思うこともロマンなのだ。

ぶっちゃけ、人がそれをロマンと思えば何でもロマンだ。

ありとあらゆる分野で人はロマンを追い求め、ロマンに生き、ロマンに死ぬ。もはやロマンという言葉がゲシュタルト崩壊しそうであるが、そこで一つ問いを投げかけよう。

あらゆる分野にロマンが認められるというなら、兵器はどうだろうか？

戦闘で利用される兵器には、戦闘中のそれぞれの目的を達成するための役割に特化したものが多い。

例えば戦車。塹壕の突破と陣地破壊、火力支援を目的としているため、強靱な走破性と頑強な装甲、圧倒的な砲撃火力に特化しているといえる。

例えば戦闘機。航空機という分野で見れば輸送機や攻撃機など用途は分かれるが、戦闘機に求められる条件の多くは、速度と機動性、運動性である。

なら、艦船は？

圧倒的火力と装甲防護力を持つ戦艦。

航空機運用能力に全てを賭けた航空母艦。

圧倒的速度と用途の多様性に優れる駆逐艦。

いずれも、間違いなく歴史に名を残しているし、知名度も高い。

では、考えよう。

兵器としてのロマンとは何か？ 人類の想像をはるかに超えたへ

ンテコな設計思想と明確に答える人もいるだろうし、デザイン的な面で正直にダサイと答える人もいるだろうし、約束されたクソと一蹴する人もいるだろう。

もう一度、思い返して欲しい。

兵器としての、艦船としてのロマン。他を投げ打ち、一つ的能力に特化するという形でロマンが発揮されたのなら。

一つの答えには、『潔さ』といったものが当てはまるかも知れない。

その日、青年は工廠に呼ばれていた。作戦開始が数日後に迫っているのだが、にとりから急な呼び出しがあったのである。

レンガ造りの工廠内はどこどころ煤けていた。外より熱気のもりやすいこの環境で、にとりが干からびてはいないかと心配しながらも奥へと進む。

彼女は工廠横の弾薬保管庫にいた。

結果から言うと、

「やあやあ盟友、こいつを見てくれ。こいつを見てどう思う?」

「すぐく……多いです」

干からびるところか、整備地獄に追われているというのにツヤツヤしていた。十分に水分が足りているようで何よりである。

「この魚雷の山……どうしたの?」

「一時期魚雷が品薄になったから、独断で急ピッチで増産したんだよ。とはいったものの……なんだかごめんね?」

「……流石に多すぎだね、これは」

見れば、弾薬保管庫のおよそ半分が魚雷の在庫で埋まっていた。保管しきれなかったのか、むき出しの魚雷すら転がっている様は流石に怖い。

原料となる廃材は、妖怪の山の天狗が幻想郷中から集めてきている。その廃材で資源は賄われているのだが――

(どうしよう……無駄に使うわけにもいかないし……)

聞けば、深海化した小野塚小町との戦いの後、魚雷の生産が追いつかなかったことが原因であるらしい。着任した駆逐艦が増えたことも理由の一つであるらしい。

生産ラインはある程度減らしてもらおうとして、在庫をいかに減らしていくか、青年の頭を大いに悩ませることとなったのである。

場所は変わって鎮守府執務室。長門は青年に施す教育内容を紙にまとめていた。執務室の机を使っていいということだったため、青年の机を借りていたところ――

「てーとくー、遊びに来たよー。ってありや、いないじゃん」

「あら、本当だわ。じゃあ北上さん、私たちは私たちが別の場所に……」

本日非番であるはずの北上と大井が、執務室の扉を西部劇よろしく蹴り開けて入ってくる。下手したら艦娘の力では扉が壊れてしまうのだが、そこは加減してくれたらしい。

「まったく、行儀が悪いぞ。何か用か？」

「いやあ、提督に用があつてきたんだけどさー」

「提督なら今、にとりに呼び出されて工廠にいる。急ぎの用件か？」

「そういうではないのですけれど、重要な話です」

「ふむ……なら、直接工廠へ向かってくれ。私は提督の教育を充実させるべく、試行錯誤の途中でな」

「あ、長門さん。ここの凶解はこうした方が……」

「む？ おお、確かに！ すまんな、助かった」

「じゃあ、工廠に行ってくるよー」

と、二人はにこやかに執務室を去っていった。

その様子を見届けた長門は、改めて作成中である手元の資料に目を通す。

（艦種についての教育だが……重雷装艦は入れるべきだろうか。いや、しかし我々の艦隊には重雷装艦はいないし……。だが敵には重雷装艦がいる……。まあ、教えておくか）

そうして、長門は資料作成の続きに取り掛かったのであった。

「じゃあ、魚雷の生産ラインを半分減らすよ」

「そこで多分手が余ると思うから、もし良かったら、今後の開発・生産について、ちよつと相談してくれないかな？」

「おお？ なんだか面白そうだね、もちろんさ！」

工廠の休憩室にて、青年はにとりと今後の工廠の運営について話していた。とはいえ青年も素人同然。方針を掲げるとして、専門的な立場であるにとりの意見も合わせながら、あーでもないこーでもないという議論を交わす。

そんな時である。

「あ、てーとく見つけ」

「ここにいたんですか。探しましたよ」

「あれ、大井と北上？ 工廠……じゃなくて僕に用？」

空いている椅子に座る二人。大井はにとりをチラツと見て、丁度いいとも言わんとばかりに話を切り出した。

「話があります」

「は、はい。なんでしよう……」

「私たちに……もつと魚雷を積んでください！」

瞬間、瞳をぎらつかせるにとり。呆れながらもそんなにとりを制し、青年は丁寧な答えたのである。

「元々そうするつもりだったんだけど……」

「へ？」

驚いている大井に対して、青年は構わず話を続ける。

「ちよつと魚雷を作りすぎちゃったんだ。何かいい方法はないかと思っただけけど、そういうえば深海棲艦に重雷装巡洋艦がいたなーと思っただけね。戦術的にも幅が増えるだろうから、味方にも欲しいと思っただけだ——」

「ちよつとごめんね」と言い、青年は大井の手を取った。そして改めて流れ込んでくるのは、大井の過去の記憶。北上と共に重雷装艦として海を駆けた日々の波濤。

素晴らしい。大井のおてて、やわらかい。

「なつ——！ 何してけつかる！」

「ぐほっ!？」

「つて、あ、ご、ごめんなさい！」

手を取ると一瞬空気が止まるが、その後に腹部へと突き刺さる大井ブロー。服をなきものとし、皮膚を、血液を、腹筋を、押しつぶし容赦なく内臓へと圧力が加えられる。

という想像をしたが、大井が手加減してくれていたのかそんなに痛くない。

「いたたたた……鍛えてなかったら大怪我だったかも」

「て、提督も悪いんですよ！ 乙女の身体にいきなり触るなんて言語道断です！ 私に触れていいのは北上さんと球磨型の姉妹艦だけです！」

「はい、気をつけます！」

北上がやれやれといった表情だが、呆れながらも続ける。

「それで提督、どういうことなのさ？」

「ああうん。今は軽巡洋艦だけど、大井と北上の二人は過去に重雷装艦だったよね？ うちの艦隊も艦種に多様性が欲しいから、是非二人には重雷装艦になってもらおうと思って、さっきからにとりさんに相談してたんだけど……」

「私たちに相談もせず？」

「だ、だって、艦娘の艦装はほとんどにとりさんがチェックしてるから、まずは技術的にできるのかどうか聞いとかなないといけなかったし……」

「ちなみに、艦装の改造はできるよ。仕組みがようやくちよつとだけわかったからね。とりあえず、今回の魚雷マシマシ改装については特に問題はなさそうだ」

「え……にとりさん一人でできるんですか？ 普通はドックに入つて

いろいろ面倒な手続きがあるものなんですが……」

「まあ、というわけなんだ。あとは君たち次第だけど、どうかな？」

その問いに、大井と北上の二人は、

「もちろんです！」

「ごつちからお願いしたいぐらいだよー！」

と、満面の笑みで快諾したのであった。

ついでに、エンジニアの血が騒いだらしいにとりも満面の笑みであつた。

翌日。にとりが艀装の改装を終えたというので、大井と北上が工廠に呼ばれた。改装を終えた時間を見計らつて、青年もまた工廠へと足を向ける。

しかし、にとりの姿が見当たらない。休憩室にいるのかと思ひ、その扉を開けた時、

「えっ？」

「あれー、てーとくー？」

目に写りこんできたのは、一糸まとわぬ姿で着替えをしている大井と北上の姿であつた。

「あのっ、そのっ、えつと、こ、これは……」

「うっ、うううううう——」

「てーとくー、とりあえず部屋から出なよ」

「また変なタイミングで入ってきちゃつたもんだね、盟友」

「ご、ごめんなさああああああい！」

数分が経ち入室を許可され、部屋に入った時に出迎えられたのは、涙目で恥ずかしそうに顔を赤らめている大井と、ムツとした表情で自身に平手をかました北上の姿。

当然服は着ていたため、青年は頬に走る鋭い痛みと共に安堵を覚えるのであつた。

「うう、ひぐ、ふつ、ううう……」

「よしよし大井っち。恥ずかしかったね?」

「ご、ごめんなさい。まさか着替え中とは思わなくて……」

「技術的に可能とは言え、改装した艦装に適合するかどうかは、生身で一度検証しないとイケなかったからさ。何ていうか、みんなごめんね?」

「い、いや、その……ごめんなさい」

「改装のことだけど、特に問題はないよ。無事完了さ」

いつも自信に溢れて強気に振舞っている大井だが、裸を見られてこうも弱々しくなってしまうことに、流石に青年も驚愕した。北上はいつも飄々としているが、今回に限っては完全に自分を悪役とみなしているらしい。

無論、ノックしなかった自分が悪いのだが。

「じゃ、じゃあさ、その重雷装艦の艦装を装備したところがみたくない、なんて、ははは……」

半ば調子のいいことを言っていると自分でも気づいているが、この空気をなんとか打破しなければと思いい口にする。すると、大井が涙目ながらに頷き、北上はムツとした表情を崩さないまま、艦装をそれぞれ装着し始めた。

「おお……すごい……」

重雷装巡洋艦とは、旧海軍における遠距離隠密魚雷戦構想を支える立場として生み出された艦種である。連装魚雷発射管を片舷5基20門、両舷合わせて10基40門を搭載した艦種は、歴史上においても大井と北上のみ。

勿論、艦娘としての重雷装艦である彼女たちにも、その雷撃力には期待せざるを得ない。

「なんというか……可愛いらしいね?」

「これ一応武器だけどー? 目が腐ってるんじゃない?」

「いや、なんだろ。うん、可愛いよ?」

「可愛い……ですって……」

(まさか、艦装を装備してる女の子を可愛いと思う日がくるなんて

……。いやでも、絶対これを可愛いって思う人はいるんじゃないかなあ)

既に艦装との適合は確認済みであり、あとはテストを残すのみである。今後、ちよつとした作戦を考えているのだが、その作戦に参加させるにあたってテストもないまま出撃させるつもりは流石にないが

『提督、応答願ウ』

その時である。鎮守府のサイレンが大きく鳴り響き、長門から電文が届いたのは。

球磨率いる警備中の第二駆逐隊、村雨、夕立、春雨、五月雨が、敵の駆逐艦4隻を近海で発見した。長門から一個駆逐隊、又は重巡一個小隊の派遣が具申されたのだが、青年はこれを条件付きで認める。

その条件というのが、雷巡へと改装を終えたばかりの北上と大井を、実戦投入するといったもので、支援艦隊はあくまでそれを見守る立場であれとの命令であった。

訓練もなく、いきなり実戦に参加させるなど、本来は采配ミスもいところである。青年自身それはわかっていたし、最初はそんな無謀な策は考えていなかった。

だが、しかし。

「ねーとーとくー。私たちを使つてよ」

「雷巡の強さ、見せつけてあげますから」

目の前にいた少女二人だけは、やる気満々だったのである。

結果から言えば、誰も被弾することはなかった。

というのも、大井と北上の遠距離先制雷撃が、近海に単縦陣で侵入していた駆逐艦2隻をあっという間に沈めたのである。改装により砲戦火力は落ちたものの、駆逐艦より大きいその主砲は、当たれば巡洋艦クラスならば効力射にもなる。結果、残る敵は主砲で掃討し、戦

闘はずか15分で終了したのだ。

(うーん、強い……いや強すぎじゃない重雷装艦?)

歴史上では、二人が改装された時点で、既に艦隊決戦より航空戦が主体となりつつあったため、重雷装艦として活躍する機会はなく、輸送作戦等に従事していた二人。

しかし、彼女たちが望むのであれば――

(活躍の場は……用意してあげたいよな)

この幻想郷では自信を持たせてあげたい。その能力は強力であると確信させてあげたい。世界で、たった2隻の重雷装艦なのだから。帰投した際、二人が朗らかに、しかし誇らしく笑っていた様子をそっと見ていた青年は、改装して良かったと心から思ったのだ。

そして、報告しに来た時に告げられた言葉。

「てーとく、ありがとね!」

「裸を見た件は……その、不問にしますから」

時代を超えて、その力を誇示した二人は、勿論可愛いのだが、

(……カッコ良かったよなあ)

出撃前にはなかった、重雷装艦としての確かな芯を持ち帰ってきた彼女たちは、可愛くもあり、勇ましくもあり、そしてなにより――美しかったのである。

なお翌日。

提督に初めて全裸を見られた艦娘として、大井と北上が艦娘たちからスーパーズと称えられるようになっていたが、青年の鶴の一声によりそれは一日で終息した。

037 みよんな鎮守府生活

銀髪のボブカットに白い肌。白いシャツに青緑色のベストを着用し、腰元には二振りの刀。傍らに白い球状の物体を浮かばせる少女といえ、幻想郷では魂魄妖夢を置いて他にはいない。はず。

白玉楼に住む西行寺幽々子に庭師として仕え、日々剣術の鍛錬と家事をこなし、幽々子の暴食っぷりに苦笑しながらの生活を送る彼女だが、幽々子のことは憎からず——というより、生涯において仕えるべきは幽々子しかないと断言するほど、幽々子を深く愛している。

だから妖夢は、剣を振るう。

いたずらが成功した時の無邪気な口元、事あるごとにからかってくるのにどこか優しさを帯びたあの瞳。単純に構われているだけであるというのに、なぜか心地よい。時折見せる憂いを帯びた表情に、何度心打たれただろう。

だから妖夢は、剣を振るう。

幽々子の役目を助け、少しでも力になればと願ったことは一度や二度ではない。あの人の力になりたい。あの方の笑顔をお守りしたいと、本人の目の前で口にしたことも一度や二度ではない。

そして、それを受け止めてくれた幽々子だから、妖夢は仕えたいと願ったのだ。

だから妖夢は、剣を振るう。

たとえば、この剣の道の先が暗闇であるとしても。たとえば、幽々子の望む未来が暗闇であるとしても。

たとえば、

「紫が何か企んでるみたいだから、少し留守にするわ。妖夢は……そうねえ、妖怪の山——守矢鎮守府へ向かってくれる？ 帰ってきたとき、美味しいお魚を食べさせてね」

主である幽々子が、己を必要としていなくとも。

足手まといだと遠まわしに言われたのだとしても。

自分は、幽々子を求めているのだから。

守矢鎮守府。幽々子の命により鎮守府へやってきた妖夢は、まず遠目からその異様さに目を疑った。

（赤レンガ……だけど、紅魔館とは違う。紅魔館はもうちよつとことう、趣味の悪い赤色してるけど、鎮守府は落ち着いた色合いみたい。白玉楼ほどじゃないけど広いなあ。それにしても……いつの間にかこんな建物造ったんだらう）

湖の上では、何やら戦闘行動が行われている。てつきり異変か何かかと思いきや、艦娘同士が撃ち合い——演習を行っている様が見て取れた。日頃から訓練を欠かしていない様子には、妖夢も少しだけ親近感を覚える。

が、おかしいのはここから。鎮守府の門の目の前に来たとき、湖の上で戦っていたうちの一人が、水上を走ってこちらへ向かってきているのだ。何事かと驚き、近づいて来る人物に目をやれば、

紅魔館で門番をしているはずの、紅美鈴であった。

「あれえー、妖夢さん？ どうしたんですかこんなところにて？」

「それこっちのセリフ！ どうして美鈴が鎮守府に……しかも戦闘まで」

「ああ、私はここの門番で、ついでに演習のお手伝いを——おっとと、失礼。妖夢さん、今日は何か御用があったんでしようか？」

「あ、うん。実は——」

大まかな情報を伝えると、美鈴は執務室の青年に取り次いでくれた。

追い返されなかったことに安堵して、妖夢は執務室へ足を進めたのである。

このようにして、執務室にて妖夢は青年との面会を取り付ける。紅魔館での宴会や、人里で何度か顔を合わせているこの青年。妖夢にとって、全くの初対面よりかは幾分話しやすかったのであるが、

「ようこそ鎮守府へ。確か……コンパクトさん？」

「誰のお胸がコンパクトですか！」

第一印象は、お互いあまり良くはなかったかもしれない。

椅子にかけ、テーブル越しに話を始める。

「失礼しました、魂魄妖夢さんですね。それで、今日はこういったご要件でしょうか？」

「白玉楼のことは知っていますか？」

「ええと。冥界に存在する、幽霊を管理する場所と記憶しています。白玉楼は広い敷地を有していて、管理者の名前が……西行寺幽々子さん？」

「その通りです。実は幽々子様、行き先も告げずにしばらく留守にすると行って行ってしまいました。残る私は、この守矢鎮守府を頼るように言われました」

「……………はい？」

「突然のことで申し訳ないのですが、どうか私をここで雇っていただけないでしょうか？」

苦笑しながら、表情が固まる青年。からくり人形のような動きで首を横に回し、同席していた長門という艦娘に対して首をかしげるも、長門は首を横に振るばかり。

やはりというか予想通りというか。

幽々子は鎮守府に何も話を通していなかったらしい。

「僕らが断ると言ったら？」

「え」

さらに、予想外。

事前に掴んだ情報では、この青年は頼まれたら断れないタイプであるというのだ。基本笑顔だし、お願いされたらホイホイと叶えるという、なんとも人に騙されそうな性格をしている、と。

そのように文が言っていたのだが、まるで情報がちがう。いや、そ

もそもその情報を信じる時点でマズかったかもしれないが。

「あ、あの、や……雇ってもらえないんですか？」

「いやその、僕らも今聞かされたところでして……」

「こ、困るんです！ 断られたら幽々子様に叱られてしまうんです！

お願いします、何でもしますからー！」

「ん？ 魂魄妖夢よ、今何でも言ったな？」

慌てる青年と妖夢を眺めていたらしい長門が、瞳に肉食動物の如き眼光を帯びた。瞬間、妖夢はなぜか背筋に寒気を感じる。

何をさせられるのだろう、と思ったのも束の間。長門が青年に耳打ちすると、それを受けた青年が優しく口角を上げた。

「では、妖夢さんにいくつかお尋ねします。料理の腕には如何程自信がありますか？」

「料理？ 絶品というほどではないですけど、一通りは手早くできま
すが……」

「もう一つ。腰元の刀はお飾りでしょうか？」

「かざっ——バカにしないでください！ 切れないものはない楼観
剣、幽霊を成仏させる白楼剣、両方とも名刀中の名刀です！」

「……なら、せめて刀を置いてお話して頂けますか？ いきなりやつ
てきて、いつでも攻撃できる状態をお願いを突きつけられてはかない
ません」

「……あつ」

失念していた。青年の言うことはもつともである。

あくまでこちらはお願いをする立場。武装解除すらせず話し合い
の場についても、誠意を見せるという態度そのものを最初から諦める
ようなものだ。

しかも聞いたところによると、艦娘は幽霊の一種であるらしい。思
いがけず白楼剣のことを話してしまったが、青年の顔が青ざめたのは
気のせいではない。

なんとということだろう。知らないうちに、武力をちらつかせて交渉
についていたらしい。

青年の隣に座る長門などは明らかに警戒して、拳をポキポキと鳴ら

している。艦娘は、少女の見た目のそれから想像もつかないほど大きな力を持つそう。きつと長門も、ゴリラ並のパワーを備えているに違いない。

決裂してしまったであろう交渉に絶望し、俯く妖夢。

しかしそんな妖夢にかけられたのは、思いもよらぬ言葉であった。

「厨房の人手が足りないから料理と、弾幕を使つての艦娘の演習相手」

「……………え？」

「人手が増えるのはありがたいです。お給金は少ないですけど、お願いできますか？ あ、でも白楼剣つて剣は、必要なとき以外こちらで預らせてもらいます。無論、悪いようにはしません」

「あ、ありがとうございます！ 頑張りますからー！」

訂正。文の情報もたまには当たるらしい。

白楼剣を預けること自体は別に構わない。乱雑な扱いをされようものならその時点で白玉楼に帰らせてもらうが、少なくとも鎮守府でお世話になる分には、艦娘にとって不安の種となる白楼剣は自身の手元にならない方が好ましいだろう。どの道、あの剣は魂魄の者以外使えない。

「長門。鳳翔さん呼んできて」

「相分かった」

（私は鎮守府と喧嘩しに来てるわけじゃない。白玉楼の代表として、鎮守府と関係を築きに来たんだ）

自身の失敗は幽々子の失敗。自身の恥は幽々子の恥。

鎮守府が、妖怪の山や紅魔館と友好的であり、今後も徐々に友好的な勢力を味方につけていくというなら。

白玉楼だけが、取り残されるわけには行かない。明らかにメリットの多いこの関係を、みすみす逃してしまふ手はないのだ。

（でも、私はこれで幽々子様のお世話から少しだけ解放されるわけですね。こう言つては何ですけど、ちよつと楽ができてラッキーだなんて思つてしまいます）

受け入れてもらったことに安心する妖夢。ホッと一息つき、胸をなでおろしたその時、一人の艦娘が執務室へ入つてきて、妖夢に向かつ

てお辞儀した。

『『教育係』の鳳翔と申します。では妖夢さん、私が鎮守府の中をご案内しましょう。重要な区画はご案内できませんけどね』

「どうやら、この鳳翔という艦娘が鎮守府や仕事のことを教えてくれるらしい。この優しそうな表情、加えてやり慣れた仕事内容。」

「ああ、自分にとってなんと恵まれた職場だろう。幽々子の笑顔は何物にも代え難いが、この鎮守府生活というのはちよつとした気分転換にはなりそうだ。」

「説明は以上。お仕事は明日の朝から、よろしくお願いいたしますね」

「この時の妖夢は、羽を伸ばせるような気持ちでいたのである。」

それが、甘い認識であったとも知らずに。

『総員起し』

「……………ほえ？」

未だ眠気に沈む瞼をわずかに開けると、スピーカーから響くラツパの音が耳をつんぎく。朝からプリズムリバー三姉妹が鎮守府に騒ぎに来ているのかと思ひ瞳を開くが、目に入ったのは見慣れない天井であった。

「はて、ここはどこだろう。とまではいかないが、見慣れない風景を理解するには、妖夢の頭は少しばかりの時間を要したのである。」

そんな時――

般若の如き表情の鳳翔が、部屋へと入ってきた。

「妖夢さん。初日からお寝坊されてしまいますと、私たちも困ってしまいます」

「んう……幽々子様あ？ まだ6時じゃないですか……」

「鎮守府は早朝6時起床。飯炊きは4時には起床です。昨日教えたはずですよ」

布団の傍ら。ほのかに料理の香りを漂わせつつ、わずかに怒気を孕

んだ声を上げる鳳翔。部屋の外では、艦娘のものと思われる点呼の聲が聞こえていた。

「妖夢さん。罰として着替えてから腕立て伏せです」

「ほへ……腕立て伏せ……腕立て伏せ？」

「5秒遅れるごとに1ずつ加算します。1、2、5、30——」

「わあ!? 起きます! 起きますから!」

慌ただしく起きて出来る限り素早く着替え、廊下に出て鳳翔の前に立つ。近くの部屋では艦娘達がゾロゾロと自身らの部屋へ戻っていく中で、鳳翔は妖夢の服装をジロジロ見てこう言った。

「昨日も話しましたが、軍というものは規律と統制を守れてこそ成り立ちます。だらしない人が一人でもいると、練度や士気の低下を招くことになるのです。これは提督にも徹底してもらっています」

「へ……? は、はあ……」

「服のシワが5箇所、靴の汚れが3箇所」

何を言っているのかと思ひ自身の服装を見直すが、今度は鳳翔は妖夢の部屋へと入っていく。

どうしたんだろうと思ひ、部屋の中を覗いてみると、

「布団が乱雑、ロッカーの不整頓、及び開け放し、パジャマの放置、床のゴミ、カーテンの開け忘れ、電気の消し忘れ、ドアの開け放し」

何かをチェックしているらしい。何かあったんだろうかと思っていると、鳳翔は部屋から出て自身の前に立つ。

今度は、仁王のような表情であった。

「不備16点、1点につき10回、及び120秒の遅れ。合計400回ですね。さあ妖夢さん、腕立て伏せの姿勢をとってくださいね♪」

「へ……よ、400回!」

「遅いので100回追加です。腕立て伏せの姿勢をとれ」

（こ、怖い……。というより、どどどどうなってるの!? 400どころか500回なんて出来るわけないよ!）

妖夢の慌ただしい鎮守府生活は、こうして幕を開けた。

なお、腕立て伏せは50回で勘弁してもらえたが、起きがけに動いたためか、眠気など完全に吹き飛んでしまった。

以降のことはよく覚えていない。初日はとにかくよく疲れたのだ。一日中厨房や諏訪湖で身体を酷使して——その時の会話を少々覚えていくくらいである。

「妖夢さん。部屋と服装、すぐに直されたようで良かったです」

「は、はい……。そんなことで腕立てはしたくないですし……」

「朝ごはんはちゃんと食べましたか？」

「あ、食べました。鳳翔さんが作ったんですか？ とても美味しかったです」

「うふふ、ありがとうございます。では、まずは洗い物を一緒にしましょうか」

「え……艦娘に美鈴と私で46人分!？」

「洗い物は終わりましたね。では、お昼ご飯の仕込みにかかりますよ」

「ええ!?! ま、まだ9時ですよ!？」

「お昼は提督合わせて47人分の食事を作ります。仕込みも大変ですし、妖夢さんは炊事以外にもすることがあるのででしょう?。」

「よ、47人分……幽々子様の分より多い……」

「正確には、よく食べる子もいるのでそれ以上ですけど」

「……………」

「お昼ご飯は食べましたか？ では、洗い物をしましょう」

「よ、47人分……ご飯はおいしかったけど……」

「洗い物のあとは夜ご飯の仕込みですよ」

「また仕込みかあ……。あっ……。すみません、手を滑らせました」

「……お皿3枚ですか。怪我はありませんか？ 私が掃除しますか」

ら、そのまま洗い物を続けてください」

「うう……はい、ごめんなさい」

「終わったら1枚につき10回の腕立て伏せですからね♪ モノは大事にしなければなりませんから」

「……………」

「午後は演習の相手、ですか。ようやく厨房から解放されました……」

「お昼ご飯……いい味付けだったわ。あなたも作ったのでしょうか？」

「お昼とても美味しかったです、妖夢さん、ありがとうございます」

「確か……加賀さんと赤城さん？ ありがとうございます！」

「妖夢、今度あなたに特製カツカレーの作り方を教えるわね！」

「私としてはもう少し量をだな。何しろ燃費もビッグセブンだから」

「ご飯の話ばかり……」

「ちよちよちよ待つて！ 砲弾大きいよ！ 砲弾斬るの怖い！ 戦艦

!?! 戦艦ナンデ!」

「む、外したか。では水偵を出そう」

「装備換装を急いで！」

「第二次攻撃隊、発艦はじめ」

「このコウクウキって、スズメバチみたいですね！ シツ！ ハアツ

！」

「め、美鈴が鳥みたいなのを叩き落としてる……なら私も斬つて——」

「進入速度よし、投下します」

「へぶっ！ うわ、前が見えない!?!」

「あつ、演習用爆弾の中身はイカ墨です」

「ご飯……おいしいよお」

「ちよつと妖夢さん、こぼしてますって」

「美鈴は門番してていいなあ。立ってるだけでいいなんて」

「しかも半分位寝てますからね。フッフッフ」

「食事の時間がこんなに楽しみになるなんて思わなかったよお……」
「……ダメみたいですね」

「さあ、最後の洗い物ですよ」

「よ、よし！ 頑張りますよ鳳翔さん！」

「うふふ、随分とやる気でよろしいじゃないですか」

「当然です！ これが今日の最後の仕事なんですから！」

「あら、まだ明日の朝の仕込みもありますよ？」

「……………」

「つ、疲れたあ。お布団がこんなに愛しいのは久しぶりかも……」

『長門より達する。鎮守府近海に深海棲艦が現れた。支援艦隊として
右の者は出撃用意を実施せよ——』

「サ、サイレン？ それに今の放送は——」

「妖夢さん。戦闘糧食を作ります、急いでください」

「もうやだあああああああああああああああああああああああああ
！」

こうして、魂魄妖夢の慌ただしい初日は幕を閉じたのである。

翌日、妖夢は厨房にて昼食の仕込みをしていた。鳳翔は食材を取り
に行つたため、現在一人ぼっちで包丁を握っている。

（うろうう——幽々子様あ。白玉楼に帰りたい……）

初日を終えただけで、すっかり精神的に参ってしまった。今日は起
床時のミスこそなかったが、初日のストレスと疲労で瞼もずつしりと
重くなっている。

鎮守府がこんなに厳しいところだとは知らなかった。整頓は細かすぎるし、料理の量が尋常ではないし、自己鍛錬をする時間はないし、相当時間に厳しいし、長門はゴリラだ。

今までの幽々子との生活がどれだけ緩かったのか、時間に余裕があったのか、それを一日で思い知らされたと言ってもいい。

美鈴は既にこの生活に慣れたと言っていたが、一体どれだけ凶太く生きているのだろう。

(帰って幽々子様^{さま}に謝ったら許してくれるかなあ——つて、しばらく留守にするんだった……)

しかも、鎮守府で働くというのは幽々子の命令なのだ。愛してやまない主の命令を、自分が耐えられないなどという情けない理由で破るわけにもいかない。

(でも……つらいなあ。こんな生活が続くと思うと)

幸い、鳳翔をはじめとする艦娘たちはいい人ばかりである。鳳翔は厳しい部分こそあるが、改めて考えれば、指摘された部分は自身の弛んだところであるとわかる。

辛いのは自分だけではない。自分が厨房で苦しんでいる間にも、艦娘たちは命をかけて深海棲艦と戦っている。陸を、幻想郷を深海棲艦から守ろうとしている。

霊夢を——探そうとしている。

どうして自分だけが泣き言を言えよう。

「鳳翔さんおはようございます……っっていないや」

「あれ？ えっと、て、提督でしたか？」

「あ、魂魄さん、お疲れ様です。提督ではなく茅野守連です、どうぞお好きに呼んでください。鳳翔さんはどちらに？」

「妖夢でいいですよ。鳳翔さんは今、食材を取りに行っています。もうすぐ戻ってくると思いますけど」

「なら、ここで待つことにしましょう」

と、厨房に入り、手を洗う青年。

(艦娘は皆、この茅野さんに従ってるんだっけ。全員が従うほど、すごい何かを持つてるのかな？ 気のせいかな、以前宴会や人里で会った時よりも余裕があるような……)

まな板と包丁を取り出した青年は、妖夢の隣で食材の皮をむき始める。

(圧倒的なカリスマ？ 絶対的な判断力？ 別にイケメンってわけでもないし……茅野さんはどうして艦娘を従えてるんだろう——って)「な、何してるんですか？」

「えっ……ジャガイモの皮むきですよ？」

「そ、そうじゃなくて！ どうして茅野さんが皮むきを?!」

「いや、ただ待ってるのも暇なのでお手伝いをと」

「ええっ?! い、いいのかな？ いやでも、一番偉い人の言うことだし……でも一番偉い人がジャガイモの皮むきって……」

「あ、鳳翔さん」

「あら提督、小腹でも空きましたか？ 手伝いは結構ですといつも言っていますのに」

「いえ。今日は、長門が鳳翔さんから航空戦について教わって来いと」

「あら……でしたら、折角なのでお手伝いをしてもらいながら教えましょうか」

(受け入れちゃうの?! 幽々子様が皮むきしてるようなものなのに!)

鎮守府は妖夢の知らないことばかりであった。

全ての仕込みが終わったのは数時間後。青年も協力していたため、作業自体は早く終了した。また、それと同時に鳳翔が行っていた、青年への口頭での教育も一区切りとなる。

妖夢もそれをじっくり聞きながら作業していたのだが——生憎と制空権だの戦闘機だの、爆撃機だの攻撃機だの言われてもピンと来ない。演習を経ていた妖夢がわかったことと言えば、鳳翔が航空母艦という艦種で、航空機を飛ばす能力を持っているということぐらいであ

る。

航空機。幻想郷に生きるものとしては、航空機の戦闘は弾幕そのものに近い。無論、艦娘の放つ砲弾も弾幕以上の速度であるし、ほぼ狙撃するように狙ってくるしで、主砲弾による攻撃自体も油断することはできない。

だが、航空機はそれ以上である。速度は砲弾に比べれば段違いに遅いが、弾幕ではありえない空中機動に加え、これまた正確な攻撃。追尾は当たり前のようにしてくるし、攻撃の回避も余裕だし、更には編隊を組んで挑んでくるしで、相性は正直最悪である。

例えるなら。小型化した大量の博麗霊夢が霊夢同士でチームを組み、弾幕戦闘を仕掛けてくるようなものだ。決して、分裂した伊吹萃香ではないところがミソ。勝ち目を考えさせられるものであるといえよう。

「ひとまずは以上、でしょうか。あとはまた午後にお教えしましょう」

「うふふ、好きでやっている部分もありますから」

「妖夢さんも、ありがとうございます」

「ひへっ——!？」

ひと仕事終えて疲れたなあと思っていたところへ、青年から声がかかる。まるで油断していた妖夢は、思わず変な声が出てしまった。

「作戦前だから、皆訓練に励んでいるんです。そんな中、厨房を安定的にこなせて、戦闘訓練もできる妖夢さんが来てくれた。最初は流石にちよつと警戒しましたけど、僕たちは本当に助かっているんですよ」

「え、そ、そそそうですか？」

「昨日は大変だったそうですね。でも、妖夢さんの料理は本当においしかったです。鳳翔さんに負けず劣らずいい勝負です。まあ、僕の舌はあまりアテにならないらしいですが」

「あら提督、私の料理にご不満でも？」

「いえまさか。それで、妖夢さんはどうなんですか？ 随分すごい人のようですが」

「本当によくやってくれています。厨房では積極的に腕を振るってい

ますし、演習で相手をした艦娘からも、攻防共に高評価です。一度指摘した規律は完璧に守っていますね。疲れもあるでしょうし、今日は午後には切り上げて妖夢さんには休んでもらおうと思ってます」
(えっ、褒められてる……というか休み!?)

疲労困憊の妖夢の瞳に光が差す。自分の知らないところで自分が評価されていたことに、思わず呆けてしまった。自分の苦労は無駄ではなかった。体を酷使しただけの評価は、ちゃんと得られていたらしい。

精神的に打ちのめされていた状態からの救済の言葉。勝手に、瞳から涙がこぼれ落ちる。

「……………」おっと、妖夢さん」

「ふえっ? はっ! み、見ないでください!」

「いえ、顔の汗を拭こうかと……これで良しですね」

「へっ? あ、あ、ありがとうございます……?」

「……………」あらあら。提督、妖夢さんが可愛いからって手を出してはいけませんよ!」

「ははは、そんなことしませんよ」

(……………) わかった……気がする)

この青年が艦娘に慕われている理由が。艦娘がこの青年に従っている理由が。

立場を気にせず、優しさを振りまき、他人が嫌がることをしない。どこか一歩引いたようで、どこか親しみやすさを感じさせるこの人柄。

幽々子とは違う。だが、上司としての器の広さは幽々子の上に行くといつてもいい。

妖怪の山も紅魔館も永遠亭も、もしかしたらこの青年にやられたのだろうかと。違うのだとしても、この青年のお人好しなところは、必ず各勢力に見えない形で侵食しているだろう。じわじわと、*「毒」*のように。

「妖夢さん」

「は、はい!」

「ここでの仕事は勝手も違うので大変かもしれませんが、妖夢さんのように素晴らしい方を迎えられて、鎮守府としては本当に感謝しています。僕だって嬉しい」

「……………えっ?」

「慣れるには時間もかかるでしょう。ただ、無理はしないでくださいね? 辛いときは辛いとおっしゃってください、僕たちも甘えてしまいます。知っていますか? 笑わない子供って、ろくな大人にならないんですよ」

「……………」

自分はもう子供ではないのだが、というツツコミはさておいて。

逃げ出したいと立ち上がっていた精神が、意思を伴って座り込む。その優しさによって、まだ頑張れると心が奮起する。

朗らかな笑顔を向けられ、妖夢はうつむきながらも小さな声で「はい」と応えた。

(茅野……………さん、か)

艦娘は既に、この毒にかかっているのだろう。どういった繋がりがあるのかはわからないが、それこそ立場からもそれを受け入れて。死線を共にくぐり抜けて、信頼を預けて、運命を共にして。

(カミツレさん……………か)

そして妖夢もまた、この瞬間毒に蝕まれた。その優しさに付け入る隙を与えてしまつて。ボロボロの精神を侵蝕されて尚、その毒に抗うことはできなかつた。

この気持ちは一体何なのだろう。

恋? 違う。

愛情? ますます違う。

もつと単純明快。複雑さなど微塵も持たず、一言で言い表せられる関係。

「信頼を相互に交わす」ことが、これほど甘美なものだったとは露とも思わなかつたのである。

038 発令、『霊一号作戦』

正式に、紅魔館に水雷戦隊を派遣してから3日が経過した。

様子見をと思つて青年は紅魔館を訪れるのだが、見せてくれたのは変わらぬ笑顔。龍田、暁、響、雷、電。いずれも元気そうであり、レミアのところへ預けたのは正解だったらしい。

レミアと顔を合わせ、艦隊の現状や今後のことについて相談を交わす。

滞在する艦隊は、紅魔館に滞在はしているが仕事内容が違うため、昼間はレミアたちとほとんど顔を合わすことはない。しかし、紅魔館に帰還してからは、妖精メイドがサボりがちな掃除や整頓などを手伝ってくれる為、非常に助かっているという。

青年もレミアも、艦娘にそこまでは頼んでいないのだが、

『お世話になっているからには、このぐらいさせてもらうのです！』

電を始めとして、皆頑なに譲らない。

サボりがちな妖精メイドと違い、わざわざ進んで働きたがる艦娘に対し、レミアは不思議そうに苦笑するも、悪い気はしていないらしい。代わりに、妖精メイドたちは咲夜に喝を入れられたそうで、少しずつだが渋々仕事に手を付けるようになったのだとか。

このことについて、青年はレミアになぜか礼を言われたのだが、額面通りに受け取るのも何か違う気がして、礼は艦娘に直接言ってくれと促すことで終幕した。

(まさか、艦娘の皆を派遣しただけで紅魔館と仲良くなれるなんて)

紅魔館と親交を深めるのは自分の役目だったはずだが。

どうやら、彼女たちに任せる方が上手く事が運びそうである。

帰りがけに、青年は紅魔館のエントランスにて仕事中の咲夜と遭遇する。

モップと、雑巾をフチにかけた水入りのバケツ。エントランスだけ

でも広々としているためやる気も失せそうなものであるというのに、咲夜は鼻歌など歌っていた。

随分と気分が良さそうである。それを害するのも申し訳ないが、折角会ったというのに声もかけないでは礼に悖るだろう。

「こんにちは咲夜さん、なんだか上機嫌ですね」

「ひゃっ!？」

が、どうやら驚かせてしまったらしい。

小さく悲鳴を上げた咲夜は肩を竦ませ、少しだけ躓きながらこちらに振り返る。戸惑いの表情を浮かべていたが、声をかけていたのが自分だとわかると、途端に頬を紅潮させた。

「え、あ、その、驚かせてすみません」

「ふ……ふふ、ふん、カミツレだったのね。別に驚いてないわよ」

「随分と可愛らしい悲鳴でしたが……」

「似合わないなんて思ってるでしょう。雄叫びの方が良かった?」

「それは嫌ですよ。咲夜さんはもう少し大人な印象でしたので、予想外だっただけです」

「ああもう、人が恥ずかしがってる所をつつついてくるのやめなさい」
モップを杖のようにして立ち、ため息をつく咲夜。濡れ雑巾でも投げつけてくるかと思ったが、流石にそこまでしてこないようだ。

「それで、今日は様子見に来たの?」

「うん。皆元気そうで良かった。咲夜さんから見て、あの子達はどうかな?」

「どうも何も、うちの妖精メイドより働いてくれるから助かってるわよ。性格は多少癖があるけど真面目だし、礼節も十分。正直なところ、私が一番頼りにしてると思うわ」

「役に立ててるなら良かった。でも——」

「無理はさせないように、でしょう? 言われなくてもわかってるわよ」

「咲夜さんもね?」

「はいはい」

手をひらひらとさせてあしらう咲夜。苦笑せずにはいられないが、

彼女なら上手くやってくれるだろうということ信じよう。

しゃがんで、雑巾を絞る咲夜。スカートが捲れてチラリと伺える美しいラインを描く太ももが目に入るのだが、なるべく見ないようにと、青年は顔を赤くしながら目を逸らす。

が、隣にいる長門には気づかれてしまったようで、ジトつとした眼差しを送られてしまった。

「そういうえば、お嬢様に少し聞いたわ。霊夢を探そうとしているみたいね?」

「ええ。先ほどそのことについても話していました。もつとも、レミリアさんは既に勘付いていたようですけど」

「フフ、流石はお嬢様ね。それで? 私にも何か聞きたいことがあったんじゃないかしら?」

床に四つん這いになり、雑巾片手に床にこびりついている汚れを探す咲夜。お尻がメイド服と共にフリフリと揺れるのだが、青年はまたもや目を逸らしながら答える。

長門は、そんな青年のお尻を軽くつねっていた。

「イツ……。博麗霊夢さんがどんな人なのか、搜索はどの程度したのか、かな」

「……まあ、話しましょう。『空を飛ぶ程度の能力』を持つ人間で、博麗大結界を司る巫女よ。ここまではいい?」

「はい。萃香さんにも聞きましたから」

「現状、博麗大結界はほつれ一つなく健在ね。でも、それにも関わらず『海』が現れた。結界に何かしらの干渉がなかったとは考えにくい

けれど、もし仮に干渉があつたのなら。霊夢はいち早くそれに気づいた可能性があるわ」

「海が現れるより前に動いていた……? となると、陸上にいる可能性は確かに薄まりますね」

「それでも探したわ。幻想郷広しといえども、空を飛べる者が数名もいれば搜索は数日で終わるわよ。結果は大外れ」

「残るは海、ですか」

「結界に異常なし。海が現れて、霊夢は消えた。しかも海には深海棲

艦。霊夢を探していて、たどり着いた結論がわからないわけないわよね？」

考えたくはなかった。だが、厳然としてそこに可能性がある。

最悪の事態、とはどういった事柄を示せばよいのだろうか。

博麗霊夢が既に死んでいるかもしれないこと？ 幻想郷に海が定着してしまったこと？

「幻想郷が被る被害」としては、それら自体は実は大したことはない。では、最も幻想郷にとって望ましくない事態とはどういったことだろうか。

霊夢が死んでも、紫が急ぎで次世代の博麗の巫女を育成すればよし。海が定着しても、その利益と上手に付き合っていけばよし。

大切なのは、幻想郷が壊滅的な被害を受けないこと。壊滅的な被害の詳細な事例については議論する部分も多くあるだろうが、おおよその問題は管理者たる八雲紫によって解決が可能と言えるだろう。

これまで異変が起きれば博麗霊夢が解決してきたし、霊夢に準ずる能力を持つ者も多く存在する。

そう、だから。

『博麗霊夢の深海化』は、考えうる限り最悪の事態なのだ。準ずる者はあくまで、準ずる者でしかないのだから。

八雲紫の懸念しているであろう事象が、一つわかったような気がする。

博麗霊夢が「幻想郷の敵」に回ると仮定した場合、打ち崩す方法はほとんどない。

咲夜は雑巾をバケツで洗って絞りフチにかけ、モップとバケツを持って立ち上がった。

「ねえ、一つお願いがあるの」

「ん、なんでしょう？」

「霊夢を見つけて。あの娘がいないと、幻想郷が静かになってしまうもの」

「……最善を尽くします」

「当日、私も手伝いに向かうわ」

そろそろ掃除に戻るわね、と立ち去る咲夜。

自分たちも鎮守府に帰ろうかと思つて、紅魔館の玄関口へと足を向けたとき。

「ちよつと待ちなさい」

大図書館の主が、背中から声をかけてきたのである。

「えつと……パチュリーさんでしたか。どうかしましたか？」

「用事があるのはあなたじゃないわ。そっちの戦艦よ」

長い紫色の髪をリボンでまとめ、薄紫のゆつたりとした服。三日月模様があしらわれた帽子をかぶるこの人物は、紅魔館に住む魔法使い、パチュリー・ノーレッジである。

先の紅魔館の異変では軽空母に深海化し、青年の艦隊の手に余る航空機群を運用してきたことは記憶に新しい。

レミリアを通して、深海化や艦娘のことについて図書館で調べてもらっているのです。そのことについての話かと思つたが、彼女の要件は自分ではなく長門に対するものらしい。

長門は戸惑いながらも、小首をかしげて応える。

「む……私か？」

「あなた、戦艦長門で間違いないわね？」

「ああ、私は長門型戦艦一番艦の長門だ。好きなのは小さくて可愛いもの全般、嫌いなものはカミナリとお化けだ」

「案外乙女なのね……」

若干呆れ気味のパチュリー。その気持ちはよくわかる。青年も同じ気持ちだ。

気を取り直したのか、彼女は懐から何かを取り出す。

「ほう……それはなんだ？」

「魔法媒体……宝珠よ。ちよつとこれを持ってくれないかしら？」

「ん、ことうか？」

つるんとした真球型の、無色透明なこぶし大ほどの物体。長門が手に取ると白い輝きを帯び、柔らかな光を放出し始めたのだが、それを確認するとパチュリーは満足したのか、一つ頷いて手のひらを差し出した。

「……ありがとう、もう十分だから返しなさい」

「あ、ああ……。今の行動に一体何の意味が？」

「知る必要はないわ。でも、貴女たちの不都合になるようなことじゃあないから安心して」

「む、……うむ」

「艦娘や深海棲艦についての調べ物については、近いうちに報告できると思うわ。気をつけて帰りなさい」

「これで『神様の宿る器』は解決ね」と、眩きを残し。

宝珠を受け取ったパチュリーは、地下に帰っていった。

青年は首をひねりつつ、当事者の長門はさらに首をひねりつつ、紅魔館を後にしたのであった。

鎮守府に帰還した青年。

時間はお昼前。少し勉強をしてから、午後は今後の事について長門や赤城と相談をしようかと思っていたその矢先。

鎮守府に入ろうとする前に、門番をしていた美鈴が慌てた顔で近づいてくる。

「カミツレさん、大変です！ 実は――」

「え……行き倒れ!?!」

執務室の青年のベッドに寝かされていたのは、一人の少女であった。前髪を右に流したショートヘアに、ロップイヤーと呼ばれる兔の垂れ耳。どこかでその服装に見覚えもあった気がするのだが、残念ながら思い出すことはできない。

鳳翔が甲斐甲斐しく世話をしながら、経緯について説明をしてくれる。

「この子、鎮守府の前を通りがかって、倒れた際に誤って湖に飛び込んでしまったようです。先ほど体は拭き終えましたが、どうやら弱っているようでして」

「うちの医療設備は……入渠ドックくらいしかないか」

「困りました。看病だけならできますが、この子が何かしらの病気にかかっているなら、その治療は私たちにはできませんし……」

「……よしわかった、長門！」

「ということとで連れてきたのですが……途中で気づきましたけどこの子、永遠亭に何か関係があるんじゃないか……」

「……よく連れてきてくれたわね、ありがとう」

永遠亭にて、長門とともに急患を連れ込んだ青年は、そのまま永琳と面会することに。竹林ですぐにいてるを見つけられたのは幸いであった。鈴仙に抱えられて行ったあの少女は、どうやら別室で看病するらしい。

そこでようやく気づいた。連れてきた兎耳の少女の服装が、鈴仙と同じであることに。

改めて、目の前に姿勢正しく座する永琳と向き合う。

「お久しぶりです。こうして直接お会いするのは久しぶりですね」

「ええ、少しはまともな顔つきになったみたいで安心したわ」

そう言って、永琳はふんわりと優しく微笑む。その笑み一つで青年はまた顔を赤くするのだが、隣に座る長門に太ももをつねられたことで正気に戻る。

「また異変を解決したそうね。博麗の巫女の力もなく解決するなんて、あなた英雄よ？」

「それは言い過ぎです」

「褒めすぎだと思う？　でも周りはどう見るでしょうね。それで、また何か企んでいるようだけれど……」

「どうやら、作戦を計画中であることは知られていたらしい。どこから情報が漏れたのだろうかと首をひねるも、永琳は小さく微笑むだけである。」

「——と、言うことになりました。できれば、永遠亭からも戦力を派遣してもらいたいのですが」

「ふうん……………」

「あ、あの、お願いできますか…………？」

「ふうん……………」

「展開予定の作戦について軽く説明し、紅魔館からも協力を得られたことを話したのだが、いかんせん永琳の反応が望ましくない。何か気に入らないことがあると、あからさまに言っているような態度である。」

「一つ、貴方に話しておきたいのだけれど」

「……………はい」

「私たち永遠亭は貴方たちの鎮守府と、高速修復材と魚の取引の関係はあるけれど、紅魔館のお子様吸血鬼のように、同盟を結ぶまではしていないわよ？」

「……………霊夢さんの搜索が目的であつても、ですか？」

「勘違いしているわね。うどんげは確かに霊夢の搜索に協力しているけれど、あれはあの子が時間を見つけて個人的に手伝っているに過ぎないわ。永遠亭としては、この件に関しては一切手をつけていない」

「てるによつて出されたお茶をすする永琳。その回答に少し驚いた青年は同様にお茶をすするのだが、それを小さく吹き出してしまふ。よくよく中身を見れば、お茶と思っていたこの飲み物は青年のもものだけ青汁であつた。」

「お茶ではなかったが、思ったより美味しいななどと思いつつながら青年」

は疑問をぶつける。

「ちなみにそれは……なぜ？」

「博麗の巫女に関わることは、全てスキマ妖怪の責任だから。でも個人的な捜索にまで口出しするほど、私は狭量ではないわ」

「なら、永遠亭は鎮守府にも協力せず、博麗霊夢の捜索はしないと……？」

「今は」ただの取引相手。それだけよ」

そう話す永琳は、やはりどこか不機嫌である。何か機嫌を損ねるようなことをしてしまっただろうかと考えるのだが、青年にはこれといって特に思いつかない。

ふと、隣に座る長門を見る。長門はチラリと青年に視線を送っており、何かを求めるような表情であるため、戸惑いながらもぎこちなく青年は頷いてみせた。

すると、である。

「八意殿、拗ねるのはそれまでにしてもらいたい」

「……拗ねてないわ」

「先ほど紅魔館に艦娘を派遣したという話をしてから、ずっと眉が小刻みに震えているではないか。大人気ないことをするものではないと思うが」

「……拗ねてないわ」

どうやら長門の指摘はあたっていたのか、永琳は珍しく表情を崩して唇を尖らせていた。そのような細かい点にまでよく気づいたなと思うのだが、長門はさらに続ける。

「ひとつ質問がある。先ほどそちらに預けた、ウサギっ子のことだ」

「……何も話せないわね」

「八意殿、我らは同盟関係ではない。よって全ての情報共有が叶わないことも私は理解している。だが、同時に取引関係であることを忘れないでもらいたい。『答えられない』ではなく、『話せない』ような者を連れてきたことで、貸しの一つもあると思うのだが」

「……わかったわよ」

（……さすが長門だなあ）

何やら鋭い指摘をしたことで、永琳が一步譲歩したようである。青年としては永琳を少々苦手に思っていないくもなかったために、この交渉術には非常に感謝させられた。

「永遠亭は守矢鎮守府に、正式に同盟を申し込むわ。これで満足かしら？」

「それでは貸しを返したことはない。公平とは言えないだろう。優秀な人員を借りたい」

「……うどんげを連れて行ってもいいけれど、診療所としての永遠亭が十分に機能しなくなるわ。変なことはしないから、艦娘さんを何人かお借りできない？」

「ほら、提督。あとは提督の領分だ」

「え？ あ、うん」

先程から、表情こそ崩していないのだが永琳が不機嫌であると分かる。永琳を相手に一步も退かない姿は、格好いいといえれば格好いいのだが――

(代わりに、永琳さんが僕を見る目が半端なく怖い……)

「え、えつと、今のところ艦娘を紅魔館以外に派遣するほど余裕がなくて……」

「うどんげを使うのは、艦娘が外洋に出ることで生じる鎮守府の守りの穴を埋めるためでしょう？ なら、あの子を貸し出せるのはその作戦期間中のみとしましょうか」

「あ、で、でも、これから艦娘が増えることがあれば派遣は可能ですよ！」

「ひとまず、今回の借りはうどんげの短期派遣で返しましょう。同盟関係としての人員派遣については、また相談ということだ」

「あー、えー、その、………はい」

「まだまだだね」と、永琳が少し愉快そうに微笑む。長門から交渉を引き継いだ途端にこれである。まだまだ自身は甘いなど、青年自身も微笑みながら自覚することとなった。

残念ながら交渉は望み以上にはならなかったが、青年は一つ、また別件を思い出す。

「そういえば、一つ聞きたいことが」

「あら、何かしら？」

「紫さんが今何をしているかご存知ないですか？　しばらく会えてないんですよ。できれば接触したいんですけれども」

「ああ、あの妖怪なら——」

「何か色々企ててるみたいよ」と。

ひとまず長門の活躍により、永遠亭との同盟と鈴仙の協力を取り付けられたのであった。これで作戦中は、鎮守府の警備を減らすこともできるだろう。

本日分の高速修復材を受け取って、青年は鎮守府に帰投するのであった。

そして、5日後の早朝。

「提督よ。艦娘は食堂に集合完了した。咲夜、鈴仙も到着し、魔理沙は上空で待機している。妖夢も厨房の仕事は終えたそうだ」

「了解。とりあえず全員集まったかな？」

「あー！　私を忘れるなんて酷いですよカミツレさん！」

「さなちゃん朝からずっとというじゃん」

長門からの報告と早苗からのブーイングを受けて、青年はひとつ頷いた。

鎮守府の食堂に集まるのは艦娘、及び今回の作戦に参加する協力者たちである。あくまで個人の参加ということにはなっているが、彼女たちのバックを考えれば心強いものを感じずにはいられない。

そして心強い協力者は、今挙げた名前以外にもう一人。

「おいカミツレ、まだ深海棲艦とやらは攻めて来ないのか？」

「萃香さん、今回は攻め込むのは僕らの方からです」

「ちえっ……なんだよ、つまんないな」

と、唇を尖らせるのは伊吹萃香。おそらく現状では、作戦に協力してくれる人物の中で最も強力な戦力だろう。

彼女にはあまり好ましく思われてないのではないかと思っていた

のだが、霊夢の搜索を口に出すと一変。今回の作戦についても、非常に協力的である。

「哨戒は天津風が旗艦の、叢雲、白露、時雨、涼風の混成駆逐隊が行っている」

「よし、作戦を発令しよう。事前に通達した艦隊を組むよ」

「その前に提督、今回が初の攻勢作戦となる。我々の士気も考え、一つ演説など語ってはどうか？　意気込みなど聞かせて欲しいものだ」

「うえ？　そ、それって絶対しないとダメ？」

「逆に提督よ。作戦内容だけ伝えてその後は我らを放置するつもりか？　酷いお人だ、せめて提督の思うところぐらい聞かせてくれてもよかろう？」

「あ……うん、わかった」

意を決して、艦娘や協力者たちの前に出る。長門の「傾注！」という言葉により、その瞳の全てが自身に集まることで緊張するのだが、青年は一度目をつむり、呼吸を整えてからその視線たちに向き合った。

大丈夫だ。この作戦のために、ずっと準備をしてきた。勉強はまだ途中だが、自分なりに考えて作戦を立案したのだ。

誰のために？　何のために？　そもそも自分は、なぜこの艦隊を率いているのだろうか？

その想いを言えばいいさ。馬鹿にする者など、ここには一人も居はしない。

「僕が幻想郷に来てから……もうすぐ一ヶ月が経とうとしてる。最初はね、幻想郷に来て不安だったんだ。誰でもみんな好き勝手に自分の意見言うし、選択の余地なんてあつてないようなものだし、さなちやんは……昔より変になつてるし」

「それは抗議します！」

「滝壺に落とされてさ。海に出たら深海棲艦に襲われるし、吹雪が突然出てくるし。事態がわからないまま、幻想郷に残るか外の世界に帰るか選べだよ？　そんなの、いくら外の世界が嫌でも帰りたくなるに

決まってる」

突如幻想郷と艦娘を否定するようなことを言ってしまったためだろうか。艦娘は不安そうな顔に、咲夜などは目つきを鋭くさせている。

「でもね、さなちゃん、神奈子さん、諏訪子さん、それと紫さんは、形はどうあれ僕を呼び止めてくれた。艦娘の皆は僕の意見を尊重してくれた。僕に……道を選ぶチャンスをくれた」

一つ深呼吸。

「幻想郷はとて素晴らしいところだ。みんな僕を受け入れてくれた。挨拶一つにも返してくれて、ご飯と一緒に食べてくれて、何気ない会話をしてくれた。ひどく当たり前のことかもしれないけど、その当たり前が、僕には本当に嬉しかったんだ。だって、ずっと欲しかったものだったから」

「今なら言える。幻想郷に来て良かった、僕は幸せだよ。僕を大事にしてくれる守矢神社の家族も、僕を想ってくれる艦娘のみんなも。意外と親切な紅魔館の皆さんも、ちよつと怖いけど優しい永遠亭の皆さんも、なんだかんだ協力してくれる妖夢さんも、お酒に溺れるばかりじゃない萃香さんも、この場にはいないけど、誰より霊夢さんを心配している魔理沙ちゃんも——」

「みんな、大好きなんだ」と。

震えながら、拳を握り締めながら、声を絞り出す。

幻想郷の当たり前が、自身の当たり前をいとも簡単に突き崩したこと。幻想郷での常識が、自身の常識を完膚なきまでに屈服させたこと。

そしてそれが、過去の自分をいかに乗り越えさせたか。忘れたくても、最早烙印のごとく押し付けられたこの感情は忘れようがない。

「博麗の巫女、博麗霊夢さんという人がいる。幻想郷において多くの人から信頼され、愛されてる女の子だ。今現在、霊夢さんは行方不明。幻想郷の中で霊夢さんのいる可能性があるのは、残るは海のみ」

ゴクリと、誰かが喉を鳴らす。

「今回の皆の任務は博麗霊夢さんの搜索。鎮守府近海よりさらに離れた、まだ未知の海域に進出してもらうことになる。これまで近海だけの警備を任せていたのは、危険が有るのと搜索の両方を兼ねていたから」

拳を、握り締める音が聞こえる。

「だけど近海にはいない。危険を承知で、皆には航海に出てもらうことになった。幻想郷にお世話になったんだ。僕は……幻想郷に恩を返したいと思う。その為の、霊夢さんの搜索だ」

艦娘から視線を外し、協力者たちを真っ直ぐに見つめた。

「艦娘の多くが出撃することになるので、あなた方には沿岸の警備をお願いします。駆逐隊の哨戒はありますが、もし近海に突如現れた場合、火力不足を補うためにはあなた方の力が必要です」

咲夜、妖夢、鈴仙、萃香が、一つの躊躇いもなく頷いた。

改めて艦娘たちを見つめて、瞬き。

「繰り返すようだけど、皆の力を貸してほしい。でも、無理をさせるつもりはない。この場で言うのも気は引けるけど、霊夢さんの搜索よりはまず君たちの命だ。先の海域が謎である以上、君たちの安全を第一に進めたい」

萃香の表情が多少動くが、それは承知済みで協力してもらっている。

だからあとは――

「皆に言っておくことがある。君たちは強い。間違いなく、それこそ世界を変えられるほどに。でもこの幻想郷では、沈んでしまうような戦いはしないで欲しいんだ」

「む……………」

「必ず帰ってッーい」。それだけが僕の命令だ。帰ってきて、また僕に笑った顔を見せて欲しい。僕に恩を返させてほしい。僕の大好きな君たちなら、必ず成し遂げられると信じてる」

「以上」と。半ば震えながら演説を閉じた。

元より、スピーチの経験などほとんどない青年。己の駄弁りのような世迷言が、果たして受け入れられているのか不安になった結果。反応を見ることすらなく、恥ずかしさと申し訳なきに包まれてその場から立ち去ろうとする。

しかしその試みを読まれていたのか、長門に肩をガツチリと掴まれてしまった。

「敬れ——言うまでもなかったか。提督よ、言葉を受け止めた我らの意思、一瞥すらせずに去ろうというのか」

「えっ……っ？」

尋常ではなく強い力で引き止めてくる長門。艦娘と人間の力の差など知っていようものなのに、ここまで引きとめようとする理由は何か。

恐る恐る、青年は自身に従ってくれる部下たちに目を向けると——

艦娘全員が、統率の執れた敬礼を自身に向けていた。

不動。腕や肘の角度まで全て統一され、どの眼であろうとも自身を逃そうとはしない。

逃げようとした自分が情けなくなつて。それでも彼女たちに向き合おうとした自分が頼もしく感じて。

恐る恐る。ゆっくりとした所作ながらも力強い答礼を返した。

ようやく、艦娘に自分の気持ちが伝わったような気がする。

協力者たちの表情も、緊張した糸のように張り詰めていた。妖夢に至っては鎮守府生活にすっかり染まってしまったのか、艦娘同様に敬礼を送ってくれている。

（みんな本気なんだよな……。でも、僕だつて本気だ——）

まだ見ぬ少女のため。幻想郷への恩返しとしての第一歩のため。

青年は表情を一変させ、気持ちを冷静に仕立て上げたのである。

「茅野守連より全艦娘に達する。本作戦は、戦艦を中核とする一個艦隊と、空母を中核とした二個艦隊による大規模威力偵察を実施し、博麗霊夢を発見することを目的としている。まずは第一艦隊——金剛型戦艦4名！」

「私たちの出番ネー！」

「第一艦隊は高速戦艦を主軸とした打撃部隊になる。金剛型を基幹とし、愛宕、鳥海。護衛の水雷戦隊には天龍と初霜、第十一駆逐隊！」

連合『高速水上打撃部隊』

戦符『第三戦隊』

——戦艦『金剛』『比叡』『榛名』『霧島』

重符『第四戦隊第一小队』

——重巡『愛宕』『鳥海』

——軽巡『天龍』

——駆逐『初霜』

駆符『第十一駆逐隊』

——駆逐『吹雪』『初雪』『白雪』『深雪』

「第二艦隊と第三艦隊は、今回の作戦の要である航空偵察を行ってもらう予定だ。先に空母の割り振りから——。第二艦隊は赤城、及び加賀！ 第三艦隊の空母は鳳翔——さん、龍驤、祥鳳！」

「ここは譲れません」

「長門、青葉と加古、長良、第七駆逐隊を第二艦隊。陸奥、足柄、衣笠と古鷹、球磨、第二駆逐隊を第三艦隊付きとする。水雷戦隊旗艦として、第二は長良、第三は球磨。雷巡に改装した大井と北上はそれぞれに配置！」

「北上さんと……別れる？ ブツ飛ばすわよ」

「……戻ってきてからどうぞ」

連合『空母機動部隊』

空符『第一航空戦隊』

——空母『赤城』『加賀』

——戦艦『長門』

——重巡『足柄』

重符『第六戦隊第一小隊』

——重巡『青葉』『加古』

——軽巡『長良』

——雷巡『大井』

駆符『第七駆逐隊』

——駆逐『朧』『曙』『漣』『潮』

連合『空母機動部隊』

空符『第一航空戦隊』

——軽空母『鳳翔』『龍驤』

——軽空母『祥鳳』

——戦艦『陸奥』

重符『第六戦隊第二小隊』

——重巡『衣笠』『古鷹』

——軽巡『球磨』

——雷巡『北上』

駆符『第二駆逐隊』

——駆逐『夕立』『村雨』『五月雨』『春雨』

雨』

「第一艦隊を先頭、第二と第三がその大きく後ろ、間を空けて左右に展開し航空機による偵察を実施する。三角形を描く陣形の最後尾、菱形の頂点となる位置に、艦隊の背後を警戒する艦隊として、夕張と睦月型！」

「あ、今回私も出るんですけどか」

水雷『第六水雷戦隊』

——輕巡『夕張』

驅逐『睦月』『如月』『弥生』『卯月』『菊月』『望月』

今の艦隊に出せるほぼ全ての戦力。混成駆逐隊が近海、紅魔艦隊が霧の湖を警備し、鎮守府へ繋がる水路を完全に封鎖して後顧の憂いを絶つ。

準備は万端だ。さあ、はじめよう。

青年が幻想郷に着任して26日。博麗霊夢が消息不明となって29日が経とうという日。

これは幻想郷にとって、深海棲艦に対する最初の進撃となるだろう。

「只今を以て、博麗霊夢搜索作戦——『霊一号作戦』を発令する！」

幻想郷初となる、深海棲艦に対する攻勢作戦、『霊一号作戦』。概要を大まかに述べるならば、戦力の集中投入による制海権の拡大である。博麗霊夢の搜索は、その副次的な効果によるところが大きい。

場合によっては幻想郷の対海上戦力を一挙に失ってしまう可能性のあるこの作戦。にもかかわらず、指揮を執るのが幻想郷に来て一ヶ月の若者だというのだからおかしな話だ。知らない人が耳にすれば、八雲紫は気でも触れたかと誰しも考えるだろう。

だが、この青年は無理矢理に強制されてこの作戦を打ち立てたわけでも、自分しかいないからと悲観して指揮を執っているわけでもない。

好きなのだ、この生活が。

守りたいのだ、この安らぎを。

だから青年は、“平和な幻想郷”を望む。

あくまで艦娘にできることは、海上の航行と深海棲艦との交戦である。海上、それもただっ広い海域を細かく搜索するとなれば、相応の労を要する。しかも搜索したとして、行方不明になってから一ヶ月が経とうという時期に、博麗霊夢が今更海面でバタバタしているなど考えられないだろう。

博麗霊夢は『空を飛ぶ程度の能力』を有する。幻想郷に現れた海の上では飛行できないというのは周知の事実だが、博麗霊夢の能力ならばこれを無効化できる可能性があるのではないだろうか、と誰もが考えた。八雲紫が干渉できない為に、その可能性そのものは低いのだが、“霊夢なら”やってくれる、と誰もが期待する。

しかし、一ヶ月も不眠不休で空を飛び続けられるはずがない。霊夢が海にいる可能性があるとするれば、海上に人が休めるだけの上陸可能かつ食料を確保できる『島』があるか、霊夢が『深海化』しているかのどちらかである。

願わくば、博麗霊夢が無事に見つかることを祈ろう。誰も、『幻想郷の英雄』と事を構えたくはない。

場所は鎮守府執務室。青年が地図を見ながら作戦内容について振り返っていたところ、自身の護衛として傍に控えている早苗が落ち着かない様子で口を開く。

「カミツレさん、その……」

「ん？」

「いえ、この作戦なんですけど……どうしてそこまで霊夢さんに固執するのかわかって」

「これで霊夢さんが見つかったら、艦娘の皆の株が上がる。あの子達が幻想郷で暮らしていくために必要なことだよ」

隣に立つ早苗に見向きもせず、考えながら答える。その態度に少しばかりムツとした表情を浮かべ、早苗は青年に体を寄せながら同様に地図を見た。

「あの……近いよ？」

「作戦についてももう一度教えてください！」

「ああ、うん。今回の作戦だけ——」

本作戦の最終的な目的は博麗霊夢の発見である。

現在編成中の艦隊は6つであり、このうち一個艦隊は紅魔館近傍の『霧の湖』、一個艦隊は鎮守府近海にて哨戒を行っている。諏訪湖へと通づる水路を塞ぐこの二個艦隊はいわば、鎮守府防衛のための艦隊といえる。

残る4個艦隊が、本作戦の要となる威力偵察艦隊。水上打撃を付帯任務とする第一艦隊を全艦隊の先頭に、予備水雷戦力として後方に控える第四艦隊。その二個艦隊を頂点とし、さらに菱形を形成するように左右に展開するのが、作戦を支える第二艦隊・第三艦隊の空母機動部隊である。

基本的には第二・第三艦隊の空母機動部隊の航空機、及び随伴艦の水上偵察機による大規模広域航空偵察に主眼が置かれ、四個艦隊が主軸となって制海権外へと進撃する。航空偵察に主眼を置いたため、艦隊

総旗艦は第二艦隊旗艦の赤城が勤めていた。

しかし、艦娘を全て作戦に運用してしまうと、鎮守府そのものには艦娘が一人もいなくなる。そこでその穴を埋めるために、陸上では飛行可能なことから深海棲艦に対して有利に戦える魔理沙、咲夜、鈴仙、妖夢、萃香を鎮守府近辺に配置。早苗を青年直近の護衛として、本拠地の守りを固めたのである。

作戦の終了条件は、艦娘に一人でも大破者が出ること、残りの弾薬が3割を切ること、博麗霊夢の発見。いずれか一つでも条件にあてはまる、もしくは大破せずとも大規模な被害や予想しない万が一の事態が発生した場合も、作戦続行の是非は問うことになるだろう。

『艦隊旗艦赤城ヨリ提督へ。敵艦隊発見、航空攻撃ノ許可ヲ乞フ』

「これで6度目か。『許可スル』」

当然ながら、道中は深海棲艦とも会敵する。そのほとんどが、自艦隊の空母5隻から編成された攻撃隊によって沈むのだが、一度だけ敵の空母とも交戦した。もつとも、その空母も1隻と随伴艦だけであったため、5隻の前では形無しであったが。

『戦闘終了——ナラズ。偵察ノ間ヲ抜ケ、敵水雷戦隊接近中』

『第一艦隊前進、コレヲ迎撃セヨ。敵航空機ノ索敵ヲ行イツツ、艦戦ハ第一艦隊直掩ニ回セ。第四艦隊ハ第一艦隊後方ニテ待機』

『了解』

そして、仮に艦隊に接近してくる艦隊がいたとしても、金剛型から編成される高速打撃部隊が、艦隊前面を過剰とも言つていい戦力でカバーする。陣形の穴は、第四艦隊がそれを補助すればいい。

我ながら中々いい出来なんじゃないか、とも思うのだが、この日のために長門をはじめとする艦娘から教育を受けてきたのだ。これで結果を残せなくては情けないにも程があるだろう。どのような結末になろうと、決して自身のみで賞賛が送られるべきではない。

『敵艦隊撃滅、我が艦隊勝利』

「良かった……『被害状況送レ』」

『第一艦隊ノ深雪小破、サレド士気旺盛。其他異常ナシ』

『残弾』

『五割弱ヲ消費。博麗靈夢ハ確認セズ。想定以上ノ制海権拡大ヲ完了ナレド、現戦力ニヨル維持ハ困難』

「そっか……。いや、『進撃セヨ』」

『御意』

予想以上に深海棲艦の抵抗が激しい。今回だけで霊夢を見つけれれるとは思っていないが、何か手がかりぐらいは掴みたいところである。

見つけられなかったとしても、今回手に入れた制海権は鎮守府近海から少し手の届く範囲で維持をする予定だ。それが様々な面で鎮守府の利になることは勿論であるし、今回もカードを多く回収しているらしい。人数的な不安も少しは解消されるだろう。

「カミツレさん、いっぱいしの提督さんみたいですわね」

「まだまだ。何かするたびに自分の至らなさにガツカリしてるよ」

「そんなことありません！ でも、一つ聞いていいですか？ どうして今回、鎮守府から艦娘さんを全員出撃させてしまったんでしょう？

近海と紅魔館にはいるそうですが、私たちだけで戦いきれなかったら……」

「ああ、それはね——」

確かめたい事があるんだよ、と。

主張する鼓動を押さえ込みながら、青年は艦隊からの続報を待った。

総旗艦を務める赤城は緊張していた。潮風と共に鼻を抜ける鉄の香りや、自身の手足である艦載機の風を切る音が懐かしさをもたらし、肩を並べた戦友に護衛されているにも関わらず、である。

緊張している理由を言い当てるのはそう難しいことではない。幻想郷の命運がかかっている、一大作戦の旗艦を任されているためだ。己の力量などわかっている。これでもかつて、世界の頂点に立った機動部隊の一員だ。行動の一挙手一投足が戦闘に甚大な影響を与え、味方からは歓喜の敬意が、敵からは畏怖の憎悪が送られる。

だから、空母は強く在らねばならない。

だがあえて言おう。自分は強い。大戦初期から実働航空部隊を駆り、あらゆる空をくぐり抜け、磨き抜かれたこの心身。まこと一本の刀の如く鍛え上げられたこの誇りは、何人たりとも侵せるものではない。

艦隊に赤城あり。艦隊に一航戦あり。それは等号で、勝利が決定された戦いを示す。

この身を大飯食らいと笑わば笑え。だがその分、昔も今も血反吐を吐いて己を高みへ登らせた。誰よりも努力と信念を重ねて、空の支配者を目指したのだ。

ゼロに描かれた赤の線は不敗神話の証。

この赤は、そう簡単に堕ちないぞ。

帰還した艦載機を着艦させながら、赤城は無線で各艦隊と連絡を取る。

『総旗艦赤城ヨリ各艦隊旗艦へ。状況報告送レ』

『第一艦隊金剛。水偵ニヨル索敵中、変化ハ見ラレズ』

『第三艦隊鳳翔。先ノ戦鬪以降音沙汰ナシ』

『第四艦隊夕張。艦隊後方警戒中、異常ナシ』

「ふむ……」

計6度にもなる接敵を凌いだが、その対処は文字通り余裕である。空母5隻、それでなくとも合わせて43隻の大艦隊が強行偵察しているのだ。真正面から挑もうにも高速戦艦4隻、脇腹を突いたとしても大型戦艦と重巡多数、雷巡を擁する護衛艦隊が迎え撃つ。

そもそも広域航空偵察をしている最中だ。敵はまず、空母の猛攻をどのように凌ぐかを考えねばなるまい。

敵艦隊の接近は断続的に発生する。いずれも小規模な艦隊であり、倒しにかかって来ているようには見えない。この艦隊と戦うのであれば潜水艦によってじわじわ攻撃していくか、大量の航空機による攻撃を行わなければならないが、空母も今出てきたのは1隻のみ。

考えなしに小規模艦隊が突っ込んできているのか、それとも大規模

な艦隊が控えているのか……。

「加賀さん、どう思いますか？」

「赤城さんとまた一緒に戦うことができて嬉しいわ」

「ええと、その、私も嬉しいですがそうではなく」

「第一・第四艦隊は対潜哨戒、第二・第三艦隊は第三警戒航行序列による航空戦力運用中ね。仮に……もし深海棲艦に指揮官がいるなら、先程の近接戦闘でこちらの空母の数は知られてしまったかもしれないわ」

「潜水艦も未だに発見できず、ですか。提督がどう思っているかはわかりませんが、私はもっと反撃があるものだと思います。拍子抜けです」

「深海棲艦は思ったほど数がないのかしら」

「……どうでしょうか。鎮守府近海への侵入は少なからずありますし、少なくとも継戦できるだけの数はいるかと思えますが」

「あるいはこちらの様子を伺っているだけ、と？」

この作戦を立案したのは青年である。素人が考えたにしては中々どうして良くできたものだと感心するも、一方で穴がある。

制海権外の情報が全くない事。地形、敵の数など含め、あらゆる情報が不足している。無論、それを強引に押し通すための4個艦隊ではあるのだが、現場としては非常に気が滅入る。せめて日頃から制海圏外の情報を積極的に収集していたならば、取っ掛りもあったのだが。

深海棲艦の動向も掴みどころがない。行動を予測できれば対策を立てようがあるが、残念ながら理解するには程遠そうである。そもそも人の言葉を理解できるのだろうか。

(半日経ちましたか……随分鎮守府から離れてしまいました。ひとまず進撃を続けるとして、一度提督に相談してみましよう)

と、無線を介して青年と連絡を取ろうとした時、鳳翔からの連絡が入る。

『敵機確認11時ノ方角。数20、戦闘機ノミ』

「戦闘機のみ……？」 『各空母、戦闘機発艦用意。敵空母ノ可能性アリ。戦闘機発艦後、攻撃隊発艦ヲ用意セヨ』

これで7度目の襲撃か、と思いながら、

『赤城ヨリ提督へ。敵航空隊ト会敵、交戦許可ヲ』

『許可スル』

ひとまず、会話はそれだけに留めた。

『鳳翔ヨリ赤城へ緊急入電！ 敵戦闘機隊後方ニ新タナ航空隊。戦闘機100、敵攻撃隊100。我ノ航空隊反転中！』

「えっ………えっ!? なっ——」

「赤城さん、指示を！」

『全艦対空戦闘用意！ 空母ハ全戦闘機ヲ速ヤカニ発艦！ 全戦艦及』

『ビ重巡洋艦ハ三式弾装填！』

『装填完了ネー！』

『発艦用意ヨシ！』

『対空戦闘始メ！ 第一・第四艦隊ハ輪形陣へ転換！』

可能性として考えてはいた。しかし、どこかで起きないで欲しいと思っていたこの事態。

そう。敵空母群による、大規模な航空攻撃である。

赤城は素早く指示を飛ばすも、心はまだ冷静さを欠いてはいない。全空母の戦闘機隊が連弩の如く次々と発艦していく中、正確かつ早急に全艦隊の状況を掌握する。

艦隊の三式弾が一斉に火を噴いた。戦艦6隻、重巡7隻による三式弾は空中で花火のように炸裂し、敵の航空隊をまるで盾で受け止めるかのごとく撃墜する。

次弾が発射。もう一度空中で盾が形成されたのを遠目に見届けると、金剛から入電。

『第一艦隊、戦闘機10、雷撃機及ビ爆撃機10撃墜』

「思ったより少ないですね……仕方ありません。我々空母の本領発揮といきましようか」

「赤城さん。こちらの艦戦は全部合わせて125機、偵察中の機体を除けばおよそ100機です。それに……」

「それに……?」

「深海棲艦の航空隊の練度は、今までの経験からすればはるかに未熟。機体性能も差があります。戦闘機数は同等ですが、油断さえなければ」

「多少の被害は止むなしですね……仕方ありません。加賀さん、勝ちますよ」

これだけの数を飛ばしてくるとなれば、敵にはどの程度の空母がいるのだろうか。自身らと同じかそれ以上の数があると見て違いないだろう。

そして――

航空戦が始まる。

「敵機が集団で移動している戦闘機を見かけたら、対空火器で撃ち落とすか散開させてください！ あとは我々の間合いに持ち込みます！」

「高度を下げてくる敵機は必ず落とせ！ 魚雷も爆弾も寄せ付けるな！」

航空線を指揮する赤城の声に応えるように、長門が三式弾を連射した。

上空を埋め尽くすかのような敵の航空隊の中へ、自軍の戦闘機隊が突入していく。孤立している敵機から順に巴戦に持ち込み、追い回し、その抜群の機動力によって次々と撃墜する。

――はずだった。

「くっ――、墮とせないなんて！」

練度不十分と見ていた敵の練度は同等に高く、性能不十分と見ていた性能は渡り合うには十分。

油断はない。自身らに落ち度もないというのに――

(……強いですね。私や加賀さんでも1対3で手一杯なんて)

敵の攻撃隊は、撃墜を恐れることなく真つ直ぐに突き進んでくる。爆弾を、魚雷を投下するために最適なルートを取り、是が非でも攻撃するという鬼気迫る信念が伝わってこようないうもの。

「皆さん、あの提督の笑顔が見たいでしょう！ その程度で提督が守れますか！」

良くも悪くも、この艦隊は青年が中心である。青年は艦娘が大好きだし、艦娘だって青年が大好きだ。

『帰ってきて、また僕に笑った顔を見せて欲しい』とのたまった彼の演説。なるほど結構なことではないか。それが青年の望みというのならば、いくらでも笑顔を見せつけてやろう。

だがそれ以上に、艦娘が望んでいるのは青年の笑顔。我ら軍艦など被弾することが当たり前であるというのに、それに顔をしかめてくれるのがあの青年。

故に、艦娘に被弾は許されない。そして、傷つかないだけで得られる笑顔を受け取ることに満足してはいけない。

成果を持ち帰ろう。

博麗霊夢を発見してやるのだ。『提督』としての青年の初陣であるこの作戦を完遂させてみせるのだ。

そうして得られた笑顔にこそ、艦娘は価値を感じるのだから。だから、やり遂げたその暁には。

『流石は僕の自慢の艦隊だ』と、どうか胸を張ってくれないだろうか。

赤城のかけた発破により艦隊が踏ん張り始めた。これなら乗り切れると勢いづいたその時に。

――一本の電文が、赤城の元に届く。

『提督ヨリ赤城へ。鎮守府近傍ノ内陸部ニ敵機動部隊見ユ。数12。貴艦隊ハ作戦ヲ継続セヨ。繰り返ス、貴艦隊ハ作戦ヲ継続セヨ』

肝を冷やした赤城。

世界に音が感じられない。視界に色を読み取れない。

胸がグルグルと息苦しくなり、生暖かい吐息が肌をくすぐったその直後。

「敵機直上——赤城さん！」

上空を見上げれば、爆撃機が急降下を始めていて。

己の瞳には、自身へ向けて吸い込まれるように投下される爆弾が映っていた。

040 唯一の手がかり

『提督ヨリ天津風へ。混成駆逐隊ハ警備ヲ続行、増援ニ警戒セヨ』

『天津風ハ提督ノ幸運ヲ祈ル。怪我シタラ承知シナイワヨ!』

「ハハハ、そつかそつか。さなちやん、連絡は取れた?」

「上空で待機していた魔理沙に頼みました。今頃、萃香さんが急行している頃だと思います」

「敵のいる位置は妖夢さんに担当してもらってる場所か。3人いれば大丈夫だと思うけど……」

執務室で未だに椅子にかけたままの青年は、無線から手を離し一息をついた。

懸念の理由は他でもない。鎮守府近辺に突如現れた敵の機動部隊のことだ。

おずおずと、早苗が上目遣い気味に問いかけてくる。

「あ、あの、カミツレさん。私は向かわなくていいんですか?」

「さなちやんは僕の傍にいて欲しいんだ」

「な、あつ——!……録音しておけば良かったです」

「ん? あの、鎮守府に直接殴り込まれたとき、僕のこと守ってくれる?」

「当たり前じゃないですか! 任せてくださいね!」

苦笑しながら、青年は鎮守府近辺の地理を示した地図に目を落とす。この地図の作成だけでも艦娘に協力してもらいながら2週間はかかったのだが、このような形で役に立つ事態は、できれば来ないで欲しかったものである。

「空母1、重巡2、駆逐3が2個艦隊、か。萃香さんが本当に強いなら問題ないとは思うけど……」

「……やつぱり、艦娘さんがある程度残しておいた方が良かったんじゃないですか? いくら私たちがいるとは言え、鎮守府がガラ空きなんて危ないですよ」

「あー……うん。僕が確かめたかったのはそこなんだ」

「さつき言ってたことですか。確かめたかったことって?」

早苗が不思議そうな顔で、青年の顔を覗き込む。それどころではない青年は、

「深海棲艦に、指揮官みたいな存在がいるのかどうか、ね」

内心舌打ちしながら、この状況にため息をついたのであった。

魂魄妖夢は流石にうんざりしていた。

鎮守府にやってきてもう一週間にもなろうという妖夢だが、この一週間は時間のなさが猛攻を仕掛けてきていたのだ。朝早く起きては食事を作り、食事をしては食事を作り、演習の手伝いをしては食事を作り、食事をしては食事を作り、自己鍛錬の時間もないまま食事を作り、食事をしては食事を作る生活。

正直に言おう。人手が足りない。

作戦前だから厨房に回す人数を極力少なくして訓練も増やしているそうだが、これを日常と捉えてしまっている妖夢はたまったものではない。

ひよっとしたら食事を軽視しているから厨房の人数が少ないのではないかとも思ったが、青年の生い立ちを聞いて涙してしまった妖夢はすぐさまその考えを捨てた。そもそも軽視しているならば、作戦の要である鳳翔をずっと厨房に置いておくはずがない。

休みは一日だけもらった。しかし、休みの日に何をしようかと思つてのんびりしている間に、休みが終わってしまったのだ。あの絶望感と申し訳なさをやるや、まるで幽々子に叱られた時と同様の気分である。

だから、妖夢は固く決意する。

(この戦いが終わったら私、もう一日だけお休みをもらうんだ……！)

空を飛びながら、諏訪湖から流れ出る河川に展開する敵艦隊を視認

し続ける。時々敵空母から戦闘機が発艦してくるのだが、それを刀で撃墜しながらため息をまた一つ。

(幸い、艦娘さんとの演習で戦い方はなんとなくわかるけど……)

深海棲艦から向けられているのが、明確な敵意だというのは言うまでもない。途中で魔理沙が合流したものの、流石に魔理沙と二人では相手をできないため増援の到着を待っているのだが、鎮守府へ向けて進み続けるのを黙って見続けるというのも歯がゆいものである。しかも、発艦した敵の航空機は、何機か逃がしてしまった。

「霊夢……………」

魔理沙もこのハエタタキに協力してくればいいのと思うのだが、当の魔理沙は筈にまたがって敵艦隊をじっくり眺めているだけである。作戦が始まった当初からなのだが、どうやら霊夢への想いが面倒なほど頭の中でこんがらがっているようで、時折霊夢の名を呟くだけでぼぼ上の空だ。

そんな時、ようやく助っ人が登場する。

「うおいひよっこ侍、私が来たからにはもう大丈夫だ」

「萃香かぁ……私の出番なさそうだね。行くよ、魔理沙」

「うおお!! お、おおわかった!」

深海棲艦の撃退。内心、妖夢はあまり乗り気ではない。しかし、これも幽々子のため。そして、なんだかんだお世話になっている鎮守府のためだ。

あの青年から鎮守府を守るに値するという信頼をもらっているのだ。それに報いてこそ、己の剣も輝くといえよう。

返還された白楼剣を握る妖夢は、敵艦隊へと急降下を開始した。魔理沙と萃香もそれに追従する。

妖怪の山での迎撃戦は、こうして始まった。

遠くに聞こえる戦闘の音を感じながら、青年は考えに耽る。

敵機動部隊の迎撃は始まった。妖怪の山にも既に援軍を要請済みであり、少し時間が経てば天狗の救援も翔けつけるだろう。

深海棲艦に指揮官がいるのはおそらく確実である。ガラガラになつた本拠地を狙うことの価値を理解しているのなら。それゆえに、空母という強力な艦まで出してきた可能性が高い。

だが、同時に考えるのはその指揮官の正体。鎮守府が空くというのを知っていなければ、今回のような攻撃も取ることはできない。

考えうるとすれば――

（誰かが情報を漏らした、無意識に漏れてしまったか、指揮官本人が鎮守府にいるか。はたまた誰にも気づかれずに情報入手できる人物か）

いずれにせよ、今後はもつと情報管理を徹底しなければならぬらしい。外部に協力を仰ぐ場合も、その人物に関係のある人物は全て洗わなければならぬだろう。

（このことを誰かに相談――いや、守矢神社か艦娘の皆しか無理だな）
その時である。早苗が、執務室の窓から遠目に見える敵の艦載機を発見したのは。

「あ、カ、カミツレさん、敵がきました！ ええつと、10機ぐらいです！」

「あー、こっちにも来ちゃったか……どうしよっかな」

どうやら、妖夢だけでは凌ぎきれなかつたらしい。

現状で取れる手段としては、早苗が迎撃に出るのが望ましいだろう。弾幕による航空機の撃墜。全てを撃墜することが叶わずとも、鎮守府への被害は最小限に止められるはずだ。

だがそこで、青年は思いつきにも近い策を実行に移す。

「工廠にはにとりさん……そうだ！ さなちゃん、その緊急サイレン押しして！」

「サイレン!? これですか！」

壁際に設置されたサイレンのスイッチに対して、早苗が握りこぶしを叩きつける。瞬間、鎮守府中にサイレンが鳴り響いた。

これ自体は、至って普通に警報としての効果しか持たないサイレンであるが。

今回の作戦時に限っては、鎮守府では別の意味を持つ。

瞬間、幾拍かの軽快な機動音が響いたかと思えば、砲撃音が敵機の「機数分」だけ鳴り渡り。

瞬く間に、敵が全滅したのである。

(み、耳が……)

間近で放たれたその砲撃音に顔をしかめつつ、青年は早苗にもう一度サイレンを押すように頼む。

早苗も耳を押さえながら魂が抜けたような表情になりながらも、説明を求めてきた。

「カ、カミツレさん、今のは……」

「……鎮守府に設置した防空システムでね、にとりさんが幻想入りしてきた設計図を元に勝手に作っちゃったんだ。この執務室の上に設置したレーダーで航空機を捕捉、武器管制と射撃管制で瞬時に敵機に砲を向けて発射する……この鎮守府のいわゆる盾だよ」

「え、あの……。外の世界で似たようなもの聞いたことがありますけど、それって艦娘さんの兵器に比べて性能が……」

「代わりに仕掛けが大掛かりになりすぎてから、工廠の地下を丸々使ってるんだよね。艦娘の機装には応用できないってさ。しかも、あんな砲撃音してるけど、発射してるのは弾幕らしいんだ」

「にとりさんって……すごいんですねえ」

これで、鎮守府の秘密を一つ明かしたことになる。これを知ったのは、早苗とにとり、それから深海棲艦を迎撃中の3人ぐらいだろう。この情報が漏れたなら、そのうちの誰かを探ればいい。

(疑いたくはないんだけどなあ……)

こうして、鎮守府に接近した敵機は迎撃に成功したのであった。

一方、迎撃組はというと。

「オラオラ、そんなもんかよ！」

萃香が、一人で敵艦隊と対峙していたのである。魔理沙は巻き込まれるのが面倒なのか空中へ避難し、妖夢は、

（さっき鎮守府で変な音がした……。あ、逃がした敵の航空機を墜としたのかな？ でも……。どうやって？）

同じく、空中で待機していた。萃香の大立ち回りを傍観しながら。事態は戦闘開始から既に起きていた。萃香が『密と疎を操る程度の能力』により、少し体格を落として12体に分身。深海棲艦体12体にガチンコの殴り合いを仕掛けていたのである。それを避けるために、妖夢と魔理沙は上空へ逃げざるをえなかったと言おうか。

結果、敵の駆逐艦6隻は瞬く間に殴り倒された。同時に萃香の分身も6人分へと戻るのだが、すると身体が多少大きくなる。その状態で重巡洋艦4隻も沈め、あつという間に空母が2隻残るのみとなったのだ。萃香は既に2体へと戻っている。

「もっと楽しませてくれないか？ 私はまだ余裕だぜ？」

「——ッ」

空母は萃香に対して距離をとりながら戦っているが、萃香がどうしても距離を詰めようとするため、航空機を発艦させた。距離も近く、爆撃機などは既に爆撃態勢に入っている。

しかし、それに対して萃香は。

「——!？」

「そんなのんきな速さで、私が捕まえられるかな……。？」

霧状に変化し、航空機の攻撃から逃れる。爆弾の爆発に対して風のように舞い、霧となって全ての航空機を包み込むようにし——

「おらよー！」

どこともなく声が聞こえたかと思えば、霧の中にいる航空機は全てが何らかの打撃を受けたのか、ひしゃげて墜落してしまった。

全ての航空機を撃墜されたのか、空母は何をするでもなく逃げ始める。

しかし、そんな敵に対しても萃香は霧の手を伸ばして。

この迎撃は、青年が想定していたものよりも、あっけなく終了した

のである。

「ゴホツゲホツゲホツ！ ——ん隊！ ガハツ、対空戦闘を続行！」
中破しながらも、赤城は指示をやめない。総旗艦である以上は艦隊の命は自身が預かっているのだ。

たかだか甲板が破壊された程度で、この誇りをどうして失えよう。

「敵戦闘機はかなり数が減っています！ 畳み掛けてください！」

機体性能、搭乗員の技量共にほぼ拮抗し、敵味方数百の戦闘機、爆撃機、攻撃機が入り乱れ、対空砲火が花火のように打ち上げられるこの空襲は、正しく泥仕合であったといえよう。

特に航空戦だが、両航空隊とも損耗が非常に激しい。戦闘機の数では勝っていても、こちらの戦闘機は敵の攻撃機も相手にしなければならぬ。総数上は劣勢も劣勢の状況でありながら何とか戦い抜いているのは、少なからず自身と加賀がいるからであるという自負もある。

一機で攻撃機三機を相手に追い回しながら、向かってきた戦闘機二機を巴戦に持ち込む。爆撃機が爆撃のために低空へ降下してきたところをすれ違いざまに墮とし、満身創痍になりながら海中へ没していく赤城の戦闘機。

彼はエースだった、というわけではない。そもそも、赤城の航空隊に特別なエースの妖精など居はしない。鍛え、磨かれ抜いた彼らを、エースという陳腐な言葉で片付けることなど出来ようものか。

しかし、それでもその言葉を使うのであれば。

赤城の戦闘機隊は、全員がエース。自慢の精鋭しか揃っていないのだ。

そして、加賀の航空隊もまた。

精強の証たる赤色の線をまとっているのだから。

だが、そんな消耗戦も終わりを迎える時が来る。

(次の目標は——?!? 撤退……していく?)

敵の航空隊、残りおよそ80機程度が反転、引き返していったのだ。それを見て、赤城は追撃を許可しないよう指示を下す。

『警戒ヲ厳二。各艦隊、被害状況送レ』

『第一艦隊金剛ヨリ。初雪、深雪ガ中破。天龍ト吹雪ガ小破デス』

『第三艦隊鳳翔。衣笠中破、全駆逐艦小破』

『第四艦隊。我、旗艦夕張小破。睦月及ビ菊月ガ中破』

なんとということか、と赤城は頭を痛める。

提督から預かった艦隊がこの被害である。43人のうち、中破6人、小破7人と考えれば被害は大したことがないようにも見える。確かに、あれだけの航空機の攻撃を受けて尚、これだけの被害で済んでいるのは奇跡とでも言おうか。

しかし、

「赤城さん。空母5隻の航空機の残存数、戦闘機はたった50機しか残っていません」

「撤退していったのは戦闘機40機と攻撃機30機……。よく落とされたのですが、痛み分けとは言い難いですね。しかも加賀さん、気がつきましたか？」

「……ええ。てつきり空母群を相手にしているかと思っていました。敵の航空隊は“陸上機”でした。でも、近くに島のようなものは見当たりません。航続距離任せのアウトレンジ攻撃でしょうか。それなら、撤退したことに納得はいきませんが」

「……どうでしょう。偵察に出ている機体はかなり遠くまで飛ばしています。もし島があるなら見えそうなものですが……。それとも、私たちの想像もつかない何かがあるか？」

「我々も今までの知識にこだわりすぎています。もっと柔軟に考える必要がありますね」

「……まだまだ、幻想郷でゆつくりできそうにありません」

その時になってようやく、赤城は青年からの無線を受けていたことを思い出す。

ひとまず艦隊の安全を最優先したためにこの海域での迎撃を選択

したが、肝心の青年の安否はまだ確かめていない。

『提督！ 連絡乞フ！ 返事ヲ！』

『ビツクリシタ』

「な、何を呑気な……。でも、ご無事そうですね。『状況送レ』」

『迎撃完了。我方方二被害ナシ。赤城艦隊ノ情報求ム』

「……………はあ」

電文を通して経緯を説明する。既に空母の数を活かしきれなくなっていること、弾薬が残り3割を切ってしまったこと、被害を受けた艦も多数存在すること。

これらを報告すると、青年は――

『撤退セヨ』

「即断ですか……。『コレヨリ撤退ス』」

『帰投後、赤城及比長門ハ執務室へ。赤城ハ修復材ヲ許可スル』

「……………。『了解』」

怒られるのだろうかあと、赤城は気落ちする。いや、あの青年が怒るのかどうかは知らないが、少なくとも今回の艦隊指揮については自身で反省しなければならぬ。

最後の航空戦などは、もつとやりようもあつたのではないかとため息をついた。

「長門さん、帰還したら私と一緒に執務室に来るようにと……」

「わかった。あと、あまり落ち込むなよ」

「これは私の慢心が引き起こした事態です」

「違う。旗艦が落ち込んでいては艦隊全体の士気に関わるのだ」

「……………わかりました、すみません」

全艦に指示を傳達。各艦はその場にて回頭、第一艦隊を最後尾として鎮守府を指す。第四艦隊は対潜哨戒しつつ、他の艦隊は引き続き敵の航空機を警戒した。

破壊された飛行甲板を眺めて、赤城は重たい息をつく。空母としてもお荷物になりつつある自分が、航空戦力を削られた空母主体の艦隊に指示を出す、我が身として、これほど腹立たしいことがあるだろうか。

しかも、博麗靈夢を搜索するという主目的も達成できなかった。海にいるという確証はないのだが、総旗艦として責任を感じつつ、そんな自身を情けなく思ってしまったのである。

その時――

「あの、赤城さん」

「潮さん？　どうかしましたか？」

「えっとその、海にこんなものが」

第二艦隊随伴の潮に声をかけられる。何かを差し出してきたため、航空戦において撃墜した敵機の残骸かと思っただが、

「これは……なんでしょう？　私ではわかりませんね」

「これ、海に沢山落ちています。今までこんな見たことありません。回収しておいた方がいいですか？」

「ちよつと待ってくださいね。『全艦二通達、海上二不審物アラバ報告セヨ』」

『ペラペラノヤツネ？　見渡ス限り相当数アリマース』

『可能ナ限りノ回収ヲ望ム』。ひとまず、正体はわかりませんが、何か深海棲艦と繋がりがあられるのかもしれない

不審物の正体は気になるが、今はそんなことよりも艦隊が無事に帰還できるように指揮を執らねばならない。航空戦力も弾薬も少ないのだから、なおさらの警戒が必要だろう、と。

この時は、この事をそれほど気にも留めていなかった。

「第二艦隊、おもーカーじいっばい。鎮守府へ帰投します。半日かかるので着く頃には夜です。疲れも溜まっているかもしれないですが、決して油断のないように」

だが、気落ちした赤城は知る由もない。

この“赤色の御札”の発見こそが、幻想郷の運命を変えることを。

041 作戦終了

時刻は深夜0時を回っている。にも関わらず、青年は執務室にて窓の外を眺めていた。

遠くにぼんやりとした明かりが見える。それは徐々に鎮守府内に吸い込まれていき、しばらくすると諏訪湖近辺が騒がしくなった。

霊一号作戦における、主力艦隊の帰還である。

居ても立ってもいられなくなった青年は、執務室を飛び出した。

湖の近傍にて、青年は艦隊を迎え入れる。

「艦隊が帰投しました」

いつもの抑揚で、いつもの温もりで。

最初に報告をしてくれたのは、旗艦である赤城であった。

水上にて敬礼。服も艤装もボロボロになりながらも、責任感を感じさせてくれる強い瞳を持つ彼女だが、この時ばかりは少しだけ頬を緩ませていた。

赤城もこの重大な作戦を任されて、相応に緊張していたのだろう。

「赤城、お疲れ様。それから……」

こうやって水辺で艦隊を迎えるのは、最初の出撃以来だろうか。そう考えると、駆逐艦5人しかいなかった艦隊が、よもやこれほど大きくなるなど誰が想像しよう。

赤城同様に水上、彼女の後ろに控えるのは、総勢43名の大艦隊。水上にて一糸乱れぬ統率による敬礼を向けてくれている彼女たち。ボロボロになっている者、まだまだ余裕そうな者、疲れを顔に出している者。

多種多様な表情の彼女たちであるが、この大きな作戦を無事に終えてくれたことに対して、まずは礼を言わねばならない。

「みんな、ありがとう」

全員の双眸と意思を交わして。

青年は、最上の敬意を以て答礼したのであった。

「本当にお疲れ様。これからの指示を出すからよく聞いておくように。まず、被害の大きい子から順番に入渠を。しばらく大きな作戦はないから、ゆつくり疲れをとってね。弾薬については順番に補給、ただし艦載機は祥鳳を優先的に補給」

「私ですか？ それは確か、以前言っていた……」

「うん。祥鳳は明朝、霧の湖を抱える紅魔館に派遣して龍田たちと合流。周辺の航空偵察に就くことになるからそのつもりで。急ぎだし、帰ってきたばかりで悪いけど、お願いしたい」

「はい、任せてください！」

そう言って、祥鳳は疲れを感じさせない笑みを浮かべて頷いた。

「補給を済ませた子については、食堂に夜食が用意してあるので食べるように。紅魔館の咲夜さんと、うちの妖夢さんが作ってくれたので、しっかり頂いてください」

「じゅる」

「赤城は高速修復材を使用した後に、長門を伴って執務室まで」

「……はい」

「今もまだ、天津風の駆逐隊が警戒にあたってる。被弾していない駆逐艦のうち、余裕のある者は申告して欲しい。交代の艦隊を組むことになるけど、無理を押し出して撃をさせるつもりはないので、本当に余裕のある子だけ補給後に交代をしてもらいます。その子達については、その警備終了後の休みについても配慮するので安心してください」

若干がっかりした顔の赤城が肩を落とすが、それはさておき。

妖夢は既に就寝し、協力者も一部は帰した。

結果から言えば、この作戦で制海権が相当に広がったといえる。無論、全てを管理するわけではなく、艦娘の人数に合わせた広さを警備することになる。空母も警備にあたらせる必要が出てくるだろう。

しかし、艦娘も少くない被害を出している。全ては最後の大空襲によってもたらされたものだが、制海権を広げた代償としてはなかなか手痛い被害だ。

だが、なんといつても今回の作戦のそもそもの目的だが――

「おい長門それ！ 間違いねえ、霊夢の札だ！」

「魔理沙落ち着け、ひとまず手がかりは得たのだ。今日はもう遅い。一度帰って、また明日にでも来るといい。鎮守府としても、今後の方針についてはまだ決まっていけないんだ」

「でも——！ いや、そう……だよな。悪い、お前らに怪我までさせちまってるのに」

「我々はまだ会ったことはないが、お前が博麗霊夢のことを思う気持ちには重々承知しているつもりだ。当たり前だが、悪いようにはしない。だから、くれぐれも焦ったり、先走ったりすることだけはやめてほしい」

「……わかった、今日は帰るぜ。その……ありがとうな」

「礼を言うのはこちらの方だ。我々が不在の間に鎮守府を守ってくれたこと、感謝する。今日はゆっくり休んでくれ」

博麗霊夢を発見すること、だったのだ。

博麗霊夢本人は見つかっていない。しかし、彼女のものと思われる所持品、『御札』は大量に見つかったのだ。行方不明となつて一ヶ月が経過しようとしているのにも関わらず、霊夢が生きている可能性を探し出すことができた。これを僥倖と言わずしてなんと言おう。

魔理沙はフラフラと帰っていく。流石に疲れたのかと思つてその表情を一瞥したのだが、むしろ魔理沙は安堵した表情で、泣きそうになりながら空へ旅立っていったのだ。

博麗霊夢本人は見つからなかった。制海権は広がったが、艦隊は被害を受けた。

それでも、

(この作戦は……間違つてなかった。そう信じたいよ)

内容に詰めるべき部分があったことには自分で鞭打っていくとして。

この作戦を実行したことで、喜ぶ者がいたということ。それは小さな一歩でも。ほんのわずかなものであっても。

青年の自信へと、確かに繋がったのであった。

こうして、霊一号作戦は終了する。

深夜。鎮守府内、特に食堂が騒がしくなってきた頃。

執務室にて、作戦が終わっても気を抜かず、机で勉強に励む青年。そんなところへ、艦娘がやってくる。

「航空母艦赤城、入ります。作戦の報告に参りました」

「戦艦長門、入るぞ。呼び出しに応じたが」

「お疲れ様、座つていいよ。お茶淹れるからゆつくりしてて」

「提督、お茶ぐらい私が——」

「いいからいいから」

と、青年は執務室の会議用テーブルに二人を座らせた。咲夜が夜食のついでに自分に作ってくれたクッキーもあるため、お茶と一緒にそれを差し出す。

「じゃ、報告を聞こっか」

「ボリボリボリ、はい、ボリボリボリ」

「はしたないぞ赤城、ボリボリボリボリボリ。……うーむ、止まらん」

「ご、ごめん、夜食もまだなのに……」

咲夜のクッキーがものの一分でなくなってしまったところで、話は本題に入る。

最初は、艦隊旗艦である赤城の報告から始まった。

「では報告します。作戦目的である霊夢さんの搜索ですが、半分成功といったところでしょうか。本人は見つけていませんが、本人のものと思われる御札を発見しました」

「うん、これは快挙だね。幻想郷の歴史が変わるかもしれない」

「からかわないでください。我々の被害状況ですが、これは無線を通して説明したとおりです。最後の空襲で多くの被害が出てしまいました。申し訳あり——」

「赤城はよくやってくれたよ。責めるつもりはないし、むしろ褒めた

いぐらいだ。作戦目的は霊夢さんの搜索だけど、そのための条件は覚えてる？」

「全員の……帰還です」

「そう。ありがとう、よく帰ってきてくれたね」

「……すみません」

忘れもしない、早朝に長門に半ば強制されて語った演説。思いの丈をぶつけたが、その中でも全員の帰還というのは絶対に外せなかったのだ。

再び、全員の無事な顔を見ることができた。霊夢を見つけるよりも、喜びはそっちの方が何倍も上だ。

「作戦の中での戦い方の反省はみんなに任せるとして、僕からの相談。深海棲艦についてわかったことがあるんだ」

「む？ ひよっとすると私を呼んだ理由はそれか？」

椅子にかけた長門が腕を組み、首をかしげて尋ねてくる。

「うん。まず、深海棲艦には指揮官みたいな立場にある人物がいるかもしれないってこと」

「六度目の交戦、水雷戦隊との戦闘が終わった際、加賀さんも話していました。敵に指揮官がいるならば我々の艦隊、特に空母の数は知られてしまった可能性がある、と。そして、その後にあの空襲戦です」

「なるほど。鎮守府が空なのがバレたのって、そっちの可能性もあるのか……」

「どういうことだ？」

長門の訝しむような表情を受け、青年はため息をつきながら話す。

「実はね、情報が漏れている可能性があるんだ。全艦を鎮守府から出撃させて、戦力的には空になったよね？ 鎮守府への攻撃は、それを知っていた上で行われたんじゃないかって思ってる」

「情報がダダ漏れだというのか？ ……過去と同じことを繰り返してしまおうとは」

「いつ情報が漏れたのかはわからない。鎮守府内で作戦を発表したすぐ後に、紅魔館にも永遠亭にも気づかれてたみたいだから。でも紅魔館の場合は、レミリアさんの能力のせいなのかも。情報の出処について

ては全く見当がつかない」

「ふむ……」

あらかじめ大規模な艦隊が出撃することを知っていたならば、鎮守府へと別働隊を送り込むことも可能であり、戦力をかき集めて航空戦力を充実させることもできるだろう。

しかし問題であるのは、海と幻想郷をつなぐ水路は全て塞いでいるにも関わらず、別働隊が鎮守府へと直接攻撃を仕掛けてきたこと。それと、航空戦力がおそらく一つの基地から出撃してきたこと。この2つだろう。

「三途の川は？」

「小野塚小町が善意で確認していて、先ほど報告にきた。怪しい影は見なかったそうだ」

「となると、やっぱり深海棲艦も、いつも見てる姿以外の形態があるってことなのかな？」

艦娘にカード化の形態があるように。

深海棲艦にも同様の、もしくはまた異なった形態があるのかもしれない。

「航空戦での敵機は全て陸上機。そして御札が落ちていたことを考えれば、霊夢さんは……」

「…… 霊夢さんは深海化している」。多分間違いないだろうね。しかも陸上型かな？」

「先ほどの魔理紗さんの話では、弾幕としての御札の数に限りはない、と」

「へ……？ 嘘って言ってよ」

「仮にまた攻め込んだとしても、少なくとも航空戦の時と同等、多ければそれ以上の数の航空機を扱ってくるでしょう。機体性能も我々と同等、搭乗員の熟練度もそれほど差はありません」

「……二号作戦はしばらく先になりそうかな」

「それがよろしいかと。それまではできる限り、手に入れた制海権を管理しましょう」

何ともふざけた戦力である。航空戦力が無限大であるなど、霊夢だ

けで軍隊が作れるではないか。

さらに、他の深海棲艦との関係である。航空戦とほぼ同時に、鎮守府が攻め込まれた。連携を取って指揮系統をも乱そうとしていた。これを仮に、霊夢が指揮していたというのなら。

(霊夢さんが深海棲艦の指揮官……？　なら、この海の異変は一体どこから始まったんだ？)

そのまま、赤城から報告を受ける中で。

執務室の扉が、勢いよく開く。

「お邪魔するよ盟友……って、ありや、お話中だったかい。ごめんよ？」

「にとりさん？　いやいやこっちこそ、遅くまでごめんね？」

堂々と入ってきたのはにとりであった。が、青年が赤城や長門と共にテーブルを囲っているのを見て、申し訳なさそうな表情をしていた。

「それで、どうしたの？」

「いやうん、その、ちよつと困ったことになってね」

「困ったこと……とは？」

もしや防空システムが早速バレたのだろうか、あるいは魚雷をまた作りすぎてしまったのだろうか、などという考えがよぎる。

が、にとりからの答えは、

「一応言われたとおり、祥鳳っていう美人さんには艦載機を補充していたんだ」

「う、うん……？」

「で、おしまい」

「おしまい？　……って、まさか」

「材料がないんだ。航空機、もう一機も作れない」

更なる受難に、青年は頭を抱えることとなった。

心のどこかで、『ああやっぱりか』などと思っただけはいたが。

基本的に、艦娘の艦載機を生産する際、必要となる素材はアルミニウムである。とは言っても、幻想郷では純粋なアルミニウムというのはなかなか手に入りにくいもので、鎮守府の工廠で使用する金属類の多くは、妖怪の山の天狗たちが幻想入りしたものを拾ってきてくれるのに頼っているのが現状だ。その対価として、鎮守府は海産物を提供する。

鉱石状態のボーキサイトからもアルミニウムは精製可能だ。しかし、妖怪の山の天狗はボーキサイトについて詳しくはないようだし、仮に手に入れられたとしても少量。にとりが自分で所有していたボーキサイトも提供はしてくれたのだが、それでも微々たるものだけだ。という。

今までは拾ってきたものだけで十分に足りていた。しかし、ここへ来て急激な艦載機の消耗が、アルミニウムの供給を大幅に上回ってしまったのだ。

今回の空襲戦による被害が予想外の出来事だったとはいえ、今後も同様の事態が起きないとは限らない。空母の数も増えた今、アルミニウムがさらに必要となってくるであろうことは、想像するに難くない。

(どうにか安定してアルミを……いやその前に、今は目の前のアルミ不足からだ)

既に赤城は顔が真っ青だ。航空機の重要性をよく理解する彼女だからこそ、この事態が危ういことを察したのでだろう。

「にとりさんの力でどうか……流石に無理か」

「こればかりは私もね。今の天狗のペースだと、全機補充と予備機の確保に少なくとも1ヶ月、つてとこかな」

お茶を飲もうとする赤城。が、コップを握る手が震えてしまって、テーブルの上が大洪水だ。

「……わかった。アルミニウムの件は僕の方からもちよつと動いてみる」

「うん、お願い。ふあああ……そろそろ私も寝ようかな。おやすみ」

「おやすみ。いつもありがとうね」

眠そうな声でそう言つて、にとりはあくびをしながら執務室から出て行った。

今回の出撃で使用した弾薬を補充するために、にとりもこの時間まで必死に生産ラインを回していたのだ。また今度、人里できゆうりを買って差し入れるとしよう。そろそろきゆうりだけでは申し訳なくなってきた気もするが。

改めて、青年は長門と赤城に向き直る。

「じゃあ、今後の方針を決めよつか」

「最終目的を博麗霊夢の搜索……いや奪還として、当たり前だが軍備の増強が必要だろう」

「まず、手に入れた海域の制海権を維持しましょう。次回からの攻略も、ある程度は楽になります。それに伴って、海岸線の封鎖は確実にしたいですね。仮にそれでも内地に潜入されるとしても、いくらかはマシになると思います」

「内地に仮に入られた場合はどうする？ 各地に艦娘を配置して対応させるか？」

「となると、艦娘の数が足りませんね。ある程度は制海権外に出て戦鬪し、カードを積極的に回収する部隊があつてもいいかもしれません」

「幻想郷の者にある程度協力を要請するとして、拠点の候補も選出せねばなるまい。幸いにも、幻想郷は艦娘の航行可能な河川が入り組んでいる。移動や輸送は楽だが、広域偵察には空母がやはり必要だろうな」

「あ、はい。えと……じゃあそんな感じでまとめときます」

やはり、2人とも歴戦の艦ただけあつて、その知識と戦略的な視野の広さには脱帽するばかりだ。こうも次々に案が出てくるのは、伊達に実艦時代に海軍の根幹的部分を担つてはいなかったということだろう。

「ですから、やはり安定した食事のためにも人里は重要かと」

「子どもを守るためには人里は重要な拠点だな、うむ」

自分の欲求にも忠実なようで何よりである。

気を取り直して、青年は赤城に尋ねる。

「それで赤城、人数の話をしてたけど、今回の作戦でカードを拾ったんだって？」

「あ、そうでした。どうぞお受け取り下さい」

今回の作戦で合流した艦娘は十四名である。

睦月型駆逐艦から、五番艦の『皐月』、七番艦の『文月』。

特I型駆逐艦から、九番艦の『磯波』、十番艦の『浦波』。

特II型駆逐艦から、一番艦の『綾波』、二番艦の『敷波』。

初春型駆逐艦から、三番艦の『若葉』。

陽炎型駆逐艦から、一番艦の『陽炎』。

川内型軽巡洋艦から、一番艦の『川内』。

高雄型重巡洋艦から、一番艦の『高雄』。

千歳型水上機母艦から、一番艦の『千歳』。

蒼龍型航空母艦から、『蒼龍』。

飛龍型航空母艦から、『飛龍』。

それから、給糧艦の『間宮』。

現状では、幅広い役割を持たせることのできる駆逐艦と、限られた航空戦力を補うことのできる航空母艦の増強は本当に心強い。上手く運用していききたいところであるが、まだまだ勉強もしていかななくてはならないだろう。

そして、青年が一番気になったのは――

「えっと、間宮さんっていうのは？」

「食糧を艦隊に供給する艦を給糧艦と言ってな、艦内に巨大な冷蔵庫、冷凍庫だったり食料だったりを運搬するのは勿論、お菓子なんかを作っていたぞ。特に羊羹などは絶品でな、しばしば競争が起きたものだ」

「へー？ なら厨房を任せようかなあ……」

「間宮さんのご飯が毎日食べられるんですか？ 賛成です」

「暗に妖夢さんのご飯が美味しくないって聞こえるけど……？」

「ああいえっ！ 妖夢さんのご飯も美味しいんです……。はっ、両方食べれば解決ですね！」

「まあ、そのぐらい人気があったんだ。『あいどる』のようなものさ」
そう話していると、流石にお腹がすいてきたらしい。長門と赤城のお腹が同時に鳴り、ついでに青年のお腹も鳴る。

与えられた考えをもとにして青年が方針を考えておくということ
で、会議は終了した。その後は食堂に移動して、全員で食事をとる。

警備以外の艦娘が寝静まった頃。青年は一人でひっそりと全員分の皿洗いを済ませてから、執務室のベッドで眠りについたのであった。

霊夢へ至る道筋が見えたこと、鎮守府として幻想郷で受け入れられ
始めていること。

提督として初となる大きな作戦を、形はどうあれ完遂したことに。

底知れない、安堵を覚えて。

042 東方地霊殿

翌朝のことである。

(……なんかボーツとするなあ)

視界がぼやけ、視点が定まったかと思えばそこから動かせない。体が動くことには動くが、ダルさというか億劫さというか、動くにも気合を入れなければ動けないような状態。

身に覚えはある。この重たい頭の正体は、間違いなく風邪だ。

寝苦しかったので目を覚ましたが、どうやらいつもの起床時間だったらしい。が、どうしても動く気になれず、頭痛に悩まされながら横になってみると、ジャージ姿の長良が心配そうな表情で執務室へ入ってきた。

「司令官、おはようございます！ 今日もランニング……って、どうしたの？」

「あー……ああ、長良か……。おはよう……」

「すごい顔が赤いよ、大丈夫？」

そう、いつもならばこの後、長良と共にランニングをするのだ。当初は一人で黙々と走っていたのだが、長良が艦隊に加わってからは彼女と一緒にランニングが毎朝の日課になった。一緒に励む人がいるだけでこうも楽しいものになるというのは甚だ予想外であり、青年の知らない知識であった。

この辛さも長良の顔を見れば乗り越えられるかな、なんて戯けたことを思いながら長良の顔をチラッと見てみたのだが、残念ながら可愛いだけで体の不調は治りそうにない。

「……ごめん、今日はやめとくよ」

「ちよ、ちよと待ってて！ 鳳翔さん呼んでくるね！」

そうしてやってきたのは、朝食を作っていた鳳翔。寝たままで話すのも申し訳ないと思いい体を起こそうとするのだが、ボーツとするために首が据わっていない。

鳳翔が抜けて厨房は大丈夫なのかと思っただが、給糧艦の間宮も着任したのだ。多少なら大丈夫なのだろう。

「あら……これは……」

「うう……すみません、なんだか熱っぽくて……」

「……ふふ、一つ区切りがついたから、安心して疲れが出たのかもしれない
ませぬね」

「子供ですか僕は……」

「詳しいことは永遠亭のお医者様に聞かなければならないとは思いますが……どうしましょう?」

「あの……か、艦隊の指揮をとりま——」

「休みたい? わかりました、今日は休んでください。私たちは非番の日がありますけど、提督はお休みが今まででありましたか? まずは体調回復が優先です。長良さん、守矢神社まで提督の護衛をお願いします」

こうして、青年は神社へと担がれて緊急搬送されたのである。

かろうじて紅魔館へ追加派遣される祥鳳の見送りをしたのだが、逆に祥鳳から心配されるという情けない始末であった。

「ありやりや、カミツレ君大丈夫かい?」

「カ、カカカカミツレ! 大丈夫か!? 熱!? 熱なのか!」

「あの、神奈子様落ち着いて……」

長良におんぶされて守矢神社へ運ばれた青年は、すぐさま自分の部屋へと寝かしつけられる。枕元でじつと顔を覗き込んでくる早苗、布団の周りでオロオロと口が塞がらない神奈子と、中々眠りづらい状況であるが。

「あつたよー、外の世界から持ってきてきた薬」

「諏訪子! そ、それ効くのか!」

「神奈子、病は力だよ。いや気からだだったつけ? 薬に頼るだけじゃなくて、本人の病気への抵抗力も上げないといけないのさ」

「……医者じゃないのに詳しいな?」

「前に見たテレビでそんなこと話してた」

「神の知恵はどこへ行つた!」

「あ……あの、うるさいです……」

部屋にいるのはいいが、せめて静かにしてもらいたいと切に願うのであった。ブーツとして耳が遠い気はするのだが、不思議なことに耳元で叫ばれているようにガンガン頭に響くのだから。

と、思う中でも、青年は鎮守府のことを思い出す。

「あ、す……諏訪子さん」

「ん？ どしたの？」

「ボ、ボ……キ……」

「ん、んんー？ やだなあカミツレ君。そういうのは他の子に頼んでね」

違う、そうじゃない。

「いえ……こ、鉱石のボーキサイトって……知ってますか？」

「………………。ふーん、アルミニウム足りないんだ？」

「は、はい……」

仰向けに寝ながら頭だけ動かし、諏訪子の方を見る青年。諏訪子は顎に手を当て、少しだけ考える素振りを見せたかと思うと口を開く。

「私が創ってあげてもいいけど……一つ助言をしてあげるよ」

「な、なんです……？」

「この幻想郷の『地下』、良質なボーキサイトの宝庫なんだ。使わない手はないんじゃない？」

その言葉を聞くと青年は安心し、まぶたが重くなったのを感じたのであった。

さらに翌日。すっかり体調も回復した青年は、改めて早苗たちや艦娘たちに礼を言う。鳳翔にもう少し休んでいいと言われた時は、戦力外通告でも受けたのかと思ったが、自分の体力を心配してくれていただけであるらしい。

体調が酷くなるようなら永遠亭に連行される予定だったそうだが、それには及ばず。いずれにせよ、快方に向かったようので何よりである。

そんな青年は今、どこにいるのかというところ——

「おい鴉天狗、相変わらず変な新聞出してるみたいだな」

「ヒエツ……、あ、あの、萃香さん、ご勘弁を……」

「霊夢のことは記事にしたのか？」

「い、いえ、する予定はないですよ。霊夢さんが行方不明なのは人里でもチラホラ知れ渡っているようですが、おおっぴらに伝えることでもないかと……」

「カミツレの指示か。細かいことは私にやわからんがな」

「そ、それであの……、いつまで我々の山に居座るつもりなんでしょう？」

「霊夢が見つかるまで、と言いたいが、神社の掃除も私がしてやらないとな。鎮守府もすぐには動けないみたいだから、私とその穴を埋めるつもりだ」

「あやや……できれば早く出て行ってもらえないかなーと」

「ああ!? 懐かしさを感じさせる暇も与えねえってのか!」

現在、妖怪の山の上空を飛行中である。青年は魔理沙の箒にまたがり、妖怪の山での序列について揉めている文と萃香を傍目にして。

「私は今回、地獄谷の入口までしか案内できませんからね。というよりはしませんよ。地底との約定があるんですから」

「わかったわかった、ハタレ天狗の代わりに、そこから先は私が見てやる」

何かと喧嘩腰でぶつかり合う二人。萃香の方が序列としては上にあたるらしいが……文も伊達に千年を生きていないのか、のらりくろりと言葉をかわしては針を突き刺すように口撃する。

一方、萃香が古巣である妖怪の山に戻っただけだろ、と我関せずな態度を貫く魔理沙は、一見二人に比べれば随分とおとなしくしているようにも見える。が、霊夢のことについて、青年に対してひたすら質問を続けていたというのが実態である。

「次の作戦まで一ヶ月う……? もうちよつと短くならねえの?」

「ごめん無理だ。無理を押ししたまま出撃しても艦隊に被害が出るだけだし、そもそも今のままじゃあの航空機群を突破できないからね」

「……やっぱ、霊夢は深海化してるんだな」

「驚かないの？」

「そんな気はしてたさ。一ヶ月も行方不明で、さらに深海化するなんて異変が起きてるんだ。死んでないとなれば……流石に、な」

「そっか……」

「こうなった以上は完全にお前ら任せだ。協力もするし、戦力にだってなる！ だからさ、霊夢を……あいつを……」

取り返してくれ！

冷静な風を装おうとしていたようだが、気持ちが悪くコントロールできないようだ。魔理沙は跨る箒を握る力を強め、うつむきながら言葉を絞り出した。

その悲痛に、寂寥に染まった淡い声に。

「必ず」

力強い声色を、返したのであった。

現在、幻想郷における地下——地底へと繋がる地上の入口、『地獄谷』を目指して飛行中である。案内人として文、護衛として魔理沙と萃香がついてきており、青年のポケットにもカード状態の艦娘を忍ばせている。希望者1名を募ると山ほど募集が来たため、あみだくじの結果、榛名が見事に護衛の座を勝ち取ったのである。

今回の目的は、地底に眠るボーキサイトをめぐつての交渉。交渉相手は地底を管理する『地霊殿』の主だが、訪問することなど全く伝えていない。そもそも伝えようがないのだ。

これは幻想郷内での取り決めなのだが、幻想郷内において妖怪は2つの勢力に分かれている。大きく分ければ、地上の妖怪と地底の妖怪だ。

地底に住まう妖怪は、地上の人間に嫌気が差した者、忌み嫌われ封印された者、地上を追い出された者など、多くは地上との間に何かしらの因縁を持つ者が多い。種族的な因縁、というのもあるようでない

ようなものなのだが、数百年前に鬼が築き始めたと言われる地底の社会に“力”を感じ始めた地上の賢者たちが、ある約定を定めた。

それが、地上の妖怪の地底への不可侵である。

人里の子供でも知っているこのお話は、割と最近まで青年の耳には入ってこなかった。人里で水産物の販売をしていけば自然と様々な情報が入ってくるものなのだが、人里の人、あるいは妖怪にとって、この情報は当たり前であるから話のタネにもならなかったためだ。

しかも、地底についてわかるのはここまで。自分たちでどうにか調べはつけたが、ほとんど成果らしい成果を得ることはできなかったのは間違いない。

そうして、一行は地獄谷の入口までたどり着く。ゴツゴツとした岩が隆起したり陥没したりしている地盤の中に、その洞穴は姿を現した。

「そこから先には地底が広がっています。地上を追われた妖怪たちの住処です。約定がありますので、私はここから先には行けません」

「萃香さんはいいの？」

「私は元々地底に住んでたんだ。で、その前が妖怪の山な。私が地底に戻る分には問題ない……んじやないか」

「で、人間の僕と魔理沙ちゃんは大丈夫らしいと」

「いい加減にちゃんを外せよな」

そして、ジメジメとした薄暗い洞窟の中へ。

不気味さを感じながらも、足を進めたのであった。

が、しかし、

「カミツレ危ねえッ！」

しばらく進んだところで、ジメジメとした洞窟の天井から何か落ちてきた。その何かは青年のうなじをかすめ、その姿を捉えさせることなく影を消す。

「え？　え？　え？」

「……釣瓶落としか。それに——」

そして再び、その人物——いや手に鎌のような刃物を持った桶が姿を現す。その隣には、蜘蛛のようにお腹の部分が丸く膨らんだスカートを着用する少女。

もしやと思つてうなじを触れば、手に血がうつすらと付着していた。

「く、黒ひげ危機一発!」

「おお? 人間とは珍しい。何が目当てなのかな? この黒谷ヤマメさんに会いに来てくれたの?」

「あ、えっと、地下の妖怪の代表の方にご挨拶を、と思ひまして。地霊殿、でしたか? ……先にとんでもない挨拶を頂きましたけども」

出会い頭に暗殺されるなど、よもや誰が考えよう。魔理沙が咄嗟に吹く事引つ張つてくれなければ、今頃首は胴体から離れていただろう。

「ふーん? 帰りなよ、人間なんて食べられるのがオチさ」

「そ、そこを何とか!」

「やだよ。さっきのキスメのは警告。早いとこ帰りな」

「土蜘蛛じゃん、懐かしいねえ。こいつを地霊殿まで送りたいんだが、私の頼みでもダメか?」

「……鬼イ? 友好的な来訪者ではなさそうだね」

その瞬間、妖怪の少女二人の雰囲気が悪化する。どうやら、萃香をけしかけに来たと思われてしまったらしい。

「なんだ、私とやろうつての?」

「約定は知ってるよね? 私は追い出すだけさ」

「嫌いじゃない。かかってきな」

「あんまり舐めてると痛い目みるよ——」

「あーもう……ちよつと待つてください!」

あくまで護衛という立場を忘れてしまったのか、萃香も萃香で乗り気だ。ヤマメと名乗った妖怪の少女も不気味な雰囲気纏いながら腰を低くするのだが、青年が頭を痛めながらその状況に待ったをかける。

結局、その日は地底の妖怪のことを考慮し、ボーキサイトの交渉のことを考えると事を構えるべきではないとして、大人しくヤマメの言葉聞き入れて撤退することになった。

帰りがけに萃香がしよぼくれた顔で謝ってきたのだが、それはまた別の話。

鎮守府に戻った榛名が青年のポケットの中の温もりについて自慢していたのも、また別のお話。

数日後。

艦娘も全員が全快となり、鎮守府の運営体制も元通りになってきた。数日間は漁を見送っていたので、人里からそろそろ魚くれと熱烈な打診があつたのだが、ようやくそれも実行できそうである。

しかし、未だに航空機の生産は追いついていない。防衛のみであれば萃香もいるため今の数で何とかなるのだが、攻勢に出るのはやはり厳しいと言わざるを得ない。

「そんでよ、咲夜の奴がメイド服持ってレミリアを追っかけ回して……」

「ははは、意外と咲夜さんお茶目だね」

そんな鎮守府の状況を察してくれているのか、魔理沙も手伝いに来てくれた。手伝いというよりも、ただ執務室に来てのんびりしているだけなのだが。勉強の時間は邪魔しないため問題はないのだが、果たしてここにおいて魔理沙は楽しいのだろうかとも少し思う。

休憩中のひと時、魔理沙はチラチラと青年の様子を伺うよう質問。

「あのさあ」

「ん？ どうしたの？」

「航空機っていうのは……やっぱりまだ足りないのか？」

「……そうだね。時間を置けば全員に補充できるけど、やっぱり地底にあるボーキサイトの供給があればありがたいかな。次回作戦を起すにしても、その時また航空機が補充できなくなりました、では鎮

守府も面目が立たない。諏訪子さんは……どうもこの件は乗り気じゃないみたいだし」

「地底の……ボーキサイト」

「どうしたの？ 鎮守府の運営に興味でも湧いた？」

「そんなんじゃないやねえ。ハン、今日は帰る」

「お、怒った？」

「怒ってねえよ」

やはり女の子は何考えてるかわからないなと思いながら、青年は勉強に戻るのであった。

そして、その翌日の夜。

勉強を終え、そろそろ神社に帰ろうかと思っていた頃である。

「え、魔理沙ちゃんが来た？ こんな時間にどうしたんだろ……いや、通してあげて」

待つ間、執務室の窓から暗い空を見上げる。

静まった空気が肌を癒し、点々と輝く星々はさながら宝石のよう。外の世界に比べて星がよく見えるなど思っていると、魔理沙が扉を勢いよく開けて入ってきた。

「おう、遅くに邪魔するぜ！」

「ははは、元気がいいね。今日はどうしたの？」

魔理沙は箒を床にドンと突き、自信満々に。

そして、初めて自分に笑顔を見せながら答えてくれた。

「いやー疲れたぜ。あいつら人の話聞かねえしな」

「魔理沙ちゃんも中々話聞かないと思うけどね。あいつらっていうのは？」

「聞いて驚け！ 地霊殿の連中から、お前と話がしたいっていう言質を取ってきたぜ！」

「……………へ？」

ニカツと笑う魔理沙。

突然の話に頭がついていかず、青年は混乱する。地霊殿が自分と話

をしたいとどういふことなのか。なぜ魔理沙はそのような真似をしたのだろうか。

「これで、霊夢のやつを探すのも早まるだろ？」

「え、ちよ、え？ あ、つまりどういふことなの？」

「なんだよわかんねえのか。いいか？ 私は今日——」

地底に殴り込みをかけて、地霊殿を攻略してきたんだぜ、と。

魔理沙は胸をドンと叩いて、誇らしげにしていた。

043 知らない心

時は、地底から追い出され、魔理沙が地霊殿に殴り込みをかけるまでの数日の間。

昼下がりに香霖堂を訪ねれば、優しい笑みを浮かべた霖之助が迎えてくれた。ホコリをかぶったテーブルに對面して座り、お茶をすすりながら会話を深める。

「いや、無事で良かったよカミツレ君。しばらく音沙汰がなかったものだから、どうしたのかと思っていたところだ」

「す、すみません。近頃バタバタ忙しくて……」

「気に病むことはないよ。君が多忙の身であることぐらいわかっているさ。こうして、わざわざ顔を見せに来てくれただけでも嬉しいものだよ」

「ははは、僕もいろいろ話したいことはありませんでしたから」

霖之助と会うのは、三途の川の異変以来だろうか。異変以降顔を合わせていなかったのだから、霖之助の心境も推して知るべしというものだろう。

「ふーむ、地底は受け入れてくれなかったか。当然といえば当然かもしれないが……」

「実は、地底で採れる鉱石がどうしても必要でして。ボーキサイトというんですが」

「……生憎と、ウチには望みのものはないな。確かに、地霊殿は地底、旧地獄を管理する立場にあるといえはある。鉱石の存在も把握していてもおかしくはないだろう」

「参りましたよ。このままじゃ本当に、次の作戦まで一ヶ月以上かかってしまいます」

「霊夢の御札を見つけてくれたそうだね。ひとまず、霊夢がいることはわかったから良かったよ。ありがとう。ひと月以上経っているにも関わらず博麗大結界も健在なんだ、何らかの方法によって生きてはいるんだろうさ」

そう話す霖之助は、本当に安心したように表情を緩めていた。

だが、青年も話すことはできない。霊夢が深海棲艦になっている可能性があるなどと。

魔理沙も霖之助にそこまでは話していないようであり、伝えない方が霖之助の心を乱さないだろうと考えたのだろうか。

「そういえば霖之助さん。三途の川の異変の時、調べたいことがあるって言ってましたよね？ 聞いていいのかわかりませんが、何を調べていたんです？」

「ん？ そうだな……うん、君には話しておこう。実は僕が調べていたのは、他でもない地底のことなんだ」

と、霖之助はテーブルに投げ出されていた本を手にとった。ボロボロな状態を見れば、おそらくかなり年季の入ったものと思われる。

「無縁塚でカードを拾ってから僕も気になってね。深海棲艦というのはおそらく『怨霊』だという話を魔理沙から聞いて、いろんな文献を漁ったんだ。そして出た結論がこれだ。ここを読んでくれ」

『地霊殿は灼熱地獄跡の真上に建てられている。旧地獄は地獄としての役目を終えたが、未だ蔓延る怨霊を管理する役目を地霊殿が負っているとみられる』。これ……本当ですか？」

「おそらくは本当だろう。妖怪の山の妖怪や八雲紫あたりはひよつとしたら知っているかもしれないから、もう君も知っていたんじゃないかと思っただが……」

「いえ、妖怪の山の皆さんも旧地獄と不可侵の約定を結んで長いので、それほど詳しくはないと。紫さんは……しばらく会っていません」

「ふむ。何はともあれ、話はここからだ」

霖之助はお茶を一気にあおり、苦々しい表情で告げる。

「まず一つ。妖怪はね……怨霊にとり憑かれると死んでしまうんだ」

「なっ——!?! いえ、待ってください！ 妖怪の皆さんが深海化した事例はいくつかありますし、全員死んでません！」

「ああ、だから僕は仮説を立てた。二つ、とり憑かれても妖怪が死なないなら、深海棲艦は怨霊ではない」

「で、でも、怨霊っていうのは色んな人から情報を貰ってますよ？ 神奈子さんも紫さんも、映姫さんも小町さんも皆さん怨霊だと……。怨

「霊じゃないなら一体？」

「三つ。外の世界の軍艦というのは、艦内に神社を奉っていたそう。ほぼ全ての軍艦が勧請し、どれだけ小さくとも神棚が置かれていたらしい」

「それは……一応知っています。例えば、長門は住吉神社を祀っていたって」

艦内神社とは、その艦の海上交通の安全を祈願する為に設けられていた。船魂信仰とも相まって、その艦の乗組員の氏神としての意味もあつたらしい。

「この三つを踏まえた仮説だ。まず艦娘と深海棲艦に共通する部分として、双方とも霊的存在である。しかし同時に、神でもある、と」

「半分霊で半分神……半神半霊ってことですか？」

「いや違う。霊ではあるんだが、『神的領域』を内包しているんじゃないかって思うんだ。聞いた話では、艦娘の艤装には付喪神が点在しているそうだね？」

「え、ええ……」

「付喪神がその神的領域を守ろうとする行為、それすなわち戦闘行動だとしよう。存在そのものは霊であるが、艦娘も深海棲艦も神的領域によって人のような形、意思を形成しているんじゃないか、というのがまず一つ」

「……深海棲艦は憑依した時しか喋りません。そもそもあれは自分の意思なのか憑依された素体の意思なのか……」

「まあ待つんだ。霊というのはそもそも喋る存在ではない。西行寺幽々子は知っているかい？」

「えっと、妖夢さんが仕えている方ですよ？ 宴会の時にちらっとお話した程度です。食べるのに忙しそうでしたので……」

「あれは霊だよ。しかし、霊としてはその『存在』が強すぎるがゆえに、自我を保ち言葉を介することができる。これが指す意味がわかるかい？」

「言葉を話せる艦娘は……深海棲艦より『存在』が強い？」

「話す言葉が誰の意思はともかく、憑依した際にその『存在』を補完

しているならば、話せる理由も説明がつく。もしかしたら、憑依する理由はそこにあるのかもしれない」

「……何かを伝えようとしている？　まるで新しい考え方です、今まで思いつきませんでした。なら、妖怪の皆さんがとり憑かれても死なないのは？」

「神的領域を保有しているから、としか。現状ではここまでしかわからないんだ。そりや予想なんかは、思いつくけど、確定といえるだけの説明ができるほど情報がない」

「……ちなみに、僕もあまりわからないんですけど、その“存在”というのがそれまでより格段に強くなる、なんてことはありえるんですか？」

「ふむ……。これも説明はできないが、過去にそういった事例が全くないわけではない。だから答えとしてはひとまず、“ありえる”とだけ」

ならば、深海棲艦を倒して艦娘のカードが現れるということはい。

おそらく、そういうことなのだろう。

深海化した者への攻撃が、深海化から解放した時に無傷になるというのも、なにかそのあたりが関わっているのだろうか。だがそうすると、妖怪が深海化した場合、放っておくと霊的領域に侵されて本当に死んでしまう可能性も考えられる。

(……謎ばかりだなあ)

霖之助の話に疑問が残る部分は勿論何点もある。だが、情報が少ない今、こうして有益な知恵を絞り出してくれた霖之助に感謝こそすれ、これ以上を求めるのは酷というものだろう。

「……頭がパンクしそうです」

「あくまで仮説さ。少し休憩しよう。ほら、彼女たちも準備が出来たようだ」

そうやって霖之助は、二人のもとへお茶とお菓子を運んでくる二人の女性へ、少しだけ嬉しそうに目をやった。

「司令司令！ 魔理沙と一緒にお菓子作りしましたから食べてくださいね！」

「比叡、ありがとう。何を作ったのかな？」

「へっ、私と比叡の特製クッキーだ！ お茶も追加で淹れてきたぜー！」
比叡が恐るべき手際でテーブルのホコリを拭き取ると、そこへ魔理沙がお菓子とお茶の載ったお盆を置く。素早く、しかしそれでいて優雅さを失わない比叡の動きは、ホテルのオーナーもびっくりの流麗さである。

お茶とお菓子を前に、まずは霖之助がお茶に手を付ける。香りを楽しんだ仕草をした後に口を付け、ティーカップを置いて窓から外の景色を眺めていた。

「ふーっ、今日もいい天気だ」

「曇ってますけど」

「やはり魔理沙の作ったクッキーは美味しいな。しつとりとしていながらサクサク感を損なわない、甘さも控えめで上品な味だ」

「いえ、それ私が作りました」

「ココアはバンホーテンのものを使用しているのかい？」

「おいおい、九番茶だぜ」

なお、本日香霖堂は閉店している。

「しかし、比叡さんは元気で可愛らしいのに料理も上手なんだね。そうも魅力的なら、里の男たちが放っておくまいに」

「あはは……、ありがとうございます。でも、私は金剛お姉様一筋ですから」

「ふむ、カミツレ君。フラれてしまったよ」

「手が早いですね」

「冗談さ。僕も色事に興味がないわけではないが……」

と、霖之助は僅かに視線を動かし、すぐに戻した。その意図は読み取れなかったが、霖之助がその一瞬で視線を向けたのは——金髪の少女。

その白黒の魔法使いは、霖之助の視線には気付かなかったようで、

話の途中から涙をこらえてプルプルと震えていた。

「まあ、まだ早いようですね」

「……………そういうことでしたら」

「そういうカミツレ君こそ、どうなんだい？」

「どう、とは？」

「僕も直接会ったことはないが……………東風谷早苗さんだったかな？　いい仲と聞いているが」

「ブハッ！」

「毎日艦娘を侍らせてイチヤイチャしているとか。里の男たちの間では血涙を流してそうな者が沢山いるぞ」

「ちよっ、部下に手を出してることになってるんですか!？」

「人里を歩くときは気をつけたまえ。ある意味では妖怪より恐ろしい者で溢れているよ。なあに、一つ屋根の下で女性と暮らしているのなら、そういうこともあるだろうさ」

そう話す霖之助はニヤニヤと不敵な笑みを浮かべている。これはからかっているに違いないとわかっているのだが、噂とはかけ離れた話を想像してみても、ありえないと思いつつも心の中で吹き出してしまった。

(イチヤイチャどころかスパルタなんだけどなあ……………勉強とか)

艦娘に好かれてはいるのだろう。金剛などは最たる例であるし、陸奥などは色気だからかかってくることもある。紅魔艦隊の視察に行けば抱きつかれるし、ツンツンしていた曙でさえ最近では体調を気にしてくれるようになってる。

そういえば、最近艦娘からのスキンシップが増えている気がする。勉強中に膝の上に座ってくる駆逐艦、廊下を歩いていると突然手を握ってくる軽巡、腕を取って胸を当ててくる重巡、それを真似する龍驤、食事の際にあーんとしてくる空母や戦艦たち……………。

(僕って……………一応上官のはずじゃ)

勉強中、あの堅物そうな長門が頬をプニプニしてきた時は流石に反応に困った。

それ以外はどうか。美鈴は鎮守府で一番最初に笑顔を向け

てくれるし、妖夢はお菓子の試作を一番に持ってきてくれるし、二柱は何かと気にかけてくれて非常に好意的だ。

つまり、だ。

「普通に仲がいいだけですよ、やっぱり」

「そうなのかい？」

「ええ。そもそも、僕と恋仲になりたい人なんているんでしょうか？」

「ふーん……？ まあ、そういうことならそういうことにおこう。

だが、友人として一つ忠告だ」

「え？ は、はい」

霖之助は笑顔のまま、顔をズイと寄せてくる。何かかと思いはしたが、霖之助が耳元で囁くので、それを聞き入れたのだが。

「予防線を張るのもほどほどにしないと、いつか自分の首を絞めることになるよ」

それだけ言っつて、霖之助は再びお茶に口をつける。忠告の意味は、青年にはついぞわからなかった。

わからないのに——何故だか冷や汗が止まらない。

「ところで魔理沙、このバンホーテンの九番茶だが」

「比叡にこーりんとられた……。こーりん……」

「し、ししし司令！ 司令つてもしかして女性に興味がないんですか！？」

呆れながら啞えたクッキーは、不思議なことに苦く感じた。

その日の夜。

神社の縁側にてお茶をすすっていた青年は、その視線を宙に浮かぶ月に向けたまま、同じようにして隣に座る早苗に尋ねる。

霖之助との会話が、頭から消えてくれなくて。

「さなちゃん、つてや」

「はー」

「僕のことどう思ってるの？」

「はい？」

早苗の視線は、月を離れて自身へ注がれた。が、青年は変わらず月を向いたまま。

「あの……私の口から言わせるんですか？」

「だって知りたいんだもん」

「い、いきなりですね。そりゃあ私、カミツレさんのこと——」

一拍間を置いて、

「その……好きですけど？」

「うん、僕も大切な友達……大切な家族だと思ってる」

「一体何を考えてるんですかこの人は全くもう。人の決意を何だどぶつぶつ……」

早苗の言葉がどういう意図で発せられたのかわからなくて。

自分がどういふつもりで早苗にそれを聞いてのかすら不鮮明で。

そんな中でも、霖之助の言葉が心にとぐろを巻く。

「だから、ね」

「ええ」

「あの時——神社で会った時。話しかけてくれてありがとう」

「……………っ！ ええ、お互い様ですよ。カミツレさん、ありがとうございます」

だが、やはり自分には——。

この大切が壊れてしまうのが怖くて。

この大切が当たり前でなくなることとを恐れて。

何より、この感情が自分自身でもわからないがために。

「だから」

張り裂けそうなほど膨らむ情けない不確かな心を押さえ込み、くすぶっていた心にもない虚飾を増長させてしまったのだが。

「僕が死んだら——もう僕のごことは全部忘れて欲しい」

その返答は、

「——あんまりです」

冷たく鋭利で、ささやくような呟きであつた。

「二度とこの話題を持ち出さないでください」

その瞳に圧倒されて。

小さく弱い本心は灯火を消す。

「ごめん」

「代わりに面白い話、いっぱいしてくださいね？」

不自然な関係は不自然なまま凝固し。

いつしか脆く崩れ往くその時まで。

二人は、決して変わることはないのだろう。

少なくとも青年は、早苗のその態度、返答に。

自身は恋愛対象ではないだろうという疑問を、確信へと変えてしまったのだから。

044 妖精さん

青年がヤマメに追い返された後の、ある日のことである。

「むきゅー……」

パチュリー・ノーレッジは紅魔館を出発し、鎮守府へと向かっていた。真昼間に出かけるなど自分自身でもそうそうないと自覚はあるのだが、用事があるのだから仕方ない。

しかし、日光がこんなにも辛いとは思わなかった。いつから自分は吸血鬼になったのだろうかと自嘲しながらも、やはり引き籠り過ぎかと嘆息する。ここ最近、鎮守府から送られてくる魚がおいしいのも相まって、体重も増えている気がするのだ。近いうちに対策を練らなければならぬ。

「むきゅっ」

鎮守府に到着する。その門番は、よく知っているチャイナドレスをまとっていた。

「あれ、パチュリー様？ どうしましたこんな昼間に？」

「ちよつと用事よ。茅野守連と河童にね」

「わかりました、取次ぎますね」

「ここに来てても貴女の門番姿を見ることになるなんてね。私はそんなに見慣れてはいないけれど」

「代わりにここ、厳しいからお昼寝とかできないんですよねえ。門番して演習して美味しいご飯食べて寝るしかできないですよ」

随分と健康的である、そもそも門番は昼寝が仕事ではない、などのツツコミはさておき。

この天然妖怪に付き合っている日は暮れてしまうため、パチュリーは美鈴に取次を急がせるのであった。

「こうして対面してじっくり話すのは初めてでしょうか。改めまして、茅野守連です」

「なんだか……少し雰囲気が変わったかしら？」

「あはは。まあ、提督として相応しい振る舞いを、という名目で教育を受けてまして」

「パチュリー・ノーレッジよ。鎮守府から持ちかけられていた、深海化についての調査の件で来たわ」

「ご来訪、歓迎いたしますパチュリーさん」

「丁寧な出迎えに感謝しているわ」

執務室内。テーブルに直面し、金剛より配膳された紅茶を一口。その味に満足し、パチュリーは早速話に入る。

「本題から入ると、艦娘も深海棲艦も霊であつて霊ではないわ」

「神的領域を内包している、と霖之助さんに伺いました」

「あら、なら大方知っているのかしら？　であれば、文献を漁ってわかったことを報告するわ。今回調べたのは艦装について」

紅魔館との同盟を利用して、鎮守府が持ちかけてきた相談があつた。それが、大図書館で艦娘や深海棲艦についての調査、及び自身の頭脳による見解を求めるというもの。

レミアは快諾し、代わりに戦闘に関する情報の共有化を求め、青年はこれを認める。そして、パチュリーはレミアの密かな計画——月へ行くための魔術式のロケット建造と並行しながら、これを調べた。

レミアとは長い付き合いである。だが、レミアがどこまで考えて鎮守府と懇意にしているのかは、パチュリーにも読み取れなかった。

「艦装は各艦娘の過去の艦装が象徴化したものを、付喪神がコントロールしてる。その付喪神は艦娘からの命令で動くわ。付喪神がいなくては艦娘は艦装をただ運ぶだけになるし、逆に付喪神だけでは適切な戦闘は行えない」

「深海棲感同様、と考えたほうがいいんじゃないか。深海勢に付喪神のようなものを見たという報告はありませんが」

「そこはわからないわね。艦娘に限って言えば、適性があれば艦装を換装することは可能よ。付喪神は艦装に憑いているから、換装した後には付喪神との意思伝達が取れればいいだけ。このあたりは技術的な

問題も関わってきそうね」

「ふむふむ」

「一番興味深かったのは空母の艦装。弓、または札によって航空機を具現化、しかも一機一機に付喪神がついているんだもの」

「彼らは搭乗員ですからね。ただ興味深いことに、彼らは撃墜されると機体への熟練度は失うようなんですけど、不思議なことに復活するんですよ。まるで幻想郷の妖精さんみたいだと思いませんか？」

「ふうん……うん、彼らのことはひとまず『妖精さん』と呼びましようか」

それを踏まえて、パチュリーは自身が深海化した時のことを話す。

異変が解決してすぐあとは、喪失感のようなものに見舞われて口クな思考ができなかったが、今なら深海化した時の記憶もなんとなく思い出せる。そして自身が他の者と違った点として、弾幕の航空機化があった。陸上基地と変貌した四季映姫も、どうやらそのような力があつたらしい。

結論から言えば、航空機へと変化する理由はわからない。しかし、航空機をある程度意のままに操っていた気がするのには確かである、といったものである。

そして、深海棲艦の航空機を撃墜し、霊夢の札が現れた。仮に霊夢が深海化しており、弾幕を航空機に変えられるとするならば――

(……まあ、まず勝ち目はないわね。そもそもが強すぎるのに)

加えて、物理的に飛行禁止の海という条件付き。スペルカードまで使われるとなれば、手も足も出ないだろう。

そう、〃仕方ない〃のだ。博麗霊夢を相手に勝てる者などいない。いかに艦娘が優れていようとも、博麗の巫女には敵わない。誰もがそう思うし、それを受け入れるだろう。

(でも、知ってか知らずかこの男……)

目の前に座る青年からは、諦めるような表情など微塵も感じられない。以前見かけた魔理沙も、希望をまるで失ってはいなかった。霊夢への理解がない無知故か、それとも知って尚助けようとしているのか。

レミリアは——もしかしたらこれを楽しんでいるのだろうか。もつとも、パチュリーの知るレミリアは、ただ純粹に靈夢を心配するという面も持ち合わせているとわかっているのだが。

彼女は、この先にどんな運命を見出しているのだろうか。

「……興味深い」

「え？ な、何か言いました？」

「何でもないわ。にとりのところに行きましょう」

そうして、パチュリーは執務室を後にした。金剛へは、紅茶の礼を伝えながら。

「やあやあ、もやしっ子が出てくるなんて珍しいね」

「ワン〇——こあとか作れない？ 図書室の文献に取扱説明書が紛れ込んでいたのだけれど」

「ワ〇ダーこあ？ ああ、とうとう君もダイエットを決意したんだね」

「そ……それほど太ってないわよ。健康維持のためだから」

「そんなの使うより全身運動がおすすめさ。一緒に水泳しようよ！」

「あなたみたいに息継ぎなしで一時間なんて無理に決まってるでしょう！」

「あの……用件済ませましょう」

と、青年の呆れ混じりの声が聞こえたところで、パチュリーは我に返る。

にとりへの用事というのも、実は艦娘の艤装関係についてであった。魔法の見地からすればどう感じるかというにとりからの依頼である。

「以前言っていた、艦娘の艤装の換装、一応理論上は可能よ。付喪神——妖精さんがそれを受け入れればね」

「お、そりや良かった。技術上は可能ってわかってたけど、万が一を考えたら気が引けてね。雷巡の人は魚雷増やすだけだったからまだ何とかなっただけさ。でもそうになると、私なんか艤装を装備しても使うことはできなさそうだね」

「……ちなみに、妖精さんは喋ったりしないの？」

「ん？ そりゃ付喪神だし喋るよ？ 艤装の修復なんかは助言してもらいながらやってるからね。しっかし、妖精さんって随分パチュリーらしいメルヘンな呼び方だね」

「そ、そんなことないわよ！ 最初に言いだしたのはカミツレよ？」
「フアツ！」

飛び火した青年には悪いなと思いつつも、パチュリーはその後も報告を続けた。

艦娘自身が強くなることで、艦種として更なる“存在”の強化が可能になること、艤装そのものの改修については特殊な工作機械とその為の知識が必要なこと、艤装を取り上げれば艦娘はただの幽霊のような女の子であること……。

「ま、こんなところかしら。また何かわかれば教えるわね」

「うん、これでまた効率よく修復なんかもできそうだ。工廠の人手も増やそうと思ってたところだし、非常にありがたいね」

「難儀なものね。幽霊なのか神なのか、存在さえはつきりしないのに、艦娘たちは戦うことを強いられるなんて」

「……そういえば盟友。盟友の能力についても一回教えてもらっていいかい？」

「え、僕？」

戸惑い気味の青年であったが、特に嫌がるわけでもなく説明してくれた。

曰く、こうである。紫の名付けた『軍艦を指揮する程度の能力』は、艦娘の記憶を読み取り、彼女たちに命令を与えられる能力である、と。

「え……それだけ？」

「特にそれ以外聞いてないですけど……」

「それは怠慢が過ぎるわ。自分の能力よ？ もっと可能性を広げようとは思わなかったのかしら？」

「えっと……はい、すいません」

「……とりあえず、情報がある程度出た今、あなたの能力について分かることといえば――」

艦娘は神的領域を内包した幽霊である。触ることで個体ごとの記憶を理解し、命令を確実に与えることができるのが青年の能力となる。

付け加えるならば、艦娘側は命令を命令と思っておらず、ただ青年のために行動している。つまりであるという。また、艦娘も青年の記憶を知ることが出来る、とのこと。

つまり、幽霊ということが理由なのか、神的領域を有していることが理由なのか。もしくは、本当に艦娘にのみ効力を持つ能力であるのか。少なくとも、カード化及び実体化は青年にしか行えない。

「……思ったのだけれど」

「はい？」

「艦娘に命令を与えられるなら、ほとんど同じような存在の深海棲艦にも命令は与えられるんじゃないかしら？」

「……………。いやいやご冗談を、記憶を知ろうにも怖すぎて触れませんよ。それに、深海化したなら分かってはいるはずです。深海棲艦は、艦娘への憎悪と攻撃心を持っていると。つまりそのトップにいる僕なんかは格好の的なわけですよ」

「試したことはあるの？」

「……ないですけど、異変の度に深海化した人と話して、反論やら反感もらってますよっ。」

「となると……、あなたの能力って本当に艦娘に対してだけなのね」

「可能性とは一体…………ぐぬぬ」

落ち込む青年を尻目に、パチュリーは傾き始めた太陽を見つめる。

「さて、そろそろ帰るわ。にとり、腹筋ベルトよろしくね」

「それぐらいなら作るけど……プルプルするのはスライムとかでもいいかい？」

「はあ、僕的能力かあ……。いつそ、誰かもう一人指揮する人がいてくれたらなあ」

との、青年の一言に。

「盟友、そりゃないよ。艦娘の過去を一人一人知ってるのは盟友だけだし、提督としての教育を受けてるのもそれをこなしてるのも盟友だ

けなんだよ?」

「ははは、わかってるよ。冗談冗談。ただ、こうも責任が重いよね。鎮守府にとつて万全の体制整えてたら、いつの間にか色んな人たちと関わってるんだもん」

「ま、私はこうして機械いじれるだけで楽しいんだけどね。外の機械にここまで触れるチャンスなんてそうそうないし。おまけにきゅうりもついてくる」

「ちゃんと保存してあるからね。にとりさんには本当に感謝してるんだよ? あ、でも弾薬ときゅうりを間違えたりとかはしないでね」

「以前眠い時に一回やりそうになったんだよね! 攻撃機がきゅうりぶらさげてるんだもん、爆笑ものだったよ!」

「——私がやってあげようか?」

と、言葉を返す。

(まあ、この提督がそれを望んでるならやってあげても……)

「え……パチュリーさん、その?」

「だから、提督の手伝いをやってあげましょうかって」

「あの、その……ほ、本気で言っているんですか?」

「本気も何も、あなたがそう言ったから——んん?」

(なぜ私がそんなことをしないといけないの?)

「いえ、何でもないわ。ただのジョーク」

「じよ、ジョークですか。やだなあ、顔に出ないんですからははは……」

青年の乾いた笑いは、パチュリーの耳には届かない。

なぜ自分は、青年の何気ない呟きに反応してしまったのだろうか。青年がそれを冗談交じりに望んだことはわかるが、自身がそれを叶えてやる必要はまるでないというのに。

(なんだか、自然と叶えてあげたい気持ちになったけれど……私も丸くなったのかしら? ちよ、誰が太ったっていうのよ!)

首をひねりながら、パチュリーは今度こそ鎮守府を後にしたので

あつた。

045 心をあかす者

天井の岩は暗いというのに、目前に広がる古い町並みは真昼のように明るい。鬼が築いたこの旧都であるが、妖怪や地霊たちは皆活気に溢れ過ぎていた。

そしてそんな中、大通りを歩く青年とヤマメ。自身に視線が突き刺さるのを肌で感じながら、青年は足を動かす。

「意外と平気そうだね」

「とんでもない。内心いつ襲われるのかとドキドキしています」

「そいつを顔に出さないのはなかなかのもんさ。ここにいる妖怪たちは皆、地上を追われた奴らだ。能力も力も、アンタを殺すぐらい造作もない奴らなのに」

「だからこそ、念の為に金剛をポケットに忍ばせているんです。表立った護衛は連れていませんし、僕は今回、脅しではなくお話に来たんですから」

「ふうん……？ やっぱり変な人間だね」

そうして、歩みを進める中で。

ヤマメの案内により、青年は地霊殿へ到着する。

見た目は立派な西洋風の屋敷であり、その中も見事なものであった。様々な色で彩られた市松模様の床に、ステンドグラスで造られた天窓。エントランスの階段の踊り場には、薄紫色の癖つ毛をした少女がいた。

（可愛らしい子……ここで暮らしてるのかな？）

ジロジロ眺めるのは失礼だと思いつつもその少女の様子を伺っていると、案内として共にいたヤマメが踵を返してしまう。

「じゃ、私はこれで」

「ヤマメさん、案内ありがとう。ああ、そんなことありません。私に会うのも嫌でしょうけど、私はあなたのこと嫌っていませんよ？ ふふふ、そうですか」

「あーあー、じゃあね！」

と、独り言を話すように微笑む少女。その態度に、ヤマメは「フンツ」とでも言うかのようにさっさと地霊殿を出て行ってしまった。取り残される青年。が、今の会話で理解する。

（そうか……この人が——）

「ええ、私が古明地さとりです。よろしくお願いしますね、提督さん？」

『心を読む程度の能力』、古明地さとり。

地霊殿の主は、外見相応にはしゃぐような笑みで迎えてくれた。

客室に通され、青年はひとまずソファに腰掛ける。するとホコリが宙を舞い、青年を容赦なく襲った。

何かのイタズラか、歓迎されていない証なのかと思いきや、対面して座るさとりも同様であった。

「ゲホツゲホツ！ すみません、お客人を招くことなど久しぶりでしたもので、客室の掃除を長年怠っていました」

「ゲホツ、いえそれは構いませんけど、どれくらい掃除していないんです？！」

「かれこれ7年ほどになりますか。ふふふ、独り身と笑いたくば笑ってください」

「そこまで思ってませんが……」

と、しれつと告げるさとり以案内され、掃除された別の部屋にて再び対面して座る。

「こちら、お土産の魚です。どうぞ地霊殿の皆さんで召し上がってください」

「あら、これはご丁寧に。もてなす側だというのに、掃除も行き届いておらず申し訳ありません」

「いえ、お気になさらず。こちらこそ、魔理沙ちゃんがどうやらご迷惑をおかけしたようでした」

その一言に、魚を受け取って微笑んでいたさとりは視線をジロリと

青年に向ける。

「あの魔女はあなたの部下なのですか？」

「いえ、協力関係でしょうか。古明地さんとは段階を追って接触しようと思っていたのですが、魔理沙ちゃんも足早に行ってしまうかもしれません……」

「なら、あなたが謝る必要はないでしょう。人間のあなたにとって地底が危ないというのは確かですので、むしろその点で、追い返したヤマメさんを責めないであげて欲しいものです」

「それは構いませんが……」

(……仲間想い、なのかな?)

「そういうわけではありません。これ以上、地底の妖怪が嫌われないよう努めているだけですから」

「う……は、はい」

「やはりこの能力には驚きますか？ まあ、同じ地底の妖怪にすら疎まれるものですからね」

(そ、そんなことないけど……なんて言えばいいんだろ。下手なこと考えられないのは間違いないけど、どう説明しようか。能力ならそれはそれで仕方ないんだろうし……)

「ふふふ……お気遣いありがとうございます。では本題に入りましょうか。私に用事があると聞いていますよ」

話さずとも会話ができることに違和感こそ感じつつも、少なくとも話ができる人物だろう。青年はそう思い、話を広げ始める。

「では、まず怨霊について質問します。今地上では海が現れ、それに伴って深海棲艦が攻め込んでくるという異変が起きています。その深海棲艦というのは怨霊と見られていて——」

「あなたの推測は、残念ながら当てはまりません。確かに地霊殿——というより私は、この能力を利用して怨霊を管理する立場にありますが、あなたの考える深海棲艦のような怨霊は、今のところ見たことはありませんよ」

「……………。なら——」

「地上で起きているその海の異変についても、ある程度は知っています

す。しかし、地底に蔓延る怨霊が関与していないことは確かです」
「そう……ですか」

「その怨霊だけなら大したことはないでしょう。八雲紫や博麗の巫女もいるんですから、じきに解決するのではありませんか？」

「いえ、それが——」

それを話そうと、考えた瞬間。口に出そうと、頭の中で話す内容をまとめた瞬間。

それまで微笑んでいたさとりが——

「博麗の巫女——霊夢さん、行方不明になっているんです。厳密には、深海化している可能性があります——」

一変して、表情を冷徹なモノへと変貌させたのだ。

(えっ……?)

「あの魔女の頭の中は間違いなかった——あ、いえ、私としたことがごめんなさい。何でもありません」

しかし、それがまるで嘘であったかのように、再び柔らかく微笑むモノへと戻る。

「博麗の巫女がまさか、そのようなことになっているとは思っていませんでした。確かに、それはあなたも大変そうですね」

「え、ええ……」

先ほどの表情は一体何だったのだろうかと思いつながらも、何かおかしなことを考えればすぐさとりに気づかれてしまう。故に、青年はそれをひとまず思考から消し去った。

「それで、鎮守府をまとめるあなた——提督さんは、私や地底に何を求められているのでしょうか？」

「あ、はい。こちらで掴んだ情報なのですが、地底は良質なボーキサイト鉱脈があると伺っています。良ければ、鎮守府に融通してもらいたいと考えているのですが……」

「ボーキサイト……?」

「えっと、赤茶色の鉱石で——」

「ああ、『鉄ばんど』ですか。旧都では色んな所から出てきますよ。正直使い道もないので、引き取って頂けるのであれば願ってもいない話ですが……」

「ほ、本当ですか!? ありがとうございます! 実は、艦娘の航空機の整備にどうしても必要でして」

「あら、空を飛ぶ乗り物ですか。外の世界にはそんなものもあるのですね」

「ちなみに、勿論タダとは言いませんよね?」

「私たちとしては価値もないものですので、特に対価は求めませんが……。そうですね、鉦夫を雇うことと輸送の手間賃、旧都に流通させるためにも、魚を頂ければそれで構いません」

「そんな条件で……。ありがとうございます!」

（これで地霊殿での要件は終わったも同然か。しかも古明地さん、人の話すことを先回りする以外は普通に話せる人じゃん）

ニコニコ顔で、青年は猫耳の生えた妖怪から出されたお茶を飲む。さとりも笑みを浮かべており、要件が終わった為か場は一気に和やかなムードへと変わった。

「ふふ、それにしても。外の世界からいらっしやっただけでしょう?」

いきなりそんな大役を押し付けられるなんて、大変じゃありませんか?」

「ええ、確かに大変です。でも、外の世界に比べれば——、やりがいもありますし、それに僕は恩を返したいですからね」

「恩返し?」

「僕に生きる楽しさを教えてくれた神社の人達と、艦娘の皆に」

「ふふふ、そうですね。私もあなたほどではありませんけれど、少しペットの管理に困っていました」

「ペットですか? いいですね、和やかで」

「先ほどお茶を配膳した猫や、鴉などもあります。確かに、友達のいない私にとっては家族のようなものですからね」

（家族、か……。そっか、僕にとつての神社や鎮守府みたいに……）

「……………」——ツ!? ふ、ふふ……そういう……」

「ん？ 古明地さん？」

「いえ、失礼しました。そういうあなたこそ、艦娘とはいえ女の子に毎日囲まれて気分もいいのではありませんか？」

「僕そんなこと考えてましたか!? あはは……、そりゃ僕も男ですから、そういうことは意識しなくてもないですけど……」

「部下相手にそんな目を向けるなんて考えたことはない、ですか。残念でしたね戦艦さん？」

「え？」

微笑むその表情とその視線は、自身ではなくポケットへ向けられていた。

なんだバレてたのか、などと思うより先に。その後、さとりが僅かに瞼を閉じてから。

しつとりとした、色香を帯びた表情を自身に向けてくる。

「艦娘さんの力、この幻想郷においても本当に強大ですね。個の力もさておき、集団で、組織で戦うとなれば相当なものです。深海棲艦に對抗する戦力として、私も期待するところではあります。が——」

「……………が？」

「その力で、幻想郷を支配しようとは思わないのですか？」

まるで肉食動物が獲物へ向けるような視線。それまでのさとりの雰囲気からまた一つ変わり、探ろうとする態度を隠そうとしていない。

それを警戒して濁すでもなく、バカ真面目に真正面から否定するでもなく。

(幻想郷の……支配?)

青年は、そこで初めて思考に入った。

(…………支配しようと思ったこと…………ないなあ)

「ほう？」

（外の世界から来たし、もしかしたらその辺を警戒されてるのかも。でも、本心を言うなら——）

“そんな面倒くさいことはしない。”

鎮守府が人里で認められ始めて、他の勢力との対話も始まって、ようやく霊夢を搜索する体制が整ったのだ。神社の信仰も、ある程度安定して得られるようになってる。

なぜ今更、全方位に喧嘩を売ることをしなくてはいけないのか。そもそも自分には、幻想郷を責める理由などないというのに。

——これが外の世界ならまだしも。

「そう——ですか」

わずかに寂しげに微笑んださとり。

覚り妖怪ではない青年に、さとりが何を考えているのかなどわかりようもなかった。

沢山話しこんでしまった。気づいたころには、時刻も夕方である。

帰り際。地霊殿のエントランスにて、青年は猫の妖怪からお土産を受け取る。玄関の扉に手をかけたところで、見送りに来ているさとりが口を開いた。

「本日はありがとうございます。またお時間があれば遊びに来てください。あなたならいつでも歓迎しましょう」

「こちらこそ、ボーキサイトの件はよろしくお願ひします。古明地さんこそ、いつでも鎮守府にいらしてくださいね」

「ええ、地上の妖怪との約定も、少し見直すことにしましょう。それから、老婆心ながら一つだけ“あなた個人”に忠告を」

「はい？」

「失礼ではありますが、私でさえもあなたの歩みを惨めに思ってしまうのです。どうか、真実を知ることがないように祈っています」

「は、はあ……？ よ、よくわかりませんが、ありがとうございます」

不思議な少女である。敵対心を向けるでもなく、親交を求めるでも

なく、鎮守府に協力してくれる。一線を維持しているというのに、自分に対しては忠告まで送ってくれるのだ。

掴みどころがない、というよりわからない。彼女が何を求めているのかを、この会合で推し量ることは叶わなかった。

突如、さとりが再びあの表情をする。

色つぼく熱を帯びた、しかし底の深さを感じさせないミステリアスな雰囲気。

「……ねえ、世界や神を恨んだことはある？ 憎んだことは——？」

「どうしてそんな質問を？」

「ただの世間話です」

「……あるかないかで言えば」

ありますよ。

声に出すことなく、青年はそう答えた。

「そう……。旧都の妖怪にはあなたに手を出さないよう、すでに伝えてあります。最後までポケットの艦娘を出さないでいてくれたこと、感謝していますよ」

そして、青年は。

不思議な忠告をもらったなあと思いつつ、地霊殿を後にしたのであった。

青年が地霊殿を去った後。地霊殿のエントランスにて、さとりは一つため息をつく。

するとそこへ、火車である火焰猫燐が不思議そうな表情をした。

「うにゃー？ さとり様、ため息なんて珍しい」

「お燐、おもてなしありがとう。久しぶりにお客を迎えたから緊張してしまっただわ」

「さとり様でも緊張するんですね？」

「私は感情を失っているわけではないもの。ああ、でもあの茅野さんは——」

酷かったわね、と。

眩くように、彼のからくり仕掛けのような感情を思い出す。

(優しくしているように見せかけている……？ かなり不安定な思考だったけれど。それに、 “まだ” ヒトの上に立つ者の器じゃないわね)

「彼が外の世界のことを思い出しながら話してくれたから、過去の記憶を断片的に “読む” ことができたわ。幻想郷に来てこそ緩和されたいだけだよ」

「じゃあ、さっきのはそのことについて？」

「違うわ、もつと昔。断片も断片、だって自意識にほんの僅かに浮かび上がってきた、本人でさえ認識していない赤子の時の記憶だもの。読めたのは運が良かったわね」

「うにゃー……、人間も大変ですね」

「だからこそ——茅野さんを “味方に引き入れられる” 可能性がある。茅野さんの断片的な記憶が確かなら、鎮守府と守谷神社の関係はとても——」

歪なものよ。

さとりは、望まずして不遇な過去を得ることになった青年へ、僅かながら共感を覚えた。

(—— 帰りの質問に肯定を返した。そこに付け入る隙がある)

「それで、鉄ばんどの供給は本当にするんですか？」

「するわ。そこは協力して損はないもの。私たちは要らないものを処分する代わりに、地底に新たな食材と、 “鎮守府との繋がり” を手に入れることができるんですもの。それに——」

「それに？」

「……いえ、何でもないわ」

航空機に限った話ではない。ないのだが。

空を飛ぶ “モノ” たちが、疎まれ地底を這いずる自身らの助けを必要としている。これほど滑稽なことがあるだろうか。地上の者が皆ほとんど困っていると考えると、さとりは一人心中でほくそ笑んだ。

「それよりお隣。本当に深海棲艦は地底にはいないの？」

「あたかも妖怪だから取り憑かれたくないんで必死です。今のところ地底じゃ見たことないですし、報告も上がってないですよ。地上にこっそり出たときに見かけたことはあるから、あんなの見間違えようもないです」

「そう……今のところはね」

もう一度、さとりは深くため息をつく。

「地上との約定も一部見直し……。最終的にあたいたち、どこへ向かうんでしようね」

「仲良しごっこだけではやっていけない。鎮守府に協力しているという者たちも、何か腹に抱えているでしょうね。私たちが言うなら――」

「『博麗の巫女が不在という好機を逃すわけにはいかない』、ですよね？」

「あなたはいつから覚り妖怪になったのかしら？ まあ私はともかく、この地底――旧地獄には、地上のモノたちに恨みや憎しみを持つ者たちがいる。追い出された者は特にね」

「タイミングは間違えられないですね」

「……できれば茅野さんは巻き込みたくはないけれど、まず無理ね」
「さとり様、随分とあの人間に入れ込んでませんか？」

からかうようなお隣の態度に。

さとりは冷徹な心でもって返す。

「勘違いしないことね」

「ひいっ――」

「私が茅野さんに少しばかりの同族意識を持つていることは認めるわ。ただし、不要なら見捨てる、それは当たり前前の考え方よ。お隣――あなたもね？」

「うっ……、うう……あたいは……」

「――ごめんなさいね。やっぱりあなたたちペットを見捨てるなんてできないわ。それより、今は喜びましょう。折角、茅野さんが地上の面白い情報をいっぱい持ってきてくれたんだから。話してくれなくても、わかったことは沢山あったもの」

「これから忙しくなりそうですね。お空もいつの間にか強くなってきましたし」

「ええ」

これほど感情が昂ったのはいつ以来だろうか。地霊殿に、地底にようやく天が巡ってきた。

この機会を逃すほど、さとりは甘い妖怪ではない。

「我らを地底に追いやった、八雲紫に一矢報いねば」

自然と、口から高笑いが漏れていた。

守矢神社へ帰った時には夜であった。料理中の早苗の「おかえりなさい」を聞いて「ただいま」を返し、青年は神奈子と諏訪子の元へ報告に向かう。

「おかえり」

「ただいま戻りました」

「で、地底に行ってきたの?」

「はい。ボーキサイトの交渉もつつがなく終わりました。金剛、金剛から見てさとりさんはどうだった?」

「uh——部下はダメだなんて、テートクなんて知りません……!」

「え、なんで!?!」

何か悪いことを言ってしまったのだろうかと思いつつも、報告を続けた。

すると、その中で神奈子がポツリと呟く。

「あ、そういや地底行ったことあるよ私」

「へっ?」

「あれは確か——そう! 幻想郷に来たばっかの時だよ。カミツレと艦娘がいるから風呂もしっかりしたものにしようと思って」

「……思ってた?」

「地獄鴉に八咫鳥の力をプレゼントさ。奴の力でいいお湯が出るわ出

るわ」

満面の笑みを浮かべた神奈子。が、それと反比例して、諏訪子の表情は般若面の如き怒りを浮かべる。

「ちよー！ そんなことしてたの!? 信じられない！ ただでさえ信仰少ない時だったのに！」

「お前だってライフライン整備だけは力入れてたじゃないか！ 水道引いて『これで漫画に集中できる』ってボヤいてたの忘れてないぞー！」

「風呂沸かすのにフツ―は神の火なんて使わないよ！」

「漫画読むのに神の力はいいのか!?!」

ギヤーギヤーと騒ぎ立てる神たち。金剛がその隙に自身の服の端をつまんでいじけていたのだが、料理ができたのか早苗が呼びに来た際、引き剥がされてしまった。

神奈子と諏訪子の言い合いは止まない。場所を変え、食卓においても、

「だからさ、神奈子はいつともそうじゃん！ 自分のことばっか優先して思いやりってもんがないよ！」

「外の世界にいた時もゴロゴロしてばっかりだったお前に言われたかないね！」

「oh――、今日は散々デス……」

「ちよつとお二人共！ 食事時くらいやめてください！」

更に場所が変わり、浴場においても、

「は！ ゴロゴロしてばっかりだから胸も背も小さいのさ！ 蛙ほど胸も跳ねないとは可哀想になー！」

「乳と気だけデカイ奴が何言ってるの！ 乳自慢したいなら人里で御柱挟んでくればいいじゃん！」

「一緒に風呂入ってるのに喧嘩してるデース……。しかも居間にも聞こえてくるほど怒鳴るなんテ……」

「しかもあのお二人、毎日あれで背中流し合ってますからね……」

「神様怖いなあ……とづまりすところ」

まだ場所を変え、寝室でも、

「ほら神奈子先に寝つ転がってよ！ 布団があつたまんないじゃん！」

「何言ってるんだ！ 一緒に寝ないとお前の匂いを楽しめないだろうが！」

「もーバカ！ 大好きだよ！」

「私もだバーカ！ このっこのっ！」

「寝室からイチャイチャ声が響いてくるデース……」

「ししししかも艶っぽい……！」

「あの、そろそろ自分の部屋に帰ってね？ 金剛は鎮守府だよ？」

結局、青年は報告を途中のままその日は寝たのであった。

翌日の夜。業務を終えた後。

朝からずつと顔がツヤツヤしている二柱に、報告の続きをすることに。

「まあ、以上です」

「ともあれ、地底と繋がりができたのはありがたいな。深海棲艦も、地霊殿は関与していないとわかったわけだし」

「はい、本当に」

「でもさあ、ボーキサイト手に入るのはいいけど、それを加工するのはどうするの？」

「えっ？」

「いくら大量に手に入るって言っても、アルミニウムに加工するときには沢山電力が必要になるんだよ？」

「電気……」

ボーキサイトの加工には、大量の電気が必要となる。にとりから報告は受けていたはずであったのに、ボーキサイトのことばかり考えていて、すっかり失念していた。

開口して呆ける青年に苦笑しながらも、神奈子と諏訪子が口を入れ

てくれた。

「まあ、そこは私たちがどうかしてやろうじゃないか」

「神奈子、八咫鳥の力を授けたって言ってたよね？」

「ああ、それがどうした？」

「発電施設を作って、人里にも供給しない？ このあたりの地盤と地底の状況を考えたら、間欠泉使うのが一番良さそうだけど」

「神の火の炉……、温泉でも始めるか。河童と山にも協力を要請して、

『地下間欠泉センター』といったところか」

「と、いうわけでカミツレ君」

「書をしたためてもらえるか？」

「は？」

数日後。遙か下層、地霊殿にて。

さとりは紅茶など飲みながら、ゆっくりとした時間を過ごしていたのだが。

「さとり様ー、お手紙届きましたよ」

「あらお憐、ありがとう。手紙なんて何十年ぶりかしら？」

「送り主は……ありや、提督殿ですね」

「茅野さん？」

お憐から手紙を受け取るさとり。ボーキサイトの礼でも書かれているのだろうかと考え、律儀な人だなと一瞬思う。

が、要約するところである。

『電気と温泉作るので、鳥さんの力を貸してください』

「……………は？」

コミュニケーションに関連することに、少なくとも自身にわからないことはない。そう思い、能力にも自信を持っていたのだが。

「……………は？」

青年のこの手紙を送ってきた魂胆はまるでわからない。意外など

ところで、さとりは自身の能力の及ばない弱点を見つけてしまったのであった。

神社にて、協力を受けるとの旨が記されている地霊殿からの手紙を開けると、ひとまず青年は胸を撫で下ろす。神奈子と諏訪子も、これには安心したらしい。

「建造と試運転含め1週間から2週間とどこだね。これでまた、守矢神社の理想に一步近づくわけだ」

「守矢神社の理想……？　そういえば、僕は信仰を集める手伝いしかできてないですけど、神奈子さんや諏訪子さんは、信仰集め以外にも何か目的があるんですか？　いつものんびりしていますけど」

「ん？　ああ、早苗には内緒だぞ。幻想入りの時、スキマ妖怪に敵意こそないと答えたが——」

「最終的な目的は、幻想郷全土を信仰圏内とする——支配することだよ。君たちを無理に巻き込むつもりはないけどさ」

そして、3週間後。

偵察を行いつつカードも積極的に回収する威力偵察艦隊、『ダブルスカウター』を編成・運用し始めると、制海権内の情報を集まりつつ艦娘の数も増えた。艦載機の補充も完了し、空母勢に笑顔が戻る。(……内外問わず気にかかることはある。でも今はやるしかない)

結局は当初予定していた通りの一ヶ月後の作戦開始となったが、戦力は前回より充実しているといってもいいだろう。

幻想入り後58日目、2ヶ月が経とうとしていた時。

「現時刻をもって——霊二号作戦を発令する」

博麗霊夢の搜索は、再び開始された。

046 旋回中

「あらあら……今日もついてないわね。まさか艦装に鳥のフンが落ちてくるなんて……」

やれやれといった表情で、陸奥は汚れた箇所を綺麗にした。妖怪の山の麓に、地下間欠泉センターが建造され始めた頃の話である。

陸奥は青年の命令を受け、地下間欠泉センターの周辺監視の任にあたっていた。とはいえ、天狗たちも上空で監視を行っている。実質、陸奥は諏訪子と河童の共同作業によって建物ができていく様を、ヒマそうに眺めていただけである。

夕方になり、皆が自分の家へと帰っていく中、陸奥も帰投しようかと思いい川に浮かぶ。夜中の監視も天狗がやってくれるし、仮に戦闘が発生した場合も当直の部隊が出る手はずになっている。自分が心配することは何もないだろう、と。

そう思っって航行し始めた時、川の上流の滝にキラキラと光る何かが見えた。

(……何かしら?)

艦装を展開し、陸奥は警戒を強める。山の天狗の警戒網は、軍属である自身らから見ても非常に厚いのだが、それをくぐり抜けたとなると相当な相手なのだろうか。

艦装の簡単な点検を行う。が、自身が過去に沈んだ原因となった箇所である、第三砲塔だけは動きが鈍い。担当する付喪神——妖精さんに元気がなく、まるでただの人形であるかのように表情も硬いのだ。にとりも理由がわからないという。

(第三砲塔……何をしてるの?)

戦闘になればこの第三砲塔は使えないだろう。しかし、それでも自身はビッグの一角を担う誉れ高き戦艦。

かつての長門のように、胸を張ることのできる活躍は自身にだってできるのだ、と。

「お客様かしらあ?」

近づいた先、滝にいた存在は少女であった。エメラルドグリーンの長髪を胸元で結わえ、暗い赤色のヘッドドレスを着ける。赤を基調としたワンピースのスカート部分には、『厄』のような模様が描かれていた。

「あなたは……何者?」

「私? ふふ——神様よ」

「あら? 妖怪の山の神は神社の二柱だけじゃなかったのね」

「厳密には違うけれどね。私以外にも神って呼ばれる存在はいるわよ。農民に大人気なのとか」

「へえ? じゃあ、あなたは何の神様なのかしら?」

「さあ、何でしょう」

滝壺を囲うように置かれる岩場の上で、少女は楽しげにくるくると踊るように回る。滝から漂う水飛沫がキラキラと星のように輝くのも相まって、彼女はまるでステージでライトを浴びる踊り子のようにであった。

と思った瞬間、少女は回るのをピタリと止める。

「厄いわねえ——貴女」

「や、やくい……? それより貴女、どうしてこんなところにいるの?」

「山が騒がしくなったから様子を見に来たの」

「あら、山に住んでいるの? 警戒して損したわ」

敵意がないことを雰囲気からも認め、そこでようやく陸奥は警戒を解いた。妖精さんへ指令を出し、しばらく休ませることに。

「それで——何よ、あのでっかいモノ」

『地下間欠泉センター』よ。電気を作って人里に供給したり、温泉施設があったり——」

「ふーん。誰が作らせているの?」

「いろんな人が関わっているわね。主なところだと神社の二柱、地霊殿の覚り妖怪、それからうちの提督かしら」

「提督……。ああ、最近巷で話題の……」

「ええ」

「同性愛者って噂の彼ね」

「違……うわよ、多分」

妖怪の山の中でも、やはり噂になっていくのだろうか。

青年と艦娘が幻想郷で暮らし始めてひと月半は経つが、未だ提督に手を出されたという艦娘はいない。精々が裸を見られたという程度だ。いや、鎮守府内の風紀を考えれば青年の振る舞いは正しいのだが。

女性ばかりの環境下、にも関わらず浮いた話の一つもない青年に対して持ち上がった疑惑の一つ。それが、茅野守連ホモ疑惑であった。

元が軍艦を抛り所としているとは言え、こうして女性の形をしているにも関わらず興味を持たれないというのは、少しばかり自信を失いそうにはなるのがサガというものである。艦娘以外でも手を出されたという話は聞いていない。

(提督に一番近いのって……やっぱり早苗よね)

が、その早苗も、最近どこか青年とギクシヤクしている。表面上は問題ないのだが、挙動の一つ一つがお互い不安そうなのである。ようやくお互いを意識し始めたのかとも思ったが、どうやらそうではないらしい。

(うーん……私、早苗より大人の雰囲気あると思うのに……何が足りないのかしら)

「そんな話はさておき。貴女よ貴女、艦娘だったわね？」

「私？ 私がどうしたの？」

「なかなか厄いわね。私もびつくりしたわ」

「さつきからその……厄いっていうのは？」

「厄が溜まっている、悪いものが憑いている——人間の言葉で言うなら、〃運が悪い〃ってところかしら。私、そういったものを感じ取ることができてるのよ」

「ふ、ふうん……まあ、当たらずとも遠からずってところね」
嘘である。とてつもなく運は悪い。

非番の日に出かけた先で深海棲艦に遭遇したり、足を踏み出した先に丁度猛犬の尻尾があったり、一人だけフグの毒にあたって高速修復材を使うことになったり。

(思えば実艦時代の最期だって……いえ、いいわ)

「だから、私が貴女の厄を吸い取ってあげる」

「……………は？」

そう口に出した瞬間、少女は再び回り始めた。
くるくる、くるくる、くるくると。

円を描き、弧を描き、何かを引き寄せるように。

夕焼けを浴びた滝の水煙はオレンジ色——否、赤色に染まって。
まるで、浮かび上がる血飛沫の中で舞っているようであった。
その表情は、酷く愛おしそうに。

回り続ける彼女の周りに、血飛沫が吸い寄せられるように集まるのを見ていると。

スツと、自分の中から何かが抜けていくような気がした。

「え？ あ、え…………？」

「あく、極上の厄だわあ…………ちそうさま」

「な、何をしたの？」

淫靡な表情で、ペロリと舌なめずりをする少女。悦びを表すかの如く更にくるくると踊り、恍惚とした表情に染まる。

「厄神の私がすることなんてただ一つ、〃厄を吸い取ること〃。貴女は最高の禍いだったわ」

「厄を吸い取る…………厄神」

「特に…………コ・コ。素晴らしい厄を頂いたわ」

「……って……第三砲塔?」

ふと妖精さんに語りかけてみると、妖精さんは以前のようなぐつたりした様子を微塵も感じさせず、遅れを取り戻すかのように艀装の整備に精を出していた。命令を出せば、他の砲塔と遜色ない動きを見せてくれる。

「厄……………」

「もしかして、いいコトをしちやった?」

「……ええ! ありがとう!」

「お安い御用よ。お礼がしたいなら、もつと吸い取りがいのある厄を持ってきて欲しいわね」

そう言つて、何度も何度もくると回り続ける少女。

艀装が直つたことは驚きである。しかしそれ以上に驚くのは、少女の能力がそれを成したこと。艀娘や平気に関する知識など微塵も感じさせないというのに、自身が抱える最大の問題を解決してしまつた。

やはり幻想郷は侮れない。この少女も、敵意がないとは言えもう少し警戒しておくべきだったのかもしれない。が、今となつては仕方なし。

少女は回るのをピタリとやめ、陸奥の方へと視線を向ける。

「ねえ、貴女はあの神社の関係者?」

「ええ、そうね。直接的にはないけれど、私みたいな艀娘を取りまとめる「提督」が、神社とすごく縁が深いわ」

「「提督」ね……。その装備しているの、武器なのでしよう? あなたたちは何と戦っているの?」

「深海棲艦という、幻想郷の敵。これを倒すために、人里で商売をしたり、あそこの地下間欠泉センターを作ったりしているわ。軍備の充実のためね」

「武器……技術……充実。あなたたちは「外の世界」から来たと聞いたけれど本当?」

「本当よ? それがどうかしたの?」

少女は少しだけ落ち込んだ様子を見せると。

うつむきながら、ポツリと呟く。

「なら私、あなたたちのこと嫌いだよ」

心の底から不安そうな表情を見せる少女に。

陸奥はただ、固唾を呑むことしかできなかった。

「どう……して?」

「幻想郷がなぜ存在しているか知ってる? 忘れられそうなモノたちの楽園、歴史から消えたモノたちの桃源郷、外の世界から隔離された妖怪の安住の地、それが幻想郷よ」

「……………」

「外の世界では科学技術が進歩したでしょう? 科学は非科学的な“迷信”を排除したの。だから妖怪たちは、幻想郷という結界に閉じこもることを選択した」

「……………」

「気づいた? あの神達は、信仰を得られなくなったから幻想郷に来たのでしょう? 文明の発展は畏れや信仰を滅するというのが、また自ら文明の発達を望んでるなんて、一体何の矛盾かしら。それに巻き込まれる他の妖怪はたまったものじゃないわ」

人間に“火”を与えた神たちは、やがてその“火”に飲み込まれた。

神が人を殺すのではない。人が人を殺すし、人が神を殺す。豊かさが神を殺し、幸福が神を殺す。絶望によってこそ神は生き存え、不幸によってこそ神は輝く。

幻想郷でそれをもっとも理解しているのは、守矢神社の柱であるはずだというに。

「技術の歴史は戦いの歴史。仮に、幻想郷で争いが起きないのだとしても」

柱のやろうとしていることは、幻想郷においても文明を発展させよ

うとしていることにほかならない。

神が文明を授け、人間に進化をもたらし、その結果神が殺されるといふのなら。

神は一体、何のために存在するのだろうか。

「あの神たちは、また自分たちの首を絞めることになる。ハッキリ言つて、幻想郷の破壊者よ。外の世界で起きたことが、幻想郷で起きないとも思つて？」

考えたくはない。考えたくはないが。

柱がそれを、まるで考えてないというのなら、それは――

「歴史は繰り返すつて、こういうことなのね」

シニカルな笑みを、少女は浮かべる。

「厄神……。貴女、名前は？」

「鍵山雛よ。あなたのお名前を頂戴？」

「長門型戦艦二番艦、陸奥」

「忘れないで。争いのあとに私は現れるわ。だって――」

――そこには、厄が沢山溢れかえっているでしょう？

不気味なその笑みは、妖怪と呼ぶにふさわしいものであった。

「おかえり陸奥。地下間欠泉センターの方はどうだった？」

「順調よ。……………ねえ、提督」

「ん？ あ、あれ、今日はなんだか元気ないね？」

「……………。そんなわけないじゃない。私はいつもどおりよ」

「そ、そう？ なんだか悩みでも抱えてそうな雰囲気だったけど……言いたくないなら聞かないよ」

言えるわけがない。守矢神社のやろうとしていることが、結果的に神社を苦しめる事になるかも知れないなど。鎮守府と妖怪の山と地

霊殿、この三勢力が協力しているというのに、その技術発展を自分ひとりだけでどうして止められよう。

それに、青年を心配させるようなことはあまり言いたくない。言えばそれっきり自分で抱えてしまう性格だと吹雪に聞いている。

柱もまるつきり考えがないわけではないかも知れない。だから、今の自分にできることは――

「そういえば、厄神っていう妖怪だか神だかよくわからないのに出会ったわ。鍵山雛と名乗っていたわね」

「……顔ひきつってない?」

そうなる可能性を考えもしなかった、知らなかったというフリをするだけである。

(私は大人のオンナよ。隠し事なんて朝飯前だわ)

「あの、何か隠して――」

「隠してないわよ」

「そ、そっか。それより陸奥、いつも色々からかってくるけど、ああいうのやめようね? はしたないのは大人の女性のすることじゃないよ?」

(そう、提督も言うように私は大人のオンナ……あ、あら?)

何やら認識の違いがあるようだが、それはさておき。

「ひとまず、地下間欠泉センターはあと数日もあれば完成するわね。今はすることもないでしょうし、たまには休んでいたら?」

「うーん……でも今は勉強したいかなあ」

「そう。それじゃ、私はこれで失礼するわね。ああ、それと提督――」
「うん?」

雛の戯言を間に受けるわけではない。

ないのだが、

「火、遊びは――ほどほどにね?」

砲塔をさせるようにしてくれた礼である。自身の中で、雛の存在を煙らせておくぐらいのことはしてやろうではないか。

執務室からの帰り。

滑って転んだ拍子に、雑巾の入ったバケツに片足を突っ込んでしまった状態で、陸奥はため息をつく。

(厄を吸い取るなんて嘘っぱちじゃない)

047 靈二号準備会議

靈二号作戦開始の3日前。

鎮守府の会議室にて、青年は友好的な勢力の面々と顔を合わせていた。集まったのは、艦娘代表の長門、赤城をはじめとして、早苗、にとり、文、魔理沙、咲夜、妖夢、鈴仙、萃香、そして青年を合わせた計11名。会議室のテーブルにて、青年を筆頭に顔を突き合わせるようにして会議に臨む。

「改めて、以上がダブルスカウターの成果だ。入手した艦娘の中から作戦に出撃する者もいるが、戦前の練度は維持しているから問題はないだろう」

「了解。これだけ増えればひとまず安心かな」

長門の報告に対し、青年は一つ頷く。

靈一号作戦の際に広げた制海権内及び僅かに外側を偵察し、発生する深海棲艦を撃破して積極的にカード回収を行う威力偵察艦隊『ダブルスカウター』による艦娘集めは順調であった。

入手した艦娘としては、

睦月型駆逐艦から、六番艦の『水無月』、八番艦の『長月』、十番艦の『三日月』。

朝潮型駆逐艦から、一番艦の『朝潮』、五番艦の『朝雲』、六番艦の『山雲』。

陽炎型駆逐艦から、二番艦の『不知火』、三番艦の『黒潮』。

長良型軽巡洋艦から、二番艦の『五十鈴』。

球磨型軽巡洋艦から、五番艦の『木曾』。

高雄型重巡洋艦から、三番艦の『摩耶』。

千歳型水上機母艦から、二番艦の『千代田』。
の、計十二名。

特に駆逐艦の増員が目立つが、今後のことを考えれば水雷戦から輸送に護衛まで何でもできる駆逐艦の増員は、大幅な戦力増強ができたといっても過言ではない。

「あやや。カミツレさん、鎮守府内の報告を聞かせるために呼んだわ

「けじゃないんでしょ?」

「ん? ああ、うん勿論」

長門からの報告を聞いて少し息をついた青年は、文の急かすような問いかけに同意を返す。

集まった面々に一通り目を配ってから、青年はおもむろに口を開いた。

「予想がついているかもしれないけど、霊夢さんを搜索する作戦——霊二号作戦を発令する予定です」

眼光を鋭くする者、腕を組んで天井を仰ぐ者、長い溜息を吐く者と反応は様々だが、青年は続ける。

「作戦の開始は3日後の早朝。3個艦隊を編成して、前回引き返した地点の更に奥を目指します。前は手掛かりまででしたが、今回は本人、あるいは本人と思しき存在を実際に確認することまでを目的としています。……まあ、現場判断で可能であれば、奪還まで」

赤城を一瞥すると、彼女は意を決して頷く。

「編成について私から説明します。第1艦隊は私が旗艦となり、加賀さん、朧、曙、漣、潮。第2艦隊は蒼龍が旗艦となり、飛龍、睦月、如月、弥生、卯月。この2個艦隊は空母を主力とする機動艦隊です。第3艦隊は金剛旗艦、榛名、高雄、愛宕、摩耶、鳥海と水上火力を集中させた高速打撃部隊となります」

「私たちが聞きたいのは一つだけ。それで『霊夢』と戦えるかどうかよ」

「咲夜さんの言うとおりで。霊夢の御札は無制限で、御札が変化したコウクウキつていうのもかなり強いつて聞きました。前回より人数が減っているみたいですが、勝てるんですか?」

咲夜、鈴仙からの立て続けの質問。難しい顔で首をかしげているが、言うことは尤もである。彼女たちは軍艦についての知識などなく、霊夢を助けるための作戦で霊夢と戦い抜けるかのみを気にしているのだから。

深海化している可能性の高い霊夢。幻想郷の異変を幾度となく解決している彼女の實力は折り紙つきも折り紙つきで、あらゆる弾幕を

正確無比な弾道予測により回避し、どこにそれだけ持っているのか不思議なほど圧倒的な数の御札による弾幕で敵を制する。当然ながらスペルカードを有し、能力と相まって発揮されるそれは、恐ろしく凶悪に相手を撃ち滅ぼす。

何を隠そうこの会議のメンバー。青年、長門、赤城、早苗、にとり以外の者たちは、皆一度は本気の霊夢と戦っているのだ。彼女の強さは、骨身に沁みてわかっていることだろう。故に、気がかりは彼女の強さに対抗できるかというそれだけ。

「戦いに絶対はありません」

それでも赤城は、肯定するでもなく、しかし全てを否定するでもなく、淡々と事実を告げた。

「私も霊夢さんと思しき深海棲艦と空戦を経験したからこそわかります。彼女はとても強いです。でもそれは、取れる手段の限られている我々にとって、今回の作戦を全て否定する理由にはなりません」

「で、でも、それは皆さんが危ない目に遭ってしまうだけでは……」
「ふふふ。妖夢さん、ご心配ありがとうございます。鎮守府防衛戦力を残し、艦戦偏重の正規空母を4隻。慢心するわけではありませんが、我々一航戦と二航戦の練度は冗談抜きで世界一という自負があります。人数が少ないということは艦隊直掩範囲も狭くなるため、前回よりは善戦できるでしょう。我々も戦う艦、与えられた状況で最善を求められないのです」

これが、一航戦を誉れとする赤城の出した結論。

前回は制海権も狭く、外洋は未知の領域であったがために大規模な艦隊を編成せざるを得なかった。

しかしながら今回は、前回広げた制海権をある程度維持しているため、道中比較的安全に進撃できる行程が増える。そして、前回の戦闘は母基地から放たれる陸上機の航続距離内であったと想定するならば――、

我々が博麗霊夢に届く日は、そう遠くはないのかもしれない。

故に艦隊は少数精鋭。艦隊防空範囲を狭めてエアカバー範囲を限定させ、艦戦の搭載割合を増加させることによつて少しでも博麗霊夢と渡り合える確率を増やそうと考えた。対空射撃は薄くなるが、全員が全員高い対空性能を持つわけではないため、今後の課題となるだろう。

「カミツレさんはそれでいいんですね？」

困惑気味に、早苗からの問い。

「良いも悪いも、今回は真つ向から霊夢さんと戦う気はないよ。制空権だけ絶対渡さずに、霊夢さんと思われる存在を発見したらもう即撤退。艦攻艦爆も少ないから、敵の他の大規模艦隊と遭遇しても状況次第で撤退。どう、安全でしょ？」

「提督よ。我々を心配する気持ちはありがたいが、流石に及び腰すぎるのではないかと？ 少しは信じて送り出してくれ」

「うーん……でも心配だしなあ」

「なら、比叡と霧島を中核とする高速艦隊を制海権内で待機させることにしよう。異状あれば急行、それで問題ないだろう？」

「そうだね、そうしよう。でも、撤退の方針はそのまま。僕らには霊夢さんとの戦いに関する知識がなさすぎるんだから」

「フツ、そう言うなら仕方あるまい」

長門からの提案を受け入れ、早苗に笑顔を向ける青年。自分たちもただではやられるつもりはないから安心してほしいという思いで微笑んだのだが、早苗はやはり不安そうである。

無理もない。博麗霊夢という存在について未知なのは、彼女も同じなのだから。

青年はにとりに顔を向け、口を開く。

「今話した皆は一次改造中だよな？ にとりさん、進捗はどうかかな？」

「もう9割終わってるよ。追加の比叡たちもどんどんこいさ」

「早いね、ありがとう。比叡たちが終わったら、作戦に参加しない子どもどんどん一次改造していこう。資源は大丈夫かな？」

「改造も含めて、この作戦あと10回分は使い切っても大丈夫だよ。ボーキサイトの供給も追いついてきたからね。紅魔館の艦隊はどう

するんだい?」

「一時的に交代させながら、順次改造できるように段取り組むことになるかな。頼める?」

「お安い御用だよ」

にとりは胸をドンと叩き、鼻息荒く自信満々に答えた。

艦娘の改造は、主として艤装の強化となる。霖之助やパチュリーから得たヒントを基にして、にとりがあーでもないこーでもないと思わずに頭を悩ませながら改造に関する理論を構築してくれたのだ。

今回実施する『一次改造』は、あくまで既存の装備の強化や戦前利用していたものを復元して装備させるに留まるため、多少は強くなれるがこれまでと大きく変化するような能力向上は見込めない。

だが、にとりが理論構築した『二次改造』は、長門すら呆気にとられる改造理論であった。『二次改造』は既存の装備を大幅に強化更新するもので、にとり、艦娘、艤装の付喪神の全員が全く同じイメージを持って作業にかならなければ到底不可能とのこと。イメージを持つために、にとりが設計図を起こしたり青年がその艦娘に関する戦闘の来歴を書き起こしたり艤装を模した特殊なアイテムが必要になったりとハードルは高いが、その分『二次改造』によって得られる能力の向上は絶大なものであるらしい。艦娘によっては、艦種の枠を超えた火力の発揮が可能になったり、そもそも艦種そのものが変わってしまったったり、搭載機数が大幅に向上したりと、艤装の付喪神が使用側の艦娘に影響を与えてしまうほどに。

「さて、作戦とは別に皆さんにお話があります」

にとりの話を聞き入れた後、青年は会議に参加する面々を見渡した。

「鎮守府は今後、艦娘を幻想郷各地に滞在させる予定です。霊一号作戦によって制海権を広げることができましたが、内地に突如出現する深海棲艦が現れなくなったわけではありません」

「そうだな。私も博麗神社で過ごしてはいるけど、神社にもぼつぼつ出るからその度に倒してるよ」

「萃香に同じく。永遠亭の周りでも近くの川に現れますね。私は人里

に行く機会も多いんですが、その道中でも見かけるので都度に倒して
ます」

「紅魔館は、電たちの艦隊が霧の湖に現れる敵を倒してくれてるから
安心ね。今でこそ解決したけれど、またお嬢様たちが深海化すること
を考えると……背筋が凍るわね」

青年の言葉に思い思い語る彼女たちだが、無論この事象は青年も把
握している。

霊夢の搜索救助についてはそれはそれとして、未だに幻想郷各地に
出現する深海棲艦を止めることはできていない。以前よりは出現頻
度は減ったようであるから制海権の維持が必ずしも効果がないわけ
ではないようだが、深海棲艦が幻想郷の民を深海化させる可能性を考
えれば、出現頻度が少ないことは等号で安全に結びつくわけではな
い。

故に、艦隊規模の拡大に合わせて艦娘を各地に派遣し、深海棲艦を
早期に発見、撃破する。紅魔艦隊が泊地化するにあたっての実績を残
しているため、次からは派遣先と派遣する艦娘を選出するだけで防衛
範囲を拡げることができるので、電たちの功績は大きい。

「それで、私たちの次はどこに派遣しようというの？」

「……人里、同時に永遠亭です」

ぴくりと、鈴仙が眉を上げる。

「ご存じのとおり、人里は人間が幻想郷で暮らしていく上でなくては
ならない場所です。我々鎮守府や守矢神社も浅からぬ関係を築いて
いる上に、幻想郷で生活が営まれている最大単位です。戦力配備を
怠った場合、最も被害が出るのはここでしょう。配備する戦力もその
分多くなる予定です」

「では、どうして永遠亭へ？ 師匠も知っていますか？」

「永遠亭の周りには河川は限られてるけど、艦娘の皆でも航行できる
水路がある以上、深海棲艦が全く現れないとは言えない。のともう一
つ。仮に永遠亭周辺で深海化が起きた時、情報網がない僕らには知る
手段がない。人里から艦載機で偵察も考えたけど、迷いの竹林がある
以上空からの偵察は難しいんだ。まあ、あとは永琳さんの希望もある

かな」

「私たちが深海棲艦に吞まれてしまうとしても——いえ、紅魔館や閻魔だって、霊夢ですら深海化してるものね……。師匠は何か言っていたんですか？」

「あー、っと。……拗ねてた、かな？」

「は、はい？」

「と、ともかく。鈴仙さん、今日は帰ったら永琳さんに艦娘の皆を受け入れる準備だけお願いしますって伝えてくれる？」

意を飲み込んだような飲み込んでいないような顔で、鈴仙はぎこちなく頷いた。どう捉えても納得をしていないというか永琳の拗ねる姿が想像できないような顔をしているが、それはさておき。

「改めて、作戦開始は3日後の早朝。今回は鎮守府のみの作戦のため、皆さんは普段どおりに過ごして頂いて構いません。ただ、もし作戦中に内地に深海棲艦が出現した場合、速やかに倒してもらえるなら我々も負担が少なく済みます」

会議も終わり際、青年は魔理沙に視線を合わせる。

「結局、1か月きっちり待たせちゃったね。魔理沙ちゃんごめん」

「だからちゃんはやめろよな……。そりゃあ私も、霊夢には早く帰ってきてほしいから気持ち焦るけどさ。冷静になって考えてみれば、結局あいつ相手なんだから準備しすぎるに越したことはないかもしれないんだぜ」

「ま、早く会いたいなあ」と、それまで神妙な面持ちで会議に臨んでいた魔理沙が、椅子の背もたれに寄りかかって大きく息を漏らした。呆れたような、それでいてどこか嬉しそうな表情で、柔らかく微笑みを浮かべる。

誰よりも霊夢への思いの強い魔理沙だからこそ、誰よりも霊夢を心配してやまない魔理沙だからこそ。

そして、誰よりも霊夢の強さを知っている彼女だからこそ、生きていると分かった霊夢に安堵して悪友心を持ったのかもしれない。

そんな少女の思いを無駄にしてはならない。

そんな少女の捨くれを、それが正しいものとして受け入れてはなら

ない。

「もしどうにも気持ちが悪く落ち着かなかつたら、話ぐらいは聞いてあげられるから」

「……はん。認めたくねえけど、変わったなカミツレ」

「それは……いい意味で？」

「当たり前だ。あとさつきお前、1か月待たせたって言ったよな？」

冗談じゃないぜ。言っとくけどな、私の気持ち的には——」

「4年半くらい待たされた気分だぜ」と、彼女は悪戯っぽく口角を上げた。

ともあれ、霊二号作戦の発令は間もなく。

博麗霊夢の搜索は、ようやく再開される——。

加賀は、都合三度目になる戦闘機の発艦を終え、その翼が向かう先を静かに見据えていた。

青空に天高く舞い上がる赤の二本線。異状なく順当に高度を上げていったそれに一息ついて、加賀は作戦開始時の青年の言葉を思い返す。

『茅野守連より全艦娘に達する。本作戦は制海権外で深海化している
と予想される博麗霊夢本人の“確実な”発見を目的とする。航空母
艦赤城は偵察艦隊総旗艦となり、3個艦隊を率いてこれを達成せよ』

空符『第一航空戦隊』

——空母『赤城』『加賀』

駆逐『朧』『曙』『漣』『潮』

空符『第二航空戦隊』

——空母『蒼龍』『飛龍』

駆逐『睦月』『如月』『弥生』『卯月』

戦符『戦艦戦隊』

——戦艦『金剛』『榛名』

重巡『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』

『戦艦比叡は遊撃艦隊旗艦となり、制海権内にて偵察艦隊を支援せよ』

戦符『戦艦戦隊』

——戦艦『比叡』『霧島』

駆逐『吹雪』『白雪』『初雪』『深雪』

『二度目の霊号作戦。深海化した霊夢さんの戦力は未知数で、正確な位置もまだ不明。そんな中に突入しろだなんて、本当に気苦労をかけたごめん』

『でも、君たちは世界一の艦隊だ。日々の訓練を怠らず、いつでも戦える軍艦としての矜持を持ち続けて。かと思えば、誰一人として埋もれることのない個性で幻想郷を謳歌する。僕は、そんな君たちの提督でいられることを誇りに思うよ』

『深海異変の解決、幻想郷の未来は僕らにかかっている。でも焦らない

でほしい。生きていれば、また出撃できる。生きていれば、また帰ってこられる。幻想郷はまだまだ楽しいことがいっぱいあるんだから、こんなところで欠けるのは絶対に許さない』

『もつとこの幻想郷を知りたい。この幻想郷を好きになりたい。そのためには、君たちがいないと始まらない。君たちと一緒に幻想郷を過ごしたい。難しい作戦だけど、君たちならやり遂げられると信じてる。鎮守府で、吉報だけを待ってるよ』

『帰ってこれるって、約束できる子から出撃すること。いいね?』

輪形陣で航行する3個艦隊は、それぞれの艦隊で三角形の頂点を形成する陣形で航行していた。進行方向に対する右翼、第1艦隊において、加賀はそつと小さく息をつく。

「提督、勉強の成果でそれらしくなりつつあるけれど、私たちを送り出すときの言葉は一か月前とほとんど変わらなかったわね」

「提督が本当に大事にしているもの、結局はそこだけってことなんですよ加賀さん」

「沈んでほしくないだけ?」

「沈むこともあるだろうという考え方の我々からすれば、なかなか素直に受け入れにくいですけどね。でも私、提督の考え好きですよ。幻想郷に来たって感じがするので」

ポロつと赤城にこぼした言葉は、優しい微笑みで返された。赤城の戦闘機が戻ってきたため、彼女は甲板を差し出してそつと回収する。「でも赤城さん、幻想郷に来ても私たちの戦争はまだ終わっていません」

「……いつか、終わる日は来ますよ。加賀さん、その時は一緒に、幻想郷の色んなおいしいものを食べに行きましょう」

「ふふ、それは気分が高揚します」

長門をはじめとする各艦の教育により、青年は1か月前と比べても驚くべき成長を遂げていた。

各艦種の特徴や航空砲雷撃戦それぞれのメカニズム、作戦の考え方

や判断すべきポイントを押さえた上で、過去の海戦についてその推移や当時の考え方をひたすらに詰め込まれた。その結果、まだ考え方に危うい部分があるものの、多少軍人のような雰囲気帯びてきたのは間違いない。一方で、艦娘の無事を第一とする考え方は健在のため、特に新しく着任した艦娘などが受けた命令に戸惑うことも多々あるが、このまま成長すれば幻想郷に適応した提督として能力を発揮できるだろう。

赤城旗艦の偵察艦隊、比叡旗艦の支援艦隊は、前回行程の約3分の2に到達した。制海権内であったとはいえ、これまでのところ深海棲艦側からの攻撃は受けていない。

「もうすぐ制海権外に出してしまうので、私たち支援艦隊はここまですりません。本当はお姉さまたちと一緒にいきたいですけど、航空戦の邪魔になってしまうのでこのあたりで待ってます!」

「Hey 比叡! 後は私たちに任せるネー!」

「比叡さん、ありがとうございます。我々は先を目指しますので、提督への連絡をお願いします。制海権を超えて支援が必要な時はまた連絡しますね」

「はい! 皆さん、ご武運を!」

偵察艦隊はこのまま先を進み、支援艦隊は制海権内で待機する。比叡が無線をわちゃわちゃ操作しているのを尻目に見ながら、加賀は状況を整理した。

(いくら制海権内といっても、偵察機の1機も飛んでこないなんてどういうこと?)

前回の作戦で提督も気づいていた、深海棲艦側にスパイがいる可能性。今回の作戦も3日前の準備会議の時点で各勢力には伝えたが、作戦前にも作戦中にも未だ動きがない。情報が洩れていることは事実だったのだから、今回の作戦も何かしら行動を起こされてもおかしくないというのに。

スパイはそもそもいなかったのか、あるいは、まだ行動を起こしていないだけなのか。まだ作戦は始まったばかりなのだから、これからわかることもあるだろう。

航空機が飛ぶには絶好の快晴の中、赤城、加賀、蒼龍、飛龍は順番に戦闘機数機を発艦させる。異状あれば即発艦出来る態勢ではあるのだが、前回のイメージが残っている中で戦闘態勢を維持し続けるというのは、緊張も相まってなかなかどうして疲労を溜めさせてくれる。赤城などは旗艦としての責任感を強く持つて臨んでいるために、今までの作戦よりも表情がこわばっている。

何も無い時間は逆に心身を摩耗させられる。いつそ、早く何か起きてくれた方が気が楽なのかもしれない。

そうこうしてうちに、偵察艦隊は前回引き返した地点、霊夢と思われる個体との航空戦を繰り広げた海域に到達する。赤城は全艦隊に微速を指示し、空母4人を招集した。

蒼龍、飛龍は前回参加していないため疑問を顔に浮かべているが、どうやら赤城は自分と同じ考えであるらしい。

「正直に言いますと不気味です」

「私も赤城さんと同じ意見よ」

「ええ〜？ ずっと制海権内だったんだから、何もなくて当たり前じゃない？」

「蒼龍、油断したらめっ！ ……でも、元々交戦する可能性があったのはここからだっただははずだよな？」

「二航戦、貴女たちのことは信頼してるわ。でも、私たち四人をもつてしても、鎮守府の戦力をもつてしても、深海棲艦はいつも容易く私たちの予想を超えてくるの。気を抜いてみなさい、また全員一緒に沈むわよ」

「むー、わかったわよ」

唇を尖らせながらも、若干照れ気味に顔を逸らす蒼龍。矢を二、三本つがえると、そのまま真っ青な空へ放つ。放たれた矢はやがて光を帯びて戦闘機に変わり、そのまま進撃予定の方向へと飛んで行った。「赤城さん。幸い、前回ののように接敵していないから、燃料弾薬とも余裕があるわ。撤退する理由はありません」

「元よりその気はありません。ただし全員、索敵はこれまで以上に厳としてください。ここからは何が起きてもおかしくはありません」

加賀の機体が帰ってくる。甲板を差し出して着艦させると、加賀は表情に出ない表情を今まで以上に引き締めた。

(赤城さんほど、私は提督への熱が強いわけではないけれど)

赤城の指示に、3個艦隊が輪形陣を組み直し、航行を再開する。

(世界一と称賛されて、期待に応えないわけにはいかないわね)

戦争は終わった。だが、艦娘の戦争は終わっていない——故に、

この誇りは、まだ失われてなどいない。

それが艦隊に共有されたのは、空母4人で話し合いをしてから1時間後のことだった。

空襲が起きる気配もなく、緊張状態が続いているところへ、漏れる疑念の声。

「——ん？」

最初に気づいたのは、戦闘機を飛ばしていた飛龍。違和感を覚えたのか機体へ意識を集中させていた。

「んんー？ 赤城さん、何か赤い海が見える」

「海が……赤い？ 詳しく教えてください」

「く、詳しくって言っても……うーん。ホントに海が赤いだけなんだよね。あと20分もすればその海域に到着するよ」

「陸上機の姿は？」

「敵影なし。島とかも見当たらない」

「艦隊警戒！ 飛龍さんはそのまま偵察を続行してください。加賀さん、提督に連絡を」

加賀は、その情報を聞いて思考に入る。

(赤い海……。こんな青い快晴だというのに、赤い?)

何万海里と海を見てきた自分達は、様々な表情の海を知っている。荒れ狂う波、砲弾飛び交う飛沫、すべてを飲み込まんとする無限の大口。はたまた、朝焼け色に染まる日の出、夕焼けによる橙一色、穏やかですべてを忘れさせてくれる風の水平線。全て昨日のことにように思い出せる、いつも見た景色。

その中で、夕焼け以外に赤い海など見たことがあっただろうか？
その海は、果たして心に安堵を与えてくれるものだっただろうか？

『飛龍航空隊、赤い海ヲ発見。確認スル』

その海域に着けば、嫌でも思い出させてくれる。

(赤い海、この色まるで……)

ああ、これは。

かつて志を同じくした友が、仲間が、物言わぬ骸となった時の色ではないか。

灰色の雲がかかり、艦隊を暗く照らす。先ほどまであれほど晴れていたのが嘘のようで、過去を映し出すかのように視界の色彩を失わせていく。

『航海二支障無ケレバ進撃セヨ』

艦隊の様子を見れば、その反応は一目瞭然。眉をひそめて周囲を警戒する者、艤装の作動状況を再度確認する者、青ざめた顔を隠し切れず手を震わせる者。

赤城だけは動揺を押し殺して警戒を続けているが、艦隊全員がこの状態では、士気も長くはもたないかもしれない。

「陸上機発見！」

しかし、そんな思いは飛龍の一言によりかき消された。艦隊全員、目の色を変えて飛龍に向く。

「艦隊進路方向！ 陸上機2機反転中！ 我の航空隊、追跡します！」

「飛龍さんありがとう！ 艦隊、速度を上げます！ 各空母は艦戦発艦用意！」

陸上機の発見により、艦隊は士気を一挙に回復させた。不気味な赤い色を進む恐怖と記憶の中の友が絶叫するが、目的を思えばこそ皆踏ん張れる。

飛龍の偵察を邪魔しないよう、加賀は彼女に問いかける。

「本当に陸上機？」

「絶対に見間違えませんかよ加賀さん。前回疑念の機体も陸上機なんだ

よね？　じゃあ、あの機体が向かう方向に、何かあるって伝えてくれるようなものじゃない？」

「油断はしないで」

「大丈夫、まっかせてよ」

戦いに臨むボルテージが一気に上がった艦隊だが、だからこそ加賀は警戒する。これまでの道中、赤い海、そして反転する陸上機。わかりやすすぎる、あえて試しているのかと思わせるぐらいに見え見えの戦術である。

「赤城さん」

「大丈夫、誘い込まれていることは“みんな”わかっています。でも加賀さん、我々の目的は見つけることです。逃げ道を確保するぐらいなら、この艦隊なら問題ありません。多少強引ですが、このまま行きましょう」

そう、我々はまんまと見せかけの罠にはまっている。この後待っているのは、用意周到に包囲網を構築した大規模な敵艦隊だろう。

だが、それでいい。提督は今回、“ケガをするな”とは一言も言っていない。無論負傷したら負傷したで責任を感じてしまうのだろうが、提督がハッキリ求めたのは“確実な発見”。そして生きて帰ってくることに。

この作戦に多少の負傷は織り込み済みであると、赤城と相談の上で提督自身が苦渋の決断を下したのだから。

『陸上機見ユ。飛龍航空隊、反転ノ敵機ヲ追尾中』

前回作戦から1か月、屈辱の航空戦を思い出さなかった日はない。今すぐ発艦させて敵戦闘機との制空戦を繰り広げたい気持ちはあるが、いたずらに戦力を消耗するわけにもいかなかったため我慢。

それでも。

それでも――。

「敵艦多数確認。戦艦6、重巡10、軽巡14、駆逐32。すごい、まだまだい——赤城さん！」

「了解！　艦隊、対空戦闘用意！」

この仲間たちと、もう一度航空戦を挑める悦びは抑えようもない。

「陸上基地発見、陸上機発艦確認！」

赤城、蒼龍、飛龍と視線を一瞬だけ交わし、それぞれ物言わず矢を放つ。放たれた矢は戦闘機へ変わり、全く同じ速度で、同じ角度で、同じ高度で、空に放たれた。

艦載機から通して見る景色。そこには、今しがた御札から戦闘機へと姿を変貌させた無数の輝きと、赤い海が延々と広がっていて。

その赤い海の中央に、彼女は鎮座していた。

ふてくされたように、機嫌を損ねた子供のように、鋭い眼差しを空に向けている深海棲艦。無数の航空機に守られるように囲まれている彼女は、手元から赤い御札をさらに取り出し、艦隊を挑発するように手招きした。

深い、とても深い憎悪を含ませて。

『博麗、見ユ』

かくして、霊二号作戦における最初で最後の戦闘、幻想郷沖海戦が開始された。

049 夢想の時

青年は、ある時魔理沙に尋ねたことがある。

「霊夢に勝ったことがあるかだって？ はんっ……人が気にしてることずけずけ言いやがって」

博麗霊夢と戦ったことがあるか、博麗霊夢に勝利したことがあるか。

幻想郷を外の世界から隔す博麗大結界。その結界を守るように建つ博麗神社に住む彼女は、自由気ままに喜怒哀楽が激しく、呑気でありながらも妖怪退治を好み、修行を嫌いなながらもその強さは幻想郷一であると言われている。身体能力のみこそ人間の域から出ないものの、幸運と勘の鋭さを併せ持ち、弾幕の扱いも熟練かつ豊富。

「スペルカードルールの中でなら、これまで異変を起こした奴らも惜しいところまでは戦ってるんだよ。まあ、私含めて結局負けてんだけど」

彼女の能力は「空を飛ぶ程度の能力」。幻想郷では空を飛べる者も多いため、彼女の能力はただ飛ぶだけだと思われがちだがそうではない。

「仮にスペルカードルール抜きだとすれば、本気のアイツに勝てる存在なんて私はこの世には存在しないと思うぜ」

空を飛ぶとは、“あらゆる事物から宙に浮き、全ての理より解放される”能力。

弾幕や攻撃はおろか、触れることすら叶わない。何者にも干渉されることのない状態を作り出す彼女は、全ての事象を無意味とする。

「アイツに勝つために私も色々やってんだけどな。実を結んではいるけど勝てた試しはないんだぜ。ただの一度もな」

ため息をつく魔理沙。彼女も幻想郷においては頭一つ飛び出ている実力の持ち主で、霊夢とともに異変解決を行うこともある。

そんな彼女であっても——否。

そんな彼女だからこそ、認めざるを得ない。

博麗霊夢の実力は、博麗霊夢とそれ以外とで格が違う、と。

「ああ、ただアイツ」

しかし、そんな彼女だからこそ、わかることもある。ずっと身近に感じてきたからこそ、知っていることがある。

「表裏ない奴だから、嘘みたいに嘘に引つかかるぞ」

ニカツと、魔理沙はいたずらっぽい笑みを浮かべた。

絹のように真っ白な肌に、白雲のように豊かな足元まで伸びるロングヘア。レオタードのようにぴっちりとしていながら立襟のある白い服に身を包み、ショートブーツを履きこなす。頭頂部には耳のように生える小さな角が二つあり、真紅の双眸は淀みなく暗闇に輝いていた。

大小備える砲台と、U字型に伸びる滑走路の装備に腰掛け、その傍らには太陰太極図を模した球体が左右に2つ。

彼女は、物言わず人差し指を艦隊に向ける。

——瞬間、上空に待機していた耳の生えた白く丸い戦闘機およそ100機が、螺旋状に艦隊へ向かってきた。

赤城をはじめ、艦隊は既に準備万端である。

「来ます！ あの数なら問題ありません！ 50機は艦隊直掩に！」
敵編隊に対し、艦隊は上空に待機させていた艦戦を差し向ける。その数、およそ200機。

「私たちが数の上で敵よりも多いなんて、そうそうない経験よね」
「でも、弾幕が変化するんだよね？ 早々に今の敵機落とさないとジリ貧になるかも。撤退しようにも、状況落ち着けないと追撃されるだけだから気は抜けないよ」

蒼龍、飛龍が機体の操作に集中し、加賀も黙々と瞳を閉じて戦闘に集中する。薄暗い曇り空の中、赤い海を見下ろしながらの大規模航空戦が開始された。

「水上艦の数が多いです。近寄せないことだけを考えて下さい！」

「了解ネ！ 第3艦隊、対水上戦闘用意！ 榛名、高雄、準備はいいです力？」

「はい、お姉様！」

「お任せ下さい！」

偵察艦隊の先頭、金剛旗艦の第三艦隊は、赤城の指示により敵水上艦を抑えにかかった。元より大きな戦力差、倒し切ることは考えていないものの、第一、第二の機動部隊に近づけてさせないことは必要である。もし抜けてきた場合、最後は各駆逐隊が迎撃することになるだろう。

『敵水上艦確認。戦艦8、重巡14、軽巡18、駆逐38』

『撤退ハ赤城ノ判断ニ任セル。可能ナ限り早期撤退ヲ』

『了解』

（水上艦78隻に加えて霊夢さんの陸上基地。いくら我々が強かろうと、まともに正面からやりあうことすら憚られますね。無論、私はそんな手はとりません）

艦戦を操作しつつ、赤城は全艦へ伝える。

「敵陸上基地を『飛行場姫』と呼称！ 全艦、敵艦隊と少しずつ距離をとってください！ 航空隊は間もなく接敵します！」
そして。

博麗霊夢との戦いの火蓋が、切って落とされた。

両艦隊間の空中で、戦闘機同士がもつれ合う。編隊による一撃離脱を試みる深海機に対し、偵察艦隊の機体は軽やかに回避して巴戦に持ち込む。

「くっ！ やはりやりますね！」

機体性能は同等。練度は同等程度であるが、若干艦娘側に分があるだろうか。機体数にも差があるため、10分もあればほとんどを撃墜することも可能だろう。

「第一次攻撃隊発艦！ 水上艦を優先して叩き、第3艦隊を支援します！」

自らの指示に、加賀、蒼龍、飛龍はまるでその指示が出る事が分かっていったかのように、間髪入れず攻撃隊を発艦させる。ため息が出るほど美しい練度は、世界が変わり長い時を経ても失われてなかった。

金剛率いる単縦陣を敷いた第3艦隊が、敵水上艦の接近を阻止するため艦隊前面に押し出している。その上空を往く艦攻隊は、二手に分かれたかと思うと敵戦艦に向けてさらにそれぞれ二手に分かれ、それぞれの編隊が敵艦を左右から挟み込むように魚雷を投下した。

挟撃され、逃げ場なく被雷する敵戦艦。敵戦艦8隻のうち4隻が一度の攻撃で瞬く間に撃沈した。護衛の重巡2隻も逸れた魚雷に被雷し、轟沈。深海艦隊の足並みは乱れている。

「流石の機動部隊デース！ 私たちも負けてはいられません！」

第3艦隊は一度接近し、射程距離の長い金剛と榛名が攻撃可能になると、混乱の渦中にいる敵重巡を狙って砲撃した。初弾でありながら見事に命中させ、重巡2隻を沈める。

さらに第3艦隊は接近し、高雄、愛宕、摩耶、鳥海の射程にも入る。再度一斉砲撃を行い、敵戦艦1隻を沈めた。命中率の高さに赤城は目を見開いたが、今この場においては頼りになることこの上ない。

「あまり近づきすぎないように！」

「わかってるネー！」

距離を詰められすぎれば、敵水雷戦隊の魚雷の餌食になる。軽巡と駆逐合わせて56隻もいるのだから、距離を詰められることは大量の雷撃による地獄が待っていることは容易に想像ができる。

第二次攻撃隊を発艦させつつ、第一次攻撃隊を帰艦させる。併せて、敵味方の艦隊すべての動きを見極めて、艦載機によるドッグファイトも戦い抜く。己の能力を十二分以上に活用していることは間違いないのだが、それでも深海棲艦による猛攻をしのぎ切れないのだから、いかに一つ一つの場面で有利に立とうと戦局の不利さは変えられないらしい。

どうか敵戦闘機のほとんどを撃墜し、被害を軽微に留めている味方航空隊。そのまま飛行場姫上空へ向かい、触接して攻撃機の誘導と

敵戦闘機増大の抑制を行おうとしていたのだが――。

飛行場姫の傍らにある2つの陰陽玉から御札の弾幕が放たれたことにより、航空戦の状況が変わる。

陰陽玉から直線的に放たれる弾幕。対空射撃のように上空へ機銃掃射ばりに向けられたそれを航空隊は悠々と回避していたのだが、その弾幕は空中で軌道を変えて味方艦戦へと多段命中した。

「追尾型の弾幕……？ 厄介ね」

加賀を見ると、歯噛みして弓を持つ手を握りしめていた。艦戦の回避を優先させ、少しでも被害を減らそうとするのだが、高速で放たれる弾幕のすべてを回避することはかなわず、味方航空隊が徐々に撃墜され始めていた。

そして――

空へ放たれた弾幕は宙で輝きを増し、白く丸い戦闘機に姿を変えたかと思えば味方航空隊を襲い始める。

その数、再び100機。

（攻撃隊は上がってこない？ 手を抜かれているのか油断しているのか……なら）

「制空権の確保を継続します！ 第二次攻撃隊は再度敵水上艦の攻撃を！ 残る戦艦をすべて沈めます！」

飛行場姫上空へ向かっていた艦戦隊は移動をやめ、少し引き気味に敵戦闘隊との制空戦を再び始めた。味方艦戦は、艦隊上空の直掩機を合わせても残り210機。敵機と弾幕にずいぶん落とされてしまっただが、まだ余力はある。

（今は何とか拮抗させられています。しかし、数の上で不利なのは間違いないですね。今回で霊夢さんをどうしようとは考えていませんが、撤退もタイミングによつては追撃されて被害が拡大するだけ。余裕のあるうちに撤退したいですが……）

と、赤城がこの戦いの終わりを見据えた戦術の組み立てをしていると、制空戦に参加する蒼龍とふと目が合った。

思考をする間にも、戦局は動き続ける。

第二次攻撃隊により、残る敵戦艦のうち2隻と軽巡3隻を撃沈し

た。戦艦をすべて撃墜することはかなわなかったが、最も脅威となる戦艦をほとんど無効化できたのだから、第3艦隊にとつても動きやすくなるだろう。

第3艦隊の動きも衰えることはない。残る戦艦1隻の発砲に警戒しつつ、距離を確保しながら足の速い軽巡と駆逐を1隻ずつ仕留めていた。残る敵水上艦は、戦艦1、重巡10、軽巡12、駆逐34。戦力の限られた中でよく沈めたものだが、全て思い通りに事が運ぶはずもない。

「赤城さん、飛行場姫より攻撃隊離陸、数60！ 第3艦隊狙い！」

「いよいよ来ましたか——直掩隊を第3艦隊へ！ 金剛さん、水上艦隊から距離をとって対空戦闘を！」

飛龍の報告により、赤城は直掩隊の行動を即断。第3艦隊の動きを見れば、今しがた敵艦隊から距離を取ろうとしていたのだが、

「はうううっ！」

残る1隻の敵戦艦の砲撃を被弾し、榛名が中破した。機関に損傷はないものの、砲塔を一部損傷したらしい。

これだけの部隊を相手に、むしろ今まで無傷でよく戦ったものである。榛名の中破を認識すると、赤城はこれまでと思いいい声高に叫ぶ。

「よし、この位でいいでしょう、撤退します！ 威力偵察としては十分な戦闘ができました！」

「私も同じこと考えてた、了解！」

「賛成デース！ 対空戦闘用意！」

蒼龍、金剛とも了承し、全艦娘は敵部隊に対して背を向ける。制空戦を行っていた艦戦隊は敵戦闘機を半分程度落としたのち、帰艦するため反転する。第3艦隊は輪形陣に移行し、飛来する敵攻撃隊に備えた。

そして、第3艦隊上空における航空戦。直掩機が敵攻撃隊を落としにかかるも、全てを迎撃しきることは困難であった。迎撃をすり抜けて攻撃態勢に入る敵機を落としにかかるが、それでも対空射撃網を突破する敵機がいる。

摩耶などは、対空戦闘の中心となって積極的に攻撃機、爆撃機を撃

墜していたのだが、

「ちっ、ふっざけるなあ!」

故に、狙われてしまった。爆撃機の直撃を受け、摩耶は対空火器を損傷する。

第3艦隊と合流し、艦隊は全員が揃った。そのため、第3艦隊を狙っていた敵攻撃隊が第1、第2艦隊に肉薄するも、

「仲間を傷つけるのはダメです!」

「さあ、いくわよっ」

随伴の駆逐隊が、空母を守りきるために対空射撃を開始する。直掩の猛追を抜けてやってくる敵機はそう多くはないようで、攻撃態勢に入る寸前のところどころにか撃墜できている。

敵攻撃隊をすべて倒し、艦隊上空の安全が確保された。通常なら安心して良さそうな場面だが、間違っても気を抜くことはしない。

「重巡及び全駆逐隊、敵水上艦方向広範囲に魚雷一斉射! 距離があつて当たらないのは承知していますが、少しでも追撃の手を緩めます!」

赤城の指示に呼応し、対空戦闘からすぐに切り替えた魚雷装備組は、高雄の号令により一斉に魚雷を放出した。遠距離であるため魚雷が到達するはずもないが、速力のある敵駆逐艦の動きを封じることが成功したようである。

直掩隊、制空部隊を回収し、追撃を海空ともに完全にシャットアウトした偵察艦隊。艦戦の残りは190機と、制空戦力の4分の1が撃墜されてしまった。しかし、博麗霊夢を相手に警戒に警戒を重ねた上で慎重に戦闘をした結果としては、むしろ良く持ちこたえたともいえる。

ようやく、艦隊の雰囲気の一つの落ち着きを迎えた。

「赤城さん、すみません。私が被弾したから撤退を……」

「悪い、私もだ……」

「いえ、どの道撤退を考えていたところでした。ある程度は戦えていましたが、霊夢さんもまだまだ手を隠し持っていたようでしたから決して有利に戦えていたとは言えません。想定以上に控えていた敵艦

隊を相手に、我々は相当に善戦したと言えるでしょう」

「フン、引き際が見事だったデス。比叡たちの艦隊もこちらに向かっているし、あとは帰るだけネ！」

「——いいえ」

金剛の一言に、赤城はかぶりを振って返す。不思議そうな顔をしている金剛だが、まだ一人戦闘を継続している者がいる。

「あれ、蒼龍……？」

「静かに。蒼龍さんには、あるお願いをしたんです」

「お願い？」

艦戦を帰艦させ、艤装のチェツクをしている飛龍が、蒼龍が一人表情を張り詰めさせたままであることに疑問の声を上げた。

赤城が無言で遠目に見える飛行場姫を指さすと、艦隊は全員がそちらを見つめる。

「まだ、一手残しています」

妖精さんは、蒼龍を母艦とする艦爆隊の編隊長である。18機からなる爆撃隊を率いて灰色の雲中を進み、恐怖をこらえながらも操縦桿を握る手は柔らかく落ち着いている。

蒼龍より与えられた任務は単純明快。艦隊が撤退した直後、上空より急降下して気を抜いているであろう飛行場姫を叩けとのこと。

帰りの直掩機も雲中で待機している。あとは抱えている爆弾を落としてくるだけなのだから、簡単なこと。

簡単だが、それが難しい。

母艦より入電、攻撃命令が下った。現在地は丁度飛行場姫の真上である。

やってやるかと一息。バンクを振って後続に知らせると、編隊全機はその場で背面飛行に移行した。妖精さんは全機が背面状態になったのを確認すると、ためらいなく機首を起こす。

突如、雲間から飛び出た艦爆隊18機。真つ逆さま、ほとんど垂直に落下していくように降下する機体は、まだまだ加速していく。

全機が雲から姿を現したが、まだ飛行場姫は気づいていない。

ダイブブレーキを展開し、爆撃態勢を安定させにかかる。気圧が変化し、体に荷重が加わるその苦しみを妖精さんは苦とも思わず、ただ目の前に鎮座する陸上基地に一撃与えようと落ち着いた気持ちで操縦桿を微修正していく。

密集してダイブブレーキを展開する艦爆隊。流石にこれだけの数が急降下していればその風切り音に気づいたようで、飛行場姫はようやく上空を見上げた。艦隊を寄せ付けることすらしなかった飛行場姫が驚愕するその表情を見ただけでも、妖精さんは仕事をした気になったのだが、見たいのとはそんなモノじゃない。

艦爆隊が求めるのは破壊。飛行場姫に一撃与え、今後戦う上での教訓を是が非でも勝ち取ろうという執念。

陰陽玉による対空射撃の弾幕が放たれる。何機かは捕まっつてしまったようだが、もう遅い。

妖精さんの機体が爆弾を投下したのに合わせて、他の艦爆も爆弾を投下する。投下した直後、艦爆隊は機首を起こして針路を変え、爆弾の行方を見守った。

落下していくごとに、対空射撃により落とされていく爆弾群。しかし、高高度から速度をつけて投下されたそれらを、察知するのが遅れたにもかかわらずすべて迎撃できるはずもなく。

妖精さんの落とした爆弾が、飛行場姫の艦装を直撃した。

爆炎を上げ、焦げた煙が立ち上る。

瞬間。

妖精さんは、目の前で起きた出来事に我が目を疑う。

確かに命中したはずの爆弾が、虹色の光によってかき消される。

爆炎も煙も、まるで存在していなかったかのように消し飛ばされる。

まるで夢を見ているのではないか。

そう、まるでこれは。

彼女の存在そのものがまさしくこの世から浮いているようであり。

霊符『夢想封印』

彼女こそが絶対で唯一無二の存在であるかのように、虹色の光が彼女に差した。

虹色の光弾が彼女の周りを高速で回転する。艦爆隊が投下した他の爆弾はその光弾によつて存在を抹消され、姿を現した彼女は傷一つ負っていないかった。

ふと、白い顔に浮かぶ憎悪の視線と瞳が合う。

回転する虹色の光は、やがて一つ一つが陰陽玉から放たれた御札のように、離脱しようとする艦爆隊を追尾してその存在をかき消していき。

この空に、何も残ることはなかった。

被弾して意識が薄れゆく中、妖精さんは誓う。

次相見える時には、今度こそあの間抜け面に爆弾を叩き込んでやる、と。

050 ソフトに反省

夜の帳が下りた深い暗闇の時間帯。鎮守府も必要最小限の灯りだけ残して消灯していたが、司令部の執務室だけは未だに灯りが点いていた。

執務室内。外の景色はほとんど見えないというのに、青年はそわそわと落ち着きなく窓の外を見つめる。

『博麗、見ユ』、か。ほとんど予想できてたことだけど、こんなに当たってほしくない予想はなかなかないよ)

すでに偵察艦隊からある程度の情報はもらっている。

前回戦闘地点よりさらに奥において、深海棲艦の根城と思しき赤い海域を発見。大艦隊とともに御札を操る陸上基地が現れ、弾幕を航空機に変えて戦う深海棲艦。

『飛行場姫』と、赤城は言う。制空戦闘は終始有利に進めたものの、本気で数を出されたらいつ形勢逆転されてもおかしくはなかった。戦闘中に攻撃隊を向けられたのも一度だけであり、前回の航空戦と比べれば手抜き感があるのは否めない。

(その意図はともかく、これで霊夢さんの居場所は分かった。紅魔館や三途の川の異変を参考にするなら、陸上型は動かないから位置がそう変わることもないはず)

赤城の偵察艦隊が比叡の支援艦隊と合流して鎮守府に向かい始めたのは、夕日も沈みかけの頃であった。

今回は手伝いはいらなないといったにもかかわらず、早苗、魔理沙、咲夜、妖夢、鈴仙、萃香は朝艦隊が出発する前からほぼ丸一日執務室におり、無線連絡の度に色めき立っていた。霊夢はまだか、アイツどこにいるんだ、お嬢様は最高よ、酒が足りねーぞ等、途中から流れが怪しくなったので今日から執務室は酒類持ち込み厳禁となった。

女3人寄れば姦しいというが、流石に6人もいると想像以上に騒々しい。無論、霊夢を心配するからこそ集まったのであり、協力を申し出てくれることは十分に承知している。

深海化した霊夢を発見し、戦闘も終了して艦隊の帰投を待つだけと

なったので、協力者たちは本日は帰らせた。だが、

「魔理沙ちゃん、もう少し頑張れるかな？」

「んー……んあ」

魔理沙だけは帰ってくるのを待つと言って聞かなかつたため、そのまま執務室のソファに座らせていた。もう深夜も深夜であるため眠気をこらえ切れておらず、うつらうつらと舟をこいでいたが。

青年は魔理沙の隣に座り、優しく両肩をたたく。

「帰ってきたら起こしてあげるから、少し寝ておく？」

「んーう……そうする。わるいな」

「こつちこそ、残ってくれてありがとう」

「へっ……。おし、ちよつとかりるぜ」

仮眠をとるか訊くと、ふんわりとした反応で頷く魔理沙。そのまま倒れこむように体を横にし、隣に座る青年の太ももに頭を預けて一瞬で寝入ってしまった。

「うおっ？ ま……まったく、仕方ない」

戸惑う青年。しかし、霊夢を心配する気持ちの強さがここまで意地にさせているのだと思うと、呆れるような微笑ましいような気持ちで青年は眠る魔理沙の乱れた髪を撫でて整える。

「司令官、艦隊もうすぐ帰投です……あっ」

丁度頭を撫でていたところへ、本日くじ引きに当選した秘書艦の春雨が執務室のドアを開けて入ってきた。春雨は何か見てはいけないものを見てしまったような顔になり、桃色の髪をサイドテールを揺らして口元を手で覆っている。

「あっ」に動揺してしまった自分も悪いのだが、そんな反応をされてしまうと自分まで何かやましいことをしてしまっている錯覚に陥るので、青年は社会的に生き延びる道を選んだ。

口元に人差し指をあて、「しーっ」と。

「自分もだけど、人がこんな時間まで起きてるのもなかなか珍しいからね。少し休ませてあげよう」

「あ、し、失礼しましたっ。あの、司令官は眠くないんですか？」
「眠くないわけじゃないよ。でも、皆が帰ってくるまでは寝られない。
春雨は？」

「だっ、大丈夫！ 眠くなんかありません、はい！」

両手を握りしめて、まだまだ起きていられると言わんばかりに春雨は胸を張る。だが、それでも膝枕の魔理沙が気になるようで、ちらちらと青年と魔理沙の顔を交互に見ていた。

「ど、どうしたの？」

「あ、いえ、うらやま——なんでもありません！ ……ただ、こうやって見ると、なんだか妹が増えたみたいなきもちになります」

「ははは。夕立といい、白露型はやんちゃな子が多くなるね」

「ふふふっ」

さて、艦隊がもうすぐ帰投するようである。

霊二号作戦においては、前回のようパイによって何らかの行動が起こされる可能性を考慮していたが、杞憂に終わったらしい。スパイそのものが杞憂だったのか、はたまた今回動かなかっただけなのか、その理由は次動かれなければ知ることもできないだろう。

戦闘の規模を考えても、榛名と摩耶の中破のみで戦闘を終えられたのは引き際を正しく見極めたからだろう。その点は赤城を褒めなければならぬし、艦載機の被害も前回を考えればまだ少なく抑えられている方である。

上々だ。

上々なのである。

だがそれ故に——不気味だ。

偵察艦隊が、支援艦隊を伴って鎮守府に帰投した。空母4人だけを執務室に来るよう指示し、他は解散させる。

「ほら、魔理沙ちゃん。帰ってきたよ」

「……だから、ちゃんはやめろよな。って、なんで膝枕されてんだ！」
「ひでぶっ」

「あ、悪い思い出した」

執務室に空母たちが向かってきているため魔理沙を起こすのだが、膝枕に錯乱した魔理沙に優しく腹をグーパーンされる。寝ぼけは覚めたようで謝られたが、腑に落ちないのはいつものことである。

「艦隊、帰投しました」

帰還した赤城、加賀、蒼龍、飛龍が執務室へ入ってくる。皆ほつとした顔を浮かべているのだが、蒼龍だけは唇を尖らせている。

「みんなおかえり。特段、報告を急ぐものはあるかな？」

「そうですね……今回は遠距離戦かつ戦闘もバタバタでしたので、新たなカードの回収はありません。先立って連絡したとおり、霊夢さんを発見しました、というのが一番大きいでしょうか。」

寝ぼけ眼をすっかり覚ました魔理沙が、赤城の前に立つ。

「ホントに……霊夢なんだよな？」

「今回も御札を回収しましたが、前回と同じ模様でした。御札が弾幕として発射されているのも見ましたが、我々の艦載機を追尾するように狙われましたね」

「ホーミングアミレットか！ 他には!？」

「御札の弾幕を航空機に変化させたのは他の人と同様ですが、人の言葉を喋っているのは確認できませんでした。あとは……」

赤城が未だ膨れつ面の蒼龍をチラツと見ると、全員の視線が蒼龍に集中する。少しばかり沈黙が続いたかと思うと、蒼龍は堰が切れたように地団駄を踏んだ。

「あーもう！ 悔しい！ 江草隊が失敗するなんて！」

「え、えぐ？ どういうことなんだぜ？」

「絶対一撃与えられたと思ったのに全部消し飛ばされちゃったのよ！」

あの虹色のクルクル回って光る玉のせいだ！ あんなスペルカードがあるなんてもう！」

悔しさを顔面いっぱい広げて腕をぶんぶん振るう蒼龍。たわんたわんする胸元を気にもしないので、魔理沙が少しばかり呆気に取られていた。青年は春雨に目を塞がれていた。

しかし、魔理沙は蒼龍の言葉を聞き、少しばかり俯いたかと思えば

肩を震わせる。

「へっ、な……なんだよアイツ。心配させるだけさせといて元気そうじゃんか……」

が、すぐに顔を上げる。「ったくよー」と嬉しそうに後ろ頭を掻いたかと思えば、未だ猛威を振るっている蒼龍の胸を両手で鷲掴みにしてから執務室を出て行った。

「ホント、遅くまでありがとな！ 今日にはよく眠れそうだぜ！ おやすみ！」

「なんかマシユマロ食いたくなってきたな」なんて声が廊下から聞こえた気がしたが、聞こえないふりをした。蒼龍はマシユマロを両手で抱くようにして顔を真っ赤にし、その場にヘナヘナとへたり込んでしまう。

「と、とりあえず、他の報告は後日まとめて聞くから、今日はもうゆっくり休んで」

「了解。あの、ところで提督」

もじもじと両手を擦りながらくねくねする赤城。一体何事かと思っただが、赤城の顔は欲に満ちていた。

「咲夜さんのクツキーはまだですか？」

「……明日お願いしとくよ」

既に、空は白み始めていた。

執務室に備え付けられた簡易ベッドで青年は睡眠をとった。朝の仕事時間に間に合わせようとして当初は1時間程度しか眠らなかつたのだが、

「あら提督、また風邪をひかれるおつもりですか？♪」

朝ご飯を絶対に出そうとしない鳳翔が暗に「寝ろ」と言うため、熱々の味噌汁をかけられる前に執務室へ退散した。かけられることはないだろうが。

時間変わって昼時には目を覚まし、作戦に参加した艦娘たちもちらほらと昼食を食べに食堂に来ているようだ。青年も食堂にて満面の

笑みの鳳翔から昼食を受け取り、空いていた席につく。

「おう、邪魔してるぜ」

「あ、魔理沙ちゃん。またご飯食べに来たの？」

「ここのメシ美味いからつい寄っちゃうんだよな。あ、代わりに食べるキノコ渡しといたからチャラにしてくれよ」

「はは、奔放だなあ」

座った正面にはたまたま魔理沙が座っていた。帽子を被ったまま食べていたため、手を伸ばして外させる。

「おっと、ありがとな。帽子とるの忘れてたぜ」

「落ちて着いてゆっくり食べて。夕べはちゃんと眠れた？」

「お陰様でな。夢にマシユマロ出てきたぜ」

「ははは……」

空笑いでお茶を濁しておこう。

二人して他愛のない話をしつつ食事を終えた。魔理沙が満足そうな顔をして椅子にもたれかかっているところへ、妖夢がお茶を持ってくる。

「カミツレさん。あのっ、昨日はお疲れ様でした」

「いえ、妖夢さんも鎮守府への協力ありがとうございました」

「魔理沙、カミツレさんに迷惑かけてないよね？ 忙しい人なんだから、無理させたらダメだよ？」

「あー……眠かったから膝は借りたな」

「え。そ、それってひざまく——こ、こほん。そ、それでカミツレさん、霊夢で間違いないんですよね？」

「ええ」

良かったらと席をすすめ、妖夢が青年の隣の席に腰掛ける。全員分のお茶を淹れると、青年は改めて作戦の結果をまとめた。

博麗霊夢は深海化し、飛行場姫となった。

ただの弾幕すら追尾し、スペルカードも健在。艦隊が日中一日かけてようやく辿り着くような場所に位置しており、航空戦力も豊富で高練度。

「まさか、爆撃の上手な蒼龍の航空隊が一瞬で持っていかれるなんて

なあ」

『夢想封印』は霊夢が最も好んで使うスペルカードですね。虹色の光弾の回転は攻撃にも防御にも適していて、我々のスペルカードや弾幕でさえ消滅させる力があるんです」

「作戦前に聞いとけば良かった……。他には霊夢さんの情報ありますか？」

「一番詳しいのは魔理沙ですけど……」

作戦の前、確かに魔理沙には聞いていたのだ。霊夢の能力、戦い方について何度も何度も。

だが、

「だから言ってるだろ？ 霊夢の戦い方はこう——静かにピツと動いてバーツで弾幕ばら撒いて容赦ないって」

「はあ……。カミツレさん、私に聞いてくれてもよかったですよ。」
「今度からそうしようかな……」

事前にその情報があれば、もう少しまともに戦うことも出来たのだろうか。

反省は次回に生かそうと思ってお茶を一口すすった青年だが、丁度近くを歩いていた蒼龍と飛龍と目が合い、二人は同じテーブルにいた。蒼龍は魔理沙を見た途端マシユマロを隠すように抱き抱えていた。

あまりにも警戒していたので、青年の隣に蒼龍、魔理沙の隣に飛龍が座ることに。

「なんだよ、そんなに私が嫌か」

「失礼な人には近づきませんっ！」

「ね、蒼龍の柔らかかったでしょ？」

「最高だったな」

「飛龍まで！」

蒼龍がぷりぷりと怒るのをなんとかなだめながら、作戦時の話を花を咲かせる。

霊夢と対し、戦えないことはないということも分かった。

弾幕の命中精度、スペルカードの威力、そして霊夢自身の能力。こ

れらが今後の作戦でどういった影響を及ぼしてくるかは未知数だが、鎮守府の最終的な目的は彼女の『撃破』。霊夢の深海化を解こうとするならば、どうしたって彼女を完全に倒す必要があるだろう。

そのためには、何が必要なのだろうか。

幻想郷の異変解決者が異変そのものと化している事態を、解決する方法とは。

「しっかし、アイツ飯何食ってんだろな。2か月は海にいるって考えるとどうやって生きてるのか不思議だぜ」

「自分で魚捕まえてるんじゃないかな？ とりあえず、命はあることが分かっただけでも良かったでしょ」

「飛龍、それはそうなんだけど、うーん……。今まで深海化した奴らはすぐに倒されて解けただろ？ その時間は長くても半日ぐらいなものだ。だけど、長期間深海化が続いたらどうなるかなんて、誰にも分からないんだぜ」

「……魔理沙ちゃんの言うとおりだ」

霊夢を発見し、生きていることを確認した。それで終わりではない。

彼女を倒すのはもちろんであるが、厳密には彼女を深海化から解放するという意味で取り戻さなければならぬ。2か月やそれ以上彼女は深海化を継続することになるが、その場合彼女にどのような影響を及ぼすかは全くわからない。

仮にも。

霊夢の深海化が解けず、深海棲艦として死んでしまったとしたら――

だから、青年も焦らないわけではない。

「もつと……霊夢さんのことを知る必要があるそうだね」

「会えばすぐにどんな奴かわかるんだけどなあ。なんとなく、カミツレとは相性良さそうな気がする」

「流石に会ったことないからなあ」

「ああ、なら――」

「もう一回、神社に行ってみたらどうだ？」と、魔理沙に提案される。

初めて早苗と博麗神社を訪れたときは、神社が商売敵になるかどうかを探るために行き、萃香や魔理沙と会って紅魔館の異変が発生した。よくよく考えてみれば、確かに博麗神社にそれほど詳しいわけもなく、あの場所の印象も曖昧だ。

「……そうだね、明日あたり行ってみようかな。霊夢さんを知ることのできる何かがあるかもしれない」

「多分、萃香がいるだろうから気になったら萃香に聞いてみてくれ。私は……用事があるからしばらく留守にするぜ」

「うん？ どこかお出かけ？」

「ああ、しばらく帰ってこれないかもな」

ふと、魔理沙は遠い目をして深い息をつく。

青年は、魔理沙のこのような表情を初めて見たかもしれない。だが

何かを決意した表情など、幻想郷ではもう何度も目にしている。

何かしでかそうと、何かを企んでいることなど、見ればわかるものだというのに。

この時の青年は、何も聞くことができなかった。

「そっか……。気を付けてね」

「おう！ んじゃ、またな」

魔理沙はその場に立ち上がり、飛龍のマシユマロのうち片方を数秒間揉みしだいてから食堂を去っていった。

蒼龍に視界を塞がれる青年。固まる飛龍。胸元を抑えて顔が死んでいる妖夢。少し離れた場所では、龍驤がこちらを見て妖夢と同じポーズ、同じ表情をしていた。

「霊夢さん、これが嫌で出て行ったんじゃないよね……？」

疑問には、誰も答えてくれなかった。

051 狭間に揺れる

作戦が完了した翌日。

青年は、魔理沙と話し合っていたとおり博麗神社を訪れることにした。

目的は至ってシンプル、博麗霊夢という人物を知ること。そして、霊夢が去った手がかりが何か残っていないかを探るため。

もつとも、手がかりの方は魔理沙や萃香がこれでもかというほど探った後であるため、ほとんど期待はできないが。

カラツと晴れ渡る青空。雲一つない本日の天気は、青天だというのにどこか空虚さを感じさせる。

「しつかし、また遠いところにあるんやなあ。こんなところじゃ、人里の人間もよう来んのやろな」

「博麗神社に人が来ない理由って、やっぱりそれもあるみたい。人里から遠いし、道中妖怪が出ることもあるし、おまけに神社にも妖怪がいるし……萃香さんだけじゃなくてね」

「流石に疲れたわあ。キミ、神社に着いたらちよつち休憩やね」

くじ引きによる本日の秘書艦は龍驤。博麗神社に行くと言ったら「ウチも行くー!」と言って聞かないため、貴重な航空戦力ではあるが一緒に歩いてきてもらっている。人里までは筏を龍驤に引つ張ってもらってそこから徒歩で来たのだが、流石にそろそろ青年も移動手段を考えたいところである。なぜか筏を引つ張る役は艦娘には好評なのだ。

朝方に鎮守府を出発し、昼前に博麗神社に到着。少しずつ涼しくなってきた季節であるものの、それでも長い階段を登り切った後には二人して額に汗を滲ませていた。

古びた鳥居をくぐり、博麗神社の社を視界に捉える。こじんまりした神社であり、境内もそれほど広くはない。魔理沙や萃香が掃除をしているのか、依然来た時よりは石畳がきれいになっていた。

拝殿前にて、賽銭を投入し二人そろって二礼二拍手一礼。

「もつと大きくなりたいなあ」

何がとは聞かない。早苗にしても龍驤にしても、願い事を口に出すのが流儀なのだろうか。自分の願い事は家内安全あたりでお茶を濁しておこう。

参拝を終え、まじまじと拝殿を眺める二人。厳肅な雰囲気は依然と同様であるものの、どこか寂しそうに感じられた。

「何か感じるものとかあったりする？」

「いんや、ウチにはさっぱりや。萃香はこの中におるんかな？」

「そのはずだよ。おい、萃香さ——」

と、その時である。

最初は気のせいかと思った。自分の身体が震えているように錯覚して、「あれ、昨日はちゃんと寝たのに」なんて思ったのも束の間のこと。

木々から飛び立つ鳥。低く唸るような大地の雄叫び。そして、視界に映る景色の輪郭を何重にも誤魔化す振動。

「司令官、危ない！」

龍驤に手を引かれ、拝殿から離れる青年。ミシミシと音が鳴り響いたかと思えば、拝殿が徐々に形を変えていく。

拝殿から少し離れた開けた場所で、龍城に地面に伏せさせられた。龍驤がその上に覆いかぶさり、周囲の状況に目を配っている。そして。

あの世から呼ばれているような轟音を鳴らして、博麗神社はその場に崩れて果てたのであった。

呆然とする青年と龍驤。土煙が辺りを包み、余震が消え入るようにならせていく。

揺れが収まって立ち上がった青年が真つ先に頭に浮かべたのは、「誰かの大切な場所がなくなってしまった」という悲壮の感情であった。

「あ——す、萃香さん!? 萃香さん、いたら返事して下さい！」

「キミ、まだ危ないって！」

ひしやげた神社に駆け寄り、大声で萃香の名前を呼ぶ。

魔理沙の話では神社にいるはずなのだ。間違ってもまだ中に残っていたとしたら――

「す――萃香さんッ！」

「お？ 今日元気がいいなカミツレ」

と、絶望を振り払うように力一杯叫んだところで、潰れた神社の中から霧が吹き出るように現れる。霧はその形を変えないが、そこから聞こえたのは紛れもない萃香の声であった。

「萃香さん、無事だったんですね！ 良かった……」

「鬼がこの程度で死ぬわけないだろ。しかも、地震もびっくりだけどまさか神社が潰れるなんて。いくらオンボロとはいえ私でも驚きだよ」

「……こう見ると、見事に柱から崩れて屋根が落ちてきてますね」

「もう寿命だったのかもな。ちよつくら私は人里の様子見てくるよ」

そう言っつて、萃香は霧の姿のまま空へ登って行ってしまった。無事であることに安堵するも、そもそも青年たちが要件があるのは彼女であつたために、去り行く彼女を呆然と見送ることになった。

「あ……ま、まあいいか。それより龍驤、鎮守府の確認を！」

「あーそれがなあ。鎮守府、揺れてないんやっつて」

「え、あれだけ揺れたのに？」

「うん。何の話だつて逆に心配されたわ」

どういうことだろうか。いくら幻想郷が広いとはいえ、神社が崩れてしまうほどの揺れなら妖怪の山まで揺れが伝わっていてもおかしくはないはずだ。

局地的な地震。そんなことがあり得るのだろうか。

だがここは幻想郷。ありえないことは何度だつて目にしてきた。ありえない能力だつて何度も経験してきた。

「天にして大地を制し、地にして要を除き」

だから、この地震もきつと――

「人の緋色の心を映し出せ」

まだ名前も知らない、誰かの仕業だったのだろうか。

腰元まで伸びる空のような青髪に、太陽のような紅い瞳。桃の実がついた帽子に半袖の白いロングスカートを身に纏い、足元にはブーツ。華奢な体から伸びる四肢はスラリとしており、気の強そうなシニカルな笑みを浮かべて彼女は口を開いた。

「異変解決の専門家ね、待ってたわ」

誰かと勘違いしていないだろうか、と思いそれを口にするより先に。

空から舞い降りてきた彼女は、剣の柄のような黒い棒状の物を右手に持ち、まっすぐと青年に向かって来たのであった。

あ、死んだな。

と、その時思ったことは嘘ではない。襲われていることを自覚し、逃げようと思った時には既に眼前1メートル。気づいた龍驤が駆け寄るも間に合うはずもなく。

「司令官！」

龍驤の叫び声を、最期の言葉と思いながら――

「ふぎやつ!?!」

青髪の少女は、青年の目の前に現れた目玉が多数覗き見える空間の切れ目へ吸い込まれていった。

安堵するも、この空間は見覚えがある。

もう一度会いたいと、会って話がしたいと思っていた女性。その魂胆を聞かねばならないと思っていた女傑。

「やつと出て来てくれましたか……紫さん」

「ええ。会いたかったわよ、提督さん?」

幻想郷の管理者にして、境界を操る程度の能力を持つ最強格の古強者。

八雲紫は、いつの間にか青年の後ろに現れていた。

スカートのフリルが風に揺れ、ガーリーな傘を差して口元を扇子で隠す。その姿や表情は最後に見た時とまるで変わりなく、美人であるにもかかわらずどこか胡散臭い雰囲気は健在であった。

「本当に久しぶりね。まるで何年も会っていないなかつたみたい」

「ええまったく。藍さんはお元気ですか？」

「ちよつと、どうして私には聞かないの？」

「え、いや、その、いつも元気そうなので」

「酷いわねもう、失礼しちゃうわ」

扇子を閉じ、唇を尖らせてぷりぷりと膨れる紫。一度息を吐いて少しだけ嬉しそうな顔をしたかと思えば、扇子を口元に当てて不敵に笑む。

「この二ヶ月、あなたのことを陰ながら見せてもらっていたわ。霊夢を見つけてくれたこと、心からお礼を言わせて頂戴。貴方の功績は忘れないわ」

「お礼なら艦娘のみんなに。実際に身体を張って怪我をして、それでも霊夢さんのためにと動いてくれたのはみんなですから」

「なら貴方から、私がお礼を言っていたこと、伝えて欲しいわ」

「……まあ、構いませんが」

そう語る思いは嘘ではないらしい。紫はまっすぐとした瞳をまったく逸らすことなく、青年へ向け続けていた。

「そんなあなたに一つお願いがあるの」

「紫さんからのお願いって嫌な予感しかしないですね」

「もうちよつと信じてくれたつていいじゃない……。それで、あなたにお願いしたいことなんだけど」

傘を閉じ、扇子を青年に向け、紫は瞳をなお逸らすことはなかった。

「第二次月面戦争、協力して頂戴」

一瞬、紫が何を言っているのかわからなかった。

月、と彼女は口にしただろうか。だがそれも、第二次、そして戦争とはこれ如何に。

「月の裏側には月の民が住んでいて、高度な文明が進んでいるわ。あなたが幻想郷に来るよりもずっと昔に一回目を挑んだけれど、その時は負けちゃったのよ」

「ええと、その……。今回が二回目ということは分かりました。そもそも目的は何なんですか？」

「月の高い技術力は紛れもない本物よ。その技術を奪取することで、霊夢の奪還に活用する」

曰く、こうである。

月には地上の穢れを嫌う月の民が住み、高度な技術が発達して繁栄している。いくつか“海”を有することから、航海に関する技術を持つ可能性が非常に高い。仮に航海に関する技術がなくなるとも、幻想郷で活用できる技術は間違いなくあるとのこと。それを月から持ち帰り、霊夢の奪還に役立てようというのだ。

月への侵攻方法は簡単。紫の能力により境界を操り、一挙に月面へ転移するのだという。それに加えて――

今しがた、妖怪の山方面で轟音を鳴らして空へと飛び立ったロケットによって。

「なっ――なんだあれ!？」

「吸血鬼、やっと完成させたのね。ずっと待ってたのに」

「えっ、レミリアさんがあれを?」

「あら……? もしかして何も聞かされていなかった?」

空へと伸びていく白煙。いびつな形をして飛翔するロケットは、音を遠くにしながらその姿を小さくさせていく。あれがレミリアの意図によるものだったのだとしたら、第二次月面戦争に関する話をレミリアが承諾したのだとしたら、どうして鎮守府はそれを知らなかったのだろうか。

なぜレミリアは、教えてくれなかったのだろうか。

「龍驤、紅魔艦隊に確認を！」

「今連絡入った！ パチュリーから聞かされたらしいけど、レミリアがずっと隠しとったらしいで！ 乗ってるのはレミリア、咲夜、魔理沙、メイド妖精たちやって！ 美鈴は知らんかったみたい！」

「……そうか、だから魔理沙ちゃんは」

先日彼女が見せた表情はこのためだったのか、と青年は悟る。思えば、パチュリーも長門に何か道具を渡していたが、あれもその一環だったのだろうか。

「それだけ、皆が霊夢を助けるために必死だということ。あなたたちが海で戦っているというのに、我々幻想に生きる者が指を咥えて待っているわけにはいかないのよ」

「それでもつ、僕は反対です！ 深海棲艦と戦うだけでも手一杯の状況で、高度な文明を持つ相手に戦いを仕掛けるなんて無謀です！ 今敵を増やさなくても……っ！」

「そう、残念ね——でも」

「私たちは、あの子の帰る場所を守らなくてはいけないのよ」

そう言つて、紫は青い髪の少女を収めたスキマとともに空間の狭間に消えていった。

紫の去った博麗神社。正確には博麗神社の倒壊跡であるが、青年は龍驤と二人で呆然と佇む。

計算高いと聞いていた紫の割には、あまりにも早計な判断ではないだろうか。月に侵攻が可能であるというなら、月からしても幻想郷に侵攻が可能であるということ。高度な文明を持っているというなら、それこそ紫の能力やロケットに代わる技術を持っているとしてもおかしくはない。穢れを恐れて攻め込んでこないというのならまだしも、売られた喧嘩に苛立ちを覚えない者の方が少数だろう。

「龍驤、どう思う?」

「どう思うって言われても……キミはもうウチらが攻め込んだ結果をよく知つとるやろ? 攻め込んだ理由はともかく」

「ああ、そうだね」

仮に月と戦争になるというのなら。正直なところ紫からの情報が少なく判断のしようもないのだが。

もしかしたら、何が幻想郷を守ることになるのか決断すべき場面が訪れるのかもしれない。

青年にとつての最優先は、あくまで守矢神社と艦娘であるのだから。

紫はどこまで考えてその考えに至つたのだろうか。幻想郷が攻め込まれるリスクなど、彼女が一番知つていそうなものであるというのに。

ある程度の勝算ありきか、それとも別の思惑があるのか。

帰ろうかと思ひ、龍驤に声をかけて鎮守府に無線を入れてもらう。萃香に話を聞きたかつたが、こうなつては日を改めるしかないだろう。鎮守府が地震で揺れていないため人里もおそらく無事だろうが、帰りがけに人里の様子を少しだけ見ておくことにしよう。

鎮守府に帰つたなら、月に関する情報収集を始めなければならぬ。い。

複雑な心境で「よし」と思考を整理し、鳥居に足を向けたその時である。

「もし、そこの方。霊夢のことについて何かご存じなのですか?」

年月を感じさせる、しわがれつつも力強い声色。青年はその声の方向を向いたが、目線の先には何も無い。

首を傾げる青年。が、龍驤が驚いた様子で地面を見ているため、そのまま目線を下げると、

「ああ、驚かせましたかな。どうぞ、玄爺とでも呼んでください」

大人が一人乗れそうなほどのサイズの甲羅を持つ、巨大な亀が自分

を見上げていた。

白く太い眉に、立派なあごひげ。尻尾にあたる部分からにも馬のように立派なフサフサが生えており、外の世界ではおよそ目にしたことのない亀であることが分かった。

「か……」

「か……？ はて？」

「亀がしゃべった……っ？」

「ほっほっほっ。伊達に長く生きてはいませんよ。」

青年が混乱する脳を落ち着けようとする様子に、少しだけ嬉しそうにする玄爺。しかし、倒壊した博麗神社を尻目に、寂しそうな吐息を漏らす。

「霊夢はもしや、姿をくらませているのですか？」

「は……はい。あ、僕は茅野守連といいます。こっちは龍驤。妖怪の山にある鎮守府で、提督をしています」

「提督？」

簡単に説明をする青年。が、青年の頭の中では、玄爺がウミガメなのかリクガメなのかミズガメなのか気になっており、あまりうまく説明できなかつたかもしれない。見た目は足がヒレっぽいのでウミガメのようだが、幻想郷には元々海はなかったのではないだろうか。

「ほう、海を。隠居しておりましたが、そのようなことになっているんですね」

「はい。霊夢さんは今、幻想郷に現れた海で深海化しています。彼女を取り戻すために、彼女との戦い方を今模索しています」

「それはごく苦勞なことです。あの子が成長する姿を私はずっと見てきました。彼女は強いですよ。しかし、生きているとは言えそのようなことになっているとは悔やまれますな」

「……可能な限り、早く解放したいとは思っています。僕なりに、幻想郷にお世話になった分をお返ししたいと思っていますから」

「ふむ」

少し瞼を閉じ、考えるそぶりを見せる。玄爺。満足したかのように大きく一つ頷くと、玄爺はハードでボイルドな声色を変えず自信満々

に微笑んだ。

「提督殿。そういうことならこの老骨、幻想郷を守るお手伝いをさせてもらいます。飛びますので、私の背にお乗りなさい」

「えっ——最近の亀って空飛べるの?」

「霊夢がまだ空を飛べない頃などは私の背に乗せていたのですよ。さあ、どうぞ」

そうして空へ挑んだ玄爺の背中では、早苗のお姫様抱っこや魔理沙の筈と比べても最も乗り心地が良かったのであった。

なお、龍驤も乗ってみたいと言ったため、龍驤を後ろから抱きかかえる形で玄爺の甲羅に膝をついたのだが、

「ちよおっ! キミイ、どこ触つとるんや?」

「えっ? えっ?」

「ちよつとぐらい気づいてほしいわ!」

抱えた場所が悪かったのか、なぜか龍驤に怒られてしまった。

052 二兔を追う者

博麗神社の倒壊から十日が経過した。

倒壊させたのはあの青髪の少女だったようで、名前を比那名居天子というらしい。彼女は天界に住む天人であり、退屈な毎日に嫌気が差して異変を起こそうとしたとのこと。最近幻想郷を賑わせている提督に興味を持ったため調べようと天界から来たところ、ちようど神社にいたものだからそこに住んでいるものと勘違いし、あえて敵意を向けさせるために地震を起こしたというなんとも傍迷惑な話である。住所はちゃんと調べておくように。

なお、怒り心頭の紫にキレ散らかされ、今では泣く泣く博麗神社の建て直しをさせられているという。提督への興味も薄れたようで会う気はなくなったらしく、結局それ以降青年が天子と顔を合わせる機会はなくなってしまった。

鎮守府、訓練場近くにて。

博麗神社から一緒に帰ってきた玄爺は、瞬く間に艦娘の人気者になった。何やら、ロマンスグレーなダンディフェイスがツボにハマったようである。

「あ、司令官！　うーちゃんは玄ちゃんの甲羅を磨いてるんだぴよん！」

「卯月、お疲れ様。玄爺さん、ここでの暮らしで何か気になるところはありますか？」

「まったくありませんよ。神社にいた頃よりいい物食べてますからな、ほっほっほっ」

ご機嫌に笑う玄爺。卯月が「ぶつぶくぷうく」などと言いながらスポンジで甲羅を磨く。慣れてくると、孫が祖父の背中を洗ってるように見えてくる気がして、青年は失笑した。

ふと、そんな青年の足元に見慣れないモフモフが一羽。

「え、ウサギ？」

「あ、それこの辺に住み着いてる子だぴよん。あと4、5羽はいるぴよん」

「あ、そうなんだ?」

「餌をチラつかせたらすぐおねだりしてくるイケない子たちだぴよん」

「餌付けしちやったのね」

胸を張って得意げにする卯月に、青年は苦笑い。野生のウサギなのだろうが、餌付けしたからには最後まで責任持って飼うように伝えるところ、「は〜い!」との喜び。

「でも実はウサギだけじゃないんだぴよん」

「えっ、他にもいるの?」

「カラスもいるし、猫もいるぴよん。睦月型のみんなでお世話してるから、司令官も安心だぴよん!」

「それは僕から言うべきセリフだね……」

亀にカラスにウサギに猫。随分と鎮守府が動物園じみてきたが、アニマルセラピーなんて言葉もあるぐらいである。それが彼女たちの癒しになるなら、青年からはとやかく言うつもりはない。

卯月の頭を一つ撫で、執務室に戻ろうとしたところで「あ、それ」と卯月の声。まだ居たのかと眉根を寄せて、彼女の言葉を待ってみたが、

「あとUFO」

「UFO!?!」

どうやら幻想郷には、信じられないことばかりあるらしい。

夕方。執務室にて、青年は机で腕組みをして思考する。その側では、本日の秘書艦の綾波がニコニコしながら座っていた。

作戦の終了からかなり落ち着き、ある程度現状と問題についてもまとまってきた。鎮守府としては、霊夢の奪還に向けて三つほど解決しなければならぬ課題がある。

一つ目は、航空戦力の増強。

空母は比較的揃ってきたが、やはりまだ絶対数が必要である。霊夢が繰り出す弾幕は無尽蔵で、弾幕は航空機へ変わる。相性としてはか

なり悪いのだが、それでも空母が必要なことには変わりない。単純な数と、機体性能の向上も必要になってくるだろう。

二つ目は、水上艦の規模と航空戦力との折り合い。

艦隊の人数は今回比較的丁度よく収まっていた。水上打撃部隊を用意し、エアカバー範囲は限定しつつも航空戦力も確保する。

しかし、水上戦力はまだ欲しい。会敵時にあれだけの水上戦力がいると判明したからには、水上打撃部隊もおろそかにはできない。より強力な艦娘との合流や、艦隊防空力の向上も必要になってくるだろう。

そして三つ目。最も重要であるのが、飛行場姫へダメージを与える方法の確立である。

蒼龍航空隊の奮闘によりひっそりと攻撃を仕掛けることには成功したが、追尾する弾幕と攻防一体のスペルカードが控えていたことにより攻撃そのものは失敗に終わってしまった。航空機でも艦娘でも、接近しようとすればそれなりの損害は覚悟しなければならないだろう。スペルカードを使ってまで防御したということはダメージを恐れたということであり、全く攻撃が通らないわけではないものと信じたい。

綾波が頭を撫でてくるが、青年はそれに気が付かず腕組みをしたまま思考を続ける。

一つ考えられる作戦としては、レミアアやフランドールらと戦った時のように、飛行場姫に対して夜戦を挑むこと。双方の航空機を封じ、純粋な火力のみによる戦いを挑んだとすれば、勝機もあるのかもしれない。

だが、艦娘の編成人数を限定する場合、道中に航空戦を仕掛けられた場合に対応する空母を減少させるのも不安である。その場合は、支援艦隊として空母、夜間戦闘組として水上戦力を突入させるのが最もベターな選択だろうと現状は判断する。

綾波に頬をぷにぷにされるも、青年は気づかない。ぷにぷに感到動したらしい綾波が喜色満面の笑みでぷにぷにし続けるも、青年は気づかない。

対陸上型として考えた場合は、紅魔館の異変を考えても幻想郷の住民が最も有効な戦力となる。三式弾より与えるダメージの高い弾幕による攻撃は、航空機を撃墜する役目としても非常に高いポテンシャルを秘めている。

海上を飛ばないという条件がなければ、せめて一人くらい弾幕を扱える者が現地で戦えたなら。

もつと有利に戦闘を進められるというのに。

綾波が青年の顔を掴み、頬にむけて顔を寄せてくる。青年が気づかないまま、優しく瞼を閉じてゆつくりと唇を突き出し――

「提督、今いいだろうか。む、綾波、どうした？」

「いいえ、何でもありませんっ♪」

長門が執務室に入ってきたところで、何事もなかったかのように綾波は青年の側に立っていた。ドアが開いたことで、青年も長門が気づく。

「あ、長門。どうしたの？」

「ああ。実はだな、いつも人里で因幡てゐから高速修復材の受け渡しをしているんだが、今日は来なかったらしい」

「てゐさんが？ 毎日来てくれてたのに珍しいね。何か聞いてる？」

「いや、受け渡しの中止のような連絡も受けていない。すっぽかされた形だな」

「ははは、悪戯好きだから、もしかしたらホントにすっぽかしたのかもね」

「高速修復材は洒落にならないんだが……。幸い備蓄はあるから、一日二日来なかつたぐらいじゃビクともしないさ。全く、あの子ウサギさんめっ」

てゐの悪戯と思しき行動に苦笑していると、長門から突然発せられた少女モードに部屋が静まり返った。何事もなかったかのように、長門は一つ咳をつく。

「まあ、今日の分は明日あたり持つてくるだろう。その時事情を聞いておくよう輸送部隊には指示しておくぞ」

「うん、よろしく。何か用事が出来ただけかもしれないから、あんまり

責めないようにね」

「ふっ、心得ている」

そうして、長門は足早に執務室を出て行った。出て行った瞬間、心なしか綾波が先程までより近くに来たのは気のせいだろうか。

さて、霊夢への対応はともかくとして、幻想郷内に艦娘を配置する話も現在進めている。配置先は、作戦前に考えていたとおり人里と永遠亭である。

規模についても多少は固まってきた。人里については基本的に何名でも可という返答であったため、一個水雷戦隊に加えて空母1名と戦艦2名を置く予定である。人里は幻想郷において最も人口が多く、神社や鎮守府とも関わりが深いため、深海棲艦の侵入や襲撃を絶対に許すわけにはいかない。故に強力な艦を配置し、『人里艦隊』として運用していく予定である。

そして、永遠亭。河川がいくつか通っているため深海棲艦が侵入する可能性があり、かつ永遠亭の情報を入手する方法が現時点でないため、配置予定である。ただし、竹林に覆われていて航空機を有効活用することは難しいため、こちらは一個水雷戦隊のみになる予定である。そもそも永遠亭のメンバーは戦闘面においても強力であるため、あまり大きな戦力は必要はないだろうという見立てだが。

しかし、肝心の人数についてはまだ回答を得ていない。てゐにそのあたりの話をしたかったため輸送部隊にも言付けていたのだが、本人が来ないのでどうしようもない。

綾波がその場で伸びをして、「くう」と息を漏らす。青年はそのほっこりする声に思考を中止して、微笑みながら綾波に話しかけた。

『『二次改造』以降、調子はどうかかな?』

「あ、やっと話しかけてくれましたねっ♪ 何も問題なく、とつても快調ですよ」

「人里に行ってもらうからには、優先的に強化しておきたいと思っ
ね。負担をかけることにはなるけど、お願いしたい」

「任せてください! 皆さん張り切ってますから」

ガッツポーズで白い歯を見せる綾波。改造したとはいえ、姿かたち

や性格はそのままなのだから、どこか子供が見得を張っているよう
かわいらしさに溢れていた。

人里艦隊に抜擢された艦娘には、二次改造を優先的に受けさせる。
一週間ほど前に青年がその決断をしたところ、当日秘書官を務めて
いた青葉から瞬く間に鎮守府内に情報が広まってしまい、戦闘に対す
る意欲の高い艦娘が工廠に押し掛けたことでにとりがお手上げ状態
となった。青葉は軽く叱っておいたものの、理由はともかく意欲のあ
る艦娘を選抜から外す理由はないとして、二次改造を希望する艦娘を
中心に人里艦隊を編成した。一部、どうしても現状では二次改造が困
難な艦娘もいたが、可能になり次第改造に移るということで了承して
もらった。

艦隊の編成はまた後日触れるとして、二次改造の効果はすさまじ
い。

綾波を例として挙げるなら、駆逐艦としては異例なほど火力が向上
し、軽巡に迫るほどとなった。副次的に完成した探照灯と照明弾も鎮
守府として夜戦火力を大幅に向上させるための足掛かりとなる。対
空性能、対潜性能は残念ながら高くはないが、単純火力としては駆逐
艦トップクラスとなったといえよう。

そして、二次改造の末に彼女が手にした『12.7cm連装砲B型
改二』。他の二次改造を施した艦娘のものと合わせてにとりが現在一
生懸命分析しているが、これが量産出来た暁には駆逐艦全体の火力向
上につながるだろう。ただし、若干の芋が失われた。

抜本的能力向上を図る二次改造の恩恵は、艦娘本人だけではないこ
とがわかった。

これを活用しない手はない。

「司令官。綾波、霊夢さんを取り戻すお手伝いがもつとできるよう
になりますね」

「君たち駆逐艦は本当に鎮守府運営の要だからね。君たちが強くな
るってことは、鎮守府が強くなるってこと。これからも期待してい
るよ」

「はい！ 司令官のこと、綾波が守りますっ♪」

ただし、二次改造のまた異なる副次的な効果なのかは知らないが。何やら艦娘からの距離がこれまで以上に近くなっているのは気のせいだろうか、と。

青年は、綾波にいつの間にか頭を撫でられつつ、それに気づかないまま苦笑していた。

翌日の夕方。日も落ちて夕焼けが消えそうな頃。

結論からいくと、てゐは今日も高速修復材を届けに来なかった。

鎮守府内執務室にて、傍に佇む敷波に服の裾を掴まれつつ仕事に取り組んでいると、長門が昨日同様に入室した。

「知つてのとおりだ。てゐは今日も来なかったらしい」

「てゐさん、いたずらするならすぐにフォローは入れそうなのになあ。やっぱり何かあったのかも」

「どの道、この事態が続くようなら高速修復材の供給が停止してしまう。何かあったというなら、その何かはハッキリさせておかなければなるまい」

「よし、じゃあ早速永遠亭に行つて――」

「まあ待て。鎮守府でドンと座つて待つていることにそろそろ慣れてほしい。現場指揮官ならともかく、最上級の指揮官がやたらと動こうとするんじゃない」

「司令官さー、そういうことなら駆逐隊を出そうよ。偵察にさ」

久しぶりに長門に叱られ始めたところで、敷波からの提案。その時敷波の方へ振り返った青年はようやく裾を掴まれていることに首を傾げるのだが、彼女の言うことはもつともである。

なお、敷波も二次改造を遂げ、対潜在能力を中心に能力全般が底上げされた。しかし、芋は失われた。

「第三十駆逐隊の睦月、如月、弥生、望月を永遠亭まで偵察に。こんな時間から申し訳ないけど、今日中に確認したい」

「文句は言わんさ」

了承したと言わんばかりに、長門が大きく頷いた。

そうして、青年の指示のもと偵察が開始され、その完了は深夜にまで及んでしまったのだが、

「何、方位が狂っている？」

迷いの竹林に進入した駆逐隊が、水路の分岐の度に装備する羅針盤を狂わされ、竹林の入口近くで撤退を余儀なくされた。

以前、長門と永遠亭に向かった時はこのようなことはなかったというのに。

そして、

その日から——明けない夜が始まった。

053 永遠の闇

青年は、いつもどおりに目を覚ましたはずだった。

駆逐隊の偵察が深夜に及んだことから睡眠時間はそれほど取れないだろうと覚悟していたが、体内時計どおりに起きたと言うのにまだ暗い。日の出が遅くなり始める時期だが、障子を通して見える外の空は白んでさえないようであった。

ならばもう少しと横になり直し、布団の温もりに包まれる。微睡んで少しだけ意識を離すと、誰かに身体を揺すられて再び覚醒した。

「カミツレさん、起きてください」

「んあ……さなちゃん？ どうしたのこんな時間に？」

「こんな時間って、もう朝の6時ですよ？ 毎朝5時には起きてランニングしているのに、今日はお寝坊ですか？ 長良さんずっと待ってますよ？」

「えっ？」

慌てて部屋に備え付けの時計を見れば、確かに6時を過ぎている。障子を開けて外の様子を見れば、まるでまだ夜はこれからだとも言わんばかりの暗さで、虫の鳴く声が無情にも響いていた。部屋の外では長良が拗ねた顔で体育座りをしており、青年はその場に土下座する勢いで謝り倒す。

「な、長良、ごめん！ まだ4時ぐらいだと思って寝坊してしまっ……」

「ふうん、いいもん。私一人でも走ってくるから。人里に行く前に司令官と沢山走りたかったのに」

「ほ、本当にごめん……」

「……冗談です。司令官、夜遅くまでお疲れ様でした！ ホントはもっとゆっくり休んで欲しいです」

青年が謝る姿勢を見せると、長良は「えへへ」と柔らかく頬を緩める。気にしていないようで何よりだが、青年も待たせてしまったことは事実であるためもう一度謝った。

しかし、気になるのは外の様子である。昨日までは朝の6時といえ

ばかなり明るくなっていたと記憶しているが、今日の前にあるのはこれから宴会と言われてもおおかしくなさそうな夜である。違和感を感じるなど言う方が無理があるだろう。

「さなちゃん、今日は朝ずっとこんな感じ？」

「ええ。神奈子様も諏訪子様も首を傾げていましたし、お二人とも何も知らないみたいです」

ふと、天子が何か企んだのかとも思ったが、彼女の能力は「地を操る程度の能力」、緋想の剣は「気質を操る程度の能力」であり、天候に干渉することはできても時間を操ることなどできない。

時間を操る咲夜はレミリアとともにロケットで月に向かっているが、果たしてここまでのことが出来るかは甚だ疑問である。

本当は自分の勘違いであるかもしれないため、青年はあえて言及することなく、そのまま鎮守府へ直行した。

だが、そのまま時が流れて、7時を回り8時を回っても一向に空が白む様子もない。

これは間違いないと思い、青年は本日の秘書艦の蒼龍と顔を合わせる。

「鎮守府に異常はないみたい、どうしょっか？」

「うーん、全艦を待機させて。間宮さんには戦闘糧食の増産を伝達。長門、赤城、比叡、鳥海、天龍、吹雪を執務室へ。あとは……美鈴さんも」

「やっぱりマズイよね、これって」

「うん、どうやら”異変”みたいだ」

夜が明けない。そんな馬鹿なことがあるかと一蹴したくもなるが、ここは幻想郷。常識に囚われることはあってはならないと幾度となく学んできた。

どうやら、今回もその考えを後押しする出来事になりそうである。集まった艦娘らと美鈴、そして蒼龍とテーブルを囲み、青年はひとまず現状起きていることを伝えた。

太陽が昇らず、明るくならず、夜が続く。一向に明ける様子がないことは今の時点ではそれほど問題ではないのだが、これが続くよう

あれば様々な問題も生じてこよう。

「提督、問題とは例えばどのような？」

「んー、仮に一週間、一ヶ月と続けば、作物が育たなくなつて皆いずれ餓死するかも」

「そんなー！」

「許せるものか、うむ！」

比叡の疑問に答えると、大食い二人が声をあげた。だが、一番の問題はそこではない。

「航空機が出せないんだ。霊夢さんの奪還を差し置いても、空を封じられたままで深海棲艦を相手にするのはかなり骨だからね」

「確かにそうですね。夜は深海棲艦も空母を使えないとはいえ、航空戦力が使えないとなると戦術の幅も限られてしまいます」

「偵察機として使えるのは川内が持つてる。夜偵〴〵だけだし、機数もない。にとりさんに聞いたけど、まだ増産は難しいみたい。とりあえず今は現状を把握したいから、駆逐の皆には偵察に出てもらいたいだ」

「はい、わかりました！ 皆に伝えてきますね！」

吹雪に編成を伝え、幻想郷各地の偵察を指示する。簡単な状況把握だけでも半日はかかるだろうが、この異変によつて何かしらの被害が出ていないとも限らない。

「しかし難儀なものだな。海に陸に空にと、幻想郷は異変だらけではないか」

「元々は僕らもその一つみたいなもんだけどね。さて、駆逐の皆に偵察をお願いしたけど、他にもやることもある」

腕組みをしたまま、青年は美鈴に振り向く。

「美鈴さん。夜、妖怪は活性化しますよね？」

「あー、そうですね。力の弱い妖怪は特に気性が荒くなることはあるかもしれないです。そもそも暗くなつて人目につきにくくなるので、人は襲われやすくなるかもですね」

「ですよね……わかりました」

一つ息をつくくと、青年は仕方ないといった表情で比叡の方を向い

た。

「比叡。急遽で申し訳ないけど、人里艦隊は今日から任務開始になる」
「あはは、やっぱりそうですよね……。大丈夫です、皆準備はできていますから！」

少し戸惑っていたが、比叡は両手を握りしめて力強く頷く。頬をポリポリと掻くものの、不満はなさそうである。

元々、人里艦隊は人里の防衛のために配置する予定であった。無論その敵は深海棲艦を想定していたが、妖怪が不当に暴れて人里を襲ってしまうことも考えられるだろう。

故に、人を守るために、人里艦隊を派遣する。永遠亭への派遣者が決まってからの予定であったが、この際躊躇ってはいられない。

「出発は正午。それまでに、皆に準備を進めるように伝えて」

「わかりました！ 任せてくださいね！」

人里艦隊の編成は、一個水雷戦隊に戦艦2と軽空母を組み合わせた柔軟な運用が可能な艦隊となっている。

高速戦艦として、艦隊旗艦の『比叡改二』『霧島改二』

軽空母として、『龍驤改二』

水雷戦隊帰艦として、『長良改』

駆逐隊として、『綾波改二』『敷波改二』『白露改二』『村雨改二』『時雨改二』『夕立改二』『春雨改』『五月雨改』

以上12名が、人里に常駐して偵察と防衛の任を負うことになる。優先して二次改造を施している艦を配置しており、単純な一個戦隊としては現状で最も強力な艦隊の一つであると言えるだろう。

「提督よ、紅魔艦隊はどうする？」

「今は暁、響、雷、電が改造中。暁と響は二次改造まで進めそうだったから進めてるね。紅魔艦隊の駆逐は隴、曙、漣、潮が一時的に滞在しているよ」

「一時的な交代ともなれば戦闘行動で無茶はさせられないか……。うむむ」

「紅魔艦隊はひとまず待機だね。現状紅魔館もパチユリーさんとフレンドールさんだけみたいだから、防衛戦力は必要だろうし」

「鬼が出るか蛇が出るか。しばらくは情報待ちだな」

長門の言葉に、青年は頷く。

もどかしい気持ちはあるが、情報がなくては動くこともできない。はやる気持ちを抑えながら、青年は集まったメンバーに執務室で待機するよう伝えた上で、腕を組んで天を仰いだのであった。

情報がある程度揃ったのは、お昼を回って幾許か時間が経過した頃であった。この時間になっても、まだ空は暗いままである。

結果として、各地への偵察は不発に終わった。否、何も確認できなかったため、平和で何よりなのである。海でさえ何も無い。

執務室内もこの結果にはホッとしたのだが、どこか不安を拭いきれないままだった。何も無いというのなら、なぜ夜が続いているというのか。

「夜はいいよね、夜はさー」

一部、夜が大好きな艦娘などはこの状況に浮かれて執務室にその興奮を伝えに来て居座ってしまったというよりは川内なのだが、一人だけ保有する夜偵を手に取って子供のように飛ばす真似をして遊んでいた。その一機しかないのだから、どうかぶつけて壊さないことを祈る。

「提督よ、どうする?」

「まだ迷いの竹林に向かった子たちから報告がない。この頃あの竹林周辺は様子が変わり、この状況じゃあおさんや永遠亭の人たちも心配だ。結果を待つてからでも遅くない」

望みは薄いかもしれないが、迷いの竹林が怪しいことも確かである。嫌な予感もしているものの、どうかその予想が当たってほしい気持ちと当たってほしくない気持ちとが織り交ざって内心複雑であった。

そんな時、ふと美鈴が思い出したように口を開く。

「あ、そういえば前にもこんなことがありました」

「前にも? 夜が明けないことですか?」

「はい。あの時は確か、霊夢さんとスキマ妖怪が異変を解決したはずですね。二人が最終的に向かったのは……永遠亭だったと思います」
「永遠亭……」

「永遠亭の人たちが夜を止めてたんでしたっけ。あ、いえ、スキマ妖怪が夜を止めたんだったかな。でもそうなるかどうかどうして異変に？ うーん、思い出せません……」

美鈴がどうか思い出そうとしてうんうん唸っているが、そこそこの前の異変らしくどうにも記憶が定かではないらしい。しかし、この状況では重要な内容であることには変わらない。

もしこの状況がその異変の時と近似しているのであれば、この夜が続いている異変は、八雲紫か永遠亭によって引き起こされた可能性があるということである。

そして、そんな時。

執務室内へ、一つの電文が届く。

『竹林偵察隊ヨリ、深海棲艦見ユ』

「川内、規模を確認させて！」

「まっかせて！」

「赤城、出発した人里艦隊の現在地は？」

「現在行程の半分ほどです。あと二時間ほどはかかるかと」

「美鈴さん、食堂と工廠に状況の確認を！」

「ムセンって使いにくいので、直接聞いてきますね！」

執務室内は一気にヒートアップし、青年からあらゆる指示が飛ばされた。執務室から離れようとしないう川内にも指示を出したが、思いのほかやる気満々のようである。

「長門。永遠亭で、夜戦主体の異変になりそうだ。夜戦経験、幻想郷の戦闘経験が豊富な艦を優先的に出そうと思う」

「賢明な判断だな。となると、レミリアたちを相手にした時の編成をほぼそのまま使うのがいいだろう。二次改装済の艦も多数いるしな」
「そうしよう。鳥海、旗艦を頼める？」

「はい、お任せください！ 天龍、準備はいい？」

「おう、当たり前だ！ 呼んでくるぜ！」

残念ながら、予感は的中してしまつたらしい。

経験を頼りにしたくはないが、これまでの経験からすると永遠亭の者たちは既に深海化している可能性が高い。何もなければ何も無いに越したことはないが、少なくとも永遠亭のテリトリーともいえ竹林で深海棲艦が発生している状況を、肯定的に受け止めることはできなかった。

「朝雲と山雲から連絡。敵艦隊、重巡の戦隊を基幹とする水雷部隊だつて！」

「規模的には拮抗してるか……。偵察は人里まで撤退させる」

「提督、私も出撃していい？」

「今回はストップ。まだ何があるかわからないからね。川内も二次改造してるんだから、ここぞつて時に頼らせてよ」

「ふふん、そう言われたら仕方ないなあつ！」

そう話すと、再び夜偵を手に飛ばして遊び始める川内。頼むからぶつけないことを祈る。

川内のその様子に苦笑していると、美鈴がいつの間にか戻ってきていたようで、息ひとつ切らせず執務室に入ってきた。

「聞いてきましたよ！ 食堂の方では、戦闘糧食は作り終わったそうです。工廠は響さんの二次改造に手間取っているようですが、暁さん、雷さん、電さんは一日慣らせば出撃できると聞いています。にとりさんだけでどうにかするから、夕張さんは動けるみたいですよ！」

「妖夢さんを執務室に。夕張にも出撃準備と伝えてください。」

「わかりました！」

見よう見まねの敬礼の真似事をやって見せて、笑顔で再び執務室から出ていく美鈴。赤城が「あの敬礼は頂けません、あとで教育しなくては」とこぼしており、美鈴はまだまだのんびり昼寝をしていられないようである。

「永遠亭が怪しいけど、まだ確定じゃない。周辺の偵察は継続しつつ、竹林を中心に威力偵察を実施して、あのあたりで何が起こっているの

かをまずは見極めることにする」

その言葉に、執務室にいる艦娘が頷いた。

まだ、夜は始まったばかりである。

執務室で腕を組んで待つ青年。

人里艦隊は既に人里に到着し、竹林の偵察に出ていた朝雲と山雲もそこに合流した。このまま人里の警備を行わせる予定であるが、状況によつては警備に専念することができない可能性は既に伝えている。

『竹林二到着、進入ス』

鳥海からの連絡に、青年は身動き一つ取らない。

迷いの竹林は、入り組んだ水路と背の高い竹林によつて構成された非常に戦闘に不向きな環境である。竹林という盾があることで射撃を回避しやすくなるが、それは相手も同じ。妖夢に白楼剣を返して上空を任せだが、竹林の背が高いとはいえ空を飛ぶには低く、竹林そのものも空を飛ぶには邪魔であるため、どれほど戦力となれるかはまだ推量することができない。

しかも、夜ということもあつてか、どうやら空を飛ぶ妖夢が艦隊をそもそも見失ってしまったようなのである。一刻も早い合流が待たれるが、竹林に入つてしまったのだからなおさら不安になる。

「どうした、提督」

「ん？ ああいや、長門の教育が丁度終わりかけのタイミングで今回だからさ。独り立ちって考えると自分の指示が正しいのかつて改めて思つちやうよね」

「あらゆる指揮官が抱えた悩みだろうな。だが提督よ、これまでの教育を思い返してもらいたい。私だけではなく様々な艦が協力してくれた。各艦種ごと、各艦歴ごと、その戦いと歴史のほとんどを贅沢にも学んだのだ」

『羅針盤ノ不具合ヲ確認、進撃』と無線が入る中、赤城や美鈴に見つめられる中、青年は腕を組んだまま長門を見据えた。

「貴方には、帝国海軍がついている」

その儂げな微笑みに。達成感と少しの後悔とが入り混じった表情に。

青年は、重たくも感情のこもった息を返した。

「ありがとう」

言葉は、それだけで十分だった。

『敵艦隊会敵、制圧シマス』

抜錨 『三川艦隊』

——重巡 『鳥海改二』 『古鷹改二』 『加古改二』 『青葉改』 『衣笠改二』

軽巡 『天龍改二』 『夕張改二』

かくして、終わらない夜が始まり。

幻想郷はここに、『永夜夜戦』の開始を認めたのである。